日本プロレタリア文学大系

4

三一書房

責任編集　平野謙　藏原惟人
小田切秀雄　野間宏　竹内好

日本プロレタリア文学大系

4

運動開花の時代　中

「戦旗」創刊から文化連盟結成まで

三一書房

第四巻

「運動開花の時代」

（中）

凡例

一、収載作品はできるかぎり初出の新聞・雑誌によって校合した。ただし仮名づかいはすべて新カナに改め、伏字はおおむねもとのままとした。

二、収載作品の配列は、小説・戯曲、評論、詩・詩論、短歌、俳句の各文学ジャンル別にしたがった。無署名のアッピールなどは資料として評論の部に編入した。

三、各ジャンル内の収載作品は、原則として発表年月順によったが、ときに執筆年月によって配列した場合もある。

四、短歌・俳句の作品選定は、各巻をとおして、渡辺順三、栗林一石路の両氏に協力をあおいだ。

第四巻　目　次

I　小　説

II 評論

III 詩・短歌・俳句

詩

短歌

俳句

I　小説

暴力団記（四幕九場）

（左翼劇場第十二回公演・心座第十一回公演台本・一名「全線」）

村山知義

場割

第一幕
- 第一場　鄭州附近の某河畔
- 第二場　同じく附近の某廟内
- 第三場　鄭州総司令靳雲鶚邸の一室

第二幕
- 第一場　鄭州総工会本部
- 第二場　同

第三幕
- 第一場　鄭州駅附近葉青山の家
- 第二場　同

第四幕
- 第一場　鄭州の某富豪邸の一室
- 第二場　鄭州停車場構内

第一幕

所　中国。鄭州及び鄭州附近

時　一九二三年一月

人物

周平甫（チュピンフウ）　暴力団緑党の首領

保三（パオサヌ）　その乾分

徳宝（トゥパオ）　同

馮竹生（フェヌチイレロン）　呉佩孚配下の宣伝部員

居酒屋の爺

靳雲鶚（キヌユイヌウオ）　鄭州総司令

黄殿辰（ホワヌテンチエン）　警察局長

衛兵　三人

その他、暴力団緑党の党員及び新入党者多数

第一場

背景は河。舞台は街道。上手寄りに居酒屋。看板代りの古ぼけた幌子(ホワンヅ)が樹にしばりつけられてダラリと垂れている。居酒屋の中は土間に卓や椅子がしつらえられ、奥とのしきりの台の上にかにのゆでたのや、豚肉の揚げたのなどがそれぞれ大きな皿に山盛りになっている。一月初めの夕景。りゅうとしたみなりに太いベッコウ縁の色眼鏡を掛けた保三(パオサヌ)が一人で真中の卓にがんばっている。雑多なみなりをした雑多な年配の男達が五六人彼のうしろに控えておずおずしている。

保三。(彼等に向って)何でえ、もうちっと元気を出せや。そんなしょげたれたざまで親分の前へ出られちゃあ第一俺がきまりが恥しいや。と云ってしょっぱなからえらく自家人(ヅカレン)づらァしてのそばられるなァ一層こたえられねえがね。まあどうだ。みんなちっと玉子を受けるか。(皆きょとんとしている)玉子を受けるたァ酒を飲むってことよ。ぼんやりしてねえでちったァ気いつけて仲間うちの言葉使いもおぼえるもんだ。それ脚が四本あるから馬の事ァ四脚子(スチャオツ)と云わァな。花が開いたようだから傘のこたァ開花子(カイホウツ)よ。みんな理窟詰めだ。案ずるこたァねえや、おい爺や、酒を頼むぜ。まあちっとずつつけて来ねえ。

爺。(奥とのしきりの所へ首を出して)へい、かしこまりやした。おさかなは何に致しましょう。

保三。まあいいってことよ。心配しねえで酒を持って来な。あとでかにでも貰うことにすらァな。(爺引っ込む。ちょっと改まって皆に向って)さて手前達、明日ァ愈々大親分の前へつん出て、正式に入党させて頂くんだ。今これからその手続を話して聞かせるから耳の穴ァ掃除してよく承われ。手前達も相当の働きをしてえたもんだ。大事な処で妙にうろたえたりしちゃいられめえ。いいか。まず廟の中へ這入るてえと正面に大きなテーブルがあらァ。その向うにおいでなさるのが親分だ。まず手前達ァ順々にテーブルの左手に飾ってあるお祖師様のお位牌に三跪九拝するんだ。いいか。

皆。へえ。

保三。そこで親分が党の規約をお読みなさる。それから手前達の心得べき条々をお話し下さらァ。そこで愈々万年千載長寿香というものをいただく事になるんだ。ものはただのお線香だが、曰くが大したもんだ。テーブルの上にしょっぱなから押っ立ててあらァ。そいつを親分がこう左手に握り、右手にだんびらを把って、「汝等、もし山主の命に従わず、党規を厳守する能わざれば即ちかく

の如し」と云って一刀両断なさるんだ。これが即ち万年千載長寿香で手前達はそれを一本ずつ頂戴して一生大事に持ってるんだ。これを持ってる間は手前達の命は手前達のものでまた手前達のもので無え。いつ何時此のお線香のように一刀両断にされても文句はごぜえませんというしるしだ、いいか。

皆。へえ。

爺。（錫の器に入れた酒を持って出る）へい、どうもお待ち遠さま。

保三。（皆に）さあ玉子を受けるとするか。あとはまたあとで教えてやらァ。自家人てえのは身内の者ってこったが、その自家人同士のお辞儀の仕方がまたちょっとややこしいんだ。まあまあ一つ受けねえ。（ついでやる。）一同酒を飲む）

その時下手から同じくりゅうとした服装にチョビ髭を生やした徳宝が三人の男をつれて出て来て居酒屋に這入る。保三と眼を合わせ、お互いに相手をさぐるような様子である。徳宝が別のテーブルに座を占める間に保三は猪口の外側に箸を並べて置く。徳宝はそれに気がつくとツカツカと保三に進み寄る。

徳宝。お見それ申して甚だ相済みません。老大には手前内方とお見受け申しますがいかがでございましょう。

保三。（立ち上って）御丁寧のお言葉痛み入ります。おめがね通り、及ばずながら祖師の霊光に浴しているものでございます。

徳宝。突然の詮議立て失礼の段お免し下さい。老大はいずれの御身内でございますか？

保三。ふつつかながら申し上げます。手前親分事、姓は周と申し、名は上が平で下が甫と申します。

徳宝。お問い立てして相済みませんが碼頭はどちらを御支配なさいますか？

保三。どう致しまして、憚りながら次の碼頭でございます。

徳宝。再三のお問い立て。失礼の段お免し下さい。老大には一炉の香を焼かれましたか？

保三。お言葉に甘えてお答えします。手前兄弟は万年千載長寿の香を焼いたものでございます。

徳宝。（丁寧にお辞儀をしながら）失礼致しました。手前は同じ身内の徳宝と申すけちな野郎でございます。

保三。（彼をたすけて腰かけさせながら）お控えなさいお控えなさい。手前は保三と申すふつつかものです。（自分も腰掛ける）さあお近づきにどうぞ一杯。（酒をつぐ）

徳宝。（受けて）これは痛み入ります。（自分のつれて来た者達に向って）やいみんな、保三兄貴に御挨拶をしろ。

皆。よろしくお願え申しやす。

保三。（それに答えながら、自分のつれて来た者達に向って）やい、徳宝兄貴に御挨拶申しあげろ。

皆。よろしくお頼ん申しやす。
徳宝。所で保三さんとやら。ついぞお目にかかったことがなかったが、お前さんいつ頃から身内になんなすった？
保三。まだやっと半年でござんすが、周親分の特別なお引き立てで、まあ今度のような役を振られる所迄漕ぎつけやした。足らねえ男でござんすから、どうか長いと思し召さば切って下され。短いと思し召さば接いで下され。万事よろしくお頼ん申しやす。
徳宝。いや、そう云われちゃァ痛み入る。今頃ァ外国の侵略振りが愈々眼にあまり、俺達仲間ァ益々人手のいる時だ。まあ一つお互いにしっかりやりやしょう。所でお前さん。大分頼もしそうな若え者を集めやしたな。
保三。いや、そう云われると面目ねえがつん出して恥になるようなァ集めなかったつもりでござんす。兄貴もこれだけの若え者を集めるなァ、ナマな仕事じゃァなかったでござんしょう。
徳宝。いや、これもみんな国の為めでさあ。まあ一杯。（両人呑む）
保三。所で兄貴。こうやって新しい若え者を駆り集めろと云いつけられたなァ、わっちだけかと思っていたら、こうやって兄貴も集めておいでの所を見ると只事じゃァありませんな。
徳宝。わっちも今ふっとそこへ思いついた所でさあ。元来新規の若え者を入れるってこたァちょっとのこっちゃァねえ、元ァ二年目三年目にそれも一度にせいぜい十人やそこらしか入れなかったもんだ。近頃ァ大分ゆるんで来たが、それでもわざわざこっちから人手を使って集めて廻るなんて事ァこれやァただごっちゃァありませんや。
保三。この大身代になって入党金目当でもあるめえとすりや、こりゃァ何か大きなでいりでもおっぱじまるのだと睨むよりほかァなさそうでござんすな。
若い者の一。ええお話し中で失礼でござんすが、すると何か戦争でもおっぱじまるんでござんしょうか？
若い者の二。（独語）こいつァ物騒な事になったぞ。
保三。（若い者二を顧みて）馬鹿野郎。物騒たァ手前達のこった。掏摸、強盗、暗殺請負人から乞食に至る手前達の口から他に物騒があるかと聞かれた日にゃァ物騒の方で開いた口がふさがらねえや。（徳宝に）所で兄貴。一つポツポツ出掛けることにしましょうか。
徳宝。合点だ。（若い者に）さあ皆、おみこしを上げるんだ。
保三。（奥に向って）おい、爺さん。いくらだね。
爺。（出てくる）有難うごぜえます。ええ、みんなで二元頂戴致します。
保三。（銀貨を二枚出して）はいよ。（別に紙幣をやる）
爺。どうも毎度有難うごぜえます。
皆ドヤドヤと立ち上る。

爺は銀貨を嚙んでみたり、音を聞いてみたりしている。（幕）

第二場

一月中旬。

入党式の行われる潘安廟内。正面に大テーブル。そのテーブルの上には、右にだんびら一口、左にピストル一梃、中央に香炉一箇、燭台一対、線香一束が置いてある。左右の柱に「五湖四海三江水」「万年千載長寿香」と書いてある。正面下手の壁に祖師の像が飾ってある。大テーブルの向うに控えている鬚男が周平甫である。下手には主だった党員達（徳宝や保三もその中にいる）が居並び、上手には新入党者がしゃちこばって控えている。入党式は既に終りに近づき、万年千載長寿香の分配が済む所である。最後の二三人が一人一人進み出て、周平甫から両断された線香を一本ずつ恭々しく受け取って元の位置に復する。

周平甫。さて皆。これで手前達は愈々自家人になったわけだ。これから後ァさっき読んで聞かせた十ヵ条を固く守り、また身内同志は互いに助け合わなくちゃァならねえ。仕事があった時にゃ決してこそこそやっちゃァいけねえ。一々俺の耳に入れて、俺の云い付け通りに動くんだ。わかったか。

一同。へえ。（とお辞儀をする）

周平甫。（保三に向って）じゃァ保三、一つ御苦労だが皆に入党証を渡してやってくれ。

保三。心得やした。

保三は新入党者の所へ歩み寄って、長さ四寸程の長方形の黄色い布で作った入党証を一人一人にくばってやる。

周平甫。さて皆。今手前達に配ったのが入党証だ。万年千載長寿香と一緒に肌身離さず持っていなくちゃァいけねえ。どんな事があっても党外の人間に見せちゃァならねえ。もし万一見られるようなことがあったら、立ちどころに見た男をばらしちまうんだぞ。いいか。

一同。へえ。

周平甫。じゃァ済んだ。みんな引き取ってくれ。

新入党者達は初めに周平甫に向い、右手を左肩に触れ、身体を左から右に転じて礼をし、次に上手の党員達に向って右手を左手の臂に触れて同じく礼をしてから退場する。次に上手の党員達も同じように周平甫に向って礼をして退場する。

片隅に残っていた徳宝がその時周平甫に近寄る。

徳宝。親分。

周平甫。徳宝か。何だ。

徳宝。ちょっとうかがいてえんだが、あの保三て野郎は一体何でございますかい。
周平甫。保三がどうかしたのか。
徳宝。あっしゃァ此間若い者を集めての帰り路に初めて遇ったんだが、聞きゃァたった半年前に身内になったんだそうじゃござんせんか。
周平甫。うむ。それがどうした。
徳宝。それが見ていりゃァ野放図な野郎だ。口先だけァあっし等を兄貴々々と殊勝に奉りながら腹の中じゃァ見下してるのが、事毎に眼につくじゃァありませんか。それを親分は見て見ねえ振をしてえるばかりか、保三々々と眼をかけるに至っちゃァどうしてもあっし等にゃァうなずけません。それればっかりか会計方までお任せなさるんで、親方は御存じねえかも知らねえが野郎飛んだ荒い金使いをしてますぜ。
周平甫。(色をなして)手前、俺の仕打が不服だと云うのか。
徳宝。これがあっし一人の僻目や不服なら思い直すなり胸に畳むなりしましょうが、仲間みんなの気持だからお耳に入れずにゃァいられません。
周平甫。(折れて)そうか。みんなもそう思っているのか。
徳宝。中にゃァばらしちまえと云う奴さえいないわけじゃァありません。
周平甫。(腕をこまねいて)そうか。いや、どうせそのうち話さなくちゃァならねえことになると思っていた。今度の仕事の済むまではかくせるものならかくして置きてえという腹だったが——
徳宝。へえ、今度の仕事。ふむ。すると矢っ張り何かでいいりがあるんでござんすか？　どうも急に若え者を集める様子が只事ッちゃァねえと睨んでいやしたが——
周平甫。うむ。それについちゃァどうせ二三日のうちに皆の耳に入れるつもりだったんだが——よし、すぐに皆を集めてくれ。俺の腹を開いて貰うことにしよう。だがその前に保三のことは、手前だけにちょっと話して置くから、あとで手前から皆に納得させてくれ。まあ掛けろ。
徳宝。へえ。(掛ける)
周平甫。実ァあの保三の野郎は済南の郊外にある大きな綿工場の二男なんだ。
徳宝。結構な身分で——
周平甫。所があいつァ故あって大の国粋主義者なんだ。てえのはあいつの親父てえのが商用で、そうだ、今から丁度五年前だ、朝鮮に行った時に、そら例の万歳事件よ、あの朝鮮の独立運動よ、あの騒ぎに捲き込まれて××の軍隊に×されたんだ。それればっかりか相当繁盛していた工場は押されてからに段々工合がうまくねえんだ。それやこれやであの野郎外国と聞きゃァ身体のふるえ出す程嫌えなんだ。去年の夏よ、女の事かなんかで家の方と気まずくなって色街でフヤケてるあの野郎と俺ァひょっくり知り合った。段々工合がよくねえたァ云うものの、それで

もあの地方じゃァ指折りの丸持ちの息子だ。俺がほっとく筈がなかろうじゃねえか。都合のいいことに俺達ァ国粋主義の排外主義よ。仇をうつにゃこれが一番とか何とか、うまく説き落して滅法界な入党金をふんだくったのよ。
周平甫。へえ。どの位ふんだくりやした？
徳宝。黙ってろ、どの位だって手前の知った事ッちゃァねえや。と云って何もかくさなくちゃァならねえッてわけもねえ。ぶちまけていやァ八百元よ。
周平甫。こいつァ凄え！
徳宝。が何がさてそれだけの物を頂戴するにゃ国粋主義だけじゃァおっつかねえ。そこで、早速相当な顔に取りたててその上会計方にしてやるってえことになったのよ。
周平甫。成程そう云うわけでござんしたか。だが親分、取っちゃったからにゃァそういつまでも奉っている必要はござんすまい。
徳宝。馬鹿を云うな。たった八百元取ったからって野郎の家が潰れたわけじゃあるめえし、まだまだ機を見て絞るつもりよ。野郎の金使いの荒いのを知ってて黙ってるなァそいつをもっと絞るキッカケにする下心があるからさ。
周平甫。わかりやした。すっかりわかりやした。どうも親分の心も知らず飛んだ下らねえ事をお耳に入れて申しわけありやせん。
徳宝。いや、知らねえ者が不思議に思うなァ当り前だ。保三の事はそれだけとして、所で早速皆に聞いて貰えてえ事があるから、ここへ呼んで来てくれ。古顔だけでいい。若え者共にゃァあとで手前達から聞かしてやって貰うことにしよう。
周平甫。畏まりやした。（下手へ退場）
やがてゾロゾロと重だった連中が這入ってくる。
徳宝。ちょっと皆に聞いて貰いてえ事がある。まあ席について呉れ。
一同周平甫を取り巻いて着席する。
徳宝。（キッとして）さて皆、今更事新しく云うまでもねえが、俺達党員の行動は仁義礼智信の五徳に依って貫かれていなきゃァならねえ。祖師以来この事ァちゃんと党規にもうたってあって、そむくものは立ち所に斬殺して毫も仮借せずとある。わかっているな。
一同。おっしゃるまでもねえこッてす。
徳宝。さて今度一度に大勢若え者を集めたので手前達も恐らく不審に思ってるこッたろうが、これにゃァこみ入ったわけあいがあるんだ。皆ようく聞いて貰いてえ。一体手前達は現在の我が中国の有様をどう思ってる。これに就いて一応知って置かねえと今度の仕事の気持というものが飲み込めねえのだ。万年千載長寿香を頂いたから

にゃァ親分の命令は天の命令と同じ事になるのだから、たとえ今度の仕事がちょっとばかり手荒え仕事であろうとも、手前達の文句を一々聞くいわれはねえのだが、段々と世の中の進歩というものを見て考えたのだが、これからは生命を的の大仕事に限って、よく事のわけを話し手前達の腹も聞いてからやっつけることにしようと思うのだ。

一同。（口々に）何に拘らずあっし等の生命は親分のもんだ。火へ飛び込めと云うなら飛び込みやしょう。わけもへったくれもあるもんか。やれ！ と一口云って下さりゃァそれであっし等は笑って死んでゆく覚悟です。

親分、水臭えこたァ云わねえでおくんなせえ。

周平甫。いや有難え。手前達の気持ァよくわかった。有難く頂戴する。だがこれからの俺達の仕事は今迄のような小さな事ばかりじゃァねえ。方々へもひっかかりが多く、政治にも関係するこみ入った仕事が少くねえのだ。気持ァ互いにわかっていても、仕事の理窟を呑み込んでいねえ事にゃァ時に臨んで便利が悪い。そこで今度ァどうしても一通り聞いて貰わなくちゃァならねえのだ。それに就いちゃァ此間から或る用事で俺の所へ来ていらっしゃる馮竹生という方が若えけれども学のあるお方だから、今度の仕事の話にかかる前に、俺達の覚悟しなきゃァならねえことを一応話して頂こうと思うんだ。丁度今隣の部屋に来ていらっしゃるから早速話して頂くことにしよう。（彼は上手へ這入ってつれてくる。馮竹生はハイカラに頭を分け、金縁の眼鏡を掛けた三十位の男）馮先生だ。御挨拶申し上げろ。

一同。（お辞儀をする）

周平甫。じゃァ馮先生。御苦労ですが一つお願いして置いたお話を聞かせてやって頂きとうございます。

馮竹生。（キザな調子で職業的に）承知しました。では皆さん、御免蒙って、中国の現状と我々の任務と云う事についてお話ししたいと思います。諸君。我が中国は茫々三千年の歴史と四億の国民と豊饒世界に比なき国土とを持っている。しかも何ぞや我が国最近の歴史は全くこれ屈辱の歴史に他ならんではないか。虎狼の如き諸外国は息をもつがせぬ流血と、流血の脅威に依って、さながら一片の肉の如く我が中国を引き裂いたのである。租借地は奪われ、利権は掠め取られたのである。これでも独立国だと云えるであろうか？ 否、断じて否、我国はこれ一隷属国に過ぎんのである！ 諸君、かの阿片戦争とは何であるか？ それは阿片の輸入が我が政府に禁止されたのに反対して、狼の如き英国が、阿片密輸入成金の利益のために、我が国民を毒害する権利を主張して戦を挑み、惨忍なる虐殺を行った事を指すのである。しかも何ぞやその虐殺の結果彼等は我が国から香港を奪い去ったので

ある。爾来飽くなき狼の群が摑み去ったのは何処々々であるか？　曰く香港、曰くマカオ、曰く旅大、曰く上海、曰く台湾、曰く威海衛、其のほか治外法権、海関、勢力範囲、鉄道敷設権管理権、及び巨額の賠償金等彼等の盗賊――否、その、虎狼の如き貪慾のえじきとなったものは挙げて数うることが出来ないのである。一英人新聞記者は嘗て余に語って云った。「世に奴隷人種なるものあり、支那人もまたそれなり」と。諸君。諸君は諸君が奴隷人種であり、我が国が奴隷国であることを許すことが出来るか？　諸君、しかも彼等の狂暴さはただ愈々益々その度を加えるのみなのである。国難の秋である！　諸君！　実に国難の秋である！

周平甫。（深く感に堪えぬように）そうだ！　実に国難の秋だ。

馮竹生。然らばかかる国難の秋に当って、我等愛国の士は何をなすべきであろうか？　云うまでもない、中国四億の民が一致団結して外夷に当るのである！

一同は初めは神妙にしていたが、演説の進むにつれて段々と興奮してくる。そしてここに至って口々に「そうだ、そうだ！」「一致団結だ！」などと叫ぶ。

馮竹生。よいかな、諸君！　世界最大の国土と世界最多の国民とを擁し、無限の天産物を蔵している我が中国をして宇内に覇を称せしめ、国民の生活を向上せしめ人生を享楽せしめる所のものは、一に我が中国四億の民が上下心を合わせ一丸となって虎狼の如き外敵に当ることこれである。然るに諸君、此の重大なる時期に当って、好んで区々たる内紛を起し、国民的一致を破るものがあるとしたならば、諸君、これは何であるか？　これはこれ賊である。かの外夷と同じく中国の敵である。

一同。そうだ。そうだ

馮竹生。我等もし外夷を払わんと欲すればまず身中の内敵を滅さなければならんのである。諸君は問われるであろう。然らばその憎むべき内敵とは何者であるかと。諸君よ、私はそれを諸君に告げるでありましょう。よく注意して聞いて頂きたい。諸君、北京の正陽門より鄭州を経て南に二千四百十八清里を走ってかの揚子江岸なる漢口の大智門に達する鉄道は京漢鉄道である。この鉄道が我が国南北交通の幹線であり、国富開発の脈管であることは云うまでもないことである。更に、申し上げなければならんのは、鉄道の利権が多く外敵に掠奪されている中にあって、この京漢鉄道が純然たる中国国民のものだと云う事である。諸君、よくここに意をとめて頂きたい。然るに、然るにである、この京漢鉄道全線二万の従業員は去年の八月、賃金値上等々の待遇改善を要求し、経営の実際上その要求の過大なるを以て拒絶せらるるや衆をたのんでストライキをなしたのである。中国の産業を開発し外夷のあなどりを退けるためには中国民たるもの労資を問わずすべて心を一にし互いに譲歩協調して事を解

決すべきであり、ストライキの如き卑怯なる手段に訴うべきではないことは論を待たないのである。況んや身近代産業の血脈たる交通運輸の業にたずさわりながら、区区たる私利のために天下国家に害を及ぼす如きは天人共にいれざる大罪悪である。当路の大官は鉄道の停止の人民に及ぼす迷惑を察し、忍んで彼等の不当なる要求をいれたのである。然るに彼等従業員はこの成功に味を占めたりとなし、更に将来は一層大きなストライキを決行するために総工会と称する一大組合を組織し、最近に至って遂に全線全駅の従業員をその下に統一せんとしているのである。無智蒙昧なる彼等をしてかかる一大組合を作らしめることは京漢鉄道を累卵の危きに置くものであり、延いては我が国産業を、危機に陥らしむることである。我等はまさに天下国家のために身をもって総工会を解散せしむべきであり、これこそ国難に当って国を憂うる志士のなすべき仕事である。（周平甫に向って）ではこの位で？

周平甫。御苦労でした。どうも有難うござんした。

　馮竹生は一礼して傍にさがり、ハンカチで汗を拭き、髪をくしけずりなどする。

周平甫。（進み出る）さて手前達、段々と馮先生のお話を伺ってとっくりと会得のいった事と思う。俺達ももうそろそろ天下国家のためという事を考えて、大きな仕事をやってのけ、居眠りしている奴共の眼を醒ましてやらなくちゃァならねえのだ。そこでだ、まず第一にやることとは、今のお話にあった総工会の叩き潰しだ。呉佩孚、曹錕、逍継賢、蕭耀南なんどというえれえ方々もこの事のためにゃァ一肌も二肌もぬいでいらっしゃる。自然警察も味方だから、今迄のコソコソ仕事たァ違って大手を振ってやれるわけだ。

一同。素敵だ！

腕が鳴るぞ！

周平甫。そこでだ、二月の一日に奴等の重立った連中が鄭州に集って創――創――

馮竹生。（小声で）創立大会。

周平甫。創立大会ってものをやるんだ。そいつが済むってえと愈々例の総工会ッてえものが出来上っちまうわけだ。どうしても叩き潰さなくちゃァならねえ。何時出掛けてどういう風に叩き潰すか詳しい手筈はそのうち聞かせるが、まず以て皆の覚悟を聞かにゃァならねえ。どうだ。生命を捨ててもこの仕事やりとげる覚悟か。

一同。云うにゃ及ぶ。

親分やっつけやしょう！

こうなっちゃァこたえられねえ。

総工会でもそうですかいでも堪忍ならねえ。

周平甫。よし、そう皆の腹がきまったからにゃァ早速手筈に取りかかることにしよう。出発はあさってあたりになるだろうから手前達もそれぞれ用意に取りかかるがい

い。じゃァみんな引き取ってくれ。

一同興奮しつつ退場。周平甫は馮竹生と顔を見合わせてうなずき合う。

（幕）

第三場

鄭州総司令斬雲鶚の私邸客間、立派な部屋。ストーヴを焚いている。窓の外には雪が降っている。衛兵が二人衛立の蔭に立っている。一月二十五日。

衛兵に案内されて周平甫が這入ってくる。

衛兵。（椅子をすすめながら）閣下はすぐお眼にかかります。暫時お待ち下さい。

周平甫。いや、どうぞお構いなく。

周平甫は席につき、あたりを見廻す。衛兵は去る。

斬雲鶚。（現われる。脂ぎった半白の男）やあ。

周平甫。（立って恭々しく礼をする）総司令閣下でいらっしゃいますか。初めて御拝顔の栄を得ます。手前事はお召しにあずかりました周平甫に御座います。

斬雲鶚。やあ、今度はわざわざお呼び立てして済まなかった。呉将軍からのお話もあり、一つお骨折を願おうと思うてな。

周平甫。恐れ入ります。手前共で御用に立ちますことなら、身命をとして御奉公致す心組で御座います。

斬雲鶚。呉将軍からの御推挙じゃから無論そうなくてはならぬ所だと思うて居ったが、頼母しいその言葉を聞いて一層安心しましたわい。

衛兵が茶菓を持って来る。

斬雲鶚。所でと、呉将軍から差向けた男は如何でしたな。少しは役に立ったかな、何という名だったか、若い奴だが仲々のやりてだという御自慢だったが――

周平甫。へえ、馮竹生とおっしゃる先生で、お年に似合わぬ学のおあんなさる方で、手前等無学な者はほとほと感心仕りました。只今の我が国の有様というものを諄々と説いて下さったので、若え者達にもすっかり納得がいったようで御座いました。

斬雲鶚。それは結構。

衛兵。（現われる）黄警察局長が見えました。

斬雲鶚。黄殿辰か。（一寸考えて）よかろう。此処へ通してくれ。（衛兵去る。周に向って）あんた無論黄を知っておいでじゃろうな。

周平甫。（ヘドモドしながら）へ、あの、警察局長の旦那で、へえ、そりゃあ、もう、いろいろ御迷惑をかけたり。その、何しろ御世話様になっておりますので。

斬雲鶚。うん、知っているなら都合がいい。心配することはないさ。どうせこれからは一つ一緒に働いて貰わにゃあならんのだから。まあお互いに今までの事は水に流して、天下国家の為に尽力するんじゃな。黄も職務柄いろ

いろあんたにつらく当らにゃならんこともあったろうが、個人的にはちっとも悪意を持っておらんどころかあんたの人格には敬服しよったよ。

衛兵に導かれて黄殿辰が這入ってくる。痩せた四十がらみの男。折鞄を持っている。周は立ち上ってかたくなる。

黄殿辰。（周を見てギクリとするが、靳に向って恭々しくお辞儀をする）大変どうも遅く相なりまして。

靳雲鶚。報告書は出来たか？

黄殿辰。（折鞄の中から綴じたものを取り出して靳に渡しながら）はッ。出来るだけ詳細にしらべあげまして御座います。

靳雲鶚。（ペラペラとめくつて見て）よし。所でと、君、周さんを知っとるね。

黄殿辰。はッ。（うなずく）

靳雲鶚。周さんにもお話しした所だが、これからは力を合せてしっかりやってくれ給え。

黄殿辰。はッ。

靳雲鶚。所でと、君一つこの報告の内容を簡単に説明してくれんかね。あとでゆっくり読むとして、丁度いいから周さんにも知って置いて貰いたいからな。

黄殿辰。はッ。畏まりました。（報告書を受取って、めくりながら説明する）ええ、もう御承知で御座いましょうが、一番最初から申し上げますれば、京漢鉄道の労働組合運動はその端を一昨年一月一日、長辛店に於いて労働補習学校が成立した日に発しております。以来、厳重なる監視の下に、各駅に続々組合が生れ、昨年四月九日、長辛店倶楽部に於いて、全線総工会の準備会が開かれ、合計十四の団体の代表者が三日に亘って会議を開き、全線を地区に分ち、遂に総工会の下地を作り上げました。同じく八月十一日に鄭州に於いて第二回代表者会議が開かれ、同月二十四日には長辛店支部の発起で二日間のゼネラル・ストライキを起し、日給十銭の増額、二カ年を経過した臨時雇は全部常雇とすること、公傷治療期間中の給料全額支払い、ストライキ中も減給せぬこと、長辛店に休息所を——

靳雲鶚。いや、そこらはいい、簡単にやってくれ。

黄殿辰。はッ。その他の要求全部を強いて通過せしめました。本年一月五日、総工会準備委員会は鄭州に開かれ、全線に亘る連絡、統一が殆んど完成したと察すべきものが御座います。総工会の規約草案もその際書きおろされ、部下の密偵の探知致しましたものは次の如くで御座います。細部に相違があるかは知れませんが、大体間違いはないと存じます。ええ、読みましょうで御座いましょうか？

靳雲鶚。どの位あるね？

黄殿辰。へえ、一枚、二枚、三枚と——ええと十二枚に亘っております。

靳雲鶚。ふう、厖大なもんじゃね。どら、見せ給え。（鼻の先で笑う）ふん、無駄な骨折をする奴等だ。まあ後でゆっくり拝見することにしよう。所でと、一体どの位の労働者が組織されとるんじゃね？

黄殿辰。はッ、各地からの報告を綜合致しますと、約二万二千程に達するものと思われます。

靳雲鶚。ふむ、で二月一日には確かにその大会をやるらしいんかね？

黄殿辰。はッ、それは確実で御座いまして、既にその通知書は各支部、各労働団体へ発送されておりますし、ええ、（懐中から紙片を引っぱり出しながら）各支部の代表者は殆んど全部乗り込んで来ておりますし、京奉、津浦、道清その他全国の鉄道の代表者が六十余名、その他鉄道に関係ない労働組合も、武昌機械工組合、武漢電話工組合、漢陽鋼鉄工場組合等三十余団体から百三十余人、外に北京、武漢その他の地方から男女学生代表新聞雑誌記者等の来賓が続々到着中で御座います。

靳雲鶚。ふむ、馬鹿な奴等じゃ。何が出来ると思っとるんじゃ？　ふむ。会場もきまっとるんか？

黄殿辰。はッ、普楽園劇場だそうで御座います。

靳雲鶚。そうか。大会は絶対にやらせちゃならんのだ。いいか。

黄殿辰。はッ。

靳雲鶚。集会は絶対に禁止だ！　それに就いて、この電報を聞いて置いて貰わにゃならん、（懐中から取り出す）呉閣下から一昨日吾輩に打って来られた電報じゃ。（読む）ううと、まず、鄭州靳総司令麾下と。それからが本文じゃがね。こうだ。京漢鉄道趙局長よりの二十五日付来電に依れば二月一日該鉄道労働者は鄭州に於て総工会創立大会を開かんとしつつあり、各鉄道よりの出席者亦多数を占むるものの如し。しかも地方官庁の許可なくして集合せんとするは、その勢の揚れるに驕りたるものにして、というのは即ち去年の八月のゼネラル・ストライキの勝利を指しているんだね、で、驕りたるものにして、と、之を放任せんか、民衆一般への影響は真に恐るべきものあり、将来永く禍根を残すものと云うべし。前途を望みて杞憂堪うべからざるものあり、麾下の速かなる予防と、機宜に適したる処置を切望に堪えず。本鉄道の安危はまた実に本地方の安危なり、即ち之が制止のための立法権を麾下に委す。万般の処置を誤らざらんことを。呉佩孚。とこういう電報じゃがね。（懐中へしまう）

黄殿辰。
周平甫。｝はアッ。（感嘆する）

靳雲鶚。で、要するに処置万般の責任が吾輩の雙肩に課されたというわけじゃ。で、呉閣下からこれだけの信任を頂いた以上、吾輩としても十分勤めあげんければならん。従って君達の粉骨砕身を望むわけじゃ。

周平甫。）ははッ。
黄殿辰。）
斬雲鶚。あとの事は二人でよく相談して、万事手ぬかりないようにやってくれ給え。周さんは初めての御奉公じゃ、よく黄に聞いて、キッカケをうまく渡してやってくれ給え。（黄に）いいかね。鄭州は軍事上重要な地点なんだ。だから集会は許せんのじゃ。万一の場合のために軍警も配置して置くが、奴等の気を立たせんようにする方が怜悧だからな。じゃ解ったかね。（立ち上る）
黄殿辰。（周と一緒に立ち上りながら）はッ、心得ました。誓って閣下の思召しに添うように取はからいます。
斬雲鶚。（周に）じゃ周さん。御苦労ですな。この事件でも片づいたら一つゆっくり骨休めをやるかな。この間押えて置いた素敵な阿片があるよ。
黄殿辰。（お辞儀をする）お邪魔致しました。
周平甫。（お辞儀をする）へッ、失礼致します。
斬雲鶚は二人を送り出す。（幕）

第二幕

所　鄭州。総工会本部事務所

時　一月三十一日及び二月一日

人物
黄殿辰　警察局長
蔡和民
李煥章
張頼信
高玉林
陳立三
徐言発　京漢鉄道総工会支部代表者
曽玉良
柳成有
李金貴
呉海発
葉青山
その他
総工会中央執行委員長
代表者会議議長
留守居の男
軍警数人
暴力団多数

第一場

一月三十一日夜。鄭州の総工会本部事務所（二階）に於ける全線代表者会議。

机は隅に片附けられ、ベンチや椅子が一杯に並べてある。壁には各支部、各団体が寄贈した扁額対聯其他、ポスター等が所狭い迄に掛けつらねてある。それには「全国工人団結起来」「打倒軍閥専政統治」「全国工人集会結社自由」「自由的中華民国万歳」「無産階級勝利万歳」等と書いてある。代表者達が腰掛けたり、立ったり、歩き廻ったりして、ガヤガヤ、話をし、議論している。

不意に階下が騒がしくなる。階段をドヤドヤ上ってくる足音。一段高い所に上った議長が叫ぶ。

議長。諸君ッ！　諸君ッ！

皆静かになる。

議長。呉佩孚に面会に行った我々の代表、楊徳甫、凌楚藩、李震瀛、史文彬、李煥章の五君が只今、洛陽から帰りました。（皆拍手する）依って代表者会議を再会致します。最初に議長から簡単に、五君を洛陽に派遣するに至った経過を報告致します。各支部の代表者六十五名、全国各鉄道の代表者六十三名、各労働団体三十四団体その代表者百三十二名が殆んど全部ここに乗り込んで来、準備も完全に整った二十八日に至り、警察局長黄殿辰は突如、集会の禁止を命令して来ました。勿論我々は此の横暴な命令を詰りましたが、彼から引き出すことの出来たのは、それが彼の意志ではなく、上からの命令だという逃口上だけでした。（「奴等の常套手段だ」という声）所が三日目の昨日の朝に至って、呉佩孚は突然我が本部宛、電報を送って来ました、これです。（電報を取り出して読む）至急要談すべきことあり、代表者の派遣を望む。暴圧の首魁は遂にその姿を現わしたのであります。（「打倒軍閥！」等の声）我々は直接彼を詰問すべく、即刻五名の代表者を選んで洛陽へ派遣した次第であります。では直ちに代表者の方に御報告を願います。

李煥章。（台の上に立つ）報告します。我々五名は洛陽に着くや否や、軍閥呉佩孚の豪奢な邸宅に押し掛けました。所が彼は自分の方から電報を打って置きながら会わないで「夕方電話で話をしたい」と秘書の奴に云わせたのです。そこでまあ、するだけの事をさせて見ろと思ったので、黙って夕方まで待っていると、今度は電話で、明朝八時に会いたいから公署の方へ来てくれと云う挨拶です。我々は重ね重ねの馬鹿にしたあつかいに、余程そのまま帰ってしまおうかと思ったのですが、明朝は確かに会うというので胸をさすって待ちました。さて明朝即ち今朝、公署に押しかけると、又もや呉佩孚は現われず、副官長の徐と政務課長の白を出して、頭ごなしにおどかし見たいな言葉を並べさせるのです。此処に至って我々も遂にこらえにこらえた憤怒を爆発させ、卓を叩いて面

罵したのです。(「そうだ」「やっつけろ」「ごまかされるな」等の声)奴等も我々の勢に辟易し、遂に呉自身が出て来ました。そして大体こんなことをしゃべりました。ええ、君達労働者のことは自分は非常に心配している。(「ちえッ」「心配だろうよ」) これまででも自分が君達を援助しなかったことがあるかね? (「絞殺の手をゆるめたことがあるかね?」)今度の事だって自分は君達に大いに同情している。ただ鄭州は軍事上重要な地点だから集会して貰いたくないというだけのことだ。(「誰のための軍事上か?」) それから奴は更に図々しくこんなことを云いました。一体集会しないわけには行かないかね? それが駄目だとすりゃァせめて期日を改めて、ごく主だったものだけが小人数で飯でも食いながら話すという事にしちゃァどうだね? (大笑。「どうも御苦労様です」「ワンタンのお代りッ」)自分は必ず諸君を保護する。諸君と難しい事を引き起そうなどというつもりは毛頭ない。(「うそつけッ」)しかし今度の集会は不意に警察局長の方から報告が来たので、原則として許すことは出来ないという命令を与えてしまった。(「横暴! 横暴!」)自分は軍人だから、一度出した軍令を引っ込めるわけには行かん。(「何を云うかッ」)まあこれからさき、諸君を保護する日も長いことだからこんなことで仲をまずくしたくない。(「何が長いもんか」「もうじきぶっ殺してやるぞ」) しかしもし諸君が是が非でも集会を開こうというならば、俺の力ではどうにも方法はないね。(「正体を暴露しやがったぞ」「打倒軍閥」等の叫び堂に満つ) 諸君! かくて我々は奴等の卑怯さと奸悪さをゲロの出る程見て来た。我々が代表に選ばれてわざわざ洛陽まで行った事は、一見無意義であるかのようであるが、この、奴の卑怯さと奸悪さを諸君に告げることに依って、一層諸君の闘志を堅めることが出来るとすれば、意義があったと云い得ると思う。(壇を下る)

支部代表一。(手を挙げる) 議長! 正定支部の張頼信。

議長。張君。

張頼信。(立つ) 彼等軍閥が我々の仮借なき敵である事、就中彼等の食物である鉄道に我々労働者が一大組織を持つ事が彼等にとって堪えられぬ恐怖であること、彼等が死にもの狂いの妨害を試みるだろうことは、我々の最初から知っており、覚悟していたことだ。(一斉に「そうだッ」)しかしながら我々は更に今の李君の報告に依って、奴等が愈々あらゆる手段に訴えても我々の集会を叩き潰そうと決意していることを具体的に知り得たのだ。では諸君! 我々は断乎として集会を持とうではないか! (賛成の叫び)我々は我々の力で大会を守り通そうではないか! (満堂をゆるがす拍手と叫び)

この時、階下から一人の男が駈け上って来て議長に紙片を渡す。

議長。(それを読んで)只今、停車場から報告が来ました。

十時二十分着の列車で、武漢調剤工組合の代表者二名、粤漢鉄道総工会の代表者五名、及び来賓として北京大学の男女学生が六名到着されました。

拍手喝采。

葉青山。（立つ）議長！　鄭州支部の葉青山。

議長。葉君。

葉青山。私は今晩の全線代表者会議が次の決議をすることを提議します。我々は、すべての事に拘らず、明日、鄭州普楽園劇場に於いて総工会創立大会を持つ！

一同。異議なし!!　（拍手喝采、満堂の叫び）　（幕）

第二場

翌二月一日の夜、同じく総工会本部の事務所の二階。幕開くと、第一幕の暴力団の連中——但し周平甫はいない——が、所狭い迄に掛けつらねてある扁額、対聯、ポスターの類を一つ残らず取りおろしている。酔っ払っているのもある。

○　早えところやっつけろ。

○　ビラ一つでも残しとくんじゃねえぞ。

遠くの方からインタナショナルを奏する楽隊の音、大勢の合唱、スローガンの絶叫などが聞えてくる。

○　そら大会が済んだぞ。

○　引き上げてくるぞ。こちとらも引き上げだ、忘れ物をするな。

大風の吹き去るように、一同は引き上げてしまう。あとには裸の壁と、壊された椅子が残る。

間。

行列の音は段々近づいて来る。警官隊に襲われたらしい。音楽も合唱もやんで凄まじい怒号や叫喚となる。やがて乱れた足音をさせて、全線代表者達が駈け上って来る。

彼等は創立大会を守り通して帰って来た所である。興奮し、血走った眼をし、或る者は服をズタズタに破かれ、血を流している。皆は部屋に駆け込み、この変った有様に驚いて立ちどまる。

或る者はこの部屋の様子に気づかず直ちに窓に走り寄り、下に向いて帽子を打ち振り叫ぶ。

○　京漢鉄道総工会万歳！

○　プロレタリアートの勝利万歳！

○　どうしたんだ。こりゃ？（口々に叫ぶ）

○　畜生！　留守の間に襲われたんだ！

○　誰がこんなことをしやがった。留守居の者は何処へ行ったんだ。

二三人が隣の部屋へ駆けこんで行く。狼ぐつわを掛

けられ手足を縛られた男を、いましめを解きながら連れてくる。
留守居の男。（猿ぐつわをとられるや否や）暴力団だ、畜生、暴力団だ！
○ どんな奴等だ？
○ 何処の奴等だ？
○ 何人位で来やがったんだ？
留守居の男。（口惜し泣きに泣きながら）二十人も来やァがった。ほんの十五分位前のことだ。
○ 書類はどうした？
留守居の男。（うしろから叫び掛ける）書類は大丈夫だ。戸棚にはさわらなかったんだ。（皆に向って）奴等は不意にドヤドヤと跳び込んで来るなり俺をしばり上げやがった。中にはピストルを振り廻してる奴もあった。それから猿ぐつわをかけられて隣の部屋へ投げ込まれたんだ。
隣の部屋へ跳び込んだ連中が出てくる。
○ 馬鹿な奴等だ。書類には手も触れないで、旗だのポスターだのばっかり持って行きやがった。
○ 癪にさわる悪戯をしやがる。
○ 畜生、とっつかまえてたたきのめしちまえ。
○ 根こそぎ泥棒して行きやがった。
昨夜の全線代表会議で議長をしていた男が叫ぶ
昨夜の議長。諸君！ 諸君は今日我々の行列が創立大会会場に乗り込もうとした時に、不意に妨害して集会禁止のキッカケを作ろうとした暴力団を覚えているか？ この部屋を荒した狼藉者も恐らくかの憎むべき暴力団の一味だと私は思う。
○ うむ、奴等だ。
○ そうだ、畜生。
昨夜の議長。思うに奴等は命令された大会ぶっつぶしが失敗したので、此の部屋を荒して意趣返しをしたのだ。
○ 金に買われた軍閥の手先をぶっ殺せ！
○ そうだ！ やっつけろ！
その間に隣の部屋で電話を掛けている男がある。
○ もしもし、五大州旅館？ こっちは総工会本部だがそっちに宿っている鉄道の代表者を誰でもいいから、すぐ電話口に出してくれないか。そう、総工会本部だ。大至急だ。
こっちの部屋では――
昨夜の議長。奴等は軍隊を持ち、軍警を持ち、警官を持ち、その上に暴力団まで買い取っているのだ。糾察隊の組織が絶対に必要だ。（「異議なし」の声）
○ （電話口で）誰？――ああ、君か、俺だわかったか？――今帰って来てみたら留守の間に本部に暴力団が闖入して、扁額、旗、ポスターの類をみんな盗んで行っちまやがったんだ――なに？――えッ？――旅館が包囲されている？――軍警？――絶対に外出させない？――畜生め！――じゃ、倶楽部の方もあぶないな？ いや、こっちは

○ まだ包囲されちゃいない。暴力団にしてやられただけだ。
街路に爆竹の音。ののしり叫ぶ声。大きな笑い声。拍手。
○ (唸る) うむッ、畜生!
数人が窓に走り寄って覗く。
○ (うしろから) 何だ、どうしたんだ。
○ 泥棒してった旗と額だ。
○ ポスターも——
○ 畜生! 滅茶々々に破ったりふんづけたりしてやがる。
○ うぬッ、ふざけた真似をしやァがる。
数人が外に駆け出してドヤドヤと階段を降りて行く。
窓から覗いていた人々が叫ぶ。
○ おや、軍警が多勢出て来たぞ。
○ しまった! 包囲しやがるんだ。
○ 連絡を絶たれちゃいかん。倶楽部へ電話をかけろ。
一人が隣の部屋に跳び込む。しきりに電話のベルを鳴らす。戻ってくる。
○ (出て来て) 駄目だ。電線を切られた。
その時階段にドヤドヤと足音がして、カーキ色の詰襟服を着た軍警七八人が、さっき駆け出して行った代表者達を部屋の中へ押し戻す。部屋の中の人々はドッと軍警に襲いかかる。

○ 出ろ! 出ろ!
○ 何の用があって這入ってくるんだ。出ろ! 出ろ!
○ 出ろと云ったら出ろ!
○ こん畜生め! (軍警をなぐる)
揉み合いの後、遂に室外に押し出して、口々に叫ぶ。
○ 黄殿辰を呼んでこい!
○ 黄殿辰を連れてこい!
○ ここに来てこの暴状の説明をさせろ!
その時、窓際にいた人達が叫ぶ。
○ いる、いる! 黄がいるぞ!
○ どこに? どこに?
○ あそこで真赤になって旗や額を踏みつけてやがる。
○ (口々に叫ぶ) 黄殿辰!
○ ここへ来て説明をしろ!
○ こっちを向きやがった。
○ ここへ来るんだ。
○ 説明しろ!
○ やって来るぞ!
○ 来やがった。来やがった。
皆はドアを開けて待つ。
やがて、黄殿辰がノシノシと上って来る。皆はつめよせようとする。軍警が間をへだてる。
皆は一度に怒鳴る。
○ 何故俺達を包囲するんだ。

○　軍閥の手先！
○　犬！
○　何のつもりで旗や額を暴力団に泥棒させた。
黄殿辰。俺は紳士的に　わざわざ　ここまで　あがって　来たんだ。君達が態度を改めて紳士的に話をしないなら帰るだけの話だ。
○　何が紳士的だ！
○　泥棒紳士！
黄殿辰は帰ろうとする。一人が跳び出して叫ぶ。
△　待て！
黄はその勢に呑まれて立ち止まる。
△　君は今朝我々が大会に臨もうとして行進していた時何故暴力団に命じて妨害させたのか？
黄殿辰。そんな事実はない。俺は全然知らん。
皆口々に叫ぶ。
○　誣をつくな？
○　恥知らず！
△　知らんならば知らんでよい。では何故軍警に大会会場を包囲させたんだ？
黄殿辰。呉司令官の命令だからだ。
△　では、我々が大会で留守の間にこの事務所で泥棒をしたのも呉司令官の命令なのか？
黄殿辰。そんな事実は知らん。
△　何故電話の線を切ったんだ？

黄辰殿。そんな事はしない。
△　何故俺達を包囲するんだ。
黄辰殿。呉司令官の命令だからだ。
△　一体いつまで包囲しているつもりなんだ。
黄殿辰。君達がそれぞれ此処を去って出発してしまうまでだ。
△　君は何故君の知らない泥棒の盗んだ我々の旗や額を足で踏みつけてぶっこわしたんだ。
黄殿辰。そんな事をした覚えはない。
△　馬鹿野郎！　もう何も聞く必要はない。
○　出てうせろ？
○　誣つき！　泥棒！
○　犬！
皆は黄を追い出してドアを閉める。窓から覗いた一人が叫ぶ。
○　おい、飯が来たぞ。
皆窓に駆け寄る。
○　来た。来た。
○　畜生、とても腹がすきやァがった。
○　朝っぱらから食ってないんだからなあ。
○　(怒鳴る)　おおい、万年春！　早く持って来おおい！
○　おッ、奴等は万年春の小僧を追い返してやがるぞ。
○　黄殿辰の野郎が肩を突き飛ばしてやがる。
○　畜生！　飯まで食わせないつもりだな。

○ 何処迄卑怯な奴だ。

パチパチという燃える音が聞え始める。

○ や、旗や額を燃やし始めやがった。

○ ぶっこわしだけで足りないのか。

○ 畜生！

一人は外へ跳び出そうとしてドアを開ける。銃剣が突き出される。彼は口惜し泣きに泣く。

一人が叫ぶ。

□ 諸君！　諸君はかくの如き暴圧と侮辱を黙って忍ぶつもりか？

△ 断じて忍ぶことは出来ん。我々は我々の持つ最も強力な手段でもって彼等に返答しなければならない。

○ そうだ。ゼネ・ストだ。

○ ゼネ・ストだ。ゼネ・ストだ。

○ ゼネ・ストだ。

満堂の拍手と叫喚。

□ 諸君！　全線代表者会議を持とうじゃないか。

○ (口々に) 異議なし！

○ 高君議長！

○ 高君議長異議なし！

○ (口々に) 異議なし！

高玉林。では私が議長になります。まず最初に、かかる暴圧に対して我々はどういう返答の仕方をするか、次にその実行方法及びそれぞれの分担をきめたいと思います。

陳立三。議長！　黄河支部の陳立三。

高玉林。陳君。

陳立三。諸君！　我々は彼等のこの暴状に対して、単に当局に決議文を突きつけたり、声明書を発したりなんどという生ぬるいことでない、強力な現実的な抗議を叩きつけなければならない。だが諸君！　それは決して単なる抗議に終らしめてはならない。我々の組織を更に更に強め、他の鉄道にもまた総工会を持たせ、全国鉄道総工会の確立を促進し得るように闘争すべきである。

満堂の「異議なし」と拍手。

高玉林。では我々は如何なる手段に依って――

○ (云い終らぬうちに異口同音に) ゼネ・ストだ！　ゼネストだ！

高玉林。ゼネ・ストを決行することに異議のない方は挙手して下さい。

一人残らず挙手、拍手。

高玉林。満場一致を以てゼネ・スト決行を決議致します。(満堂の拍手)では、いつから始めますか？

蔡和民。議長！　信陽州支部の蔡和民。

高玉林。蔡君。

蔡和民。暴力団と銃剣を蹴飛ばして総工会は成立した。全線の労働者の意気は此の瞬間、最も高く燃え上っている。ゼネ・ストは即刻始めるべきだ。

○ (口々に) そうだ！　異議なし！

蔡和民。我々は今夜か遅くも明朝鄭州を引き上げることが出来る。ゼネ・ストは四日か五日から始めるがいいと思う。
○　四日。
○　四日の正午。
○　四日正午異議なし。
高玉林。四日正午を期して決行することに異議のない方は挙手をして下さい。(全部挙手)満場一致をもって、ゼネストは四日正午をして決行することに決定します。
満堂の拍手。
高玉林。では次に我々は如何なる要求を提出すべきでしょうか?
徐言発。議長!　琉瑠河支部の徐言発。
高玉林。徐君。
徐言発。警察局長黄殿辰の免職。(満堂の歓呼拍手、異議なしの叫び)軍警と暴力団とが破壊し燃やした扁額、旗ポスターを初め、彼等が我々に蒙らしめたあらゆる損害の賠償。(拍手)
曽玉良。議長!　順徳支部の曽玉良。
高玉林。曽君。
曽玉良。支部、旅館、倶楽部其他を包囲している軍隊、軍警、警官の即時撤退。(拍手)鄭州の地方官は鄭州支部に来て謝罪する。(拍手)
○　(誰かが叫ぶ)毎日曜日の休暇と工賃支給。(異議なし拍手)
○　(誰かが叫ぶ)正月の一週間休暇と工賃支給。(異議なし、拍手)
柳成有。議長!　議事進行について!　正定支部の柳成有。
高玉林。柳君。
柳成有。さっき云われたように皆の気持が総工会創立で盛り上った瞬間をとらえ、且つ鉄道当局の虚をつく等の点を考え、今度のゼネ・ストは早く始められればそれだけよいのだ。従って今晩はまだ討議しなければならんことが沢山あるので、要求条項の提出はこの位で打ち切り、新中央執行委員会を争議団幹部とし、新中央執行委員長を争議団長に挙げ、直ちに別室で争議団の編成、争議費用の捻出等を協議して貰い、一方変則ではあるが、便宜上、議長指名で五六人の委員をあげ、要求条項の整理、檄、声明書の起草等直ちに取りかかって貰ったらいいと思います。
一同。異議なし異議なし。
高玉林。では新中央執行委員諸君は直ちに別室で争議団の編成、争議費用の捻出等につき協議して下さい。(彼等は別室に行く)要求条項の整理、檄、声明書の起草のためには、順徳支部の曽君、信陽州支部の蔡君、黄河支部の梅君、正定支部の柳君、許州支部の王君に当って貰いたいと思います。直ちに別室で協議起草して下さい。
(五人は別室に行く)なお本日の大会に於いて審議決定さ

れた総工会の綱領規約は直ちに活版印刷に附して諸君に持って帰って貰う手筈になっていましたが、かくの如く包囲され、外部との連絡を全く絶たれてしまいましたからやむを得ません。各支部に一二枚ずつでもわたるようにすぐにプリントにして貰ったらどうでしょうか？

一同。異議なし。

高玉林。ではそれを鄭州支部の書記局にお願いしたいと思いますがどうでしょうか？

一同。異議なし。

高玉林。では鄭州支部書記局は至急プリントに取りかかって下さい。

李金貴。議長！　高碑店支部の李金貴。

高玉林。李君。

李金貴。別室の協議がまとまる迄の間を利用して、ちょっと感想を述べて見たいと思います。

一同。やれ、やれ！（拍手）

李金貴。諸君！　去年の四月長辛店で持たれた全線総工会準備会を諸君ははっきりと覚えているだろう。あの三日に亙る盛大な会議とその成果は、今日の総工会の土台を据えると同時に、全中国の労働者農民に大きな感動を与えたものであった。それ以来の諸君の絶え間ない努力は遂にここに総工会を生みあげたのであるが、この輝かしい今日、あの長辛店での準備会を思い出すと、我々の陣営のめざましい強力化がまざまざと見えて、何とも云えぬ感激が胸にこみあげて来るのであります。諸君は今日のように大衆が一致して燃え上ったのを見たことがあるか？　我々は暴力団と銃剣を持った軍警の妨害を蹴飛ばして会場へ乗り込み、一歩でも泥靴が会場をけがすことを許さなかった。スローガンは殆んど演説の句切り毎に大衆的に叫ばれた。今日の大会には巨大な前進をしたプロレタリアの姿がまざまざと反映されていたのである。（拍手。叫び）諸君、京漢鉄道は国家の所有物だ。その管理権は政府の交通局にある。しかるに数年来鉄道に依る収入は殆んど全く彼等軍閥の掠奪にまかされている。軍閥は我々の正面の敵であり、軍閥を倒すことなしには我々の自由はあり得ないのだ！（「そうだ！」「軍閥を打倒しろ！」）我々の今度のゼネ・ストは正にこの目的のために戦わなければならないのだ！（「そうだ！」拍手）諸君、彼等は既に暴力団と銃剣に依る攻撃を始めた。それは我々が力強く闘争すればするほど狂暴になりまさるだろう。だが我々は全世界のプロレタリアートのために、死を以て戦い抜くことを誓おう！（満堂をゆるがす拍手と歓声。）

呉海発。議長！　江岸支部の呉海発。

高玉林。呉君。

呉海発。諸君。今奴等はボンヤリと銃剣を持って街路に並び、入口をかため、そのドアのすぐ外に押っ立っている。だが我々は今にもそれが我々の胸に飛び込んでくる

ことを知っている。我々は即時糾察隊を組織しなければならない。(「異議なし!」「そうだ!」) 私は諸君が各支部に帰るや否や、真先に糾察隊の組織に着手されんことを望みます。(「異議なし!」喝采) なお、これは言うまでもないことだが、全争議団員が総工会執行委員会を絶対に信用し、その命令に従って一歩乱れず闘い抜くことを望みます。(「異議なし!」喝采)

執行委員が別室から戻ってくる。

執行委員長。議長!

高玉林。出来ましたか? (執行委員長うなずく) では執行委員長から報告して貰うことにします。

執行委員長。争議団本部を江岸に置くこととし、執行委員会直属の次の部を置きます。宣伝部、調査部、新聞部、記録部、情報部、会計部、伝令部、応援部、出版部、接待部、他に糾察隊及び調査隊を置きます。争議中は全員絶対に自由行動は許されません。全争議団員は十人ずつの組にわけられ組長がその全責任を——。

——と云っている間に

(幕)

第三幕

所　鄭州

時　二月

人物

薬育山　火夫。総工会鄭州支部執行委員
老婆　その母
翠英　その妻
魯玉山　総工会鄭州支部執行委員長
紳士
馮竹生
徳宝
保三
若い女　その情人
其他、近隣の人達、子供一人、伝令、軍警等数人ずつ。

第一場

鄭州停車場裏手にある長屋の一つ、火夫薬育山の家の内部、壁も床もきたない黒煉瓦で畳んである。歪んだ椅子、卓、アンペラ。オンドルの上は寝台になっている。正面に板戸。その外は狭い街路。オンドルにひっついて老婆がボロにくるまって箱の上に腰掛けている。

薬の妻翠英は粥みたいなものを煮ている。

夕方。

老婆。ちっともあったかくないよ。
翠英。(返事をしない)
老婆。ちっともあったかくないってばよ、おい。
翠英。こっちだって仲々煮えやァしないわよ。
老婆。石炭をいれとくれよ　ちったァ。
翠英。駄目だよ、幾度云ってもわかんないんだねえ。ストライキを始めたんだってえに、石炭を倹約しろってさっき伝令が来たじゃないか。
老婆。構やしないよ。すぐ済んじゃうんだろう、この前みたいに。
翠英。そう行きゃいいがね、婆さんの考えるように呑気なこっちゃァないらしいよ、こんだァ。命がけだって云ってるからね。みんなも。
老婆。若い者ァ大げさだよ。まあいいようにやっとくれ。うう寒い。そこにあるボロを取っとくれ。
翠英。雪にでもなられた日にゃァつらいこった。(云いながらボロを老婆の身体にまといかける)
汽車の近づく音がする。汽笛。
翠英。(キッとなって)おや、汽車だ!　今頃汽車の通る筈がない。どうしたんだろう。
彼女は入口の戸を開けて半身を街路に乗り出す。
同じく汽車の音に驚いて跳び出して、隣の家のかみさんに叫ぶ。
翠英。汽車だよ。
隣のかみさん。馬鹿にしてる。こんなだらしのないゼネ・ストってあるもんか。始めたと思ったら、五時間もたたないうちにもう裏切りが出るなんて。
翠英。ざまァないよ。本当に。
隣のかみさん。停車場へ行って見てくるよ。(走り去る)
十四五の男の子が後から走って行く。
翠英。(彼に叫びかける)とっとと行って見てくるんだ。
(中へ這入って戸を閉める)畜生。裏切りやァがって。
汽笛。汽車は停車場でとまっているらしい。何ともつかぬざわめき。
翠英。(呟く)意気地なしめ、今朝の支部大会じゃァ勝手なオダアあげときやがって。
隅に少しばかり重ねてある薪を取ってオンドルにくべようとするが、止めてそれをもとに戻す。
戸外でガヤガヤいう女の話声。
○　ありゃ三十八列車だよ。
○　てえと保定仕立の急行だね。
○　誰だい、一体機関手は。
子供達が「裏切者をやっつけろ!」と、調子をつけて叫びながら走って行く。
やがて伝令がやって来たらしい。
女がガヤガヤ騒ぐ。

○　どうしたんだい？
○　誰だい、機関手は？
伝令。何でもない。何でもない。ありゃァ、十時四十五分保定発の急行で、保定支部は十一時からストライキに這入ったんだ。途中に停車駅がなかったんで此処迄来ちまったんだ。ここから先へは行かん。
○　なあんだ。心配させやがる。
○　乗客はどうしたの？
伝令。皆降りて貰った。今皆で前後処置を考えている。（少しへだたった所で繰返している）ありゃァ十時四十五分保定発の急行で――
　別の伝令が正面の戸を開けて半身を突っ込む。
伝令。あのなァ――
老婆。寒いよ、閉めとくれよ、這入るなら這入って。
伝令。ごめんよ、婆さん、ちょっとだ。（翠英に向って）あのなァ、今の急行から降ろした客を分けて皆の所へちょっと休ませることにしたから、お前ん所へもすぐ二人ばかり来るから頼むぜ。（去る）
　翠英は黙って椅子、卓などを置き換え、床を掃除する。
○　外に人が来る。
○　じゃ、あんたとあんたは此処で休んでて下さい。
　糾察隊の一人が戸を開けて旅客を二人部屋の中へ入れる。一人は髯を生やし、気むずかしげな紳士、一人は美しい着物を着た若い女。
　翠英は二人をジロリと見て、黙って椅子をすすめる。
　二人は気味悪げにまわりを見廻しながら腰かける。
翠英。（女に話しかける）どうも済みませんね、迷惑をお掛けして。
女。いいえ。
翠英。どちらへお出でです。
女。漢口まで。
翠英。丁度都合の悪い時でしたねえ。
女。あのう、漢口迄送りとどけてくれるって云うんですが――
翠英。そう云ったんなら、それならお送りするでしょう。
紳士。（身震いして呟く）うう寒。
翠英。石炭を倹約してるもんだから、寒くてお気の毒ですね。
　隣の家から自由の歌が聞えてくる。翠英は茶をいれながら、それに合わせて口ずさむ。戸をパタンと開けて葉青山が這入ってくる。
翠英。おやどうしたの？
葉青山。七時まで交替で暇なんだ。（旅客に向って）どうも御迷惑ですな。だが止むを得ません。これが我々に残されたたった一つの武器ですからな。
紳士。俺もそれは察しるがね、しかし交通機関というものは天下の公器であって、社会民衆のためにあるのだから

その運転を中止するなどということは非常に考え物だと思うね。
葉青山。そうですよ。非常に考え物ですよ。だから我々は命掛けでやってるんですよ。
紳士。命掛けはいいがな、しかし全然関係のない乗客を迷惑させるのは面白くないな。
葉青山。第三者にはお気の毒です。だが、と云ってそれなら我々、例えば鉄道、電気、瓦斯、郵便、新聞など日常の生活とぴったりくっついた仕事をしている労働者は黙って搾られ放だい、いじめられ放だいになっていなくちゃならんというのですかね。悪いのは我々の人間的な要求を踏みにじってる奴等でさァ。（翠英に）あ、そうそう、さっき報告されたがね、北京の鉄道総局の給仕や小使が同情罷業を始めたそうだ。総局の中は火が消えたようだそうだ。
翠英。まあ、凄いわね！
葉青山。鉄道局長の奴、泡食いやがって早速各駅へおどし文句を並べた就業命令を突きつけて来やがったよ。十二時間以内に就業すべし。就業しなければこれから起ることの責任は皆罷業者の方にあるんだそうだ。へッ、笑わせやがらァ。俺達に命令することの出来るのは総工会だけだ。局長なんぞがしゃっちょこ立ちしたって鼻も引っかけねえや。
この時一人の伝令が顔を突っ込んでいう。
伝令。おい、今なあ。鉄道局長からの慰問使だというふれこみの変な野郎が三人で、支部の主だった連中の所をまわって歩いてやがるんだ。もうじきここへ来るから、いい加減にあしらって、正体を見極めてくれ。
葉青山。よし、引き受けた。慰問使たァ御苦労なこった。どんな野郎が来るのか知らないが、一つ後学のために御面相でも拝見しておくか。
伝令。今、楊の家にいるんだ。（首を引っ込めて外を覗う）よッ出て来た、出て来た。ここへ来るぜ。どんな事をぬかすか聞いて見給え。じゃ失敬。（去る）
若い女は遠慮して隅の方へ引っ込む。葉は箱を椅子の代りに置いて待つ。
外で声がする。
○ ええと十二号。葉青山と。
○ 此処だ、此処だ。
ソット戸が開いてひどくオズオズしながら男が三人這入ってくる。それは服装こそ変っているが馮竹生、保三、徳宝の三人である。若い女は保三を見るとギョッとして暗い隅の方に身をちぢめる。
馮竹生。ちょっとお邪魔をさせて貰います。（葉青山に向って）あなたが支部執行委員の葉さんで。
葉青山。そうです。
馮竹生。どうも今度は、お骨折ですな。並大抵の事じゃない。お察ししますよ。（腰掛けて煙草を喫む）私達はな、

その今の汽車で派遣されて来た、その鉄道局長さんから
ね、争議団の方々を慰問するために派遣されて来た慰問
使でしてな。局長さんも口では強い事も云わなきゃなら
んが、しかしそこは上下の別こそあれ、同じ鉄道の仕事
を長年一緒にやって来たあんた方が可愛くてならんので
すな。特に私達をこうして派遣なさったんですよ。

葉青山。（皮肉に）そいつァどうも思いも寄らん御親切な事
でした。

馮竹生。これは痛い。だが、まずその色眼鏡をはずすこと
が第一なんですよ。局長さんと雖も同様雇われの身でが
しょう。こうしたいああしたいとあんた方の為に心を砕
いても思うようにはそれ、実行出来んのでな、ついあん
た方もええじれってえという事になるんでしょうが、そ
こを一つグッとこらえて、な。

紳士。そうだ。俺もそうあるべきだと思うね。自分の事ば
かり考えずに、社会という見地から物を見るんだね。

馮竹生。左様、左様、人間そう行かなくちゃァいけません
な。

葉青山。（皮肉に）で、その社会という見地から見ると俺達
はどうすればいいってことになるのかね？

馮竹生。無論、ストライキなどというお互いに気まずい事
はやめ、直ちに就業する。すると局長さんの方でもその
意気に感じて、あんた方に御満足の行くように――

葉青山。じかし局長も雇われの身で自由にならんと君は云
ったじゃないか。

馮竹生。それはその――

葉青山。俺達が戦ってるのは局長なんてそんなケチな野郎
とじゃァねえ。その上にいて鉄道を横領している軍閥と
だ。

保三。（初めて口を出す）だがね、兄さん、人間にゃァそれ
ぞれ具わった力ってものがあらァ、夢みたいな事を考え
ていきんだって仕様がねえじゃねえかね。

葉青山。俺達に軍閥をぶっ倒す力がねえッてのかい。警察
局長の黄の奴も同じような口をききやがったよ、ゼネ・
ストでも何でも力があるならやって見ろ、へん、所でち
ゃんと御覧の通り、俺達にゃァ立派にやる力があるん
だ。俺達がぶっ倒さないで誰が軍閥をぶっ倒すんだ。

保三。所がね、兄さん、そう甘くは問屋がおろさねえッて
ことよ。何と云っても向うにゃァいくらもキリ札がある
んだ。いくらお前さん達がいきんだって、例えば素手で
鉄砲にゃァかなうまい。

葉青山。へん、大変な慰問使だ、これじゃまるで威嚇使じ
ゃねえか。

徳宝。そりゃお前さんの方の出方が悪いからだ。まァ私達
もこうして北京くんだりからわざわざやって来たんだ。
顔を立ててくれるもんだ。

葉青山。ふん、頼みもしねえに。

保三。俺達ゃ何もおどかすつもりじゃねえ。君達の事を思

えばこそ、警察や軍隊を敵に廻すと損だぜと忠告しているんだ。警察や軍隊だけじゃァねえ。一般の人民だって迷惑だろう、鉄道が止まりゃ商売に差し支える者だってちっとやそっとじゃァねえ、現にこうして旅をなさる方々は——

そう云って彼は初めて若い女の方を振り向き、ギョッとして顔色を変える。

若い女。（一歩前へ出て）保三！
保三。（黙って睨みつける）
若い女。お前さんと云う人は、よくも私を見棄てたね。よくも私に苦い水を飲ませたね。
保三。しッ、馬鹿。
若い女。お前さんのお蔭で私や散々楼主に借金が出来て、足を抜くのにどんなに苦労したか知れないじゃないか。それを、それを一言の挨拶もなしに、姿を消して——
保三。（そばへ寄って小声で）よしよし、金ならいくらでもやる。今は駄目だ。
若い女。金の事なんか云ってやしないよ。私ゃお前の人でなしが情ないんだ。譃ばっかりついて世の中は渡れるもんじゃないからね。
保三。いいってことよ、黙ってろ。
若い女。いいえ、黙っちゃいられないよ。一体私をどうしてくれるんだい。
保三。わからねえな。だから今は駄目だというんだ。大事なお役目で出向いてるんだから。
若い女。何が大事なお役目さ。お前さんが緑党へ這入って周親分の下で会計方をしてるってことも私はちゃんと知ってるんだから。
保三。馬鹿。（跳びかかって女の口を塞ごうとする）
若い女。（もがきながら）金を何千元とか出せって自分の家へ——家へ——脅迫——脅迫状を出したのから足がついて——私ゃお前をおっかけてるんだ。さあ、もう放すもんか。（あべこべにむしゃぶりつく）

瀉竹生と徳宝とは遂に絶望して、「えい、畜生」と云いながら二人を押して、外へ出て行ってしまう。ひっぱたく音と女の泣く声が聞えて、それが段々遠くなって行く。

翠英。あきれたもんだ。
葉青山。（紳士に）どうです。立派な慰問使ですな。買収された暴力団ですよ。もう少しここに坐っているといろいろ勉強になりますぜ。

四五人の女が首を出して云う。

○　どうしたのさ、一体。
○　何だい、あの女は。
○　可哀そうに、やけにひっぱたかれてたよ。
翠英。（戸の外へ出ながら）あきれた慰問使さ。緑党ッて暴力団なんだよ、ありゃァ。飛んだお芝居さ。よくはわからないがね、あの女は——（云いながら外へ出て戸を閉

める）

葉青山はアンペラの上に寝っころがって「自由の歌」をうたっている。

間。

伝令が顔を出す。

伝令。おい、執行委員会だ。程の家へすぐ集ってくれ。

葉青山。（起き上って）何か問題が起ったのか！

伝令。警察局長の黄の野郎がにせ市民大会を計画してるんだ。その対策だ。

葉青山。ふん、何をモゾモゾやってやがるんだ。

伝令。福順坊の乞食共を全部買収したそうだ。明日普楽園劇場でやるんだそうだ。伝単がチラホラ貼ってあるぜ。

葉青山。ドンドンひっぺがしちまえ。さあ行こう。（出て行こうとする）

——

紳士。ね、君、僕の方をどうしてくれるんだね。早く君。

葉青山。大丈夫。送り届けると云ったら送り届けますよ。

（去る）

（暗転）

第二場

同じく葉青山の家。翌日の夜。

第一場から暗転で、時間の経過を現わすだけの間の後、明るくなる。カンテラがともっている。風が吹いている。舞台には老婆が一人いるだけである。

不意に一人の男が跳び込んで来る。鄭州支部執行委員長の胥玉山である。

胥玉山。お婆さん、済まねえ。ちょっとかくしてくれ。

老婆。誰だい？

胥玉山。俺だ。胥だよ。

老婆。つけられてんのかい？

胥玉山。そうだよ、軍警に追っかけられてるんだ。

老婆。じゃ此処へおいで。

彼女はかぶっていたボロをぬいで立ち上る。

胥玉山。済まねえ。寒いぜ。お婆さん。ちょっとの間だ。

ボロをかぶって老婆のいた所にうずくまる。老婆は寒さに震えながら箱に腰掛ける。

老婆。（押し殺した声で）うちの子の居所は判ったかい。

胥玉山。ああ、総司令部にしょぴいて行かれたらしい。可哀そうに、大分やられてるだろう。

老婆。畜生。うちの子をいじめたって仕様がないじゃないか。ストライキをやってるのは皆じゃないか。お前達が意気地なしだからこんなことになるんだ。お前さんは鄭州支部の執行委員長じゃないか。

胥玉山。そうだよ、俺達が意気地なしだからこういうことになるんだ。だが、じきに取りかえしてやるから堪忍してくれ。

老婆。あてにしないで待っていようよ。

不意に戸外に足音がする。軍警が四五人這入り込んで来る。

老婆。（立ち上る）何だって黙って人の家へ這入り込んで来やがるんだ。

軍警一。（見廻しながら）若い男が来なかったか？

老婆。何云ってるんだ。若い男なら今朝お前達がしょびいて行ったじゃないか。ここにゃァ婆ァが二人しかいないよ。さっさと出て行っとくれ。

軍警二。駄目だ。いねえや。

軍警三。畜生、何処へ行きやがった。

ゾロゾロ去る。老婆は彼等のうしろからパタンと戸を閉める。

晉玉山。有難う、お婆さん。（出て来ようとする）

老婆。駄目だ。まだ危いからもちっとそうしていなさい。（間）どうだい、今度のストライキは見込みがあるかい。

晉玉山。俺達ァ勝つ！ 俺達ァ結局勝つんだ！ お婆さん、その点にかけちゃァ安心していなくちゃいけないよ。

老婆。だがいつ勝つんだい？

晉玉山。そりゃわからない。明日か、それともずっと先になるか。

老婆。でその間にうちの子はどうなるんだい？

晉玉山。あれだって俺達が勝つ事だけを望んでるんだ。そのためにゃァ命でも何でも惜しかァないんだ。

そこへ翠英が走り込んで来る。

翠英。うう寒。とてもひどい風だ。おや、誰？ なあんだ晉さんか。

老婆。しッ。

翠英。ああそうか。

晉玉山。市民大会はどうだったね？

翠英。市民大会が開いてあきれるよ。無理矢理に掻き集められたのが四五十人、ぽかんとしているだけの事じゃないか。変な世話役みたいのや、町内の顔役っていうようなのがストライキの悪口を云って、結局、黄の拵えた決議見たいなものを読んでおしまいさ。

晉玉山。へえ、何を決議しやがったんだ。

翠英。（紙片を取り出す）そいつが前以てちゃんと刷ってあるのさ。会が終ると買収した乞食共に小さな旗を持たせて、こいつを町中に撒かしたのさ。

晉玉山。下らん真似をしやがる。

翠英。（紙片を読む）労働者諸君の反省を促すだとさ。労働者は十二時間以内に就業すべし。然らずんば労働者に物資の供給販売を停止すべし。ひそかに労働者及びその家族に物資を供給販売する者あれば、暴徒に通牒する罪を以て論ずだとさ。

老婆。ストライキをやる労働者は物を食べる権利がないというんだね。畜生め。

翠英。まだあるんだよ。労働者就業せざる時は家主はその

貸家より退去することを迫るべし。労働者並びにその家族を居住せしむる者あらばその家屋は没収して公有財産とすべし。

老婆は怒りに身体を震わしながら立ち上る。

魯玉山。大丈夫だよ。婆さん、いくら黄が一人で騒いだってこんな馬鹿なことが出来てたまるもんか。

老婆。そりゃそうだろうけれど、人をあんまり馬鹿にしてる。息子をさらってって拷問して、それでも足りずに家まで取り上げようとは、人間の面した奴の云える事かい。

翠英。だが此の一番おしまいの項目を聞いてごらん。家や食物の騒ぎじゃない、就業しなければ殺すぞとハッキリほざいていやがるんだ。いいかい。(読む)就業せんと欲する者は停車場に至りて身体安全証を受領すべし。然らざるものは万一土匪に襲わるとも警察はその保護に任ぜざるべし。

老婆は言葉も出ず、あえぎながら、机をかたく摑む。

魯玉山は立ち上る。

翠英。おや、何処へ行くの?

魯玉山。俺やちょっと行ってくる。皆にこのビラの事を、しゃべって来なくっちゃあならねえ。

翠英。私もそれがちょっと心配だったの。勿論これが出鱈目で、おどかしに過ぎないってことが解らないような事はないとは思うけれど、やっぱり元気よくアジった方が——

魯玉山。そうなんだ。大丈夫だろう。ちょっと行ってくる。婆さん左様なら。

彼は戸を開けようとする。その時、戸が外から開く。魯は素速く物陰にころげこんで隠れる。

戸口に、片手に縄を掛けられた葉青山が拷問ですっかり疲れ果て、顔をダラリと下に垂れ、グラグラ揺れながら、四五人の軍警に押されて現われる。一人が銃剣で葉の尻を突く。葉は半分気を失いつつ、顔を垂れたままとぎれとぎれにいう。

葉青山。我々はもう——戦えるだけ戦った——力の限り——戦った——此処迄やれば——誰に恥じる事もない——鉄道総局でも——我々の事情は出来るだけ考えると云っているから——いるから——この際無条件で——

その時、老婆は不意に「お前!」と呼び、長い叫びを挙げて倒れる。

葉はその叫びに愕然として顔を挙げる。そして初めてそれが自分の家であったことを知って、「あ」と叫ぶ。

翠英。(泣きながら)いくら拷問されたからと云って、何で——何で——屈服の勧告なんかするんです。恥ず——恥ずかしくはないのか。大事な所なんだ——頑張らないでどうする!——死んでもいいから——死んでもいいから。

彼女は不意に軍警に跳びかかる。
翠英。馬鹿野郎！　放せ！　畜生！　人殺し！
軍警は彼女を突きとばす。
葉もあばれる。
葉青山。俺はもうやらん！　殺せ！　さあ殺せ！　総工会万歳。
軍警は彼をグイグイ引き立てて去る。葉の「プロレタリア万歳！」と云う声が引っぱたかれ、こずかれる音と一緒に段々遠ざかって行く。
後に残った三人はそれぞれ泣いている。間。
列車の驀進して来る音が聞える。
それは益々近づく。
三人はキッとして首を上げる。歯を喰いしばっている。魯は走り出る。
列車は遂に停車場にとまる。
老婆。ああ。駄目か。（机に倒れ伏す）
間。かすかな騒ぎ。
不意に伝令が戸を開ける。
伝令。兵士だ！　第十四師団の兵士だ。臆病になるな！
最後まで戦い抜け！　（去ろうとする）
翠英。誰が運転した？
伝令。鉄道総局の上級役員共だ。（去る）
翠英。ああ、有難い！　裏切りじゃなかった！

（幕）

第四幕

所　鄭州停車場及びその附近

時　二月六日の昼と夜

人物
周平甫
徳宝
保三
髪の男。乾分
軍警部長
老婆。葉青山の母
男の子
労働者多勢
軍警多勢

第一場

鄭州の或る金持の家の大きな一室。暴力団の幹部連中の宿所にあてられている。

徳宝と髯の男がボンヤリ阿片を吸っている。
二月六日の昼頃。
髯の男は物倦そうに、一片の伝単を徳宝に読んで聞かせている。

髯の男。（読み続ける）だが、よそからの噂に依ると、諸君が此処へ来たのは、或るよくない事のためだそうだ。君達は俺達を圧迫するために来たのだそうだ。だが俺達はそんな事を信じたくない。なぜなら、君達も俺達も同じように労働する兄弟だからだ。お互いに力を合わせて助けるのが当り前で、殺し合うべき筈がないからだ。
徳宝。ふん。（鼻の先で冷笑する）
髯の男。（続けて読む）もし君達が、噂の通り、軍閥の手先となって俺達を殺しに来たのならば、よろしい、俺達はこの苦しみ抜いて来た生命を掛けて、君達と争おう。だが銃を持ち、剣を持った君達が、身に寸鉄をも帯びていない俺達を殺せばとて何の誉れになるのだ。君達の農村が疲弊したのは誰の為だ。君達が故郷を離れて、こんな生命を的の恥ずべき仕事に就かなければならなくなったのは誰の為だ。我々の敵は同じものだ！　我々は味方同志なんだぞ！　銃を捨てろ！　俺達と手を握り合おう！
徳宝。それっきりか？
髯の男。左様。これでおしまい。
徳宝。ふん。そんな泣きごとで誰がだまされるもんか。
髯の男。そう云やァそうだがね、考えて見りゃァあいつらもやるところまでやるもんだね。
徳宝。何がさ。
髯の男。だって軍警がしゃっちょこ立ちいしてえる上へ持って来て、兵隊がワンサ乗り込んで来たんだから、いい加減腰がくだけてもよさそうなもんじゃねえか、そりょうお前、こんなビラまで刷って兵士の宿舎へ忍び込んで撒いたってんだから呆れたもんだ。
徳宝。手前にゃァ無え度胸よ。
髯の男。兄貴とだって縁が遠いぜ。
徳宝。あたり前よ、二百や三百の目くされ金で命が棒に振れるけえ。
髯の男。じゃァこちとらは尚更のこと五十や六十の涙金じゃァ刃物三昧はまず御免だね。
間。
髯の男。兵隊が来りゃァすぐ汽車は出るだろうと思ってたら、どうでえ、奴等が着いてからやがて一日になろうッてのに、絶えて通らねえぜ。
徳宝。命がいらねえとなったら、ちょっと始末のつかねえものだな。
髯の男。時に親分はみっちりモノしたろうね。
徳宝。きまってらァな。そこに抜け目はあるもんか。まァ万は欠けねえだろう。
髯の男。いい身分だな。

徳宝。だが俺達だってそう悪い身分じゃァねえさ。
髯の男。そりゃァ兵隊なんぞとくらべりゃァな。
徳宝。なァに、そんなものとくらべなくってもよ。これで相当余徳があるからな。
髯の男。ちえッ、キワどい所でおのろけかい。やめとくれよ。
徳宝。いつのろけた？　何を云やァがんでえ。まだのろけもしねえうちから出鼻を折るねえ。糞面白くもねえ。
周平甫がプリプリしながら這入ってくる。
徳宝。（起き上りながら）お帰んなせえ。如何でした。斬雲鶚の方の首尾は？
周平甫。ふん、馬鹿にしてやがる。
徳宝。てえと？
周平甫。ビタ一文出さねえばかりか散々ッぱら人を怒鳴りつけやァがった。
徳宝。へえ、呆れた野郎だ、聞きのがしならねえ、こっちのどこが不満だと云うのかね？
周平甫。総工会の創立大会の時の事まで引っ張り出しやァがった。軍警隊にあばれさせるキッカケをトチったなあ悪かったが、その代り事務所で散々あばれてやったじゃねえか。
徳宝。そうとも、命を的の仕事をやってるんだ。重箱の隅をほじくるようなケチな事云うない。
周平甫。そりょう手前、俺達のやった事ァ何一つ役に立たなかったとぬかしやがるんだ。
徳宝。飛んでもねえ野郎だ。
周平甫。成程慰問使の一件は保三の野郎のお蔭でドジを踏んだが、あれにゃァ馮だって責任がねえたァ云わせねえ。
徳宝。そうですとも、そうですとも。
周平甫。にせ市民大会の件と来ちゃァ、ありゃ全く黄殿辰の一存で俺達ァちょっと手を貸してやっただけのこっちゃァねえか。そりょう手前、すっかり俺達の気のきかねえためだとぬかしやがってビタ一文出しやァがらねえのだからひでえ野郎だ。
徳宝。（ニヤリと笑って）ビタ一文出さねえたァひでえ奴でござんすな。
周平甫。警官じゃァあるめえし、あんな野郎に飼犬みてえにこき使われてたまるけえ。お気に入らなきゃァ御勝手に、御縁がねえんでござんしょうと、俺ァよっぽど投げ出してやろうと思ったんだ。
徳宝。だが親分、腹も立とうがそいつァはやまらねえがようござんすぜ。
周平甫。だがこうなっちゃァ、俺達ァいよいよ軽く見くびられるばかりよ。もともと軍警を正面に出さねえで済むようにと俺達にワタリをつけたんじゃァねえか。それがとうとう兵士まで繰り出すような事になっちまったんだからなァ。

徳宝。だってそりゃァ何もこっちの落度じゃァねえ。おどかしてもすかしても土台労働者がビクともしねえんだから仕様がねえ。死ぬ覚悟でいるものに、殺すぞ、殺すぞってタンカ切った所で始まらねえなァわかり切った話じゃァござんせんか。
周平甫。だからよ、それが斬の野郎にゃァわからねえから愛憎をつかしたのよ。
徳宝。だがね、蹴っちまうのはわけはねえが、これでさきざきの事もよく考えなくっちゃァいけませんぜ。今迄だってせいぜいお目こぼしってえ所だったのが、ここでタンカを切ったお蔭で日蔭者なんざァ考えもんですぜ。それに、あっしゃ思うんですが、大体今迄あっし等がああいうその何ていうか、政治家ってな連中とつきあいがなかったのが飛んだ間違いだったんだ。ああいう連中にはきっと後ろぐらい事がふんだんにつきまとっているもんです。正面に廻っちゃァ頭をさげていても、急所々々でギュッギュッと押えて行ってごらんなせえ。結構な身分じゃァござんせんか。
周平甫。うーむ。
徳宝。ここらで一つ手を変えて、気を広く持ってやってごらんなせえまし。
周平甫。ほんの短えつき合いだが、そうする気なら押えられる所が既にねえわけじゃァなさそうだ。まあ第一にこの阿片だな。こんなものでもたぐりゃァどんな芋が引かけられて出ねえとも限らねえからなァ。だが困ったもんだぞ。
徳宝。何がですえ?
周平甫。俺ァ業腹だったので、ハイ左様ならと迄は云わなかったが、斬の野郎が今度ァ構えてドジい踏むなと笠にかかって云やァがった時に、さあ、やる事ァ今まで通りやりましょうが、お気に入るかどうかはわかりませんといやがらせを云って来ちゃったんだ。今度ァ余程うまくやっつけねえと、あいつの御機嫌は直らねえぞ。

ここへ保三が息せき切って這入って来る。

徳宝。よう、保三が帰って来た。
周平甫。やい、手前、何処をほっつき歩いていやァがったんだ。挨拶もしねえでこのいそがしい最中に、いいか何かとドロンをきめられていて納まると思ってやがんのか。
保三。納まらなきゃどうするんだ。
周平甫。何だと!?（跳び立つ）何処へ行ってそんなセリフを覚えて来やがった。親分に向って何だ。
保三。ふん、親分かと思やァ何だ、ケチな泥棒じゃァねえか。
周平甫。（寧ろ呆気にとられる）な、何んだと？
保三。（おっかぶせて）貴様は俺の知らねえ間に、二度迄俺の家を脅迫して二千元ずつふんだくったじゃねえか。それればかりじゃねえ。やれ愛国の正義のとぬかしやがって、その実今度のざまァ何だ。だまされて、チェッ、糞

をくらえ。見っともねえ慰問使なんかにさせられて、生恥さらして――

徳宝。（彼を抱きとめる）まあ、まあ親分、相手になるだけの事ァねえじゃございませんか。

その時戸口に一人の乾分が現われる。

乾分。親分、大急ぎで電話口まで来ておくんなさい。総司令からでござんす。

周平甫。（保三に）ちっと静かに考えて見ろ。何処の世界に親分をつかまえて貴様呼ばわりをする奴があるか、馬鹿め！（出て行く）

徳宝と保三は暫くの間睨み合っている。

徳宝。（不意に微笑して）手前はまだ青いなァ。もうちっと人間が出来てると思ったのに。まあ、そんなにムキになってのぼせるもんじゃァねえ。

保三。青かろうが青くなかろうが飛んだお世話だ。俺ァあの女から、家が二度も脅迫されたってことを聞いた時、余っ程あのまんま突っ走ろうかと思ったが、ジッと様子を見て考えてたんだ。だが見れば見る程貴様達のやり方ァ気に食わねえ。一言怒鳴りつけてやらねえと気が納まらなくなったからやって来たんだ。

徳宝。怒鳴るなァいくら怒鳴ったってかまわねえが、怒鳴りゃァ怒鳴るだけ手前の損だから俺ァ不びんだと思うのさ。

保三。不びんたァ手前達のこった。不正不義をして掠めた金のおこぼれのおこぼれを貰って、這いつくばってやがる。

周平甫が跳び込んでくる。

周平甫。（徳宝に）早速出掛けるんだ。今度ァ一番ドジ踏まねえようにやっつけにゃァならねえ。労働者共の伝単を見て兵士までグラつき出しやァがったんだ。今度ァ手剛いから皆に覚悟をさせてくれ。時によっちゃァぶったぎってもいいぞ。

徳宝。いよいよ来たか。（立ち上って行きかける）

保三。やい、手前達ァまだやろうって云うのか？ あれだけしてまだ足りねえで、今度ァぶったぎりまでしようというのか。畜生め。もう堪忍ならねえ。

保三は周平甫に躍りかかる。格闘。徳宝はニヤニヤ笑って見ている。二人共散々になぐりあう。周平甫は蹴倒される。徳宝もそこで遂に援軍に出る。

徳宝。こん畜生め！ 野放図な真似しやがるとたたっころすぞ！

三人で揉み合うが、忽ち保三は徳宝に蹴倒されて、散々に踏んだり蹴ったりされる。戸の外へ蹴り出される。

周平甫。出て――出てうせろ！

（幕）

第二場

鄭州停車場構内。二月六日の夜。
下手奥に機関車庫。その中から半分車体を現わしてとまっている機関車。上手に停車場の建物、柵など。闇夜。わずかにシグナルや構内電柱や建物の窓から洩れるあかりや少数の人々の持つカンテラで照らされている。
上手から正面に掛けて一面の労働者達。それと機関車庫との間に軍警が銃剣を擬して並んでいる。
息詰るような沈黙。
不意に沈黙を破って一人の労働者が叫ぶ。

○ 兵士諸君は銃を捨てたぞ。いつ迄君達は軍閥の手先になっていようと云うんだ。

○ 銃を捨てろ！

○ 銃を捨てろ！

　だが軍警はただ黙って立っている。
　一人の男の子が出て来て一番前に立っている軍警に云う。

男の子。自分で何やってんのか判んないんだろう？　軍閥の方が悪いんだってことが判んないんだろう？　可哀そうだけど、馬鹿だなあ。

　軍警は顔を歪めて黙っている。

　部長が軍警のうしろから出て来て子供を突きもどす。

部長。生意気云うな。（労働者達に向って）皆行け行け！　いつまで立ってたって仕様がないじゃないか。お前達がいくら立っていたって、この汽車は動く時にゃァ動くんだ。

労働者。黙れ！　汽車を動かす動かさないは俺達の勝手だ。

○ 動かせるもんなら動かして見ろ。

　その時労働者達の中に動揺が起る。

○ 何だ、何だ。

○ どうした。

□ （叫ぶ）諸君！

○ シッ！

○ 静かに、静かに！

□ （叫ぶ）諸君！　たった今、警察局の裏手の原に引きずり出されて、葉青山は斬殺された！

　大きな憤激の叫び。その中に際立って老婆の鋭い叫び声が聞える。それを埋めて労働者達は叫ぶ。

○ 誰が、誰が殺したんだ。

□ あの暴力団の連中だ！　周平甫の一味だ！

○ 暴力団を叩きつぶせ！

○ 叩きつぶせ！

老婆。息子！　息子！

　葉の母が前に押し出される。

□　諸君！　棄は最後迄頑張った！　最後迄総工会万歳！
を怒鳴って死んで行った！

大きな叫び。

老婆。息子の仇を打て！　息子の仇を打て！

○　棄の仇を打て！

○　暴力団を叩き殺せ！

○　軍閥をやっつけろ！

燃え上った群集は上手になだれて行く。狼狽した部長は怒鳴る。

部長。打て！　打て！　構わん！　ぶっ放せ！

軍警は労働者達のうしろから発砲する。大叫喚、滅茶苦茶な発砲。やがて段々に銃声が止むと一緒に舞台暗黒。

間。

不意に闇の中から声が聞える。

○　諸君！　我々のストライキはこうして血にひたされて窒息してしまった。それは失敗した。何故失敗したか？　諸君はその原因を眼のあたり見た。我々はそれを克服しなければならぬ。一方我々は全国的総工会の基礎を抜き難く置いたという点で成功した。次の如きスローガンを我々の流血の闘争の中から大衆的に戦いとった点で成功した。それは全争議団員の口から出た一致した叫びだったのだ。

軍閥を打倒せよ！

帝国主義を打倒せよ！

労働者農民×××万歳！

（幕）

（材料、考証等の点で藤枝丈夫君の助力を得たことが多い。記して好意を謝す。）

（一九二九年七月「戦旗」）

太陽のない町 抄

徳永直

毒瓦斯

追っ払われて長屋まで帰って来た女房達は、雛ッ子を奪りあげられた牝鶏のように、ぶっつかり処のない憤懣を、角張った頬骨に現わしながら、棘々しい調子で云い合った。

――おからを食った、牛みたいに、会社の守衛共に、モーと吠えてやるか……

喜イ公の女房は、自分の家の入口で振り返って、甲ン高に叫んだ。すると、この七番長屋の入口の溝ッ端で、散り切れない五六人の女房達が、一どに振り返って怒鳴り返した。

――吠えた位でおっつくか、阿呆……

実際、彼女達は、噛みつきそうであった。質草だって、モウたんと残ってるわけでねえ――、工場に十年も勤めたために子供の出来ない喜イ公の女房は、それでも、幅ッ広い肩の真ン中に、萎びた蜜柑のような首を据えて、すぐはじけ出そうになる罵言をじっと抑えた。

――おから食ったり、粟を食ったりした揚句に、争議に負けちまったら、眼もあてられねえよ。

袢纏で孫を背負った松太郎ンちの婆は、犬に追っかけられた牡鶏のように、ふかふかした足どりで、溝ッ端と、喜イ公の女房の間を往来して愚痴り始めた。――また始めやがった。――喜イ公の女房は首を振った。――この婆は、年中愚痴ってばかりいやがる、七番長屋の毒瓦斯め!

その癖彼女達も愚痴りたかった、だがしかし、あの鬚ッ面は、彼女達の胴をしっかりと抱きあげていた。彼女は、戸の隙間から、共働社の伝票を抛り込むと、婆を押し退けながら、女房達の方へ近づいた。そして、さっきの広岡の身振りを真似て、両手を抱きかかえるように突ン出して云った。

――忍ばなくちゃ不可ねえ、ナアいいか、争議が勝利になるまでは忍ばなくちゃ不可ねえ。

しかし、戯ざけたつもりの、笑ったつもりの彼女の顔面がすっかり笑い切れないで中途で凝結してしまったように、五六人の女房達の顔も、少しも笑わなかった。

――まあいいや、心配することあないよ。

吐き出す溜息のように、赤ン坊を抱いた源ちゃんの女房が、ぼさぼさ頭髪の首を縮めて云った。

――お太陽さまと、米の飯はついて廻るってから、何と

かなるだろうよ。
すると、松太郎ンちの婆が、首だけ皆の背後から突ん出して、すぐ言い返した。
——ところがお太陽さまだって、この長屋にゃ顔を出さねえよ。御覧な——ほら、あの通り外ッ方向いているよ。
空ッ風の凪いだ正午過ぎの、おだやかな白山の森の上に、弱々しい陽光が落ちているきりで、このトンネル長屋には、いつものように死人の眼のように濁った灰色の雲が蔽いかぶさっていた。長屋の軒や、溝ッ端に、無数のおしめの襤褸ッ切れが、滴を氷柱にしたまま棒鱈のようにぶらさがっていた。
——おお寒い——。
源ちゃんの女房は、泣きもしない子の背をたたいて首を縮めながら、その癖、家ン中に入ろうとはしなかった。
——火を燃せ、火を——
喜イ公の女房は、ふと気がついたように、溝ッ端の、古び朽ちた木橋や丸太ン棒や、セメント樽の箍を外して持って来て、火を点けた。そしてブスブス燻る煙の上に、パッと裾をまくって背後向きになりながら、都腰巻の赤いやつを、両肢で踏みはだかって云った。
——ナアに、お太陽さまが、外ッ方向きや、下から、どんどん火を燃して、黒焦にしてやるよ。
——そうだ、そうだ。お太陽さまの黒焼は、一度喰ったら、生涯お腹が空かねえッてさ。

今度は、皆が笑い出した。地べたの黒い霜柱が解けて流れ出した。勢いよく燃え上るセメント樽の箍の火の粉が黒く凝結した溝の中へ、はじけ落ちて、じうじうと音を立てた。
——おや？
そのとき、女房達は、異様な物を発見した。
——何だい、あれは？
松太郎ンちの婆が、喜イ公の女房んとこへ近寄って囁いた。六番長屋から、廻って来られるこの七番長屋の、一等向う端の家の前に不意に出現した二三人の、毛色の変った貴婦人達があった。
コートを着た束髪と丸髷が一人、モ一人の洋服を着ている女が一等老人らしく、毛皮のついたオーバを着て、帽子を冠っていた。女房達は眼を瞠った。
——薬売りでねえかよ。カバン持ってるよ。
婆が囁いたけれど、喜イ公の女房は首を振った。薬売りでもない、産婆が三人も一緒に来る訳はない、第一、あんないい着物は着ていない。
——あいつあ、余ッ程金高の張る着物だよ。
喜イ公の女房は、源ちゃんの女房に云った。
——うん、此んな処にちょいちょい来る代物じゃないねえ。
ところが、この貴婦人達は、念入りに、向う端から一軒ずつ、丁寧に声をかけ、そして返事がないと、ガタピシする引戸を開けて家ン中を覗き込んでいる様子であった。

――あらッ、おらんちを覗き込んでいるよ。
松太郎ンちの婆さんは周章てた。――誰もいねえのに――。
――周章てなさんなよ、婆さんち盗まれるようなもの何もありゃしないじゃないか。
他の女房の一人が云った。奥様達は、だんだん此方へ近づいて来た。そして、この焚火をしている女房の一団を発見すると、老人の洋装が、まず足を停めて、他の二人の奥様を顧みて囁き始めた。
女房達は、不安な眼と口を開けたまま見戍った。そしてすぐ、老人の洋装を先頭に、三人の奥様達が、彼女達の方へ歩いて来た。喜イ公の女房は、いそいで裾を下ろして、都腰巻を押し包んだ。
――お見受けしますところ、争議団の御家族の方々のように思いますが……
洋装は、馴々しい調子で、小さい金具の光るオペラバッグとかいうやつを持ち変えながら、深い毛皮の中で、福々しくくくれたあぎとをうずめて微笑みかけた。
女房達は、小学生が途中で校長先生に行き逢ったときのように、黙ってもじもじした。今度は洋装の背後で、女優のように綺麗な二人の奥様が丁寧に、女房達へ会釈した。松太郎ンちの婆は自分達の方を顧みてから、決心したように、ペコンと一つ、頭をさげた。
――それで……、妾共は――。
物馴れた口調で、一枚の名刺を、押しつけるように、婆さんに渡してから、洋装は云った。
――争議団の御家族、特に御婦人方へ、御相談申しあげたいと思いまして、わざわざ推参しましたのですが――。
喜イ公の女房は、字の読めない婆さんが貰った名刺を受取って読みながら、隣りの女房へ囁いた。
――東京仏教婦人連合会っていうとこの、方々だってさ。
――あの洋装が、幹事長ってんだよ。
そう云われても源ちゃの女房には、ハッキリと呑み込めなかった。――仏教と云えば坊主だろうが、坊主の梵妻（だいこく）にしては、あの女達はあんまり綺麗すぎる――。
――皆さん御家族の方々には、こんな大きな争議のために、どんなにお苦しみでいらっしゃるかと実は妾共も、蔭ながら心配していますような次第でございまして、今日は親しく皆様にお眼にかかって、御相談申しあげたいと思って参上いたしました。
女房達は駭いた。こんな綺麗で、えらい人々が、蔭ながら心配するほど、自分達は世の中から大事がられているのだろうか？　異人のように、高い鼻と白い皮膚を持った洋装は、しり込みする婆さんの方へ益々親しげに近づいて云った。
――釈迦如来の仰せの通り四海は平等と申します。皆様の苦しみは、とりも直さず、妾共の悩みでございます。どうか貴女方の偽りのない御意見をお聞かせ下さいませ。妾

共も及ばずながらこの争議の平和な解決に努力いたすつもりで居ります。――

しかし、女房達は益々当惑してしまった。羽根箒でお臀を撫でられるようなくすぐったさだった。女優のように綺麗な髷の一人が、用意して来たらしい手提の中からチョコレートを四つ五つ摑んで、源ちゃんの女房へ近づいた。

――まあ、お大人しい坊っちゃまでいらっしゃいますこと――。

チョコレートを差し出したが、痩せこけた赤ン坊は、大きな眼玉を剝いてるきりで、掌を差し出す元気も失っていた。だから大人しいには違いなかった。

子供のない喜イ公の女房は黙って、この綺麗な奥様達を見つめながら考えた――この狐共は、俺達を騙すつもりじゃないか？

今度は束髪のコートが、松太郎ンちの婆さんの背中にいる女の児に、チョコレートをやりながら、誘惑するように云った。

――お可哀そうに、お父様達の争議が、早く終ればよござんすのにね。――ねえ嬢ちゃま、お父さんがお帰りになったら仰っしゃいまし――早く争議を止して、花屋敷へ連れてって頂戴って――ねえ。まあ、お悧巧さんですこと――。

喜イ公の女房は、すっかり感付いた。源ちゃの女房の袖を引ッ張って云った。

――用心しなよ。ありゃ狐だよ。

髷と束髪は、女房達の中へ入って、チョコレートの誘惑を振り撒いた。幹事長の洋装はまた優しい声を出して云った。

――あちらの長屋の奥様方とも相談して参りましたが、凡て争いというものは、両方共悪いと申さねばなりません。会社と同じように貴女方の旦那様も、意地とは申せ強情が強すぎる――手ッ取り早く申せば双方が譲り合わねばならぬと思います。

――来やがったぞ――喜イ公の女房は、急いで女房達の袖を引ッ張った。

――女は女同士と申します。妾共の意のあるところを貴女方から旦那様へお伝え下さいませ。貴女方の為めに、そして愛しいお子様の為めにまず会社へ譲歩なさるように――左すれば必度、会社も折れて出るに違いありません。

石炭のように、硬くなって身体を熱くしていた喜イ公の女房は、このとき不意に足踏みして怒鳴った。

――黙れ、狐ッ。

驚いて、きょとんとした洋装の高い鼻ッ先へ、喜イ公の女房は、彼女達は怒るといつも雄弁になるように、顔を突き出してまくしたてた。

――何が、愛しいお子様だ、ヘン、何が四海平等だ。四海平等でねえ証拠に、お前さんのお召物とあたい達の襤褸と比べてみな――平等だったら、取ッ換えて貰いましょうかだ。

「まあ、乱暴な方だこと——」髷は、背を小突かれて蹌めきながら、溝に足でも踏みこんだときのように眉根を寄せて振り返った。

——どっちが乱暴だい、云うことがいけ図々しいや、おめえさん達、あたい達を切崩しに来たんだろう。お釈迦の化損いの狐めッ、会社の廻し者だろう——。

他の女房達も、くすぐったさから逃れて正気に返ると、急に元気が出て来た。

——何？ 会社の廻し者かい。

源ちゃの女房が、大きな声で怒鳴った。

——お——い、皆な出て来な、会社の廻し者が、押し掛けて来たぞウ——。

三人の貴婦人達は、すっかり度胆を抜かれてしまった。女房達の喚きに応じて、其処此処の長屋から、子供や、女房や、老人連が飛び出して来た。

——どいつだ会社の廻し者は？

——溝へ叩っ込んじまえ！

貴婦人達は、色を失って、コートの袖等を引きさきながら、溝の木橋を渡って逃げ出した。

喜イ公の女房は、燃えさしのセメント樽の箍を振り上げながら怒鳴った。

——一昨日来やがれッ、この毒瓦斯奴ッ！

……だが、この信念深い仏教徒の貴婦人達はまたその翌日、性懲りもなく、再びこの「太陽のない街」へ姿を現わし、今度は、第三本部の婦人部の入口に立っていた。

——婦人部長に、お目にかかりたいのですが、おいででございましょうか。

昨日の洋装は、淑やかに云った。受附にいた例のおぎんちゃんは、桃割の頭髪を傾けて名刺を見ていたが、すぐ元気のいい声で言った。

——不在です。いても多分お眼にかからぬだろうと思います。

あまり不愛想な返事に、他の二人の貴婦人も顔見合せた。洋装が重ねて言った。

——御多忙中だろうとは存じますが、ホンの五分ばかしでも……。

執拗く入口から離れようとしなかった。おぎんちゃんは、受附のテエブルの塵をはたき出すように、怒鳴りつけた。

——婦人部長も、高枝さん達姉妹も、不在です。そんなに逢いたきあ、富坂署にお出でなさい。留置場であの人たちはモウ二晩も呻めいている筈ですから——。

歩哨

病人は、殆んど眠れなかった。明方になって、霙が、引立窓の雨戸をたたき、トタン葺きの屋根を打ち、窓外の千川どぶの凍てついたような水面をたたくのを聴いた。それ

ほど——赤ん坊の泣き声すらしないほど、寂寞とした長屋に近頃はなっていた。
関節の痛みに、ひしひしとこたえる底冷えをしっかと、枕を抱いて耐えながら、ぼろぼろ涙をこぼして呟いた。
——極道阿魔奴ッ——。
内気で、優しいお加代までが、警察に拘引されたことも、父親には、やはり高枝のせいだった。会社に労働組合が出来てからというもの彼の総領娘は、だんだん親と意見を異にして来た。ホンのねんねえだった彼奴は誰かに入れ智慧でもされたように、すっかりいっぱしの考えで、親の命令にすら落着いた態度で反駁し、説教しやがるのだ。
——魔がさしたんだ！　あの狂人阿女は！
若し、彼の身体が、たっしゃであり、右手の手首がちゃんとしているなら——引き据えて性根がすっかり撓め直るまで、蹴って、蹴りつけてやるものを——。
病人は、ふと壁際にある小さい机の上に、古ぼけた、突立ての本箱を見た、——其処には赤い表紙の薄っぺらな本や、分厚な、学者の読むような金文字入りの洋式の本やが十冊あまり重ねられてあった。高枝はよく、それを読んでいた——。夜業が終えて帰ってからでも、彼女が寝床の中へ持ち込んで読んでいたのを、病父は憶い出した。
——あいつだ、あの本だ——あいつが、高枝を狂人にしちまいやがったんだ——。
病人は、壁に身体を支えて起き上った。そして、便所にゆくときのように、慄える足に力をこめながら、本箱へ近づいて行った。引立窓の隙間から、骨の髄を刺すような風が、吹き込んで来た。病人は、窓を押して、自由の利く左手を伸ばすと、手荒く掴んで振り上げた。
——この貧乏神奴ッ、消え失せろ。
本は、音もたてずに、千川どぶに、首を突っ込んだ。バラバラめくれた紙片が、だんだん白んでゆく、冷たい空気の底に、クッキリ浮き出て、落ち込んで行った——。
——お爺さん、お爺さん——何をするんだね？　短気起すんでねえぞ。
呼吸を荒くし、眼を瞋らせて、一冊々々に、新しい憎悪を籠めて振り上げる病人の喚き声を聴きつけた隣りのお内儀が、壁の下から怒鳴った。
——いんや、この貧乏神を、抛り込むんだッ。
彼は手を休めなかった。
本は、水底に沈んだのもあった。せきあげるどぶ底の水に圧されて、鈍くもんどりうって流れるのもあった。冷気に閉じこめられた川面には、靄がひどく薄かった。
千川どぶに、塵埃が、メッキリ尠くなったように、この「太陽のない街」の八百屋も、酒屋も、乾物屋も、駄菓子屋も、凡ゆる日用品店、食糧品店の商品が、殆んど空らッぽになっていた。景気のいい菜っ葉の屑や、罐詰の空罐が、千川どぶの棒杭にひっかからなくなったように、彼等小商人達は、市場から、問屋から、河岸から、それらの商品を

たった一つも仕入れることが出来なくなっていた。会社の汽笛が、その長屋の隅々まで、響きわたらなくなったことは、この「谷底の街」の動脈が切断されたことを実証したことであった。疲労した巨大な河馬のように横たわった大工場は、火の消えた鎔鉱炉よりも無惨に、冷気の底に、蹲くまっていた。

小商人達は、狼狽した。彼等が、代表をつくり、委員会を組織して、各方面に争議の調停方を懇願し始めるまでには、多くの徒労と滑稽な激論が費された揚句であった。

彼等は悲惨にも彼等自身を「中立」と信じるところに、彼等の「滑稽な激論」が発生した。彼等は、区の有志を動かし、市の名誉職を訪問して窮状を愬えた。彼等は云った。——あっしたちゃあ、余儀なく、争議団と一緒に、心中しなきあなんねえ、羽目になっとります——。

だが、この小商人達の代表に、歎願された区の名誉職達は、畢竟は、会社の間接的な傭人にしか過ぎなかった。愛すべき小商人達が、この争議に対して「中立」として自己の立場を信じたにも拘らず、この厳正なる批評者、区の有志、市の名誉職達は、より判然と、「階級意識」に目覚めて居り、己れがその孰れに就くべきかを知っていた。

表通りに空店が出来始めた。電燈は疎らになり、闇がより広く空間を占領した。怪しげな界隈のカフエーや酒場へ、夜だけ出掛けて行って、朝方、青い顔をして帰って来る娘たちが、メッキリ数を増した。

——まあ爺さん、短気なことは止しなせえ、なあに、今日、明日にゃ戻って来るさ、泥棒火つけした訳じゃねえし——

越後訛りの除れない隣りのお内儀が、やっと宥めて、病人を寝床に追い込んだ。

彼女は一年おきに赤ン坊を産んだ。栄養の足りない赤ン坊は、彼女のはだけた懐で、眼玉を光らして、泣き声すら滅多にたてなかった。

——だけんど爺さん、こう長びいちゃあ、辛れえもんだな——いい加減、会社も屁古垂れねえかなあ——。

病人は、慄えつく歯の根を喰いしばって、寝床の中で、枕に獅がみついている——子供二人をつれて、このお内儀は、おでん売りに出掛けた。言葉がガサツなように、身体も頑丈なお内儀だった。

——だって、会社は屁古垂れねえさ——。どんどん職工を入れてるんだから——

病人は、ついウッカリ口を辷らした。

——え？

お内儀は聞き咎めて、病人の顔を見た。彼は少し慌て気味に云った。

——うゝん、真実だか嘘だか知らねえが——俺ァ、向う坂の吉田さんに聞いたんだ——。

が、それはなお拙かった。病父はお内儀の雪国育ちの色白の、しゃくれた顔色を窺った。

──吉田さんを、爺さん知ってるけえ？
お内儀は、持って来てくれた炭火のちょっぴりを、じゅうのうごと其処へおいて訊いた。
──あ、俺らの職長だったんだ──
「へえ」と云った顔をして、お内儀は黙り込んだ。病父は心の底で呟いた。──このお内儀も、あんな本を読んだんだな──
──だってお爺さん、会社に職工が入るのを見た者があるけえ？──
尻尾を掴んでお内儀は離さなかった。
──そうじゃねえ、争議団へは判らぬように、荷物のように包んでしまって、車力で運ぶっていうことだ。
戸外に霙がとんで、とり残された風だけが時折、引立窓の羽目板を揺すぶった。
──そう云えば？
お内儀は、思い当る節が多かった。向い側の、お辰さんとこの亭主も、二三日以前から顔見せねえし、隣りの春坊も、昨夜は帰って来た様子がなかった。ぶるっと来る肌寒を、赤ン坊の頭の上から、着物の襟を掻い寄せてから、急いで炭火を小さい陶火鉢にうつした。
──まあ爺さん、短気起さねえで、あとで御飯が出来たら持って来るから──。
溝板を踏んで、お内儀はそのまま帰った。
この三番長屋を突き抜けた表通りに、一台の荷車をおいて用心深い足どりで露地を入って来た屑屋があった。スッポリ顔まで黒い襟巻でかくして、一人の印袢纏を着た男を伴れていた。やがて彼等は高枝達の住んでいる長屋の一番とっつきの家へ入って行ったが、十分も経たないうちに、大きな蒲団包をしょって出て来た。
屑屋は、荷車がその蒲団包を載っけて、会社の裏門近く行き着くまで見送ると、今度は大胆に一人でまた引き返して、三番長屋と四番長屋の露地へ入って行った。
二尺足らずの狭い露地を少し進んで行ったとき、屑屋はどきッとして足を止めた。
出逢い頭に、つい眼の前へ、二人の少年が、これも豚いたように立ち竦んでいる──殆んど眼玉しか出てない屑屋の顔を、この少年達は、一目でそれと知ったのだ！
絡んだ六つの眼が、激しく火花を散らした。一人は不恰好に頭の太かい少年、一人は背のひょろ高い唇の厚い少年だった。彼等は斥候であった。しかし、屑屋は彼等の職長であった。面と顔突き合せれば、彼等は何となく気が臆した。
──三公？
屑屋は、頭の太かい少年の名を呼んだ。屑屋はこの少年達を判断しかねた。眼色の動きで、屑屋の取るべき態度はすぐ決せねばならなかった。
息を凝らして無気味な沈黙があった。屑屋はだんだんこの少年達に自信が出て来た、ホンの鼻汁たらッしから工場

での面倒を見てやってる筈である。彼はのしかかって、この少年達を生捕ろうと決心した。

――手前ら、餓鬼の癖に、詰らない真似しやがって、恩を忘れたか――。

――恩？――釘付けにされて突っ立っている少年達の眼は、そのとき不意と見合わされた。三公は、その汚れたジャケツの襟の上に、首を真直ぐに立てて、屑屋の顔を見返した。その咄嗟、――馬鹿野郎ッ――。

同時に、二人の少年の口から、この悪口が飛び出した。そしてすぐ踵を返すと、二人の少年は一散に、向う露地へ消えてしまった。

云い知れない恐怖が、屑屋の足許から湧いて来た。彼は、首をすくめると急に後戻りして表通りを急ぎ足に行き過ぎた。

× × ×

こんな奇妙な場面があってから、二時間ばかり経った後であった。

植物園の坂を、向うの電車通りへ上りきった十字路に、先刻の屑屋が一人で立っている。傍らに、見覚えのある荷車がおかれて、印袢纒の姿は見えなかった。

正午下りの植物園の樹木は、風に動かされて、その坊主頭を神経質にふるわしていた。真向うは、聾唖学校の煉瓦塀が陰気なバックをつくり、十字路といっても往来は、殆んど指ヶ谷町と大同印刷の正門への一筋が多かった。

印袢纒は、まだ蒲団の荷物を担いで来なかった。屑屋は、煉瓦塀のあたりを小刻みに往ったり来たりした。

そのとき、向うの電車通りから来る坂を上って来たオーバに茶色の襟巻を深くした青年があった。尤もそれは可なり多い通行人の一人であるだけに、屑屋は、別にその青年に特別の注意を払う理由はなかった。

黒オーバはかくしに手を突っ込んで、俯向き加減に急ぎ足で屑屋の間近まで来てから、一寸立ち止ってハンカチを取り出すと鼻汁をかんだ。

そして、また以前の姿勢にかえると、通行人にまじって屑屋の前まで進んで来た。――自転車が駈け抜け、荷馬車が向うの坂を下って来た。女、子供、洋服、学生――。

青年は、荷馬車を避けると見せて、屑屋にピッタリと寄り添った。瞬間、青年のかくしに突っ込んでいた手がサッと動いた。

――犬奴ッ！

青年の口を衝いて、罵声が飛び出すと同時に突然、屑屋は、声を立てずに後へ蹣めいて尻餅ついた。

……植物園の樹木が一しきり揺れて、遠くの電車の軋る音を、風が運んで来た。学生、子供、犬、女、自転車、洋服――。

屑屋は片手で脇腹を押えて嗄れた声で喚めいた――や、やられたッ。早く、巡査を。

しかし、通行人たちが、倒れた屑屋の傍に集まったときは、さっきの青年はとっくに姿を消していた。

（一九二九年九月「戦旗」）

反逆の呂律

武田麟太郎

1

囚衣を脱ぐ。しかし、着るものがなかった。連れて来られた時は木綿縞の袷だった。八月の炎天の下をそれでは歩けないだろう。考えて襦袢一枚になった。履きものには三銭の藁草履を買った。

仙吉はこうして午前五時、S監獄の小門から出た。犢なので振りかえらずに歩いて行った。畠と畠との間の白い道がステーションまで続いている。彼のうしろで次第に高いコンクリートの塀を持った監獄が遠くなった。

汽車に乗るまでには時間があった。三カ月の服役の報酬としての四円十銭のうちから、駅前で大福餅を食った。昨夜のらしく、餡は饐えていた。だが彼は頰を盛に動かし、茶をのんでは、咽喉骨をゴクリゴクリとさせた。

汽車を下りてから、村まではなかなか遠い。夕方の燈が点く。稲の葉の香が際立って鼻をついて来た。野良帰りには不思議に逢わなかった。唐もろこしに囲まれた姪の家まで来た。背後の山はもう真黒に暮れていた。

姪の家では縁側で彼の娘のウメ子が泣いていた。部屋の中の黄色い電燈を逆に受けて、ウメ子はミジメに見られた。ケチン坊の姪の扱い方が想われた。仙吉はトッサに提げて来た袷を投げて、娘を片手で抱いた。びっくりして、もっと泣き出した。

夜更けるまで、姪夫婦と諍った。姪は養育費を一円五十銭よこせと、云った。仙吉はアホコケと云った。一ヵ月三十銭にしても、一円もかかるまい、とどなった。そして脂臭い一円札を投げた。姪はそれを拾って、いつも腹にくくりつけてある胴巻の中にしまいこんだ。

朝になれば如何しよう。仙吉にはもう耕す土地はなかった。小屋もとりあげられた。村の旦那と争うものは、いつも、このような結果になるのだ。村に居られないものは、O市に出るよりしかたがなかった。都会へは四方からいろんな人が集って来る。そして、仙吉の考えに従えば、「栄エウに暮せるのだ」何をコセコセした村でなんかくすぼってることがあろうぞ。

朝になった。仙吉は去年のまま洗ってないので、黄色くなっている浴衣を着た。その上に、黒帯でウメ子を背負った。

「一生、こんな村には帰って来んぞ」

姪はかまどの煙の中から、どなり返した。

「さっさと失せろ！　顔見るのもイヤじゃ」

駐在所では仙吉の帰ったのを知っていた。駐在所は地主の家に怒鳴りこんだ仙吉を取り押える際に、彼のために、池ん中へ投げられた。そのしかえしは、彼を三ヵ月の間、S監獄に送ったのでは足りなかった。村の若い連中をそそのかした。あんな旦那にタテつく社会主義の野郎は思い切りこらしめてやらにゃならん。村の若い連中は仙吉を待ち伏せした。

池の側で仙吉は襲われた。まだ朝の気が池の上をはっていた。ウメ子は柿の木の下に投げおろされた。草の露で彼女は濡れた。幾度も若者たちは怒声を発した。その度毎に仙吉の苦しそうな呻き声がきかれた。池の水は多くの波紋を作って揺れた。若者たちが去ると仙吉は柿の木の下に来た。浴衣からは水が滴り、真青な頬からワナワナ震える唇にかけて、小さい浮草が一面にくっついていた。裸体になり、娘の横に彼も倒れた。そして、親と子は列んで泣きだした。

2

この小さい文章の書き手である武田はウメ子から、以上の話をきかされた。しかし、それは彼女がやっと四歳の時

だ。だから、以上は彼女が実見したのではないだろう。父の仙吉が酔っぱらって、幾度も彼女に話したのが、はっきりとした形を彼女の頭の中に作ったのにちがいない。彼らはO市へ出て来た。そして、それから十五年も経つ。十五年と云う年月は貧乏人のところでは色んな事件を起させるに十分だ。しかし、くわしいことは貧乏人である読者の想像に委せて、物語に必要な点だけを、書き抜こう。ウメ子に語った通りに。

3

仙吉は色んな職業の中を転がった。最初、車夫をした。町の道すじもはっきり知らなかった頃だ。脚を悪くして稼いだ。すると、警察から親方のところへ来た。村で小作料のことで地主と争ったことのために、彼は「社会主義者」の札をつけられていた。親方は曳き子の仙吉を逐う決心をした。その夜、仙吉はやっと遊廓へ行く客を得て走った。冴えた霜夜であった。二十銭を受取って帰った。遅い夕食として夜泣きうどんを食おうとすると、確かにどんぶりの中へ入れた金がなかった。仙吉は二時すぎの橋の上から、暗い川水を眺め、暫くは動けなかった。欄干には霜が白い。親方の二階に帰って来、すでに寝ているウメ子の横に、空腹の仙吉は眠った。明日出て行くことを宣言されるのも知らずに。

それから市の塵芥人夫になって悪臭を頭に被った。帰って来るとウメ子はそれを玩んだ。オイチニの薬売りになって手風琴をならして歩いた。ブウブウと鳴るのだ。運河から荷を揚げて倉庫へ運ぶ人夫になった。重い梱を肩にしてうつむき加減に搬んでいる仙吉の眼の下に大きな手がその日の給料をのせてさし出された。驚いて梱を下し、肩あての布で汗をふきながら見ると、監督の男だ。仕事をやめて出て行けと云うのである。ウメ子はまばらに草の生えている川べりで、云いわけをしている父の姿を見ていた。Sの歓楽場が計画された。仙吉は土方になった。秋の空の下をトロッコに土をのせて走る。請負人は「なに、前科者でも、主義者でもかまうもんか。そんなこと気にせいで働け、働け。悪いようにはせん」と云った。しかし、S歓楽場の建設は中止になり、請負人は使用人に賃銀を払わずに逃亡した。ウメ子は七歳になり、学校へ行かねばならなかった。

いつも仙吉には肩書きがついて廻った。何故か主義者なのである。人民保護の巡査を×って前科一犯であった。すると、次第に彼も兇暴になって来た。歯には歯を以て酬いよ。待遇されるところを以て返礼しようと彼は考え出した。少し金がはいると酒をのんだ。のまずにすませないのだ。そして地主と警察をののしった。貧乏な生活からして金持の悪口を云わずにはおられなかった。だが、そんな時の、マジメに聞いている相手はいつもウメ子ひとりだ。小

さい彼女はダマッて父の前に坐っていた。
小学校に通いだした、ある秋の日、ウメ子は朝、出るとすぐ帰って来た。その頃、仙吉はペンキ屋に雇われていた。彼は百姓生れにも似ず筆蹟がよかった。それが役に立ったのだ。ウメ子の姿を認めると大きな看板を書いていた仙吉は梯子の上からどなった。「どうした、もう学校しもたのか」すると、ウメ子は説明した。平常通り学校へ出ると先生に叱られた。袴をはいて来なかったと云うので。今日は天長節であった。「先生は不忠者や云いはってん」仙吉は梯子の上から下りて来た。「何ぬかす。これから行ってその先生に云うてやる。貧乏人×××も糞もあるものか。袴やええ着物がいるのやったら買うて寄こせ云うたる」そしてそう云った。結果は失業であった。ウメ子は学校から極端にいじめられた。

二年生になる頃から、同居しているお神さんに教えられて、風船を作ることになった。赤、紫、黄、青、白五色の花瓣のような紙片をチャブ合の上にのせた。毎日糊をこしらえてそれを作った。そして夜になると、お神さんのこしらえたのと一緒に紺の風呂敷に包んで坂を越えて遠い道を歩き、問屋町の風船屋へ持って行った。しかし、八つや九つの女の子は風船を作るより、それで遊んでいるのが普通である。

それからセルロイド櫛の飾り付けもやった。これはアラビヤ糊と云う西洋の糊を使った。小さい金具の飾りを「ビンセット」で挾むのだ。この方がダメになると袋の紐附けをやった。仙吉が失職すると、彼もこのあまり金にならない仕事をしている少女の手伝いをした。

4

少し手間どって来た。簡単に書こう。こんな状態のラレッは読者には余り興味あるものではないから。とにかく以上のような父親とその生活の感化のもとに彼女は次第に反逆の呂律をおぼえたのだ。このロレツがしっかりとした言葉になったのは、彼女が燐寸工場の女工になってからであったが。

5

歯ブラシにする牛の骨を柔かくするために、漬けた桶が幾つも並んでいる。牛骨は黄色くて、臭い。仙吉はそこで働きだした。荒削部だ。白いザラザラの粉を頭から肩にかぶった。新聞に労働争議の記事が多くのった年だった。職人（仙吉は労働者のことをこう云った）たちは毎日熱心にこの記事を読んだ。ひる休みにもそのことばかりが話の種になった。「日給を二十銭あげい云うて、E鋳物工場がストライキやっとる。うちもどうしても二十銭や三十銭はあげて貰わんならんやないか」有志のものは寄りあって、同

じ境遇である他の工場の労働者のストライキがどうして起るのかを研究しはじめた結果、この工場でもストライキにはいることになった。「表門だけでなく、裏門をこしらえろ。多くの労働者はムダな廻り道をしなければならぬから」と云う要求まで出された。最初は怠業から始めた。そして、労働組合友愛会の支部に応援を求めた。「主義者」の仙吉には初めての経験のストライキであった。彼は勇敢に戦った。争議は永かった。幾度も彼はひっぱられた。それでも彼は「敵打ち」のつもりで、皆の先頭に立ってひるまなかった。要求の大半は通り、解決した。

仙吉は工場分会長になった。彼は子供のように得意になった。それから比較的落ちついた生活が続く。ガラス問屋と下駄屋との間の露路に平家を一軒借りた。そして、ウメ子も燐寸工場に働くまでに成長した。スパイはつねに出入りしだした。しかし、今は仙吉に少しばかりの畏敬の念を持っているように見られた。彼らは小娘のウメ子にふざけたり、彼と冗談を云ったりした。

6

日本の労働運動は次第に自然発生的なものから意識的なものへと移って行った。今までの運動は建て直された。指導者は色々とムッカシイ問題について考えねばならないのだ。一回のストライキ以来、平穏を存続して来たMハブラシ工場の組合分会の中にも、仙吉に云わせると、小ムッカシイ理窟を云う若いやつが出て来た。仙吉には「かなわん」ことであった。だが「あのストライキの時の俺を忘れて貰っては困る」と彼は云った。若い連中はこの先輩にも別に遠慮しなかった。俺は引退しよう。そして彼は平の組合員になった。何だか、彼には精確な理論によって動いたり、規律を守って行くのが窮屈に思われたのだ。もっと、お祭り騒ぎのように反抗したかったのだ。

7

汚い溝川が流れている。小さい木橋がその間に架っていた。東側に古い警察署があった。川を越えて、丁度その向い側に、代書屋が四五軒並んでいた。そのうちに、しもた屋の店さきを借りて、仙吉は坐っている。彼はいつの間にか代書人になっているのだ。へんに心易くなったスパイにでも便宜を計って貰ったにちがいない。筆蹟のいい彼は、客を待って、届書や証書類の代書をやっていた。夕方までそこにいて、それから、ガラス屑屋と下駄屋との間の家へ帰って行った。時々、家の中は電燈もついていなく、夕飯もできていなかった。燐寸工場に出ているウメ子は娘らしくなく、退け時が来ても帰って来ぬことがあったのだ。今でも定期的にたずねて来る藤本というスパイは、代書店にいる仙吉のところへ来て、四方山話をした後、

「おウメちゃんにも気をつけた方がええぜ。蟲がつくかも分らへんからな」と云った。

蟲？　ウメ子のところへはよく会社の若い男が遊びに来た。仙吉は彼を相手に「主義者」としてのかつての自分を愉快にはなすことが度々あった。「今の若いやつの運動見てられへん。危かしうて」と云った。そう云う風に語ったり毎日々々が安穏に暮せると、若い連中の組織的な力に嫌悪の念さえ湧いて来るのだ。これは不思議な現象であった。――あの遊びに来る若い男が蟲なのであろうか。――彼は考える。

ちょうどそんな時に煉瓦塀にもたれて、その蟲である若い男がウメ子が工場から出て来るのを待っていた。彼らは色々と話すことがあった。燐寸会社の古い頽れた煉瓦塀に沿いながら、彼らは歩いて行った。まだ寒い頃だ。風が吹いて、ウメ子の黒い肩掛がヒラヒラした。話のとぎれた時、突然、ウメ子は云った。

「これ逢い引き云うもんちがう？　わてら何やら活動にあるような恋人どうし見たいなわ」

それから二人は若々しく笑いだした。その夜、晩く、彼女は帰って来た。頰ぺたと右肩に糊が冷たそうに、硬ばってくっついていた。手をもむとボリボリと糊が垢と一しょに黒くなってこぼれた。

――ポスターを張りに行った二人であった。議会解散要求のポスターは風がきついので張りにくかった。糊はいくども吹き離された。若者は外套をひろげて風を防いだ。小さいウメ子はポスターと一しょに、それに包まれた。

「ほんまに、わてら恋人どうし見たいなわ。恋てきっとこんなものやろな」と云った。

8

夏近く、父親はことごとに娘にあたった。彼はあのストライキの思い出だけに生きていた。遊びに来る若者が、ウメ子を悪い方に誘惑しているような気がしてならなかった。悪い方――あの最近の労働運動のやり方を意味していた。おかしい程、反動し、老いが表情に現れ出した仙吉の顔を、彼女はジッと見た。

「そんなことあれしまへん。あれしまへん」

打消さねば、川一つのあちらからよく訪ねて来る藤本にどんなことを父が云うか分らない。ウメ子はそんな心づかいをしなければならないのが情なかった。反逆の呂律の手ほどきをしてくれたのはこの父ではなかったか。その頃まかれた種は芽生えようとしている。燐寸工場で刷板部の勇敢な女工の組織を彼女が中心になって始めていたのだ。

暮れ方の色が濃くなって来た。溝川はブップッと泡立ち、空はドンヨリと曇っていた。仙吉が店をしまって帰ろうとすると依頼人が来た。建築の届書を書いてやり、一枚

九銭の要求をした。依頼人はのんきにも判を忘れていた。彼は慌てて取りに行った。仙吉は店じまいをし帰るしたくをした。机の上に白い届書をのせてボンヤリと依頼人の帰って来るのを待っていた。軒に蚊がうなっている。その時、川向うの南の方から小柄な女が背広二人にひきずられるようにやって来た。無感覚に眺めていた仙吉の眼は突然ギラとして、腰をあげた。不思議な光景であった。ウメ子がスパイに捕まって！　彼女は川一つ越して、父の立姿を認めた。そして一つおじぎをし、警察の中に消えた。彼はキョトンとして了った。彼の本心は娘は無キズ者にして置きたかったのだ。だが、蟲がついた。蟲が——「お頼みします。お頼みします」

その時、帰って来た依頼人は彼のうしろから判をさし出しながら幾度も繰りかえして云った。（一九二九年九月朝）

（一九二九年十月「1929」）

セムガ（鮭）

前田河広一郎

1

寒むい。

髯だらけなロシア人が、降参するように両手を挙げて、丘のむこうへあらわれた。

つゞいて、三十疋ほどの犬どもが、灰色な列をつくって、海へ吠え立てた。

犬も、その主人公も、長い冬籠りから、相貌がよく似ていた。

ロシア人は、鉄具を重く墜したように、犬どもを呶鳴りつけた。

百七十人の日本人は、一団になって、寂寞とした土地へ、歩をすすめた。古腐った一軒の小舎が、丘のわきにある。新しいゴム長が、ぎこちなく鳴った。

丘のてっぺんへ来ると、百七十人のうちから、一番背の高い男が、二三歩前へ出た。この男は、太い樫の棒を突き、犬の毛皮の外套を着ていた。彼は、片手を挙げて、
「ジイマ――ドロゴ・スパシェボー！」
というような、異様な言葉を叫んだ。ロシア語にちがいない。
百六十九人の日本人は、眼を瞠って、突然自分達の仲間から傑出したこの人物の行動に注意した。今まで「船頭」と呼んだ、のんきそうな外ッ歯の四十男であった。
ロシア人は、そのロシア語を聴かなかった。彼は言葉を忘れた人間のようにむやみに笑った。涙が見えるような笑いであった。次には、両手を蟹のようにひろげると、対手に組みついた。そして、又笑った。組みつかれた方は、日本人らしく、横向きに苦笑すると、二人のまわりに吠え狂う犬どもを軟かな長靴で蹴る真似をした。
「ロスケだな……？」
「喧嘩か――喧嘩じゃあるめえ。」
「番人だよ――嬉しがってやがる、そうだろうよ、九カ月も、向うの小舎に番をしてるんだから、な！」
あとから踵いて行った連中は、煙草くさい口で、囁き合った。
と、ロシア人は、気狂いのように二三度腕を振り廻して、何かを一同へ向って告げた。それから船頭が無言でポケットへ押込んだ物を、外套の上から軽く叩いて、こんな言葉で、彼れの手を握った。
「ダ、ダ、ダ！　ド・スウェダーニア！　パイジョイエ・ペトロパウロスク」
そこで、もう一度、犬どもを叱ると、髯の中でにやりとして、出て来た方へ取って返えした。枯草の平原のむこうに、骸骨のように曝された、低い小舎がぽっつり立っている。いつの間にか、犬どもも大地へ吸い込まれたように、その方へ姿を消していた。
百七十人の日本人は、しばらく無言で立っていた。――ロシア人の碧い眼と、身振りとが、幻覚のように、彼等の頭脳に刻まれた。ダ、ダ、ダ……一体、彼は、何を話したのだろう？
そこに、妙な気持のとぎれが生じた。
この土地には、ひとりでに、人間を黙らせる何かがあるにちがいない。悲しみでもない。笑いでもない。それとて、絶望でもない。そういう人間の営む心理活動を、またはっきりと当人さえわからぬうちに吸い取って、何処かへ運んで行ってしまう。重力のない圧迫のようなものだ。それは、生きていて、同時に、死を味わっているような気持――錯覚である。
「――ここが、ロシアかね？」
一人の男が、先刻から口をあけ放っているような声で云った。
空は鈍い刃物のように光っていた。四辺には、白々とし

た、空っぽな土地が、むやみに拡がっていた。よくもこんな平らに拡がっているもんだ、と思わせるほど、無限の平地が続いた。その上に木片や、枯れ草や、曝された丸太棒などが、洪水のあとのように、淋しく光った。土地の涯に山脈があった。山々の上には、冴えた氷の塊がしがみついている。それが、非常に遠いようでも、亦、わりに近いようでもあった。平原のどこから山脈になるのかがはっきりしないからだ。このどこまでも拡がっている恐ろしい土地の氾濫を、二つの単調に動くものが堰き留めていた、一つは黒い海で、その上には、百七十人をここへ運んで来た第三函館丸が、盥の中のボートのように泛んでいた。渚には、磯舟や、まだ水に漬からぬ川崎船などが、ごたごた列んでいる。もう一つのものは、北と南に彎曲した海岸線を押包んでいる、冷めたそうな濃霧(ガス)であった。この濃霧は、氷よりも乾き、砂片よりも白く、空漠とした厚みをもって、それ以外の地域を人間に見せまいとして地平をふさいでいるのだ。そして、この限られた空間には、木も、青い物も、物音も、時間も、生命ですらも、すっかり根絶やしに逢ったような、深い、冷酷で残忍な沈黙の層が漲っていた。

「ここは、露領カムチャッカ、と云うのさ！」

しばらく経ってから、思い出したように、一人の老人が、誰かの言葉を訂正した。惧れに慄えたような声であった。

それにつづいて——

「こんな寒いとこたァ思わなかったが」

「鮭を取る会社は、何処にあるのかね？」

「今夜は何処へ寝るんだね、一体？」

「何時頃かな、今？——ここにァ太陽さまなんてものァないのか？」

「これで、一体全体、どこから魚ァ捕るんですかね？」

などと、各自が、遠い記憶から探ぐり出すように話しはじめた。だが、その言葉のいずれもは、極北の単純な自然に対する原始的な疑惑であるかのように、誰によっても答えられない質問に終っていた。

「ほおう——ッ！」

突然、誰か、剽軽な男が、山の方を向いて、口に両手をあてがいながら、長く声を曳いた。

「さァ、みんな、荷物を小舎へ入れて、列を組むんだ！ 列だ！ 列を！」

船頭は、反射的にこう叫んで、砂の中へ樫の棒をぐいと突立てた。遠くの方のこだまの音が、彼れの鋭げ鋭げした命令で、ぎざぎざに截られてしまった。

この男の樫の棒は、だてや嚇かしに地上に突立てられたものではなかった。何となれば予めの約束でもあったかのように、彼れの慣った動作の結果、そこに、百六十九人の間から、六人の「小頭」が、忽然扮装を脱いだ役者のように、人達の前に出現したから。——そして、即座にその一人は、副船頭、他は人夫廻しという名で呼ばれた。これら七人の「幹部」達は、ほかの誰もが気づかないうちに、急

に残忍な表情を顔に出して、軍隊の払い下げに着膨れて、家鴨のようにまごまごしている連中を、片っぱしから叱り飛ばすと、三つの大まかな組に分離させていた。

「これから、各自の荷物を置く。組がきまったら一と組は、船から、荷役だ！　片方は小屋掛けに従事する。もう一と組は、砂へ埋めてある釜やボイラーを掘り出すんだ！もう――いいかね、みんな、今日の働き振りで、この夏一杯の成績もわかると云うもんだ。それが、みなさんの賞与に関係することも無論の話だが。」

嘲けるようにこう云った船頭は、寒むそうに露出している外ッ歯を、動物が牙を隠すように、陰険に上唇で包んで、百六十三人の船から上陸ったばかりの労働者を、じろりと一と亘り睨め廻わした。

こうして、カムチャッカ第一日の労働がはじまる――。

2

百六十三人は、大きい地滑べりにあわを食った村のように働いた。

十二昼夜も塩叺の上へ積み込まれて、しけと濃霧の下に、窖の馬鈴薯のような生活をして来た彼等が、暗黒と粗食と嘔吐と炭酸ガスと悪臭とから一歩外へ出ると、もう慈悲も容赦もない「契約」がピストルや棍棒を持った幹部の形で、息もつかせぬ激労の中へ、彼等を攤き込むのであった。

冬の間かこってあった六艘の川崎船が、砂や古蓆の下から掘り起こされた。本船のハッチ・カヴァは撥ねのけられて、ウィンチが悪魔のように高笑った。水夫達の罵倒の下で、動揺する甲板の上に、無数の箱や俵や叺やズックの袋が、俄か仕立の、へろへろの沖仲仕の頭上にうず高く盛り上げられた。

満潮で本船は鯨のように、人間を弾き返えす。伝馬は、子供が酔ったようにくらくらする。波濤は、すべての物を顛倒させながら、高いところの物を急に谷底へ蹴墜す。無力な、泣くような、死にもの狂いな漁夫達の掛声だけが、海の上に反響する。たまに、口惜しそうに、せっぱつまった声で笑うものもある。

「うわッ、滑りやがったッ！」

水音といっしょに、塩叺が白い気泡を散らして、見る見る蒼黝い水面に閉じ籠められてしまう。叺の下に、田中という秋田のものがいた筈だ。叺が沈みきった頃に、海豹のように、顔を上へ向けた人間が、だんだん大きく海の表面へ向って手足をもがいて来るのが見えた。引上げる。浜で古蓆を燃やした火にやっと正気づくと、さんざんに船頭に毒づかれる。田中は、ゴム長を逆さにしながら、それでも敗け惜しみを云う。

「あんな冷めてえ水さ今まで一度だって這入ったことはねえしは。体ァしびれるからは。」

米俵といっしょに、どしんどしんと人間がぶっ倒れる。四十男が、もくぞう蟹のような髯を生やしながら、俵の下でぼろぼろと涙をこぼしている。
「迚も、体がつづかねえや……」
叺を下へ置いた二人の男が、水っぽい眼をして丘の下でお互を愍み合う。
「地獄みてえだよ」
そこへ三人目が、水母のように、足から先きに壊れて来る。
「荷役の時が大切だよ。今日なまける奴ァ、ちゃんと親方に睨まれるぜ」
親切ごかしに、人夫廻しの老人が、棒の先きで砂を敲きながら叱りつける。
「親方、何時ですかね？」
通りすがりの船頭を掴まえて、こう訊くものがある。腕時計の手前、時間を教えぬ わけにも行かずそうかと云って、高声で告げるわけにも行かぬ彼は、咎めるように対手を見据えたのち、低い呻り声を挙げながら、右の腕の首をちらと捲くった。
「七時——ほう！　晩の七時だ！」
その男の驚きを、船頭は威嚇するように、あとから追い立てる。
「貴様、そのストーヴは小舎へ運ぶんだぞ！」
午後の七時で、うす曇りながら、太陽の見当は、内地の三四時頃の場所にあった。山脈の氷とその白っぽい円光が、いっしょになるまでには、五六尺の距離があるのだ。
「おい、もう晩の七時だよ！」
「なに、七時だ？」
「七時よ、夜の七時さ！　道理で腹が減ったと思った」
この囁きが、浜から伝馬へ、そこから逆に渚へ、丘の上へ、小舎の中までも、いつの間にかひろまっていた。
小舎の古蓆や板間を掃除していた三人の若い女達は、かわるがわる、入口の蓆の間から首を出して、夜にならない午後七時の気象を観測した。だらりと垂れた、入口の蓆の前で、船から来る食料品を選り分けていた、ほかの五人の女達は、出稼ぎに慣れた女漁夫なので、若い女を嚇すように、聴こえよがしにべちゃついた。
「ああここは夜ちうものはねえ国だよ」
「寝るのは、ほんの一刻だからな」
「ここじゃ、一年に二つ年齢を取ることさ！」
一方、丘の上では、不思議な採掘が行われていた。
羅紗の外套にくるまった副船頭は、体操の教員みたいに小舎の西隅の柱から歩み出しながら、
「ひい、ふう、みい、よう——」
と口の中で呟き、膝を直角に折って、砂の上を南へ進んで行った。
一団の労働者が、シャベルや鍬を持って、彼れのあとからぞろぞろ跟いて行く。

「よし、二十五だ。ここを掘れ！」
この歩行の数によって、十五人ほどの腕が、がむしゃらに大地に対して活動を開始する。しばらく土層を揺がす地響きと、苦るしそうな呼吸と、無限に滴る汗とがある。
「なに、無い？——そんな筈ァ無いがな。よし、そんじゃここを掘れ！」
副船頭の記憶が正確であったとすれば、たしかに釜やボイラーが、一年間にもう五歩ほど南へ移って行ったものだろう。
「釜が出ねえと、みんなめしが食えねえぞ！」
掘り方が疲れると、彼はこう原始的な食慾を唆る。そこで、シャベルが鏡のように光るまで、砂を削っては掘り、削っては掘り出す。——ガチリ！　釜ではない。罐詰部の大釜だ！
再び、副船頭は、小舎を基点として、稍西南に角度を保って膝を折りながら、
「ひい、ふう、みい……」を繰返えした。
そして、その刹那、午後七時説が、誰の耳からともなく一同の中に伝わった。
「七時だ？」
聞咎めるように、細い眼を眼鏡の下から挙げた、肥った青年は、自分の手首に食い込んでいる時計をじっと見返えした。
「嘘つけ。八時十五分前だよ。こりゃ、先刻、針を船で合わせたんだ、まちがいはない」
こうきっぱり云うと、手にしたシャベルを孔の中へ捨てたまま、彼は立ちあがった。
「おい、晩の八時か？」
砂との格闘に夢中になっていたほかのものも、一斉に顔を挙げた。時間について、労働者は敏感だ。
「うむ、八時十五分前だ」
青年は、鳥打の廂を、三日月形の額の上へ撥ねかえして、永久に足踏みしている副船頭の方へ、義憤を感じたように、がつがつ歩いて行った。
「馬鹿々々しいッ、おいらァ孔掘りにカムチャッカくんだりまで来たんじゃねえや！」
もう一人の頬冠りが鍬をずでんと土の上へ投り出した。
鍬は、土を吐きながら宙返えった。
「夜の八時まで働かせる奴があるもんか！」
二人が三人、四人になった。もう仕事終いかと思って、手拭で土をはたきながら、にたにたして這いあがる男もあった。
副船頭は、小舎の南隅の柱から、十二歩目で、青年によってその軍隊式の歩調を遮ぎられた。
「親方、もう八時なんですが——腹ァ減ってしようがありませんよ。」
しかし、彼は自信を持つもののように歩みつづけた。
「十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二

十一、二十二、二十三――」
そこで、彼は手にした棒を、心持、顔を赧らめながら砂へ突刺すと、はじめて、無断で労役を放擲した、坊ちゃん面の鳥打へ振り向いた。
「こいつ、書生ッぽうめ！」
労働者上りの本能から、彼は眼鏡というものが殊の外嫌いであった。
「八時がどうしたい？」
彼は唾を飛ばすように言葉を切った。彼れの軍隊式に歩るいた十歩の距離を、青年は刻み足で近づいた。
「無茶じゃありませんか！　内地だって、八時になりァ晩めしぐらいは食わせまさァね。僕達ァ腹が減って、孔どころじゃないんですよ！」
鳥打は、もう再び時計の存在を対手に知らせながら、前よりはすこし和かに切り出した。副船頭は小さな瘤のある、円々とした脂鼻に、肉慾的なくびれを深めて笑った。
「――だからよ、俺あ早く釜を掘らねえと、めしにありつけないと、先刻から云ってるでねえか。」
「しかし、ですね」青年は、自分のまわりにうっかり聚って来ている仲間を意識した。その意識は、彼をもう一歩だけ対手に肉迫させた。
「釜を掘るには力が要るでしょう、そこで、めしを食わなけりゃ力が出ないという理窟になりませんか。それに時間が時間ですよ。いくら北極だからって、時計を一時間も遅らして置いて、労働時間を胡麻化すのは非道いや。――何とかなりませんか、例えばですね、船から握り飯をとりよせるとか。」
副船頭は、この小肥りに肥った若い者の、どこからそういう理窟が出て来るのかを訝かるように、笑いつづけながら、その頭から爪先までをじろじろ眺めた。彼れの奇妙な笑いは、あまり永いこと持続されているので、今は、すこし無気味に、動物的にさえ見え出した。周囲の労働者達はあきらかに、窮地に追い込められた親方を見た。
青年は、すこし昂ぶった。彼は、鼻先で、せせら笑いながら、もう一度、腕時計に眼を遣った。
が、彼れの冷笑と、対手の痴呆的な笑いの延長とが結びついたときに、副船頭は窮地から猛獣のように弾ね返えっていた。
「待て、野郎、ふざけんなッ！『例えば』だって！　畜生ッ、ここで指図するんなァ、誰の役だと思ってけっかる！」
この奥州訛の勝った呶鳴り声は、空気枕を石畳の上で殴ぐったような響きと、仔犬そっくりな悲鳴とを伴って、浜の下までも、不穏な余韻を曳いた。
青年の眼鏡は、足元に二つに折れて、その持主は胃痙攣にかかったように、悶絶する手で腹腔を抱えた。
「この上生意気をぬかしたら、ぶち殺してすまうぞ！」
副船頭は、円るい鼻から荒い息を吐いた。

「どうした、青木――？」
突然、五六人の人間が、吃驚して飛び退いた。犬の毛皮の外套が、いつの間にか、群衆の中に立っていたからである。
「や、奥野さん、見ていましたか？……何、この書生っぽがね、いやに口幅ってえことを抜かしやがるんで、すこしばかり押らしていたところなんで。」
船頭は、かすかに頷いて見せた。
「これか？」
彼は、臂を伸ばして、青年の襟を掴むと、乾いた外ッ歯を舌で湿した。
「全く俺らを舐めてかかってやァからね、えげ癖になる！」
「そうか――見せ示めだ、やッちめえ！」
船頭は、凛とした声で云って、鳥打帽を突放した。副船頭は、それを荷物のように片手で支えた。
「よがすとも！」
先ず青年の鳥打が飛んだ。次には、体軀を三つに折った彼が、どさりと倒れて、したたかに頭蓋骨を大地へ撲った。倒れたと同時に熊のような青木の前半身が、それに向って突貫していて、左右から猛然と動き出した鉄桿とも思われる二本の腕は、殆ど無抵抗な対手の体に、べきべきと骨を鳴らせた。
「喧嘩だ、喧嘩だ！」
殺気立って渚から、砂地から、小舎の方から押寄せた群集は、油断なくその場を警戒している船頭のけはいに怖気がついて、仲へ割込もうともせずに、他人の肩越しに、或いは脚の間から、木偶人形同然の青年が、食肉獣のような壮漢に、血みどろな玩具にされるのを、わいわい云ってるより外はなかった。
「もう、いい、青木、それで沢山だ。その辺へ投っときゃ、独りで息を吹き返えすよ。さァ、みんな仕事に就いた！早くしねえと、何時まで経っても夕飯にならねえぞ！」
こう冷然と云い残した船頭は、勒かな靴音と共に、丘を急ぎ足で降りた。
「これが、この漁場の掟なんだぞ。悪るい事をする奴は、みんなこんだから――は。」
青木は、見てならぬ残忍なものを見たような群集に対して、勝ち誇った赭ら顔を向けた。
嫌な思いをした人達は、疲れた足を曳きずって、ぞろぞろと滑るように砂地の傾斜を下った。
「非道い！」
「あの田舎者、卑怯だなァ！」
跛を曳いたり、体軀の蕊を抜かれたように猫背になったりして行く荷役の連中は、海岸へ辿りつくと、ペッと砂の上へ唾を吐いた。新しく傭われた漁夫達はしばらく蒼い顔をして、深く考え込んでいた。
四五人の男と女とだけが、見るに見かねて、気絶している青年へ、小舎のバケツの水を掛けてやった。

そこへ、もう一度副船頭が、ずかずかと刻み足に近づいた。

驚いて逃げる小舎の前の人だかりを尻目にして、彼は、くたりとなっている青年の腕から、貝殻を剝ぐように、腕時計を毟り取ると、片脚を挙げて、それを二度に踏み砕いた。そして、魯鈍な微笑を含んで、それを耳へあてがって見て、はじめて満足したのか、毀れた機械を、正体のない持主の前へ、ぽいと投り出して行った。

3

荷役は、四日間続行された。

四日とは云うが、内地では、八日と云うべきであろう。この不思議な大陸の一角では、朝は午前二――三時から始まり、昼は午後十一時頃に終った。労働は、時間では計量されずに、暦の日数だけでかぞえられた。

船艙から、巨人のような腕でウィンチが掴み出すものを、手あたり次第に、伝馬で運んでは浜へ捨て、捨てては又漕ぎ戻っているうちに、漁夫達は、丸い、四角な、長方形な、重い、濡れた、各種の物体のけじめが見えなくなって、ただもう、貪婪な黒い船腹を空らにしてしまわねばならぬような狂人じみた作業の自然状態に捲き込まれ、五日目の昼汽船が、聞き覚えのある偏平ったい汽笛を残して、南の方へ帰ったあとには、こんなにも自分達はいろいろの貨物を運んだのかしら、と思って、「スタンダード石油会社」の箱や、味噌樽、醤油樽、漬物樽、米俵の山や、累々とした塩叺や、無数の空罐函や、莚の丘などを、舌を巻いて眺めるのであった。

それらは、不慣れな労働者があわてて築造したバリケードのように、彎曲した海岸線を遠くまで縁取った。

百七十人の日本人は、彼等を一と漁期だけ、北極の一隅に残して行く第三函館丸に対して、愛情を表示しなかったろうか！……

たしかに、汽船は、彼等全部を日本から積んで来て、日本に関する彼等の生活、思い出、空想、連絡のすべてを運んで、再び日本へ去ろうとするのだ。汽船がいなくなると、彼等は全く外国に在る外国人になってしまう。それが帰航した瞬間から、彼等の生活は、どんな困難にむかっても、自分達だけの力で切り開いて行かねばならない。

単純な彼等は、汽船というものの持つ女性的なセンチメンタリズムに誘惑された。彼等は汚い、汗と埃にまみれた手拭を振って、泣いた。十分に、百七十人が何をするために、この犬の穴のような隅ッこへ流されて来たかを知っている、汽船の労働者達も、デッキへ出揃って高く手巾を揮った。こういう刹那にこそ、労働者達は、誰に教わるでもない自然発生的な友愛と階級意識を発揮する！

荷役が終るまでには、もう一組の労働者達が、幹部部屋、倉庫、飯場、罐詰工場などの小舎掛けに忙殺されていた。

第一に出来あがったのは飯場である。これは、主として、炊事係の三人の老人の設計によって建てられた。単純な丸太の組合せに、蓆を囲い、その蓆の壁へ木造りの高い台を両側へ凭げたものが食堂で、めしはすべて台の上へ釘附けにした長方形の八つばかりの箱へ盛り入れられた。この原始的な食堂の入口に、太い鉄枠に支えられた釜と汁鍋とが、この飯場のただ二つの厨房具を代表して控えた。食堂と称せられる蓆と棒との奥は、食料品の倉庫になっていて、味噌樽や沢庵の樽の類が、暗闇から殺人的な臭気を送った。

すべて、「倉庫」とか、「飯場」とか、「機関部屋」とか、「罐詰工場」とか、頗る大袈裟な、まるで同じカムチャッカでも、オゼルナヤやウス・カム辺の日魯の工場や、ロシア国営工場のエスカレーターやアイヤン・チンクなどを使って、高い煙筒から北極が曇るほど煙と能率とを挙げている大工場のような術語で呼ばれているが、その実、この個人経営の漁場では、すべて遍在的な丸太と蓆とをもって築造され、必要も絶対性を帯びた場合でなければ、亜鉛は使われない。

これらの小舎も、次第に、丸太のコンクリートと、蓆のセメントを集成して、一棟の土蜘蛛式建築を殖やすごとに、工場らしい「名目」だけを増して行った。

機関部屋が出来あがる。

罐詰工場は、大きい鉄蓋のついた釜を据えたあとで、その上へ蓆の屋根を置き、三方を蓆で囲い、入口には、同じ蓆をだらりと下げればよかった。

幹部部屋――これだけは、特に「事務所」と呼ばれたほどあって、四辺の封建主義に対立した近代的装置が施されてあった。同じ蓆張りでも、この方には、しっかりした昨年からの骸骨が残っていて、それに壁は窓際まで高く土盛をし、窓には文化的なガラスという贅沢品さえ嵌まっているのだ。ここには、七人の幹部が寝起きするばかりでなく、軍手(軍隊払下げの手套)や、煙草、股引、靴などの必需品の、煙草を除いては原価の幾パーセントかの高価で取引されるカウンター兼用のテーブルがあり、壁には極東全図、汽船の写真、カレンダー、人名表などが、頗る非事務的な手で貼りこくられてあった。

この幹部部屋を、最も幹部部屋らしく見せたものとなると、何を措いても、物々しく正面の壁に吊るされた三梃のピストルと、二梃のモーゼル銃を挙げねばならない。これらは、朝晩の濃霧と、塩分の多い雰囲気にも拘らず、装飾的に磨き上げられてあって、それらを、単に外見だけの装飾品に終らしめないために、いつも実弾が籠めてあった。

粗雑な木製の「馬」と、寝床と、行李類と、二冊の帳簿と――それだけが、幹部のいない場合の幹部部屋を構成していた。

この行政執行機関の本部は、浜一般を三角形に見た絶頂

点に在って、飯場、番屋、機関部屋、罐詰工場、井戸、倉庫などの営造物へ、おのおの最近距離によって達する通路を持ち、窓からは居ながらにして、ガラスと云う物の特質から、一目でベーリング海の沖模様が展望された。ここだけは、ほかの砂地とちがって、ツンドラ地帯を切り開いた、しっかとした地盤に立っていた。

こうして大都会の失業者や、寒い日蔭の県の貧農を、大急ぎで掻き聚めたところの彼等百七十人が、ものの一週間も働いているうちに、ともかく水産業の工場町に近い部落を、殆ど古井戸と曝された棒杭の列しかなかった砂浜の上に建設したことは驚くべき事実ではなかったか！

それは、たしかに、荒削りで、急場凌ぎの、間に合わせだけの建物群であったにはちがいない。しかし、この妙な部落からは、いつも炊事の青い煙が揚がり、罐詰工場の背後には八人の女達の赤い腰巻が乾してあり、鉽力喵からは飴色の重油や、五色の紋様を散らす石油が滴り、通路々々には靴の跡にまじってバットの吸殻があり、残飯と尿臭との雰囲気にも、海の労働者らしい、肺量の強そうな笑い声が聞えたではないか！　それから、又、めし刻の茶碗や器物の音、我を争う犇めき、仲の良い唖み合い！

事務所の棟には、汽船が着いたら、いつでも合図の出来るように、フラッグ・ポストさえ樹てられてある！

もし、一週間にして、

「又やって来るよ。……」

と云って去った、髯だらけなロシア人が犬の群と再びここへやって来たとすれば、彼は、たしかに日本人という国民の安価な模造工場の即製にかけては、世界一の手腕を持っている、という擽ぐったいお世辞を振り撒いたにちがいなかろう。この漁場は、どこか、曲馬団（サーカス）の天幕に似ていた！

これまでの第一次の準備期間は、迅速に、第二の整理期によって代わられた。

この第二期に於て、百七十人は、それまでの「成績」に応じて、それぞれの等級と部署とを定められた。

七人の幹部は、動かぬところであったが、機関部屋と筋子部屋と飯場は、特殊な技能の要求されるところから、機関部二人、筋子部屋三人、飯場の炊事番の老人三人にもう二人の助手が加わった。そのほか、男子と隔離されて罐詰工場へ寝泊りしていた女漁夫達を除いて百四十五人から、二十人は雑夫として、漁業に直接従事しない、一段と賃銀の安い組に廻わされて、あらゆる急場の走り使いや雑用を弁ぜしめられた。残余の百二十五人の頭には、一隊四十人ほどの編成で、漁夫として、昼夜三回交替の三部組織が割りあてられた。

その編成が定まると、漁夫のうちの老人組は、浜へ出て網繕いに廻わされた。

中年組は、まだすっかりは出来上らない小舎々々の建て増し、若い者達は一と山百二十叺ずつ積む塩の配置や、倉

庫の整理などに使われた。
　これらの縦断的な人員の組合せに、この個人の営利会社にとって人間の労働力を搾取して行く上に最も都合のよい役割を果したのは、各部に必ず旧くからの定期契約労働者を編入して置く牽制策であった。
　新しく募集した漁夫達の間に、旧くからこの漁場で、夏場を稼いだ漁夫達は、しっかと楔のように食い込んでいて、いつも、彼等の不平をなだめ、事件の発生を未然に防ぎ、時には傭主側のためのスパイの役をも演ずるのである。こういう故参労働者は、大概、寒い『白米の食えぬ』村の貧農の、会社からの計略的な前貸金に釣られて雇傭関係を結び、それがつい度重なって、毎年の定傭いにすると云ったものが多く、一日一人当八合の白米を、この漁場でやっているように、日に五回に食うために、二十時間の激しい労働を、一時間八銭足らずの賃銀で厭わない――という愚鈍な殉教者、白米だけを悦ぶ馬鹿な神様なのである。
　絶対窮乏の背景から抽出されて、北へ、沖へ、カムチャッカへと、自分の労働力を捨売りに移行する、こういう労働者は、無智と、利己心と、迷信とで、いつの間にか、傭主側の利害と自分の利害とに必要以上の一致点を見出し、会社や資本家のために、頼まれもせぬ忠節振りを発揮する、隠密的人物となっている。一日五回の食事を給与するという慈善的な名目で、五回の食事を取らねばならぬほど長時間の労働を「日割」で強制する資本家にとっては、こういう義勇兵は、願ってもない幸いであり、襤褸にくるまった「金」なのである。彼等は、年一年と、げっそり精力を消耗して行く傍ら、資本家の大きい算盤から見れば、殆ど顕微鏡的な昇給をゆるされる。
　百七十人のうちにも、こういう古株の漁夫は百人からの過半数を占めていた。そこで、この蓆張りの部屋は、傭主側にとっては、多少の摩損（ウエアアンドテーア）を見越しても、安全な、能率的の善い漁場であった――が、問題は、いつも資本家側が、労働者というものに動きも進歩も知識慾もないものだと、機械視してかかることから起こる。
　この漁場にも、意外なことから、資本と労働との対立が百七十人の頭にはっきりと意識されるようになった時が来た。
　きっかけは、頗る地方色に富んでいた。
　それは、誰かが、ここへ来て、はじめてオーロラというものを発見した夜から起こった。

4

犬が吠えた。
北極の平原（ポーリア）を響いて来る犬の声には、それの響いて来るだけの、荒寥とした広さを思わせる、無限の淋しさがある。
　最初の一疋の悲嘆が、二疋、三疋の共鳴から、次第に数

を増して夜を隔てながら、数十疋の慟哭の合唱にまで移る間に、労働者はさまざまなことを考える。

彼等は、投げ出した脚を抱き締める。或る者は、しみじみと、肉刺だらけの自分の掌を眺める。ストーヴのまわりの猥褻な雑談から遠ざかる者もある。又、二三人は、静かに考えるために、番屋を脱け出す。彼等は、有り剰るほど考えることを持っている。しかし、暇がないのだ。

「なんだ、ありゃ？——」

こうして、番屋を出た一人が、真北を指して、同僚に訊ねた。

「探照燈かね？」

もう一人が暗示する。

「あれか——ありゃ、北極光さ！」

土地に慣れた者が、説明する。

「あれが、オーロラというのかね？——凄いもんだねえ。」

「どうだい、あの山を見ろよ！」

カムチャッカ半島の脊髄である、連山の一つが、光の中に、円錐形の頭を擡げている。それは、山というべく余りにも青く、透明で、水際立って地平線から泛び出している。白く熱した熔鉱炉の中で不滅の水晶が燃えているようだ。

その山嶺を中心にして、数十条の照空燈を天心へ向けて放射したような、無色に近い、まっ直な光芒が、北の空を一円に明るくしている。じっと見ていると、客の無い大きな何かのホールに、かんかんと灯をともしているようで、妙に不安な、虚無的な気持に撲たれる。

静かな、太古からの沈黙に押ひしがれた地平線には、動くもの一つなくて、ただ、しきりに犬の遠吠えが聞える。

「あれが、つまり、いつも照っているお太陽さまなんだなァ……」

「——行こーか、帰えろーか、

オロラの下ァに。……」

一人が、嗄がれたテナーを鼻声で胡麻化す。それ以上は知らぬらしく、すぐ黙ってしまう。それほどこの皎々とした、無慈悲な、自然の魔術には、カフエ情緒と非妥協的な何かがあるのだ。

誰かが、思い出したように、番屋へ走って行って、仲間を呼んで来た。

一と塊りの群集が番屋からぞめき出て、煙草の火が、襤褸や軍艦羅紗のもじりの間に閃めく。どの顔も、どの顔も、あんごりと口を開いて、蒼白い、非現実的な四辺の夜気に、醜い魚族のように見えた。

短かい讃嘆の辞があって、それが止むと、深い吐息のあとに、深刻な静けさが一同の上に横わる。——極度に雄大な物に押潰された刹那、人間は、手足をもがく暇もないのだ。彼等は、黙りつづけてあっけなく飯場の横からもとへ帰えりかける。

「おお、寒む！　ヤッパリ火の側がいいや。」

「明日は又早いぞ！」

異様なオーロラの光は、彼等にとって何のつながりも、何の連想もない、親しみ難いものであった。鼾と、歯軋りと、寝言と、石炭ガスとの人間的な温みを求めて、彼等は蓆のドアから、ぞろぞろと番屋の中へ戻る。

その時である。

突然、ばたばたと彼等の帰ったと反対の方から足音がして、一人の男が小舎へ這入りかけた漁夫へ呼びかけた。

「もし、もし、ここは日本人漁場ですか？――」

振り返った漁夫はぎくりとして立停まった。全く見も知らぬ人間である。ロシア人の着るルパシカを着て、ひどく息を喘ましている。

「誰だね？」

「わ、私朝鮮人です。――今遁げて来たのです。ロシア人の漁場働く、非道い目に会いました。助けて下さい。ここは日本人漁場でしょう？」

「えッ、朝鮮人だって？」

もう一人の漁夫が近づいて、入口の蓆を掲げた。三分蕊のランプから、黄ばんだ、ほそぼそとした光が流れて、陽に焼けた、土器色をした、その男のやや窪みを帯びた額に、小深かい陰影を拵えた。

「尹――というものです。別に怪しいものでありません。」

朝鮮人尹は、寒そうに唇を鳴らした。

「まあ、這入るさ。そこにいたって、凍えるだけだ。」

彼等の一人が、大きく手を振った。

「こういうのは、どうするのかな？」

最初に尹に呼び掛けられた男は、誰へともなく訊ねた。

「船頭さんに相談するんだな……」

奥から欠伸まじりで、太い声が答えた。

朝鮮人尹は、怖ず怖ずストーヴの前まで進んだ。

小柄な、痩せこけて、空腹そうな、如何にも、北国の夜から飛び込みそうな胡散な青年であった。長い道を、海岸に沿って逃げて来たものらしく、ズボンの処々に潮を浴びたのが目についた。コール天の、禿っちょろの、耳かくしのある帽子を片手に持ったきりで、ほかには何一つ携帯品とてない。

しばらく、入口の側の寝床から、いろいろな顔が起きあがって、じろじろストーヴの方を覗いた。一応の検査が済むと、それらの顔は懶さそうに、安物の蒲団の蔭に沈んでしまう。

凄さまじい鼾を掻いて、奥の方では眠っている者もある。もう一つのランプが、その人達の寝像を深く畝った畑のように、ぼんやりと糊かしている。夜具の間からはみ出た、ゴム長の爪先が、鈍い光でランプに反照している。早番の者は、着のみ着のままに、靴穿きで眠るんだ。

ごく少数の人達だけが、尹といっしょにストーヴを囲んでいた。朝鮮人は、珍らしかった。

「船頭は、起きてこないぜ。怪しいもんでなけりゃ、明日会うてさ――困ったな、蒲団がないんだが。」

幹部部屋へ行った者が、鼻の先きをまっ赤にして帰って来た。
尹は、硬くなった。
「よろしいです。私はここへ眠ります。どうぞ関わんで下さい。昨夜もツンドラの上で寝たんです。」
「よし、蓆を一枚持って来てやらあ。――もう石炭はねえのか？　飯場の爺、けちな野郎だなァ。――」
誰かが、こう云って、倉庫の方へすたすたと出て行った。尹は、よほど疲れたらしく、周囲の者に何か訊ねられるごとに、鳥のように渋い眼をしばたたいた。それが、立ちながら眠っているようであった。
翌る朝、二人の人夫廻わしが、朝番の人間を起こしに来た時には、尹は一枚の蓆にくるまって、仔犬のように、ストゥーの前で丸くなっていた。
「手前か、昨夜飛び込んだ奴は――？」
額に疵痕のある、兇状持ちらしい顔をした人夫廻わしが、六尺棒の尖端で、尹の靴の底をぐわんと一つ殴ぐった。
すべて、××××××××であるかを知ろうとするには、×××と会わせるに限る。尹は、がばと撥ね起きた。
「は、はい――そうです。」
人夫廻わしは、ただ、その優越感を対手に示せばいいのだ。
「よし、鮮人だな。もっと眠ってろ、今に親方が会ってやる！」
奥のうす闇を、棒で掻き廻わすようにして、ほかの一人の人夫廻わしは、誰彼を呼び起こしている。
「おウ、疋田ッ！　疋田ッ！　起きろよ、起きろッ！――何、尻が痛いッ？　べらぼうめ！　贅沢云われに、高い銭出して連れて来たんじゃねえぜ！　起きろッ！　こん畜生、なま抜かしゃがると、ひっぱたくぞ！」
その日の朝番の連中が、浜へ出払ってから、朝鮮人尹は、ピストルの閃めく幹部部屋へ呼び込まれた。
船頭の奥野は、痩せぎすの体軀を、ベンチの上へ角度を多くして掛けながら、部屋中を煙草の煙で満していた。
「親方、この野郎です。」
同行した、向う疵が、ぐいと尹の肩を押し遣った。
「お前、朝鮮だって？」
「はあ、そうです。尹と申します。」
奥野は、煙幕の裏から、顔の半分を顰めた。
「何しに来た？」
「私国営に雑夫しています。非常に待遇悪るいので、不平云うと、殴られました。逃げたのです。」
「いや、俺の聴くのは、ここへ何しに来たというのだ。」
「働かせて下さい。何でもいいです。日本人漁場の方働きいいです。これから忙しくなるでしょう……。」
「ヘン、うまく化けてやがらァ。おい、三木、こいつを身体検査しろ！　こんなのは、よくロスケに煽てられて赤化

宣伝にやって来る奴だ。――そのルパシカが怪しいや、裏を、裏だ！」
　三木の敏捷な指先から、取り出された物は、ポケットのチルオネッツ・ルーブルが皺くちゃになって三枚、それからコペック銅貨が五つ。ほかに、どんな縫目を探ぐっても。煙草の屑一つ出て来なかった。
「煙草吸うかね？」
　船頭はバットを箱のまますすめた。
「いえ、吸わんです。」
「ふむ――それで、お前は、このカムチャッカでは、一つの漁場の脱走者は、必らずもとの漁場へ送り届けにァならんことになってるのを知ってかね？――つまり、お前はもう一度逃げて来た工場へ帰るんだ。こちらから、業々人をつけて届けるんだ。そういう厄介を、お前は俺達に掛けることになるんだ。それを知ってるか？」
「いえ、ちとも存じません……」
「国営はどこの工場だ？――」
「ウスチ・カムチャッカの第一工場です。」
「歩るいて来たのか？」
「は、私、足速いです。」
「大変な野郎だな……すこし怪しい。三木、こいつをふんづかまえて置け、すこし俺が吐かしてやる。」
　三木は、尹の両腕を、背後からぐいと擡げた。小さな朝鮮人は、器械体操の鉄棒に両腕を、「観音開き」にしようとして、後半身が利かぬときのような恰好になった。立ちあがった船頭は、ストーヴの下へバットの吸差しを投ると、ちょっと険わしい眼を表に配ばった。外には漁夫達が好奇心から部屋を遠巻きに覗いている。
「おい、お前達、そこへ立っちゃいかん！　ここを覗いたら承知しねえぞ！」
　こう云って、彼は、新しいバットへマッチを擦ると、すばすぱと早口に吸い出した。折から、飯場の方へ急ぎ足に通って行く副船頭を見つけた彼は、歯から煙草を抜き取ると、
「青木！――おい、青木、その辺へ誰も立たんように、見張っとれ！」
　と命じて、一歩、尹の方へ近づいた。
　朝鮮人尹は人夫廻わしの腕の中で、鴨のように胴震いした。
　飯場で、いつも汁鍋の前で、二本の杓文字を争奪し合っている群集も、今日はひっそりとして、耳を済ましていた。或る者は熱い飯湯気の間から、眼を細めて、幹部部屋の前に棒を突張っている青木の姿を瞶めながら、急いで箸を動かしていると、別な人間は、この機を幸いと、汁の果の南瓜をこてこてと掬い上げながらも、幹部部屋に、ひーいッという声がすると、その半分を鍋の中へ取り落した。
「貴様ッ、ほんとに、宣伝しに来やがったのじゃないのか？――ほんとか？」

船頭奥野の疳走った声が響いた。
一同は、互に顔を見合わせて、背の高い奥野が、蒼い顔に反ッ歯を剝きながら噛みつくように、対手を攻めている姿を、眼の裏に描いた。それにしても、朝鮮人の悲鳴を挙げているのは、何をしているからだろう——？
もう一度船頭が何かを、長たらしくがみがみ云うと、今度は、朝鮮人の方ではヒステリックな声を張り上げた。
「私は、日本国民です！——朝鮮日本に合併されたです。日本国民の私は、日本国民の貴君から虐待される理由ない……です！ そういうことするから、朝鮮人××です！」
稍しばらくの間、飯場の空気には、颯の唸る音しか聞えなかった。
次に、人達は、昂奮した蒼い土色の顔の尹が、警官にでも護送されるように、青木に片腕を取られて、飯場へ連れて来られるのを目撃した。
「温和しくすて、めしを食え。食ったら、じっとして番屋に待っているんだ。いいか？」
青木は、乱暴したのが尹ででもあるかのように、こう云って、飯場の片眼の爺さんに、何かを云いつけた。
尹は、終日、外へも出ずに、じっとしてストーヴの傍にしがみついていた。まるで、石炭炉べに傭われたように、一度の食事を摂った以外には、人の出はいり毎に、石炭を小さなスクープで掬っては火の中へ投り込んだ。
「どうも、ありゃ、鮮人だなんて云うけんど、日本人らしいってさ」
ツンドラの上で、網を繕っている漁夫達は、そんなことを噂し合った。
「人夫廻わしの丸山がペトロさ行ったちうのは、ほんとかね？」
一人の前歯の欠けた男が云った。
「あ、ロスケの巡査引張って来るだとさ。」
「だって、あの丸山じゃロシア語が出来めえに。」
「なに、むこうにあ、ちゃんと通弁が傭ってあるんだよ。」
「ペトロまでは、よっぽどあるそうだね——十里とか云ったっけな。」
「十二里と聞いてるがな。」
「一日たっぷりかかるかな——もっともこの日脚じゃ大丈夫だろ。」
「馬鹿云え、誰が歩るいて行くものかな、俺先刻、ランチで丸山とほかの一人で出て行くのを見てるんだ。陸伝いに行ったら大変だ。河があらあ——。」
浜では、塩叺の運搬をやっている連中が、人夫廻わしの眼を忍んで、こんなことを囁合っていた。
「ロスケの漁場じゃ、迚も待遇がええちう話じゃねえか？」
「それじゃ、何故すて、あの朝鮮が逃げて来たかしら？」
「さあ、親方の話じゃ、赤化宣伝だろと云うがな。——朝鮮人だなんて、実は日本人が化けたのだろと云う話さ。」

「ともかく、俺の知ってるもんが昨年、何と云ったな、何とか兄弟という会社へ一夏稼いだが、仕事は楽だし、一日たった八時間しか働かない上に、しこたま金を残して帰えったよ。隣村んもんだがな。そりゃロスケは労働者を大切にするそうだ。何でも、××××××、××××××××××云って、偉らくソノ×××でも×××に限って、ちやほやするそうだ。――だとも。困るのは、パンだってな。何しろ、大勢日本人が働いてるもんだから、米のめし位焚かせたらよさそうなもんだが、そこはそうは行かねえらしい。」

「しかし、あの朝鮮人の野郎は、怪しい奴だな――。」

夕番の交替に、第四回目の夕飯が出される。これは、一日の正餐だ。飯場でも、この夕飯には、新しい焚き立ての飯と、別な南瓜を切り込んだ味噌汁と、古るい沢庵の上へ六七本の新しい沢庵を切って旅の上わ側に撒布し、一人当り半匹位の干鰯を汁鍋の中へ擲き込む。同じ味噌汁でも、永住的な沢庵でも、こうして出されて見ると、多少の変化はある。その変化は、本質的には何等の変化を伴わないことだとしても、早朝から三回も、同じ物の残滓に、水を注ぎ足したり、下から引繰返えしたりして食わされている労働者達にとっては、全然メニュウがちがったほどの変化である。

従って、日盛り六時頃の夕飯は一段と雑沓する。

最後の一人が夕飯を食いに出た時、朝鮮人尹も、赤く火膨れのした手の甲を擦りながら、飯場まで出て行った。しばらく彼は、茶碗と汁椀とを入れた大笊の前に立っていたが、それが空だったので箸だけを持って、日本人労働者のあさましいほどの食慾の乱舞を打戍っていた。

「どうした、茶碗がねえのか?」

一人が親切に尋ねると、彼は、悄気た顔をして、

「あとでよろしいです!」

と答えた。

そして、もう一度、番屋の蓆の前に、恨むような眼でこちらを見返った彼は、それっきり、何処へ行ったものか、ストーヴの側には姿を見せなかった。

夕飯が終って、三人の年増の女漁夫を加えて、いつもの猥褻組が、前方のストーヴへ陣取り掛けると、脚気の気味で早く臥ようとした男が、蒲団をめくってから、不審そうに一枚の紙片を手にして読んでいた。

自分の箸だけは、火事があっても持ち出す心掛けの秋田者の田中も、枕の下へ箸箱を安置しに帰ると、そこに挟まれてある活字刷の紙片が眼についた。

二人は別々な寝床から、蓆の隙を洩れる光でそれを読んで、互に顔を合せると、苦し紛れにするような微笑を泛べた。

「おい、おい、こりゃ何だい?――誰だ、こんな物置いて行ったのは?」

こう仰山な声を張り上げたのは、脚気と田中ではなかった、入口のストーヴに近い寝床を整理していつもの「おい

ちょかぶ」を始めようとした、熊谷と呼ばれる盛岡からの渡り者であった。

「はてな？」

熊谷は、紙片の裏表を引繰返してから、読み上げた。

「日本人労働者諸君！

諸君労働者ハ、誰ノ為メニコノ露領かむちゃっかへ来テ労働スルノカ？

思ウテモ見給エ、コノそびいえーと・労農ろしあ社会主義連邦共和国ニオイテ、×××××××××××××、日夜ハゲシイ労働ニ従事シテ、ノコシタ莫大ナ利益ハ、×××××××××××××、××××××××××××××××××××××××××××！見ヨカノ××××株式会社ノ如何ニ英国資本閥ト提携シテイルカヲ！英国ハ正ニ労働者国デアルトイウダケノ理由カラろしあニ××ヲ挑ンデルデハナイカ！

醒メヨ、日本人労働者諸君！　兄弟、労働者達！

醒メテ、諸君ノ労働ノ利益ヲホントウニ諸君ノ物トスル為メニ、コノ漁区ニ於テ、×××××××××××××！

×××××！

コレコソガ諸君労働者ノ×××××××デアル！

ろしあ沿岸カラ××ノ×××××ヲ追払ヘ！　漁業ヲ諸君ノ手ニ取リ戻セ！

日本人労働者諸君、眼ヲ覚マセ！　諸君ニハ×ガ一人シカナイコトヲ知レ。――即チ、××××××デナイモノハ、ドノ国デモミナ手ヲツナイデ××××××ショウトシテルコトヲ！

×××××！　×××××！

盛漁期ニオケル×××××××××××××！

コレコソハ諸君ヲ幸福ニスル唯一ツノ道ダ！

熊谷は、事実上、皆までこの撒ビラを読まなかった。後半は、別な読み手によって、より高らかに読み上げられた。それが読み終られた頃、熊谷は船頭奥野以下の幹部五人を案内して、ものものしく番屋へ闖入して来た。

奥野が第一にしたことは、撒ビラをまだ手にしていた宇田川という東京者を、いきなり棒で殴りつけることだった。この一応の手続を履行したあとで、歯を尖がらせた彼は、同じ棒を采配のように揮って、幹部連に番屋全部の家捜がしを命じた。

「この野郎、こんな物を、読み上げる奴があるか！」

不平そうに、涙を泛べて立ち挙がった宇田川の手から、猿臂を伸ばしてビラを毟り取った船頭は、喉から吐くようにこう対手の言葉を封じた。

「太い鮮人だ！　――野郎、どうしたって逃がしはせんから、青木！　誰か青木を呼べッ！」

同じようなビラは、何時どうして撒かれたものか、めいめいの蒲団や枕の下には、一二枚ずつ必らず挿入してあって、聚めて見ると百八十五枚からあった。

奥野はその一枚をポケットへ捻じ込むと、あとはストーヴへ擲き込ませた。

「みんな、暫らくここを動いちゃならんぞ！——それで、ちょっと聴きたいことがあるが、誰かこのうちで、あのヨボの逃げて行った方向を見た人間はないか？」

こう船頭が、烈風を喰った煙筒のように喚めいている傍ら、一隅にいる青年は、手早く先刻のビラを紙撚にすると、蓆と丸太との間に挟み込んでいた。

その青年は、右の眼に烈傷を帯び、額の方々が青く腫れあがっていた。

「はッ、何か用ですか、大将？」

緊張した場面へ、青木の円るい脂鼻が、深い皺を見せて這入って来た。

5

間もなく、ツンドラの春——夏がやって来た。

ベーリング海の、最初のひとうねりの波が、鏡のように、午前二時半の日の出を反映したと思うと急に気がかわって雨になり、蒙々とした濃霧のそとに、太陽は追い出されてしまい、やがて、再度の気がわりから、午前十時頃になると銀ののべ板のような日光が、黒い海、曝された大地を、烈しく燬きつけて、それが夜の九時頃まで精いっぱいに火力を弛めないのである。

こうした日数のあとで、ツンドラには、錦絵のような夏が来るのだ。

この季節の特色は、人間の想像力を馬鹿にした、大自然の極端に派手で豪奢な復活祭であることにある。

数十、数百年以来の、生きては死に、死んでは生きた草の根で覆われた、部厚な絨氈地層に、温度は酵母のように作用して、一夜で、猛烈な色彩のさつきや、つまとり草や、千島桔梗や、リンネ草などが、花卉類の原始色を極度に誇張して咲き揃う。黄金の蓆、血綿のような団塊、紫に、碧空の色に。——その上を、ゆるい水車小屋の唸りのように、小粒な蝿や虻が、芳香に酔って、心から労働者を親しませる。

これは又、オーロラとちがって、心から労働者を親しませる。

しかし、この場合にも純粋に美しいものに対して、人間の本能の持つ鑑賞力は、大部分彼等の主観的状態によって抹殺されてしまう。百七十人の或る者にとっては、花は開かなかったも同然である。また、その一部にとっては、富豪の花卉園の横を素通りしたも同じである。花が美しければ美しいほど、彼等は悲しむ。咽せるような匂い、幻覚的な虻の唸り、それらは労働者を複雑に苦しめる。彼等はその上に寝ころんで、遊び狂うであろうところの、郷里の子供たちを思い出す。若い日の、日向の多かった恋愛時代を思い出す。その花を摘んで、ただ何となく歌をうたう、まだ会ったことのない若い娘を考える。そして、それらのこ

とは直接彼等の網繕いとも、倉庫の整理とも、浜の井戸掘りとも、浜デッキの築造とも、塩叺の運搬とも、機械の据附とも、船底のタール塗りとも、米磨ぎや椀洗いとも関係がないのである。

たまに、雑夫の連中が、人夫廻しに小突かれながら、ツンドラの奥深くまで、枯木や古材木などを燃料にするために拾いに行くときに、この狂人じみた、北極の俄か造りのパラダイスの美しさに酔って帰る。

彼等の一隊が、漁場から、ペトロパウロスクの方へ、四五町も奥へ行って、幅三間ほどの淀んだ小川に出遇わした時である。集めた古材木や、曝された船板を、路々へ積み重ねてそこまで出た彼等は、小川へ来たことが、一つの合図でもあるかのように、腰を下ろしてやすむことにした。

「ハラショウ！」

一人の、いつも「日露会話階梯」という、片仮名附きの会話の手引きを懐ろに入れている男が、こう怪しげな発言で云って、ごろりと草の中へ寝ころんだ。寝ころんだと云っても、その実、草の中へ見えなくなったと云った方がいいかもしれない。バットの煙が、花の間を縫うて、糸のように立ち騰る。

「暑いね。」

こう云って、もう一人が赤毛布の裏をつけた、ぼろぼろの絆纏を脱ぐ。その下にも、同じような、襤褸絆纏が着込んである。

もう一人は、函館以来、底が、洗濯屋のアイロンのように擦り減った、ゴム長を脱ぐ。

四人目の男は、犬が平原に向って訴えるように、ただ棒立ちになって追分けを歌う。

「……せめて、歌棄（うたすつ）
　磯谷まで——」

人夫廻しの「杉山さん」は、わりに寛大である。人間、ごぼごぼと濁った音を立て、膨れあがった夏の川が、あざやかな、きつい原始色の花々の間を、まっすぐに流れているときに、そういつも函館に暖簾の下った大きい店を持つ山崎徳太郎商店の利益だけを考えているわけには行かない。のみならず、杉山君は、歯ブラシ髭を蓄えているだけあって、とかく若い者と共鳴したがる自由主義思想の持ち主なのだ。だから、雑夫達は、こと更に彼を「杉山さん」と呼ぶ。

「どうだな、こう日和がいいと、おいらも、のこのこロシアの内地へでも歩いて行きたくなるよ。——ペトロまでだって、これで十里そこそこなんだからな。あすこは、今漁場のさかる時期だから、さぞごったかえしているこったろう。」

これには誰もこたえる者がなかった。云い合わしたように雑夫達は、幹部連を警戒した。ことに、撒きビラ事件からというもの、朝鮮人に内通して、連絡をとった者がありはしないかという嫌疑があったので、船頭以下の六人は、

いろいろな形で労働者の間に、探ぐりをいれていたからである。

一向に自分の気持ちに反応するものがないのを見てとると、杉山君は、川の方を向いて大きな欠伸をした。紫の煙が、彼れの手元からまっすぐに立ち上って、その大きい鼻孔を擽ぐるように掠めた。つづけさまに、彼は二つほど、烈しい噬めをした。

「ロスケの工場は、八時間睡眠と来ていて、まるで×××、八時間労働、八時間遊戯――それに××××××××××××××××××××を見せつけるようなものだ。機械もアメリカ製の最新式を使っているしお湯へも這入れるし、本も読ませる。おまけに女工達とどんなにふざけまわっても天下御免と来てやがる。いいな！――俺達の漁場の婆アどもを見あがれ！」

この独白は、すっかり諦めてしまった杉山君によって、誰の返答をも要求しない、一とくさりの感想として、空気の中へ吐露されたのである。

「まったくでがすな、あのうっ一寸ふめる代物は、まずまず松代チュう娘っ子ぐれえなところでがすぺおん。」

女の話になると、意外に杉山君は反響を得たのである、反響した男は、仙台者の小野寺という、在郷軍人であった。

「杉山さんなどは、色男だから、仲々あの八人が大騒ぎしてるようですね。……」

「冗談、」杉山君は苦笑いで言葉を切った。「――あんなあばずれどもと、何とかするんなら、逃げ出した方がましだよ。君達こそ、船の中で、みんな×××ずつとられた組じゃないかね――あいつらア、××××みたいなものだよ。」

杉山君は、案外くだけて笑った。

もう一人が、妙な手つきで何か猥褻なことを話し出そうとした途端に、のっそりと、一人のロシア人が、一同の頭上に現われた。

「おお、ロスケだ！」

ロシア人は、大きいパイプで煙草を燻らしていた。その鼻を中心に、いろいろな細い皺があつまって、それが一図になくなったと思うと彼は笑っていた。

「日露会話階梯」がまっ先に名乗りをあげた。

「ズドラフストウイチェー！」

「日露会話」の第三頁が、たしかに「今日は！」という言葉のロシア語をそういう風な小むずかしい発音で指定していた。

「ダー・ダー・ヤポンッエー！」

「何というんだね？」一人が「日露会話」の袖をひいて訊ねた。

「おい、序に、この間逃げた朝鮮人は、お前の方の宣伝部から寄越したんじゃないかと訊いてみろ？」

杉山君は、命令的に、こう「日露会話」に要求した。

「日露会話」は、「食堂へまいりましょう」から「何卒お湯をさしてください」「いや、ありがとう、満腹です！」までめくってみたが、一向に、杉山君の註文に応じたような言葉は見当らなかった。

ロシア人は、しきりに小さな本を、めくっては真っ赤になっている日本人を、好奇心から瞰（み）おろした。

「ヤポンツエー・トリコ・アレンダトルヰ・ザ・ルイボロビイ・――インペリアリステー・アレンドウユート・ゼムリー・オト・ラボチューフ・ノ・ボーチェト・ツイナー・トロチェーブニフ！　ハッは、ハッは！」

「ありがとう――即ち、スパシーボ、までで、ここは終りだ。糞ッ！　こんな本は、何の役にも立ちあしない！」

こう云って、青年は、本を擲きつけると、どっかと草の上へ腰を下ろして、漫然とした笑みを湛えながら、対手を打戍った。

「いまのは何と云ったんですか。は？」

仙台の在郷軍人が「日露会話」へ訊ねた。

「あれか、あれは君、君達日本人は、はるかに北海の怒濤を蹴破って、国家のために艱難辛苦を厭わず、年々数千万円の利益を国家に齎らして帰る――すこぶるよみすべき、忠君愛国の民である！　てなことを、ぺらぺらとぬかしただけの話サ」

青年は、すこぶるの機智で、笑いながらこう云ってのけた。その実、ずいぶん苦しかったのである。

「ヤポンツェー……というのは、俺達日本人のことだ。それだけは解るが、あとは皆暗号電報というところかね。――」

杉山君は、腹の底まで日光を入れるように笑った。

ロシア人は、草の上に投られてある「日露会話階梯」を巨きい赤い手で拾った。同じ巨きい、赤い指は、しきりにその頁をめくっていたが、

「鮭（セムガ）」

という字へ来ると、いく度もその原語を発音しつづけた。次には、

「漁業（ルイボロビー）」

という字を発見して、それを彼等の眼の前に突きつけた。

「ルイボロビー！」

それから今度は、「鑵詰（コンセイルフ）」である。一同の頭が、小さな本の上へ聚まる。その上で、ロシア人は肺臓の大きそうな笑い声を上げた。

「工場（ファブリック）」

それに、もう一つの字が加わる。

「国営（ゴスダルベインスイ）」――「国営工場（ゴスダルベインスイファブリック）」

稍永いことかかって、ロシア人は、

「労働条件（ウスローヴィヤ・ラボータ）がちがいます（ハロオシ）！」

という言葉へ、巨きい爪の痕で、アンダ・ラインした。

「ははア、こ奴、俺達へ、国営（アコ）へやって来いと云ってるん

だな！　宣伝だよ！　これこそ赤化宣伝だ！」
杉山君は、急に齒ブラシ髭をなでながら外りかえった。
「しかし、こんな宣伝なら、ちっとも恐ろしくないね。——大体、×××でやかましく云ってるのは皆こんな種類の、何でもないことなんだからな」
突然日本人の一人が、大きな声で叫んだ。
「レーニン！　トロツキー！」
その声に応じて、ロシア人は、茶褐色な蝸牛の殻のような瞳を円くした。彼は、しばらく懐疑的に、そう叫んだ男を瞶めていたが、やがて、大きく肩を揺すぶりながら、誰へともなくこう云った。
「ニチウオ！」
そう云い放ったかと思うと、この異様な大男は、何の愛想もなく、靴を鳴らして草を踏みわけながら、ツンドラの上を、歩み去った。外国煙草の、強い香りが、日本人一同の鼻孔を撲った。
「ロシア人て、妙な国民でがすな。」
仙台の在郷軍人が、この短い昼飯前のエピソードに、結末をつけるように、真面目くさって、こう断言した。彼等に接したロシア人は、決してこの一人だけではなかった。
翌る日の朝、突然、沖へ、赤旗をたてたランチが現われて、作業に従事している漁夫達の間を縫って、二人の役人らしい者と、一人の兵士と、朝鮮人らしい通訳が、幹部部屋さして這入って行った。一人のロシア人は、G・P・Uの士官で、もう一人は税官吏、二人とも顔の半分を濃い髭で埋めていた。
「あれだけ髭イ生やしていたら、よっぽど寒さがちがうだべに。」
浜では、そんなことを云って笑いあった。
幹部部屋では船頭の奥野が、青木ともう一人の人夫廻しの丸山等を参謀格にして、壁の武器に凭れながら、「外交」を始めていた。
この「外交」には、多分のウォッカも流用された。酒量の強いロシア人は、咽喉へぶちまけるようにウォッカの盃を乾した。
「この間、この青木君をさし上げた通り、ああいう宣伝をする人間は、ぜひ貴国政府で取締っていただかないと困りますな！　あの後、あの尹という不逞朝鮮人を摑えてくれましたか？」
船頭は、自分の不慥かなロシア語をすてて、朝鮮人らしい通訳に、皮肉な長たらしい質問を出した。
どこと云って顔に特長のない、眉毛の薄い通訳は、流暢なロシア語で、ごく客観的に奥野の言葉を、青い帽子を被った、国家保安部の士官へ渡した。すべて、これから、この部屋には、同じ話柄が二重に反覆された。
「朝鮮人が、貴方の漁区に対して、労働問題に関する多少の宣伝をやったとしても、それは貴方がたの御注意を要する事柄であって、ソヴィエト・ロシアは、それに対して、

何等の責任を負うわけにはいきません。況んや、その×××が、×××である以上は、私達政府と何等直接な関係がないことはあきらかではありませんか。それとも、何かその男が私達の政府と直接関係があるという確実な証拠がおありですか？」

ロシア人は、ちょっと腰のピストルへ手を当てて、片手を揮いながら、通訳の方を向いて熱心に話した。

青木は、これには返事に窮して、コップの一つへ溢れるほど透明な酒を注いだ。稍あって、彼は、脱いである壁の外套から、例の撒きビラを取り出して、その皺を伸した。

「これには、ご覧の通り、明らかに貴国政府を擁護する言葉が書いてあると思われますがね。」と云って、彼は、大事な書面でもあるかのように、新聞ざらへ刷ったこのビラを通訳へ手渡した。

通訳は、青木の言葉を繰り返してから、二三語士官と話しつづけて、今度はそのビラの翻訳にとりかかった。

人間でいっぱいになったこの小屋の空気の中を、強烈な酒の香を慕って、真夜中の酔漢のような虻が飛び廻った。

「――あらゆる資本主義制度の下に苦しんでいる労働者は、×××××××××。又、それが当然でありましょう。しかし、ソヴィエト・ロシアに対する友愛や、同情などの意志の表示と、ソヴィエト・ロシア政府それ自らの行動とは、鮭と蟹ほどの相違があります。こんなものは、てんで問題になりません。――もし、本官が、貴方がたの御困難に対する同情の一端として、御忠告申上げたいことがあるとしましたならば、よろしくこの文書を本国の会社へ御送りになって、なるだけこの文書に於て、暗示しているような部分、即ち、×××××××××、会社の重役達から命令してお貰いになることでしょう！」

こんな頼りのない押問答の結果、奥野は、三本のウォッカと、半ダースのサッポロ・ビールとを空にした。士官達が検査済みのあと出て行くのを見送るより外はなかった。この男、悲しいかな、赤色労働組合というものの存在を知らなかったのである。

6

「――今日、いよいよ恙なく、この漁場に於きまして、網御ろしが出来たということは、偏えに皆様の協力一致の努力の賜物であります。そのことは、私ども幹部一同、山崎徳太郎商店に代って、厚く皆様に御礼申上げる次第であります。今更、私風情が申上げますまでもなく、賢明な皆様の疾くに御承知のこととは思われますが、抑々このカムチャッカの漁業は、我が大日本帝国が、かの日露戦役の際、数千億円の国帑と数十万人の同胞の血を流しました犠牲によって、名誉ある戦勝の記念として獲得しました利権であって、思えば、実に、その因って来たるところの意義は深く、その事業の持つ価値たるや尊いものでございま

す。御承知でもありましょうが、ここは名にし負う北極の端、東にベーリング海をめぐらし、西にオホーツク海を控え、露領カムチャッカの土地にいたしまして、我が海国男子を以って誇る、諸君日本帝国臣民達は、勇敢にも他国の領土に於て、水産業の第一線に立たるることにございます。――然る所以を持ちまして、諸君の一挙一動は、実に×××そのものの一挙一動とも云うべきほど重大な意義を持つものと考えられまする。諸君が各自の労働に身を委ねられ、専心専意これに従事されることは、とりもなおさず××のために、日夜××を擲んでらるることと同じなのであります。諸君は、実に光栄ある産業界の一部隊、前哨兵にも等しいのであります。本年の漁獲高が、必らず大豊漁であることを予想いたしまする私共は、皆さんがその豊漁を齎らすことによって、直ちに我が××のために××を尽されることになる、ということを切に感じまして、今からその実現の日の一日も早からんことを祈って居る次第であります。――じありますから、呉々も皆さんのうちにはあります。××に対する×××、最も忌わしき、××××××を為す者、徒らに×××××××××類いの輩の煽動に耳を藉さるることなく、自分の家に対して奉仕するような気持ちで、誠心誠意この漁場に於てお働きが願いたいのであります。……」

ここで終るのかと思うと、船頭の奥野は、もう一くさりのスピーチを附け足した。

「……お働き下さった結果によって、本会社と雖も、わずかに個人経営の会社ではございまするが、かの××漁業や、その他、田代三吉、八島八郎、萩布宗太郎その他の諸君にも負けないように、給金も増して上げまするし、魚もどっさりお土産に差上げまするから、何卒精いっぱいにお働きのほどをここに会社に代ってお願いいたします。――ええ、網卸ろしとは、ほんの名ばかりでございまして、何も御馳走はございませんが、この次ぎの一万石祝いを楽しみに、何卒一杯召し上って戴きたい。」

この切口上な挨拶から、一合ずつの瓶と、五個のぼた餅とからなる祝宴が始まるのである。その晩は、毛唐くさい身装の好きな奥野も、紺の香のする新しい印絆纏を着た。衿には「山崎徳太郎商店」と書いてあった。

女達には、酒の代りにサイダーとかりん糖、ぼた餅などが出た。一合の酒は恐るべき速度で、疲れ切った労働者の体軀の繊維へ浸み込んだ。糖分に飢えていた彼等は、咽喉が痞えるほど、がつがつと甘い物を貪った。酒の飲めぬ男は、一合の瓶で、一皿の餅を買った。餅の嫌いな男は、一皿の餅で二三本の酒を掠めた。誰一人として残すものはない。脚気に罹った三人の男は、何とかうまい言を云いくるめられて、忽ち割前を掠められてしまった。

「××の為めだ――もっと酔っぱらえ！」

「俺らア。×××××の第一線だ、およし、さあこっちさ来よ！　抱いてやるぜ！」

「会社の利益は、俺達の利益だとよ。松代っこ、さあッンドラの上さ行って二人で寝んべ！」

だんだんに呂律が廻わらなくなって来た。この網卸し祝いは、八人の女の争奪戦になりかかった。その間、げえげえ吐く者もあり、他人の蒲団の上へ小便をする者もあった。

「……おやじこれ見ろ、

×××だよ、何んてまがいんでしょ……」

などと、鉢巻をして唄い出す者もあった。隅の方に連れこまれた女が、報い顔をして一座の方を見ていると、急に撥ねかえって逃げて来るのもある。番屋の外では、晩くまで女達を追い駆ける男の犇めきが聞えた。幹部達は、いい加減に座を切り上げて、部屋へ帰ると、改めて、筋子や蟹罐を肴にウオッカを飲み直した。

「酒と女と――さえ当てがって置けば、野郎共は、当分大丈夫さ！」

これが、山崎商店代理奥野の哲学であった。

酔ったまぎれに、熊谷の「おいちょかぶ」に釣り込まれて、先借りの分までせしめられる者もあった。何もなくって、軍手や、帽子まで張る男もいた。もしものことがあってはいけないと云うので、副船頭と、丸山とが、番屋の廻わりを黎明近くまで警戒した。二人の外套のポケットは、ピストルとポケット・ウイスキーとで重かった。

こうして、彼等に許された乱酔の一夜が明けると、――凄さまじい雪崩れを打って、魚群の襲来する最初の朝がほのぼのと明けた。

鱒は、鮭と先を争って、産卵のために川をめがけて殺到した。海は、渋茶を煮つめたように褐色に変じて、海豹は魚を追うて、コマンドルスキー辺から、大挙陸をめがけて押して来た。熊は、人間の居ない場所をねらって、川岸に撥ね上がる魚をあさり廻わった。

大きな半島には、鋭い鞭のような、夏の最初の光線と共に、騒々しい生物の移動と生存競争が始まった。その中には人間という飢えた動物も居った。

7

網は沖へ張られた、縦四間、横十間ほどの長方形の箱のような、目の五分角の、糸の窖へ魚の這入る個所だけ真ん中を円るく刳り抜いたもので、底は五間も海底に浸った。網の幅だけ浮木が現われていて、それを目安に、漁夫は漕いで行くのである。一艘の川崎船には、二十人から乗って、それにには部長が音頭をとる。網を手繰り上げる時間が一時間、漁があったとなると、日に十五六回は出動する。一と網の漁獲高は、大概一千尾ぐらいのもので、それを船へすくい上げて、発動汽船で岸まで曳いて帰る。魚は大きい畚で、船から直ちにウインチで捲き上げられ、それが、空中で水を切りながら浜デッキの上へ算を乱して開けられるのである。沖へは、一と網ごとに三十人ずつ出た。それ等の

労働の結果は、陸の百三十人ほどの労働によって、次第に食料品の山脈を築いて行くのだ。浜デッキでは四十人からの漁夫がマキリを持って、魚の腹を引き裂いた。小さな踏台みたいなものに腰を掛けて、その前にある箱へ、筋子は筋子、鮭は鮭とべつべつに投り込まれた。デッキのすぐ傍をトロッコが通っていて、割かれた魚を満載しては、浜の方へ運び出した。筋子笊は、一尺五寸ほどの口径を持った不潔な容器であるが、それに魚の血みどろな卵を充満して、四人の雑夫が山樵夫のような「背負い子」で筋子を運んだ。トロは六台あって、一台に二人ずつ附いた。塩漬にされるのは鮭だけで、鱒は畚で罐詰工場へ運ばれる。トロで運んだ鮭は、一時、塩の山からシャベルで投り出される荒ら塩の中へ埋まる。広い鮭の山が一町ほどの長さに盛り上がって、それが烈風の当る浜の砂丘のように、幾つも幾つも高まって行く。

罐詰工場では、最も幼稚な、不衛生な、機械力と関係のない作業が始められる。高い木馬のようなテーブルが設けてあって、四人の漁夫が、一尺五寸ほどの庖丁で、絶えず首を振りながら、押し寄せて来る鱒の大群を、罐の大きさだけに切断して、血綿の流れる両側の滑り台の上を、三人ずつの女漁夫へ落してやる。無数の、蓋のない空罐を持った女達は、臓腑の破片といっしょに落ちて来る魚肉を、黒い垢の溜った爪先で罐の中へ押込む。一人の男が、罐の蓋とはんだとを持って、ごく原始的な手附で鱒の罐詰を製造する。一とわたりはんだの附いた生魚の罐が揃うと、その男は、背後の醜い大坊主のようなボイラーの中へ、それを積み上げる、亜鉛一枚奥の機関場では、唯一人の機械技術の獲得者である、薄痘痕の男が、ゲージ・グラスと腕時計を見くらべながら、スチームを上げている。錆の附いたボイラーに、錆の附いた鉄蓋が載ると、一間の高さを蓋附け人が土足のままで下りて来て、「おう、室田さん、やってくれよう！」と叫ぶと、薄痘痕の室田が栓を捻って、蓆張りの工場へとスチームを通す。大坊主は、吸入器を当てられる子供のようにじっとしてだんだん汗をかく。蓆張りの工場は焼けるように熱くなる。無数の蠅が、カムチャッカ全半島から、このうす生臭い、血だらけな人間の汗と体臭と温室のような温みに充満した作業室へ魅惑されて、蓆二枚ぶりの入口から、雨のように飛び込んで来る。工場の外側、即ち蓆の外側には、嗅覚の強そうな蠅の群が、鋲のようにべったりくっついて、何かの隙を狙っている。罐詰は一定の熱量を与えられた上に、もう一度取り出されて、冷却した上で、空気抜きをされる。恰度レッテルの貼ってある辺に、はんだの痕跡のある、田舎廻わりの「鮭罐」というのが、この漁場あたりから出る鱒の、ナポレオン当時とさほど変っていない製造法の、罐詰なのである。筋子部屋には、四人の漁夫が、魚の胎児を塩漬けにして、大樽へ詰め込むという残酷な作業に、血だらけになっている。こうした樽詰は、この山崎の漁場では、一と夏三百樽ぐらい

しか出ないのである。罐詰はごく大漁で六百箱、落ちて四百箱ぐらいしか内地へ輸送出来ない。
鮭は、浜の塩に埋められたまま、十日から十五日ぐらいまでそのままにして置かれる。ときどき熊が来て、その塩鮭を浚って行く、その間に蛆が鮭の身へ卵を産み附ける。蛆が湧く。そういう魚は、内地へ来ても肉に締りがなくて腐っている。そのあとで「形付け」が行われる。これは八人ずつの漁夫が一組になって、鮭の山を、一日に一石ずつ整理して行く。一石は鮭にすると八千尾、鱒はその二倍ぐらいに相当した。その整理の方法は「塩切り」と呼ばれて、魚の肚へ塩を詰めるのである。一日で卸ろし立ての軍手の指がぼろぼろに擦り切れるほど、粗い劣等な塩が使われる。魚の肚へ塩を詰めると、それを一石ずつ四角な山に積む。八畳四方ぐらいの山には五十も六十も要塞のように築かれる。それ等は、積み上げられるや否やしっかと菰掛けされて、帰りの汽船を待つのだ。
——魚を漁獲して、それ等を食料品にまで生産する過程を、百六十三人の労働者は、眼も鼻も耳も無い動物のようになって、単純な激労を、無数に、機械的に繰り返した。彼等を、労働する動物にするために、七人の幹部は、彼等よりももっと機械的に、もっと無神経に呶鳴り散らし、動き廻り蹴きつけ、威嚇して歩いた。
わけても、この盛漁期に、魂の底まで酔っぱらってしまうのは、円い鼻と、凄い眼の持主である副船頭の青木であった。彼は、血を嘗めた熊のように暴れまわった。この男の持っている野獣性は、最初の一と春の鱒の群を見たときから、狼のように猛り立った。彼の眼は血走り、鼻のくびれは深み、棒を握った拳には血管が膨らんだ。当るものは突き飛ばし、躊躇している者は蹴り上げ、少しでも命令に不服な顔をする者があると顔が歪むほど殴りつけた。怒ることがこの男の労働の能率を増すことであるかのように、彼は働きながら怒り、怒るとますます他人の気づかないことにまで飛びまわった。まるで、彼の行動は、非常に腹立たしい仕事の中を、どうにかして早く切り上げようと焦心っているかに見た。鮭は、確かにこの男を狂人にした。
青木の残忍性の、当面の摘発者は、番屋に寝ている三人の脚気患者と、一人の淋病やみとであった。彼は朝の二時頃から、自分の受持ちでもない人夫起こしに呶鳴りこんだ。
「やい、この穀潰し奴！ 貴様らが寝そべってけっかるために、昨日は一石からの鮭を取り逃がしたぞ！ 鮭は生き物だ。鮭っ子はあ、手前らみたいな怠けもんとちがう。鮭には鰭があるぞ、泳いでるんだ。ぐずぐずしていたら、来年まで泳いで逃げて行くんだ。——起きろ！ 起きねえかこの出来損いめ！」
こういう前触れで、彼は床の上を樫の棒で撲つ、続けさまに、撲った。青膨れた顔をして、患者の一人が、蒲団の下から手を合わして拝むと、憐愍という贅沢な感情の余裕

を持ち合せない彼は、長く伸びたその男の髪を引っ掴んで、蒲団の上へ坐らせると、背後から××××××××××××××。男の眼からは、水のように涙が流れる。三分芯のランプの下で、周囲の人達は、朦朧としたその暴動の輪廓を見、鼓膜を剪くような騒動を聞き、身体中に蠢く虱を自覚しながら起き上がる。こうして四人のうちの一人は、無理に出された沖仕事の最中に××××××××××××××。もう一人は、倉庫×××××××××××。百六十三人は、百六十一人の労働者になってしまった。それにも拘らずに、病人は次ぎ次ぎと殖えて行った。

　一日五回の米食は、勢い米食者特有の脚気病を蔓延させた。そちらにもこちらにも、靴を脱ぎ、股引きを外ずし下穿きをまくり上げて、脛を圧して見る者が多くなった。それと同時に、この不完全な漁場の司厨部では、さながら労働者を窘しめるための陰謀でもあるかのように、野菜を断らしてしまった。馬鈴薯と玉葱が、味噌汁の鍋から消え、南瓜が最後の片影を没してから、暫く若芽の味噌汁がつづいた。若芽の味噌汁から、この唯一の副食物は、急激に飛躍してサンペイ汁となった。この妙な名前のスープは、頗る経費節約を主眼としたもので、それを調理するには、大鍋へ水を一杯沸かせばよかったのである。水の沸騰したころ、最も自分の労力を経済的に消費しようと心掛けている三人の老人は、手鼻をかんだ手で、昨年の塩鱒を、滅多矢鱈に切りきざんで投りこむのである。これがサンペイ汁。漁夫達の或る者は、それを「いっぺい汁」と称した。それに、沢庵と云えば、第三函館丸が、百七十人をここへ上陸（あげ）た日からの下漬みが、塩を吹き、黴を吸収するごとに、じゃぶじゃぶ洗われては又澄ました顔をして所に納まるのである。そこで、漁夫達は夜陰に乗じて沢庵を盗んだ。又、味噌をくすねて、ストーヴで鱒を焼いて食った。偶には、魚を追うように夢中になった海豹を、網の中で撲殺して、その肉を食う者もあった。臭い海獣の肉は、ひどく下痢を催させた。――総じてこれらの悪食は、菜食本位の労働者達に壊血病を起させた。ちょっとしたマキリの切り疵でも直ぐに膿んで、腫れが関節へ伝わると、局部を中心に毒薬のような光りが皮膚一面に漂った。

　こういう不健康のための各種の陰謀がめぐらされている傍ら、労働者の腕時計を踏み砕くほど時間に対する錯覚を持った幹部達は、時と燃料と労力の節約を思いついて、絶対に入浴をさせなかった。事実、一度、網を染めた時に、百六十三人は、との粉を煮立てた湯の中へ入浴させられたことがあった。湯が熱かったためではなくて、彼等は、湯に含まれた染料のお蔭で、非常に血色のいい労働者となって現われた。それも網卸ろし以前、カムチャッカへ着いてたった一回の話である。虱が湧く。かぶれが出来る。醜悪な体臭が、彼等の一挙一動から噴霧器のように発散する。彼等は猿のようにものを云うごとに体を掻いた。ちょっとした仕事の手隙きがあるごとに、両手は猛烈に旋回運動をつ

づけた。眠っていても、身体を掻くことだけは忘れない。漁場をこぞって、悉くの人間が、食事にも、会話にも、作業にも、生活の全部を、妙な手つきをするために捧げた。まるでその手つきをしないのは人間でないように。しかし、人間は習慣である。やがて、このがりがりと皮膚を掻く音、むしむしと着物を押える恰好、擽ぐられた女が逃げ出すような背の筋肉の運動、それらも珍らしくはなくなった。そして、それが珍らしくなくなった頃に、この漁場へは病気が真剣に領分を拡張しはじめたのだった。

五人、六人――と脚気が殖え、浜デッキの連中は日に三人ずつも怪我人を出し、梅毒や淋病の発生する者が憂鬱に寝そべる。こうした病院の内容を持った作業場が完全に実現すると、そこには、××××××××、甚だしい個人的侮辱を歯糞とともに吹きかける、獰猛な七人の「医者」があるだけであった。この漁場では大概の病気は一度罹ったら最後、それはツンドラの彼方を意味した。ツンドラの彼方は、同時に、箱作りが板を惜しみ惜しみ拵える窮屈な棺箱を意味した。それは同時に、その上に樹てられる細長い木の札を意味した。木の札に、その男の漠とした原籍と姓名だけは残る。しかしあまり木の札が小さいので、その男の病名も、その×××××到らしめた七人の悪魔のような「医者」のことも書いてはない。

病気に罹らない者も、髪は刈らず、髯は伸び放題に伸び、ろくに顔も洗わないところから、ギリヤーク人の家長のようにじじむさい、黒光りにひかる、痴鈍な、睡眠不足な顔になって、一人として人間らしい血色の者はなくなってしまった。臭い、垢光りのする、木の葉を綴り合わしたような襤褸をうちふり、猿人類のような労働者達は、仕事の前に絶望的に手足を動かしながら、何一つ考え直す力もなく、毀れて水の浸み込むゴム長をぺかぺか鳴らしながらよろめき廻わった。

人間の窮乏状態とは無関心に、孕みきった魚類は、青黒い氷河の押寄せるように、網が張り裂けたことも、夜も昼も川を溯って雪崩れこんだ。網が張り裂けたことも、一度や二度ではない。狼狽した人間は、大自然の無尽蔵な宝庫から溢れ出る、魚の形をした「富」にむかって、人間の企て得るあらゆる手段を竭して、その獲得と、独占と、保存のために、お互いに憎みあい、格闘し、腹立たしい謀計で欺かねばならなかった。

網揚げである。朝から時化気味な空は、船を出すときには、沖の標木が見えぬほどの密かい雨になっている。海はこの白い混沌の奥から、大太鼓のような地鳴りを打っている。少し経つと、礫を八方からぶちつけるような雨になった。風が加わって、底気味の悪い波濤が、白い巻紙のような頭を見せて、むくむくと流動する丘を拵えては、急に深い谷底にせり代る。漁夫達は網の両側に船を寄せて、骨を切るほど冷い網を手操りにかかる。魚は、透明な青黒い背を見せて、だんだん縮小して行く自分達の隠れ家に狼狽して、互に弾きあいながら、水底を逃げ廻わる。目脂を溜め

た部長が音頭をとってこう歌う。

「徹夜徹夜で……エヤホウ、
扱き使われて……エヤホウ、
いくら俺らだって……エヤホウ、
堪りあしねえ……エヤホウ、
函館さ帰ったら……エヤホウ、
船頭の鬼め……エヤホウ、
みんなでぶん殴れ……エヤホウ、
ぶんなぐってやるべえ……エヤホウ」

この悲痛なコーラスに、東京者の宇田川は、一段ときんきら声を張りあげて即興をやった。

「協力一致で……エヤホウ、
国家のために……エヤホウ、
御国のためなら……エヤホウ、
×××××……エヤホウ！」

と、八分通りあがった網の傍へ、部長の合図の櫂を逆さにしたのを見つけて、揉まれながら到着した発動汽船から船頭の奥野が桐油紙で包んだ肩を聳やかして、屹と一同を睨め廻わした。

「資本家がなくなったら……エヤホウ、
×××××……エヤホウ」

歌はつづく。奥野は痙攣的に、長い手鍵を握った片腕をぶるぶる震わせて、口から唾といっしょにバットの切れ端を海面へ吐き棄てた。

8

人間はどしどし仆れた。

それに反比例して鮭は殖えた。

百六十一人の労働者のうちで、満足に手足の動く者は、百三十人位しかなかった。あらゆる境遇に適応する本能を持った女達だけは、土地に馴れて、風邪一つ引かなかった。

寝たままになって起きあがれない者は、どんなに人夫廻しが乱暴をしても、するがままにさせて置いた。病気は、彼等をして教えられざるガンディストにした。人夫の動員が利かなくなると、船頭以下六人の幹部と、百六十一人の間に食い込んでいた古参労働者とは、彼等の本性を遺憾なく曝け出した。いたる処に私刑が行われ、××××××××××、青膨れの若い者が、通路の上で泣き喚いた。新参の労働者の中にも、次第に不安と凶事の予感が働きかけた。あらん限りの力を絞って、盲目的に働いている瞬間、思わず、深い陥穽のような睡眠が襲って来る。ふと、手をやすめたと思うと、鼻が酸っぱくなるほど、××××××××殴られていた。幹部達の樫の棒は、奴隷のような乱用から×××××××××××××。奴隷のような、麗々の恐怖心が人達の外皮として発達したとすれば、その一枚下には血管のような反抗心が次第に膨張して行った。幹部達

の厳格な、搾取的な組織力にも拘らず、組織それ自身がだんだん毀れて行って、雑夫が漁夫に廻わったり、腹裂きが船へ乗ったり、筋子部屋の連中が塩切りへ廻わされたりした。病人や半病人が動員されるために、人夫廻しは余計に気を張って、自然と自分でも労働者の職分へまで手を出すようになった。奥野と青木とだけは、この狂い出したような漁場の絶対専制政治の二大柱として、さすがに一歩も譲るところなく闘争の渦中に頭を擡げて歩いた。しかし、何とその手の血みどろなことよ！

眠られぬ夜がある。たった二時間の睡眠時間であるとは覚悟しながらも、若い漁夫達の間には、暗黙のうちに約束が出来ているように、こっそり番屋を抜け出す者がある。三人、四人、五人……それが夜ごとに殖えて、三十人ぐらいの集会者を持つようになる。三十人の集会者が寄った頃には、この小さな団体の中に秘密な申合せが出来ている。彼等は、着陸当日気絶するほど殴られた青年のポケットに保存されてある撒きビラを中心に、いろいろな復讐を計画した。そして、その大部分が衝動的な、むら気な、個人的報復であったがために、次第に淘汰されて行って、各人に共通した、全般に利害の一貫した、一つの決議が、そこに下されたのである。

それは、要求書の形をとって、青年戸田によって読み上げられた。

「要求書

一、作業時間の短縮。労働は八時間以上を課せざること。

二、病気の者は、速かにペトロ市より医師を呼びて診察すべきこと。

三、味噌汁に馬鈴薯其他の野菜物を混ずること。コレは絶対的に必要だ。

四、幹部七人の不法なる打擲及び暴行を全廃すること。

五、病臥中と雖も必らず一定額の賃銀を支払うべきこと。

六、賃銀は、全漁獲額の今年度相場による卸値段の半額を、漁夫雑夫××××××に分配すべきこと。

右六件を、山崎徳太郎商店借区漁場に於て、×××××として最も必要なる保護条件として、我等一同これを要求す。

漁夫及雑夫有志

このごく幼稚な形式の要求書は、夜、番屋のランプの下で「日露会話階梯」の万年筆で、汚い書簡箋へ認められた。翌る朝、第二回目の朝飯の拍子木の鳴るのを合図に、三十人は一団となって幹部部屋の入口へ立った。

頻りに帳簿の上へ踞みこんで、何かを記入していた奥野は、一と目に不穏な空気を見てとってすうっと背を伸ばした。伸びあがった彼の咫尺の距離に、磨きあげた兇器があったのである。人間だけは当てにならぬとしても、これらに狂いはない。

「何だ、何しに来た？――」
　彼は尖がった顔から、優秀な歯を剝いた。
「これですか、私達有志の間で、よりよりこういう決議をしたのです。非常に困った挙句、やむを得ずとった手段ですから――是非読んで戴きたい！」
　宇田川は一同を代表して、テーブルの上へ、その拙劣な、しかし誠意に満ちた紙片を差し出すのである。
　こういう場合に、こういう紙片を読む資本家や、資本家の代理人の表情は、近代の社会では一つのタイプとなった。それは、先ず、彼等が鼻の先で笑うことである。次ぎに××××××卑猥な文書へ眼をやるように、頗る軽蔑すべきものとして、眼から一段と紙片を遠ざけて、ざっと要求個条の番号だけを読み通すことである。最後に、その表情の形式として、不可抗的にそれを読んだ人間の唇が、犬が牙を剝くときのように、少し宛釣り上がることである。その釣り上がりの結果、白っぽい笑いが、その男の顔の半分を歪める。船頭奥野も、ほとんどこれと寸分ちがわぬ表情を踏襲した。
「――こりゃ何だね？　お前達が大勢かかってやっとこれだけ字が書けるということを見せに来たのか？　笑わせるねえ！　この漁場が始まってから、労働争議なんて、ただの一度もなかったんだぞッ！」
　ここまでは、稍尻上がりながらも普通の人間の応対であった。それから急激に奥野は、弓弦のような眉毛を引絞った。
「馬鹿ッ！――出て行け！　ここは貴様らの這入る処じゃないぞ！　まごまごしてやがるとぶっ放すぞ！」
　この早口の怒号とともに、彼れの右手には兇器が光った。三十人の有志は、ちょっと見えない手で瞼を殴られたような顔をした。
「読んで見給え！　君は、読まずに俺達を追い払おうたってそうは行かねえんだ！　もう君達のこけ脅しには飽き飽きしたよ！　俺達に正当な理由があるからこそ、この要求書は書かれてるんだぜ！　何も昼、日中、大勢こうやってだてや狂言で押しかけて来たんじゃねえんだ！　悪りいことは云わねえから、ずうっと読んで見な！」
　宇田川は、盛んに人さし指を使って、奥野へ肉迫した。見ていると、まるで、指一本で対手の兇器と撃ちあいの真似をしようとしているかに思われた。
「これか」、奥野は、冷蔵庫の奥から笑い出すような声を立てた。「こんなもの！　こうしてやらぁ……」
　痩せ骨張った指の間に、不眠不休で有志達が文案を練った要求書は、いかいかながらのように引き裂かれてあった。
「破きやがったな！　この野郎！」
　二人の男が、宇田川を押し退けて、船頭の前へ突進した。それは、雑夫の浜本と、秋田者の田中とであった。
「破いたがどうした！」
　奥野の疳高い声は、もう一つの遥かに強度の爆発性を伴

った響きと、すれすれになって空気を劈いた。轟然とした反響と共に、××××××××××、××××、××××××××××××××××××××××××、×××××××××××××××××××××××××田中は斃れた。一同は何を意識することもなく、先ず煙硝臭い、あとからあとからと湧く煙の層に驚いた。彼等は床を鳴らして、戸外に飛び退いた。

「撃て！　××！　手前、×××××××××××！　××××××、指を啣えて引っ込む俺達と思ってるか！　さあ、こうなったら××だ。いや、×××××だ！　この漁場へあやめの花が咲くまで、俺達は根絶やしにしてやって見せるぞ！」

宇田川は、絆纒の袖をまくって啖呵を切った。戸田と浜本とは、瞼をひくひくさしている田中を抱えてよろよろと番屋の方へ歩み出した。彼等も亦疲労し切っていたのである。

銃声を聞きつけて、全漁場は針で突つかれたようにびくんとした。次ぎの瞬間に、これほどこの浜に人間がいたかしらと思われるほど、浜デッキから、飯場から、小舎小舎から、老人とも若い者とも見分けのつかない、髯むくじゃらな人間が、番屋の前の広場へさっと聚まった。

そこで、昂奮した戸田は、眼鏡のない細い眼を脳天まで釣りあげて叫んだ。

「諸君――×××××！　沖へ出た者は船を戻せ、デッキの連中は魚をずたずたに切り裂いちまえ。塩切りの連中は手当り次第に魚を海へ投り込め。機関場はスチームをあげるな。女達は、さっそく飯場へ兵糧の用意をしろ。手の空いてる連中は、手当り次第に獲物をとって番屋へ聚まれ。諸君、よく聞けよ！　今、僕達の仲間である××××、鬼のような船頭の手にかかって、××××××やられたんだぞ！」

もう一度、彼れの記念すべき鳥打帽が、人達の頭上に烈しく揮り廻わされた。

9

その瞬間から、俄かにこの漁場は解体した。解体作用は意外に迅速で、崩壊的であった。

走っていたトロが滑走を止めた。レールは地図のように静かになった。塩の山の中に、変挺な墓標のようなシャベルが突っ立った。樽からはみ出た筋子が、ひとりでに、生き物のようにべったりと砂へ落ちた。半分釣るし上げた畚を、途中で突っ離したウインチは、暫く肩胛骨の外れた職工のようにぶらぶらして、舷と砂の上へ等分に塩水を撒き散らした。ウインチの動力である、機関部屋ががら空きになったからである。青年戸田の指令したように、浜デッキの漁夫達は、鮭をめちゃくちゃに切らなかった。その代り数万の銀蠅が魚をあさっていると、××××××××

××××××××××。平常から憎まれている炊事番の老人達は、釜に飯を残したまま、幹部部屋の向うへ行って震えていた。罐詰工場では、腐敗しかかった物が、慌てて腐敗し出した。罐をいっぱい詰めたままの大釜は、煮えたぎるほど煮えたぎって雪がカムチャッカへ来て、それを冷凍するまでは、さめまいと思われた。女漁夫達は、幹部部屋と飯場の中間に塊まり合って、大地震のあとのように、口を円めながら八人いっしょに声を殺して話し合った。この時だけは、番屋に寝ていた脚気患者も、破風症患者も、淋病も、梅毒も、起き上がったり、飛び出したり、泣いたり笑ったりして、ことの外番屋を騒々しいものにした。はっきりと、二つの階級に百六十八人は分裂した。幹部の組と、労働者の組と。これは最初の日に、奥野が組み合せたよりもより単純な組み合せであった。×××××、××××、××××××××××××——古参の半分かたは、わけが解らなくまごまごしているうちに、青木の樫の棒で事務所の前へ追いやられた。ほかの半分は、手を休めるために、居なりで番屋の近くへ屯ろした。浜デッキを中心に、鮭の山々へかけて、むらに散らばった連中が、一と塊まりずついろいろなことを喚きあった。だが、何と云っても、××××××番屋の中が一番人混みがしていた。自然と、飯場が雙方の交戦区域にならざるを得ない。一人の男が、事務所の筋向いの倉庫から、女達を手招ぎした。人夫廻しの杉山君であった。

「危いから、こっちへ来い！」

女達は、幹部に従順であった。わけても杉山君は、今こそ、朝鮮の貴族のそれのように伸びてはいるが、ちょっぴりした歯ブラシ髭の持主であったのである。彼等は、猫のように背を円めて倉庫へころげ込んだ。

番屋の中では「日露会話」が、声を張りあげて戦線の状態を報告している。

「今、幹部部屋にいる奴等は、×××と見做していい。奴等は、総勢で、七十人を少し出るぐらいだ。俺達と、俺達の方へつこうとしている人間は、女を除いたあと全部だ。これから、俺達数人は、まず手に這入るだけの×××や×××や×××を、この番屋へ聚める。そして、人間の数に応じて、喧嘩する者へそれを割当てる。浜にある××も持って来よう。それから弾丸除けには磯船を横にすることだ。出来るなら、このウインチの鍵を、事務所の屋根へ引っかけて、あすこを根こそぎぶち毀わしてやりたいんだが——誰かこの危険な作業に志願する者はない？　塊って行けば弾丸の二三発も食ったって犠牲が少しで済むというものだ。あったら手を挙げてくれ！」

「俺がやる！」

手を挙げたのは、薄痘痕の、漁場で唯一の機械技師であった。しかし、彼は孤独ではなかった。彼は単に口火の切り役であったに過ぎない。十本ほどの手が、手の持主の正直な顔を説明して空中に突き出された。

だが「日露会話」のこの突飛な計画も、志士を募っただだけに終った。
奥野の不正直な時計で十一時頃、思案に余ったような顔をした老漁夫達を先に、奥野、青木と杉山とを除いたほかの四人の人夫廻しが、手拭をふりながらおずおず飯場まで歩いて来て、疲れたような声を絞った。
「おーい、誰か、話の解る奴を三人ほど寄越せ。別に乱暴するんじゃないから、安心して出て来いよ。話がつくものなら、お互いに相談づくで行こうじゃないか！」
飯場では、元気のいい声が笑い出した。それに釣り込まれて元気のない声も笑い出した。
「何だ、めしの上の蠅みたいな声立てるなってよ！」
一人がこう云うと、再び笑いが伝播した。
飯場の前では、丸山の声がいよいよ悲痛な調子を帯びた。彼は、額の疵へ血を集めて叫んだ。
「——そんなことを云わないで、ちょっと出て来な。悪いことは云わねえ、お互いに為めになるように話し合うから、そう喧嘩腰にならないで呉れよ。……船頭さんだって、非常に後悔してるんだ。決して手荒らな真似はしないから、代理の者を事務所まで出してくれ！」
「船頭さん糞喰らえだ！　函館の裁判所で話をつけるとそう云え！」
戸田は真っ赤になって莚の折目から、子供がラジオ放送の真似をするように、鼻にかかった声で叫んだ。
「しょうねえ奴らだな！……」
丸山達は、唇を嚙んで呟きながら、いったん事務所へとってかえした。
どちらも、飯場を緩衝地帯として、釜に入った飯を中心に対峙した。ただ、番屋側には、眼の前の生魚がいくらでも手に入ったのである。
長い沈黙ののち、巨万の鮭がこの漁場を素通りすることに、すっかり気を腐らした奥野が、十杯目のウオッカを、半分口からこぼしてこういった。
「よし、やっつけろ！　あのひょうろく共を抜きにして、この漁場を開くんだ！　そして見付け次第にあいつらは、擲いて擲きのめして、それでも、気を失わない野郎は、体軀へ鉛の芯を通してやるんだ。——俺らあ、どうあったってこの夏を失策じっちあ、山崎の旦那に合わせる顔はねえ！　さあ、皆びくびくしねえで、ここにありったけの××××や××をかつぎ出して、飯場で腹をふさいだら、仕事に取りかかれ！　それから、丸山、お前御苦労だが、ウスの方へ一と走り行って、無電を打って貰いてえな。百人でも、二百人でも、腕っ節の揃った若けえのを急に狩り集めて送ってくれえってな……いや、待て、そんな気の長げえことをしていたら鮭はいなくなる。仕方がねえ、泣きを入れて隣りの漁場から、雑夫を少し廻わして貰うか。——ええッ、こんなことをぐずぐずしているひまに、魚が逃げて行く、川口のロスケの工場へとられてしまう、金が塊って

泳いで行きあがる！」
　奥野の命令は、だんだんに独白的形式を帯びて来た。しまいに彼は、起ち上って髪を掻き毟りながら、凄い眸で、そのへんに棒立ちになっている連中を睨みつけた。
「青木、青木は何処にいる？――間抜けめ、青木を呼んで来い！」
　こう云われた人夫廻しの二人が、へどもどして副船頭を呼びに、人をわけて外へ出た。青木は、一時間ばかり前にそのへんで呶鳴り散らしていたが、何処かへ姿を隠してしまった、と云うのが、そのへんをほうづき歩いた二人の最後に突き留めた報告であった。
　青木はいなかった。――
　それもその筈である。この熊のような悪漢は、浜の鮭の山の蔭で、××××、×××「××××」××××××××××、×××、×××××××××××××××××××。
　最後に、×××××××××××××戸田は、彼れの死骸を××××××、××××××、宇田川の耳元へ囁いた。
「嫌に温和しくなったな！」
「××××、口ほどにもねえ！」
　宇田川は、額の汗を手で切り落しながら、乱れかかる長髪を、ぐいと後ろへ投げた。
「おい、どうやら、青木を呼んでるぜ！　こりゃ、こうしちゃ居られまい。逃げよう！　どうせ、こんな腐った漁場なんざ惜しくはねえよ」
「日露会話」は、二人をうながした。三人の足元には、×××××××××××、×××××××××、××××××××××××××××××。
「どっちへ行く？――」
　戸田は、足を暗示的に動かしながら、二人へ訊ねた。
「日露会話」は、無数の蠅を飛ばしながら、奥地の方を指さした。むんむんする腐魚のいきれの彼方に、秀麗なカムチャッカ連山が、海よりも蒼く聳えた。
「ツンドラを横切って、奥へ奥へと行くというと――白樺の森がある。毛唐の眼玉よりもまっ蒼な湖がある。そこには、ヤークックや、ギリヤーク人の部落が散らばっている。ソヴィエト・ロシアの北方の開拓者が、俺達労働者を喜んで迎えてくれる。こんな、尻の穴の小さい×××××の腐った鮭なんど喰わなくとも、×××、労働と、もっと、もっと××××××があるんだ、どれ、三人で、一と股ぎにモスクワまで伸すか！」
　たしかに、この男は、語学の初歩的研究者であったとともに、××××××××××、第一級生程度のピオネールであった。
　もう、彼の破れたゴム長は、白樺の森への第一歩を踏み出していた。
　そして、その震える拳には、大概の会話には間に合いそ

うにない、怪しげな「日露会話階梯」の一巻が、ピストルのように握られてあったのだ。
そのとき、番屋の方に当って、もやもやと大勢の話声が聞えて、それがばったり止んだと思うと、船頭奥野の声としてこういうのが聞えた。
「おう、番屋の連中――俺あ負けた！　酒を出すから、あっさりと今日の始末は飲み流してくんな！」
その声を聞いた三人は思わず顔を見合わして、首を縮めながら鮭の山の下を、足早やに走り出した。

傷だらけの歌

……明日は　インターナショナル
われらがもの……

藤沢桓夫

一

一九二六年十一月。モスコーにて。
故国の同志よ。
マムシよりも執拗にたたかいつづけている君たちを想う。
早いものだ。僕が、君たちと京城とに別れを告げ、スパイと憲兵と騎馬巡査とにもひそかに別れを告げ、杏の樹と温突と玉蜀黍畑と赤禿げの痩せた山々とから成り立っている故国の風物にも別れを告げ、豆満江を渡り、長白山脈を越え、無事にシベリア鉄道に投じてから、すでに百五十日がすぎ去ろうとしている。

そして、僕はもうすっかりこの革命の赤い都会の生活に慣れてしまった。僕は、露西亜人たちがするように、湯沸器からお茶を飲み、酸乳を頬張り、安煙草のマホールカの甘い刺戟性の青い煙を吐き出している。そして、海狸の古っぽい帽子をすっぽりと被り、高架索人のような恰好をして街を歩いている。

極東共産主義大学の生活は、非常に愉快であり、不断に僕を闘争へと駆り立て訓練づけてくれる。僕たち朝鮮人の学生は日本の同志たちと一緒の教室だ。みんなよく勉強する。が、僕も決して負けてはいない。みんな若い労働者だ。が、そのなかでも十八歳の僕が一番若いのはちょっと愉快だ。とにかく、故国へ帰る日のことを考え、懸命にやっています。教室は討論会だ。教室以外に、労働組合や工場の見学が殆ど毎日ある。これがまたとても有益だ。

故国では、樹の葉が乾いて散り、蒙古の風が黄色い砂塵と一緒に少しずつ冬を運んでいるに相違ない。が、モスコーではとっくに厳冬がはじまっている。気温は氷点よりも低下し、凍った雪が鋪道を固くし、灰色の空が重く垂れ下っている。日没は早く、そしてこの革命の赤い都会では、黄昏は、青い色をして、雪と工業の新しい鉄骨と会堂――そこでは、坊主の代りに、労働服に星のマークをつけた赤衛兵が喇叭を吹いている――とウクスクの樹立との上へ降りて来るのだ。そして、社会主義的建設の巨大な歯車は、都会全体に、唸りをあげてドッドと廻転している。フェルトの長靴をはいた軽快な断髪の女子青年共産党員は、寒い凍った空気のなかへ白い息を吐き出しながら、歌うのだ。

以前はみんな皇帝の
玉座から遠く離れていたが
傍まで行ってよくよく見ると
玉座に坐っていたのは鴉さ！

こう言う自由そのもののような歌声ほど、階級的搾取と民族的抑圧と――この二重の桎梏の下に喘ぎつづけている故国の人々のことを、対蹠的に、僕に思い起させるものはない。敵へのはげしい憤りと復讐の感情とがどっと僕を突き抜ける。

が、故国の同志よ。僕は、今日は、ゴリキーの新刊の小説のなかに出て来るその快い歌についてではなく、もっと別の歌――傷だらけの歌について、君に書いて送ろうと思う。

傷だらけの歌――それは「インターナショナルの歌」だ。第三インターナショナルの歌であり、世界の労働者農民の団結と闘争と勝利への歌である「インターナショナルの歌」だ。

何故それは傷だらけの歌なのか？　何がそれを傷だらけの歌にしたか？

殴打、足蹴、宙吊り、逆吊り、鞭、竹刀、赤いゴムの太管、指折り、水漬け、その他ありとあらゆる拷問と、ピストルと、機関銃と、絞首台と、電気椅子とが、それを傷だ

らけの歌にした。世界の帝国主義の強盗どもとその同盟者どもとそのあらゆる手先どもが、それを傷だらけの歌にした。われわれを苦しめ、妨害し、追及し、傷つけ、死刑にする、一切のものが、それを傷だらけの歌にした。

故国の同志よ。僕のこの比喩めいた言い方は、思いあがった感傷主義として、君を不愉快にさせたであろうか？あるいはさせたかも知れない。が、もう少しこの手紙を読み進めてくれ。そうしたら、君は決してそれを思いあがった感傷主義だと思わなくなるに相違ない。きっと僕の言い方に同意してくれるに相違ない。

去る七日、露西亜革命第九周年記念が祝われた。京城でも、いや、労働者農民の組織のあるところではどこでも、世界中で、いろんな催しが持たれたことだろう。が、本元のこの国がいかに美しく沸騰したかは、言うまでもなく、それとは比べものにならぬ。モスコーではすべての人間が明るく笑った。赤の広場を中心に、何十万と云う労働者、兵士、少年団の示威行列が力強く盛り上り渦巻いている容子を、よろしく想像してくれ。

夜、労働者会館の一室を借りて、そこで世界被抑圧民族大会が臨時に持たれた。僕たちも出席した。百五六十人のいろんな皮膚の色が集まった。第三インターナショナルの中央委員をしている支那の或る同志が司会者で会は開始された。そして、それは異常に劇的な感動のうちに進行したのだ。想像してくれ。街ではすでに解放の第一の段階を経過して来た何十万と云う人々がその喜びを狂人のように祝っているのだ。その喜びのどよめきや打ち上げられる花火の音は僕たちの密集している部屋の窓硝子を震わせながら部屋のなかまでも殺到して来ているのだ。その部屋のなかでは、まだ喜びを知らない人々の代表者が、階級的搾取と民族的抑圧と——この二重の桎梏の下で喘ぎつづけている人々の代表者が、演説をし討論をしているのだ。

南阿の同志、巨大な革命の歩みをはじめている支那の同志、濠州の同志、南米の同志、印度の同志らが交る交る血の出るような演説をした。みんな大抵自国の舌で語った。で、言葉の意味はまるで解らなかった。が、演説者の全く格闘をしているようなはげしい身振り、唸るような、引き割くような、焼け焦げるような肚の底からの叫喚は、一句一句、投槍のように正確に、聴くものの耳へではなく肺腑へ突き刺さった。すべてが了解され、僕たちはまっしぐらに昂奮して行ったのだ。そして、この昂奮の頂点で、会の終りに僕たちは「インターナショナルの歌」を歌ったのだ。いろんな国語で。一つの心で。声が破れるような声で。(この歌がまだ朝鮮語に翻訳されていないことは大変残念だ。僕は露西亜語で歌わねばならなかった。あまり残念だったので、あとで二三日かかって訳してみた。この手紙と同封する。みんなが集会などで歌ってくれるように。)

そして、歌いながら、僕は感じたのだ。理窟ではなしに、はっきりと、実感をもって、感じたのだ。——これは

傷だらけの歌だと。そして、この歌は、傷だらけになって行けば行くほど、傷が一つ殖えれば殖えるだけ、それだけ不死身になって行く歌だと。そう感じたのだ。世界革命の勝利の日のためには、即ち僕としてはわが朝鮮共産党のためには、きっと死んでも悔いないぞ――この信念を新しく燃え立たせながら。……

二

吹雪はいつの間にか密度の濃い雨に変った。雨は霧のように京城の街を煙らせた。二月の風は叫びながら雨の裾を払って駈けて行った。夜は深かった。街は眠っていた。

が、警察署は起きていた。川は凍りながら黒く流れた。川を背に、その灰色の建物は、陰惨な顰め面をして、寒く、ふんぞり返っていた。雨は飛沫を跳らせながら、窓硝子を叩く。窓と云う窓から電燈の光線が流れ、雪にぬかるんだ鋪道の上に跳る雨脚を描き出していた。警察のマークのついた一台の自動車は、雨に全身を洗わせ、ヘッド・ライトの放射状の白光を闇にむかって抛げながら、建物の正面に停っていた。

建物の内部では、欠伸と水洟とを白い頰髯になすりつけた小使の老人を除いて、何十人かの人間が、深夜にもかかわらず、異常に活気づいて動いていた。――署長。警部。私服。制服。書類。カンカン灼けた煖炉。或るものは雨の滴る冬外套のまま、みんな脂切った鼻の頭を赤くし、ぶら下げた細長い金属の音を立て、眼をギラギラと光らせ、白い息を吐き……。

何人かが再び雨のなかへ出て行き、何人かが新しい雨の滴りと一緒にはいって来る。

オートバイの爆音が、夜を引き裂き、近づき、建物の正面で止る。

三

こうした警察署の光景が、呉永鐘の脳壁のスクリーンには、先刻から、痛いほど鮮かに映りつづけているのだ。

――チェッ！

彼は舌打ちをする。耳をすませる。が、雨の他、何の音もしない。夜が深くなるにつれ、雨は更に密度を加えて来たらしい。ここは町外れの温突一間っきりの小さい民家だ。そして、温突の暖気はしずかに床下を這っている。が寒さはどこからともなくピシピシと彼の身体のなかへ針を打ちこんで来るのだ。

突然、電線が千切れるように短く風に鳴った。身震いが、思わず直線的に身体を走った。と、またしても、警察署の光景が、脳壁に映り出した。

――落ちつけ！　呉永鐘、落ちつけ！

彼は、自分にむかって、呟いた。そして、もっと自分を

落ちつかせるために、低い低い口笛で、大好きな「インターナショナルの歌」をゆっくり歌い出した。すると、水のように、記憶が泛んで来た。一昨年の秋、モスコーの極東共産主義大学の寄宿舎から、この京城の或る先輩の同志の許へ、この歌について書いて送った記憶が泛んで来た。

が、その同志も、やられた。今日、やられたのだ。何度目かの朝鮮共産党の手入れが、今日、夕暮れ、一斉に行われた。百人以上のものが網にかかり、彼自身も鋭い追及の前に曝されているのだ。が、一番いけないのは、秘密本部が襲われたことだった。不覚にも、名簿や細胞図が奪われたのだ――あの警察署へ。明日になったら、早速それは検事局へ持って行かれてしまうだろう。

音が烈しく戸を叩いた。

「誰だ？」

「俺だ。俺だ。開けてくれ。」

一人の青年がびっしょり雨に打たれて吹きつける雨と一緒によろめきこんだ。

「おお、寒っ、寒っ！」

帽子と冬外套とを取ると、光沢のない紫色に死んだような顔が現われた。眉毛に溜った雨は細かく凍っていた。が、眼は燃えていた。

「どうだった、おい！」呉永鐘はその青年の肩を攫んで叫んだ。「遅いもんだから案じたぞ。」

「連絡だけはどうにかつけて来た。が、すんでのことでやられるところだった。街は非常警戒の網の目だ。」

寒さがその青年の舌から廻転を奪っていた。痺れるような言い方だった。

「そうだろうな。奴等は今夜は徹夜でやるんだろう。」

「この家も危い。いつ踏みこまれるか知れないぞ。」

青年は下着のなかからピストルを取り出して無造作に自分の前に抛げ出しながら言った。そして、赤く凍え上った両手で、暫く、顔中をブルッブルッと擦り廻した。

「その用意は出来ている。だからさ、」呉永鐘は自分でも吃驚して嬉しくなるほど落ちついた声を出した。「だから、余計重要なんだ。」

そして、説明するように、つづけた。

「この瞬間に、俺たちが、周到に、迅速に、何をどうしなければならないかが、余計重要になって来ているのだ。」

「うん。いかにして被害を最少限度で受けとめるか、いかにして同志の犠牲を出来るだけ少くするか、いかにして……

……」

電灯の弱々しい赤味がかった光の下で、二人の青年は近々と眼を合わせた。

「そうだ、それだよ。で、――あれは？」

「奪われた書類か。あれはやっぱりあの警察署へ持って行ったままらしい。明日にならなければ解らない。が、今夜あの建物のなかに置いてあることだけは確かだ。」

「うむ。」

沈黙が来た。叩きつける雨が二人の心の平面で跳ね返って音を立てた。そして、二人は、別々に、同じ一つのことを考え出した。——検事局へ持って行かれてしまう。暗黒裁判がはじまる。歴然たる証拠が敵の掌中にあるのだ。すると、どうなるか？——また細胞図に従って、明日にも、工場が、農村が、到るところで、襲撃され、敵の手で掘り返されるのだ。すると、どうなるか？

「よし！」

不意に、呉永鐘がきっと鋭い眉を挙げた。喋り出した。

「あるいは万一俺は誤っているかも知れない。あるいは万一俺のこれから取ろうとする行動は党の統制に触れるものであるかも知れない。もしそうなら、俺はあらゆる刑罰を甘受しよう。だが、今は非常な非常時なのだ。しかも、この非常時は先刻から、黴として俺に一つの行動を要求して、いるのだ。俺はその要求を仔細に分析して見た。そして、その要求の声は依然党の声として俺の耳に響くのだ。だから、俺はその声に従おうと思うのだ。俺は決行する。今夜、これからすぐに、決行する。」

彼の頬からはいつの間にか血がすっかり引いていた。蒼く引き緊った顳顬のあたりの皮膚がピクピクと痙攣した。

「何を——何を決行するのだ？」

そう言った青年もいつの間にか蒼ざめた頬になっていた。

「——何を？」

呉永鐘は思わずこう反問した。同志よ、お前には俺が何を決行しようとしているかが十分に呑みこめていながらどうしてそんなことを訊くのだ？——と言うように相手の瞳をまっすぐに覗きこみながら。と、またしても、あの歌が、傷だらけの歌が、肚の底から、波濤のように、紆りながらぐっとこみ上げて来た。つづいて、あの世界被抑圧民族臨時大会の夜の感動が。

彼は、ゆっくりと、一語一語に力を入れて、答えた。

「警察署を爆破するのだ。」

呉永鐘は、立ち上ると、押入れを開き、そのなかへ首を突っこんだ。電線がつづけざまに鳴り出した。風が次第に嵐に高まって来たのだ。嵐は雨の大束を横ざまに抱いては地上をめがけてビュウビュウと叩きつけて来た。

「見ろ、これだ！」

差し出された彼の片手の上では、小型の眼覚時計の形をしたものが、冷たい金属の光を放って縮かんでいた。

「う。」

と青年は咽喉を詰めたような声で答えた。

「三十年以前の化学的製品はハルピン停車場の一隅に侵略者の一人の忠僕を微塵にした。が、一九二八年のこれ一個は優にハルピン停車場全体をさえ微塵にしてしまうだけの威力を持っていると言う話だ。あんな建物の一つぐらい何んでもあるまい。——名簿も、椅子も、カンカン灼けた煖炉も、人間も、壁も、細胞図も、天井の汚点も、何もかも、

一緒くたに、木葉微塵に吹き飛ばしてくれようと思うのだ。——それとも、君は不賛成なのか？」
「いや、不賛成と言うわけではない。が、あいつらはどうするのだ？　あの二人は？」
「うむ。」
今日やられた同志たちは、奪還と逃亡との警戒から、みんな直接に刑務所の未決監へ送りこまれて、あそこにはいない。が、あそこには、あそこの留置所には、もう二三箇月も以前から、二人の同志が或る暴動事件で呻吟しているのだ。尤も、二人ながら、拷問の結果、精神喪失者にされてしまってはいるが。一定の時間を置いて竹刀で頭部を殴打されたりしたため、狂人に、永遠の××にされてしまってはいるが。
「なるほどあいつらは可哀そうな白痴にされてしまったと言う話だ。」と青年はつづけた。「が、いくら白痴にされてしまったと言っても、あいつらはまだ生きているのだ。尊い同志だ。あいつらは党を守ったがためにこそ、白痴にもなったんだ。最後まで拷問に耐えたからこそ……」
「待ってくれ。君の言う通り、あいつらは確かに尊い同志だ。手本にすべき同志だ。が、それにもかかわらず、あいつらが現在不治の白痴であることも依然として動かすべからざる事実なんだ。あいつらは立派に党を守った。が、あいつらはすでに廃物なんだ。今あいつらに何が出来る？あいつらはこれ以上に生きていたところで何の役にも立たないのだ。あいつらは死んで生きているのだ。」
「…………」
「だから、俺はあいつらにも一緒に死んでもらおうと思うのだ、党のために、あの建物と一緒に犠牲になってもらおうと思うのだ。もし万一あいつらが——いや、こんなことを言っている間にも夜が明けそうで気が気でない。俺は出かける。」
そう言ううちにも、呉永鐘は、立ち上り、壁にかかっていた冬外套に腕を通し、小型の眼覚時計の形をしたものを、用心深くポケットのなかへ突っこんだ。
「解った。君が正しいのだ。俺も行こう。」
嵐のなかへ——二人の青年は出て行った。

四

そして、何ごとが起ったか？——作者はここにそれを物語る自由を持たない。が、次の事実だけはつけ加えることが出来る。——それから数日してから、数人の青年が、朝鮮共産党員の嫌疑者として、京城府の内外で、同時に、別のある重大犯の嫌疑者として、逮捕された。そのなかに、あの青年と呉永鐘の名前も見出された。……
そこで、どうなるか？
「東京朝日新聞」は、一九二九年の十一月二日の朝刊に於いて、「朝鮮共産党員の第三次の陰謀発覚」と題して、「昨

年二月」の検挙後「一年有半に渡る審理終了して」「二十八名有罪と決定」「一日午前十一時一部記事の差止めを解除された」由を報道している。即ち、この記事によっても明らかである通り、二十八名が起訴されたのだ。もっと解りやすく言い直すなら、――恐らくその何倍かの人数が検挙された筈にもかかわらず、わずかに、その何分の一かの二十八人だけが起訴される結果になったのだ。

この事実は何を物語るか？――が、作者は沈黙しなければならぬ。そこで、その沈黙のしるしに大阪金属労働組合西成支部が、一九二八年の初夏、内地の各無産団体へ送った一枚の檄文を、ここへ挿入しよう。（檄文に記されてあった責任者の住所姓名は省略する。）

見よ！　この残忍酷薄なる事実を！　拷問あって何の裁判ぞ！

朝鮮民族解放の為め勇敢にも戦って来た百一名の同志は不具者となってしまった。俺達は暗黒裁判に絶対反対だ！

一、×××××政治に絶対反対だ！

一、朝鮮解放運動の被告を即時釈放せよ

一、拷問を命じた責任者及直接拷問したる官吏を処罰せよ。

一、投獄監禁されたる朝鮮人に損害を賠償せよ！

一、朝鮮民族に対する特殊的待遇を即時撤廃せよ！

一、正式裁判に依らざる逮捕、投獄、監禁絶対反対だ！

万国の労働者団結せよ！

五

呉永鐘は、半年余りも、未決監にいた。そして、証拠不十分の廉で、釈放された。

彼は出て来たのだ。が、まるで別の呉永鐘になって。――蒼く膨れて。鉛色の顔に鉛色の動かぬ瞳を鈍く光らせて。瞬きを忘れて。だらしなくはだけた脣の裾からヨダレの条を引いて。世にも魯鈍な表情を動かぬ仮面のように喰っつけて。――彼もまた、精神喪失者になって、白痴に、永遠の狂人になって、出て来たのだ。

出て来たけれど、彼には身寄りは一人もなかった。彼は元山の埠頭労働者の子供に生れた。が、とっくに両親を失い、十歳頃から、彼には、孤独な放浪と労働の生活がはじまっていたのだ。

が、白痴を、いつまでも道の上に立たせて置くわけにも行かなかった。或る労働団体の合法的な事務所が彼の身柄を引き取ることになった。この輝かしい革命家を、そこで、飼い殺しにすることになったのだ。

そして、日が、重なり、すぎて行った。

呉永鐘は、いつも、薄暗い事務所の一隅に、じっと、押黙って、坐っていた。彼が未決監へ忘れて来たものは、あ

らゆる思想と瞬きをすることだけではなかった。彼は、同時に、ものを言うことをも忘れて来ていた。彼は、いつも押黙っていた。言語は言うまでもない、舌と唇とが作り出すあらゆる音の破片の破片までも、彼は忘れて来たらしいのだ。つまり、彼の唇の間から、とりとめのない音一つさえ、誰一人として、ついぞ聞くことが出来なくなったのだ。

こんな工合に、押黙って、日がすぎて行ったのだ。

これは周囲のものたちに取って気味の悪いことだった。譫言でも時たま口走ってくれる方が、まだ白痴らしくて陽気でよい。が、押黙って、どうしても口を動かさない白痴――これは時々みんなをぞっとさせた。そして、それだけに、敵への嚇怒がみんなにこみ上げた。殊に、精悍な口調の煽動家としての彼を知っている人たちには耐らなかった。

「おい、呉永鐘！ どうしたと言うのだ？ 君は何を考えこんでいるのだ！ どうしてものを言ってくれないのだ？」

耐らなくなって、彼に叫びかけたり、彼の両肩をはげしく揺さ振ったりする青年もあった。が、呉永鐘は、押黙ったまま、仮面のような表情を崩そうとはしなかった。

こうして、何箇月かがすぎた。冬が来ていた。

或る夜、五六人の青年が、事務所にいた。夜が更けた。それは非常に寒い夜だった。

「寒いな。」

一人が歯を鳴らしながら言った。すると、みんなが「寒い。」「寒い。」と言い出した。が、燃料になりそうなものは何も見当らなかった。金を持っているものも一人もいなかった。

青年たちが寒さについて騒いでいる一隅で、呉永鐘は、寒さも感じないのか、置きもののように、押黙って、いつものように、坐っていた。

そして、夜が更け、寒さが募った。

青年たちは、とうとう、歌を歌って寒さをごまかすことにした。そして、彼らは「インターナショナルの歌」を歌い出したのだ。朝鮮語で歌い出したのだ。

が、聞えるのか聞えないのか、呉永鐘は、やはり、押黙って、坐っていた。彼自身の果した英雄的行動によって立派に傷を一つ殖やしたその歌が、彼自身の訳した歌詞によって歌われている。その横に、じっと、押黙って、坐っていた。

二番がすんで、三番に進んだ。一人の青年は、その頃から、呉永鐘の容子が、少しずつおかしくなるのに気づきはじめた。――彼は、何かを眼で探しでもするように、キョロキョロと首を左右に動かし出した。だんだん落ちつきを失って行くように、ソワソワしはじめた。そう言う動作がだんだんはげしくなって行った。そして、青年は、呉永鐘の鉛色の頬に突然血が登って来、眼が狂暴に輝き出すのを

見た。
その時、歌は、おしまいの繰返しの

のところへかかった。瞬間、呉永鏞は、猛獣のような荒々しい叫びを挙げ、意味の解らないことを喚き出した。そして全身で、部屋一杯に、暴れ出した。

青年たちには殆ど呆気に取られる時間さえ与えられなかった。彼らは呉永鏞を鎮めるために乱れて立ち上らねばならなかった。

二三分かかって、やっと、押えつけた。が、白痴は、押えつけられながら、手足をばたつかせる力を緩めなかった。意味の解らないことを猛獣のように喚きつづけながら。

手がつけられないので、青年たちはとうとう彼を紐や帯で身動きの取れぬように縛り上げた。が、彼は喚くことを止めなかった。

彼は、少しも休まずに、夜通し、喚きつづけた。朝になっても喚いた。青年たちが、朝鮮共産党員呉永鏞を精神病院へ送ることを決議したあとでも、まだ喚いていた。

（一九二九年十二月）

敷設列車

平林たい子

折々はっとする様な生温い風が裾をひいて通る。

洮昂線敷設列車は洮南を距る四十六粁の地点で六月を迎えた。

支那人の工夫達は皮膚の脂肪の分泌が妙に促されたのを感じた。彼等は針の目の様に大きくなった毛穴にこまかい粘土の埃を吸い込んで、夕暮、宿営車の位置まで逆行して来る敷設列車の背中に飛乗った。彼等は疲れ切って畳まりそうになっていた。敷設機の櫓は新らしい軌道の上で左右に躍る。

「君達あ三号の宿営車に寝ているだろう？　一寸きくがね、この頃炊事車の棚に置く食料品が始終なくなってしょうがないんだ。心当りゃないかね」

揺れて居る材料車の上に寝ていた鮫島という技手が突然起き上って来て一人の工夫に云った。

「知りません」

話しかけられた工夫は車輛の動揺につれて弾ね上りながら不機嫌に横を向いた。すると傍にいた三十過ぎの扁ったい顔の工夫が口を出した。

「そんな事あ炊事の苦力に任せといたらいいでしょう」

「いや俺は炊事頭の王(ワン)に頼まれてこないだから詮議しているんだ。事務車の方から予算が喧ましいんでなあ。君達が知らないんなら知らないんでいいさ。」

鮫島は何か傷つけられて髯の中で風の様に笑った。

十封度のハンマーを振上げて一日犬釘(ドッグスパイキ)打ちをやった工夫達は体の関節々々が錆びた機械の様に軋む様な気がしていた。彼等にはそんな余裕のある話をもちかけて来る人間の生理状態が不思議にさえ思えて、眼を細くしてまじまじ顔を見た。

遠い埃に煙っている地平線の上に銅貨の様に変色した太陽が懸っていた。

二輛の装甲車を挟んだ宿営車が通風孔を耳の様に立てて紐みたいにつながっている。そこまで来ると材料車を押している機関車は乱暴に速力を遮って急停車を試みた。が、惰力で十間程も走り過ぎた。激しい動揺。足もとをさらわれながら工夫等は自分の宿営車の前で弾力をもって飛下りた。

土匪襲来の噂を、十日に一度ずつ連絡して来る後の建築列車が運んで来た。四五日前から装甲車の四角な鋼鉄の蓋が吊上ってあいた。夜になると二つの窓からライオンの目の様な探照燈が光り出した。それは土匪への防備の意味も三分は含まれていたが、七分はいよいよ苦しい作業にさしかかって来た苦力達の逃亡を防ぐためである。

恐ろしい勢で噴出する青い光線は遠くなる程幅広くなった。箒の様な光線の先で蒙古の荒寥とした平原を照し出した。そこには一本の樹木もなく一個の岩もなかった。ただ、同じように小さい起伏を繰返している乾き切った土ばかりがあった。

支那人達に食わせる食糧品は麻袋に入れて炊事車の側の天幕の中に積んである。生温い日が続くので下積の穀物がむれ始めた。その香いと麻袋の蛹の様な香とがまじって終日あたりに漂った。女の膚の様な艶をもった白菜は天幕の裾から幾株も転がり出たままになっていた。それがベタベタに腐りはじめて皮膚病みたいにひろがって行く。

貨車を二段に区切った宿営車もこの頃麹室の様にむんむんする。

工夫達は夕食後食糧天幕のあたりをぶらぶら歩くのが一日中の楽しみであった。彼等は青ざめた光線を見ていると体に染まりついている苦しい日中の労働の記憶を暫く忘れることが出来た。それからいろいろな鬱積している感情を手繰り出して行った。

いつも戦乱の巷になる故郷を持っている彼等は土地や財産というものに執着する習慣を持っていない。彼等はこの

目で世の中を眺めた。そして張作霖に激しい敵意をもち上海の×××の紡績工場のストライキをきっかけとする排日や排英の運動に私かな心をよせていた。

しかしその後その運動がどうなったか、四月×鉄道株式会社の募集に応じて四平街を発って以来、一枚の支那新聞を手に入れる機会もなかった。

洮南では敷設列車に乗込む前日二度も厳しい身体検査が行われた。

彼等の懐中からは不穏な伝単の代りに汽車中でかじった西瓜の種の残りがこぼれ落ちた。そのあとでメンタルテストがあった。

「洮昂鉄道を敷設するということはいいことだと思うか、悪いことだと思うか」

「満鉄の苦力に対する待遇に対してどんな感想を持っているか」

四百人の苦力達はこの二つの質問に対して一人も碌な返事をしなかった。ある者は洮昂鉄道がどういう目的のもとに何者が敷こうとしているかそんなことは無茶苦茶で応募して来ていた。或る者は——ある考えを持っていたが、何にも知らない様なポカンとした顔を答えとした。

彼等は夕暮事務車へ行って老牌という煙草を一個ずつ受とって来ていた。それは東亜煙草から売出している一個一銭二三厘にしか当らない最下等の巻煙草である。

「あんな星をかりかり食ったらさぞうまかろうなあ」

ある者は糖分の欠乏のために、明かに氷砂糖を連想しながらそんな他愛もない事を云う。食糧天幕の傍で敷設機のワイヤロープが風にギイギイ動く音をきいていると話はやっぱり日常の仕事の上の事に落ちて行く。彼等は此の頃毎日、人間業ではとても出来ない様な能率を現場監督に要求されているのである。彼等は一本のマッチへ五人も口を突出した。ここでは一本のマッチさえも自由に手に入らない。煙草の屑を詰め込んで出来ているその煙草は燃える端から火の子になって暗がりでちらちら散った。

「じゃあその一千三百万円という工費を×××が支払えないことを承知で×鉄道株式会社はこの工事を引受けた訳なんだな」

「うん、そうなんだよ。×鉄道株式会社にとっちゃあ払えないでくれた方がいいわけなんだ。そこで××の××が生じるわけだからなあ」

張という若い工夫が説明してきかせた。

「ふーむ。」

長い弁髪を下げている老人が感嘆した。そのあとで咲の引掛った咳をした。

「鼠(ハオズ)！　鼠(ハオズ)！」

探照燈の一端が廻って来て天幕に触れた時だまって煙を吐いていた一人が叫んだ。

「鼠(ねずみ)だよ。そこの天幕の中に鼠が居たんだよ！」

「びっくりするじゃないか。この気狂いめ！　鼠をうまれ

てはじめて見たのかい」

マッチを擢ると天幕のズック布に足をかけて逃げようとしていた七八匹の鼠があかりに怯えて襤褸の様に固まった。天幕は風をはらんで内側へ向いて腹の様にふくらんでいた。それはたよりなくって鼠にはよじ昇れない。白菜が転がり落ちて来た。

鼠は蛆の様な白い歯をむき出してキイキイ鳴いた。

「人間も草も木もない所に鼠がいるなんて薄気味悪いねえ」

「なあに列車の荷物の中へもぐり込んで来たんだよ」

一人が材料車の上へハンマーを探しに行っている間に鼠は彼等の注意と注意との間の稲妻の様な隙をうかがって逃げた。

彼等は理由もなく、鼠にも劣った人間の様に自分のことを考えた。そして宿営車へ戻って行った。

生物の香をかぎつけた数多の野鼠が風で起った地面の小さい起伏にかくれて光線をよけながら移動して来つつあった。昼は空き叺や材木の下にかくれ、夜になると列車の中へ通風孔や扉口から這い込んだ。

畳を敷いた室にねている技師や会計や技手達は用心のために扉へ鍵をかけて寝たが工夫達はそういうわけには行かなかった。這わなければ頭がつかえる宿営車の中には炭酸ガスがいつも充満していた。警務部員がやかましいので夜十時半までは閉めている扉を、十時過ぎると誰かが棚から降りて来て突破る意志をもっているかのようにやけに外側へ蹴る。すると毒瓦斯の様な温気が広々とした蒙古の大気の中へ快く散って行く。彼等はそれから水泳や煽風機の夢を見ながら朝まで一団りの豚肉みたいに崩れて眠るのである。——鼠はその扉口から侵入した。

ポケットにある饅頭の皮や人間の唾の附着した煙草の吸口を引き出して奪い合った。炊事車に下っている牛の片股はたかっている鼠のために左右に揺れた。フライパンの中で固ったヘットの上には米粒の様な歯のあとが無数に印された。棚からは毎夜巻いた図面が落ちた。昼行われる人間の生存競争に代って夜になると鼠の生存競争がそこで行われた。

一号の宿営車には清潔な青々した香のいい畳が敷いてある。

技手の伊東は建築列車からの電話で不承々々に床を離れた。満蒙地図の下にある電話機に顔をよせている時、嘱託医の山田が入って来た。山田は虎の様な横縞のある靴下の足を投げ出して髯を剃り始めた。

「もしもしそうです。そうです。軌条百二十噸機械油五罐……ええ、いいや、……失敬」

電話の終るのを待って山田が云った。

「君、支那人の盗癖って奴にゃ参ったねえ。さすがの僕もとうとう洗面所の台に置いたベルペット石鹸を昨夜中にと

られてしまったよ。」
「僕も昨日あそこで歯ブラシをとられた。しかし、ありゃあ鼠の仕業だよ。」
伊東はやや不機嫌に答えた。彼には山田の派手な靴下が堪らなく軟弱に見えた。大きく云えば、日本という祖国の食糧問題、人口問題の解決の戦士として、軍人に勝るとも劣らない使命をもってこの蒙古の野に出張している帝国臣民が、ハルピンのダンスホールに通う英国人の利権屋の様なあの靴下は何だ！　彼は故郷の下関の連隊で工兵伍長だった。
食堂車でも盗難の話が出た。油がにじみ出ている吊ランプの壺の下で彼等は帽子を被ったまま飯をかっ込んだ。そして鼠の仕業を人間の仕業の様に云うことに興味を覚えた。奉天の馬賊が畳まで剝がして盗んで行ったという話にまで脱線して行った。その次には大連で朝盗まれた毛布が昼小盗市場に陳列してあったという経験談が出た。支那人は子供が大きくなると先ず何よりも先に物を盗む方法を教えるという話が出た。
「丁、お前も教わったか」
入歯をガクガク動かしていた連絡係の畑が給仕のために立っている×××に云った。
「不如(プルゥ)！(まさか)」
丁は苦笑した。皆笑った。
霧が薄く地面を這っている。列車の尻の方で長い汽笛が鳴り出した。現場への発車合図だ。食堂車の日本人達も立ち上った。
「兎に角、三号の宿営車の張ってやつに注意していて下さい。あいつの顔は、ありゃ普通の支那人の顔じゃないですよ。盗癖のある顔だ。たしかに。」
鮫島は敷設機の方へ歩き出し乍ら庶務の笹島に囁いた。彼は平生自分に敬意を表さない張に対してある憎しみと怖れをもっていたので、盗難を鼠のせいにしないで、そんな風に云いたかった。敷設機の前に突出したクレーンはロープの先の爪で重い栗材の枕木を一本ずつ自分の背中に運んだ。
肩の破れたシャツを着た支那人達が、クレーンを休ませない為に栗材をかついで走った。
「軌条はどうした！　軌条は！」
車上で叫んでいた鮫島は、その時一本の軌条を『かけもち』でかついで来る四人のうちの中の工夫が三号の宿営車の張だったのを見た。
「間抜け！　発車じゃないか。早く！　早く……」
彼は張の眼の据った顔を見るとふいっと言葉をやめた。
太陽が霧の中で卵の黄味の様に曇った。栗材を積み終えると、クレーンは何チェーンかの軌条を象の鼻の様に巧にまき上げる。
鮫島は張に対する自分の心に反撥した。そして思い切って機械油の罐に掛けていた片足で、呂上ったワイヤロープ

を見上げている張の頭を蹴った。
「張！　貴様はいつも油ばかり売りやがって、何んでも知ってるぞ。」
張はひょろひょろとよろけて石炭の山に尻もちをついた。今一つ蹴られた。しかし尻餅をついたまま顔色も変えずに落ちた手拭と帽子を拾った。そして長い足で櫓の後に飛乗った。
「アッハッハハハ……独活の大木みたいな奴ですね。あいつは」
弾丸ケースのバンドを腰で締めていた警務部員木川が嘲笑した。そして荷造箱にたてかけておいた銃をとりながら云った。それは鮫島にこびる音を多分に伴っていた。
張の後から乗った洪という ボールド締めの工夫がこの男を振返ってちらりと見た。張は聞えないのか枕木の上をまたいで行った。
「張！」
洪は材料車の上を歩いて行く彼を呼んだ。
「君は苦力達に信用されようと思えば、あんな時大人しくしていちゃ駄目だ」
張は振返ったが返事をしなかった。
敷設車を押している機関車は後に材料と工夫を載せた長い鋼鉄車を牽いて動き出した。霧の奥で合図の汽笛が長く猛獣の様に喚く。機関車は性急な強い呼吸を吐きながら新しい線路の上で躍った。そして平原を二つに裂いて進んで行った。
線路と並行してトンボの様に空に向いて続いている電話柱が一本一本投げつけられる様に後へ走り去る。敷設機の屋根の下で木川はポケットから出したウエストミンスターの箱を鮫島にさし出した。それを軌条に腰掛けている張と洪は遠くから見ていた。二人ともシャツの右肩が担ぎ物の為に破れていた。そこから赤く擂りむけた肉が腫れてもり上っている。
「あの警務部員はこの頃まで公主嶺の独立守備隊で上等兵勤務だった奴だそうだよ。いかにも×××らしい図々しい顔をしているじゃないか」
「へーえ、あいつが。そうか」
張は今年の一月末まで公主嶺の或るロシヤ人の家に、××煤鉄公司ストライキの煽動犯人としてかくれていた。罷業によって自然に発生した熔鉱炉の冷却を損害二十万円に該当する「建造物破棄罪」として×支官憲から追跡されているのだ。
「先刻鮫島が俺のことを何でも知ってるぞって云ったね。ありゃあどういう意味なんだろう」
「いや、そう深い意味じゃないらしいんだ。監督達はこの頃頻々として起るコソ泥について君を疑ってるらしい」
「へえ、そいつは初耳だ。だって君、一寸したものをちょいちょい盗んで行くのはありゃ支那人じゃなくて野鼠だよ。先刻野積の枕木を動かしたらうざうざする程鼠が飛出

して逃げたぜ。材木の下の土を掘って、そこに豚の脂だのパンの破片だのをいっぱいくわえ込んであったよ」
「要するに君を変な奴だと思っているのだよ。気をつけなくっちゃあ」
張は笑って云った。
「だから俺は少し殴られたっておどおどしていてやるんだ。苦力の信用を得るにゃ先ず監督の信用を得なけりゃここじゃ失敗するよ。シッシッ鮫島が来た」
列車が現場に留ると、敷設機掛りの苦力をのぞく他の工夫たちは車上から飛降りた。そして蠅の様に散って自分の部署にとまった。
自分で軌条と枕木とを敷いてその線路の上を漸進して行く敷設列車の後部で多くの工夫達は敷設整理の仕事を分担した。洪達十二名で一組のボールト掛りは、犬釘打ちの前でスパナーを握って手早く廻して行った。
ぬるい湯の様なしめっぽい風がだんだん強くなって来る。
午後、後のボール掛りは二十米ばかりの前方で三人の工夫が十人程の現場監督に乱打されているのを見た。一人の監督が振り下したのは確に曲線直しに使う鉄のバールであった。吹きまくる埃の中で、殴られている人間の姿は影絵の様に薄くなったりはっきりしたりした。そういうことは今までにも無数にあったが今日という今日は我慢がしかねた。無智と貪慾との団りの様に考えられている苦力達も圧迫を弾きかえす強い感情だけは何処の国の労働者にも劣らず持合わせて居った。彼等は持っていたスパナーを線路の上に投げて走り出した。が、途中から引返してスパナーを拾って行った。
「待て、待て、もっと計画的にやらなくっちゃ。向うには××があるじゃないか！」
後で叫んでいる洪の声をきかず彼等は走った。そして逃げおくれた二人の監督を麻の空き袋の様に地面に打っ倒れるまでたたきのめした。警務部員が走って来た時には、もう彼等はあらい呼吸を鎮めながら軌条の継ぎ目で何事もなかった様にスパナーを廻していた。
「おや鼠がいっぱい走って来るぞ。凄えもんだなあ」
夕暮に近かった。巻ゲートルの足でチョコチョコ枕木を渡って来た伊東の言葉で後にいた老人が顔をあげた。
「鼠がたくさん来る方角からはきっと洪水が来るってことをきいたことがあるが……はてな」
彼は古縄の様に額へ巻いた弁髪に手をかざして地平線を望んだ。
遠い地平線の上には黒い、髭の様な一塊の雲が浮いていた。それは風に吹き流されている形であった。その方角にも激しい風があるらしい。その空の下を灰色の艶のある毛をもった野鼠の一群が風と同じ方向へ無数に走って行きつつあった。彼等はピョンピョンはね上りながら巾ひろいべ

ルトの様に地面の色をかえて流れた。鼠の群が湧いて来る地平線の彼方は埃で充血したように赤くなっていた。何かの不吉がそちらの空に生じつつある様に思われた。

彼等は暫く軌道から目を離して不安な鼠の群を見た。六月が来たのに一本の草も生えず、一条の川も見えないたった一色のこの平原を、彼等はこの時程、無慈悲に、憎々しく、抵抗しがたい、人間の感情を皆吸いとってしまう乾燥を持ったものの様に感じた事はなかった。鼠の群はその風景にさらに焦立たしい灰色をそえて真直ぐに走って行きつつあった。

夕食の時後部の材料置場から他の用事のついでに電話で刑事上の逃亡犯人がそちらの工事場へ紛れ込んで行った形跡があるということを云って来た。どこの工事場にもよくあることで大して気にとめる必要はなかったが、じゃあやっぱりこの頃のコソ泥は鼠ばかりの仕業じゃないのかしらと現場監督達は云った。

「仕事はこの頃また馬鹿に捗らないんだねえ。鉄道局の方じゃあどうしても八月までに街基まで完成させなけりゃ責任者を更迭させちまうって云ってるそうだよ」

電話を受けた技師は不機嫌に云い放って狭い卓の前を行ったり来たりした。その傍で鮫島と今一人の技手とが張が怪しいとか懇という老人が妙に目が凄いとかで争っていた。二人の支那人は偶然に二人とも三号の宿営車に寝ていた。

「よし、それじゃあ盗難だの何だのをひっくるめて大々的に××しをやってやろうじゃないか。そうでもしなけりゃこれ以上能率を挙げる方法はありゃあせんよ」

×鉄道株式会社が東三省総司令へ手交した工事請負契約附属書には、この工事が民国十四年四月までに完成しなければ工費仕払を三年間延期されても差支えない旨が書いてある。その代り約束期限内に完成させた暁、完成から六ヵ月間に奉天政府が工費を仕払わなければその債権を直に借款として移しても差支えないという今一枚の附属書が総司令から×鉄道株式会社に手交されてあった。四月といえばあと約十ヵ月である。その間には四ヵ月という結氷期があり嫩江の鉄橋架設という難工事も挟まれてある。しかも×鉄道株式会社にとっては約束期限に完成しないという事の結果は、工費受取が三ヵ年延びるという小さな不利益にとどまらず借款の好機を永久に取逃すことにもなるのである。

借款の好機を失うということはこの鉄道から上る利潤の分け前にあずかれないという消極的な不利益ばかりではなかった。それは東支線へ北上する貨物を南下させて×鉄道株式会社へ吸収したいという長い間の食慾を満たす千載一遇を取失うことでもあるのだ。洮昂鉄道に仮遇している×鉄鉄道部の工作課出張所が焦るのは当然である。

「××し」が開始されることになった。

夕暮が一塊だった雲が空の中央で暗い森の様にひろがった。夜の八時、埃が濃霧みたいに平原を掩った。それは空気の濁流の様になだれを打ち、奔流になって流れ、渦をまいて風に衝突して行った。その底の方で一連の列車が地面低く這って昆虫の死体の様に停止していた。

突然装甲車の機関銃口が外へ角度を動かした。

「やけに吹きやがるなあ。」

壁にかけてある銃を外す音がした。装甲車の重い扉が割れた様にあき、また重量につれて戻って行って突当った。そこには武装した三人の警務部員が物臭く銃身をつかんでほうり出された様に立っていた。

「三号の奴等は皆外へ出ろ！」

風の中では、人間の声の小さい音波は吹きとばされて一匹ずつの蚊か何かの様にばらばらに散った。

三人は更に声をはげました。

「外の宿営車は皆扉を閉めるんだぞ。今日から扉をあけといて寝るこたあ絶対ならん！」

三人は革の長靴で歩き出した。足音が近づくに従って旧型の貨車の扉が内に吸われる様にポーンポーンと閉って行く。それは田螺が防禦のために蓋をするようなものであった。

「三号の奴等！　出ろ！」

一人がどなっている間に二人は銃をたてかけておいて一つ一つの宿営車の扉に外から錠を下げて行った。三号の「油を搾る」時外の奴等に飛出されないための用心である。

「貴様等あ監督を甘く見やがって勝手な真似ばかりしやがったが、今日はどうするか見て居れ！」

さまざまな服装で降りて来た支那人に向って今一度どなった。監督より少し体格のよい彼等の顔は警務部員等のちょうど額の上にある。三人はどなりながら、心の中でもう鉋屑の様にくるくる巻いてしまった何かを感じた。厭な役目だなという気持が云合せた様に三人を苦々しくしていた。

「先ず手前え達にきくが、この頃雑品を鼠の様にチョイチョイ引張り込む奴はどいつだ。」

この男は以前に旅順監獄で看守をやったことがあるので揚子、齒磨、石鹸などを引っくるめて、「雑品」という監獄語をつい使って云った。いつの間にか彼は四人の前に立っていた時の心持を甦らせていた。

他の二人はこの男が照れもしないで予定通りの事を云っているのが何だか滑稽になった。そして「鼠の様に」とはこの場合何てまずい比喩だろうと考えた。

「鼠の様に引張り込む？　フンそりゃあ、大人、鼠が引込むんだもの、鼠の様に引張り込むのはあたりまえでしょう。私だってほら、ここの入歯をこないだの晩抜いといてとられちまったんですよ。盗まれたのは貴方がたばかりじゃありませんぜ。」

成る程そういえば、そう云うこの老人の渋色の入歯がな

くなっている。醜い歯茎が唇の裏に時々堤防の様に見えかくれた。弾力のない唇は独立性を失って、これだけ喋る間にも折々中の方へ折れ込もうとした。

警務部員は内側へ頻りに彎曲して来る自分の気持を押しかえした。

「何云ってやがる。支那人が泥棒だっていうこたあ天下の事実だ。俺や未だ泥棒しねえ支那人を見た事たあねえ。この老いぼれめ。こっちい出て来い」

探照燈の眩しい青の光線が、彼等の全身に染料の様に注ぎかかる。

たてかけてある銃を、ある気持をもってじいっと見つめていた若い工夫があった。どなっている途中でフッと警務部員はそれに気がついた。彼にはそれがあまりに重大な発見だったので反射的にスッと視線をそらした。

「あっ、こいつだな。逃亡犯人は」

彼は何故ともなくそう思った。外らした視線に通じる神経の底の方で、銃身に蛇の様に巻きついている、その男の白熱光の様な強い視線をはっきり感じることが出来た。今にもその視線がクレーンの様に銃をまき上げてしまいそうだ。

彼はある頂点にいる瞬間を感じた。

次の瞬間彼は突嗟に×をとり上げた。そして××をその工夫のいる方へ向けた。

（原本一行削除）

それは過失であったか故意であったか彼自身にもわからない。彼はただ坎の渦いている地面に動いている肉体を見た。それが幻影の様でもあった。

「なんだ！ なんだ！」

数字のついている扉から出て来た監督達の手には黒い×××があった。彼にはしかし遠い彼方の人影の様にも思われた。

ここはどこだ。蒙古か。そして俺は。彼ははじめて、その男を×つ必要が自分自身の内部には何んにもなかった事に気がついた。自分の存在が砂の様に崩れた。そして鉄骨の様に心に残ったものを明らかに見た。ああそれは自分自身の意志ではない。それは誰かの――たしかにそれは自分を雇っている×鉄道株式会社の全苦力に対する意志である。彼は自分に対する恐しい距離の様なものを感じた。彼はひょろひょろと歩き出した。後で罵っている支那語をききながら。

×××た男は×に×××てうめいていた。

警務部員等はもう命令されたことをこれ以上履行する勇気を失って、白い顔をして事務車の方へ歩き出した。

「あっはっは。やったね、江之島のやつ、あれでなかなか思い切ったところもあるんだねえ。時にゃあいいよ。」

警務部員等は技師のぼやけた笑顔のうしろに、それとなくこの方角へ歩いて来た江之島の姿をおずおず探した。

三号車の一応の捜索のために工夫達は列車の一番尻につながっている物置車へ移されることになった。
扉をひらくとばらばらと鼠が逃げる。輸送して来たままの機械類が荷造箱でかこわれたまま何個も積重ねてあって真暗だ。
風はますます吹きつのっている。すぐ傍に鼻を突き出しているクレーンでワイヤロープが切れそうに揺れて、先にぶら下っている爪は碇の様に重々しく空気をまぜた。
二十八人の工夫は狭い入口から押込まれた。もう外で錠が下りたらしい。
「……ひでえことをするんだなあ。とんだ所へたぶらかされてやって来たものさ。」
「あいつがまずかったんだよ。あいつはこないだから××が二梃苦力側にありさえすりゃあこんな工事場はいつでも引くりかえして見せるって俺に始終云っていたんだ。俺や気がつかなかったが、さっき、鉄砲があったのであいつがきっと変なそぶりをしたんだろう。それを気取られたんだよ。」
「ねえ、ねえ」
とそれらの声を制して若い声が隅の方から起った。
「×××××てものはこんな時に起すもんじゃないかしらん」
それはたった今誰の頭にもあった考であった。彼等の中には十人に一人位しか文字の読める者はなかったが、人に雇われて働く者の本能で、今年の一月から各所に起った××××騒ぎのことは聞き知っていた。
話は自然にそちらへ動いて行った。
「ちょうど今はいい時機なんだ。」
と説明したのは張だった。
彼はそれから×鉄道株式会社と××××との契約をかいつまんでわかる様に話してきかせた。
「俺達を皆首にして追返した日にゃあ、新しい苦力を募集して連れて来るまでに一ト月位すぐたっちまうよ。それに仕事にゃ慣れていないしさ。」
此頃の技手達の焦りかたで皆はそのことはうすうす知っていた。それから話はもう既に××××が始まり、四百人が四百人とも皆煽動に乗り、監督達が皆降参してしまったかの様にせり上って行った。
「口で云って見りあ簡単な様だがね、実際にやってみるとなかなかそう巧く行かないんだ。だから、決して監督に気附かれちゃ駄目だよ。それから仲間を一人でも多くふやすこと。この二つを当分守らなけりゃあ、却ってひどい目に会うぞ。」
張は却って皆の気持を押えつけるためにこんな事を云わなければならなかった。そして張の云った事は間違いなかった。四百人はおろかこの二十八人の中にさえ、あの消極的で我慢強い、生活慾の弱い、貝殻の縁の形に適応して生

きる貝の身の様な支那苦力の一面の性格をそなえた人間が幾人か存在したのだ。
暗い中で、ある者は喋っている男が誰であるか全く見当がつかない。そして云っている言葉の意味もわからない。いや、そんな事をきくのが煩いのだ。睡い。そういう男達は変に脂が出て来る足を布靴から脱いで箱に腰かけたまま人によりかかって眠り出した。過去のことは忘れた。先のことはわからない。ただ現在が紐の様にふん伸びて行きさえすればそれでいいのだ。彼等はそういう要求しか持っていなかった。そして曖昧な顔の一端に涎を流しながら、腰かけている箱を誰かに交代してやることも考えずただ眠った。
夜が更けて来ると足もとでキイキイ鼠がないた。夜があけ切らないうちに扉があいた。
「さあ、出ろ！　野郎共！　少しは懲りたか。」
若い工夫たちは昨夜中に出来た一つの塊を腹の中へ持ってそれぞれの仕事へ蝿の様に散って行った。
三粁前進——
空が一面に曇って平原の色が変った。急に湿度が高くなった空気をとおして日本人の高声がドラの様に濁る。工夫達は天幕を畳み待避線の軌条と枕木とを掘りかえした。
南京米の麻袋が座布団の様に軽々と投げとばされる。地面には鼠があけた穴からこぼれた細い南京米が砂の様に散乱した。

苦力達は重い石油罐をかついでクレーンの下へ集って来て散って行った。
敷設車はもう石炭をたいて競技前の競馬馬の様に出発をあせった。
炊事車の窓から石炭殻が灰神楽を立ててなだれ落ちる。と同時に捨ててある野菜の皮や茶殻から蜂程もある蒙古蝿がグワンと舞上る。彼等は洮南からこの列車について繁殖しながらここまでやって来たのだ。野積の枕木を動かす毎に灰色の瓜の様な鼠が走り出す。
冷蔵庫、日本人達の行李、米の叺、金庫、食卓それらは一つずつクレーンにくわえられて空中に吊り上り、角砂糖の様に材料車の上に落ちて積重った。やがて宿営車が材料車のうしろへ連結された。
いよいよ出発だ。暫くの停車で錆びた軌道の上を宿営車が動き出した。工夫達は材料の上や宿営車の戸口で、へたって行く宿営地点を見送った。
また三粁奥へ入るのだ。悔いても悔いても悔いつくせない悔恨が詰っている頭を、彼等は速力がまき起す風にさらした。もう洮南からは大分遠くなってしまった。女も、酒も、休息も飽食もない埃の蒙古。一と抱えもある大きな太陽とたった一色で塗り潰された平原とにはもう飽き飽きした。だが、といって、ここまで来てはどうすることも出来ない。労働、労働、労働、それがもう十カ月も監督の壁の様にこの先へ続こうというのだ。

×傷の苦しい工夫は、貨車の棚の上で手まりの様にはね上った。彼は列車が先へ進んでいるのか後へ戻っているのか少しも見当がつかなかった。そして自分が何のためにどこへ行きつつあるのかもわからなかった。ただ真暗な板の上で時々動揺につれて弾ね上った。

目的地点で汽車が止った。それは昨日の現場である。出発の時と反対の作業が小人数で行われた。天幕が骨格をひろげる。

敷設車は宿営車から切離されて自分の軌道をつくりながら一分間十米ずつ進む。百貫も積重った背中の軌条が一本ずつ二十秒おきに左側の転送機に辷り込んで滑らかに動いて行く。右側の転送機ではロールが冷静に廻って枕木が載って行った。ドッドッドッドッと折々横へ煙を吐いた。ボールト掛りは軌条の継ぎ目で背をかがめてボールトを、引っ掛けたスパナーで締めて行くのである。それは、楽に出来得るだけの能力でやっておけばいいというわけには行かなかった。腰が痛む。目が霞む。掌のマメが擦れる。一分間に十米進む先頭の敷設車との間が少し長くなったと思うとすぐ現場監督が近づいて来る。後から犬釘打ちが追って来る。しかし犬釘打も後の曲線直しに追いつづけられた。そしてまたその曲線直しも水準作業に追いつづけられた。最後の仕上げをやって行く水準作業は後で追うものがないにも拘らず曲線直しとの間に伸びる距離をちぢめるために焦った。それらは、皆、そこに働く当事者以外の者の磁力によって動かされた。彼等は大きな磁石の下に吸いよせられた鉄粉の様なものであった。個々の鉄粉達の動きは即ち一つの磁石の動きだったのである。

頭が妙に熱い。遠い地平線が真中を軸として上下に緩く揺れる。その度に見渡す限りひろがっているボール紙の様な地面が西へ向けてさっと傾斜する。――最初にこの錯覚に捕われたのは敷設車を押している機関車の機関助手だった。彼はあまりの苦しさに袍子(パオツ)を脱いで石炭の上へ投げた。熱いボイラーの傍にいると何だか吐き気を催おして来る。仕方なしに横から顔を出して押されて行く敷設車の作業を見ていた。が、何ともどかしく感じられることだろう。いやになってしまった。まるでみみずみたいに土をなめて行く様な芸当だ。彼は腹の中でそんな罵倒の言葉を考えた。

そのうちにひろい平原が波の様に躍り出した。堪らなくなって石炭の上へ顔を伏せてしまった。

「おいおい、どうしたい。おい。」

「あああ、苦しい。苦しい。」

彼はやっとそう云った。

同様なことが後の曲線直しの中の一人にも起った。

その男はたらたら汗を流して、鉄のバールを線路から一尺も離れた砂利の上に、弓弦の様なのろまな曲線を描いて投げおろしたり持上げたりしていた。

「ヤーンチョイ」という掛声をかけていた監督が変だと思って傍へ寄ると彼は熱くさい臭気を発して苦しそうにもたれかかった。

「鼠咬症というやつかも知れないな。」

明に、未だそういう病状の患者を手にかけた事がないらしい口調で、嘱託医山田は彼等を診てから云った。そして事務車の戸棚から持って来たヨード丁幾を五六日前に鼠に咬まれたのだという小さい傷痕に塗りつけた。傷痕にはもう赤茶色の皮が出来ていた。しかし、彼等の熱は昇るばかりであった。

翌日になると、あちらの宿営車からも、こちらの宿営車からも同じ病人の訴えが出た。その中には鼠に咬まれたことのない者もまじっていた。

「変だなあ。ワイルス氏病の症状に似ている様でもあるが……」鼠がワイルス氏病を運ぶということは彼も勿論知っていたが、ワイルス氏病は秋でなければ発病しない病気の様に彼は医学校で習っていた。

その翌日になると病人が頭の上へ枕代りに押込んでいた半天や褲子が薄黄色に染って来た。それは、ここの暗さに慣れた者の目にしか見えなかった。

山田は暗い宿営車の入口で臭気を我慢しながら幾度か病人の顔を覗き込んだ。その顔は黄色に変って来ている様でもあり、少しも変っていない様でもあった。が、何しろ日焦で油紙の様になっているので判別しがたかった。

「たしかにワイルス氏病だ。」

四日目にやっと彼は、血清の薬品がこの列車に用意してないことと、炊事車の窓に金網が張ってないこととを同時に思いながら病名を断定した。その時にはもう三十人の同じ病人が洮南へ汽車をかえすことを懇願しながらのたうち廻っていた。

「我不去……」

病人たちは熱にうかされて時々うわ言を云った。「俺は行かん！」という意味であった。

「離這児有多少里地」

それは「此処から幾里あるんだい。」という意味である。

「好！　好！　行かんでもいいよ。そんな里程の事なんぞ心配するな。もう直きに洮南へかえるんだよ。」

健康な工夫が棚から下を覗き込んで慰めたが、そう云う自分自身が涙ぐんだ。

翌日になるとその慰めた人間も同じ病気にかかってうわ言を云った。病人はアスピリンと水ばかり呑まされて唇がかさかさに白く乾いた。

毎日曇って依然として風が吹いた。一時来なくなった鼠の襲撃が急に激しくなって来た。

勝に乗じた歩兵の様に、生物の臭気を目当てに駈けよって来た。健康な工夫達が宿営車にいる間は投げつけられる鉄片や石炭の塊に脅えて物の下にかくれた。が、昼静かな時がやって来ると扉口や通風孔から誰にもはばからずどん

どん侵入した。そしてねている病人の顔や脱いだシャツの上に駈け寄って食物を求めた。
遂に二人の死人が出た朝病人は百九十人に達した。出発の敷設車の上には工夫の姿がまばらになった。しかし、列車は脊の様に散る黒煙を吐いて居丈高に出発した。それは充ちあふれる戦闘意識をもった戦闘艦の姿に見えた。
風の方向が変った。一丁程離れた地点で石油を掛けて二個の死体をやいていた煙がす早く地面を這った。それが綿みたいにきれぎれに宿営車の横腹へ吹きつけた。千里の平原を吹いて来た風は測り知れない巾と丈とを持って未だ千里や二千里は吹きとばし得る様な摶力を持っていた。空を吹き払って除け、大地を紙みたいに吹きめくる意志を持っているかの様に天と地との間に充満して空気を運び去った。
焼けのこった死体は、地面の起伏の一つになって突起していたが、一夜のうちに鼠のためにその起伏はなくなってしまった。
洮南へ引返したい――。という気持が、恐しい勢で繁殖しつつあった。それと一諸に、苦力達の間だけの秘密のつながりが、どの宿営車にも種痘の様に移殖され終った。
いよいよ、×××が来たと彼等は思った。
ある朝、彼等は、約束にしたがって、ジャッキや敷設機の部分品の鉄輪が転っている物置車の後へ集って行った。
「おいおい、何しているんだ。貴様裏切るのか！」

一人の工夫が、バケツへ石炭を盛って通り過ぎようとする炊事の苦力に声をかけた。
「何？」
と呼ばれた苦力はのろくさい目でその男を見た。
「貴様とぼけているのか？　今日から一せいに仕事をやらんことにきのうきめたじゃないか。」
「仕事をやらん事に？　そんな事あきかんよ。」
彼はバケツを下げて行ってしまった。
「可笑しいなあ。打合せが通じていない筈はないんだが……」
すると向うから、右肩へ襤褸片をのせて、枕木をかつぐ身支度をした一とかたまりがやって来る。彼は走り出そうとして石炭置場の傍にあったシャベルに蹉いた。
「待ち給え……」
彼は辛うじて云った。
「君達にゃゆうべの打合せが通じて居なかったかね。」
「打合わせって何だい。」
「へえ！　じゃ通じていないんだね。きょうからいよいよ、病人を洮南へ帰して治療すること、俺達の仕事に時間の制限をつけることを要求して一斉に×××まうっていうんだよ。ちっ、しようがないなあ。」
物置車の後にはセメン樽へ腰かけたり鉄板の上へ昇ったりした二十人ばかりの苦力が風に顔をそむけながら、伐り残された、立木の様に背をかがめて立っていた。

「これっきりか！」

そこへ走って来た男の間には、誰も答えず、彼等はいかにも、そうして立っていることが自分の意志でないらしい物臭い顔を、汚い首の上で静に廻転して来た。そして霧の様な光のない視線を漠然と投げかけた。

男は何か考えついてまた走り去った。

その時物置車の向うで汽笛が鳴った。短く切断されている列車は、生命を吹きかえした様に、頭の上から煙を放散し、脇腹から蒸気を勢よく噴き出した。技師が走って来た。

「こらっ、誰にだまされてこんなことを始めやがったんだ。云いてえことがあったら一人前の事をやっておいてから云ったらいいじゃないか。さあ、早く来い。発車だ。」技手は狼狽をかくさずなだめる様につけ加えた。

「大人しく云いさえすりゃ大抵の事はきいてやるよ。」工夫達はその声に吊り上げられて腰で割れている袍子を揺りながらぞろぞろ歩き出した。三人ばかりの男が宿営車の方から走って来た時にはもう工夫は一人もいなかった。

計画は皆失敗した。夜は宿営車に外から錠が下りて出られないので、彼等は相談の場所をいつも逆行して来る列車の上にきめていた。其処で集合場所などを打合わせる筈になっていた日にかぎって、技手が二人も来合わせてしまったことが連絡の断たれた原因であった。それに、××××がこの場合どういう意義をもつのかも大部分の人間にわかっていなかった。それは先に立った数人だけの独り合点に終っていたのであった。しかし能率の低下で焦り切っている彼等は、この小さい出来事に対して何の制裁も加えるわけに行かなかった。ただ、張のうしろに、一人の警務部員がいつも尾きそうことになった。

「これで手心がわかったさ。今度はうまくやって見せるよ。」

計画に始めから加わっていた工夫達はただ一言そう云合った。間もなく後の建築列車が、いくらかの薬品を積んで来た。病人たちは何に利くのかわからない散薬や水薬をとにかく呑まされ、数日間は気のせいか、体が多少楽になった様に思った。

「××××みたいな奴等なんだもの、ああしてほっときゃすぐ治っちゃうよ。」技師は仕事の能率 のことばかり頭にあるので、病人を後部へ送りかえすことにあくまで反対だった。

四日の後、宿営車は見渡す限りの草原の中まで進んで行った。麦に似た去年の雑草が枯れて倒れている平原の真中で、苦力達が、新しく×××少年の××に石油をかけて火をつけた。その火が枯草に移って三日三晩燃えつづけた。

誰の所有でもない平原の火は風の誘う方向に向って、昼は白い煙になって吹きなびき、夜は赤く空の埃にうつった。いつ風向が変るともわからないので、宿営車のまわりだけの草刈りが行われた。

いつの間にか苦力達に対する不安が去ると待遇はもと通りに戻っていた。或る日、地面に草があるから冷えないだろうという理由で、始めから寝ていた病人達だけは、石炭の俵を敷いた天幕へ移すことになった。

苦力の間には決定的に戦うだけの勇気も持てず、といっていろいろな不満のやり場がない。そういう幾日かが過ぎた。技師はその間に探照燈を作りかえたり、吊りランプを提げる様に工夫したりして、夜業を始める計画をはじめた。

ワイルス氏病はもう蔓莚の時期は過ぎていた。かかった人間だけが、ぼつぼつ死んで行った。

そのうちに雨が降りはじめた。永い雨もよいの後に来た雨だけに、四日降りつづいても未だやもうとはしない。

雨が降り出すと長い地平線が消えて空の端は平原の果に垂れ落ちて来た様に見えた。土の色が変り、埃をかむっていた貨物車は黒い艶を現して、雫を垂らしながらぬれた線路の上に停止していた。

ある日の昼過ぎ、行く手の雨の中から夥しい牛車の列がさしかかって来た。

恐しく髯の濃い蒙古人が銃を背負って先頭に丈の低い蒙古馬を走らせて来た。それが一隊の指揮者でもあるらしかった。そのうしろから不格好な俵を積んだ木製の輪の車が、一頭ずつの牛をつないで悠然と並んで来た。それは泰来気から模古来を経て東支鉄道に積込まれハルピンに送られる大豆と高粱であった。

支那人達はこんな平原の中で初めて出会った人間と毎日同じ場所で会う貨物車の様に素っ気なく別れる事が何だか悲しい様な気がした。

「お前達はどこへ行くんだい。」

人懐しい目つきでそんな事をきいた。

すると先頭に立っていた男が手真似まじりに、あちらから洪水が来るので後戻りして東屛鎮を迂廻するのだと答えた。

「洪水が来る」という言葉が伝わると、皆の注意は一時に牛車の列から剝げてとられた。めったに雨が降らない代りに、蒙古の雨は降り出すと必ず洪水を伴うものだという事は、かねがね誰でもきいていた。彼等は今それが単なる云い伝えでなく、ほんとうにあることだった事を知ったのである。今になってみると鼠の夥しい襲来も首肯された。

「嫩江の氾濫かな。」

技手が電話柱へ昇って行って片手で望遠鏡を目にあてた。が、レンズの中には、雨足の堆積で出来上ったもやの様な雲しか見えなかった。よく見ているとそれが光った水の様にも見えた。

「速刻洮南へ引返して水害を避けること。其処で病人を全部×鉄道株式会社病院へ入れること。」

こんどは、全部の苦力の熱烈な支持を得た単純な要求

が、三十過ぎの賢という大人しい工夫に代表されて、その夜、口頭で事務車に提出された。

苦力達は明日の荷積の用意をするでもなく宿営車の中で履く布靴をはいたまま抜き捨ててあるペンキ塗りの木標の上に上っていた。そこで事務車から出て来る賢を待っていた。三度電話のベルが鳴った。

日本人達も洮南へ引返したいという気持だけは工夫達に劣らず持っていた。ただ、工夫達が、圧迫して来るものにあくまで力で対して要求を通そうとしているのとちがって彼等は、上役の同情や理解で、自分達の要求をとおそうと考えた。

彼等は鉄道局へ電話をかけた。鉄道局では洪水なんぞある筈はないと云った。そして、昂々渓とハルピンの気象台へ電報を打って天気を問い合せた。

暫くすると鉄道局の方から敷設の進行状態について電話をかけて来た。技師はそれを云われることを何よりも苦痛に思いながら実際の粁の数字よりも三粁多い数字を電話口で云った。その声はつい小さくって不鮮明だったかも知れなかった。

「え？」「え？」と相手は幾度かききかえした後「馬鹿々々しい話だ――」と嘲った。

「君達ゃあ一体、この国家的な仕事を一私人の人情や情実で棒に振ろうっていうのかね。洪水が何だね。苦力が何だね。契約期間内に完成するかしないかという×鉄道株式会社の肩にかかっている重大な問題の前に、一体そんなことが、どれだけの価値を持っているというんだい！」

技師はそういう言葉を感覚する右の耳が熱くなった。電話はそのあとで、「もし洪水が出るとすれば材料や既設線の損害を少くする用心をする様に。」と命令した。電話機の奥の奥の方に古めかしい尻上りの八字髯をぼんやり描きながら彼は決然と電話を切った。彼は叱責されて勇気づいた。

「君達の要求のお答は今後五日間の間にすることにしよう。だがね、ま、いいや……」

と妙な音をうしろへつけて云った。

彼はその三日の間に、××××に対する用意をするつもりであった。何といっても、先日の経験で彼は苦力達の団結力を甘く見ていたのである。賢は技師の表面の返答の外に、彼が少しも工夫達の要求を容れる意志を持っていないことを見てとって扉の外へ出た。

苦力達に残された方法はたった一つであった。その方法は、もはや、公式的な「××××」である筈はなかった。彼等は××××現場で監督に不意打を食わせて自分達だけで列車を引返す方法を考えはじめた。翌日も雨が降った。その次の日のことであった。

事務車に残った四人の日本人と宿営車の病人達とは意外な時刻に列車が戻って来る響を足下の軌道に感触した。やがて靄の中から現れた列車は後に連結されている筈の敷設

車を牽いていなかった。機関車は体が軽くなったので軌道を蹴る様にはね上った。気の立った工夫達が前方の材料車の上に立ちはだかって、口々に何か喚いていた。それが風の抑揚に従って海鳴りの様に遠くなったり近くなったりした。日本人達は軌道の上へ駈け出しこの異様な列車へ望遠鏡を向けていそいでレンズを廻した。いくら廻して見てもその列車の上には一人の日本人も見当らなかった。

日本人が杭の様に立っている目の前の待避線に機関車が熱い風を撒き散して驀然と辷り込んで来た。すると手にバールを握った工夫達が停車し切らないうちに飛び降りた。

後から降りた三人の工夫が、今朝出発の時に警務部員が腰に巻いていた××××××××、××重そうに提げているのを見た時、日本人は はじめて 事の成り行きを知った。折悪しく装甲車の当直員は風邪で宿営車に寝て居り、装甲車の扉は閉っていてあかなかった。

朝まで無気力で大人しかった支那人の肉体の上に何か夥しい変化がやって来た様にしか日本人には見えなかった。忽ち電話線が切られて触角の様にブラ下った。新しい××××は走って行って監督達の宿営車の前に銃をかついで立った。その中にはロープで縛られて

(原本二行削除)

宿営車が前進する日の朝の様に支那人達は天幕をたたみ、積んであった穀物を材料車の上に投げ込んだ。

石炭をシャベルで掻込む者、列車の車輪を覗いて検車する者、機関車へ給水車を挽いて行って給水する者、彼等はいつもと同じに忙しく働いた。いつもそこいらをぶらぶら歩いている長靴を履いた監督のいない事だけがいつもと違っていた。彼等は一つの仕事がすむと喚声をあげた。

炊事車からは豚を団(かたま)りのまま焼く煙があがった。事務車へ乗り込んだ工夫は老牌(ローパイ)や金口などを窓から働いている工夫達の方へ両手でつかんで投げた。それでまた喚声が上った。あっちでもこっちでもマッチを摺った。彼等はマッチを一個ずつ受けとって用もないのにシュッと摺って投げた。

そこへ大きな金庫を戸口から五人がかりで転して来た。

「何だい。そりゃ。」

「こりゃ金庫さ。」

金庫は後から蹴られても前から蹴られてもビクともしなかった。

「一体何が入っているんだね。」

「金や書類なんかを盗まれたり焼いたりしない様に入れとくんだよ。」

「ふうん、便利なもんだな。」

また蹴って見たが鋼鉄で武装している金庫はビクともしなかった。却って足の方が痛くなった。

やがて、再び機関車から煙があがって激しい呼吸が始った。そして、汽笛も鳴らさずに動き出した。病人をのせた幾つもの宿営車が次々に運動を後へ伝えて行った。汽車は

現場と反対の洮南へ向いて出発した。
機関車の前には日本人が建設した直線では最長であると誇った直線の線路が洮南の方向を指して遠い一点に凝集していた。
後では、彼等には少しも用事のない、やたらに重かった金庫が賽ころの様に小さくなる。便所の屋根が低くなり、野積の枕木と軌条とが枯草で出来た地平線と合した。ロールで送られて来る様に、次から次から新しい地面が地平線を軸にして流出して来た。
「天亮了！　天亮了！」
彼等は「夜があけた！」という歌をうたい出した。
汽車は夕暮に向って走り、闇に向って走り、暁に向って走り、また、光線の中を走って通り抜けた。彼等は病人の世話や炊事や運転の仕事を分担して役員をつくり不完全ながら委員会も成立させた。
五日目の朝、事務車の抽出しで誰かが信号に使った赤木綿の小旗を発見した。それが煙突の前の照明器の上に、誰かの手によって結びつけられた。

（一九二九年一二月「改造」）

真理の春 抄

細田民樹

家村は、やはり、預かって来た二百円を市枝の前に出した。しかし市枝が、それを手切金を預かって来たと邪推するようなふしは少しも見えなかった。で、彼は今夜の自分の役割が彼女のため不純に解されなかったことを、内心ほっとした。
「まあ、しかし、『同志愛』もいいですけど……」と市枝は『同志愛』というきざな言葉にまだ微笑みながら、「それはそれでいいから、もっと徹底すればいいじゃありませんか。栢山のように、私は私でそっと祭りこんでおいて、一方でそんなモダンな恋愛を得ようなんて、私どうしても狡いと思ってましたわ。だから、こんな機会に、とことんまでやってみるといいのね。二度と家の敷居はまたがないくらいな決心で……」
「いや、栢山さんみたいな知識階級の人には、そういう思いきったことが、なかなか出来ないんだなあ。僕等は正

直、ああいう恋愛の気持は解らないし、また僕だったら、あんな分裂的な悩みは嫌だなあ。もっとも栢山さんも、その気持を整理するために、今度のことのようなことをするんだろうが。」
市枝に対する家村の同情は、しらずしらず栢山を多少非難するような表現になった。
「ですけど、私だってこんなことをいいながら、やっぱりまだ、栢山と生涯別れることを突き詰めて考えちゃいなかったのね。」と市枝は膝の縫物を、両手で無意識に畳の上にすべらせながら、ちょっと改まるように家村を見た。「やっぱり、栢山さんにそれだけの決心がつかなかったから、私にもそれが、そのまま反映してたんですね。だから、栢山が今日限り家を出て、そうした決心を固めさえすれば、私だってもっと強くなれると思いますわ。」
「だが、あんな恋愛なんて、何も絶対的なものじゃなかろうからね。栢山さんだって、眼の覚めることを、今から予想して、あなたと別れる決心はしないのかも知れない。」
「おう、いやだ。そんな気持が狡いじゃありませんか。」市枝は物尺の表で掌を撫でていた。「私だって、給料で働いてる家政婦や保姆じゃあるまいし、栢山の子供を『預かって』いるわけじゃないでしょう。進を育てるのは私なんですもの。たとえ栢山と別れたって、もし結婚の必要があれば、私進をちゃんと育てることの出来るような、上手な結婚も出来ると思うわ。」

「ほう、なかなかあんたは、自信家だ。」
家村が、腕を組みながら――冗談めいたことをいう時の彼のくせ――大ざっぱな笑顔をした。
「いいえ、子供を連れて再婚しようと思えば、だれだってそれくらいなことは考えるんだわ。」と市枝も笑った。「だけど、問題はまだそこまで行かないんですし、私にしても、進を連れて、継子の多い中へ身を沈めることなんか、考えただけでも、あんまり自分や子供がみじめ過ぎるわ。それよりも『有難く』頂戴して武蔵屋からシンガーミシンを出して、あの消費組合の仕事でもさせてもらいますわ。あなたもせいぜい、仕事の口を紹介してね。」
「まあ、それが一番無難だな。どうせこの不景気に、ミシンの仕事だって、めしの種になるかどうか解らんがね。僕だって、今のままなら、少しは給料も持って帰れるし、あんた方二人を干あがらせることもあるまいさ。」
「その代り、御馳走はしませんよ。」
市枝は、家村の言葉が生真面目になったので、それに静かな冗談を返すことで感謝した。
彼女は女学校時代に、両親にねだって買わせ、無論嫁入道具の一つにも持って来たシンガー・ミシンを、栢山の失業以来、何年ぶりかで、質屋の倉から出すわけだった。
この数年来、必要な季節のものさえ、お倉からだすことが出来ず、どうかすると、自分の縞柄さえ忘れるほどの身にとって、三十幾円に入っているミシン台など、とても『身

受け』することはかなわなかった。それに今、こんな性質の金で——と思うと、市枝は指先に浸みるような、へんなさびしさを感じた。

次の日は日曜だった。二階からよく見える瀬波代議士邸の高い欅で、もう、つくつくぼうしが鳴いていた。

「……へえ、房森氏はこんな所に隠れとったのかな。」と、後から来た男工は、二階のてすりに腰をもたれて、ひとわたり部屋を見廻しながら、「却ってここに落ちついとったら、あの人も、もっと長く捕まらなかったろうにな。」

「なあに、どっちみち、危かったんだ。僕はここの消費組合に『腰かけ』をしてて、ちょうど麻口やここの主人が捕まった時、御用聞きに廻ったんだがね、とてもものものしい騒ぎだったさ。」

と家村は半年前の出来事を、訊かれるままに話したりした。

「じゃあ、こんなにして集まっちゃ、今でも警察がうるさかないですか。」草木という女工が、しかし半分笑いながらそういった。

「うむ、大変『非合法』な相談会だからな。ハッハッハッ。」

家村が反語的に、大きな歯を出した。

亀井戸の工場町と違い、ここまでくると、みんな『安心』して話すことが出来た。女工の草木と多加は東モス寄宿舎のオルガナイザアという格だったが、無論日曜の外出を口実に『浅草の活動』でない方面に、活動に来たのであった。

というのは、東モスが生野斉信の大野心から、(無論、職工や従業員が、生野の野心など知るはずがないが)一時原料商側の『保全処分』を免れて間もなく、今まで社会的影響から遠慮していた税務署が、おびただしい諸税滞納の差押え処分を行うという噂や、職工積立金の皆無になった噂、それに宗男爵や要路の大官が、悉く東モス整理にさじを投げた事実、とにかくそんな悲観材料が、日に日に殖えて、職工達も次第に、これまでのような辛抱の根気を失いかけた。

もとより、東モスの『身売り』自身が証明するように、以前からその悲境は女工達さえ知っていたが、この不景気に、へたをまごつけば、元も子も無くなることが、あまり解り過ぎていた。で、工場内に対立する二つの労働組合でも、それぞれ巧みにその対策を考究してはいたが、それを荒だてて会社側の神経を尖らすことは、この場合一も二もなく、組合員の不利を招くので、その点実に謙抑な態度をとって来た。平凡な『読書会』をやるにも、ちょっとした『相談会』を開くにも、あそこの工場町では、ほとんど遠慮する戦術をとって来たのだ。

「深夜業禁止なんて、名前は立派だけど、あれから私達の

朝食は、まだ薄暗い四時半になったでしょう。」と草木は紡績女工特有なむくんだ眼で訴えた。「朝五時から十一時まで立ち通しでね、以前はせいぜい三台だった精紡機を、禁止後は六合も持たされている人がありますよ。六時間立ち通しで、いつも糸が切れはしないかと気を張り、六合の速い機械を凝視めてるのは大抵じゃないわ。その後の休憩が一日中で三十分に縮められたんですもの。でも、そのうち十五分は機械の掃除に、五分は食堂の往復にかかるし、便所にも行かなきゃならない。そうすると昼飯の時間は、せいぜい七八分しか無いんですよ。忙しい七八分の昼飯じゃあ、ああして胃腸病患者が多いのも当然ですわ。」

「くそっ！　奴等あ、深夜業禁止で少しも損をしてやしないんだ。六時間立ち通して働かせ、七分で食事をさせ、しぼられるだけしぼりやぁがって、却って能率をあげてるんだ、これが奴等の『産業合理化』だな。こんな労働の強化で、我々がくたばれば、奴等は『お代りおいで』と赤い舌を出しやぁがる。しかも、『お代り』の失業者は、何十万だっているんだからな！」

赤い咽喉仏をぴくつかせながら、一人の男工が苦い口をつぐんだ。

東モスの寄宿舎にいて、夜昼他の女工達と全く同じ生活をしている草木光乃は、『深夜業禁止』の美名が、女工達をどんな点で苦しめているか、一々具体的に事実についてもっと委しく話した。

「……そうですとも。差し引き奴等は、少しも損しちゃいないのよ。以前は一時間の休憩時間があったのに、深夜業禁止になってから、三十分になったでしょう。そうして、一月四回の休みが、二回でいい規則になったんですもの、そうすれば、月勘定にしてみると、奴等は時間でも損をしてない上に、夜業禁止を口実に受持台数を六合にも殖やし、機械が殖えれば、糸の切れ方も多くなるのは当然ですよ。これから寒くなって、夜中凍えた糸は、ぼろのようによく切れるんです。夜業禁止で、朝の仕事の早くなった女工達は、まだ真暗な時分から、糸つなぎでどんなに泣かされるでしょう。しかも、私達の寄宿舎と来たら、どんなに寒い夜でも、二十畳敷の一部屋を暖めるに、昔ながらの小さな瀬戸火鉢一つですからね。」

進が近所の子守に誘われておんもに出たので、お茶を持って二階に上った市枝は、そのまま、みんなの話を聞いていた。おとなしそうな女工までが、『奴等』というような言葉を平気で使うので、市枝はちょっと異様な気がしたが、聞いているうちに、しみじみと女工達の虐げられた生活が身にこたえ、いつの間にか『奴等』が本当に腹立たしくなった。

光乃達の話では、今頃東モスの女工達は僅か『七分』の間に、日本米は一粒も入らない外米と麦の四分六をかき込

み、お菜は大量的に『蒸した』めざしが、たまの『お肴』だというのだ。煮たり焼いたり、そんな手数のかかることは『奴等』の産業合理化に合わないからだ。だが脂のぎらぎらと皿に粘りつく『蒸した』めざしは、なるほど女工達を泣かせるだろう。だから、沢庵だけで済まそうとすれば、その沢庵がまた、ナメクジのようにブヨブヨと来ているのだ。仕方なく工場内の売店に飛びこめば、一日の給料は吹っ飛んでしまうしかけだという。

「とにかく、これだけ悲観材料が集るようじゃあ、いくら俺等がいやでも、東モスの立ち直りは、まず難かしいと思わなきゃならんよ。」と江添という年かさの男工はポケットから紙片を出しながら、

「よしんば大資本家が、樫野や海倉に出資したとしても、そんな基礎が出来れば、海倉などは、尚俺等に攻勢をとってくるに違いないさ。うちの会社が、今色々の世間のやかましい問題になってる手前、職工の整理などで騒げば、尚世間の人気を悪くして、出資者がつかないものだから、海倉も俺等にまだ手を下さないでおるが、これで少しまとまった金の出先でもきまったらね必ず従業者の整理とくるに相違ないんだ。だが、そうした出資者がない場合は尚危険だ。奴等は乗りかけた舟で、止めやしないから、勢いおきまりの大整理断行と出て、俺等の半分五千人ぐらい失業させるかも知れない。だから、会社の整理が運べば運んだで、いけねえし、運ばなきゃあ尚更いけない。どっちみち、くるものはくるんだからな。その対策はよっぽど練って、着々準備するのが肝腎なんだ。俺あちょっと対策の私案を、心覚えに書いてみたがな……」この二階に集まったものは、第二工場の中でも、無論相当な覚悟のあるガッチリ組であった。が、もし仲間のうちの五千人が、首の無くなる覚悟をする時は——と思うと、さすがにみんな、暗い顔になった。

市枝はみんなの曇った表情に気づきながら、熱心に話を聞いていた。

年かさの江添友助は、ちょっと水成岩のかけらのようなつるりとした固い顔の猛者であった。

彼が紙片に書いて来た『私案』を中心に、みんなは、没落しかけた東モス工場で、必然に起ってくる事実について対策を練った。

一、第二工場は資本家のため、工場を閉鎖せられる恐れが十分にある。——それでなくても第二工場は、両組合員の結束固く、つねづね資本家から厄介視せられているのだ。現に東モス『身売り』の前後に、日新紡の矢島栄次郎が、親分野準佐一郎の命を受けて、東モスを視察した時、第二工場に貼り廻された組合のビラやスローガンに恐れをなし、『あんな労働組合のガッチリした工場は鬼門ですから、お引受けにならない方がよろしい』と復命したほど

だ。だから、樫野や海倉は搾取の邪魔をする組合をつぶすために、まず第三第四と違って、羊毛ばかりでなく綿糸布を扱っている。インドの関税、支那銀塊の弱気などは、引き続き、製産過剰の綿糸布を、近き将来に惨落させるに違いない。で、この点から見るも、資本家が第二工場を閉鎖する可能性は十分にあること。

一、樫野や海倉は、全般の工場に、第二工場閉鎖によって、問題を悪化させると見れば、第二工場にわたっておびただしい解雇者を出すだろう。その場合は工場内の日本社会党系の組合とも出来るだけ協力して、始めからそれを排撃するような拙策はとらないこと。但しその場合は、社会党の行動と戦術を厳重に精査監視すること。尚社会党との交渉如何は、その時の情勢次第で、あるいは対立を免れ得ないこと。

一、勿論、第二工場閉鎖反対、その他の工場の解雇反対、労働条件低下反対、年功加俸廃止反対などを理由に、大ストライキをおこすのはいうまでもないが、それを機会に労働強化による日給者の時間短縮、昨年夏手交の覚書即時実施を迫ること。

一、万已むを得ず工場閉鎖の悲運に陥り、百名以上の首切りをだす場合は、全国聯盟の応援を得て、(イ)勤続一年未満は日給の七十日分、(ロ)一年以上三年未満は一ヵ月を増す毎に日給の三日分、(ハ)五年未満は同じく五日分、(ニ)五年以上は同じく七日分を解雇手当として増額支給させること。解雇者は別として、争議犠牲者を絶対に出さないこと。

一、従業員の七割は女工なのだから、会社側はストライキ勃発と同時に、女工をそれぞれ寄宿舎に閉じこめ、外部の応援を遮断するに違いない。だから、勝つも負けるも寄宿舎の女工の結束如何にかかっている。外部と断ち切られる場合を十分予想して、女工達自身で目的を貫徹するよう、今から一層その訓練をしなければならない。これはなかなか重大な一項であること。

等、等、等の議題を、みんな熱心に論議したが、市枝は傍で聞きながら、自分より年若い草木や多加が、男工達と同じように、如何にも云うことがしっかりしているのに驚いた。

「これまでの紡績争議じゃあ、女工さん達は、大抵男工の監視の下に、争議団事務所に閉じこめられて、それでやっと結束を保つのが多かったな。だが、これからは、そんなだらしのないことじゃしょうがない。いくら男工の応援や監視がなくても、自分達のために、最後まで頑張らなくちゃあな。」

家村は笑いながら、草木と多加の顔を見た。

「ええ、そのことなら、時々寄宿舎へこっそりいらっしゃる香浦初実さんからも、強くいわれてますわ。女ばかりだって、組織や統制が出来なかないんですから、もし今度、争議にでもなればいくら男工と分離せられても、あくまで

やって見たいと思いますわ。」
市枝は初実が――夫の恋人が――東モス寄宿舎にまぎれ込んで、そんな潜行運動をやっていることに妙に反感が持てなかった。

容作がエレベーターでおりてくると、ビルの大玄関では、真中の新聞売場を大勢の人が包囲して、われがちに夕刊を掘ろうと揉みあっていた。両側の昇降機から急速度で吐き出されるサラリーマンが、夕刊を眼がけて殺到した。そこの混雑は毎夕のことながら、何か、いつもと少し違っていた。

「やあ、解禁だな。」
「畜生、やりやあがったな。」
普段なら、東京駅へ歩きながらひろげる新聞を、わざわざ煙草の売店の傍に、人通りをよけて開いているもの、森光銀行のドアの横で何か内証事のように、そっと新聞をひろげた人達、……容作にもそれが何の記事かすぐに解ったので、にわかの興奮でちょっと落ちつきを失いながら、四五種の夕刊をむさぼるように買うと、早くそれを読むため、いきなり森永に入ってコーヒーを命じた。
『日本共産党第二次大検挙(本日解禁)』各新聞とも、べたべたとでかい活字を躍らせ、ある新聞は、わざと写真部で『悪玉』にメーク・アップしたような党員の顔を並べていた。さて、読んでみると、どの新聞にも、容作が黒石弁護士などから聞いている事実の、五分ノ一ほども記載されていなかった。その点、こけおどしには乗らなかったが、しかし少年時代から親しく……親しいなんて言葉が妙におかしいほど……気の合っていた房森の、鉄縁の眼鏡をかけ、強度の近眼を細くして笑いかけた顔が強盗殺人よりも、もっと手の込んだ汚名を着ているのが、容作には実際不思議な気がした。

房森は検挙せられる二カ月前まで、容作の二階にいたので、彼は房森の日常生活をよく知っていたが、容作の少い友人のうちでも、房森くらい品行方正な男はまれであった。それに或る新聞には、彼が三人の女と関係し、隠子まであるようなことを書いていた。これを二人の子供のある房森の細君が読んだなら、憤慨を通り越して、あきれるだろうと思った。

容作は青バスで、青山のアパートに帰って来たが、バスの中でも、客のひろげた新聞から、房森の写真がまざまざ彼の眼を射た。へんに底の知れない憂欝が、彼を引きずり回すような気がした。容作は眼を反らし、次第に腹を立てた。

部屋を開けると、市枝の手紙が床の上に放り込んであった。ああして家を出た彼は、無論市枝には住所を隠さず、以来二週間の間に三四度長い手紙を書いたが、市枝がよこしたのは始めてであった。

度々のお手紙、少しも読む気がしないものですから、みな焼いております。

お手紙はおよこしになりませんように。今日房森氏の奥様が見えました。予審終結して、御上京なされ、二年振りに房森氏に面会せられたそうです。漸く面会が許される由、奥様からあなたに面会に行ってくれとのことです。それから、御不自由もありますまいが、今夜、お身の周りのもの少々小包でお送りしました。家にあっても、無駄ですから。

容作は折鞄を寝台の上に投りだし、突っ立ったまま、読みかけたそこの文句を凝視ていた。

面とむかうよりも、こうして離れて見る市枝の態度は、ずっと強そうだった。

「泣き事より、この方がいい。」

容作はそう思いながらも、微かな溜息が漏れた。

市枝の手紙は、どうにもおさえきれない憤怒で始まっていたが、書いているうちに、気持を変えたのか、次第に内容のある文句が見えた。

……私も考えるだけは考えましたから、この頃では、徒らに腹を立てて、神経を疲らせるような愚さはやめました。お互いに生身である以上、自制も何も及ばない、どんな不慮なことが起らないとも限りません。それは今度のあなたの場合ばかりでなく、同じように私の身の上に起るかも知れません。いえ、私にだって、そんなことが起らないとは断言できません。

もちろん、私は今度のあなたの振舞いを、唯、もの狂おしい恋愛の結果だとばかりは考えません。あなたと初実さんが、同じ思想、同じ階級運動への共鳴から、東モスの寄宿舎にまで働きかけていらっしゃる事実は、この間こちらの二階で会合した女工さんや、家村さんからもよく聞いています。で、私も家村さんから色々社会のことなど教えられてもいますし、また消費組合運動に接して、自分で多少発見したこともあります。

そしてそういう結果からでしょうか、私はだんだんあなたの別居を悲しまなくなりました。それが、時々自分で不思議なほど冷静です。あなたを恨むとか怒るとかいう気持も、次第に薄らいで行きます。といって、全然あなたを愛さなくなったのでもありません。そこはやはり、あなたがよく力説なすった点ですね。『僕は初実さんも敬愛するが、お前も愛している』というような意味でしたね。私は結局、あなたのそういう心持を承認しませんでしたが、今になってはじめて、多少あなたに似た実感を持つのです。

つまり、あなたの初実さんに対する恋愛は、私をいい加減欺きましたが、しかし、あなたの恋愛をマイナスしても、私はまだあなたを愛してる部分があるような気が

します。もとよりあなたと、ああいう夫婦生活を繰り返す気は、もうありませんが、でも何といいますか――進の父としてのあなたに、一種の友情のようなものを感じるのは事実です。

だから、たといあなたが、初実さんと同棲なさろうとも、進が『お父さん』に会いたいといえば、あなたも進に会ってやるべきでしょうし、私も合わせるつもりです。そうして子供の自然な感情を曲げないように育てたいと思います。初実さんも頭のある方ですから、進が出いりするぐらいは、理解なさると思います。

最後に申上げますが、唯今私と進はあなたから頂いた当分の生活費もありますし、私もぼつぼつ働いていますし、また家村さんも補助してくれるといっていますけど、しかし、出来るだけあなたが、進の生活費ぐらいお送りになるのは、あなたの自発的な義務だと存じます。私は唯金銭のことをいうのではありません。進の将来について御関心がなかったら、あなたはゼロに近い人になります。従ってあなたに対する私の友誼的な気持も消えるでしょう。またそれでは、真剣に階級運動にもあなたは打ち込めないでしょう。

進は今のまま、むろん私に育てさせて下さるんですね、進の生活費などについても、決して長くは心配かけないつもりです。ですから、進を私にまかせたことで、ひとまずあなたは御安心の上、後顧の憂いなく初実さんと御一諸に、今の運動に益々お進みになればいいのです。

しかし、あなたに置き去りにせられた私は、進の将来をよく考えた上、やがて結婚というようなことをするかも知れません。むろんあなたは、異議なく離婚の手続きをとって下さる筈です。こうして同居している家村さんは、御存じのように、私の子供時分から知り合った仲です。家村さんと結婚することがありましても、(むろん、二人でそんな話をしたことは、まだ一度もありませんが)それは私の自由にさせて頂きます。

もしそうなった場合も、進は事実両方の子供なのですから、あなたと私の両方の家庭で自由に遊ばせ、しかも、そんなことで、少しも傷つけられることなく、すくすくと育ててみたいと思うのです。同じ家に両親がそろわなくても、進はやはりそうして両親のさまざまなよき感化を受けることが出来ます。初実さんにしても、家村さんにしても、立派に継父、継母なんて感情に囚えられない同志なのですから、そういう場合は尙、進のため好い影響を与えはしないでしょうか……

容作には、市枝と家村の結婚などという文句が、自分を牽制するための、市枝の威嚇とは思えなかった。それだけに、手紙をひろげた彼の手が、いつか小刻みに震えだした。

(一九三〇年一月「朝日新聞」連載)

忍術武勇伝

貴司山治

歴史はくり返す

維新の時、蛤御門の戦いに敗れ、幕府と結托した当時の社会民主主義者一派に、完全に京都を乗っとられてからというもの、純左翼の長州過激派は、日の目もおがめぬ苦しい潜行運動に入った。

警視総監……その頃の京都守護職は松平容保だった。この総監の下に、本国の会津桑名からかり集められた兵士たちは「会桑巡羅隊」という反動のかたまりとなり、隊伍堂々、白昼槍の穂先きをきらめかして、京都市中をねって歩いた。

しかもこれだけでは不用心とあって、松平総監直属の特別高等のえりぬきの一隊が、過激派退治にくり出された。それが世にいう近藤勇の「新撰組」。

蛤御門以来、長州過激派は、特にはげしく過激派専門の新撰組に追っかけ廻わされた。こっちが地下をくぐれば向うもくぐってくる。密偵が、秘密会合をかぎつける。過激派の、誰れが巨頭で中堅にはどんな奴がいる！　とだんだん敵の方へ知れてゆく。

突如、検挙の手は、重要な同志のかくれ家を襲い、連絡場所を押さえる。検挙された同志は拷問どころか、忽ち斬ってすてられる！

「われらの行く所牢獄であり」どころではない。「われらの行く所、血烟の中、死の中」だ。

しかるに過激派退治の鬼警部近藤勇の歯ぎしりしたことは、これ程烈しい弾圧の嵐がふきすさぶ京都市中に、かくれている過激派の執行委員長桂小五郎の行方が杳として知れないことだった。

「卑怯者去らば去れ」

というコトワザの通り、合法的色彩のノーコーだった大久保も西郷も逃げ出してしまって京都にはいない。それだのに急進運動の波が全国に亙ってだんだん高まってくるのは桂小五郎を盟主とする過激派が巧みに京都に潜んで全国的に非合法運動の指導部となっているからだ。きゃつらのやっていることはわかりすぎる程よくわかっているのに、いくらさがしても、桂がつかまらない！

三本木の芸者幾松の所がかくれ家だと知れて「それッ」とふみこんだが、桂のヵの字もみあたらなかった。

「ちえッ！」
近藤勇は松平侯から功労章として貰った銘刀のツカを叩いてくやしがった。

屍骸をつかます男

そうして桂小五郎は革命が成功する迄とうとうつかまりはしなかったのだ。
つかまったのは近藤勇の方で、かれは明治元年、板橋で捕えられ、反動の巨魁として、首を斬られた。
とにかく、京都時代の桂小五郎は、どこにいるかわからぬので、有名なものだった。同志でも桂がどこにいるか知らなかった。
しかし、秘密会合の場所へは必ずかれは出てくる。そして運動方針を立てて、会合を指導し同志たちを見渡しては「もうすぐ天下はおれたちのものだよ。おれたちは勝つにきまっている戦いをやっているんだから、今いくらまけたっていいんだよ。最後にたった一度勝てばいいんだからな！　おれたちが勝った時、大名や将軍のような特権階級のいねえ自由な世の中になるんだから愉快じゃないか。ははははは」
と、いつもこういってすこぶる呑気そうに笑うのである。いかなる同志も桂に会うと、急に元気が十倍になるのを覚えるのが常だった。

そして会議がすむと、風のように、かれはかえってしまう。どこへかえるのかだれも知らない。そんなことをきく奴はスパイとみなされるので同志はだれもききはしないのだ。
池田屋会合を探知した時、近藤勇は、それが過激派の重要会議だとわかったので、きっと桂がやってくる、とにらみ、当夜密偵を入れてさぐらせると、果して桂らしい男がいるとの知らせ、追っ取り刀で部下をひきいておどりこんだ。叫喚怒号、血の烟がはれたあとには巨頭の一人宮部鼎蔵を仕止めていたけれど、桂小五郎はいなかった。その宮部も、二階から外をみると抜身でとり巻かれている。もう逃げられぬと思ったので、捕えられて運動の秘密をしゃべっては一代の名折れと、われとわが胸をついて、その場に自殺してしまったのだ。で、捕まったのは、宮部ではなくて、宮部の屍骸だった。——屍骸からは何一つきき出すことはできなかった。宮部は実に運動を愛し運動全体を守るために、潔く命をすてた男なのだ。日本人は先祖代々えらいので今だってこんな男は、ちゃんといるのだ。

桂小五郎は忍術使い

池田屋事件のあと間もなく、祇園の待合の奥まった離れ座敷で、桂は五人の同志と会合して、運動の立て直しを協議していた。

それを新撰組が、どこをどうかぎ出したものか、十二人の一隊で、抜刀でおどりこんできた。
「よしッ！」
同志たちはてんでに鯉口を切った。
「馬鹿め！」
桂は、火の出る程同志たちを叱りつけると、そのまま前栽に下り、木戸伝いに逃げてしまった。同志たちも気がついて、後を追った。
新撰組が、離れ座敷へ飛びこんだ時、行燈が静かに、ともっているだけで、あたりはひっそりとしていた。
あとで桂は同志をいましめた。
「おれたちは、運動のこと以外に力を浪費してはならない。よけいなことをして怪我でもしては取返しがつかんではないか。」
その桂がある夜、薩摩屋敷へカゴで入ったとの密報があったので、今度こそはと新撰組の腕ききが数人、門前に待ち伏せていた。
とも知らぬ一輛のカゴがそっと夜更けの黒門を出てきた。
五六町そのままつけて柳の生えた淋しい曲り角で、
「わッ！」
とおめいて、おどりかかった。
ずたずたに斬りさかれたカゴの中には猫の子一匹いなかった。
当の桂はその時裏門からクツワのしるしのついた薩摩藩のカゴにのって出てとっくに闇にまぎれてしまっていた。
「桂小五郎はどこにもいない。」
「あいつは忍術使いだぞ」
という噂が立った。

恋も又非合法だ

それ程敵をなやました過激派の巨頭桂小五郎も三十に足らぬ若い身空であった。三本木の芸者幾松とは思いに思われた仲である。
幾松は、革命の理窟も何もわからなかった。しかし、小五郎に恋して、同志よりも力強くかれのために、つくした。小五郎も幾松だけは信じていた。
池田屋事件以後、追求が烈しく、さすがに京都中にいるところがなくなった時、
「では……」
と、小五郎にボロをきせ、三条大橋下の河原に群がる非人小屋へ行けと、教えたのも、かの女であった。
その頃の河原には所々に非人小屋があって何十人の乞食が群がって焚火をしていた。小五郎はそこへ身をひそめた。
幾松は一日に一回三条大橋の欄干から、非人小屋の小五郎に指の信号でいろいろな情報を伝えた。

所がかの女には小五郎の情人だというので、巧妙なる間接尾行がついていた。
「こらッ!? 今何をしていたんだ」
と、とうとうある日橋の上で、尾行のミブ浪士につかまえられた。幾松は顔色もかえずに、
「早く、今の世の中がつぶれるようにと皇居をふし拝んでいたところさ」
とタンカを切った。過激派の巨頭がまさか河原の乞食の中にかくれていようとは、いくら新撰組の密偵でも、思いもつかなかった。
その後かの女は、自分もひそかに乞食に扮して、河原へ忍んで行き、鴨川の小石を枕にこいしい人と、ひどく非合法的な一夜をあかしては、壬生の方をむいて叫んだ。
「ざまァみやがれ!」

評議会のあばれた頃

時代はくり返す――こんな話は、維新時代でなくとも、現にわれわれの目の前にもいくらでもあるのだ。
時は大正のみ世も終らんとする前の年、東海道は浜松の日本蓄音機会社に一大ストライキがおこった。
ここの従業員は一千人。団結して組合を作り、その組合は武勇かがやく旧評議会に属していた。
されば千人の従業員が待遇改善、賃金値上げの要求をひっさげて横暴なる会社に向って立ち上るや、当時大阪に本部のあった評議会からは、小田委員長を始め、千軍万馬のストライキマンが、続々として、指導応援のために浜松に入りこんだ。
評議会来る! の号砲にふるえ上った会社側は暴力団を編成して、争議団を四方八方から斬りまくったので、東海道の中都会、浜松の町は、通行もならぬ血の雨、ピストルの烟にとざされた。
しかし、争議団の必死突撃物凄く、戦いは百何十日間連続して、日本始っての大争議と化した。
これ程、争議団が強いのは、背後に評議会という指導者がいるからだ!
評議会と争議団を切り離さなければならぬ。と気がついた資本家と警察は、忽ち大阪から入り込んでいる評議会のストライキマン達を一網打尽にしてしまった。
そして何者も入りこまぬよう、停車場には密偵を張りこませる! 市内にはサーベルを光らした巡羅隊を出して警戒する。かくして完全に浜松市を内外から封鎖してしまったのだ。
争議団は、弧立に陥った。落城の外はない。
と思ったのは間違いで、その頃から、俄かに争議団の戦術は巧妙に、深刻化してきた。――最後に爆弾が破裂するというような、怖ろしい出来事がふってわいた。

木多村主郎の行方

資本家も警察もキモをつぶした。
「だれか、有力な指導者がまだかくれているぞ」
と、しらべてみると、果して、評議会の巨頭木多村主郎の行方がわからない。
「そうだ、木多村だ。あいつが浜松にひそんでいる。」
密偵は八方へとんだ。それらの手から続々と報告が、あつまってくる。
「去×日、争議団本部の会合がひらかれ木多村が出席していた。但場所がわからない。」
「移動本部は市の東部にあるらしい。そこに木多村が潜伏している見込み。」
「すべての指揮命令がみんな木多村から出ている。」
「争議団員は木多村の手足の如く動いている。」
そうした報告を手にして、警察署の楼上では資本家と、検事と、署長が密議をこらせていた。
「何としても木多村を捕えて貰いたい。」
と資本家。
「百方手をつくしているんですが」
と署長。
「この通りタカの知れた浜松の市中なんだからしらみつぶしに調べたってわかる筈だ。」
と検事。
「それがどうもオカしいんです。あの木多村という奴は不思議な男ですね、この狭い浜松中に、どこを探してもいないんです。どうしても居所をつきとめられないんです。」
と署長は額の汗をふいた。
「そんなバカなことがあるものですか。現に争議団は木多村とちゃんと連絡があって命令をうけとればこそあの通り騒いでいるんじゃありませんか。木多村は浜松にいるに違いありませんよ。」
資本家は赤くなって怒った。
「申す迄もありません。ではもう一週間おまち下さい。きっと木多村を捕まえて御覧に入れますから。」
署長はいよいよ汗をふいた。

水遁の忍術

木多村主郎は、評議会から派遣されてきた今度のストライキの最高指導者であった。
一糸乱れず、戦いが百何十日つづいたのもみなかれの指揮命令よろしきを得たせいである。
いやもう、浜松の資本家も、警察も、検事局も木多村の働きにはまいってしまった。
署長が一週間の裡に捕まえてみせると、苦しまぎれに資本家に誓ったのもアダとなり、その一週間が十日となって

も、木多村は一向捕まらず、しかもかれは依然として浜松市中に陣を布いて移動本部から戦いを指揮している。戦いはいよいよ猛烈となるばかりで、全国労働組合の声援はいよいよ深刻化し、浜松の兄弟を殺すな、米を送れ、金を送れと、はては同情ストライキが東京や大阪で始まるという騒ぎ。今や浜松の争議は全国的問題となって、社会全体の注視の的となった。

しかも、かく迄、浜松の労働者を団結せしめ、戦いぬかせその影響を全国になげかけた張本人が維新の桂小五郎よりもまだ若い当年二十八才の木多村主郎だというのだから痛快ではないか。

「ヂリ、ヂリ、ヂリ……」

浜松の警察署にどこかの交番から電話がかかって来た。

「何だ?」

と当直の刑事が出る。

「先日手配中の、木多村の写真にそっくりの男が今××町の床屋で散髪をしています。」

という巡査の知らせ。

それッ!

時高が三人、署長が一人、署長はたいてい一人にきまっているがネ――警察の自動車を床屋の前にのりつけた。

と、散髪をおえて、これは亦血の雨ふらす戦いの総司令ともあろう木多村が腰に手拭をぶらさげドテラを着て、ぶらりと床屋のカドロから出て来た。

「待てッ!」

と刑事が三人、とびかかるより早く、木多村は、いち早く署長の金筋を認めて風の如くかけ出していた!

わずかに木多村の片袖をつかまえた一人の特高は、ふり返った木多村の肩すかしをくって、ころりと、転んだ。その間に逃げる! 逃げる! ――しかし追う方も必死だ! 一隊は五間、四間、三間と……追いつめた!

「泥坊だあッ!!」

と刑事は叫びながら追ってくる。その声に通行人が立ち止る。弥次馬がとび出してくる!

まもなく向うに交番がみえた。

「もう駄目だ!?」

と思ったように、木多村は歩調をゆるめた。

そして、ふり返った!

それを見て、三人の刑事は「捕えたぞ」と思った。その瞬間に刑事たちの眼に、心に、ゆるみが生じた。と気がつくと木多村はどこにもいなかった!

「やッ?」

「どこへ行った?」

とびこんできた刑事たちは木多村の姿を、路上に見失って、きょろきょろとあたりを見廻わした。

「その露次へ逃げこみました。」

と、交番の巡査が息せき切って向うからとんで来た。

そこへ署長もかけつけた。一隊は「それッ」と露次へか

け込んだ。しかし、その露次は一つ折れ曲って、向うの横丁へ出てしまっている！

「おい、今ドテラを着た男がここからかけ出さなかったか？」

露次を出たところの八百屋の店先きで、刑事は声をはずませてきいた。

「さあ、見ませんでしたよ。」

と八百屋の小僧は首をふった。

「あわてて、かけ出した男があったろう。どっちへ走って行った？」

「腰に手拭をぶらさげて走った奴じゃ」

と署長が口をそえる。

「いいえ、一向誰れも走ったものはありませんよ。」

その間にも刑事はてんでに手別けして、八百屋の隣りの煙草屋、煙草屋の隣りの紙屋と一々きいて歩いた。

「今、この往来をドテラを着て、手拭をぶら下げた若い男が走らなかったかね。」

「一向みかけません。」

「犬が一匹西へ走りましたよ」

てな按配。結局、この横丁ではだれも木多村の姿をみたものはない。

「じゃ露次の中だ！」

それからしらみつぶしに露次の中の、裏口、塀の中、物置としらべて廻ったが、猫の子一匹みあたらない。廿分間の後失望して、署長を先頭に、一同が露次から元の横丁へ出て来た時であった。

大島の着流しで、石鹸やブラシのはいった籠をぶら下げた男が、帯には金時計を巻きつけバットをくゆらしながら

その時ィ

べんけい

ちっともさわがず

と唄いながら、通って行った。署長はその男の横顔にちら、と見覚えのあるような気がしたが、四五間向うで、その男は、「やあ今日は！」と杖をついて歩いている近所の隠居に声をかけて、向うの角を曲って行ったので、多分この辺のものが銭湯からのかえりだろうと思い、再び八百屋のオヤジをつかまえて、

「おい、全くそういう男をみなかったかね」

「ちっとも、みかけませんです。」

どうも、うるところがないので、署長は「じゃ床屋の方をよく調べたらどこに住んでいるかわかるかもしれない！行け！」と、一人の刑事に命じて、ここを引き上げようとした時であった。

向う角の、「蓬莱湯」というのれんのかかった湯屋から うすぎたないドテラをかかえたオヤジがとび出して来たが、ふと、警察の署長が往来に立っているのをみつけると、真っ蒼になってとんできて

「あ、旦那、今板場稼ぎにやられました。このドテラをき

て、さっき湯にはいった二十七八の男が、つい油断している間に他のお客の大島の着物を着込んで、金時計と、石鹸の箱までかっさらって行きましたッ！」
「えッ!?」
署長も刑事たちも顔色をかえてしまった。湯屋のオヤジのかかえているドテラこそ、たった今木多村が着ていたそれではないか！
ああしまった！　と署長は町角の方へかけて行った。さっきから署長以下が血眼になって界隈をさがし廻っている間、影の如くきえた木多村主郎は、実はのびのびと蓬莱湯で、悪戦苦闘の血垢を洗いおとし、さて他人の着物を着て、煙草をくゆらしながら、「勧進帖」の文句をうたいつつ悠々と遁走してしまったのだ。
あとでこの事件をきいた資本家や、警察部長が、又遠く東京にいる警視総監たちが、「ふうむ……」と黙ってしまったというのも、無理はない。
ただ、浜松の争議のすんだあとで、××町の蓬莱湯宛に差出人「木多村主郎」として書留小包が着いた。あけてみると大島の着物と金時計と、石鹸やブラシ迄がちゃんと出て来た。そして、手紙が着いていた。
『火急の際とて申訳のないことをいたし、重々おわび申上候、即ち拝借品はここに御返し申上候間何卒所有主に御手渡し下され度、就いては小生のドテラは××町×番地久保田ミヨ子様宛返送下さるよう折入って願上候

草々

蓬莱湯主人様

木多村主郎』

移動本部はどこにある

この木多村の手紙にある久保田ミヨ子というのが当時の、かれのかくれ家だった。ミヨ子は二十二の女で、木多村を命がけで、恋していた。
しかし、かの女は幾松の如き芸者ではなく浜松の蓄音機会社の職工久保田健吉の妻だった。健吉は争議団本部に立てこもって、滅多に家へはかえらなかった。
その留守宅へ、木多村がかくまわれていたのだ。
ミヨ子は木多村の世話をする内、かれの男らしさに、夢中になってしまって、ある夜人妻のたしなみも忘れかの女から進んで、かれに恋を打ちあけた。
木多村はおどろいて、
「僕は将来、逃げ場をなくして、行く所がなくなったら、待合へ逃げこんで、捕まらない用心のために、妓（おんな）と一緒にねるかもしれない。しかし、あなたは、同志の妻だ！　それに生れたばかりの子供迄ある仲じゃないか！　ふざけた真似は断じて出来ない！」
するとミヨ子はすすり泣いて、きれぎれに言った。
「……あたし、あなたが、もしきいて下さらなかったなら……恥かしいから、死、死んで……しまうつもりです！」

「僕だって、死んだってあなたのいうことをきくことはできない！」
「まあ……どうしてでしょう。」
「同志を裏切ることは断じて出来ないからです。それと、そういう個人的な、よけいなことに今は少しの力を浪費することも悪いことだからです。」
あまりに、きっぱりとした木多村の言葉にミヨ子はとりつく島がなかった。しかし、今更自分の大それた考えに気がつき、木多村の気持がのみこめた。
「よくわかりました……木多村さん、女って、何故こんな時になるんでしょう……あたし、女に生れたのがくやしい！」
そういってすすり泣くミヨ子を、木多村はかわいそうだと思った。一切をなげ出して自分を恋した女だとわかっていたからだ。
「そんなに僕を好いてくれるなら、これからもどうかストライキが勝つように、いろいろ僕をたすけて下さい」
とかれは女をなぐさめた。
「ええ、どんなことでも喜んでいたします」
と女は誓った。
そして、蓬莱湯の事件があって以来、あの床屋を中心にさがされては、居所がみつかると思ったので、ミヨ子の家を出て、他の同志の家へかくれた。

その近所に玉つき屋があった。
木多村は、毎日ぶらぶらと玉つきに出かけた。朝から晩まで、そこで玉をついている。
玉場の娘はかれのことを「吉田さん」といって「吉田さん、今夜活動おごってよう」「よし、よし、その代り二階をあした昼間中、四五人で花をやるからかしてくれよ。」
「いいわ、あけておくわ。」
という調子だった。その実かれがぶらぶらと玉をついて遊んでいる間中、たえず各部の情報があるところへ集る、――それを総司令部の伝令がここへ運んでくるのだった。
「やあ永井君か、一つどうだ。勝負しよう。」
と木多村は、伝令の永井が表から何気なくはいってくると、こう声をかけてすぐに二人で玉つきをはじめ、玉をつきながら、半分は暗号で情報をききとる。それが終ると、永井は
「また遊びに来る。」
と勘定場の娘に愛想いってかえって行く。
花をやるから二階をあけてくれ、という時は、即ちそこで各部長会議がひらかれる時だ。
いずくんぞ知らん、この玉つき屋が、浜松蓄音機争議の移動本部になっていたのだ。
吉田さんに岡惚れしている玉屋の娘はもとより、時々この娘にいやらしいことをいいにくる三白眼の刑事も、たえず煙草を貰いに来る交番の巡査も、「吉田さん」とは顔な

じみだったが、この「吉田さん」こそ怖るべき木多村主郎だとは、神ならぬ身の——。

戒厳令

どうしてもつかまらない木多村主郎の事が、とうとう大阪朝日新聞に大きくのった。

「浜松蓄音機会社の争議はもう百四十五日になるが労資双方の対陣はいよいよ深刻になるばかりでいつ果つべしともみえない。知事、警察部長、有力者など交々調停に立ったが円満解決の望みなく、争議団側では今迄に投獄されるもの二十五人、死者三人、負傷者八十人、検束拘留者延人員五百五十人という大きな犠牲を払いつつ全国友誼団体の涙ぐましい後援を力草に、最後の一人となる迄戦おうとの決意をかためている。誠に浜松蓄音機争議は日本労働運動史上に特筆大書さるべき大争議である。

事の善悪正否が労資何れの側にあるにもせよ、今や争議団員の、家族数千人は飢えに泣いており、職工中に八十何人の死傷者を出すが如き暴力闘争の裡面には、会社側の暴力団使用が、おおうべからざる事実として喧伝せられ、加うるに最近爆弾騒ぎがとび出すに至ってはその責任の何れにあるを問わずもはや全治安上の由々しき問題である。

さるにても、之程の大争議をかもし出したのには浜松蓄音機会社千人の従業員の背後に、評議会という恐るべき団体の指導があるためで、殊に今度の争議を最初から指導しているのは、評議会にその人ありと知られた木多村主郎氏である。

木多村氏は、争議勃発と同時に浜松に入りこんだままどこへも顔を出さず、だれとも会わず、全く黒幕の人として、指令部の主権を握り、千人の職工を意のままに動かして会社側を泣かせている張本人である。

浜松の警察は躍起となって氏の所在をつきとめるべく狂奔しているが、他の指導者たちが続々として逮捕されるにも係わらず、木多村氏だけは、もう五カ月間一歩も浜松から出でず、警察の目をくぐりつづけて、未曽有の争議戦を一糸乱れず続行させているので、県当局も「敵ながら天晴れなものだ」とその手腕に舌をまいている。

戦国時代ならば、山本勘助、竹中半兵衛にも比すべき大軍師木多村主郎とはそもいかなる人物か？

かれは××県に生れ、学歴としては小学校を卒えたきりで二十才の頃、大阪府巡査を拝命して、当時社会主義者として奇行の多かった天見直造翁の尾行を命ぜられている内、天見翁の感化をうけ、つぶさに社会主義の研究にふけるようになり、署内の巡査に共産主義を宣伝したかどで退職させられてからは一路直に社会運動に入り、大正十三年の日本労働運動の左右分裂に当って初めて左翼主義者として頭角をあらわし、評議会初っての闘争となったもので、今年漸く二十八の青年である。」

何のためにこういう記事が大阪朝日にあらわれたのか知らないが、三段ぬきの大きな標題で之丈けの記事がのったため、新聞の影響というものは恐ろしいもので、木多村主郎の名は全国に伝わり、かれ一人を捕えない県警察の無能よばわりの声はお膝元の浜松にもかまびすしくなった。

もうこうなっては、警察の面目が丸つぶれなので、浜松市中は木多村一人をつかまえるために、戒厳令が布かれたような状態となった。

遂に、玉つき屋は、其筋に発見された。刑事がどかどかとふみこんで来た。「吉田さん」がここで何をしていたか、どんな奴が出入りしたか、玉つき屋の娘はきびしい訊問をうけた。そして「吉田さん」が何者であるかをもれきいたかの女は朝日新聞の記事を思い出してぞっとなり乍ら、きのう迄呑気に玉をついて遊んでいた「吉田さん」の姿をありありと目にえがいて、熱を出してねてしまった。

閲兵式

その日以来、「木多村遂に捕わる」という情報が方々へとんだ。

「本当だろうか？」

「何でも××町の玉つき屋でやられたっちう噂だが。」

「おれは特高の奴にきいた。」

と争議団の各班では、信頼し切っている木多村が遂に敵の手に捕われたというので、みんな意気阻喪して、もうストライキも之れでおしまいだという悲しい気になった。

しかし本当に捕まったのかどうか、真相がわからないので、たしかなレポが本部からくる迄じっと待とうとみな申し合わせた。

すると移動本部からは深夜の三時というように、意外なレポが各班に廻った。

「明朝午前七時を期して三々五々、団員は停車場前に集合せよ。」

「之はおい、示威(デモ)行列の計画だぜ！」

「よし！　押しかけろよ。」

明朝、みごとに警察を出しぬいて、駅前は争議団で埋まっていた。

各班長の指揮で、襲うてくる警官や暴力団にけちらされぬよう五人ずつ筏のように腕をくんで高らかに労働歌を高唱しながら、社長邸を目ざして大通りを行進し始めた。

すると、顎ヒモ物々しい警官隊と、私服隊は、自動車とトラックに分乗して、スキを狙う如く、ぞろぞろとあとを追った。

争議団の行列は密集して、進んだ。大通りの目ヌキの角に××呉服店がある。そこは浜松一の百貨店(デパート)だ。

そこの屋上にインバネスを着て中折をかぶり、赤ん坊を抱いた会社員風の男が、大丸まげに結った若い細君をつれて、立っていた。

行列の先頭を切る第三班の班長が
「おい、××の屋上をみい！」
と、五六人の団員にささやいた。みな、思わずそっちを向いた。
「やッ……あれァ久保田のカカアじゃねえか？」
「しッ!!」
班長に叱られて黙った。しかし、ミヨ子と並んで立っている子供を抱いた男が、久保田でないことだけは、だれの目にも不審だった。
「あのカカア何してやがるんだ！　あんな大丸まげなんかに結いやがって」
団員はフンガイして通りすぎながら、あとの者にいった。
「屋上に久保田のカカアがいるぜ」
その合図はあとへあとへと伝わって行った。
見上げると、インバネスを着て赤ん坊を抱いた男と、ミヨ子とは、にこにこしながら下を通る争議団行列を見下ろしている。
「やいッ！」
とその方へ拳をつき出して過ぎるものもあった。
「あッ!?……」
と叫んだまま、われとわが口を掩うて、小走りに、うつむいてかけ出す男もあった。
その男は三町も行ったところで、同僚の耳にささやいた。
「ミヨ公の赤ん坊を抱いて立っているのが、……木多村だ……」
「えッ？」
その時、うしろの方でもわれ返るような叫び声がおこった。
「万才ッ!!」
「万才ッ!!」
「争議団万才ッ!!」
「しょくーん！―わ、れ、らの――き、た、む、らは、けんーざいだあ！」
と、何者の声とも知れぬドラ声が地鳴りのようになりひびいた。
この不意打ちの示威行列が、凡ての団員に対して総司令木多村の、健在な顔を××呉服店の屋上からみせる巧妙な閲兵式だと気がつかなかったのは巡査や、私服の一隊だけだった。
ミヨ子はたった一時間でも木多村とまるで夫婦のように屋上に並んでられるのが、どれ位幸福だったかしれない。
××呉服店を過ぎて、行列が急に騒ぎ出したので時こそよし、と警官隊は「それッ」とばかり、イナゴのようにトラックや自動車からとび出した。そして、行列の中へ、おどりこんだ。
叫び！　わめき！　朝の浜松市の大通りは戦場とかわっ

た！　屋上の木多村主郎は、折からの朝日を額にうけて、大乱戦となって行く下の大通りを見下ろしていた。そして、ひとりでつぶやいた。「戦え！　戦え！　勝利はおれたちのものなんだぞ！」（了）

（一九三〇年二月「戦旗」）

巷路過程

細田源吉

……………………………………

夏の労苦はまだ記憶から薄らがない。

温気（うんき）は累進税率的な昇り方をした。

頭から土埃をかぶったF区の街通りという街通りは、陽の光までが、焦げついた粉（パウダー）のように赭々とむせっぽかった。朝から道路の掘り返しをやる汗みずくの道路工夫は、油びたりの南京豆（ピーナツ）そっくりだった。

おまけに街通りの真中は、手摑みで人間を押し込んだような電車だ、焦々したトラホーム患者みたいに客を睨み廻る円タクだ、あぶれたサーカスのような自暴的なトラックだ。土埃の落ちつく暇がなかった。

そうかと思うと、のべったらしのない長雨が街通りを襲った。

バラックからバラックへ、足の踏み入れもならない深い泥濘だ。電車や円たくやトラックが、跳ね飛ばした泥土

を、更に跳ね飛ばすのだ。道路は人間にとって歩く場所ではなくなってしまう。
　なにしろF区は最大満潮から二尺の土盛りにとりかかったのだ。場所によっては六七尺、ひどい低地は十尺からの土盛りなのだ。区劃整理をかねた工事で、大きな表通りの××町もその例に漏れず、家も人間も見る蔭さえなくなり、その日暮しの小ぽけな雑貨店、呉服店、飲食店は、悉々上ったりになった。そこで界隈の人達は、近くの復興局第――出張所へ呶鳴り込みに出かけるのであった。
　照れば照るで、
「引っ越はした、家賃はべら棒に高いところへ、このひっくり返した道路と土埃と来てる……まるで商売が止っちまった。一体誰が喰わしてくれるんですかね……？」と、体あたり的にぶつかって行った。
　降れば降るで、
「こりあ道路ですか、川ですか。これじゃ買物したくも客が寄りつけませんよ。気の利いた客は電車でデパートへ出かけるにきまってまさ。まあ、一寸見たらどうです？　せめて一軒に一つずつ舟をつくって貸下げて下さいよ」
　そういわずにいられないほど、道路は二段も三段も低下し、雨水があふれ流れる。
　ところが復興局の出張所では、降れば晴れる日のある確信を以って、平然と呶鳴り込みの人達を対手どって行く……。

堰くに堰かれない生活の波が、街から街へと押し遣られる。その波の中の一滴が、泡になって消え去ろうとも、後から後からと続く流れは果しもないのだ。而も泡の出来がちな場所は、きまって障碍の多い片隅なのである……。

一

　呉服小売商人の東屋山崎平兵衛は、たった一人きりの小僧を指図しながら、朝――五月の初めのことだ――狭い店の掃除を済ませ、三尺四方の飾窓の、表に面したガラスの汚れを気にして、突っかけ草履で表へと出てみた。
　街は天気続きで埃の始末がつかなかったが五月の大空の一部は、人間の心持を遥か遠方へ唆った。東屋は暢やかな惰気を感じ、埃っぽい空気ながら、二つ三つ深い呼吸をして胸を膨らませたりした。
　ところがその間というものは、ほんの二分ともなかった。くりくりと丸っこい五十がらみの小さな体軀を反し、彼は目と鼻の間の隣りの洋物店の軒をふり仰いだのであった。軒へ梯子をかけたペンキ屋が、一度塗りつぶした看板の上に、肉太の文字をなすり立てているところだった。
(隣りはまた店をせっちょうしてる……)
　なにか、かにか、人目を惹こうとつとめる洋物店にしても、そうそう弄り廻わしたところで、三間半間口は四間以上には見せられはしまい、と彼は嘲り顔で、すぐ自分の店

の内へ戻って了った。
たった一ト間の奥では彼の後妻が、亡くなった先妻の男の子――十三になる金市と、一昨年彼女の生んだ男の子達に、朝飯を喰べさせていた。彼はその間に割り込み、新聞をとり上げたが、隣りの看板のことは話し出さなかった。いずれ小店員の孝助が喋舌るだろう、それも前以って想像するだけで彼は不快だった。商売根性からの嫉妬がこみ上げていたから……。
第一、前々から彼は隣りの看板が気に喰わないのであった。彼の軒に立てた看板は丈が低く細長かったにしても、隣りのはそれよりも二尺は高過ぎるのであった。看板を上げたのは彼の方が一ヵ月おくれたが、その時彼は隣りの看板と似合わしい高さのものにしたほどであった。ところが、その半月も後には隣りは更にそれを上越す高さのものに掛け替えたのであった。彼は啞然としながら、
(隣りの市田屋は飛んだ出過ぎた野郎だ……)
と、声に出してつぶやかずにはいられなかった。
小僧が彼の細君と代って朝の膳に向う為め、奥へ引っ込んで来るなり、云った。
「旦那隣りじあ看板を塗り替えましたよ。新流行第一、モダン柄と並んで書きましたよ。……モダンと大きく書きましたよ。おかみさんも出て見てます」
「そんなもの見なくともいい」
そう彼は怒りを帯びた声になったが、モダン柄、柄、柄……とはなんだろう、好みじゃないか、と訝しがった。
「洋品店なら、柄はおかしいな。隣りはものを知ってるそうだが、案外柄と書かせるのはおかしい、モダン好と――すれあいいところだ」
彼も店へ出ると、表でペンキの看板をふり仰いでいた細君の顔が、急に苦い表情となった。彼が呼び込もうとするよりも早く、細君が店に引返し、
「メリンス専門店――と書かせましたよ。隣りじゃあ、二三日なんかおかしいと思ってたら洋物をかたづけ出して、もうメリンス問屋から入れてるらしいですよ」
「そんな馬鹿をされて黙っちゃあいられない」
年若な細君の前で、平兵衛は苦りきって焦々し出した。
……「ほんとうか、メリンス専門店と書かせたか」
「出てごらんなさいよ」
「いや、そんなら出てみるにあ及ばない」
彼はこっちから出かけて行くことは、掛引上つまらぬことだと考えたのだ。向うからなにか一言あるべきところだ、あまりに蹈みつけ過ぎるというものだ、もし挨拶に来たら、頭ごなしにきめつけて、断然やめさせるまでだと、思うのであった。
隣りの店先きでは、そこの店の者が二三人して話声を立てていた。
「安売正直売――新式販売法……」
誰かそんなことを反覆していた。

隣りからは午過ぎまで挨拶に来る者がなかった。通りがかりの顔見知りの人達が、東屋の店の方へ入って来て、驚きの目顔で、
「こちらで承知なすったんですか」などと煽動的にこっそりと焚きつけて行くものもあった。
平兵衛は店に坐っていられなくなり、五六軒向うの気の合った版木屋の店へ出かけ、そこの主人とものの二三時間もぶっつづけに喋舌り立てた。版木屋は売薬店の金文字入りの看板を彫りながら、それでも手捌きはおくれさせず、一枚一枚、小さい弟子の方から廻わして来るのに彫りを加えて行ったが、平兵衛は只昂奮しきって隣りの市田屋を攻撃する一方だった。
「もうこれで私も堪忍しちあいられない。前のことがあるのに、それも二度も私が許してやってるのに、こんな真似をするとは……」
その全身はおこりのように慄えた。まったく彼の立場からすれば、市田屋はあまりに非人間的な企てをやり過ぎるともいえるのであった。
東屋平兵衛は明治三十三四年頃からこの××町通りに店を張って来たもの堅い小売商人だった。二十六七年の余も一つ町内で商いをしつづけて来た彼も、今度ばかりはどこからどう話をきり上げていいのか、きり上げようのない驚き入りだ……。
「メリンスですぜ、私の店の大事な商(あきな)いものですぜ……隣り合って同商売をやろうなんて、どうしてこの東屋が憎いのかね？　殺すようなもんじあないか、ねえ、栄さん！　町内で黙ってますかね？……こんな乱暴な真似をされてさ！　これじあ近所の誼みってものもなんにもありあしない。時世が変ったかも知れないが、どうも極端だ。それもさ、一言の挨拶をしてお互いわかり合った上なら格別………」彼の憤りはどこまで行っても止まらなかった。
版木屋は、事実急ぎの注文にせき立てられていた。それに、市田屋とも知合いの中であってみれば、いかに東屋がそれ以上に古い馴染みの間にしろ、一寸口出しは困るのであった。然し勿論版木屋は東屋の肩を持たずにはいられなかった。なぜなら、彼は東屋側に義理があったからだ。
東屋と市田屋との間には震災以来の煩わしい経緯(いきさつ)があった。震災前まで市田屋は裏横町の方でしもたや住いをしていた。どことかの会社に勤めていたそうだったが、震災でその会社が潰れてしまい、急に三十七で商売を始める決心をした。丁度××町の表通りの、東屋の敷地が震災後半年も放ってあったので、どこに東屋が避難しているかわからないという口実の下に、木造トタン葺平家一棟――建坪八坪七合五勺のものを急造し、その土地を無断で占有したわけであった。それと前後して、やっぱり震災前まで近所にいた男が、その隣りの空地に木造トタン葺平家一棟――建坪で十三坪のものを建てたのであった。
「東屋さんがどこかから借りてる土地だそうだが、こんな

際で生命さえどうかわからないんだ——当分の間、又借りだ」などと、その二人は話し合って地代の届けどころもなく、いい気持でいたのであった。結局東屋の借地はこの二人の闖入者によって、都合二十四五坪は横取りされた形であった。

東屋はなにも知らずに埼玉の小さな故郷の村で、久しぶりに年若な後妻と子供二人の呑気な朝夕を送っていた。彼達は震災直後に当分東京をだめだとあきらめて田舎へ落ちて行ったのであった。聞くところによると、F区はこの際に全区土盛りをするという話なので、一層立ちおくれるものと予想したのであった。いいことには、小さな村で彼達がめずらしがられたというわけであった。二昼夜、地震の後に火災が起って、数里に亙る炎々とした焔が、埼玉の村間近かに天を焦しつづけた。恐怖に恐怖しながらその大火焔を眺め過した村の人々だった。東京の人々がその時どこにどうして生きていたか、村の人々には想像も出来なかった。そうして東屋の親子達は凱旋の勇者のように大事がられたというわけであった。

東屋は東京山ノ手の代々のもの持ちから土地を借りたまま、もう半年にもなろうというので、或る日上京して来たが、さて最初はどこが我家だったか見当もつきかねるくらいだった。二三の知り人に出逢い、はじめて自分の店の後に二軒も小屋がけして商いをやっているということを知った彼は、驚いて立ち廻わってみると、話の通り二軒のバラックが立っていた。

「あなたがどこにいられるのかわからないので、仕方なしに建てたんですから……」

申合わせをしておいた横取りの二人は、くり返して頭を低く出たのであった。

残った地所は十坪に充たなかった。といって震災前通りに彼も五十坪あまりの店舗を建てる資金は、とてもないのであった。成行を見ると、彼も手が出せなかった。そこでやむを得ず承諾をした。その後でもうバラックに入っていた版木屋をたずね、

「仕様もないから許してやった」と云った。

「そりゃ、証文をとっときなさい。市田屋の方はなかなかの人間らしいよ……」と、立退きの契約をすすめたものであった。

それもそうだと思い、東屋は又二人の人間を相手に第一の証文をやっと書かせることが出来た。それまでにはだいぶの手間を費やした。

立退契約書

大正十五年八月三十一日迄に家屋をとり壊わし土地を明渡し申べく候

大正十三年二月　日

市田仙太郎　㊞

山崎平兵衛殿

この一札で東屋も安堵した。その上、有体に云えば、彼の店がかりは三分の一にはなったが、これこれで割込んだ人間があるという口実で、

「どうもやむなく手狭な店になりまして」

と、どこへも吹聴して廻わることも出来たというものであった。

ところが、後の男の方は、その立退きの契約前に他所へ引越すことになり、その家屋は東屋へよりは市田屋の方へ——というよりも東屋が聞きつけるより前に、市田屋の方が先に聞きつけ、二足三文で引きとることになった。その話が決定した後で東屋も聞き込み、なんぼなんでも自分は地主代わりの人間なんだから、一応自分の手を通してからでなくては市田屋へ売らせぬ……といい出した。

その癖、東屋は一文でも鞘をとろうと思ったからではなかった。只、手続上、彼がそうする方が好ましくもあり、地主の手前、またそうしておく方が正しいからでもあった。

立退き期限までの地代は、東屋に迷惑をかけた損料ということで、八坪七合五勺に対し月々十一円、それから後の十三坪に対し十七円、〆めて二十八円宛を東屋に支払う約束になり、それ以後市田屋は月々それらの金を払って行った。

そこまではどうにかこうにか表沙汰になる問題はなかった。只、市田屋は五百円で買いとった隣りの表構えを修繕し、三間半間口に拡張した。奥行は浅かったが、見た眼には堂々とした店舗になり、問屋側でも力を入れる二三軒が出来たらしく見えた。

「商業学校とかを出た男だそうだよ。道理でむずかしく話をすると思った……店の広いのは無理になるから、いまにもて余すだろう」

隣りの店に商品の充実した光景を眺めて、東屋はなにか平かならない気持から、その夜細君にそんな風に多寡をくくって話したこともあった。震災前には彼の店舗が片隅にある三間々口の手広な構えで、店員も少い時で四人はいた。それもたった一年半前の光景だった。逢う人毎に、まだ消え失せないその光景を話し出して、隣りの洋品店の手前、自分の落ち目になった営業ぶりを飾ろうとするのであった。

なにしろ、彼は半年の余も他人から立ちおくれ、問屋の信用をかなりに害ねて了っていた。

それこれの、東屋と市田屋との盛衰が、日に日に鮮明になるばかり、しかも市田屋は出来る限り外面を装うのに骨を折っているのであった。大きな高い市田屋の看板や、土足のまま店内を歩いて見られるような新式の装置が、殆んどその隣りの東屋の存在を圧し尽して了った。東屋は見るから小さく市田屋へよろめきかけている風体だった。

東屋がその有様に無関心でいられる筈はなかった。彼れ平兵衛は、

「私が土地を貸してやってるんだから、いつでも立ち退かしますよ。十五年の八月三十一日には是が非でも退いてもらいます……」と、触れることを忘れなかった。
　ところが、その期限が近づくと、市田屋は、ある限りの慇懃さで、
「この通り、問屋にせがんでこれだけの店にしたんですから、もうどうぞ二年ばかり……その間にはどこか適当なところへ店をみつけて引越しますから、なあァにその時はこの建物なぞ、どうせバラックの平家ですから差上げます……」と、嘆願をしに来たものであった。
　面と対って、やり手の市田屋に下から出られた気持は、東屋もわるかろう筈がなかった。
「証人というのも変ですが、ともかく版木屋さんが近所のお方でいい人だから……」
　と、そこで東屋は証人に版木屋を名ざしたのだったが、どうしても市田屋が言を左右にして証人などとは水臭い、なにしても律気な商人の仲だからといい張って、堅く今度こそと契約を改めたのであった。
　それから三年後の今日はどうだろうか。もう二人の間では三度目の改約がされ、三度目は市田屋も仕方なしに証人として版木屋を認めないわけにいかなかった。
　その三度目の期限も、もう剰すところ十カ月あるかなしかであった。
だから、どっちから云っても東屋は唇を噛み、眦を釣り上げずにいられなかった。
「こともあろうに、三度も立退きを延期させたんですぞ。その上に私と同業のメリンスを売ろうなぞとは、一体人間の考えることですか、ねえ栄さん、三度目には仏様も怒るんですぞ！　私がいかに人が好いったって、これを許せば四度目の難題を許すことになるんですぞ！　仏様もこの真似は出来ないんだ……」
　東屋が憤るのを、版木屋の主人栄三も、ほとほともてあました。事実、その憤りに無理がなかったから……。そうして最初、堅く立退くという約束があってから、ずるずるべったりにもう足掛け六年にもなり、年号も昭和に改っているのであった。
「まったく、どうも……とにかく私が一寸後で出かけましょう」
　もう仕方なしに、版木屋も承諾をした。
　看板の塗替えをした夜、版木屋からの話で市田屋に出向いてもらいたいと云ってやったところが、むしろなにはなくとも一口差上げたいからこちらへ失礼ながらお出かけ下さいという市田屋の申出であった。尤も版木屋も東屋も、混み入った相談などをやるような座敷がなかった。市田屋はそれでも六畳の一間は、譲り受けではあったが、そのまま座敷に空けてあるのであった。
　この機会に市田屋は叮嚀に二人を歓待することを忘れなかった。場合によったらもう一つ思い切った企てが――メ

リンスばかりでなく呉服一切を扱いたい企てが、彼の胸にあるからだった。勿論、十ヵ月後に差し迫っている立退きの契約も殆んど無期延期にさせてしまいたい肚があったからだった。そうでもしなかったら、この商いにかじりついてはいられない。現に問屋仲間の噂だというには、隣りの東屋は殆んど対手にされず、もう半年か一年の後にぴたりと問屋との取引が停るだろうとさえ見られているそうだった。もし店を閉めるほど東屋の内証が苦しいものなら、なにもこれまでの自分の努力を放棄して立退かなくともいいのだ。また商売だって、そっくりこっちが華客を貰っておいてもいいのだ、と高をくくる気持もあった。而もこの肚の悪さを、悪いからと云って誰が咎め得られるか――とさえ思っているのであった。

三十七よりは老けて見え、どっか強気な容貌の市田屋は、そこで万遍なく酒を促がしながら、東屋と版木屋の機嫌を迎え、

「どうも洋物の方はとてもやりにくいもんですから……それに私の学生時代にいっしょだった友達がモス問屋の西伊へ入りましたので、一つ店とチェンストアのような風に品物を動かしてやるからって話で、丁度行き詰ってたのでまあ余儀なく初めます……どうぞ私達親子もなれない商売でだいぶこれまで苦しんで来ましたから、一つお力を添えて下さい。……現今はデパートってものが力瘤を入れて、なんでもござれで売るもんですから、小売店はどうしてもそれに対抗する日になると、専門化されなきあ立ち行きませんよ。呉服店も、銘仙屋と、メリンス屋と、それぞれ専門化して、デパートより異色のあるものを売る……それがたった一つの途です……」

透かさずに市田屋は巧みな話しぶりで続けて行った。その間に彼の細君が銚子を運んで来ては、一つ二つ隣りの子供――金市や赤ん坊の与吉のことで愛想をいうのであった。

「成程……」と東屋は市田屋の説くところをそのまま肯くのは厭であった。といって、市田屋の説をひっくり返すような考えが、彼にあろう筈がなかった。成程……という言葉が口元まで出るのであった。彼の兄が呉服店をやり、兄が三十前後に夫婦とも夭折したところから、やむなく彼が中年の呉服商人になったわけであった。尤も彼は父を失ってから多くの年月を兄の店で送っていたから、もともとずぶの素人ではなかった。なにしろ二十何年もの年期を入れている自分だ、学校は出てもずぶの素人の市田屋に、碌なことは出来る筈がない、と見縊ってみるのであった。

「私の友達の話に――そいつがこないだここへ来ましてね」と、市田屋が云った。「東屋さんと私の店をのぞいたんですがなんでも渋谷とかに丁度こんな風に仲よく並んだ店があって、両方とも呉服店をやってるんだそうで、それで却ってお客を引いていい商いをしてるそうですから……東屋さんは呉服とメリンス――私の店はメリンスぞっきで

立つ。却っておもしろいから客を呼ぶだろうと思いますよ。然し東屋さんが従前通りメリンスを売られることはちっともかまいません。もしなんでしたら私のその友達が入った西伊を御紹介しましょうか、西伊のメリンスは今売れ足がいいそうですから……」

云われても東屋はすぐ返事をしなかった。誰の眼にも、むしろ東屋の方が変屈屋だと見られても仕方がなかった。

「どっち途、小売商は皆な行き詰りです。商品がストックになることが小売にとっていけないんです。こいつはうまく回転率をよくして……それから銀行の利用です、それには信用の能力が薄弱だから、組合とか連合とか、いろんな形で、皆なして信用を高めなけりゃ駄目ですよ。三土蔵相の中小商工業への融資ですね、あんな七面倒なものは私のとこあたりじあ利用出来ませんよ。高々、千円から三千円ばかしの資金融通に十人以上の連帯保証だとか、一カ年の償還だとか、こんなせちがらい時代に低利にしろ、利をとるのに、そんな手間暇を忍んでまで借り出せるもんですか。なんでも、最初の案を改善して普通銀行に割よくさせるそうですがね、どうしてなかなか普通銀行が貸出しに大胆になれるもんですか、なにしろこの震災後ですよ。民政党が経済界のパニックを起したという後ですよ。版木屋さんなんぞどうです？」

聞き惚れていた版木屋は、不意にそう聞れて、すぐ跋を合わせることが出来なかった。彼も中小商工業に融資するという政友会政府の案を、人伝に聞いてはいたが、自分で碌に考えてみたこともないのであった。考えたところで、彼の現在にすこしの利益関係を生じそうもないからだった。只、その結論だけは、どうやら市田屋と出逢うらしいところから、

「そうですよ。まったくこんなしがない商売してるものはなんだってうまい廻り合わせなんかありませんさ……」

さて、云って了ってそれでいいのかどうか版木屋は盃をおいて市田屋を眺めた。

そこは如才のない市田屋であった。版木屋の表情が自分を受け容れたと見ると、彼は融通の形式、一人の借入限度、融通利率、償還期限等々について、西伊の友達などの知識も借用して補いながら、尚しばらく喋舌っていた。

東屋も版木屋も、その夜はとり立てて不服らしい不服も持ち出せなくなった。結局、メリンス一点張りの、他店荒しはしないというくらいのことで、鳧がついてしまった。

「デパートですよ。問題なのは……お互いに小売商人は結束しなけりゃどうもならなくなりますよ。……三越なり松坂屋なりの商品切手が一体どのくらいとお思いです？　三越で七百何十万円、松坂屋で四百何十万円、松屋で弐百万円、その他のデパートでも五十万円以下じゃありませんよ。千五六百万ってものが、われわれ小売人の客から吸いとられちまってるんですぜ。その千五六百万円はお客から只借りしてるわけで、そいつを銀行に預けて、あべこべに

利子をとってるじゃありませんか。その利子だって何十万円ってもんでしょうね？　どうです？　昭和二年、今年の上半期ですぜ。その無利子の預り金でふんだんに安い大量的な仕入れが出来るんですよ。ところが小売商人と来たら十人以上の保証人連署でいくら借りられます？　千円——から三千円。それで利子はお上へとられるんです。小売商人はどこまでうだつがあがらないかわかりますね。どうしたって小売商人は兄弟のように結束することです。さもないと、いよいよ地べたの底へでも潜らなけりゃならなくなりますぜ。……ぶつかって行くところはデパートです。商品切手を全廃させることが一番です。……」

それから尚、東屋と版木屋とは、すすめられるままに盃をかさねていたが、さて改っては苦情もくどくどと云えず、気を呑まれたような形になった。

帰りに版木屋は、事のメめくくりがつかないので、東屋の店へ立ち寄ったが、ここでもいい考えはなかった。なにしろメリンス一式でやるというのであってみれば、同一の商売とはいい条、多少考え方を案配しなければならないからであった。

「どうも市田屋のすることには腹の虫がむかついていけない……」と、東屋はこぼすより仕方がなかった。

後妻の細君は板張りの壁越しに耳を澄ましていたが、聞えるのは市田屋の声だけで、とても心配だったと云うのであった。

煩わしい経緯を他所に、市田屋の大きな塗りたての看板は、節句の色蒲鉾の生々しさで光彩を放った。街がまるで黄疸みたいな埃深さだから一層人目に立った。

拡張記念特価品大売出し……の一時的な店前装飾を広告屋がとり急いだ。

二

つれ売り出しはどうだ、と或る人々が東屋を煽った。隣りでやるから、すこしの費用で相当客を引くだろうというのであったが、東屋の主人は弾まなかった。

拡張記念……の拡張の二字が、どうしても東屋の主人の腑に落ちないのであった。改業記念……と書き直したらどんなものだ、と思い、外へ出てみたついでに、彼は市田屋をのぞいて、

「改業はよろしいでしょう、閑が使えず、故なら理窟も尤です。」

「それもなかなかいい思いつきです。なにかに使わせてもらいましょう……」

と、その返事は愛想がよいのに、結局うやむやに終ってしまった。

売り出しは三日に亙って喧々しく楽隊を入れた。市田屋が耿々と輝かしく眩いのに、東屋は盲目のように薄暗かった。

それでも二三人とめずらしく客が立て混むことがあった。

「いかがです？……よろしいでしょう。なアに世間は珍らし好きですから、共同的に商売をしてるってとこを見せると、却って喰いついて来るんです……私は、東屋さんの方にそのお品はございますってお客さんにすすめるんですよ。帰えりにお寄りした人もあったようで」

そういわれるのは東屋としては不快だった。

「いえ、前からのお馴染です」

東屋は云った。そんならお馴染が一足先きに隣りのメリンスを買ってから東屋へ寄るのは心さみしいことであった。

東屋へ来た客で、メリンスをみせてくれという客が、その後めっきり減って来たことが主人にわかった。

「これじあ他の物も売れなくなる」と、彼は首をふった。

永い間日本橋堀留から来るメリンス問屋の店員が、隣りの店から出て、東屋の方へ入って来た。すぐ東屋では不快な顔をした。

「お次にはこちらか……どうもひどいな。ずぶの素人の店へいい柄のをおいて、うちへ二番ものは恐れ入るよ。……今日はやめとこう」

「旦那、だって仕様がないんですよ。西伊がばかに気を入れてるから、私とこでもどうだってんで、それでなにしろメリンス専門ってとこで、仕入れも大きくしますから……」

その答弁は苦しかった。

「それじあ、古い取引先よりも、沢山買やあ、新店の方を大事にするのかい？」

「どうも困りますよ。旦那。隣りで選ったのを一寸覗いてごらんなさい。隣り向きのもんばっかりです。どうしたって主人の趣味ですよ。東屋は昔から東屋好みで通ってるんだから……」そこで問屋の若い店員は、欝金木綿の袋をといてメリンスを山とひらいてみせた。

気分がすこしも浮き立たないから東屋の主人は買い汚なく出て、今日の仕入は三反くらいしかなかった。あれこれと世間話しの中で、問屋の店員は、

「ずぶの素人でも市田屋の旦那は頭がありますね。どうも頭がいいや……」

最初の皮肉でどうにか東屋を見縊びった問屋の店員は、そろばんの上からも市田屋を重んじ、売り掛けも多くするようなことになった。東屋の立場は、主人が欝ぐだけ近づく者もむせっぽくなり遠々しくなった。西伊が入っているとなると堀留の問屋も競争的に引きずられるから、荷物を曳っ張って来ると、第一に市田屋の前につけるのであった。

そこで東屋はメリンスが上ったりになり、足袋類のようなものや白木綿などが売れ、その上り高は目に見えて減り出した。ところが市田屋の主人は煙草を喫いながら、三分五分と、東屋の店先きで如才なく世間話にかこつけ、店内

の手薄くなった有様をじろじろと見廻わしながら、
「メリンスか銘仙かって時代でも、やってみるとそう思ったような儲けはありませんな」と、底のわからないような話をつづけるのだった。「……メリンスの一カ年の消費高は一億二千万ヤールだそうで、一人頭二ヤールにあたるわけですがね、私の店じゃその儲けが一割欠けるんで、冗骨（むだぼね）です……」
「そんなことじあないでしょう？　あんたンとこはそんなに勉強しますか」
と、東屋は正直に訊き出そうとした。
「いえ、まあ、私ンとこは諸式にかかるんですね。どしどし売れれば格別、そうでないと一考えしなけりあなりません」
　市田屋は成心があってそんな遠廻わしなことを云っているのであった。彼は呉服物の一切をおいてみようと考えはじめていた。銘仙の知識を持とうと思って、東屋へ来るたびにその方へ話を持って行った。
「お店は銘仙が出ましょう？　銘仙っていうと、秩父物は玉糸のせいで、どうも染付に惜しいところがありますね」
「この辺じあ、まあ女物が多いから足利ですよ。なにしろ足利は熱心でしてね」
　然し伊勢崎に越す銘仙はないという話などで、市田屋はあれこれと話を向けるのであった。問屋は小売店を大事がらない。大阪に比べれば東京の問屋は市内の小売店本位にやってはいるが、普通六十日の手形で支払うのと、それも支払ったり支払えなかったりで——他方のデパートの三十日手形できれいに支払うのと比較したひには、誰れしも仕入高のかさむデパート第一ってことになるのは自然の成行だ、などという話にもなった。
　この点で現に苦しいのは東屋であった。二十日が問屋の〆め日だから、仕入れはその後にする、そうすると、六十日の期限のものが、更にもう一カ月先きへ、九十日分に延ばせる……それもすこし支払いさえよくすれば、二十日〆めとはいえ、二十日前の仕入分をも、二十日締めということにして三月先きの払いにしてくれたものだった。が、もうここしばらくは東屋の店はあっちこっちで警戒されて了った。その証拠は、好意的の二十日締めも利かず、品物も来ないのであった。
　同業になったばかりに、内証をそのまま市田屋に知られるのは東屋も苦痛であった。
　その間に、冬物の仕入時が近づいていた。
　或る日、東屋の小僧が、隣りの市田屋の店に伊勢崎物がうんと積み上げられている、と云って主人に知らせ、急に又事が煩わしくなった。東屋はなに気ない風を装って、市田屋の円椅子にかけてみたが、その通り、人の丈ほどにも積み上げられていた。
「どうなさるんです、市田屋さん、まさか銘仙までおくつもりじあないでしょうな」

られまして……」
「どこです？」
「山一の塚原です」
そこで東屋は二の句が出なくなって了った。塚原商店とは彼も永年の取引だった。それが円滑を欠いで時々彼も半日の手間暇をつぶして掛りの番頭といざこざしている最中だった。
「実は私も問屋の売場を見て、この商売はやめようかと思って帰って来たとこなんです」と、いつになく市田屋の主人は悄々とした表情をしてみせた。
（この狸が……）と、勿論東屋は胸でつぶやいた。
「もういけませんよ。東屋さんは永年の玄人だけによくやってられます」
市田屋はどこまでも心憂いような口吻をみせ「……問屋でデパート第一のあけすけな取引を見て来ましたよ。私なんか新米は手を出すだけいけません。デパートと来たら二万匹、三万匹を一ぺんに仕入れるんで、柄は選りどり勝手、どんどん選りぬきますよ。しかも匹ですね、十二円五十銭ですよ。そいつをデパートの売場で見ると十七円五十銭乃至十八円……私の店で仕入れるのが十七円、売りは十八円五十銭から十九円、デパートが四割乃至四割五分で売っても、私の店で一割か一割二分そこそこ儲けて売るのよりは、まだ一円方デパートが安いわけになるんですよ。新米だから東屋さんにざっくばらんに打ちあけるんですがね。この違いじあ商売は出来ません。デパートよりも一円方高いんじあ客が承知しませんもの……」
初めての経験に目がさめたという口吻で、市田屋が話すと、東屋もそれ見たことかと思い、
「おやめなさい。呉服は無理ですよ、たしかに！」
「そうですとも……今度仕入れただけは試しに売ってみて、売りつくしたらきれいにあきらめます。つい塚原商店で煽てるもんですからね」
それは市田屋の本音ではなかった。彼は一割にしろ五分にしろ、ともかくあれこれを売って量で儲けるつもりだった。東屋を追い返したいと思ったからだ。彼は隣惑を喫って、東屋それにしても、彼は今日塚原商店の土蔵の中で見た、デパートの仕入ぶりには前途のない憂欝に捉らえられて了ったのであった。その気持だけには嘘偽りはなかった。……
東屋の主人は、雲を掴むような焦り方で、そこを出ると、薄ら寒くなった通りを、ガラス戸の入らない版木屋の店先きで、夕方まで話し込まずにいられなかった。
なんだって、こんなに何も彼も調子が狂って来るのか、東屋にはわからなくなった。期日のある手形が目先き二つも彼の工面を促がしているにも拘わらず、とてもその成算の立ちようのない最中だった。そこへまた、塚原商店ともあるものが多年の取引を無視して、新店に力を入れるなんてことは。

（なァに、それは市田屋の上手な宣伝かも知れないぞ……。小売の彼奴がどうして問屋で大事がられるものか。だから帰って来て心がふさいでるんだ……）
ともあれ、最近の東屋の状態では、いっそ思いきって店を畳んだ方がマシかも知れないのであった。隣りから月々二十八円の損料が来る。地主へ十六円払っても十二円はのこる。そこに背負い呉服をはじめようか……堅いお得意がまだ十二三軒はある。そこらを廻わっても三百円の売上はあるだろう。五六十円の儲けがあれば、家賃の入らないだけにどうやら口は過せるだろう……そんな考えが、明け暮れ彼の頭を支配するようになった。彼の後妻は賃仕事をするといい出し、
「あなたがあんまり突っ張りがないからです……だからなにもかも隣りにとられてしまうんです」とすすり泣くのであった。
「誰が？　おれがか……？　そんなことない」
先妻ののこした男の子の金市の前で、夫婦は声を荒げることが屢々になった。
「それってのが市田屋が商売を奪ったからだ……おれに泣かずに市田屋へ行け、市田屋へ……」と小柄の彼に似ず、響きのある声で云い放った。
父親の前で小さくなっていた金市は、十三よりもむしろ十五といいたい身体で、親達を嗤うのだった。母親の袂を引っ張って、
「他所で聞いて来たよ、ヒサシを貸してオモヤをとられるってなんだい、かあちゃん、そんなことはバカなことなのかい」
そのすぐ傍で、父親は堪らなくなり、金市の頰を平手で擲ぐった。それでも金市は泣かなかった。父親の顔をじっと仰いだ。
「この野郎はこんなに図々しくなりあがった……おれを馬鹿にするか」
荒くれた父親はもう一度金市の頰を擲ぐった。
「なにするんですよ」
と、継母が金市をかばった。隅へ押しやられた金市は、それでも泣かなかった。彼は日々と佗びしい家の内を見廻わしていた。
「早く与吉をおぶって遊んでおいで！」継母は自分の三つになる男の子を金市の背にくくりつけ、白銅を一つ握らせようとしたが、金市に押し返えされた。
（変な子だよ、この頃ちっともお金を欲しがらない……）と、もうそんなことの二三度になる継母は、訝しがるのであった。

三

与吉を背負った金市は、店へ廻わり、小僧と話しながら、市田屋との境のところで、それとなく向うの様子を見

ていると市田屋の一人息子の十二になる徳太郎が、帳場の前で後向きになっていた。もどかしくなった金市が、誘いをかけるように背中をわざと揺り上げて、
「よし、よし、待ってろ、待ってろ」
と、徳太郎に聞えるように繰り返した。
「東屋さんじあ小僧がいるのにねえ」
そう市田屋の細君がつぶやくのが金市にも聞えた。
徳太郎がふり向いて見た。待っていた金市は、鋭い眼で自分の方へ引きつけて、出て来い、という風をみせた。
そっと徳太郎が立ち上った。
徳太郎は母親の一ト睨みよりも金市のそれを怖れ、
「うん、表にいるんだい」と云って、金市の傍へ来た。徳太郎の母親もそうだったが、徳太郎自身も商人の子らしくなくどこか勤人の子供くさかった。
「今日の分をまだ寄越さないじあないか」
「……貰えないんだもの」
「嘘いえ……じあ、本でもなんでもいいよ」
金市は地べたへ引きずりおろすような云い方をした。それから
「すこし持ってるだろ?」
「すこしならある」
徳太郎はささやくと、家の人達に気取られないように奥へ飛んで入って行ったが、やがて一冊の雑誌と、六銭の金を金市にそっと手渡した。

それで丁度今日の五十銭分になる徳太郎の見つもりだった。
「徳ちゃん、こっちへおいでよ。僕ンちの方へ!……」と金市はおびき寄せておいて、
「云うと殺すよ。いいかい。僕だって徳ちゃんを殺して死ぬから……」
手早く彼は雑誌を飾窓の下へ投げ入れたが、そこには前々から本だの雑誌だの手帖だのが隠してあった。どれも徳太郎から人知れず巻き上げた品物だった。
六銭の小銭を、金市は掌で握りしめていたが、胸算用でもうこないだから、〆めて八円ばかり徳太郎から取り上げていることを知った。そうすると、もう十円には四日かかる。彼は毎日五十銭ずつ搾りとっていたのだ。
なぜといって金市は、虎の子のように大事がっていたガラスのインキ壺を、徳太郎に突き当たられて学校の通りに粉微塵にされたのだった。金市は、
「おい、十円なら許してやる。そいだけ出さなけりあ先生とおじさんに言ってやる。このインキ壺は、うちのお父さんが大事にしてるんだ。もし知れたら僕は家を追い出される」
徳太郎は金市の威嚇的な眼差に脅かされて了った。なにかというと金市が学校だのその帰りだのに彼を襲って来るのが可怕いからだった。小遣いのない時の徳太郎は、奥に入って本を読む振りをし、一日おどおどと蒼褪めているの

だった。それでもまだ徳太郎の周囲が審しがるところまで来ていなかった。
「殺す……」
その一言で、どこかわからない所へ連れられて行かれ、刺し殺された子供の事が、徳太郎を事実あり得べきことのように恐怖させるのであった。そこが金市のつけ目だった。
(うちの者を虐めやがるんだもの……市田屋は狡いんだ、こっちへとってやって丁度いいんだ……)と、十三の金市はこの数年見聞きしていた市田屋との経緯で、腹が据えかねるという気持であった。
(うちの父さんもまずいんだ。だから甘いって近所の若衆が云ってた……)

四

不意に山ノ手に住んでいる地主の伊藤氏から東屋へ使いが来た。そこで主人の平兵衛がとるものもとりあえず訪ねてみると、文部省の課長をしている当主は、
「突然、市田仙太郎って人が訪ねて来て、急な話だがこれまで山崎平兵衛さんに貸しとられた地所を私の方へ譲ってもらいたい、そんなことを持ち出されたわけだが……山崎さんとは先代からの関係で、山崎さん自身からお話のない限りは如何とも出来ない、そう云って帰えしましたが、一体どうしたわけですか?」
と、四十になるかならない伊藤氏が審かしく平兵衛に訊き糺すのであった。
「とんでもないことで……。私は一度も市田さんにそんなことを話したこともありません。どうも恐しい人だ」と平兵衛はかい摘んで、震災直後にいきなり無断で、彼の借地に市田がバラックを建てた事情を話した。立退く約束を二度して二度とも立退かずに、今は三度目の期限が差し迫っているにも拘わらず、
「こちらへ直接そんなこと云って来るなどとは、一体どこまで底の深い狡い人間でしょう……」そこで彼は、只驚くばかりだった。
「あなたは商売をやめるそうだが……?」
「へえ。私が、……? 誰が申しました?」
「その市田屋さんて人が……」
「へえ、まだ自分でもどうしようか見当がついていない話でございます。どうもつまらぬこ とを喧伝して歩く人です」
東屋はむしろ怖ろしさを感じるほどだった。これから次々と自分の意思以外の事が抬ち上って来そうで暗い不安を感じた。
彼はあたふたと帰って来て、いきなり市田屋の店先へ入って行った。
「一寸、話がしたいんで、……どうも困るじゃありません

か」と、東屋は帳場で急がしそうにしている市田屋の主人へ、顫え声で呼びかけた。
「まあ、おかけなさい」
「市田さんも実に底の知れない人だ。私みたい左り前になった人間をどこまで苦しめるつもりですか」
そこで地主の伊藤氏から呼び出された話をしたが、市田屋は顔色を崩さず、
「それは伊藤さんの釈り違いです。……どこかに伊藤さんの地所が空いてたら、という前置きで地所のことをいろいろ話したんですよ」
心で市田屋はまさか伊藤氏ともある人が、そんな風に東屋へ煽動的に話そうとは思わなかったのであった。立派な人というものは、必要以外に他人にけしかけるものではないと彼は思い違いをしていたのだ。そこで、彼の方が自分の必要以外に出ようとしないで、東屋を宥めるのに骨を折った。
東屋は愈々嘆息して了った。後妻の前でも、唯一の味方の版木屋の前でも、
「こうケチがついちまっちあもういけない。小売商が結束しなけりあ、なんて譫言にも程がある。今度立退きの期日が来たら証文にものを云わせてやるんだ」
あれもこれも、一時に行き詰めて了った。今日か明日にも店閉めが差迫っているのは事実であった。市田屋が地主に話した通りに、自分が事実で裏書きするのは辛いことであった。そのやりきれなさの上に、まだ後からなにが起って来るか……？　彼は毛髪の薄くなった頭を、すこし右に傾けたままじっと動かなかった。

五

この年を無理でも越そうと、東屋は寧日なしに金策の途を辿って行っては、死力を出したのであった。それにも拘らず、一つの約束手形の為めに、十一月の末を以って、一トまず店の戸を閉めることを余儀なくされた。
「東屋さんは堅過ぎるくらいでしたよ。あなたのような店をつぶせたのは丸藤一軒のためですよ。約手なんかこの際めったに出せなかったんですよ……」
と、東屋の閉めた上端で、市内廻わりに出た一人の番頭が立ち寄っての話だった。「隣の市田屋さんをごらんなさい。表向きは派手で品物が動いてるようですが、あれでとてもこの節は苦しいそうですぜ。ですがね、東屋さん、市田屋さんと来たら、うっかり手形を出しませんや。あの主人はどうして素人なものですか。初めのうちです、〆後六十日勘定できれいに払い払いしたのは……。五千円、六千円って累み出したんで、手強く催促すると、その内金だっていって、千円、五百円と渡してくれる。……そうしてどうです！　後ですぐ品物を入れてくれ、入れてくれですぜ。それだって後が残ってるから問屋としちあ見限れやしませ

んでさ。そこでまた新しく七百円、千円って品物を入れさせられちまうってわけなんです……」
「そいでもう信用がなくなったのかい」
「どうして……矢張り他かでも持ち込んでるから、もうすこし、もうすこしで、まだどこも手許を締めやしませんよ。そのコツですね。なにしろ東屋さんは、昔の鷹揚だった時分の取引を頭においてるから終いにこんなどたん場まで来ちまったんですよ。震災から六年目になる昭和二年ですぜ、震災当時のような現売が崩れて、この節は実は問屋だって四苦八苦でさ……。とにかく東屋さんも時世におくれたわけだが、またあなたの思いつきの背負い呉服もいいことがあるでしょう……」
「まあ、古いお得意様だけはね。……時に市田屋は今どのくらい問屋にあるかね」
「そうですねえ……皆なじあ三万はありますぜ、屹度……。素人であすこまでやれるんだからえらいですがね、もうじきいけませんよ。見ててごらんなさい、私は問屋の番頭でいうのも訝しい話ですが、小売店をつぶすのは問屋の番頭ですよ。甲か乙か、どっか一つ二つの問屋の手が可怕いんです……上った、と見ると容赦しませんよ」
その番頭のいう通りに東屋は裏から裏へぬけて行く方法に大胆でなかったばかりに、年の暮れに迫って、どの朝も早く丈の低いくりくりとした身体に、多かれ少なかれ荷物を背負って、閉めた表からは出ずに、狭い裏口から出て行くのであった。彼の最後の帳合は、まだ全部決りがついていないのであった。取引先だった問屋の中で、神山商店の主人だけが、どういうものか彼を最後まで搾り上げないでおくのだった。
「神山がこんなに親切だとは思わなかった。あんな人にはきっと後生がいいんだ……」
と、東屋は手を合わせてもまだ足りない気持でそう呟き呟きした。丁度、隣りの市田屋を首切人のように憤るのと反対であった。
彼の店からは小僧も居なくなり、後妻は子供の与吉を金市に背負わせて、賃仕事を引き受けていたが、前から店に来る客で彼女に仕立ててもらった幾人かが、反物を廻わして来るのであった。
或る日、外から荷を背負って帰って来た主人は、座るのももどかしがるように、
「どうだね、今日ね、神山さんへ一寸御寄りしたら、訴訟してどうしても市田屋を追い立ててしまえって、いわれるんだ。これまでの積る話をしたもんだから……そこで今度こそ裁判の費用がどんなにかかったってやってやるぞ。神山さんが費用を立替えて下さるっていうんだ……」
その期限の前後を待ち構えて東屋は隣りへ出かけて行った。年末と年始の売出しで、市田屋にはどこかの問屋から手伝いさえ来ているようだった。
「どうか今度は退いて下さいよ。私は身代限りした時に、

この借地権まで押えられてるんだから」しかしそれは東屋の嘘であった。「もうすってんてんで、私にァ借地権きり残っていないんですよ。今度はあなたを訴えても退いてもらいます。ようございますね？」と、彼は腹に呼吸を入れて云い渡した。

「そうですか、なにしろ年末年始の際で、また改めて私が出ます」

「いや、年末は仕方がありませんよ。あなたとこの十二月三十一日までお約束してあるんだから……然し年始は困ります。なんてったって困ります」

堅く云いおいた東屋を裏切って、年が改ってからも立ち退く気勢さえ市田屋には見えなかった。東屋は版木屋へも出かけ神山へも日参するように足を運んだ。

「費用は出して上げますよ。心配なしにおやんなさい。……。只ね、これは形ばかりに、一札証文を入れといて下さい。なにも、一寸した形でいいんだから。裁判へ出たら屹度あなたが勝つにきまっている。勝ったらその費用をそっくり返してさえもらえれば……」

「いえ、もうその点は間違いません。私も勝ちます。なんであの借地権まで市田屋の奴にとり上げられるもんですか。人間はわかりませんよ。市田屋は最初兄弟のように小売店は結び合わなくっちゃ駄目だなんて、云ったもんです」

東屋は目の前の神山を崇めるような気持で、市田屋をこっぴどくこき下すのであった。

六十に近く、息子の多い神山は、黙って苦い顔をしていたが、彼も東屋にとっては、いつか市田屋同様に呪われるだろうと、その予想があるからであった。次男に店を持たせたい彼は、心当りの売家や売地借地を探している最中だった。赭面(あからがお)の、一代で資産を築きあげた彼は、その東屋の人情落しをとり合ってはいなかった。

六

立退きの期限が切れてまる一ヵ月すると、東屋は長年顔見知りの弁護士を訪ね、足掛七年目へ入った今日までの証拠物件をもとり出した。そこで家屋収去並ニ土地明渡シ請求ノ訴という訴状が認められることになった。

訴訟見込費用として東屋は神山から借りた金で心配なく三十円を払った。その他、印紙代まで一つ残さず払った。そこで訴状が、やがて東屋の前に、厳めしい存在を見せた。彼は力強く胸を張らずにいられなかった。

訴　状

東京市……区××町六十番地
原　告　山崎平兵衛

東京市……区××町百二番地
右訴訟代理人
弁護士　田中慶次郎

東京市……区××町六十番地

被　告　市田仙太郎

家屋収去並ニ土地明渡請求ノ訴

請求ノ目的

一、一定ノ申立記載ノ通リ

此訴訟物ノ価額金弐千参百円也

一定ノ申立

一、被告ハ訴外伊藤弘ニ対シ、被告ノ所有ニ係ル東京市……区××町六十番地所在木造トタン葺平家一棟建坪八坪七合五勺此敷地十坪並ニ木造トタン葺平家一棟建坪十三坪此敷地十三坪ヲ収去シテ其敷地二十三坪ヲ明渡シ且原告ニ対シ昭和二年十二月一日ヨリ本件判決執行済ニ至ル迄一ヵ月二十八円也ノ割合ニ依ル金円ヲ支払ウベシ訴訟費用ハ被告ノ負担トストノ御判決並ニ保証ヲ条件トスル仮執行ノ御宣言アランコトヲ求ム

……………………

その後に「請求ノ原因」として、原告が再三再四、温情を以って立退きを猶予して来た、その被告の不履行的事実を指摘し、証拠方法は口頭弁論の際に提出すること、訴訟代理委任状一通――ということも附記してあった。

その二月十七日から愈々市田屋と相争うことになった。訴訟が東京地方裁判所宛に出されたということが、市田屋の内部にも知れると、僅かな隔てをおいた双方の廂間（あいま）が急に冷酷な空気を流しはじめた。二つの家族が、面と対（めいめい）い会っても挨拶一つ交わさなくなり、どっちからも明かに各々を批判し合う汚い言葉が洩れて来た。

「人間の皮をかぶった山犬だ……」と、東屋が夜食の時に喚くことがあった。

「常識で解決のつく問題を公に持ち出すなんて非常識な人間ほど恐ろしいものはない」と、市田屋の主人が、どこかそこらの人に向って、聞えよがしに喚くこともあった。

一軒の間で、そっと逢っているのは、東屋の子供の金市と、市田屋の一人息子徳太郎の二人だけであった。というよりも、むしろ金市が飽まで避けたがる徳太郎を、蔭に廻っては脅かしつづけ強いて引っ張り出すのであった。その機会を金市は学校の行き帰りに偸むのであった。金市は抜け目なく考えた。始終徳太郎を搾ろうとしないで、時には彼から、公園へ徳太郎を誘って、そっと洋食の一皿くらいを喰べさせることも忘れなかった。

それというのも、訴訟が始まってからの東屋の家の中には、いつも相応に金があって、いつもこぼしきっていた継母が、こぼさなくなったばかりか、時には活動を見ておいで、と一円紙幣をくれることがあった。だから金市は訴訟が長く続けばいいと希いさえした。

そうはいっても、金市はすぐに金が欲しくなり、その度に徳太郎の肩にぶら下りながら、

「持っといでったら！　今夜裏の木戸の下ンとこへ五十銭おいとかないときかないよ。洋食喰った金は僕が盗んだ金だから、君にだってその半分はかかるんだ。警察へ引っぱ

られる時は君もいっしょだぜ……。だから誰にも云っちゃ駄目だよ」
夜の飯を喰ってしまうと、金市はそっと、裏木戸のところへ行って蹲まり、いつもの場所へ手を伸ばすのだった……。

七

東屋も市田屋も、双方の弁護士に任かせてその一年は争いの中に睨み合って暮した。東屋は、売れない日は重い呉服の重量で、老人くさく深い吐息をついた。市田屋の方は、どの日も早くから店をあけ、照る日は土埃で、降る日は深い泥土で悩まされながら、小売の思わしくないことを喞つことが多くなった。
彼は近所の小売商人と語り合って、復興局の第――出張所へ嘆願をしに出かけたりした。
「いつになったらこんなひどい土埃や泥がなくなるんですか。……私どもは一日っていう日がなかなか以って大切でして、その日売れなければ御飯がいただけないんです。官吏さんは降っても照ってもおかまいなしだから、どうも小売人にあ同情を持って下さらぬ……」
その時の先導は市田屋であった。その労をねぎらうつもりから、近所の人達は口を合わせて、
「あなたを追い立てるなんて、あれは店仕舞をした東屋さんが嫉妬けて、ならないからですよ」などと追従をするのであった。
東屋では、訴訟に事をよせて神山から金を借りて来ては、その日の生活費の足りない分を補うこともあって、「勝ったらどのくらいとれるんです」と、後妻も気を病まずにはいられなかった。
「勝ったら？……費用全部向う持ちだ。市田屋が神山さんへ返却してくれるようなものさ。その上訴訟後から溜ってる地代がとれるよ。そいから借地が他へ貸せるし――」
その東屋の期待は外れなかった。訴状を出してから十五カ月目の、昭和四年五月の二十二日になって、代理弁護士の訪問が彼を驚喜させた。
その日に判決があって、その言渡しを代理弁護士が聞きとって帰って来たのであった。彼は予記通り勝訴した……。
判決書の主文――のあらましを、代理弁護士が暗じて、こう喋舌りつづけた。

主　文

被告ハ訴外伊藤弘ニ対シ東京市……区××町六十番地所在ノ宅地二十三坪ヲ其地上ニ存スル木造トタン葺平家一棟建坪十三坪及ビ木造トタン葺平家一棟建坪八坪七合五勺ヲ各収去シテ明渡シ且ツ原告ニ対シ昭和二年十二月一日ヨリ右明渡シ済ニ至ル迄一カ月金二十八円也ノ割合ニ依ル金円ヲ支払ウベシ
訴訟費ハ被告ノ負担トス

此判決ハ原告ニ於テ執行前保証トシテ金八百円又ハ之ニ相当スル有価証券ヲ供託スルトキハ仮ニ執行スルコトヲ得……

その後に「事実」としてこれまでの経緯が、「理由」として原被告双方の 理非理を糺してあると いうことであった。

「いずれ書記の方から判決原本の写しがとれますから」と、つけ足して東屋を有頂天にさせた。

まったくこの時ばかりは、――丁度夜になっていたが、東屋はそこら中を叩き回りたい衝動を感じた。叩きながら厳正な法というものに随喜の歓声をふり絞りたかった。……殊に隣の側の板壁を叩いて、天の恐ろしいことが叫びたかった。

「ここへ来い。金市も与吉も……お父さんはお前達にこれまでひどい不自由をさせたが、今日からはもうそんな目に遭わせないぞ。天を粗末にしちあならない。いい人間はきっといいというのが天だ。……おまつ、なんか子供達に御馳走をしてやってくれ！ 二人とも可哀そうな奴だよ」そう云って喋舌り立てている間に、彼は眼頭に滲んで来て、子供達や後妻の顔が見えなくなり、拭いても拭いても涙があふれ出て来た。「どうしたんだ！ こんな日におれはとても悲しくなった……急に昔のことまで思い出されて来るなんて、どうしたんだ？」

自分でその心持が彼にわからなかった。この土地に彼の父母達が呉服店を始めて開業した時分のことが……。それ迄は母が背負い呉服をし、父が呉服屋の大番頭をしていたのであった。いい加減の時に父は主人から相応の資本を貰い独立したのであった。それが明治三十年代のことだった。間もなく父も母も死んで了い、五六年後には兄夫婦も死んだ。……

「おまつ！ 仏さまへお線香をあげてくれ。東屋は身代限りしたが、土地まで失くさないで済みましたと。以前から借りた土地でも、これを何十年と借りてれば自分のものも同様さ。……地主さんだってこないだ私を粗略に扱やアしなかったよ」

もう夜も八時過ぎだったが、東屋の主人は近所の版木屋へ駆けつけ、すぐその足で神山のところへ報らせに出向いた。

「その八百円を融通しましょう、供託して押えとかなきあいけないから……」と、その神山の申し出は、東屋の主人を唸らせてしまった。

「旦那、私は拝みます……こんなお力添えして頂けるなんて、私も冥加に尽きます」

両手をあて、東屋の主人は眼を拭い拭いしなければならなかった。その場で、一札の証文と引き換えに彼は神山から八百円の小切手を受け取って帰った。

「おまつ！ 今夜はおれは眠らずにこの八百円を守るからな！ 仏壇へあげてくれ……久しぶりで八百円って金高を

扱うんだ。……勝ったお蔭だ。あの田中弁護士も代理弁護士の谷って人も、弁護は上手と見えるな」

事実、その夜は、眠りたいと思ってさえ彼は眠れなかった。

この事件の判決後、供託金が代理弁護士の手を経て既定の手続が踏まれてから間もなく、被告の市田屋から控訴院へ控訴されたということがわかった。

「まだそんな手間をとらせようって肚か！　よくよく往生のわるい奴だ」

と、東屋は、人の顔さえ見かけるとその一言を持ち出した。彼は勝訴したのだ。市田屋は法の命ずる通りでなければならない、と思っているのであった。

「これは長びかせて嫌がらせる術です」弁護士も云うのであった。

勝訴が東屋を甦生させたように見えた。朝から彼は調子づいて呉服を背負って出た。彼の荷物は、背負い呉服専門に品物を貸してくれる問屋があるのであった。売れても売れなくっても、当座というもの彼の家の生計は、借りた神山の金で支払ができるからだった。今年に入って彼は一陽来復したような、明い上機嫌の毎日が続いた。

ところが、その或る一日、彼の帰りを待ちかねていた市田屋から、

「御主人に一寸お出でを願います。学校の若い先生が見えて、どうしてもお目にかからないと煩いことに相成りますから……」という使いが来たのであった。

「市田屋はあの術で威かしやがるんだ」

すぐには東屋も出かけなかった。その内に再三迎いが来た。彼はやむなく市田屋の表口へ廻ってみると、小学校の先生が確かに市田屋と対い合っていた。

彼は招じられて無愛想らしく座敷に通ったのであったが、意外な事件が彼の耳を疑らせた。

「金市さんは非常なことをなすってられるんです。……こんなことは稀なことで」と、小学校の先生が、事件をほぐし出した。

——金市がひどい不良少年になって、もう一年半という間、市田屋の徳太郎を殺す殺す、といって脅嚇して、初めからでは六十円余りの金銭を巻き上げているというのであった。

「どうも徳太郎が月々沈んだ子になるんで、お医者さんにも診てもらったのですが、どこも悪くないそうで……。その筈でございますね。刃物を見せて毎日五十銭ずつ奪ってたそうですもの……徳太郎も五十銭がないと品物で渡したそうで、その在り場所も申しています」と、市田屋の女房が口を添えた。

はた、と東屋は当惑して了った。彼が否定する為めにはその在り場所を検めさせるよりなかった。そこで小学校の先生や市田屋も一緒になって、もう今は閉めきってガラスも外してしまった東屋の飾窓の真下が覗かれることになっ

た。
不意にそんなことのあろうと思っていなかった金市の不用意さが、そこに前々から彼の罪業を積み上げておいたのだった。
父親として東屋は二の句が出なかった。
「これを警察へ訴える前に、まず学校の先生にお話して、その上でと思いましてね」
こちらでは訴える前にこれこれの態度で愼重に考えていると、市田屋側ではいいたさ一杯であった。
この不意に拾ち上った事件が東屋をひどく悄げさせて了った。金市に対する彼の見方は冷酷になった。金市を見さえすると彼は猛り狂うようなものの云い方をした。
「止して下さい。近所では私が継母だから不良にしたと噂してるんですから……叱ったって悪るくするだけですよ」
「おれはいい恥を掻かされた。みんな金の奴のお蔭だ。あんな若い教員の前で頭を下げた……。するに事をかいて、金をとるとは……」東屋は、二三日前から頭を上げ得ない程に沈みきって了った。
其の寝ている枕許で、彼は市田屋側から突然調停の申立がされたということを知った。区裁判所の△町出張所へ宛てて……。
申立人は市田仙太郎と代理弁護士、被申立人は東屋と地主の伊藤弘ということであった。弁護士が、その書類を見せた……。

家屋買取請求ノ調停申立事件

申立ノ趣旨

一、被申立人伊藤弘ハ申立人市田仙太郎ヨリ……区××町六十番地所在木造トタン葺平家二十三坪ヲ金五千円ニテ買取ルベシ

一、被申立人山崎平兵衛ハ申立人市田仙太郎ニ買取リ方ヲ懇談シソノ御調停アランコトヲ求ム

申立ノ原因

一、申立人市田仙太郎ハ被申立人山崎平兵衛ガ被申立人伊藤弘ヨリ賃借セル前記土地ノ上ニ前記家屋ヲ所有セシ為メ之ヲ買受ケタリ

一、然ルニ右買受所在地ヲ申立人市田仙太郎ニ賃借スルヤ否ヤニ付、地主伊藤弘ガ考エ中（再三交渉ノ結果）右山崎平兵衛ハ伊藤弘ニ代位シテ申立人市田仙太郎ハ家屋ヲ収去シ土地明渡スベシトノ訴ヲ提起シ（東京地方裁判所昭和三年(ヤ)第八二二号事件）タリ

一、而シテ申立人織田留三郎ハ右家屋ヲ売渡シ担保トシ金弐千円也ヲ市田仙太郎ニ貸与シアリ、依テ市田仙太郎ニ対シ債権ヲ有スル利害関係人タリ

一、右調停ヲ求ムル次第ニ在リ

弁護士　川本岳太郎
代理弁護士　原子之吉

東京区裁判所△町出張所御中

一と通り目を通した東屋は、

「どうも地主の伊藤さん——文部省の××課長の伊藤さんをそんなとこへ呼び出させるなんてことは、私として出来る訳合ではありません……ここを市田屋がツケ目にしているのです」

彼は枕から頭をもたげながら、その視線は、まるで顚倒されて了った市田屋と自分との勝負を、更に確めつきとめようと焦るように鋭く弁護士を睨んでいた。

「これは市田屋がいけない。借地借家調停法第三条で、所謂不当の目的を以て濫りに調停の申立を為したるもの……に該当しますよ。第一、市田屋なる申立人に対して、その家屋を買取るとか、そんな協力の義務もありません。判決が認定してることです。こんなことに調停の余地はないんです。今日から判断すれば震災のごたごた当時、火事どろ的に六十番地の土地を市田屋が占有したのは、永久的の野望からだといえるし……土地明渡の契約を反古にしたこと何度ですか、この調停申立書に上げてある織田留三郎とは何人です。今更あの家屋が弐千円で……担保に入っているとは、どうも言語道断ですよ。突拍子もなく不意に負訴になった今頃、そんな人物を持ち出す市田屋の肚は、見え透いてるじあないですか。……あの家屋はどんなに高く見積ったって六百円の値打のもんじゃあない。それに弐千円も借した、なんて馬鹿らしさもひどいですよ。早速、市田屋の家屋の保存登記とか権利移転とかの関係がどうなっているか調べてみて、私が今云ったことを、答弁書として差出しましょう……」

「それです、なんか申立人の市田が、地主伊藤さんと土地関係で交渉中、私が訴訟を起したような口吻があるようですが、実はこないだ訴訟前に市田が伊藤さんを訊ねて行ったもんですよ……」

と、東屋の主人は自分の側に理窟の強いことを証拠立てる為めに、市田の虚構的な言動を話さずにいられなかった。

「どうも、急に又織田とかなんとかいう人間を持ち出したりして来たり……どうも煩いことで」

その夜市田屋が不意に東屋を訊ねて来た。

「もうそのままで、どうぞ……。いけないそうでお案じしてたのですが、御無沙汰しました。どうです東屋さん、この問題をあっさり片づけたいもんですが……私としては御承知のようになにも事を構えたくないんです。こないだの金市さんの金銭問題の場合でも、表沙汰にしない私の心はおわかりでしょうが?」

その金市の問題へ問題へと、市田屋の話題が向きがちなところから、東屋は身を切り虐なまれるように苦痛だった。

「金市を訴えるなら訴えて下さい。あれの心持もこないだから親として考えてみましたよ。親が失敗したのはどういう事情ですか、あなたが所もあろうにすぐ隣り合いで同商

売をやんなすったからです。子供心にお家を恨みもしましょう。私は頭が病めて病めてたまらないで寝ていますが、訴えれば出るところへ出て、今日までのあなたの所業をみんな述べ立てましょう……家内が継母だからってあれまでが苦にしてます。一家をとり殺すおつもりですか。裁判所で勝ったんですから警察でも勝ちますよ」

「まあ東屋さん、そう昂奮なさらないで下さい。それはもうそうなさりたければ、私も断行しますが……ものってものは勝つばかりが勝ちでもないですよ」市田屋は濃い茶のお召の羽織を着て、どこから見ても立派そうな風丰を見せていた。彼はねちねちと、二時間もそこで話しつづけた。終いに、東屋は眼をとじて、堕ちるならどこまででも堕ちていいとさえ考えて了った。

………………

街通りは依然として晴れの日にも雨の日にも通行の人々を苦しめ、その日暮しの小稼ぎをする商人を悩ましつづけた。

埃、埃、そうかと思うと道も横ぎれない泥濘……。

調停申立の問題の結果は、東屋の病床へ報告されるまでに、二三日は双方の代理人の間で紛擾していたが、この煩わしく、とめどのない事件が、双方の代理人によって案外あっさりとした一策で結末づけられようとは、当の東屋その人も予想していなかったところであった。

代理人の口では、申立人の市田屋の主人が「五百円出してくれれば立退く」という話になって来たのであった。

「五百円？　それじあ訴訟費用や、土地の損料はどうなるんです。私は勝ったんですよ」と、東屋が頑として拒み出した。

「だけど、東屋さん、この煩い争いは市田屋が引っぱれば引っぱる程、あなたは御損ですよ。あなたはもし損料がとれないからって地主の伊藤さんに丸々勘弁してもらえますか？……そいつは出来ないでしょう。事実、市田屋の内情を調べてみると、破産申告をされないばかりになってるんです。四万かそれ以上の負債で、問屋からの品物もとまったそうですよ。市田屋さんも昨日は私達の前で泣きました。……どうかして商店らしいものに、とひた押しして来たが、小資本で無理に無理したので昨今は愈々行き詰った。……って云いましてね……」

この長い煩わしい係争も、神山が五百円を投げ出したので、最後の足掻から市田屋も諦めをつけ、訴訟費用も月々の損料もそのまま踏んで了って段落へこぎつけることになった。

「こんなことなら、沢山の費用をかけなくったってよかった……」東屋の後悔も大きく、そして当然であった。

彼が勝訴したにも拘わらず、彼の負担額は、その訴訟費土地の損料とを合わせて、二千円を越したが、八百円の供託金は戻るものと見、千弐百円に達して了ったのであった。

而もこの煩わしい係争は、その次ぎに自然と、神山対東屋というところへ落ちなければならなかった。

神山からの東屋の借金は千四百円余になるという驚くべき計算を現わした。最後に神山が東屋の前にその姿をむき出して来た。

「どうして借金を返すか。今が今ってわけでないけど、勘考の程を聞かして下さい。……あなたがこの借地権を持っていれば又貸して地代がとれるでしょう……然しあなたの分を払い、私への返金をしたら——私は利子なんか見込んでいないが、あなたのその日その日の暮しはどうなりますか……この借地権をそっくり私の方へ下されば、利子もなにもいりません。全部の借金を帳消しにしましょう。どうです？」と、柔かな調子で計算までしてみせるのであった。

「千四百円で、この土地の——将来資本さえあれば見込みの多い土地の権利金が？」それは確かに安すぎるのはいうまでもない事実であった。と云って、東屋が永久に頑張ってみたところで月々十円の返金もむずかしかった……。

東屋と市田屋のバラックが取り払われ、新しい普請の板囲いが出来たのは　それから間もなくであった。——神山呉服店建築場の立札が出た。その界隈は、更に材木や石塊や人足や大工でハキ溜へ投げた粉のように埃風が胸をむかむかさせた。

（一九三〇年「中央公論春季特輯号」）

労働日記と靴

鹿地亘

逸郎の死

一九二七年六月二十六日、達郎が十六の時、兄の逸郎が死んだ。

其の日達郎は彼の勤めて居る吾嬬鉄工場が休みだったので、昼過ぎ請地の父の家を出て浅草に活動を見に行った。五月雨の霽れた後で、仲店を往き来する人々はもはや眩しそうな浴衣を着ていた。二時頃、活動小屋の看板を一わたり見終ると、急に気が進まなくなって吾嬬橋を渡って家に帰った。

戸口をはいると驚いて彼は眼を見張った。

滅多に来たことのない伯母が店の上り口に居て、筒袖に前掛姿の母親が背を丸くして泣いていた。二人とも彼を見ても物を言わなかった。

「どしたんだい、お母さん？」

すると伯母がためらい勝ちに声をひそめながら言った。
「兄ちゃんがな……大けがして助かるかどうかわからん……
……」
「嘘言ってらい！」
「嘘だなんて！」
「嘘言ってらい！　嘘言ってらい！」
達郎は伯母が彼をだまして居ると思った。
彼はいきなり家に駆け上った。小さい弟と妹とは工場裏の空地で遊んで居るらしく、そこには姿が見えなかった。生れたばかりの赤ん坊がおとなしく眠っていた。一わたり見廻わすと仏壇の燈明台の下に、表紙のそそけた労働日記と穴のあいたシースとがあった。
「あれまあ、逸郎はこんなものおいてったよ。肌身離さず大事にしてたに。」
昨日の朝母親が掃除にかかろうとして、それを見つけ出した時のままの位置にあった。確かに逸郎はそれ以来帰らない——達郎は兄が無雑作にマントを肩に投げかけて出た昨日の朝の姿を思い出した。その頃丁度雛木ゴムの会社がストライキ最中だったので、工場がひけてから組合に行ってとまったのかも知れないと思った。しかし、産後二十日にならない母親の上り口で泣いて居るさまが、ふいと、ただごとではないと思われ出した。
彼は上り口へ行っ返した。今度は店先に親父の人力車が置き去りになって居るのを見附けた。親父が仕事に出て居るのでないことは直ぐわかった。
「お父つぁんは何処へ行ったんだい？」
伯母も母も答えない。
「泣いてちゃわからねえや。」
彼は当惑した。何かあったんだな——と益々確信した。労働日記を見ればわかるかも知れない——と思ったが、それには日頃から逸郎が決して手を触れさせなかったので、何となく気がひけた。
——組合本部へ行って見よう——で、下駄を突っかけて本所の太平町に足を向けた。
外は暑苦しい工場の煙の中に、ごみごみした長屋町の屋根が沈んで居た。豚の腸のような道路があてもなく曲がって居て、それに副った一間幅の溝の中では、太陽が射し込んで汚水がぶつぶつ煮えて居た。小走りに走って行く達郎の脇の下で汗がだらだら流れた。
「もしもし……」
彼は足をとめた。長屋町には似附かわしくない、なりのいい夏服の男だった。豚の腸のような道に迷い込んで出口が見つからないといったように、簿草が一ぱいに生えた空地と工場との堺の袋路から足を返して来た所だった。柔らかい中折のひさしを持ちあげて——
「一寸お尋ねしますが——」と言った。
もどかしそうに達郎は相手を見上げた。「この近くに塚原小三郎さんという車屋さんがありますか。」

「僕んとこだが――」達郎はじっと眉を寄せた。
「ほう、では君が逸郎君の……そりゃ丁度、――」
相手はポケットのシースから名刺をとって差し出した。朝日新聞記者という肩書があった。
「兄さんが御不幸で大変……」
「兄ちゃんが？」
大きな建物が頭から落ちかかったように達郎は感じた。見る見る顔が蒼ざめて全身の血が爪先から消えてなくなるように思われた。
「本当ですか？」やっと息をついで言った。
「本当ですとも。警察で……ではまだ……」
達郎はくるりと向きを変え、もと来た道を一さんに走り出した。箒草も空地も溝も路次も消えて、無意識にあがく足の下で大地が高まったり低まったりした。狽てて新聞記者は後を追うた。戸口に走りつけると達郎は呶鳴り附けるように大声で叫んだ。
「死んだんだってさ！」
上り口へどかりと身体を投げ出し、はあはあ息をした。伯母は黙って彼を見やった。何も言わなかった。その脇で母親が泣きつづけて居た。達郎は急に胸が一ぱいになって喉がつまって来た。だが――泣いてはならない。泣いてはならない……彼は上眼使いに軒下の空を見た。
新聞記者が来た。間が悪るそうに悲しみの挨拶をして用向きを述べた。――伯母が時々手の甲で鼻をこすりながら応待した。――主人は今死骸を引き取りに南千住警察に行って留守であること。死んだのは夜十二時過ぎで、家には直接通知が来ないで、同じ街の彼女の家に今日の昼過ぎ巡査が知らせを持って来たこと。詳しい事情は組合でなければわからないこと。……
おろおろ声で話す伯母の皺深い眼の涙を達郎は穴のあく程見つめた。それから新聞記者に眼をうつした。
「それはどうも……で、御本人の性質は……？」
用もない奴が――達郎は、中折を脇に挾んで手帖に鉛筆を走らせて居るその男をひどく憎んだ。達郎はふいと立ち上った。表に出ると足は自から合同労働の本所支部に向いて居た。――詳しいことがそこならわかる……組合には殆んど人が出払って居た。残って居た二三人は彼の顔を黙ってまじまじと見た。何処へ皆出掛けたかと尋ねると「雛木争議団の本部」と答え、一人が何と言ってよいかわからないという風に「兄さんが死んだんだってね。」と言って彼の肩に手をおいた。
雛木争議団の本部になって居る千住橋場の化学本部に行った。
「おお達郎君か！　上れ。」
落ちつきなく家の中を立ったり坐ったりして居る男たちの中から、書記長の志村が彼を見つけて呼んだ。多くの傷ましいそうな視線を浴びながら、志村について二階の階段を上がった。二階も人々で埋まって居た。兄の親友の上川

や辻も居た。いつもなら辻は――やい、兄貴のかばん持ち――といって彼をからかうのだが、その時は、ちょいと眼でうなずいてみせたまま直ぐ顔をそむけた。その横に首の太い、いかっつい男があぐらをかき、太い腕を組んで歯を食いしばって居た。人々はちらりと眼をあげ、そして眼をそむけた。それらのそむけられた眼の注意がすべて彼に集って居るのを感じた。彼は子供が大人の群にまじる時感ずる自分というものの頼りなさを感じた。志村は彼を隅につれて行って触れ合う程に額を押しつけて言った。

「昨日ビラまきでやられてな。度々もらいに行ったんだが、今日になっても検べ中とばかり言って、本当のことを知らせねえんだ。」

達郎は志村の垂れた髪の下の深みのある眼を見つめた。志村の話によると――逸郎は昨日五時過ぎ、勤め先の朝日ラバーから直接争議団に来た。それから二人の組合員と工場員と工場附近にビラ撒きに出掛け、警戒中の千住署の巡査に追われた。三人は一人と二人とに分れ、逸郎と他の一人とが工場横の裏通りを逃げ、途中で一人は靴の紐が解けたので、傍の塀を飛び越えてかくれ、逸郎だけが追いつめられて捕まった。今朝になって度々もらいに行ったが、組合にはどうしても真相を明さなかった――

「怒って騒ぎ出すと思ったんだな……怒らないでさ！」志村は拳を握った。――何もかも作り事のようだ。……達郎は考えをまとめることが出来なかった。すべてそれは何か巧みにしくまれた芝居に過ぎなくて、小肥りの赤味をおびた兄の顔がそこらから、笑いながら出て来るのじゃないかとさえ思われた。だが――一体このものものしい静けさはどうしたというのだろう。……

組合の表に重い靴音が群がった。サーベルの音がそれにもつれ始めた。色めき渡って人々が立ち上った。窓からのぞいた一人が「来たぞ！」というと、志村が眼で答えて、階段の降り口に歩み寄りながら静かに指図した。

「皆下に降りてくれ。」

ぞろぞろと降り始めた。後から押されながら達郎も降りた。もはや下では雛木の女工たち、組合の男たちが、土間まで埋めて塊り合い、小さい者は背伸びをして居た。其等の後向いた頭を越えて、先頃つけたばかりの警官の白の日蔽いが重なり合って見えた。達郎は心臓がちぢむのを意識した。まぎれのない事実が眼の前に展け始めた。日蔽いの群の間に道が出来た。

「逸郎君ばんざあい！」

忽ちひきつった声が塊の前部から迸り出ると悲しみに割れるような叫び声が家の中と外とのすべてを満した。すべての手が頭の波の上に上がって。――ばんざあい……二度目の声は小さくなり、三度目の声が消え消えに細って手の林が下に降りると、日蔽の群の中に開かれた道に、紋付羽織姿の陽に焼けた父の顔が、苦痛に満ちて人々の前に頭を垂れて居た。その後に黒いほろの寝台車、評議会の唐津、

藤沼等が附き添われた真黒の寝台車——達郎はくらくらして、眼頭が熱くなり、すべてが霧の中につつまれてしまうのを感じた。抑え難く声が喉をついてもれた。……

あたりはひっそりして、サーベルの音もさすがに静まった。その中から鼻をすする音が一時に起り女たちの泣き声が誘い合って痙攣し始めた。

……しののめの明けぬ間に……

志村の声であったらしい——達郎は曇った霧の中にきいた——次第にすべての声が融け込んだ。

……祭壇のなきがらは……

……うらみを呑んでねむる……

歌が終ると森にのまれた嵐のように静まった。その中で切れることのない女たちの啜り泣きが耳についた。おお……おお……という声を傍に聞いて達郎は眼をふいてふり返えると、それは二階で腕を組んで居た頑丈な労働者の嗚咽だった。

志村が表に出て父に向かい挨拶して居た。父はしきりに頭を下げて、——いや、それには及びません——と云って居るのが聞えた。志村は戸口に帰って——皆、塚原君を家まで送ってくれ給え……と云った。

間もなく縁のない、赤い組合旗を持った志村とそれを守る首の太い頑丈な労働者、父、寝台車、達郎、組合の男と女たち——からなる異様な行列が警官に附き添われながら白鬚橋に近づいた。瓦斯会社の赤煉瓦の大工場と巨大なタンクを過ぎた。橋際の交番で巡査が前を遮って、旗を巻け、といった。

「何をこの野郎！」

首の太い労働者がやり場のない怒りを投げつけると××はすごすご前を退いた。橋を渡る時寝台車の車輛が橋桁に反響してごうごう鳴った。組合旗が風にはためき、川一面に傾いた太陽が散って、煙突のない隅田製鉄の這い下がる煙が焦茶色に渦巻いて居た。

請地の家の前の狭い路地には近隣の人々が黒く塊って居た。近附くと、小さい、丸い母親が顔を両手で蔽って居た。小さい弟と妹たちがその裾にすがりついて「兄ちゃん死んだあ——」と言って泣いて居た。その横に伯母、その脇に赤ん坊を抱いた妹の幾子が眼を泣き膨らせて居た。死体は用意された仏壇前の蓐に組合の人々の手で運ばれた。ぞろぞろと人がつづいて家の中一ぱいに溢れ、這入り切れない人々は家の外の路地を埋めた。家の中には一しきり激しい泣き声が又起った。

志村が静かに顔の白布の蔽いを取ると、首筋から顎にかけて暗紫色の斑点のついた死に顔があらわれた。顔をあげた母親はよろよろして眼をそむけた。

「ははあ……左の頬をやられたんで、下の右の頬が膨れ上ったんだな。」色の変った右下の頬を眺めながら誰かが言った。

「首のあとは問題だぞ。」と誰かが囁いた。人々はうなずき

合い、組合の連中は隅の方でひそひそと話し合った。
夜になると警官が減った。
伯父や、その他親戚の人々が来た。夕飯の時泣いてばかり居て飯は食わなかった弟と妹たちは、やがて、通夜に来て何くれと立ち働く人々の足の間で疲れて眠った。隣の革屋のお主婦がそれに蒲団をかけてやった。
「可愛らしいもんだ。兄ちゃんが富公富公って可愛がったけねえ。」
達郎は母と一しょに死体の枕元に坐った。枕元には花が横えられ、労働日記と穴のあいたシースとが重ねられてあった。めくれた表紙の眼につく指あとは、逸郎の指の臭いをはっきり残して居るように思われた。
翌日は朝から色々の人が弔いに来た。まだ体の回復し切れない母親が赤ん坊に乳を含ませながら応待した。伯母がしなびた手で赤ん坊を抱き取りながら――体に毒だから横になれ――といったが母はきかなかった。疲れて居るのか疲れて居ないのか達郎は自分にもわからなかった。午後になって一寸身体を伸して横になるとそのまま眠ってしまって、雛木の女工たちが五十人余り来て線香をたいて帰ったのを知らなかった。
「何しろ首筋の斑点が問題だ……」
組合の連中が間島ドクトルと打ち合せて父親に相談した。解剖に附することが決められ、時をうつさず帝大に交渉すると大学では曝いてならぬことを曝くことを怖れてそれを拒絶し、直ぐ慶応に交渉して、翌日村上博士の執刀で解剖されることになった。
翌日死体はトラックで大学の解剖室に運ばれた。父と間島ドクトルと関東地方評議会の唐津清六が立ち合った。夏初めで、白衣の博士が銀色のメスで腹を裂くと、悪臭が人々の胃の腑まで流れ入った。博士は眉一つ動かさずにさらさらと体を開き、やがて助手と顔を見合わせ、ちらりと眼配せした。勿論人々にその意味はわかる筈がなかった。
「死因は心臓麻痺です。」
おごそかに博士が報告した。人々は黙って頭を下げ、それから、解剖室を出た。室を出る時、間島ドクトルが無念そうにつぶやいた……もう二時間早かったらなあ……
死体は火葬場に送られた。
相談の結果、葬式は関東評議会の組合葬に決し、日取りは七月三日、場所は示威の意味を含んで南千住の西光寺を選んだ。
二十九日、三十日、一日、二日――
その間に寺島の警察から、「葬式は何時ですか？」とちょいちょい尋ねに来たが、「組合にまかせてあるから知らねえです。」と父は答えて帰えした。
七月三日は第一日曜になって居た。
新聞が筆を揃えて南千住署の非法を鳴らした後なので葬式は全市の注目の中に挙行された。
父と母とは先に寺に行って待った。総動員された組合の

本隊は家の前が狭いので、一先ず飛木稲荷の境内に集って途中から葬式に加わることになった。先頭に白装束した妹の幾子が燈籠を持って、達郎が骨を抱き、葬列は家を繰り出し、じめじめした屠殺場通りを西に下った。長い道の両側を五間置きに巡査が固めて居た。途々一塊りずつの労働者が警戒を破って葬列に加わった。トラックが幾台も列を追い抜いて南千住署の方に走った。それらの上には飛木稲荷に集る筈の顔ぶれが次々に見え、或者は列を追い抜く時に、後手を取られたまま――塚原君ばんざあい…と声を流して行った。

「又行かあ」――「又行かあ！」

人々は呆れて見送った。

消費組合のトラックが白旗を立てて走って来たが、葬列に出会うと車をとめて、乗った人々はばたばたと降り葬列に加わった。

西光寺にはもはや八百人あまりの会葬者が集まって、骨の来るのを待って居た。やがて燈籠を持った幾子の姿が見え始め、人々はざわめき立った。幾子は重たげに身体をくねらせ燈籠の竿を担ぐ肩を代え、肩を代えした。葬列は本堂にはいり、人々はその後に崩雪をなした。その時達郎は、脱いだ靴を下げ、跣足で土の上を渡り本堂の裏にはいる五十人餘りの巡査を見た。

葬式は始まった、本堂は人いきれで蒸し返されたが汗を拭うものもなかった。弔辞が読み上げられ弔電が伝えられた。その度に達郎は全身の毛穴が開き、そこから、冷い水が流れ入るように覚えた。布施弁護士の代読の半ば、突然サーベルの音が床をつき、南千住の署長が立ち上った。葬式は解散を命じられた。

「ぶっ×せ！」

本堂の中は総立ちになった。司葬者たちは必死になって抑えた。やがて警官たちに押しまくられ、ぞろぞろと本堂をこぼれ出る群の中から「かたきはとってやるぞ！」短い叫びが聞えた。

人々が散ると、父、達郎、評議会の市島、唐津、藤沼等は骨を守り、三台の自動車に分乗して芝の西蓮寺に向った。警察のトラックが一台それにつづいた。途中、一丁置きに配備された日蔽いを見て頑固な親父が珍しく皮肉をもらした。

「逸郎もえれえもんだな。」

顔は不思議な微笑で引きつって居た。

葬式がすむとめっきり家の中が淋しくなった。組合の人々はまれにしか来なくなった。子供達は外に遊びに出なかった。

「外へ行って遊びな」

そう言って小使いをやると、富公は、近所の駄菓子屋から菓子を買って来て「兄ちゃんにあげる」といって仏壇にそなえた。

「兄ちゃんの夢見た。」と妹の幾子が言った。
「夕べ、兄ちゃん着物着て来たよ。」と母親も真顔で言った。あわただしい十日が過ぎた後は実際すべてが嘘のように思われた。夕方工場から帰って来た達郎が表を開けると、うす暗い家の中から妹の幾子が、「ああ、やっぱり兄ちゃんじゃなかった。」とがっかりしたように言った。
十日過ぎて、千住署の留置場から出たという総同盟の男が、逸郎が警察に残した靴をとどけてくれた。黒革のボックスの編み上げで死ぬ少し前にあつらえた逸郎の気に入りの靴だった。達郎は靴に足を突っ込んで見るとぴったり大きさが合った。母親が幾度もその男に礼を言った。
「兄ちゃん、その靴貰うんだから、あたいに労働日記おくれな。」
妹は労働日記を大事そうに行李の底に収めた。
親父はすっかり精が落ちた。仕事にも出ず、革屋と将棋もささなかった。ふらふらして居た。以前は組合の者が来ると嫌な顔をして碌にものも言わなかったが、葬式の後は急に愛想よくなり、時々は自分から微笑を浮べて、「はい今日は」と挨拶した。
兄の親友の上川と辻が時々訪ねて来て、達郎の肩を叩き、「どうだ、しっかりしろよ」と励ました。
雛木のストライキが勝って、女工たちが花を持って仏に供えに来た。
働き手だった逸郎が居なくなると家計は急に苦しくなった。葬式の時の寄附が三百圓余り残って居たが、大島に引越して下駄屋を始め、思わしくないので、次に精進あげ屋を始め失敗して元も子も擦ってしまった。大島にも居られなくなって寺島に引っ越した。その頃から、又組合に対する恐怖とつながった悪感情が親父の中に甦り始め、兄の友達が来るといい顔をしなくなった。一家を襲った不幸の原因が、その不幸に圧しひしがれ始めると、親父の頭の中で次第によそに転化され始めたのだ。
或る時幾子が家計の苦しさを見兼ねて工場にはいりたいと言った。親父は吐き捨てるように言って相手にならなかった――
「工場にはいったら、碌な奴にゃならん。」
「そんな馬鹿なこと――」
「馬鹿なこと？　死んだ兄ちゃんは何と言ったかな。」
幾子が小学校を卒業した時、工場に入れては、と勧めた伯父に向って、――俺が働くから何所にもやるな、女の子はお針さえし込んだらいい、――と逸郎が言ったことがあった。逸郎のことを言われると幾子は黙った。然し、間もなく東洋自転車の吾嬬工場に通うことになった。……そのことについては親父もそれ以上頑固になることも出来なかった。然し、死んだ兄の記憶を生活に生かそうとする兄妹との間に深い溝が出来た。家は益々苦しくなったので、親父はやがて鋳掛屋を始めた。

あらそい

「お父っさんが無理だよ、それは——」
「おめえは黙ってろ！」
「それじゃ幾子が可哀そうだよ……」
「黙ってろったら黙ってろ！」
逸郎の一周忌が過ぎて間もなくのこと。
夕方を過ぎたばかりというのに吊られた蚊帳の中から、達郎の声が親父と争って居た。八畳と二畳との狭い家の中にすきまなく蚊がうなって居た。蚊帳の外で橙の皮をくすべて居る親父は激しく団扇を鳴らせ、その前に外から帰ったばかりの妹が、着換えかけた浴衣をちがえたまま、蚊帳の裾を敷いて足の蚊を叩いて居た。——親父は妹を待って居たのだ。達郎には見向きもしなかった。
「だってお父っつあん。おめえ工場に通ったことがねえから知るめえが誰が面白半分に——」
「黙ってろ！」
蚊帳の暗い影の中で達郎の顔が動いた。
「……面白半分にストライキやるもんか、そりゃ、何時だって勝つと決っちゃ居ねえ、どうせ相手は強いんだから……」
「馬鹿、女がやるもんじゃねえ。女あ小使銭とりに工場に行きゃ沢山だ。」

「そんな馬鹿な！　一所に働いてる者を裏切るなんて……出来るもんか、そんな！」
「何だと！」
親父は急に蚊帳の中に向きなおった。達郎もむっくりと起きた。ことの起りは——東洋自転車の吾嬬工場が動揺し始めて、幾子が検束されかかったと聞いて、心配した親父が幾子を無理強いに手を引かせようとしたので、達郎が見兼ねて口を出したのだ。二人の声が高くなった。
「女なんて——」父はあえいだ。
「何が女だい！」
「女なんて——」
「女も男も同じだい！　幾子、どんどんやれ！」
「で、出て行け！」
親父は破れたシャツの袖をぶるぶる震わせた。ふむ——と言って達郎はそっぽを向いた。
「おめえ見てえな奴あ出て行け！」
「出て行くよ！」
達郎は蚊帳をくぐって出た。浴衣をかけて帯を巻いた。やがて玄間の闇で下駄をさぐった——親父は顎をふるわせながら見送ったが達郎の白い浴衣が闇に浮いて、前の瀬戸に消えると、急に絶望的な後悔に襲われた。富公やその他の妹や弟たちが蚊帳の中からおどけたように顔をこわばらせて眺めて居た。
達郎が家を出たのは始めてではなかった。

寺島へ引っ越して間もなく彼は家を出た。飯の菜の文句を言ったのがもとで、どうして下らないことで父を怒らせたのか、達郎は後では首をひねったが、然し、どうせ二人が触れ合うことを恐れて居た溝が一度は曝かれなければならなくなって居たのだ。

「同じまずい飯でも、兄ちゃんの仲間と食ってりゃ味が違う…」——出たあとで彼は清々した。十一月だった。彼は合同の向島支部に宿った。家には帰らなかったが矢張り気になるので、二度ばかり、稼ぎためた日給を十円程持って行って母親に渡した。翌年の二月までそこで組合の仕事をした。

すると総選挙がやって来た。

太平町から兄の親友の素藤がやって来て、——手伝いしないか——といったので本部へ行って唐津清六の選挙事務を手伝うことにした。眼の廻る程忙がしかった。幾日か続けて工場を休んだら遂に解雇通知が廻って来た。だがその時はもはやそれが問題でなくなって居た。何故ならかつて辻がからかった「かばん持ち」から、彼は漸やく一人の労働者としての意識を掴みかけて居たし、その上彼の全精力を奪って居る差し当りの仕事の意味深い輪郭が、彼にも次第にはっきりし始めたからだ。運動がその仕事を通して大きな転期を示そうとして居た。——

だが、その頃から彼にとってただならぬ、不可解な一つの事件が起った。彼は非常に驚いた。或る日のことだった。——勿論、彼は真剣な一本気で働いて居たし、逸郎の弟だということからして、仲間が彼に疑惑を持つなどとは思い及ばないことだった。だが、その自信が根本から覆えされた時に彼は真暗な気持になった。

彼は太平町の本部の二階で五十里と話し合って居た。他の組合の男が来て五十里を呼んだ。五十里は困ったように辺りを見廻しやがて、

「一寸、君——」

と達郎を待たせて下に降りた。上って来た。間もなく他の男が来て眼配せした。

「一寸、——君」

五十里は又彼を避けて部屋の隅に行って囁き合った。のけものにされた——と彼は思った。幾人も人が来て、その度に彼は取り残された。やがて又五十里は彼の所へ帰って来て何気なく話し始めた。……何だというんだ……だが、その時は余り深くも気にもとめなかった。

夜になった。

下の台所脇に、日頃物置きにして居る暗い二畳の外を通ると、五十里が来て、「一寸君遠慮してくれないか」と言った。明りのない小室に五六人の影が吸われるのを見た。達郎は完全にどやしつけられたように感じた。もはやその時は「何だろう？」ではなくて「俺をスパイと思ってるんだろうか？」という疑いがはっきりと兆した。

「ふん、こいつあいいな。」

小室からはつぶされたような囁きがもれた。何かを障子の外の明りにすかして眺めて居る気配だった。やがて人々の影は次々に部屋を出て、彼の居る上り口を通り何所へともなく外へ消えた。

次の日もその次の日も不可解なことが続いた。

「おい、こんなビラが街に落ちてたぜ。」

幾日目かに素藤が小さいビラを見せてくれた。赤インクの鮮明なビラだった。急に彼は何だかわけがわかったような気がした。同時に——素藤も又暗い小部屋から出て来た仲間の一人だったことを、達郎ははっきり思い出した。彼はいぶかしそうに素藤の眼を読んだ。

「どうだい、これは。」

彼は答えなかった。人に言うな、と素藤は注意したが、達郎はまだ「のけものにされた」気持を捨てることが出来なかった。次第に兄の仲間たちの間に居ることが心苦しくなり、彼が人々の邪魔をして居るように思われ出した。

その時、月島にソリジットのストライキが起った。達郎はいい機会だと思った。——是非自分を応援にやってくれ——と言った。逃げ出すような気持だった。

争議団の本部は月島の金属支部になって居た。そこでは別に変ったこともなく過ぎた。一度工場附近で印袢纏の樫の棒を持った会社の暴力団に追われ、一度工場長の私宅を襲撃し、一度引ぱられてしたたか「訓練」された。例のビラが争議団でも話題に上って居た。——おっかねえな——と或者はいい、——やってやがる——と或者は喜んだ。争議団はひどく苦戦をして居たので、朝夕の食事は握り飯に味噌だった。時々一串ずつのめざしがあった。それを幾日も続けて居ると、甘いものが馬鹿に食いたかった。体がひどく疲れ始め、顔色がくすぼり始めた。糖分の不足したせいだろうと思っていたが、三月に入って間もなく、兄の形見の靴が擦るように重く思われて、ふと脛にさわって見るとかまぼこのように膨れ上って居るのを発見した。

「そりゃいけねえ。」京橋に見廻りに来た 素藤が 心配そうに眉を寄せた。「俺んちに行って寝ろ。」

「なあに。」

彼は力なく笑った。

丁度そうした時に所謂三月の事件が起ったのだ。

未明に全市がやられたという声が伝った。——此処にも来るぞ……ビラを焼け……書類を整理しろ……そうして人々は敵の襲来を待ちかまえた。報せをきいた時に感じたことは、——やられた——ということでなくて、——愈々火蓋だ——という焦々した心が騒ぎ立った……待ちかまえて居たが昼近くまではやって来なかった。達郎は太平町の本部の容子を探ろうと思った。で、電車道まで出ると、遇々争議団に来る出版労働の男に会った。

「危いから止せよ。」

その男はむきになって止めた。一緒に又もとへ引っ返した。

「ひどくやられたかい。」
「滅茶滅茶だ。」
その時も達郎はそれを信じることが出来なかった。大したことはあるまい——という気持が腹の隅にかくれて居た。——選挙が終ったら来るかも知れないから準備しろ、——と太平町に居る時誰か言ったのをふと思い出した。間もなく素藤が逃げて来た。
「此処も危い！」
と素藤が言った。
「俺あ行き場がねえんだ。」
狽て気味に達郎が言うと、素藤は「ついて来い」といって、本所の小さいラムネ工場に連れて行った。素藤の父の工場だった。工場と母屋との間から階段を上ると、二階にかくし三畳の部屋があった。書類を皆持って行って天井裏にかくし、それが片附くと素藤は「休んでろ」といって忙しそうに又出かけていった。達郎は赤ちゃけた畳の上に始めて身体をのばした。落ちつくと急に疲れが出た。脛は益々膨れて居た。
達郎は医者に診て貰おうと思った。
素藤が帰ってから相談すると、
「そりゃいけねえ、暫く寝て居て本でも読むんだな」と言って眉をよせた。
翌日間島ドクトルに診て貰った。診察券をもらって順番を待って居ると、待合室に居る患者たちが色々噂話をして居た。
「記事差とめだって話だよ。」
「全国的だそうじゃないか。」
ドクトルは彼の脚を押して見て「脚気だ」といって薬をくれた。帰って来るとがっかりして畳に横たわった。
素藤は留守だった。厳しい警戒の中で忙しく立ちまわるこの兄の親友のことを思いながら——えらい、と心から思った。達郎は本箱をあさって見た。ばらばらとページをめくって見ると、どの本にも余白一面に書込みがあって赤い線が引いてあった。——よく読んだものだな——と驚いた。——勉強しなけりゃ駄目だ——と感じ、寝そべったまま手当り次第に読み始めた。
十日余り、昼間は本に読み耽りながら休養した。二度ばかり争議団本部に容子を見に出かけたが、そこではもはや平常に帰って、続々判明する思いがけない被害について人々が話し合って居た。
三度目に出掛けた時に東京市の人夫の男に会った。——築地に仕事があるが行かねえか——とその男は誘った。じっと寝て居るのが退屈になって居た時なので、達郎は行って見ようと思った。その夜は争議団本部にとまった。
翌日の朝、人夫の男に連れられて行くと、仕事はトラックへの石の積み降しだった。日給一円五十銭で頭を十銭はねられた。夕方へとへとになって一円四十銭の日給を受取り——まだ体に無理だった——と思いながら、重い足を

ラムネ工場に運んだ。上り口の土間でぐったりとなって靴のひもを解きかけた時、ふと見なれない二足の深ゴムが眼についた……その時注意すればよかったのだ、畜生！　ぎいぎい鳴る梯子を踏んで二階へ上ると、

「よう塚原君か、待ってたよ。」

「一寸来てくれ、一寸でいいから。」

寺島の奴等だ。二人ともあぐらをかいて、卵丼を取り寄せて食って居た。達郎は物が言えなかった。

「素藤君は一足先に行って貰ったよ。」

「俺はな……身体が悪いんだ……薬瓶があるだろ……」

「そりゃ、君の薬か、暇どらせはしない、一寸でいいんだ。」

「食ってしまうからな。どうだ、君も何か食うか。」

間もなく達郎は薬瓶をさげてつれて行かれた。家を出る時老いた素藤の父が手をもじもじさせながら何か口を動かした。

「大丈夫ですよ、お父つぁん。すぐ帰るから」というと老人は黙って大きくうなずいた。

留置場には素藤や七島や立花やがもはや先に来て居て、各々別の房からぎょろぎょろ眼を光らせて居た。「拘留二十五日」夕方になって言い渡された。

三日目になって呼び出された。

それが検事だということを後になって知ったが、金縁の眼鏡越しに感情の死んだ冷い眼をまともから注がれて達郎はぞっとした。

「……にはいったのは何時だ？」

「何のことですか。」

冷い眼はナイフのように光った。

「知らない？」

…………………………

「言えるようにしてやろうか……」

……達郎はよろめきながら房に帰った。

無数の眼が又心配そうに金網越しに光った。――まずいことを言ったのじゃないか――というような素藤の気がかりな顔を見て達郎は悲しい程口惜しかった。

四月に入って辻と上川がつれられて来た。十日になって寺島町興親会の一団が七八人来た。それらの一団は一塊りに達郎の房にぞろぞろ押し込まれた。……三団体が解散されたという知らせをその人々が持って来た。その日は朝から夜中まで引っ切りなしに人が増えて三十八人だったのが夜中には九十二人になった。五つの房（そのうち一つは保護室）に分けられて、各々二十人近くの人々が米袋のように積み重ねられた。暑かった。人いきれで蒸し返された。薬がなくなって達郎の体は日毎に衰え、胸が苦しくなり始めた。

体が弱ると気が沈み始めた。

二度目にしらべられた後だった。帰って来ると急に息苦しくなって板の間の上に倒れて呻いた。恰度嘔く物が一ぱ

いつまって居て出口をふさがれてしまったように、胸が割れそうに痛み出した。人々は狽てて、看守を呼び、背中を撫でてくれたが、「大丈夫だろう」と言ったきり看守は見向きもしなかった。

耳の傍で一人の男が他の若い労働者を低く然し、きつくたしなめて居るのが聞えた。

「そんなことしゃべったのか。そのまま出やがったらぶっ殺してくれるからな。……いいか、今度呼ばれたら引っくり返すんだぞ。」

それが誰だかわからなかった。

達郎は——自分も兄のように死ぬのかも知れない——と思った。

三日——五日——七日——十日過ぎた。

房は又次第に人が減った。始め捕まった達郎だけが再び後に残った。達郎の体は目に見えて悪くなった「×んだら出してやるよ」と看手が言った。週期的に胸苦しさが襲って来た。やがて七島が繩を打たれて送られた。その翌日素藤が送られることになった。その日の朝、隙を見て素藤が金網の間から紙片を投げ入れた。

——キミノコトイワヌ、ガンバレ——

二人の巡査に繩をとられて行く兄の親友の後姿をじっと見送った。

やがて拘留あけが来た。時間が早く過ぎるか、生命が長く続くか——達郎は只外に出たいと思った。

彼は呼び出された。主任は勿体ぶって口を切った。

「兎も角出すけど、身柄引受けを誰にしてもらうかね」

色々頭をめぐらして見たが、結局父より外になかった。

出るんだ！……出るんだ！……腫れ上った足を留置場に引きずりながら彼は胸をわくわくさせた。

父が来て、眼に涙を光らせながら彼を見た。彼も眼頭が熱くなった。じっと首をうなだれて石の建物を出た。もはや暖い風が吹いて、煤のたまった寺島の街の、所々疵のように見える空地には、花のない草が黄色い葉を拡げ、そこここで鯉のぼりが煙を呑みながら泳いで居た。父も彼も何も言わなかった。家に帰り、風呂に入り、ぐったり眠った。焼けるような彼の額に手をおいて母親が激しく泣いた。

親父はそれに懲りた。それ以来、「出て行け」というようなことはなかった。体が回復すると達郎は大和革布工場につとめることになった。

治安維持法の勅令が出た後、ちょいちょい親父は断片的に言った。

「家から繩附きは出したかねえ。やるんならよそでやってくれ……」

「そんなことよか、くらしのことを手伝ってくれるとなあ……」

「今度の法律じゃ死刑だってからなあ……」

親父の記憶の中で、死んだ息子の顔がちらちらした。達

郎は何も口答えしなかった。止めたんだろう——と親父は考えて居た。

それだのに……今度、俺は何ということをしでかしたのだろう——

「兄ちゃんは、どうしたって言うんだろう」幾子は玄関まで出て眺めて居たが、やがて帰って来て帯をしめ始めた。親父は物を言わなかった。

寺島の町を北から南に貫いて曳舟川が流れて居る。前には上流が江戸川につながって居て、毎月さるの日に帝釈様におまいりする足弱の女や半病人をのせた大伝馬が岸伝いに人夫に曳かれて上下したものだ。その後川上は埋め立てられ、そのあと小石のような家が立ち並んだ。川の両側には染色工場やゴム工場や革布工場が隙間なく建って、石炭殻をこづみ上げた工場と工場との間の空地には、壊れたボイラーの死骸が半ば土にめり込んで居る。工場から排泄する藍色と茶褐色の灰汁はすべてこの川に注ぎ込み、闇の中でぶつぶつ泡をふいて居る。かつて帝釈参りの女たちを運んだであろう大伝馬は狭い水面の両岸寄りに、石炭の粉を一ぱい浴びて腐蝕するままに残されて居る。昔の名残りといっては、町北の橋際で老夫婦が生業して居る名物の曳舟だんごだけである。——

達郎は川に出て、何処へ行こうかと考えて見た。半年前家を出た時のように明らさまに行くことの出來る組合の事務所はなかった。兄の友人は多く捕われ、残された者はその煙の下の暗い街の何処にひそんで居るのかわからなかった。

傍に、彼の勤めて居る天井の低い赤煉瓦の工場があり、如露の口のような三本の煙突が突っ立ち、闇に光って居る油のような水に倒に影を突き倒して居た。

素藤や志村のことを思い出した。上川の消息は全くわからなかった。プロ・ニュースは發行される度に、同志某々の死を報じてあった。それらの記事を呼んで聞かせると、母親は、

「逸郎のように死んだんじゃろう。」

と言って涙ぐんだ。

一年の間に何もかも変ってしまった。幾子は十五になり、小さい弟や妹は見違える程丈がのびた。

「インタナショナルて何だか知ってる？」

時々逸郎が残した労働日記をめくりながら幾子がとてつもなくそんなことを言った。

それから父のこと——

ふいと、達郎は、逸郎がどうして頑固な父と衝突しなかったかを不思議に思った。彼は無言で、しかし、容赦なく仕事を片附けた兄のことを思った。……然し、彼は——彼の時代は、もはや、それは駄目だ。父と彼との間に横たわった溝は一年の間の時代が、それを避け難い裂目にして居たのだ。彼は顔をあげた。もぐらもちの道のような、じめじめした闇を歩き出した。（一九三〇年四月「中央公論春季特輯号」）

浮動する地価

黒島伝治

一

ぽかぽか暖かくなりかけた五月の山は、無気味で油断がならない。蛇が日向ぼっこをしたり、蜥蜴(とかげ)やヤモリがふいにとび出して来る。

僕は動物のうちで爬虫類が一番きらいだ。

人間が蛇を嫌うのは、大昔に、まだ人間とならない時代の祖先が、爬虫にひどくいじめられた潜在意識によるんだ、と云う者がある。僕の祖先が、鳥であったか、馬であったか、それは知らない。が、あの無気味にぬるぬるした、冷たい、執念深かそうな冷血動物が、僕は嫌いである。

だが、この蛇をのけると、五月の山ほど若々しい、快よい、香り高いところはない。朽ちた古い柴の葉と、萌え出ずる新しい栗や、樫や、蠟燭のような松の芽が、酷く、苦く、ぷんぷんかおる。朝は、みがかれた銀のようだ。そして、すき通っている。

そこでは、雉(きじ)も山鳥も鶯も亢奮せずにはいられない。雉は、秋や夏とは違う一種特別な鳴き方をする。鶯は「谷渡り」を始める。それは、各々雄が雌を叫び求める声だ。人間も、そこでは、自然と、山の刺戟に血が全身の血管に躍るのだった。

虹吉は——僕の兄だ——そこで女を追っかけまわしていた。僕が、まだ七ツか八ツの頃である。そこで兄は、さきの妻のトシエと、笹の刈株で足に踏抜きをこしらえ、臑(すね)をすりむきなどして、ざれついたり、甘い喧嘩をしたり、蕨をつむ競争をしたりしていた。

トシエは、ひょっと、何かの拍子に身体にふれると、顔だけでなく、かくれた、どこの部分も、きめの細かいつるつるした女だった。髪も、眉も、黒く濃い。唇は紅をつけたように赤かった。耳が白くて恰好がよかった。眼は鈴のように丸く、張りがあった。ただ一つ欠点は、顔の真中を通っている鼻が、さきをななめにツン切られたように天を向いていることだ。——それも贔屓目(ひいきめ)に見れば愛嬌だった。

彼女の家には、蕨や、いたどりや、秋には松茸が、いくらでも土の下から頭をもちあげて来る広い、樹の茂った山があった。

「山なしが、山へ来とるげ……」

部落の子供達が四五人、或は七八人も、手籠を一つずつ、

さげて、山へそう云うものを取りに行っている時、トシエは、見さげるような顔をして、彼女の家の山へは這入らせまいとした。

子供なりに僕は、自分の家に、一枚の山も、一段歩の畠も持っていないのを、引け目に感じた。それをいまだに覚えている。その当時、僕の家には、田が、親爺が三年前、隣村の破産した男から二百八十円で買ったのが一枚あるきりだった。それ以外は、すべてよそから借りて作っていた。買った田も、二百円は信用組合に借金となっていた。何兵衛が貧乏で、何三郎が分限者だ。徳右衛門は、田を何町歩持っている。それは何かにつれて、すぐ、村の者の話題に上ることだ。人は、不動産をより多く持っている人間を羨やんだ。

それが、寒天のような、柔かい少年の心を傷つけずにいないのは、勿論だった。

僕は、憂欝になり、腹立たしくなった。

「俺れんちにも、こんな蕨や、いたどりや、野苺がなんぼでもなる山があるといいんだがなァ。」

ふと、心から、それをこい希ったりした。

秋になると、トシエの家には、山の松茸の生える場所へ持って行って鈴をつけた縄張りをした。他人に松茸を取らさないようにした。

そこへ、僕等はしのびこんだ。そして、その山を隅から隅まで荒らした。

這入って行きしなに縄にふれると、向うで鈴がなった。すると、樫の棒を持った番人が銅羅声をあげて、掛小屋の中から走り出て来る。

が、番人が現場へやって来る頃には、僕等はちゃんと、五六本の松茸を手籠にむしり取って、小笹が生いしげった、暗い繁みや、太い黒松のかげに、息をひそめてかくれていた。

「我鬼らめが、くそッ！　どこへうせやがったんだい！　ド骨を叩き折って呉れるぞ！」番人は樫の棒で、青苔のついた石を叩いた。

ロギタなく罵る叫びは向うの山襞にこだました。そして、同じ声が、遠くから、又、帰って来た。

「貧乏たれの我鬼らめに限って、くそッ！　どうもこうもならん！　くそッ！」

番人は、トシエの親爺に日給十八銭で、松茸の時期だけ傭われていた。卯太郎という老人だ。彼自身も、自分の所有地は、S町の方に田が二段歩あるだけだった。ほかはすべてトシエの家の小作をしている。貧乏人にちがいなかった。そいつが、人を罵る時は、いつも、「貧乏たれ」という言葉を使った。

「貧乏たれに限って、ちき生！　手くせが悪れえや、チエッ！」

卯太郎は唾を吐いた。礫を拾って、そこらの笹の繁みへ、ねらいもきめずに投げつけた。石はカチンと松の幹に

ぶつかって、反射してほかへはねとんだ。泥棒をする、そのことが、本当に、彼には、腹が立つもののようだった。
番人が、番人小屋の方へ行ってしまうと、僕等は、どこからか、一人ずつヒョッコリと現われて来た。鹿太郎や、丑松や、虎吉が一緒になった。お互いに、顔を見合って、クックッと笑った。
「もう一ッペン、あの卯をおこらしてやろうか。」
「うむ。」
「いっそ、この綱をそッと切っといてやろうよ。面白いじゃないか。」
「おお、やったろう、やったろう。」

二

七年して、トシエは、虹吉の妻となった。虹吉は二十三だった。弟の僕は、十六だった。春のことである。
地主の娘と、小作兼自作農の伜との結婚は、家と家とがつり合わなかった。トシエ自身も、虹吉の妻とはなっても、僕の家の嫁となることは望んでいなかった。
が、彼女は変調を来した生理的条件に、すべてを余儀なくされていた。
「やちもないことをしてくさって、虹吉の阿呆めが!」
母は兄の前では一言の文句もよく言わずに、かげで息子の不品行を責めた。僕は、

「早よ、ほかで嫁を貰うてやらんせんにゃ。」
母と母の姉にあたる伯母が来あわしている縁側で云った。
「われも、子供のくせに、猪口才げなことを云うじゃないか。」いまだに、『鉄砲のたま』をよく呉れる伯母は笑った。「二十三やかいで嫁を取るんは、まだ早すぎる。虹吉は、去年あたりから、やっと四斗俵がかつげるようになったばッかしじゃもん。」
僕は、猪口才げなと云われたのが不服でならなかった。
伯母の夫は、足駄をはいて、両手に一俵ずつ四斗俵を鷲掴みにさげて歩いたり、肩の上へ同時に、二俵の米俵をのっけて、河にかけられた細い、ひわひわする板橋を渡ったりする力持ちだった。その伯父が、男は、嫁を取ると、もうそれからは力が増して来ない。角力とりでも、嫁を持つとそれから角力が落ちる。そんなことをよく云っていた。
十六の僕から見ると、二十三の兄は、すっかり、おとなとなってしまっていた。
兄は高等小学校を出ただけで、それ以外、何の勉強もしていなかった。それでも、彼と同じ年恰好の者のうちでは、誰れにも負けず、物事をよく知っていた。農林学校を出た者よりも。それが、僕をして、兄を尊敬さすのに十分だった。虹吉は、健康に、団栗林の中の一本の黒松のように、すくすくと生い育っていた。彼は、一人前の男となっていた。

村には、娘達がS町やK市へ吸い取られるように、次々に家を出て丁度いい年恰好の女は二三人しかいなかった。町へ出た娘の中に虹吉が真面目に妻としたいと思った女が、一人か二人はあったかも知れない。しかし、町へ行った娘は、二年と経たないうちに、今度は青黄色い、へすばった梨のようになって咳をしながら帰って来た。そして、半年もすると血を吐いて死んだ。

そのあとから、又、別の娘が咳をしながら帰って来た。そして、又、半年か、一年ぶらぶらして死んだ。脚がぶくぶくにはれて、向う脛を指で押すと、ボコンと引っこんで、歩けない娘も帰って来た。病気とならない娘は、なかなか町から帰らなかった。

そして、一年、一年、あとから生長して来る彼女達の妹や従妹は、やはり町をさして出て行った。萎びた梨のように水々しさがなくなったり、脚がはれたりするのを恐れてはいられなかった。

若い男も、ぼつぼつ出て行った。金を儲けようとして。華やかな生活をしようとして。

村は、色気も艶気もなくなってしまった。

そして、村で、メリンスの花模様が歩くのは「伊三郎」のトシエか、「徳右衛門」のいしえか、町へ出ずにすむ、田地持ちの娘こ相場がきまってしまった。

村は、そういう状態になっていた。

メリヤス工場の職工募集は、うるさく、若者や娘のある家々を歩きまわっていた。

三

トシエは、家へ来た翌日から悪阻で苦しんだ。蛙が、夜がな夜ッぴて水田でやかましく鳴き騒いでいた。夏が近づいていた。

黄金色の皮に、青味がさして来るまで樹にならしてある夏密柑をトシエは親元からちぎって来た。歯が浮いて、酢ッぱい汁が歯髄にしみこむのをものともせずに、幾ッも、幾ッも、彼女はそれをむさぼり食った。密柑の皮は窓のさきに放られてうず高くなった。その上、陰気くさい雨がびしょびしょと降り注いでいた。

夜、一段ひくい納屋の向う側にある便所から帰りに、石段をあがりかけると、僕は、ふと嫂が、窓から顔を出して苦るしげに、食ったものを吐こうとしている声を聞いた。嫂はのどもとへ突き上げて来るものを吐き出してしまおうと、しきりにあせっていた。が、どうしても、出そうとするものがすっかり出ないで、さいさい生唾を密柑の皮の上へ吐きすてた。

彼女は、もう、すべっこくも美しくもなくなっていた。彼女は、何故か、不潔で、くさく、キタないように見えた。

まもなく田植が来た。親爺もおふくろも、兄も、それか

ら僕も、田植えと、田植えのこしらえに額や頬に泥水がぴしゃぴしゃとびかかる水田に這入って牛を使い、鍬で畦を塗り、ならしでならした。雨がやむと、蒸し暑い六月の太陽は、はげしく、僕等を頭から煎りつけた。

嫂は働かなかった。親爺も、おふくろも、虹吉も満足だった。親爺が満足したのは、田地持ちの分限者の、「伊三郎」と姻戚関係になったからである。おふくろが満足したのは、トシエが二タ棹の三ッよせの簞笥に、どの抽出しへもいっぱい、小浜や、錦紗や、明石や、——そんな金のかかった着物を詰めこんで持って来たからである。虹吉が満足したのは、彼の本能的な実弾射撃が、てき面に、一番手ッ取り早く、功を奏したからである。

朝五時から、十二時まで、四人の親子は、無神経な動物のように野良で働きつづけた。働くということ以外には、何も考えなかった。精米所の汽笛で、やっと、人間にかえったような気がした。昼飯を食いにかえった。昼から、また晩の七時頃まで働くのだ。

トシエは、座敷に、蠅よけに、蚊帳を吊って、その中に寝ていた。読みさしの新しい雑誌が頭のさきに放り出されてあった。飯の用意はしてなかった。

「子供でも出来たら、ちっとは、性根を入れて働くようになろうか。」

飯を食って、野良へ出てから母は云った。兄はまだ、妻の部屋でぐずぐずしていた。

「たいがい、伊三郎では、何ンにも働くことを習わずに遊んで育った様子じゃないか。」

「俺れや、そんなこと知らん。」

「ちっと、虹吉がやかましく云わないでか!」

母は、女房に甘い虹吉を、いまいましげに顔をしかめた。

「そんなことを云うたって、お母あは、家が狭くなるほど荷物を持って来たというて嬉しがっとったくせに。」と僕は笑った。

「ええい、荷物は荷物、仕事は仕事じゃ。仕事をせん不用ごろが一番どうならん。」

兄は、妻をいたわった。働いて、麦飯をがつがつ食うことだけに産れて来たような親爺とおふくろから、トシエをかばった。彼女の腰は広くなった。なめらかで、やわらかい頬の肉は、いくらか赭味を帯びて来た。そして唇が荒れ出した。腹では胎児がむくむくと内部から皮を突っぱっていた。

四

百姓は、生命よりも土地が大事だというくらい土地を重んじた。

死人も、土地を買わなければ、その屍を休める場所がない。——そういう思想を持っていた。だから、棺桶の中へ

は、いくらかの金を入れた。死人が、地獄か、極楽かで、その金を出して、自分の休息所を買うのである！

母が、死んだ猫を埋めてやる時、その猫にまで、孔のあいた二文銭を、藁に通して頸にひっかけさし、それで場所を買え、と云っていたのを僕は覚えている。

金は取られる心配がある。家は焼けると灰となる。人間は死ねばそれッきりだ。が、土地だけは永久に残る。

そんな考えから、親爺は、借金や、頼母子講を落した金で、ちびりちびりと田と畠を買い集めた。破産した人間の土地を値切り倒して、それで時価よりも安く買えると彼は、鬼の首を取ったように喜んだ。

七年間に、彼は、全然の小作人でもない、又、全然の自作農でもない、その二つをつきまぜたような存在となつた。僅か、六畝か七畝の田を買った時でさえ、親爺と母はホクホクしていた。

「今年から、税金は、ちっとよけいにかかって来るようになるぞ。」

土地を持った嬉しさに、母は、税金を納めるのさえ、楽しみだというような調子だった。兄と僕は傍できいていた。

「何だい、たったあれっぽち、猫の額ほどの田を買うて、地主にでもなったような気で居るんだ。」兄は苦々しい顔をした。

「ほいたって、あれと野上の二段とは、もう年貢を納めないでもええ田じゃが。」

「年貢の代りに信用組合の利子がいら。」

「いいや、自分の田じゃなけれゃどうならん。」と、母は繰りかえした。「やれ取り上げるの、年貢をあげるので、すったもんだ云わんだけでも、なんぼよけれや。ずっと、こっちの気持が落ちついて居れるがな。」

村は、だんだんに変っていた。見通しのきく自作農の竹さんは、土地をすっかり売ッぱらって都会へ出た。地主の伊三郎も、山と畠の一部を売った。息子を農林学校へやる学資とするためだ。小作人から、自作農に成り上って行こうと、あがいている者も僕の親爺一人に止まらなかった。

又、S町の近くに田を持っていたあの松茸番の卯太郎は、一方の分を製薬会社の敷地に売って五千円あまりの金を握った。

こういう売買の仲介をやるのが、熊さんという男だ。三十二本の歯をすべて、一本も残さず金で巻いている。何か一寸売買に口をかけると、必ず、五分の周旋料は、せしめずに置かない男だ。人々は、おじけて、なるべく熊さんの手にかけないようにする。熊さんを忌避する。が、熊さんは売買ごとにかけると犬のような鼻を持っていた。どこから、どうして嗅ぎつけて来るのか、必ず、頭を突っこんで口をきいた。

村へは電燈がついた。――電燈をつけることをすすめに来たのも熊さんだった。

がたがたの古馬車と、なたまめ煙管をくわえた老馭者は、乗合自動車と、ハイカラな運転手に取ってかわられた。
自動車は、くさい瓦斯を路上に撒いた。そして、路傍に群がって珍らしげに見物している子供達をあとに、次のB村、H村へ走った。

五

十一月になった。
ある夜、トシエは子を産んだ。兄は、妻の産室に入った。が、赤ン坊の叫び声はなかった。分娩のすんだトシエは、細くなって、晴れやかに笑いながら、仰向けに横たわっていた。ボロ切れと、脱脂綿に包まれた子供は、軟かく、細い、黒い髪がはえて、無気味につめたくなっていた。全然、泣きも、叫びもしなかった。
「これですっかり、うるさいくびきからのがれちゃった。」
トシエは悲しむかと思いの外、晴々とした顔をしていた。これは、まだ、兄の妻とならないさきの、野良で自由にはねまわり、自由に恋をした、その時の顔だ。妙に、はしゃいでいた。
つつましさも、兄に頼りきったところも、トシエの顔から消え去ってしまった。赤ン坊は死んでいたのだ。
一カ月の後、彼女は、別の、色の生白い、ステッキを振り振り歩く手薄な男につれられて、優しく低く、何事かを囁きながら、S町への大通りを通っていた。
虹吉も家を捨てた。

六

そして、僕が、兄に代って、親を助けて家の心配をして行かなければならない、番になった。
こいつは、引き合わん、陰気くさい役目だ。

七

十六燭光を取りつけた一個の電燈は、煤と蝿の糞で、笠も球も黒く汚れた。
いつの間にか、十六燭は、十燭以下にしか光らなくなっていた。電燈会社が一割の配当をつづけるため、燃料で胡魔化しをやっているのだった。
芝居小屋へ活動写真がかかると、その電燈は息をした。ふいに、強力な電燈を芝居小屋へ奪われて、家々の電燈は、スッと消えそうに暗くなった。映写がやまると、今度は、スッと電燈が明るくなる。又、始まると、スッと暗くなる。そして、電燈は、一と晩に、何回となく息をするのだった。
自動車は、毎日々々、走って来て、走り去った。雨が降

っても、風が吹いても、休み日でも。
藁草履を不用にする地下足袋や、流行のパラソルや、大正琴や、水あげポンプを町から積んで。そして村からは、高等小学を出たばかりの、少年や、娘達を、一人も残さず、なめつくすようにその中ぶるの箱の中へ押し込んで。
　自動車は、また、八寸置きに布切れの目じるしをくくりつけた田植縄の代りに木製の新案特許の框を持って来た。撥ね釣瓶はポンプになった。浮塵子がわくと白熱燈が使われた。石油を撒き、石油ランプをともし、子供が脛まで、くさった水苔くさい田の中へ脚をずりこまして、葉裏の卵を探す代りに。
　刈った稲も扱きばしで扱き、ふるいにかけ、唐臼ですり、唐箕にかけ、それから玄米とする。そんな面倒くさい、骨の折れる手数はいらなくなった。くるくる廻る親玉号は穂をあてがえば、籾が面白いほどさきからとび落ちた。そして籾は、発動機をかけた自動籾摺機に放りこまれて、殻が風に吹き飛ばされ、実は、受けられた桶の中へ、滝のように流れ落ちた。
　おふくろが、昔、雨の日に、ぶんぶんまわして糸を紡いだ糸車は、天井裏の物置きで、まッ黒に煤けていた。鼠が時に、その上にあがると、糸車は、天井裏でブルンブルンと音をたてた。
「あの音は、なんぞいの？」
晩のことだった。耳が遠くなったおふくろは、僕のたずねたことが聞えずに、一人ごとをつづけていた。
「武井から、今日の昼、籾摺代を取りに来たが、その銭はあるか知らん？」
「あのブルンブルンという音は何ぞいの？」
「籾摺を機械に頼みゃ、唐臼をまわす世話はいらず、らくでええけんど、頼みゃ、頼んだだけ銭がかかるんじゃ。」
「あの、屋根裏のおかしげな音は何ぞと云ってるんだ！」
「なに、なんじゃ。――屋根裏に銭があると云いよるんか？」
　おふくろはぼれかけた。
　よなべに作る藁草履を捨てて地下足袋を買えば、金がいる。ポンプも、白熱燈も、親玉号も、みな金だった。その割に、売る米の値は上るどころじゃなかった。そこで、土地土地土地と、土地を第一に思っていたおふくろが、ぼれたなりに、今度は銭銭銭と、金のことばかりを独りごとに呟きだした。

八

「孫七」の娘のお八重が、見知らぬ男と睦まじげに笑いかわしながら、自動車からおりて来た。情夫かと思うと、夫婦だった。
「太助」のお政も、その附近の者の顔ではない、別のタイプの男をつれて帰って来た。

素性の知れた、ところの者同士とでなければ、昔は、一緒にはならなかった。同村の者でなければ隣村のものと。隣村の者でなければ隣々村の者と。そして、夫婦をきめるのは、自分でなく、やかましい頑固な親だった。
今は、町へ出た娘達は、そこで、でっくわした男と勝手に一緒になった。
村へちょっと帰って、又、町へ出かけた。
次に村へ帰る時、又、別の男と一緒になっていたりした。人々は、それを当然のように思っていた。見てもなんにも云わなかった。
田舎に居っても、時が移り変っていることは感じられた。
昔流の古るくさいことばかりを守っている者は、次第に没落に近づいていた。人の悪い、目さきのきく、敏捷な男が、うまいことをやった。薪問屋は、石炭問屋に変り、鶏買いは豚買いに変った。それでうまいことをやった。いつまでも、薪問屋ばかりやっている人間は、しまいには山の樹がなくなって、商売をやめなければならなくなっていた。薪問屋は、中間搾取をやる商売だ。しかし、そこからさえ、ある暗示を感じずにはいられなかった。
親爺は、やはりちびりちびり土地を買い集めていた。土地は値打がさがった。自作農で破産をする人間、誰れもかれも街へ出て作り手がなく売りに出す人間、伊三郎が、又、息子の学資に畠の一部を売る場合——秋に入ると一と雨ごとに涼しくなる。そんな風に、地価は、一つの売出し毎に、相場がだんだんさがった。
そんな土地を、親爺はあさりまわって買った。僕はそれを好かなかった。親爺は、買った土地を抵当に入れて、信用組合からなお金を借り足して、又、別の畠を買った。五六口の頼母子講は、すっかり粕になってしまっていた。
頼母子講は、一と口が一年に二回掛戻さなければならない。だから毎月、どっかの頼母子が、掛戻金持参の通知をよこして来る。それで、親爺の懐はきゅうきゅうした。
それだのに親爺は、まだ土地を買うことをやめなかった。熊さんが、どこへ持って行っても相手にしない、山根の、松林のかげで日当りの悪い瘦地を、うまげにすすめてくると、また、口車にのって、そんな土地まで、買ってしまった。その点、ぼれていても、おふくろの方がまだ利巧だった。
「そんな、やちもない畠や田ばかり買って、地主にでもなるつもりかい？」
僕は馬鹿々々しさと、腹立たしさとで、真面目に取り合えない気になっていた。
「地主にやこし、なれるもんか。ただ、わいらにちっとでも田地を残してやろうと思うとるだけじゃ。銭を使うたらそれっきりじゃが、土地は孫子の代にまで残るもんじゃせに。」
親爺は、朴訥で、真面目だった。

「俺ら、田地を買うて呉れたって、いらん。」
「われ、いらにゃ、虹吉が戻ってくれや、虹吉にやるがな。」
「兄やんが、戻って来ると思っとるんか……馬鹿な！　もう戻って来るもんか。なんぼ田を買うたっていらんこっちゃ！」
信用組合からの利子の取立てと、頼母子講の掛戻しと、女房と、息子の反対は、次第に親爺を苦るしくして行った。
三人が百姓に専心して、その収穫が、どうしても、利子に追いつかなかった。このままで行けば、買った土地を、又、より安くで売り払って、借金をかえさなければならなくなるのはきまりきっていた。
もっと利子の安い勧業銀行へ人を頼んであたってみたりした。
だが、ある日、春だった。
「うまいことになったわい。」親爺は、いきいきと、若がえったように、すたすた歩いて帰ってきた。彼は、やはり朴訥な、真面目な調子で云った。「今度、KからSまで電車がつくんで、だいぶ家の土地もその敷地に売れそうじゃ。坪五円にゃ、安いとて売れるせに、やっぱし、二束三文で買えるだけ買うといてうまいことをやった。やっぱし買えるだけ買うといてよかった。今度は、だいぶ儲かるぞ。」

九

青い大麦や、小麦や、裸麦が、村一面にすくすくとのびていた。帰来した燕は、その麦の上を、青葉に腹をすらんばかりに低く飛び交うた。
測量をする技師の一と組は、巻尺と、赤と白のペンキを交互に塗ったボンデンや、測量機等を携えて、その麦畑の中を行き来した。巻尺を引っ張り、三本の脚の上にのせた、望遠鏡のような測量機でペンキ塗りのボンデンをのぞき、地図に何かを書きつけて、叫んでいた。
英語の記号と、番号のはいった四角の杭が次々に、麦畑の中へ打たれて行った。
麦を踏み折られて、ぶつぶつ小言を云わずにいられなかったのは小作人だ。
親爺は、麦が踏み折られたことを喜んだ。
地主も、自作農も、麦が踏みこまれたことは、金が這入ることを意味する。
敷地買収の交渉が来た。
一畝、十二円六十銭で買った畠を、坪、二円三十銭で切り出して来た。一畝なら、六十九円となる訳だ。
親爺は、自家に作りたい畠だと云って、売り惜しんだ。
坪二円九十銭にせり上った。
親爺は、地味がいいので自家に作りたい畠だと、繰りか

えした。そして、売り惜しんだ。単価がせり上った。
僕は、傍でだまってきいていて、朴訥なくせに、親爺が掛引がうまいのに感心した。坪二円九十銭なら、のどから手が出そうだのに、親爺はまるッきり、そんな素振りはちっとも現わさないのだ。
とうとう、三円五十銭となった。
家の田と畠は、三ヵ所、敷地にひっかかっていた。その一つの田は、真中が敷地となって、真二ッに切られ、左右とも沿線となるようになっていた。
敷地ばかりでなく、沿線一帯の地価が吊り上った。こんなうまいことはなかった。
田と畠を頼母子講の抵当に書きこみ、或は借金のかわりに差押えられようとしていた自作農は、親爺だけじゃなかった。庄兵衛も作右衛門も、藤太郎も、村の自作農の半分はそういう、つらいやりくりであえいでいた。それが、息を吹きかえしたように助かった。地主はホクホクした。卯太郎は、いつか五千円で町に近い田を売って、そのうちの八十五円で畠を買った。その畠が、また今度、鉄道の敷地にかかっていた。
「貧乏たれが、ざま見い。うら等、やること、なすことが、みんなうまくあたるんじゃ。わいら、うらの爪の垢なりと煎じて飲んどけい。」
彼は太平楽を並べていばっていた。
「何ぬかすぞい! 卯の天保銭めが!」
麦を踏み荒されたばかりに敷地となる田も畠もない持たない小作人は、露骨な反感を現わした。
「うちの田は、ちょっとのことではずれくさった。もう五間ほどあの電車道が、西へ振っとったら、うちにもボロイ銭が這入って来るんじゃったのに!」
と残念がっている者もあった。
「伊三郎にゃ、あれだけ土地を持っとって、どうしたんか、相談でもしたように、はずれとる。」おふくろは、他人の事を嬉しげに話をした。トシエが逃げ返った仇をここで取っているような気持だった。「かかっとるんは、たった一枚だけで、ほかは、角だけ一寸ふれとるんが、二たところあるばっかしじゃ。」
「へへえ、そいつは面白い。」
僕も、何か、気味たいのよさを感じた。
「それで、あしこにゃ、子供を学校へやった借金はあるし、年貢は、小作が、きちんきちんと納めやせんし、くやんどるといい。」
「そいつぁちじゃ。かまうもんかい。」
敷地に杭を打たれたところへは、麦を刈り取ったあとで、鍬きも、耕しも、植え付けもしなかった。夏は、青々とした雑草が、勝手きままにそこに繁茂した。秋の末になると、その雑草は、灰色になって枯れた。黄金色にみのった稲穂の真中を、そこだけは、真直ぐに枯色の反物を引っぱったようになっていた。秋からは、その沿線附近一帯を

も、あまり儲けにならない麦を蒔かずに、荒れるがままに放って置く者もあった。
冬の始めになった。又、巻尺と、赤と白のペンキ塗りのボンデンを持った測量の一組がやって来た。そして望遠鏡のような測量機でのぞき、何かを叫んで、新しく、別なところへ持って行って、四角の杭を打ちつけた。杭と杭とをつなぎ合わす線は、今度はいくらか蛇のようにうねってきた。
「またもう一つ、別の電車をつくんじゃろうか。」
親爺は、測量をする一と組と作業を見てきて心配げな顔をした。
「こんなへんぴへ二つも電車をつけることはないだろう。」
「うむ。それは、そうじゃ。」
人々は、新しい杭が打たれて行くあとへ、神経をとがらしだした。敷地は、第一回の測量地点から、第二回の測量地へ変更されることになったのだ。
はじめの測量には、所有地が敷地に這入っていたのに、今度は、はずれている。そんな地主や自作農もあった。はじめは、四ヵ所もはいっていたのに、今度は、一坪もふれていない。そんな者もあった。恐慌が来た。うまい儲けにありつけると思って、田を荒らして、待ちかまえていた。それだのに、そのあてがはずれてしまった。呆然とした。
新規の測量で、新しく敷地にかかったものは喜んだ。地主も、自作農も、――土地を持っている人間は、悲喜交々だった。そいつを、高見の見物をしていられるものは、何にも持たない小作人だ。
「今度もみんごと、家にゃ四ッところかかっとる。」と、親爺は、胸をなでおろした。
「しかし、先の方が瘦地ばかり取って呉れるようになったのに今度は分が悪るなっとるぞ。それに、こうかえられては、荒らした畠を、また作れるように開墾するんがたいへんじゃ。」
線路を、どうしてわざと曲りくねらすのか、それが変だった。直線が一番いい筈じゃないか。一寸そんな気がした。すると、誰れかが、
「今度ァ、伊三郎の田を入れるとて、わざと、あんな青大将のようにうねうねとうねらしてしまったんだぞ。」
こう云い出した。実際、今度は伊三郎の田が、どいつもこいつもひっかかっていた。
「停留場を、あしこの田のところへ、権現の方のを換えて持って行くというじゃないか？」
「だいぶ重役に賄賂を掴ましたんじゃ。あの熊さんを使うてやったんじゃよ。――熊の奴この夏からさいさいK市までのこのこと出かけて行きよったじゃないか。」
「そうか、そんなことをやりくさったんか。道理で、此の頃、熊と伊三郎がちょんちょんやっとると思いよった。くそッ！」
敷地にはずれた連中は、がいがい騒ぎ出した。敷地に這

入るか這入らないかは、彼等の家がつぶれるか、つぶれないかに関係していた。真剣に、目を血ばしらすのは当然だった。
「そんじゃ、こっちも、みんなで、ほかの重役のとこへ談詰判に行こうじゃないか。伊三郎が、そんなことをしくさるんなら、こっちだって、黙って引っこんでは居れんぞ。」
「うむ、そうだ、そうだ。黙つて泣寝入りは出来やせん！」
K市へ出かけて行った連中は埒があかなかった。
「やっぱし、人間のずるい、金の融通のきく奴が、うまいことをしくさるんだ。」僕は、それを見ながら、この感じを深くした。裏でこそこそやる人間が、なんでもうまいことをしているんだ。馬鹿正直な奴が、いつでも結局、一番の大馬鹿なんだ。
ある晩、わいわい騒いでいる久助の女房は、伊三郎の家に火をつけた。が、それは、火事とならずにもみ消された。小作人も、はずされた仲間の方についた。伊三郎の田は、六月の植えつけから、その三分の二は耕されず雑草がはびこるままに荒らされだした。
だが、それから間もなくだった。
「や、大変なこっちゃ。これゃ、何もかもわやじゃ！」
親爺はびっくりして、鶏の糞だらけの鶏小屋の前で腰をぬかしていた。
「どうしたんじゃ？　どうしたじゃ？」
「これや、わやじゃ？　何もかもすっかりわやじゃ。来てくれい！　どうしよう？　どうしよう？」
親爺は腰がぬけて脚が立たなかった。彼が鶏に餌をやろうとしていた時、KS電鉄の重役が贈賄罪で起訴収容され、電車は、おじゃんになってしまったことを、村の者が知らしてきたのである。
「何だ、そんなことで腰をぬかすなんて！」
僕は立つことの出来ない親爺を見ながらなぜか、清々とするものを感じるのだった。
村は、歓喜の頂上にある者も、憤慨せる者も、口惜しがっている者も、すべてが悉く高い崖の上から、深い谷間の底へ突き落されてしまった。喜ぶことはやさしかった。高い所から深いドン底へ墜落するのは何というつらいことだろう！
荒された土地には依然として雑草が繁茂し、秋には草は枯れ、そこは灰色に朽ち腐った。

十

やがて親爺が死んだ。
慶応年間に村で生れた親爺は、一生涯麦飯を食って、営養不良になることもなく、早く年を取り、もうろくすることもかまわずに、ただ、いくらかの土地を自分のものとし、財産をつくって、子供に残してやろうと、そればかり

を考えていた。
死ぬ前には、親爺はぼれていた。若い時分、野良で過激に酷使しすぎた肉体は、年がよるに従って云うことをきかなくなった。
親爺は、肥桶をかついだり、牛を使ったりするのを、如何にも物憂げに、困難げにしだしていた。米俵をかつぐのは、もう出来ないことだった。晩には彼は眠られなかった。四肢がけだるく、腰は激しい疼くような痛みを覚えた。昔は自分の肉体など、感じないほど、五体が自由に動いたものだった。それが、今は、不思議に身体全体が、もの憂く、悩ましく、ちょっと立上るのにさえ、重々しく、厄介に感じられた。
夜があけると、彼は、鍬をかついで、よぼよぼと荒らされた土地を勿体ながって開墾に出かけた。仕事ははかどらなかった。
土地の方が、今度は彼を見捨ててしまった。
田も畑もすべて借金の抵当に這入っていた。そして、電鉄が中止ときまってからは、地価は釣瓶落ちに落ちた。親爺は、もう、彼の力では、大勢を再びもとへ戻すのは不可能だと感じたのに違いない。彼は、なお、土地を手離すまいと努力した。金を又借り足して利子を払った。しかし、何年か前、彼に、土地を売りつけに来た熊さんは、矢のように借金の取立てに押しかけて来た。土地を売ッ払って始末をつけてしまうように、無遠慮な調子で切り出した。

昔、彼が、破産した男の土地を、値切り倒して、面白がって買ったように、今度は、若いほかの男が、彼の土地を嬲るように値切りとばした。二束三文だった。
親爺は、もう、親爺としての一生は、失敗であり無意義であり、朴訥と、遅鈍と、阿呆の歴史であった、と感じたのに違いない。彼の一代の総勘定はすんでしまった。そして残ったものは零である。
彼は、死んだ。その一生のつとめを終ってしまった樹木が、だんだんに、どこからともなく枯れかけて、如何なる手段を施しても、枯れるものを甦らすことは出来ないように死んでしまった。
土地も借金も同時になくなってしまったことを僕は喜んだ。せいせいとした。虹吉は、K市から帰って来た。
それからおふくろが死んだ。おふくろは、町にいる虹吉のことを、巡査が戸籍調べの振りをして、ちょいちょい訊きに来るのを気に病んでいた。巡査は、虹吉のことだけを、根掘り葉掘り訊きただした。妻はあるか、何をしているか、そして、近々、帰っては来ないか。――近々帰っては来ないか？ これだけは、いつ来ても訊くことを忘れなかった。
おふくろは、息子が泥棒でもやっているのではないか、そんな危惧をさえ抱かせられていた。
僕等は、さっぱりとした。田も、畠も、金も、係累もなくなってしまった。すきなところへとんで行けた。すきな

事をやることが出来た。
トシエの親爺の伊三郎の所有地は、蓬(よもぎ)や、秣草(まきぐさ)や、苫茅(とまがや)が生い茂って、誰れもかえり見る者もなかった。
僕と虹吉は、親爺が眠っている傍に持って行って、おふくろの遺骸を、埋めた。秋のことである。太陽は剃刀のようにトマトの畠の上に冴えかえっていた。村の集会場の上にも、向うの、白い製薬会社と、発電所が、晴れきった空の下にくっきりと見られるS町にも、何か崩れつつあるものと、動きつつあるものとが感じられた。
僕には、兄が何をやっているか、それは分っていた。
虹吉は、おふくろを埋葬した翌日、あわただしげに村をたって行った。

(一九三〇年五月)

波のあいま

中野重治

ある日の夕方私はひどく労れて新宿の人ごみを歩いていた。暦の上ではもう秋にはいっていたが、夏の暑さは去らないばかりか、夕方になって昼の熱さがむれかえって來るように、その一夏の暑熱が一時にかえって來て、それがはげしいいきれとなって敷石という敷石から立ちのぼっていた。
私はひどく労れていた。何しろ七十分以上も市電にゆられて來たところだったから。その時刻の電車の様子は誰だって知ってるだろう。揺られて來たというのは間違ってるかもしれない。實際には揺れはしなかったのだ。手離しでつっ立っていておまけに、その最後の五分ばかりを私は、熱い入り陽を真向に受けねばならなかったが、それをその上、袖口で拭く悪い癖のためすっかり傷だらけにしてしまったチカチカする近眼鏡ごしに受けねばならなかったのだ。尤もそんなことが私の疲労の原因だったのではない。

原因は外にあった。今日の仕事の不成功が原因だったのだ。（言っておくが、不成功だったのであって失敗だったのじゃない。）

その日の午後三時きっかりに、私は、河の向う側のある町のある地点の一軒のミルクホールに腰かけていた。私は牛乳をすすりながらドーナッツを噛っていた。この二つのものは私の嫌いな食べものだ。牛乳はどうしても好きになれない。ドーナッツと來ては、あんなものおかしくって食えやしない。で、これならば、牛乳一ぱいとドーナッツ一つで相當時間持ちこたえることが出來る。そうしてその通り、私はそこに、一杯の牛乳と一個のドーナッツとでちょうど三十分間坐っていた。そうして私の待っている男は現れなかった。

私はそこを出て、そこから十分ばかり離れたもう一軒のミルクホールに行った。そこでやはり一杯の牛乳と一個のドーナッツで三十分間頑張った。そうして私の待った男はついに現れて來なかった。「おかしい。」私は考えざるを得なかった……「よくせきのことに違いない！」

一週間前のその日にも、私は、これと同じことをやっていたのだ。その日も私は、三時きっかりにそこへ行って、二軒都合一時間と一寸を空費して、色んなことを考えながら家へ帰ったのだ。

「何かあったんだろう。そのため二十分か一時間おくれたんだろう。私に逢えなくて随分困ったかもしれない。今度の時は二週間分渡す必要があるかな？　いや、こんどからは二週間分ずつを毎回渡してしかも毎週逢うことにしよう。そうすれば、ある日逢えなくてもその週の仕事に差支えることはない。また毎週逢ってるんだから情勢の変化にはいつでも応じられる……」

勿論心の底に別の心配がないのではなかった。「やられたんじゃないか？」

いずれにしても、一週間の望みがすべて今日にかかっていたのだ。その今日が又しても同じ不成功。私は前回よりももっと陰気な考えにこびりつかれねばならなかった。

ここで私は、私がなんの目的でどんな男を待ってたのかを言っておく必要がある。私の素性にも簡単にふれておかねばなるまい。

私は画かきだ。私はプロレタリア的な画かきのグループに属している。二年ばかし前まで私は、それをやってる私自身を身ぶるいなしには思い浮べ得ないインチキな仕事をやって來た。二年以來このグループに属して仕事して來てたが、私は私と同じ考えのものをこのグループの中で沢山は見出せなかった。それには私の悪い点もある。私は画かきとして正式の教育を受けていない。私は西洋美術などあまり知らぬ。また私の持ってる画かきとしての力は自分から見上げたものではない。おまけに私は、画かきは画さえかけばいいのだという昔風の考えの中で育ったため自分の考えを言葉で言うことが非常に下手だ。そのため私は、

画かきとしての芸術とこの国の労働者運動との結びつきの問題について、私の考えを仲間達にうまく説明することが出來なかった。私はしばしば私の仲間と激論したが、十中九までは私が負けた。しかし私は、たとえ私の考えが、それを一般的に通用させようとするなら間違って來るとしても、私一個に適用される限りは許されるだろうとの意見を捨てることは出來なかった。私の考えというのは、ひと口に言えば、我々の芸術上の仕事をこの国の労働者運動にピッタリくっつけねばならぬ、すなわち、わが労働者階級の日常闘争に我々の芸術の仕事が参加しなければならぬ、というのだった。

「というと、具体的にゃどうなるんだね？　具体案を出して呉れ、具体案を。」

私の意見に対して反対者はそういった。「具体案を！」それは正しい。そうして私はそれを出せなかった。どうしようがあろう？　その頃我々の眼から、すなわち街上から――その頃まで我々の眼は街頭に注がれていた――わが労働者運動の革命的本流はある程度影を消していたのだ。一年も前なら私も簡単に具体案を出せたに違いない。あの立派なポスター類が矢つぎ早に出た頃なら。私がこのグループに引き込まれて來たのもあの頃のことだった。しかし今となっては私には分らぬ。我々のグループはその後、合法主義や社会民主主義者の新手が次々と出て來たなかで共産主義的立場に立つことを明示して來た。そうしてこの頃では運動の革命的本流に通りでバッタリ出会すなんていうことは夢になってしまった。しかもそんな夢の馬鹿らしさを我々みんなが知っているのだ。具体案を要求されて私はしょげ込まざるを得なかった。我々の仲間達だって、何も私の揚げ足をとりたがったのではない。我々全体その点であがいてたのだ。若干陰気に。ただその中でも私は困っていた。私は経験上非常に狭い仕事しか出来なかった。おまけに私はその頃東洋の画につかれて、ハリ版も偽物で見たゲイウンリンだのワウ翬キ（この字が私には読めなかった）だのを夢にまで見た。私はそういう美しい伝統を私の考え通りの仕事のなかで生かしたいと願った。願ったばかりでなく、当時の私の考えによれば、私自身の芸術を伸ばして行くためにも、どうしても、どんな小仕事でもいいから直接そこに結びついて行く外はなかった。それに成功するなら私は、私の考えの正しいことを仕事の上で示せるばかりでなく、私の芸術そのものを伸ばしても行ける。それが駄目なら、私の芸術そのものが死なねばならぬのだ。

私は私の考えがすべて正しかったとは思わない。しかしあがきにあがいた揚句私は救われた。

ある日私は見知らぬ一人の労働者の訪問を受けたが、彼は私の先輩（かつて私を、今私の属してるグループにはいるよう手引きして呉れた男）のつけ手紙を持ってやって来た。

「この人は私の知人也。君の画の方の意見を聞きたいそう

だから話し合って呉れ。」
　私の先輩のこうした意味の紹介状は一通りならず私をまごつかせた。
「手紙に書いてあったと思いますが、画の方の話をききたいと思って来たのですよ。」そこで言葉を切って彼は私の顔を見上げたが、私はみるみるまっ赤になった。それは彼も見ていたに違いない。「それで、我々の方であなたの意見をどう理解してるか、そいつを聞いて貰いたいと思うんですが……」
「は、は。」
　彼はそれを話し出したが、私はその時の私の驚きを言い表わすことが出来ない。彼は私の考えをすっかり知っていたばかりか、私の考えを私以上にはっきり知っていて、それを一種独特の言いまわしで私の前に並べて見せた。何と譬えていいか？　あたかも私は、エンマ大王庁の浄ハリの前に吊るし上げられた哀れな罪人みたいなものだった。私自身にぼんやりとしていたものがそこにアリアリと映し出されて、私は一種の戦慄の念をさえ覚えて来た。おまけに私は、私の考えがそこに理路整然と展開されるのにつれて、それが必ずしも全然正しくはないことに気づかざるを得なかった。今更それについて私自身何か言うことは出来ず、私はますますまごついたのだが、それをやはり彼が見ていたのだろう。
「とするとこれや、全部の話にはならないということになりゃしませんかね？」そう言って、彼はニッコリと笑ったが、そのため私はますますまごついた。
「そうです。そうです。」と私はせきこんで言った、「そりゃ全然正しいとは言えません。僕はただ……。」
「分ってます。しかしですね、もしあなたのやりたい仕事が条件通り与えられたとしたら、あなたはそれをやって呉れますか？」
　勿論、いくら私でも一ぺんに理解した。その男はあとで人をよこすと言って帰って行ったが、私はすっかり昂奮して、外から帰って来た私の姉を不思議がらせて、それに対して私が問題にもしなかったため彼女を怒らしたほどだった。
　私は、彼があとから寄越すといって行った男の来るのを熱っぽくしゃがみ込んで待っていた。それがとうとう一週間目にやって来た。私の以外だったことに、それがまだ十八九の色の白い少年で、始終ニコニコしながら小声で物を言って、その上その言葉に、隠すに隠されぬ私の生れ故郷の訛りがあったではないか？　よっぽど訊いてみようかと思ったが勿論訊きはしなかった。しかし私は、恐らく偶然のそんなことにさえもひどく感動した。少年は、それから定期的にやるべき私の仕事を指定して、それを一週間後の日の何時にどこへ持って来るかを言いおいて帰って行った。こうして私は、その後毎週、この国訛りのある少年とそれぞれの場所で逢った。私は日に日に生き生きとして来

る私自身を感じた。その少年に逢いに行く時に、私の心は、愉快とも苦痛とも知れぬ一種のうずきにふくれ上った。一週一回で一カ月四回、半年続くとしても三十回近くの仕事が出来る。進め（マーチ・オン）！

それがバッタリと駄目になったのだ。前週の時には何かの手違いだと思えた。しかし二回続いてもまだそれを何かの手違いと思うことは出来ない。そうして手違いでなければ大抵がきまっている。

私は西洋の昔噺にある煙突掃除人の靴下のほぐし糸の話を思い出した。それをたぐって行きさえすれば丈夫な細引がつかめたのだ。それが指さきで摘んだ瞬間に消えちゃった。今や私はあの少年を探すことが出来ない。私に出来ることはただ待つことだけだ。

仕事のこういった不成功がなぜこう人を労らせるのか私は知らない。私は非常につかれて、そのためこのむし暑い夕方に何がなし快活に流れているそこの人ごみに自分でも不愉快な反感を持たずには居られなかった。

長い間の癖で、その日も私は、例の終点際の飴屋の飴切作業を見物した。今日は兄弟が三人揃いでいたが、大マナ板の上に彼等が、庖刀の尻で合の手を入れながらころがしている驚くべく賑やかな調子も、いつものように私を快活にしないで却って陰欝にした。腕の達者な職人特有のその傲慢なしかめ面を見ていると、私は再び私自身の位置を思い出し、彼等の不動の飴切り作業に——馬鹿げた話ながら——私の芸術上の仕事の浮動性を対置して暗い気持にならずには居られなかった。「フン！」人が軽蔑をあらわす仕草で以て私は我にもあらずため息をついた。

それから二三日たったある日、私は再びじめじめした気持で家に坐っていた。私の横には姉がやはりじめじめした蒼い顔をして坐っていた。私達は、彼女の胎（はら）の中の子供について二度目の喧嘩をしたところだった。

私がその胎児を始末してしまえと言ったに対して姉はいやだと言い張った。私が色々事情を説明して聞かせる間彼女は黙って聞いていたが、では私の言うようにするかというと絶対にいやだと言うのだった。なぜいやなのかその理由については彼女は一言も口に出さなかった。

勿論私は、世間でててなし児というところのものをこさえて来たことに対して姉を非難しようなどとは毛頭考えていなかった。それどころか、二十九になる今日まで一回の結婚すら出来ずに来たような彼女が、この年になって子供をこさえたということに対しては褒め言葉の一つもあびせてやりたいくらいだったのだ。実際に彼女がそれをこの世に生み落してそうして、それを育てて行くことを考えると、褒め言葉をあびせる代りにそれの始末を提議せずにはいられなかった。そうして、かくも聞きわけのないこの女を憎々しい眼つきで睨めつけざるを得なかったのだ。

「どうしてもいやかね？」

「いや。」
しかしまた私は、彼女のあわれさにも思い及ばずにはいられなかった。
むかし彼女は田舎の村で小学校の教師をやっていた。あまり先生らしくないという点で無上に生徒に親しまれた彼女は、その同じ理由で校長からひどく虐待された。ある日彼女は組の生徒をつれて散歩に出かけた。校門を出るが早いかまっ先に唱い出したのが彼女であったほど彼女ははしゃいで居た。一隊は野原のまん中に行って休んだがその近所に立派な西瓜畑が並んでいた。腕白な子供達が管をつくってそれを西瓜の肉に挿し込んで中味を吸う悪戯をやり始めた。誰か生徒がそれを先生に言いつけた。先生たる彼女がやって来た。だがその先生自身が忽ち夢中になって管を吸い始めたのを見ると、一旦逃げた生徒は再び戻って来て、そこで先生を中心にしてみんな大喜びで西瓜の汁を吸った。そのことが無邪気な生徒の口から洩れて（生徒達は彼等の喜びを分け合うためにそれを口走ったのだろう。）校長の耳にはいった。そうしてそれが彼女の首を切られる直接の動機となったのだ。その話を人から聞いた時、まだ小さかった私は恥しくて顔を赤くしたものだったが、そのこと自身を後に私は恥じずにはいられなかった。
それにも増して私の辛かったのがこの春の事件だった。
この春の始め頃彼女は甲府のカフェで女給をしていた。ある日私のところへ甲府の警察から彼女が怪我をしたから引取りに来いという電報が来た。
「やったな！　ああ、ああ、いっそうまく死んじまって呉れれゃよかったのに。怪我をしてるというのだからやり損なったのだろう。足だろうか、手だろうか？　咽喉の傷位ですめばいいが。カタワにもなって生き残って呉れたんだとすると……男の方が死んで女だけ助かったなんぞとなったら……」
旅費をつくって（その時私は往復分と彼女の片道分とをつくらなければならなかった。）行って見ると、彼女は心中をしたのではなくて自殺をし損ねたのだった。警察の話によると次のようなことだった。
ある晩彼女がお客と喧嘩をした。その詳しいことは分らないが、最後にお客が、階段の上から草履で彼女の頬をさわった。すると彼女はまっ蒼になってその男に飛びかかって行った。彼女の剣幕に恐れてお客は二階へ逃げのびたのだが、彼女はビール瓶を提げて、それを追って行って、それで以てお客の頭をしたたかになぐりつけた。すると今度は男の方が逆に気狂いのように狂暴になって、そこは男だから今度は彼女の方がメチャメチャになぐられてしまった。その夜はそれですんだが、彼女が頻りに、「こんなに侮辱されてまで生きていたくない。」という意味のことを口走るので、その店では警戒していた。と、その翌々日彼女の姿が見えなくなった。すぐ警察に頼んで、何とかいう滝の近辺で危いところを捕えたというのだった。

彼女はもう三日以上も警察に保護されていたが、果して昻奮が退いているかどうか私には分らなかったし、警察の者のいる前でもあり、私はただ、「まだ死ぬ気があるのか?」ときいて見た。
「いま、もう死のうとは思わない。」と彼女は答えた。
警察のものが非常に私を丁寧に取り扱ったことに色んな厭なことも考えられたが、そこでそんなことにふれたくもなかったし、とに角私は姉を連れて帰って来た。そうしてその姉が――世界でたった一人の私の身内のもの――が、何時の間にやら身ごもっていたのだ。
「だって手ぶらで産むってことも出来ないじゃないか? 育てるということも無論問題だが、第一俺にゃお産の金なんぞ出来やしないぜ。」
「お産の金をこさえて頂戴なんて あたしがいつか言って?」
「言やしないさ。しかし一体どうするんだね?」
「どうするもこうするも……一体なぜあたしがあんたにそんなことを訊かれなきゃならないの?」
彼女はもうヒステリックに泣き声を立てはじめた。
「あたしは子供が出来たのだからただそれを生むだけだ。そのために費用がかかるかどうかなんてことはわたしは知らない。あんた方だってそうだろう……」彼女はいつの間にか私達の運動のことまで引き合いに出して来た。「あんた方だってそうだろう? わたしには理窟は分らないけれど、とに角そうする外に方法がないからあんた方のやってるようなことをやるのだろう? そうして、そのために監獄に入れられたり病気になって死んだりする事実の方はちょっとも勘定に入れてないではないか? わたしだって同じことだ。あんたが金を出して呉れるというのなら貰ってもいい。しかしわたしから頼むのではない。」そうして再び泣き声になって、「今までだってわたしは金銭のことであんたに頼ったことは一度もない。いつかなぞはわたしが、あんたがあんまりせがむものだから、あれはあの時店に出るのに必要だったのだけれど、その着物を質に入れて北斎を買って上げたではないか? 何もそのお礼をしてほしいというのではない。そういうあんたから金のことなぞ言われるのが口惜しいのだ。」
こういう意味のことを彼女は、珍しくまくし立てた。調子はヒステリックだったが、とに角筋が通ってるので私は黙って聞いていた。
「だから心配しないで頂戴。ね? あたしのことはあたしがしますから……あんた達だってしきりに言うじゃないの……」と言って彼女はニヤリと笑った、「独自的活動とかなんとか……」
そのうす笑いと最後のひと言とが、神妙に聞いていた私の気持をすっかりかき乱してしまった。
私は、彼女のあわれな境涯も、そういうことまで口走らねばならなかったのかも知れない話の道行きもすっかり忘

れて、そうした下司ばった言い方に対して無限のさげすみで彼女を睨みつけた。私は肚の底で思うさまの侮辱で言った、「何が独自的活動だ、馬鹿野郎め！　そのからだで稼ぐがいいや……」

「居るかね？」

私達は（姉もたしかにそうだった。）ホッとした。それは私達姉弟のよく知っている山口だった。

「あのね……」ちょこまかとした話の後で彼は幾分改まった調子で切り出した。そうして如何にも切り出したという恰好でちろりと姉の方を見た。姉はお茶をいれに立ったところだった。「俺ね、あるところでちょっとした挿絵を一枚見たんだがね。カットだ。こんな……」彼はあり合わせの紙の上へ無恰好な絵をかき始めたが、私はすぐそれが、暫く前に私がある刊行物に入れた挿絵であることに気づいたと同時に、なぜ彼が面倒くさい遠慮しいしいの調子を使ってるかを一ぺんに了解した。

「俺だよ。」と私は言った。

「やっぱしね……」それで安心したというような顔をして見せてから彼は、今度は、専門以外のことに口出しする時の彼特有のためらいがちな調子で私の顔を覗きこんだ、「それであれゃ何かい、これゃ臆測なんだがね、あれで君は君のテクニックを、テクニックというのか何だか知らないが、意識的に変えたのかね？　つまりわざと……」

「そうなんだよ。」それをかいたのが私だと分らないためにした全努力の無駄だったことを感じながら私は答えた、「字はギッチョでかいた……」

「フーム。」

しばらく私達は黙っていたが、私はやはり一種不安の念を覚えて来た。

「やっぱし分るかね？」と私は訊いた。

「そりゃ分るさ。そこでだね……」そこへ姉が薬罐を提げて来たので彼はもう一度そっちの方をちろりと眺めた。「俺に分ったとすれば外のものにも分ったと思わなけりゃならないだろう？　それゃそう考えなけゃならないよ。そうすれゃ、向うはあんな具合に追求してるんだから挿絵一枚と言ってるわけに行かないだろうじゃないか？　ガラリと変える必要があると思うな……」

「しかし俺ゃずいぶんとやって見たんだぜ。」

「駄目だよ。」と彼は、幾分せきこんだ声高な調子で言った。「いいかい？　あれをかいたのが君だということが分ってるだけじゃないんだぜ。君が意識的に手法を変えながらあれをかいたってことが分ってるんだよ。つまり二重なんだ。性質を承知の上でやったということになるんだ……」

「しかしね……」

私は、人それぞれの持ってる手法というものの、削っても削っても削り落し切れない頑固さについて思い考えざるを得なかった。

「そりゃあね」そうして彼は、私が心中に考えていたことを言葉までそっくりに私に言った、「人それぞれの持ってる手法という奴は頑固なものさ……」

　彼自身もそういう思い当るふしを持ってたのかも知れない。そう言った彼の言葉の調子は、彼がほんの時たまにやるあの厚ぼったい掌を私の肩に置いた時と同じような作用を私の心に及ぼした。

「実はね……」あやうく私は、私の行き悩んでいる絵ビラの行方について彼に訴えかけるところだった。

「しかし何だよ」と彼は、彼持ち前の元気な、人を勇気づける調子に帰りながら続けた、「そういう条件にも応じて行くところに俺たちの技法の発展があるんじゃないかな？　所詮なまやさしい仕事じゃないよ。ふん、ところでね……」何か不愉快な考えを打ち消そうとするようにがぶがぶと飲み干した茶碗を下に置きながら彼は、「別の話だよ。」とことわって続けた。「ゆんべ新宿でへんな奴に逢ってね……ほら、安達さ。この頃小此木書房というケチな出版屋に勤めてるんだよ……それがあすこの人ごみの中でバッタリ出合ったと思ったら、いきなり俺の手なんぞ握りやがってね、『おかしいね、君が無事でいるとは不思議だねえ！』だとさ。それを何べんとなく言うんだよ。俺の顔を覗いちゃあおかしいおかしいって……あれゃ元は新聞なんぞ読んでてね。それも俺がすすめて読ましたのさ。こないだ俺や、ほら新聞二百号記念に日下部の書いた詩があったろう？　うん、そう悪くなかったさ……あれを思い出したんだが、あれを見ると実際あの頃の運動がすっかり反映してるじゃないか？　つまりあの頃の俺達はあんな具合に、大事なエネルギーを通りの敷石へもって行ってすっかり流しちゃったんだからね。それがつまりゆうべになって『おかしいねえ！』となって現われたのさ。そんな奴に限って、『これでもどちらかといえば共産党に賛成の方だ。』なんて顔つきをするんだから、あんな人ごみの中でやばいったらありゃしない。」

　私達は顔を見合わしてにが笑いした。

「おかしいねえ、おかしいねえ、――」そのいやな言葉を口真似していた山口はやがて腰を上げた。

「それじゃ、おれ、今日は帰る。姉さんに……」彼は見まわしたが姉はどこか見えなかった、「姉さんによろしく。」

　玄関（？）へ送って出てそこで彼が紐を結んでいる靴を見ると私は驚いた。

「山口道玄はすばらしい靴をはいてるんだね！」

「悪い靴なんぞ……」と彼はかがみこんだまま快活な声をあげた、「はけるかってんだよ。」

　そうして靴をはいてしまってからだを起しながら、「とに角無理にもがらりと変えるんだな。」ともう一ぺん言って、それから埃のついた掌をパンパンと叩きながら、心持ち低い隠されぬ陰気な調子でつけ加えた、「またボツボツ来てるらしいよ。」

「そうか……」
生き生きと盛り上って来る生甲斐の感じ、そうかと思えば言訳の出来ない種類の不愉快、それからそれへと引っかかって行くおりのような種類の不安、「見ろ！」と言ってやりたい痛快な話、そうしてそういったものの連続を風のように横切って行く周期的な逮捕とガサと……姉との喧嘩からの不愉快さは忘れることの出来た私を、我々の仕事場全体を覆っている空気のたたずまい、そこからかもし出されて来る名状しがたい一種のあせりと憂欝とが執念く捕えて、そこを逃げ出せる日が何時来るのやら予想も出来ないという考えが一層私を押しつけた。

それから一週間ばかりのあとのある日の夜、もう夜の一時をすこしまわったぐらいの時刻だったが、絵ビラの画稿を渡すべき紡績の少年からは何の消息もなし、姉との喧嘩はその後一度もやってないだけに面白くなく、二人とも床の中にはいってはいたものの、姉もどうやら眠れないでいるように私には思われた。

「こんな馬鹿姉を連具してどうするというのだろう？　こんな女をかついで行かねばならぬ義務が俺にあるのだろうか？　こんな女が一体我々のために何が出来るのだろう？　こんな女は道べたへ置いて行く方がいいのじゃないか？　最悪の場合でも……」と私は考えた、「淫売婦が一人ふえるだけじゃないか？　淫売婦が一人ふえることは大したことじゃない。つまり大して悪いことじゃない。だが、姉と一しょにいるために俺の仕事に少しでも邪魔がはいるとすれば……勿論今までのところ別に邪魔になってやしない。しかしそのために多かれ少かれ気持の上でも金銭の上でもわずらいにはなっている。姉は今までのところ自分のことは自分でやって来たし、今後もやって行くだろうが、だからといって一しょに家を持ってるということが大したわずらいなのだ。家を持っている……何てこった？　俺達は仕事の道具だけ持って、かるがるとしてるのがいいのだ。その日ぐらしの生活を……生活じゃない、活計だ……それを一日一日引きのばすために心にもないインチキ仕事をするなんて。ひとつ馬鹿男をめっけて、そいつにピチンと嵌めこんでやろう、ボタンみたいに！　……そうして俺は俺でそおっと身を引くさ。」

見ると姉は眠りかけたらしく、かすかな寝息は私の耳にもきこえて来た、と、私はまた俄かに逆の考えに支配され始めた。

「いいや！」と私は、起き上りかねない勢いで今まで考え続けて来た考え総体に対して反抗した、「一人のあわれな女を道べたに捨てて行く、それを合理化して、……ふん、馬鹿も休み休み……」

「こんばんは……」という声を聞きつけたように思って、そのため私の考え続けが中断された。

「こんばんは……」

たしかに、夜更けたあたりを憚ってる気な声がもう一度して、これも遠慮がちな玄関の戸にさわる音が聞えた。私は、彼女自身も起きあがる気はいを見せている姉の枕下を通って玄関に出て行った。

「誰ですか？」私のスイッチをひねった電燈の光では、暗い外にガラス戸越しに立っているらしい男の顔がはっきりしないので私は訊ねた。さっきからの声は聞き覚えのないものでもあったし。

「ちょっと開けてくれませんか？　ちよっと、あの……」

それが、「ここで大声で名乗れないからとに角開けて中へ入れて呉れ。」と言ってるように聞えたので私は下りてカチカチと栓を外した。

「大変おそくなってすみません。僕はこれですが……」

そう言って白絣の一重を着たその男の差し出した紙切れを見ると、それは私達のグループの仕事をしている事務所の責任者から廻って来たもので、その人の用向きなども簡単に並べてあった。部屋に上って私達は、今まで寝ていた蒲団をめくり上げて坐った。起きて来た姉がボヤボヤしているので、「いいから。」と言って寝かしてから僕達は話しはじめた。

「それで、方々まわって見たんですがどこも駄目なんですよ。日記の住所は殆んど全部違ってますしね。」

「ありゃ駄目ですね……一体しかし何時ごろから切れたんです？」

「御大典からですよ。尤もそれゃ第一回目ですがね。それから四・一六……色々やって見たんですが九州だけさえどうにもならないんですからね。そのため合同の方じゃ分裂騒ぎが持ち上るし……」

「そいじゃあんたは」と私は、私達の耳にもはいっていたその分裂問題と、それが持ち上った当時北九州へ行っていた筈の私達のグループの詩人大林園次のことを思い出して訊いて見た、「大林園次に逢いましたか？」

「逢いましたよ、戸畑で。今度こっちへ来たのもその時の大林君の言葉もあったもんですからね。ナップへ行けば何とか連絡をつけてくれるだろうというんで……」

「大林はどうしてるか知ら？　その後こっちはちっとも便りがないのだけど……」

「それが、筑豊炭田にはいって行ったまでは分ってるんですがね……悪くすると」彼は私の顔を見上げた、「殺されてるかも知れない。」

「殺されてね？」

「ええ。」

又しても私に色々のことが考えられたが、これ以上しゃべっていて明日寝坊をしても、困るので寝ることにした。

「寝間着がないんですよ。」

「いや……」

しかしやはり私達はもう少し喋った、関門海峡を通って（そこを無事に通過するのがその頃は一仕事だった。）神戸

で移動警察にやられて大阪で二晩検束されて、大阪から電車で京都に出て、それから名古屋まで来てあれから中央線を乗って来たという長い道中のことを考えると、彼の望み通りのところへ連絡をつけられるかどうか自信がないだけに、一層それからそれへと話したいことと聞きたいことが折り重なって来た。九州地方特有の「セ」を「シエ」と発音する彼の言葉……そういう発音をする地方は外に関西と北陸の一部とがあったが、九州地方のはそのどっちに比べても遥かに強かった……は私に遠方を感じさせたし、そこに私と並んで闇の中に横になってる旅労れの出た彼の赤い眼は、それを掴むために彼がやって来た一本の綱と、その綱の後ろにつかまっている無数の労働者の顔とを思い出させ、それが又しても私の紡績工場の少年を私に連想させ、私は、勇気と感傷との入りまじった感情に一ぱいになってなかなかにねつかれなかった。私は心配になって、五時にまわしておいた眼覚まし時計の針をもう一ぺん確めたあとでようやっと寝入って行った。

それから幾時間位眠ったのか私には分らなかった。

「今日はあ……おい君、荒川君……ちょいと開けて呉れよう……」というような三四人入り交った声で眼の覚めた時に私は、「こんちきしょう！」と思ったと同時にそれよりもずっと大きな力で、「早いとこ来やがったな！」と思わざるを得なかった。

山口がこの間言って行った奴か、昨夜来た金丸か？　前者にしてはあいがあきすぎている。後者だとすれば？……しかし彼が来たのは昨夜の一時すぎだったじゃないか？　そうしてほんの二三時間眠ったところを叩き起されるとすれば、これゃ当分今までのようなことじゃとても追っつきゃしないぞ……それにしても金丸をどうする？　金丸をつけて来たのか、それとも俺の処へ来たのか？　俺一人なら分るとちょいと面倒くさくなるが……と、そんなことをゴチャゴチャに考え乍ら私は、玄関へ立って行く姉の後姿に「先生もお慣れなさったね。」と感傷的な眼を流して、よれよれになった一重の上に緩んだ兵児帯を締め直している金丸に大体の様子を打ち合わせようと焦った。

「それでね、こうだ……」私は先ず手元の紙の切れに電車道とその附近の道路の概略を書いて見せた。が、初めての土地で彼が逃げられるかどうか非常に心許なかったので訊いた。

「駄目だったらどうするね？」

「雑誌の読者で遊びに……」玄関でブツブツいう声とともに戸の開く音が聞えて、それが喧嘩調子にならないのを安心にも不安にも思いながら、私は、とても十分に行きそうもない金丸との打ち合わせをどうやら終え、彼が所持品を手際よく始末した場所を一通り見廻わして急いで玄関に出て行った。

「何だい？」

「またすまないがね……」見知り越しの主任が常例の慣れ慣れしい調子で笑顔を見せながら言った。
「ちょいと来て呉れって何だよ？」
私が出て来るのと入れ違いに引っ込んで行った姉と金丸との打ち合わせを気づかいながら私は、玄関の内と外とに立っている男達の頭数を数えて見た。
「横手へまわったのが二人で六人か？」
そんなことを考えながら私は自分の考えが咄嗟にきまらないので、相手が何を言ってるのやら上の空で返事していた。が、どうかすると、主任をさし置いて忠義顔に上って来ようとする他の連中に靴をぬがせない算段をしなければならなかった。
「とに角顔を洗うからね。」
そう言った私に自信はなかったのだが、主任が「ああ、どうぞ。」と言ったので私はすぐ流しへ下りた。ギシギシポンプを押していると、私は流しへ下り姉は向うへ引込み、玄関の間が空になったので彼等は上りにくいらしかった。
「どうだね、お定さん？」
姉が出て来たらしく、刑事連がいやがらせに慣用の慣れ慣れしい口を利いてるのを聞きながら、私は、まあ行って見るより外はなかろうと考えて見た。
「飯は食わないで来て呉れよ。何なら御馳走してもいいからね……」
「ははは……そうだ。」
そういう彼等の自問自答をききながら私達は着物を着かえた。
「君や誰だね？」私はハッとした。少しでも長くするために鏡の前でネクタイを結んでいる中に、とうとう一人の奴が上って来て金丸を見つけたのだった。
「その人あ俺の知合の人でね……」
「やっぱし来て貰いたいな。」
「どうしても行かなくちゃいけないかね？」
「君、君……」と主任が口を入れた、「そんなこと分りきってるんだから早くやって呉れよ。」
「分ったよ。」私と金丸とは玄関へ下りかけた。
「じゃ行こう。」
「いや、君。」と、その時主任が私のそばへ寄って来た、「君はいいんだ。」
「俺はいい？　行かなくていいってのかい？」
「そうなんだ。君はいいんだ。お定さんとこの人だけでいいんだ。」
「お定さんて、家の姉貴はなにも……」
「いや、そうなんだよ。」見ると主任以外のもの達は、何か私が主任と口争いでもすると考えて、彼等の肉体的な癖にまでなってる癖でグルリと私の前へやって来た。「君は来なくてもいいんだ。そういう話なんでね。」

「来て貰ったっていいさ……」という声が聞えたが私は不安になった。姉の身元は彼等も何時の間にか知っていて、度々の検束でも彼女はいつも留守居として残っていた。一緒に引っぱられた時も彼女だけは一人先に返されたのだ。実際、私を残して姉を持って行くということは、今日の検束が何か特別の意味を持ってることを示すものとしか私には考えようがなかった。

「そいじゃそうするか……」私達は顔を見合わしたがそういうより外にはなかった。そうして彼等は、一しきり愛想のいいざわめきを残して金丸と姉とを連れて行った。

「チェ……」

着換えた洋服のままで私は部屋のなかにころがったが、さてどうしたものか、今日の一日をどんな順序で廻って見るか、どこへ当りをつけていいか、どの辺を目がけて今日の検束が来たのか、考えても考えても見当がつかず、何かの加減で金丸がしくじりはしまいか、姉の奴がつまらぬことを言いやしまいか、姉が姙娠していることが分りやしまいか、分ったらどんな嘲弄を受けねばならないだろう、それにしても……紡績の少年工といい、山口の残して行った話といい、今日の今しがたのことといい、この波の引いて行くのは何時なのか、俺達を明日の朝待ってるものは何なのか、上った浪頭は落ちなけゃならないが……と、それからそれへと考えて行くと、私はもう一ぺん、山口の言って行った「がらりと変えるのだ。しょせん生やさしい道じゃないよ。」という言葉を思い出して、それが単に私の画の仕事の上だけのことでないことを一つの宏大な構図として感じ始めていた。

（一九三〇年五月）

ガス！

橋本英吉

一

二本のロープがトロをくっつけて上下している山浦坑内の幹線車道だ。
裸の強そうな男が四人、支柱を入れ替えている。五月だが坑内は真夏の暑さだ。男達の背中に脂汗が流れている。梁の上から男がどなる。
「四尺位な坑木を上げてくれ！」
彼等はトロの上下する間を走る。薄暗くガスの匂いがする。風の廻りが悪く、炭塵が舞っている。
「交代！」
梁の上の男は降りて来る。二十尺位な高さに天井が抜け落ちて、大きな空洞が出来て居るのだ。そこを支柱で固めるのだが、ガスが一っぱいに溜っている。だから三十分も梁の上で働くと頭が痛くなる。いきが苦しくなる。顔から腕から股から、湯のように汗が流れる。二人が降りると他の二人があがって行く。坑木が天井にぶっつかると、ガラガラと岩片が崩れ落ちる。
「あかりを高くあげるとあぶねエぞ！」
下から注意する。天井に釣した安全燈の焔は、次第に長く青くなっていた。ガスが燃えているのだった。
「おい！　あかりを細くしろ！」
梁の上では、仕事に気を取られている。いつ天井が崩れ落ちるか分らない。彼等は、一寸だって気をゆるせない程危険な位置にいるのだった。
「こりゃ、やり切れないぞ。少し煽いで見ようか？」
竹で編んだエブで、少しばかり空気を掻き廻した。だがその位ではどこからともなくやって来るガスを、追払うことは出来なかった。然し男達はそういう仕事には馴れていた。
例えば、今、梁の上に働いている立派な若者だ。彼はスベスベするような白い皮膚の処々から血が流れていた。それは時々彼の皮膚をかすめて落ちる岩片のかすり傷だ。然し、それを拭こうともしなければ、痛いとも言わない。丁度、我々が汽車の窓から首を出して、炭塵が眼に飛び込んだと同様だ。殊更人に話す程のことではないのだ。汗が傷口にしみ、血は流されてしまう。若者は大工のように梁の上で、大きな坑木を積み重ねている。彼は時々、頭上に突き出た、黒い大きな岩に眼をつける。そ奴は今にも彼の身

体を打ち砕きそうに見えるのだ。瞬間、彼は坑木や石炭の破片と共に車道のロープの下に投げ出され、苦しい呻き声を上げる自分の醜い姿を想像する。が、誰でも危険に臨んだ時に起る「なに、俺は助かる。死ぬようなことはない」という自信で、凡てを忘れることが出来た。

「交代しようか?」

下から仲間が言った。が、彼は直ぐ降りなかった。やはり頭も痛くなるし、胸も苦しかった。けれど彼は「仲間の中で自分が一番仕事が早い」という誰もが持っている単純なも一つの自信があった。だから降りないで、ドンドン坑木を上げるように命令した。下では、トロがノロノロと上ったり下ったりしていた。乾いた炭塵が安全燈の光で霧のように舞ってるのが見えた。

梁の上の若者は仕事が進むので愉快だった。小さな声で唄をうたった。唄をうたっている口の中に、石炭の粉が落ち込んだ。そこで唄をやめた。その時彼は、坑外の天気のことを考えた。坑口に一歩出た時に、カッと陽が射していることを考えた。愉快なことはない。身体が軽くなり疲れを忘れる程、愉快なことはない。身体が軽くなり疲れを忘れる。そして今は五月だった。冬ならば、仕事を五時に切り上げて坑外に出れば、日が暮れているのだが、今は七時までは明るいのだ。湯に入り、飯を食ってヒトエ物で遊びに出る。

「今日の天気はどうだろう?」

そう言ってみた。

「そうだな。トロが濡れてないから雨は降ってないなア」

「早くあがって、行こうか?」

上から言う。

「もうあの娘に顔を見せてもいい頃だなア。」

「待ってやがるぞ!」

きまったように、女の話だ。が、その話より話題は見付からないのだ。男の顔は和ぎ、笑い声が聞えた。梁の上の若者は黙った。そして仲間の会話から離れ、淫売婦のことを考えた。彼は三味線がうまかった。夜おそくなってから彼は三味線を持って淫売屋を冷やかしに廻る習慣があった。長い間、そうやっている中に、馴染になった女の子だ。彼に金のない時には、その女が立て替えて遊ぶ程の中だった。女は梅毒を持っていた。彼は病気を伝されて手術をした。けれども、発達した腰や、のびのびした脚やきれいな大きな眼は、相変らず彼には好きだった。彼は梁の上で、どうしても今夜会いたいと思っていた。会うためには、前借をするか三味線を質に入れるかして金を拵らえなければならない。一円はなければ困る。それ以上、足りなければ、女に出さしても……そこまで考えた時に、

「おい! ランプランプ」

下から叫んだ。両腕に坑木を抱えたまま下を見た。安全燈の綱の中は、青い焔で一ぱいになり、炭塵が火の粉のように燃えていた。全身は力を失って、足も手も首も動かすことは出来なかった。ただ、彼は眼だけをつぶった。すると真暗の眼底に物凄い爆音と同時に、明々と焔の輝きが射

し込んだ。仲間の叫び声が起ったが、彼はそれを聞くことは出来なかった。安全燈を中心に起った焔は、青い幕のように拡がった。焔の圧力に打たれたものは、枠もトロも人間も焦げ引き裂かれた。

音響――それは炭層をふるわせた。支柱も小枝のように押し曲げた。凹みや梁の上や支柱の蔭に積もっていた炭塵は、坑道一めんに散り、青い焔に捲き込まれ、大きな火焔となって坑道を伝って行った。火焔の急流だ。ドロドロに溶けた鉄のように、馬も人も木も石炭も、重々しい脂肪の臭いを発散しながら焼けて行った。奔流は天井を舐めながら突進した。鉄の防風壁と、清い空気以外には、之をせき止める何物もないのだ。焔は幹線車道を一直線に下った。そして凡ゆる坑道から坑夫達のいる採掘場に襲いかかった。ガスのないところでは炭塵に点火した。炭塵は火の魂をなして、溜っているガスの中に流れ込み、爆発さした。焔は限りない長い絹地の布の様にはためきの音を立てて延びた。

坑夫は口をあけ、白い歯をかんだまま倒れた。牛のように強い肩を持った男は、倒れかかって来た枠を、ガッシリと両手で支えたまま窒息した。広い胸の毛の間に光っていた汗は、長い間そこから消えなかった。その横には塊炭で頭を打たれた彼の運搬夫が、唸き声をあげていた。

二つの盛りあがった乳房が、地面に乳首をつけていた。二つの肉体は焼けてはいなかった。だが、夫の眼は空にあいたままであり、手に鶴嘴の柄があった。女の押しつけられた乳房からは白い汁が流れていた。七時間前までは、彼女の赤ん坊が、そこに唇をつけて笑っていた。七時間の間に彼女の乳房は乳で一ぱいになっていたのだ。若し、ガスが恐ろしい勢いで母の命を奪って行かなかったら、彼女は坑口から湯にも行かず、真直ぐに託児所に行って、汚れた乳首を子供に含ませることが出来るのだった。二人は何処にも傷はなかった。まだ生きていて、一休みしているようにも見えた。

二

凡ての坑夫達が予想していたことだ。冬から春にかけて起るガス爆発――然し誰もが自分や家族がやられるとは思わなかった。やられるかも知れないが、大概やられないだろう――と彼等は、皆、過去の色々な危険から逃れた経験でその考えを割り出した。

ケージは全速力で運転していた。坑夫は溢れ、脚や手が綱の外まではみ出ていた。石炭を積むところにも乗っていた。或る者は笑いながら、或る者は青白くなり、或る者は腕から血を流していた。それ等は、押し寄せた家族達の間に忽ち呑みこまれた。

「まア、よかった。よかった。よかった！」

「俺のうちの者は見なかったか？」

心配や喜びや絶望の喚き声が狂った。巡査、役人、青年団等がその間で揉まれていた。彼等は怒り、そしてエリガミを摑んで引き倒した。又、一方では女の尻を叩いて言った。
「亭主はいくらでもある。直ぐ見つかるぞ。心配するな！」
「馬鹿野郎！　人が心配している時に……」
女は人混みの中に逃げこんだ。掲示を見て安心した者達は、掲示板の前で何時までも話し合っていた。
爆発個所
二卸の中、十片、十一片、十四片、十五片、
右ノ外ハ絶対ニ安全デスカラ、少シモ心配ハ有リマセン。
又、爆発個所モ決死隊ガ救助ニ向ッテイマスカラ、家ニ帰ッテ知ラセノアルマデ待ッテイテ下サイ。
然し群衆は減らなかった。猫や犬まで群衆の中で鳴き声をあげた。陽が藥のように乱れた女の髪の上に照り、強い風が吹いた。白粉や汗やコールタールの臭いがした。
「また、人間を束にして殺しやがった。…………こりゃ一体、どうしたんだ……。」
胸をあけて、帯は尻まで下っている。開いた着物の下で褌が垂れている。酒気がムッと人々の鼻を打った。此奴は今まで家で酒を飲んでいたのだろう。
町や農村から駆けつけた人々は、山の入口でせき止められていた。前垂れを掛けた商人、頰かむりをした百姓、馬方達だ。彼等の家族の誰かが炭坑で働いてるのだった。そしてが、二三人の守衛は、どうしても入れなかった。
「何でもないのだ。三四人位しか怪我をした者はない。」
と説明していた。
夕方になると風は益々強く、じっと立っている人々に埃を浴せた。やがて夜になり、入坑していた人々の安否も判ってしまうと人々は散って行った。
そして山腹にある山全体を、夜の重々しい空気で包んでしまった。煙突からは絶えることない煙が風に散った。倉庫の荷物は運び出され、繃帯に全身を包まれた死体がそのあとに並んだ。枕下には線香と花が置かれた。二十四枚の名札は木の香いを立て、電光で墨の痕が鮮やかに光った。
坑長や係長は、立派な着物を着て座布団の上に座っていた。時々、葬儀委員の差出した徳利から、冷酒を呑み、昆布の巻いたのをつまんだ。次長が言った。
「坑長さん。こういう場合に一つ徹夜しましょうか？」
「よかろう。」
坑長が手を拍いて委員を呼んだ。すると立派な碁盤が運ばれた。その横には死人の家族達がいた。赤ん坊は裂くような声で泣いた。子供は眠っていた。赤ん坊の泣き声は、通夜の人々の哀感をそそった。静かなすすり泣きの中で、石の音が冴えた。
十一時の最後の列車で、遠くから人々がやって来た。ガ

ス爆発の噂はどうして伝わったか誰も知らなかった。が、それは空気のように方々の炭坑や町や農村に入りこんだのだった。

駅を出ると直ぐ腰にさげた手拭で頰被りをした男がいた。丁度、農村の若者が娘に会って帰る時のような格好だ。手拭で隠した顔の半面は、青い痣が粉のように出来ていた。然し明るいところで見れば、青い斑点は痣ではなくダイナマイトで吹かれ、石炭の粉が食い込んだ痕であることが分る。尚その傷あとは、顔の他の半面から首すじにも少しずつあるのも発見できるのだ。年は四十位に見えるのだが、それも痣のためで実際は三十を少し過ぎたばかりだ。その男の伴れは、二十歳位の色の黒い、髪の伸びた青年だ。二人とも筒袖で、手の荒れていることや、日に焼けているところから、此の辺の百姓であることが想像出来るのだった。

三

半坪の土間には下駄やエブや鶴嘴の柄等が散っている。四畳半の納屋だ。火のない七輪に土瓶がある。其の横でガッシリした男が裸のままでキセルで煙草を吸っている。両肩にはコブシのような担ぎダコが飛び出している。腕や胸や股は肉の塊でふくれゴツゴツしている。納屋の主人、石原作次郎だ。キセルの灰を掌に吹き出してコロがしながら新しいのに火をつける。十燭の電燈の下には、ズラリと三人の子供が寝ている。その枕元には作次郎の妻が樹の株の上で、麻裏草履の鼻緒を叩いている。

「煙草ばかり喫んでいねエで、手伝ったらどうだね？」

妻は背にいる蚤をとるついでに顔をあげ、夫に話しかける。が夫は、それが自分に関係のない事のように黙りこんで、考えつづけている。妻もそれ以上、話しかけずに内職の麻裏草履の緒たてに気を奪われるのだった。

「律義者の子沢山」で、二人の年を併せても五十そこその年数だが、三人の子供の親達だ。ただ彼は必ずしも律義一遍ではなかった。とはいえ、内職をしてまで、子供達に不自由をさせたくない親としての愛情も持ち合わせているのだ。

「二御(はし)はガス予防をやってねエんだ……」

作が、急にそんなことを言い出した。二御はガス爆発の現場だ。

「うん……」

妻は眠くなっていたので、いい話相手だと直ぐに返事をした。

「あすこは他よりよけい乾燥してるんだ。水管で撒水するか、火山灰を撒いて炭塵を圧えるかしなけりゃならねエ処だよ。それを、お上から検査に来た時だけしかやらない。いつでも予防をやっとけば、ガス爆発は、ホンノ一部分で済むんだ。」

「うん、そうかね。」
妻は眠りかけた。夫は話題を代えるべく暫く考えていた。夫の坊主頭が妻の投げ出した足の先にころがった。が妻は知らん顔をしていた。夫のしようとすることを期待しながら――
「死んだ男の色女が事務所で泣いていたよ。町の料理屋の女だ。白粉を塗った顔が涙で汚れていた。酒に酔っていたものだから、だらしがねエ、誰がなだめても泣きやまねエのだ。一寸いい女だったなア、右腕の白いふっくらとしたところに梅の入墨があった。酒の臭いをプンプンさせやがって、俺の亭主を戻してくれ、手めエ達はヒゲを生して洋服を着てやがるのがダテでねエなら、俺の亭主を生き返らせろ！　俺とあの人の仲を知るめエ、手めエ達は商売女がどんなもんか尚更知るめエ、あの男と俺は証文まで取り代してあるんだ。此処に持ってるから、見たけりゃ見せてやる！　女はそう言って、何か汚ねエ紙ッ切れを出しやがるんだ。俺は夫婦の証文たア始めて見た。血がべっとりとくっついているんだ。血判て奴だろう。……俺もそんなしっかりした女に思われて見てエものだなア。」
「フン、何言っているんだ。その肩の上に出ッ張ってるタン瘤と相談してからだよ。」
夫は「これか」と言いながら、目の前に突き出ている妻の片足を掴んだ。妻は眼を輝かしながら、麻裏草履に紐をさしこんだ。亭主は、瞬間何か楽しい悄然に捉えられた。

生活のため疲れ、子供達に駆りたてられ、白粉も髪油も着物もない妻に、どこか生き生きしたものを感じた。母であり妻であり友でもあった彼女に、それ等と違った女性を見出した。彼は妻の肩に手をやった。妻は草履の鼻緒でその手を叩いた。が、次の瞬間に彼女は強い男の力で胴のあたりを締めつけられるのを感じた。
その時、納屋の外で足音がした。二人が気付いた時にはもう雨戸が半分開いて、頰被りを取っている男の顔が笑っているのだった。
「おい！　こりゃ悪いところに来た。」
男は然し、平気で入って来た。さっき終列車で降りた男達だった。家の者は笑いに紛らすより外なかった。
「なんだ、こんなに遅く……」
男はそれには返事もせずに、妻君に時候や一別以来の挨拶をした。それから寝ている子供の顔を覗き、やっと腰から煙草入れを抜いた。
「俺は山浦坑でガスが破裂して何百人も死んだというので急いで見舞に来たのだ。それに被害を調査するという用件もあるのだ。」
彼は此の山で働いていた。が、労働組合支部を拵えることに関係して首になった。その組合は水平社員を中心にしてはじめ組織されたために、偏見を持っていた坑夫達は、大して動かなかった。重だった者が十人ばかり首になったが、他の社員は残ったグループを中心にして、とにかく、

組合の形態をひそかに留めていた。此の男は首になると、農村に帰ってそこに根を張っている水平社と、炭坑に残っているグループとの連絡をとっていた。丑松という名前だ。四角な顔をしていた。無口で文字も少ししか読めない。だから理窟も言えない。が、正しい意見と、悪い意見とを見分ける眼を持っている。この眼こそは、人間の才能に依っては得られない処のものだ。例えば、一九二九年の大山を首領とするダラ幹の一派が、資本家地主に屈服して合法政党樹立の提唱をした時には、全国の左翼労農組合が動揺した。丑松の仲間も動揺した。その時長い仲間の討論の末に丑松は云ったのだ。

「俺達は今までどうり××××を支持する。少しばかり小作料を、負けてもらっても暮しはよくならない。それだけの力を、土地××の闘争にそそいだ方がいいのだ。」

丑松はこまごまとした理詰は出来ない。投げ出すように言う。だからはじめての人は、彼が感情家のように見える。然し彼はただ単に、働いている百姓であり、多くの同じく働いている百姓達の考えを卒直に取次いでいるだけだ。彼の言葉は動揺を静めた。そして今も尚彼等はプロレタリアの唯一の×を支持している。才能とは反対の正直と素朴さが、彼を光らしているのだ。

作太郎と妻は、子供を片方に押し寄せて、人の坐われるほどのゆとりを作った。それから外に出て行った。仲間を集めるのだ。二人はポカンとしていた。

「おや、おかしな物を貼ってあるなア。」

丑松と一緒に来た中上が言った。彼は組合の書記格だ。

「どこの大将の写真だろう？」

勲章を沢山胸につけ、サーベルを持っている軍人の写真だ。

「………だろうか？」

「そうじゃねエなア。そうならも少し若く痩せてるよ」

「あんな物を、はりやがって、偶像崇拝になりやがったのか。」

作太郎が帰って来た。やがて妻も帰って来た。

「集まりそうか？」

「四五人しか集らねエ。あとの奴は遊びに行ったり、入坑していたりして家にいねエんだよ。」

十二時の汽笛が鳴った。妻は七輪に石炭を起した。油煙が部屋の中に入って来た。外は静かになり、遠くの機関の音だけが響いて来る。やがて坑夫が集って来た。シャツのままの者、手拭を首に巻いた者、金メッキの眼鏡など、何れも雑然としていた。巡視に見つからないように戸を閉めきって、小さな声で話した。

「まだ会社は何も発表して居ない。だから坑夫は事件に逆上して手当のことなど考えていないのだ。俺達は今日のうちに坑夫達の注意を促し、団結しなければならぬことを宣伝する必要がある。」

中上は運動に慣れた者の口調で話した。皆は黙って下を向いていた。

「それはそうだが、俺達の今の力では何も出来ないのだ。何か始めれば首になって、此処から叩き出されるまでだ。残った坑夫達は、会社の逆宣伝に乗って、俺達を泥棒か強盗の手先のように思い込んでしまう。」

作太郎はそう言ってから、丑松の顔をチラと見た。丑松は掌で煙草の灰をころがしていた。彼はこういう話では、相手にうまく得心の行くように話せなかった。ただ

「そこをやらねばならん！」

と言ったきりだった。中上があとを接いだ。

「ビラ撒き見たような仕事は俺達の方でやる。君達は坑夫の様子を詳しく調べてくれればいい。と言ってもだね、若し坑夫が起ってストライキでもやるようになったら、首の覚悟は必要だぞ。」

中上は、小さくはあったが、強い唸るような声になっていった。

「俺達が長い間かかって戦いとった人種差別撤廃は団結の力だった。然し俺達は完全に解放されたとは言われない。俺達は『エタ』の代りに奴隷になったのだ。奴隷から抜け出るために、何百倍もの犠牲が必要なのだ。三・一五や四・一六の犠牲者のことを思えば、首になること位忍ばねばならんのだ！」

座は緊張して来た。子供の鼻がする。坑木を積み込む音が遠くから聞える。冷えた空気は油煙と煙草との臭でムンムンしはじめた。

「そうだ。」

作太郎が言った。皆は顔をあげて、同意の眼で見合った。

「俺はこう思う。明日は葬式で休みだから、知り合いの間を廻って、様子をさぐったがいいと思う。俺達はビラを撒こう。式場は山の中だから、素早く撒いたら掴まるようなことはない。」

中上は、更に細かな手筈をきめた。すると坑夫は勇気づいて来た。「何でもいいからやって見よう。」と言い出した。

「それはそうと、あの写真は誰だ！」

丑松がポカリと思い出して言った。

「俺もよく判らねェのだ。子供の奴が、どこからか持って来やがったんだ。」

「なーんだ。知らねェで貼ってとなァのん気だ。どっちにしても西洋人だなァ。」

「俺は字が読めねェからなァ。ついでに読んでくれ。」

作太郎は糊で壁に貼りつけた写真を、裏にゴツゴツした指を入れて剝がして来た。皆がそれを次々に廻わした。

「こりゃお前、ロシアの××だよ。こんなものは捨てちまエ！　胸くそが悪いぞ。子僧奴、間違えやがったんだ。」

破いて、それを捻じった。部屋の空気が混って頭が痛む

と丑松が言い出した。雨戸を少し開けると、空が青白く明けかかっていた。間もなく四時半の汽笛がなった。

四

葬場では、完全にビラが撒かれた。会葬者はビラを折って、シャツのポケットに入れた。或る者は鼻をかんだ。或る者はそのまま山の灌木の中にすててしまった。けれどもビラを撒いたという噂だけは、全山に広がった。皆、興味を持って其の話に聞き入った。坑夫の心の底に潜んでいる或る物を突いたからだ。其の或る物や性質は、千人千様だったと言える。坑夫達は然し二三日すると、恰もビラの話なんかしたこともなかったように、ケロリと忘れてしまった。少くとも外観はそう見えた。ビラには、次のようなことが書いてあった。

「諸君はガスで死んだ人達の葬式に来ている。そして諸君は友人の死を悲しむと同時に自分達の無事を喜んでいられるだろう。然し安心しては居ないだろう。いつやられるか知れないという心配があるだろう。どうしたら我々は安全にはたらけるだろうか？　諸君が炭坑で働かなければ食っていけない以上、諸君は自分の生命を守るために一致して、次の如き要求を会社にしなければならぬ。

一、風通しを完全にすること。

一、火山灰を毎日まくこと。

一、水管で、噴水させること。

一、災害に依る死傷者に対して、扶助料を倍加すること。

一、労働時間を八時間にせよ。（現在十時間——十二時間）

五

両親を失った二人の子供は、托児所にいた。四つと二つになる子供だ。彼等はいつも十二時間目に、親達の笑顔を見ることが出来るのだった。無論、子供達は父と母が灰になってしまって、共同墓地に葬られたという事実を理解することは出来なかった。彼等は泣き疲れると、ぐったりとなって、托児所の汚れた畳の上に眠った。目が覚めた時には期待していた顔がいないので、又泣くのだった。二人共声が小さくなり、痩せていった。

「十円やるから、お前のところに暫らく置いてやれ。」

事務所ではそう言って、二人の両親の住んでいた隣の納屋に預けた。そこにも一人の乳呑児がいたので、余った乳を呑ましてやった。四つになる子供は、そこに馴れ、次第に父母のことを忘れかけようとした。が、外に出て遊んでいて、家に帰った時に父母が居ないので、いつ迄も淋しがって泣いた。で、近所の誰彼が、その男の子を伴れて、町へ遊びに行ったり芝居につれて行ったりした。乳呑児は

余りだけではやはり乳が足りなかった。だから預けられた母は、それを二棟置いた向うの納屋のおかみさんの所へ連れて行った。腹が一ぱいになると微かな笑い声を立てた。手や足を動かして、抱いてる人の腹を蹴った。そしてすやすやと眠るのだった。

赤ん坊は誰からも好かれた。全山の隅から隅まで抱かれて行って乳を貰うことが出来た。坑夫のおかみさん達は、ひまな時には、その児に乳を呑ませようと、

「今日はまだ来ていませんか？」

と言って探し廻った。着物もいろいろに変り、おしめも乾いていた。十円の金はそのままにしてあった。二人とも幸福なように坑夫達に見えたのだった。

「そら向うから人気者がやって来たぞ！」

と納屋の中から女や子供が飛び出して来た。定った住所もなく、行った先に寝てしまうのだった。然し赤ん坊は弱い。乳が甲から乙という風に変って行くのはいいことではなかったらしい。赤ん坊は下痢をはじめた。と同時に頭が熱くなった。再びやせて泣き通した。そして、前の納屋に戻って来た。町の医者に行った。十円の金は忽ち無くなったので、事務所に行った。

「困ります。早くなんとか始末をして下さい。」

しかし事務所は、赤ん坊の両親の遺族に払う扶助料の中から、もう一枚の十円札を出して言った。

「十円やるから、もう暫らく預ってくれ。お前の方で何処かへやっても構わぬ。」

子供は人々の心尽しにも拘わらず、死んで行った。痩せ咽喉はかすれて泣く力もなくなっていた。坑夫は皆淋しがった。会社のやり方がよくないように思われた。そして不平が高くなったので、会社は四つになる子供をとり戻して又、十円札をつけて遠くに送ってしまった。

子供を持っている坑夫達は、不安になり出した。自分の子供の不幸が眼に見えるようだったから――

六

午前六時の汽笛の鳴るのを待っているのだ。坑口のケージの側には守衛が立っている。其の守衛の後ろに続いて四五百人もの採炭夫が、列をつくっていた。安全燈がガチャガチャ擦り合う。鶴嘴の先が衝突する。乳を呑ませている母親。煙草の吸口まで喫っている男。裸体と半裸体の行列だ。娘は糊のついた真白な手拭を被って、その下には白粉と紅。それも採掘場についたが最後汗と炭塵に消えてしまう。

六時の汽笛が、湿った朝の大気を揺がす。列は波のようにうねり、騒音は一層高くなる。一秒でも争う。先にケージに乗ろうとして押し合うのだ。押し潰され、列が崩れて横に溢れ出た者が、再び列に割り込んで来る。

坑底から一町ばかり離れた暗の中に、二つ三つ安全燈が

動いていた。ケージの着く毎に二十人位ずつ、降りて来る坑夫を人道に待ち伏せしていた。脇に紙束を抱えている。ビラだ。二十度位に傾斜した人道を、坑夫達は矢のように先を争ってかけ降りる。そこには水が流れている。岩片が足を刺すが彼等はそんなことには、お構いなしだ。

採炭夫は殆んど十二時間は坑内にいる。その中に働く時間はたった六時間か七時間だ。あとの数時間は運搬設備の不完全のために、トロを待ち合わせる時間だ。而も彼等は、トロに石炭を積みこんだ数によって賃金を払われるのだ。だから、たとえ坑内に十二時間居ようとも、運搬の故障でトロが全然来なければ一銭にもならぬのだ。それは往々にあることだ。だから、彼等はトロを待ち合わせる順番を取るために、死に物狂いで現場に急ぐのだ。

人道は一列でなければ通れない。人間の身体は暗にかくれ、光だけの点線が物凄い勢いで走るのだった。

ビラを持った人達は、洩れなく渡そうとするが、受取らない中に裂れて飛ぶ。ビラを貰うために一人が止ると、管のような坑道は塞がってしまう。

採炭夫はビックリする。かつて無いことだ。何が書いてあるか読む暇がない。然し坑内でビラを撒くという事実から、何か大きなショックを与えられ、ビラをチャンと握ったまま、トロのあるところまで駈けつけるのだ。

彼等はトロに鶴嘴やノミや弁当や水筒を放りこんでから安全燈を近づけて読みはじめる。漢字にはカナがついている。

「全坑夫諸君、諸君はおれたちが、葬式の時に渡したビラをお読みになったことと思う。そして諸君は口では言うことは出来なくても、ビラに書かれたことにサンセイのことと思う。だから此処では繰返さぬ。俺達は其後炭坑当局が犠牲の遺族や負傷者にとった態度を暴露し、俺達の断乎たる決心を表明し、併せて諸君の奮起を熱望する。

全坑夫諸君、炭坑当局は、会社の設備がわるい結果起った爆発の死者遺族に最低三十円から最高二百円の扶助料しか払っていない。これは法律の額より少ないものだ。会社は遺族を一人一人事務所に呼び出し、おどかしたりすかしたりして、扶助料をゴマかし、その上、十一人の遺族は監視つきで、他に転勤又は帰国させられた。尚、当坑山に残っている者には探偵をつけ、若し事実を坑夫仲間に洩らした場合は、放逐するとおどかしている。殊に可愛想なのは我々が今まで可愛がっていた二人の子供だ。二人の子供は規定通りならば二千円に近い扶助料を貰えるのに、子供だとばかりに侮どって、遂に三十円で一切の結末をつけてしまったのだ。赤ん坊は、彼奴等の手で殺したも同然なのだ。俺達にも子供がある。若しも俺達が死んだら、子供はどうなるだろう？　俺達は安心して働くことは到底出来ないのだ。会社の仕打ちは畜生にも劣るのだ。俺達はもう容赦することは出来なくなった。俺達の生命を守るためには、俺達自身の力より無いのだ。……」

ビラには、更に組合を拵えねばならぬことを説いていた。否、既に組合支部は出来ているから、直ぐ組合を結成しろと書いてあった。そして最後に、速刻坑内に於いては坑夫大会を開催しろ、時刻は午前七時半、場所は第一会場が、一卸左十六片コンヴェア、第二会場、三卸、左七片コンヴェア。

ビラを撒いたのは、作太郎の納屋で会合した坑夫達だった。彼等は坑内の馬納屋に送る藁の中に、ビラを隠して置いたのだった。計画の大半は成功したらしかった。仲間はまだ帰って来なかった。坑夫は六時半にならなければ入坑してしまわなかった。そして入坑が済むと、その後から役人達がソロソロ入坑して来るから、それまでに逃げてしまう手筈だった。

ところが、坑夫が入坑しきらない中に、役人の一団が降りて来るのが見えた。監督や助手は青い服を着ていたし、安全燈を持っていなかった。彼等は電池の入ったランプを帽子の上につけていた。白いピカピカ光る奴で、遠くから役人という事が分るのだ。誰か坑内から、電話をかけたのだ。

「逃げろ！　コンヴェアの大会でお目にかかろうぜ。」

各自の安全燈とビラの余りを持って散った。けれども坑内だ。どこまで逃げても結局は追い詰められるのだ。一番いい方法は大会場に逃げこむか、或いは、追手をうまくまいて坑外に逃げるかだ。然し坑外に出ることは殆んど不可能だ。きっと坑口には厳重に見張りが付いているだろうから。宣伝が利いて大会が開かれるようなら、たとえ摑っても本望だった。

彼等は、追手をまく為に、曲りくねった狭い坑道や、危険な落盤の下をくぐらねばならない。然し追手も弱っているに違いなかった。顔が見えないからだ。唯、安全燈の光と、その光に照らし出される足の格好とが、不確かながら目じるしになるだけだったから——。

坑夫はビラを握ったまま、方々に塊っていた。隣合った採掘場では行動を同じにしたかった。

「大会に行ったもんかどうだろう？」

「さア、余りひでエから行ってやりてエのだがなア、君はどう思う？　ビラに書いてあるこたア一から十まで本当だが……」

中年者は、なかなか決断がつかない。ビラはこういう坑夫を目標にして書かれたのだが。然し若い者はそうでなかった。ビラを読むと同時に走り廻った。

「おいどうする！」

「やっちまえ！　首になったって構わねエ。テントウのあるところに米の飯はつきものだ。」

そして、もう弁当箱の蓋を開けた。沢庵をポリポリ噛りながら勢いよく笑った。

「仕事をしねエのに弁当なんかいらねエ。」

向う鉢巻をし、鶴嘴を肩にかけて、ドンドンコンヴェア

の方へあがって行くのだった。

附記　今月号に執筆する筈の小林、立野が留置されたので僕が至急に書いた。書き初めたら長くなってしまった。来月号に続きを書きたいと思う。(一九三〇・七)

(一九三〇年八月「戦旗」)

II

評論

反戦文学論

黒島伝治

一、反戦文学の階級性

1

戦争には、いろいろな種類がある。侵略的征服的戦争がある。防禦戦がある。又、民族解放戦争、革命も、そこにはある。

戦争反対の文学は、かなり昔から存在して居るが、ブルジョアジーの戦争反対文学と、現代プロレタリアートの戦争反対文学とは、原則的に異ったものを持っている。戦争反対の意図を以て書かれたものは、古代ヘブライの予言者マイカのものの中にもある。民族間の戦争を誡め、平和を説いたものであるが、文字に書かれた、恐らく最古のものであろう。旧約にはいっている。しかし、そういう昔のことにまでかかずらっているヒマがない。近代文学には、明かに戦争反対の意図を以て書かれたものを相当拾い上げることが出来る。それらは、一般的に戦争に反対している。戦争は悲惨である、戦争は不愉快で、戦争のために、多数の人間が生命を落さなければならない。そこで、戦争に反対している。

プロレタリアートは、戦争に反対する、その反対の仕方に於て、一般的な態度はとらない。吾々は一般的に、戦争に反対するのではない。或る場合には、悲惨をも、残酷をも、人類の進歩のために肯定するプロレタリアートが徹底的にどこまでも反対するのは、帝国主義××である。即ち××的、××的戦争に反対するのである。

2

ブルジョアジーの戦争反対文学は、多く、個人主義的、或は、人道主義的根拠から出発している。そこに描かれているものは、個人の苦痛、数多の犠牲、戦争の悲惨、それから、是等に反対する個人の気持や、人道的精神等である。

手近かな例を二三挙げてみる。

田山花袋の「一兵卒」は、日露戦争に、満州で脚気のために入院した兵卒が、病院の不潔、不衛生、粗食に堪えかねて、少しよくなったのを機会に、病院を出て、自分の所属部隊のあとを追うて行く。重い脚を引きずって、銃や背嚢を持って終日歩き、ついに、兵站部の酒保の二階――た

しかそうだったと思っている――で脚気衝心で死ぬ。そういうことが書いてある。ここでは、戦争に対する嫌悪、恐怖、軍隊生活が個人を束縛し、ひどく残酷なものであるというようなことが、強調されている。家庭での、平和な生活はのぞましいものである。戦場は、「一兵卒」の場合では、大なる牢獄である。人間は、一度そこへ這入ると、いかにもがいても、あせっても、その大なる牢獄から脱することが出来ない。――ここに、自然主義の消極的世界観がチラッと顔をのぞけている。

戦争は悪い。それは、戦争が人間を殺し、人間に、人間らしい生活をさせないからである。そこでは、人間である個人の生活がなくなってしまう。常に死に対する不安と恐怖におびやかされつづけなければならない。だから戦争は、悪く、戦争は、いやな、嫌悪さるべきものである。

これは、個人主義的な立場からの一般的戦争反対である。所謂、自我に目ざめたブルジョアジーの世界観から来ている。この傾向をもっとはっきり表現しているのは、与謝野晶子の新体詩である。それは明治三十七年、十月頃の「明星」に出た。題は、「君死にたもうことなかれ」という。弟が旅順口包囲軍に加わって戦争に出たのを歎いて歌ったものである。同氏のほかの短歌や詩は、恋だとか、何だとかをヒネくって、技巧を弄し、吾々は一体虫が好かんものである。吾々には、ひとつもふれてきない。が、「君死にたもうことなかれ」という詩だけは、七五調の古い新体詩の形に束縛されつつもさすがに肉親に関係することであるだけ、真情があふれている。

　旅順の城はほろぶとも
　ほろびずとても何事か
　君知るべきやあさびとの
　家のおきてになかりけり

　君死にたもうことなかれ
　××××××は戦いに（編者註××はすめらみこと）
　××××からは出でまさね（編者註××はおおみず）
　かたみに人の血を流し
　獣(けもの)の道に死ねよとは
　死ぬるを人のほまれとは

勝手に数行を引いたのであるが、××は筆者がした。××にしなければ、今日では恐らく発禁ものであろう。

当時、大町桂月が、この詩が危険思想であるというので非難した。国を挙げて戦争に熱狂していた頃である。戦争反対を声明したのは、僅かに平民新聞だけであった時代である。作者は、桂月の非難に弁解して、歌は歌であって、自分の心のまことを、そのまま吐露したものである。――そういう風に云った。戦争に行く息子を親が新橋まで見送って、「達者で気をつけて無事で行って来い！」と別れの言葉を云う。その気持と同じ気持を歌ったものである、と。

この詩は、全然個人的な気持から戦争に反対している。生活の中心がすべて個人にあった。だから最も恐ろしいのは、死である。殺し、殺されることである。

人道主義になると、五十歩百歩ではあるが、いくらか考え方が広汎になり、戦争の原因を追求しようとする慾求が見えて居る。中途半ぱな、生ぬるいところで終ってしまっては居るが。

武者小路実篤の「或る青年の夢」は、欧州大戦当時に出た。これは、人道主義の戦争反対である。

この場合に於ても、死の恐怖、人間が、人間らしい生活が出来ない悲惨を強調している。ところがここでは個人よりも人類が主として問題になっている。戦争は、他国の文明を破壊し、他国を自国の属国にしようとするところから起って来る。他国を属国とし、他国を征服すれば得をすると考える利己主義者があるから起って来るのだ。けれども、その利己主義が誰れであるか、それは考えていない。戦争をなくするには、人間が国家の立場で物を見ずに、人類の立場から物を見ることである。他国の文明をはなれては自国の文明が真の意味では存在出来ないというのが人類の意志である。人類の意志を尊重することを知らないからいかんのだ。人々は、人類の意志を無視する所から戦争は起る。国家主義が人類の意志に背く所に戦争は起る。これが「或る青年の夢」を貫く中心思想である。すべてが人類である。人類は、万物の霊長でほかの動物とは、種を異にする特別のもののようである。

3

ブルジョアジーは、眼前の悲惨や恐怖から戦争に反対はしても、決して徹底的に戦争を絶滅することは考えてはいない。若し考えてもそれは生ぬるい中途半ぱなものであって、結局に於ては反動的な役割をしかなさない。理想主義か或は現状維持の平和主義である。そこで、ブルジョアジーは戦争反対の文学に於ても、明かに、その階級性を曝露している。

欧州近代文学に於ても、戦争に反対しているものは、なかなかの数に上る。大体、その名前だけを挙げて、プロレタリアートの反戦文学に移りたい。

ジャン・ジャック・ルソオ――「恒久平和の企図」

エミイル・ヴェルハァレン――「黎明」（この戯曲に於て、ベルギイの詩人は人類社会の甦生の希望を述べている。オピドマアニュの市街が敵軍に包囲され、そのうちに、攻防両軍の革命家が叛乱を起したため、ついに戦いが終了するのである。）

レオ・トルストイ――「セバストポール」「戦争と平和」「想いおこせ」等

フセオロド・ガルシン――「卑怯者」「愚かなイワノフの覚書」「四日間」

レオニイド・アンドレーエフ——「赤き笑」

それから仏蘭西の小説家ギイ・ド・モウパッサン、ジョセフ・アンリ・ロスニイ、人道主義者ロマン・ロオラン、英吉利の戯曲家、バナアド・ショウ、アメリカの詩人、ホイットマン、等も、或は激烈或は皮肉、或は悲痛な調子で戦争に反対している。

独逸の表現派になると、世界大戦後に発生したものだけあって、戦争反対のものがなかなか多い。

ハアゼンクレフェル——「アンティゴオネ」（希臘劇を改作したものであるが、彼はこれを大戦に結びつけ、タレオンを、前の独逸皇帝ウィルヘルム二世に擬し、戦争のために寡婦となったもの、孤児となったもの、不具となったものをして王に向って飢餓と傷痍を訴えさせ、「将軍を市場に晒せ」と絶叫せしめている。）

フランツ・ウェルフェル——「トロヤの女」（戦敗者の悲惨と戦勝者の残酷とを愬訴したものである。）

エルンスト・トルレル——「独逸男ヒンケルマン」「変転」（独逸男ヒンケルマンは戦争で睾丸を失った男の悲痛な生活を書いたものであるが、多分に人道的である。）

ラインハルト・ゲエリング——「海戦」（海戦の中の第五の水兵は叛乱の志を持っている。）

第五水兵。俺たちは何のために今戦っているんだ。

第一水兵。海上を自由にするためだ。

第五水兵。じゃ、そのために母親はお前を養ったんだな、じゃ、それがお前の魂の意味なんだな。そのためにお前の身体は大きくなったんだな。

（中略）

声々。祖国、祖国、何をまた俺達から慾しいんだ。祖国、祖国、死が俺たちを氷のように貪り食べる。俺たちが此処に斃れるのを見て呉れ、祖国。俺たちに死を与えろ、死を、死を、死を与えろ、死を。

（爆発。第一、第四、第五水兵はもぎ取られた瓦斯除けマスクをつけて死にながら横たわる）

表現派は、主観主義である。だから、ゲエリングは、反戦的ではありながら、本当に書こうとしていることは、人類全体の上に蔽いかかっている運命の力との関係であるようだ。この意味から云えば「海戦」は一種の運命悲劇である。

フリッツ・フォン・ウンルウ。——ウンルウの初期の作、つまり欧州大戦以前に書いた、「士官」（一九一二）「プロシャ王子ルイ・フェルディナント」（一九一四）には、彼が属している階級のイデオロギーを極めてはっきり反映して居った。彼は、貴族出の軍人で所謂独逸精神——理想主義的な観念が基調になっている——を持った男であった。だから作品の中には、抽象的な観念ばかりが出ている。それが、大戦にドイツ皇太子の副官として出征した。そこで

彼は戦争の惨禍を見た。それが彼の観念を大きく、深く、拡めると共に、明確な一定の方向を与えた。平和論者になり、人類愛主義者になった。そこで、彼は、塹壕の中で「決定の前に」という詩を書いた。ヴェルダンの要塞戦についでは、それからして、「犠牲の道」という悲壮な憤激の物語を書いた。これは、偶然にも、アンリ・バルビュスの「クラルテ」と同年（一九一九年）に発表された。

表現派は、多く、戦争に反対し、その悲惨、その暴虐を呪咀し、絶叫してはいるが、唯心論的で、ただ、主観的な強調に終始している。ブルジョア作家の戦争反対はこれ位いにして、プロレタリア文学に移ってみる。

4

アンリ・バルビュスの「クラルテ」も欧州大戦から生れた、反軍国主義文学である。この小説は、はじめの方はだらだらしていて読みづらい。バルビュスは、戦争の惨禍を呪咀するばかりでなく、戦争の責任者に対して嫌悪を投げつけ、インタナショナルの精神を高揚している。「そこで君達は、祖国の武装を解かせねばならないのだ。そして、祖国観念を極度に収縮放棄して、重大なる社会観念を持たなければならないのだ。君達は、軍閥的国境を湮滅しそれよりもっと悪い経済的商業的障碍を取り除かねばならないのだ。保護貿易主義、労働の発達の中へ暴力を導引き入れるものであり致命的な軍国主義の狂態を齎らすものなのだ。君達は、各国家の間では正当なことと云われ、各個人の間では『殺人』『窃盗』『不正競争』と呼ばれているところのものを廃滅しなければならないのだ。これ等のものを取除くのは、特に君達でなければならないのだ。何故なら、それらのことをやるのは君達だからだ。何処へ行っても君達だけが不滅な力と、私心を交えない朗らかな良心とを持った君達だけがこれをやり得るのだ。君達は、君達自身のために戦争をやるようなことはないのだ。

君達は、大昔の魔法や、神の殿堂などを怖れてはならない。君達の巨然たる理性は、信者達の富の根を止める偶像を破壊しなければならない。」

「世界的共和は、この人生に於て、万人の権利を平等たらしめるための避くべからざる結果なのだ。平等の観念に立脚して進むならば人民のインタナショナルに到達するであろう。若しも其処へ到達しないならば、それは正しい道理に立脚していないからなのだ。」

こういう風に、バルビュスはインタナショナルを叫んでいる。

プロレタリアートは、帝国主義的、侵略的××に対して絶対に反対する。従って、プロレタリアートの反戦文学には、それが表現されなければならない。ブルジョアは、戦争の真の原因を民衆の眼から隠蔽する。「彼等は、人民に向って云う、――一旦、お前達の上にいる人々の思う通り

の勝利が得られた暁には、あらゆる暴政は魔術にかかったように影を消してしまって、地上に平和が来るのだ。――と、それは、ほんとではない。××による支配が来るまでは、地上に平和は来ないのだ。」それから彼は、他の個所で全世界の兵卒に向って云う。「人間の群の中から出鱈目に掴まえられた男よ、記憶するがいい。――君が君自身であったことは片時もなかったのだということを！『ねばならん！ねばならん！』という冷酷な絶対命令の下に君が屈服しないですんだことは断じてなかったのだ。平時には、商工業の機械工場で、不断の労働の規則に取り囲まれ、道具の奴隷となり、ペンの奴隷となり、才能の奴隷となり、又は、何か他の物の奴隷となって、朝から晩まで休息することもなく日々の労役に曳きずられる君よ。それによって、君はやっと生活を凌いで夢の裡に安息することだけは出来た。

君が決して慾しなかったこの戦争が来ると――君の国や名は問う要がない――君をしかと握っていた怖しい運命は、きっぱりその仮面を脱ぎ捨てて、喧嘩好きな複雑な正体を現わしたのだ。宣告の風が起ったのだ。

君の身体は徴発される。刑法上の逮捕と同じような威嚇の方法で君を捕える。如何に貧窮なものも誰一人としてこの逮捕から逃げることは出来ない。君は営舎の中に××される、虫の如く裸に剝がれて今度は誰彼の差別を無くする××を着せられる。

君は悲惨と屈辱と、日々に陥って行く萎縮との生活を生活する。粗食を与えられ、虐待され、身体中こづき廻され、番兵の命令によってこき使われる。一瞬毎に、君は萎縮した自己の内へ激しく投げ返される。君は極めて些細な行為のために罰せられる。又、主人の命令で生命を棄てる。」

こういう不愉快な、恐ろしい戦争が、而も×××制度が存在する限り、一遍すんでも又「起るであろう。戦争が戦闘する者以外の人間によって決定せられ得る限り、それは繰りかえし起されるであろう。銃剣を鍛えそれを振り廻したりする魯鈍な大衆以外の人間によって戦争が決定せられ得る限り、それは何遍も繰りかえし起されるであろう。」そうして×××制度が存続する限り、「この地上には、戦争の準備以外に何物も無くなるであろう。あらゆる人間の力は、そのために吸収され、あらゆる発見、あらゆる科学、あらゆる想像はそれによって独占されるだろう。」

――「クラルテ」にはこういうことが叫ばれている。そして、「クラルテ」が発表されて十年を経過した今日、世界の帝国主義国家は××の準備以外、何物をもしていない状勢になっているのである。

マルセル・マルチネは、大戦を背景にして三ツの作品を書いている。戦場に行こうとする兵士達に呼びかけた詩集「呪われた時」と、戦争の後方で呻いている民衆の悲惨な生活をかいた小説「避難舎」と、それからドイツ革命に暗示されて書いた戯曲「夜」である。就中、そのいくつかの

詩と、戯曲とは非常にすぐれたものである。恐らく、今日まで日本語に訳されたプロレタリア文学の中で、最もすぐれたものの一ッであろう。

資本主義制度が存続する限り戦争の準備が絶えない。又、戦争も絶えない。吾々は×××戦争には絶対反対である。しかし、戦争が絶滅するのは、最も多く圧迫された最後の階級であるプロレタリアートが、自ら解放されながら、全人類をも一般に階級制度から解放した時でなければならない。そこに達するまでには、×××戦争を経なければならぬ。プロレタリアートは、××××戦争には反対するが、××××は肯定する。マルチネは、「夜」に於て、×××戦争には反対しているが、虐げられ、搾取された無産階級が団結して遂行する××××は、これを肯定しているのである。「夜」は無産階級をして、冷かな熱性を覚えさし、無産階級を奮起させる。プロレタリアートの戦争に対する態度は、その両方ともが、「夜」に於て最もよく現わされている。

アメリカの社会主義作家、アプトン・シンクレェアは、「義人ジミー」に於て、帝国主義戦争に対する、プロレタリア階級のいろいろな意識の内訌を書いている。一面では、シンクレェアが欧州大戦当時、彼自身がとった、少なからぬ苦悶の後に武器を肯定した心の位置を書いたものであるという。

欧州諸国間の帝国主義戦争の危機が次第にはげしくなって行くと、それらの国々に於ける社会主義者や戦闘的労働者は、この戦禍に対する反対運動を開始した。それは、やがてアメリカの社会主義者をも立たせ、ジミーの属するリースヴィル社会党支部も演説会を開き、反対した。が、欧州の黄金王や軍人は、とうとう自国の奴隷どもを戦場へ追いやってしまった。而してアメリカへは、それらの国々から武器の注文が殺到して、殆んどすべての工場は、武器工場に早変りした。ジミーが働いているグラニッチ老人のエムパイヤ工場も、武器工場に改造された。

ジミーは、自分の手で造られているものがドイツに於ける同志を打ち殺す砲弾であることに気づいて、重大な疑問にぶつかった。インタナショナリストであり、社会主義者であるジミーが、そういう武器を作ることが、立派な行為であろうか？　そうして、惨忍な掠奪の分け前として、グラニッチ老人がくれる一時間四仙の増給を受け取ってもいいものであろうか。この問題は、アメリカの農夫が作る小麦までが、英国に買い上げられ、ドイツの同志を打ち殺すイギリス兵士の胃の中に這入っていることを知るまで、彼を悩ました。武器の注文は益々増大して賃銀は昂騰した。それは、ついに、ジミーのような正直な社会主義者をすら有頂天にした。が、賃銀が上るにつれ、物価が上ってきた。そこで工場では、不平と非難の声が高まった。

「ストライキ！　ストライキ！」

それから工場を馘首され、ジミーは、郊外のある農夫の

下働きに雇われた。

そのうちに、ロシアには革命が起って、プロレタリアートが、自分の力で平和をかく得した。が、ドイツでは、ロシアへ進軍した。米国の社会主義者は、世界で唯一のプロレタリア国ロシアをふみにじっている独逸を倒すという範囲内で大戦に参加する者が出来てきた。

憎むべき独逸軍をやっつけるべきか、軍国主義に反対すべきか！　二つの絶対に相いれない物の見方にジミーは悩まされつづけた。

が、アメリカ陸軍の投げた巧妙な罠が、とうとうジミーを戦場に引っぱり出してしまった。しかし第一歩で、おもしろいことに出会した。ドイツの潜航艇は、彼を大西洋にたたきこんだ。次には彼は英国の病院へ収容せられた。そこで、彼は、英国のジョージ五世に言葉をかけられた。

「具合はどうかね？」

「おかげ様で大変いいんです。」

「アメリカの軍人ですか？」

「いいえ、あっしゃ、機械工なんで。」

最後にジミーは、一人のボルシェビイキの猶太人からリーフレットを受取って、それを二日のうちに全部まいてしまった。そのために、逮捕せられ、あらゆるひどい拷問に付せられたが、共犯者を白状しなかった。

以上は、「義人ジミー」のホンの荒筋である。枚数が長くなることが気になって非常に不完全にしか書けなかった。

ここには、インタナショナルの精神と、帝国主義戦争××が叫ばれている。

以上に挙げた、「クラルテ」と「夜」と、「義人ジミー」の三つの作品に於ては、そこに、ブルジョアジーの一般的戦争反対文学とは異ったものがある。プロレタリアートは、まず、インタナショナルの精神を高揚する。「インタナショナルとは、国際的乃至世界的団結、全世界的同盟という意味である。」ブハーリン監輯の「インタナショナル発展史」にはそう説明してある。

資本主義がすさまじい勢力を以て発展して、国際的威力として、プロレタリア階級に迫ってきた時、労働者階級の中から、吾々自身のインタナショナル的な組織体を作って、資本主義に対抗しようとした。それが、国際的労働者団結である。

プロレタリアートの戦争反対文学は、帝国主義××に反対すると共に、労働者階級の国際的団結の思想を鼓吹するものである。

二、プロレタリアートと戦争

1

プロレタリアートは、社会主義の勝利による階級社会の

廃棄がなければ、戦争は到底なくならないということを理解する。プロレタリアートの戦争に対する態度は、ブルジョア平和主義者や、無政府主義者や、そういう思想から出発した反戦文学者とは、原則的に異っている。被支配階級が支配階級に対してやる闘争は必要で、進歩的な価値があると考える。奴隷が奴隷主に対しての闘争、領主に対する農奴の闘争、資本家に対する労働者の闘争は必要である。戦争には、残虐や、獣的行為や、窮乏、苦悩が伴うものであるが、それでも、有害で反動的な悪制度を撤廃するのに役立った戦争が歴史上にはあった。それらは、人類の発展に貢献したことから考えて是認さるべきである。で、プロレタリアートは、現在の戦争に対しても、それが、吾々を解放へ導くものであるか、或は、吾々をなお圧迫するものであるか、その歴史的特殊性を分析することが必要である。

フランス革命は、人類の歴史に新しい時代を開いた。それからパリ・コンミュンまでは、ブルジョア的進歩的な国民解放戦争があった。つまり、その戦争は、主として、封建的専制主義及び外国の支配拘束を取り除くことであった。それは進歩的戦争であった。又、イギリスに対して若し××が戦争を始めるとしたら、それは正当な、必要な戦争である。抑圧者、搾取者に対する、被圧迫階級の戦争には、吾々は同感せざるを得ない。そしてその勝利を希わざるを得ない。

2

現在、吾々の眼前に迫りつつある戦争は、どういう性質のものであろうか。

ここに、泥棒と泥棒が、その盗品を一方が少く、他方が多いのを理由に又、奪い合いしたらどうであろう。如何に少い方が大義名分を立ててその行為を飾ろうとも、実質が泥棒であることに変りはない。

又、三人の泥棒が、その繩張り地域の広狭から、それを公平に分配することを問題にして、喧嘩を始めたらどうであるか。如何に正義、人道を表面に出して、自己の行為を弁護しようとも、それは、泥棒自身の利益のために、人を欺くものである。而も、現在、この繩張りの広狭争いのような喧嘩が起ろうとしているのである。これが将に起ろうとする××主義戦争である。

近代資本主義は、自由競争から独占への傾向をたどってきた。各産業部門に於ける独占は、利潤を多くする。小資本は大資本に併合される。それから銀行と産業とが結びついて、金融資本が発生し、金融寡頭政治ができてくる。

資本家の間に於ける独占は、始めは国内の市場をそれぞれに分割する。が、国内の市場は、資本主義の下では、外国市場と密接な関係を持っていて、そこで、それらは、一定の世界市場を形成することになる。ここで、大資本家の

団体が、ある原料産地や、市場を独占していたならば、それは非常に強いし利潤も多い。そこで「国際資本団体は夢中になって、敵手から一切の競争能力を奪わんと腐心し、鉄鉱又は油田等を買収せんと努力している。而して、敵手との闘争に於ける一切の偶発事に対して独占団体の成功を保証するものは、独り殖民地あるのみである。」（レニン）だから、資本家は、「植民地の征服を熱望する。」そうして、「金融資本と、それに相応する国際政策とは、結局世界の経済的政治的分割のための強国間の闘争をもたらすことになる。」

これが即ち帝国主義××である。そうして、広大な植民地と市場を独占した資本家は、自分では何等働かずに、搾取によって寄生的な生活をする。「資本主義は、極く少数の特に富有で強力な国家を極端まで押しやり、それらの少数国家は、世界住民の約十分ノ一か、多く見積って高々五分ノ一しか擁しないに拘らず、単なる『利札切り』で全世界を掠奪しているのである。」（レニン）

だから××××戦争は、掠奪者と掠奪者の戦争であり、泥棒と泥棒の喧嘩である。その泥棒に隷属している「植民地の住民は牛か馬のように扱われる。彼等は、種々様々な方法によって搾取される。資本輸出、租借、商品販売の場合の欺瞞、支配的国民の下に隷従させらるること等によって。」（レニン）

資本家は、国内の労働者から搾取した利潤以外に、こうして、植民地から莫大な利潤をかき集めてくる。この有りあまって、だぶついている金で彼等は、労働貴族や、労働者の指導者を買収しようとする。これは実際存在することであり、資本家は、それらの裏切者を手なずけるために、間接、直接に、あらゆる手段を弄するのである。

彼等に買収された労働者は、もう吾々の味方ではない。それは、ブルジョアジーの手先である。その物の考え方は、もうプロレタリアートのそれではない。無産階級運動の妨げにこそなれ、役には立たないのである。そういう奴等は、一とたび帝国主義××が起れば、反対するどころか、あわてふためいて、愛国主義に走ってしまうのだ。

3

帝国主義××は、何等進歩的意義を持っているものではなく、却って、世界の多数の民族を抑圧すると共に、その自国内に於けるプロレタリアをも抑圧して、賃銀労働の制度を確保し拡大せんがために行われるものである。けれども狡猾なるブルジョアジーは、うまい、美しげな大義名分を振りかざす。欧州大戦当時、フランスとイギリスのブルジョアジーは、ベルギーと、その他の国民の解放のために戦争を行っていると主張して民衆を欺いた。ほんとは、自分の掠奪した植民地を保持するために戦争をやっていたのだ。独逸の帝国主義者は、又、イギリスやフランスの多過ぎる植民地を、公平に分配をやり直そうとして戦っていた

のであった。この次に来る戦争に於ても、又こういうことが起るであろう。そうして無産者は、屠殺場の如き戦場へどんどん追いやられるだろう。

しかし、プロレタリアートは、泥棒どもが繩張りを分け取りにするような喧嘩に、みすみす喧嘩場へ追いやられて、お互いに、——たとえば膚の色が異っていようとも——同じ貧乏人同士が傷つけあいをやり殺し合いをやることに絶対に反対しなければならない。そうして、泥棒同士の喧嘩を利用して泥棒制度全体をなくすることを考えるべきである。

それがためには、プロレタリアートは、その戦争が何のためになされているかを闡明しなければならない。

反戦文学は、ここに於て、戦争が何のために行われるか、その真相を曝露し、その真実を民衆に伝え、民衆をして奮起させるべきである。泥棒どもが、なお安全に、最も悪い泥棒制度を維持しようがためにやっていることを白日の下に曝す必要がある。

吾々の文学はプロレタリアートの全般的な仕事のうちの一分野である。吾々は、プロレタリアートの持つ、帝国主義×××の意志、思想を、感情にまで融合さし、それを力強く表現することによって、一般の労働者農民への影響力を広く、確実にしなければならない。文学の全×××宣伝力を挙げて、労働者農民に力強く喰い入ることを心がけねばならない。

××××戦争は、それを、プロレタリアートのブルジョアジーに対する××に転化し得る可能性を多分に持っている。又、プロレタリアートは、それを転化するように努力しなければならない。そこで、吾々文学者は、帝国主義××××の意志を強く表現するに止まらず、全×××、宣伝力を挙げて吾々のプロレタリア運動が常に最後の目的をそこへ集中していることを強調しなければならない。(最後の目的がなんであるか、それは、ここで詳しく書く場合ではない。) 労働者農民及び多くの、所謂敵国に向って銃剣を取っていた××を××し、その銃剣のきっさきを、×××、××××××に向けさせる——そういうことを文学の持つありったけの宣伝、××をつくしてその影響を確保拡大することが必要である。

4

なお、新しい帝国主義戦争の危機——即ち、三ツの帝国主義ブルジョアジーが××の××的分割をやろうとしていることと共に、ソヴェート・ロシアに対する他のもろもろの帝国主義国家が衝突しようとする危機も迫りつつあることに、注意を喚起しておきたい。これは、いろいろな意味で、吾々の関心を最も強く引きつける問題である。

三、反戦文学の恒常性

1

戦争反対の思想、感情を組織して、労働者農民大衆に働きかける文学は、戦争が行われている時にのみ必要であるか。戦争が起っていない平和な時期に於ては、戦争反対文学は必要ではないか？　いや、必要である。

資本主義制度が存続している限り、××が絶滅される時期はやって来ない。ひとたび××××戦争によって、世界が分割され、平和な時期がやって来ても、又、次の×××戦争がやって来る。欧州大戦が終結して平和がやってきた。しかし、それから十年も経ないうちに、又、今度は××を中心にして資本の属領争奪戦が次第に鋭くなってきた。これは、新しい世界の分割に到る性質を持っている。而して、それは、戦争を引きおこさなければやまない。ブルジョア政府は、ひたすら、戦争の準備に余念がない。資本主義的平和は、その実質を見ると、次の戦争への準備にすぎないのである。科学的発明も、化学工業も、鉄道敷設も、電信も道路の開通も、すべてが、資本主義の下にあっては、戦争準備の目標に向って集中されている。それは直接間接にプロレタリアの生活に重大な関係を持っている。反戦文学の恒常性はここに存在する。資本主義制度が存在する限り、プロレタリアートの反戦文学も存在し、それに向って戦わなければならない。

2

反戦文学は、勿論、兵営や、軍隊生活のみを取扱う文学ではない。資本主義は、次の戦争に備えるために、あらゆるものを利用している。労働者、農民の若者を××に引きずりこんで、誰れ彼れの差別なく同じ××を着せる。人間を一ツの最も使いいい型にはめこんでしまおうとする。そうして、労働者農民の群れは、鉄砲をかついで変装行列のような行列をやりだす。――これは、帝国主義ブルジョアジーが××によって、プロレタリアートを搾取する、その準備にやる行為の一ツである。そのほか、学校も、青年訓練所も、在郷軍人会も、彼等の××のための道具となっている。製鉄所も、化学工場も、肥料会社も――そして、そこに働いている労働者が――戦争のために使われる。化学工場からは、毒瓦斯を、肥料工場からは――肥料会社は、肥料を高い値で百姓に売りつけるが、必要に応じて、そこから火薬が出来るようになっている。無線電信も、鉄道も、汽船も、映画や、演劇までも、帝国主義ブルジョアジーは、それを××のために、或は好戦思想を鼓吹するために使っているのである。あらゆるものがすべて軍事上の力を増大するために集中されている。が、それは、ブルジョアジーにとって、目的ではなく、手段である。彼等はその軍国主義によって、現在の搾取制度を一日でも長く、確実

に維持しようとしている。そして、無産階級圧迫をどこまでもつづけようとする。それが彼等の目的である。だから軍国主義は外国との××のためばかりでなく、国内に於ける、無産階級の××にも備えてあるのだ。農民の暴動や大ストライキに××が出動するのは、それを裏書きする一つの証拠である。

そこで、そういう、帝国主義的、――軍国主義的実質を曝露し、労働者農民大衆に働きかけ、大衆をして×起させることは、プロレタリア文学の任務である。これは、戦争が起っていない平和の時期に於ても、常に継続しなければならないのは、云うまでもない。この場合、吾々の力点は主として、軍国主義の実質の曝露にある。つまり、反軍国主義文学にあるのだ。

3

平時に於ては、主として反軍国主義文学に力点を置く、ということを述べたが、しかし、勿論、それに限ったことではない。どういう内容を扱ってもそれは自由である。そして、なお、次に述べようとする内容をも併せて、取扱って一向差支ない。ただ、主として、力点をアンチ・ミリタリズム文学に置くと云ったまでのことである。

帝国主義ブルジョアジーは、平時から、植民地の××他民族の隷属、労働運動の抑圧政策をとる。その政策が継続し、発展してついには、××手段による戦争が起ってくる。が、戦争が起ると、必ず帝国主義ブルジョアジーを代表する政府にとっても、危険な状勢が発生して来る。労働者、農民大衆の××に対する政府の不安は増大して来る。例えばロシアに於ては、日露戦争の後に千九百五年の××が起り、欧州大戦の終りに近く、千九百十七年の××が起っている。パリー・コムミュンの例をとって見ても、この事実は肯かれる。プロレタリアートは、その時期を××しなければならぬ。

「×××戦争を××へ！」これを力説強調して、労働者、農民大衆を××せしめ、×××××××××××。

戦時に於ける、反戦文学の主要力点は、ここに注がれなければならぬ。

プロレタリアートは、××のために起って来る、経済的、政治的危機を×××「資本主義社会の××を迅速ならしめなければならない。」

が、これも、これだけを独立して取扱うべきものと限ってはいない。ただ、主として力点をそこに置くのである。

（一九二九年七月世界社刊「プロレタリア芸術教程」所収）

プロレタリア芸術運動理論
「ナップ」の側に立ちて

山田清三郎

一、プロレタリア芸術運動

プロレタリア芸術運動とは何か、それは一般的に云って、芸術をプロレタリアートの勝利と解放のために、積極的に役立たしめて行く所の運動であるといわれている。この定義は勿論正しい。我々は更にこのことをより一層明白にして置かねばならぬ。

一体芸術とは何か、レフ・トルストイはこのことについて、次の如くに述べている。

「芸術は人と人とを結合する手段の一つである……」

「人間の思想と経験とを伝える言語が、人と人とを結合する手段になるが如く、芸術もまた同じように作用する。唯この結合の手段が、言語による結合の手段と異なる特殊性は、言語によって人は自己の思想を他人に伝えるに反して、芸術によって人は自己の感情を互いに伝える、と云う点に存する。」

「芸術活動は、他人の感情に伝染するという人間の能力の上にその基礎を有している。」

「かつて経験した感情を自分の中に喚び起すこと、及びそれを自分の中に喚び起して置いて、運動、線、色彩、音響、言語によって表現された形象、等によって、この感情を他人もまたこの同じ感情を経験するように伝えること——この中にこそ芸術活動は存する。芸術とは、一人の人間が意識的に、或る一定の外的記号を用いて彼によって経験された感情を他人に伝え、他人がこの感情に伝染されて経験する、ということより成るところの人間の活動である。」(「芸術とは何か?」第五章)

ブハーリンはまたこれを、次の如くに定義している。

「我々は、科学が人間の思想を系統立て、それを整理し、それを清め、矛盾から解放し、知識の断片から、その小片から、科学的理論の全き衣裳を縫い上げることを見た。しかし社会的人間は啻に思想するばかりではない、彼はまた感情する——彼は悩み、楽しみ、望み、嬉び、悲しみ、絶望する、等々。彼の感情は無限に複雑にして繊細、彼の精神的体験は、或時は一つの、或る時は他の調音に調子を合せることができる。芸術は、或は言語により、或は音響により、或は運動により(例えば舞踊の如き)、或はまた他の何等かの手段(時には建築に於ける如く「余りにも」物質的なるもの)により、これ等の感情を表現することによって、それを系統化する。即ち芸術は「感情の社会化」の手段であるということができる。これと同じことを多少違う風にいうことができる。

ある。或はレフ・トルストイが全く正しくも定義した如く（「芸術とは何か？」）情緒的「伝染」の手段である。ということができる。例えば、もしも諸君が、一定の精神的気分の表現された音楽的作品を聴くならば、諸君及び他のすべての聴衆はこの気分に沈潜し、それに「伝染」される。一人の気分であったものが、多くのものの気分となり、彼等に伝えられ、彼等に「影響」し、この気分を以て彼等に伝染した精神状態、即ち感情は、ここにおいて「社会化」されたのである。そしてこれと同じことは他のあらゆる芸術――絵画、建築、詩、彫刻、等々の領域においても生ずる。」（「史的唯物論の理論」第六章三八節）

即ち我々は知ることができる。芸術の機能が、感情と意志との「伝染」「社会化」にあり、云い換えれば、生活組織の重要な一つの社会的手段に他ならないということを。

而してこのことは、勿論、ブルジョア芸術たると、プロレタリア芸術たるとを問わないのである。即ちブルジョア芸術は、その芸術家の主観的意思の如何に拘らず、その影響下にある読者、観客、聴衆等々を、ブルジョア・イデオロギーの方向へ組織して来たし、現に盛んに組織しつつある。

プロレタリアートは、自己の勝利と解放のために、芸術もまたその有力なる武器の一つとして取り上げる。即ち、これ（芸術）に依って現在における労働者、農民、被圧迫大衆の感情と意識を、プロレタリア・イデオロギーの方向へ組織し高めて行くために。

プロレタリア芸術運動、それはプロレタリアートのかかる必要が生んだ、その階級運動の有力なる分野であり、手段であるのである。

二、運動の根本規準（1）

プロレタリア芸術運動とは何か、その規定はもはや明白であろう。それならプロレタリア芸術運動は、現実にはいかにして遂行され、またされなければならないか、私はこれに対する答を要約して、大体次の如き三箇条を摘記することができると思う。

（1）常にその全運動（プロレタリア運動）と有機的な連関を保持し、あくまでプロレタリアートの組織事業とより緊密に、より強固に結びつくこと。

（2）あらゆる芸術家、技術家を組織し、動員して、積極的に運動に参加せしめること。

（3）常にすぐれた階級芸術を生産し、真にこれを広汎な労働者、農民並びに被圧迫民衆のものたらしめること。

それなら、これ等は具体的には、どんなことを意味するか、我々は先ず箇条の（1）から、順次考察して行こう。

「常にその全運動と有機的な連関を保持し、プロレタリアートの組織事業とより緊密に、より強固に結びつくこと。」これはプロレタリア芸術運動の、その根本的な立脚点を明

かにしたものである。

プロレタリアートの全運動の、即ちプロレタリアートの共通の仕事から孤立し、或は独立したプロレタリア芸術運動なるものはあり得ないし、またあってはならない。もしまたそんなものがあったとしたら、それはプロレタリアートの名において、徹底的に打砕かなければならない害悪以外のものではない。

何となれば、その根本的基礎を、階級闘争の必要に置かず、芸術それ自身の立場に終始するところのプロレタリア芸術運動なるものの無意味さを考えただけでも、そのことは明かではないか。

プロレタリア芸術運動は、あくまで、その全運動の一部分となって、プロレタリアートの組織事業に結びつくことが、絶対不可避的な条件である。

文筆的活動の問題について、レーニンは次の如くにいっている。

「党に属しない著述家を葬れ！ 文筆的超人を葬れ！ 文筆的活動は全般的プロレタリア運動の一部分とならなければならない。それは全労働者階級の階級意識ある全ての前衛によって動かされるところの統一的な社会民主党（当時のロシアのプロレタリアの党――山田）の偉大なメカニズムの歯車でありネジであるべきである。文筆的活動は、組織的、計画的、統一的な社会民主党活動の一構成部分とならなければならない。」（「一九〇五年」「党組織と党刊行物」）

一九〇五年十一月、ロシアにおいて叫ばれたレーニンのこの言葉が、今直に現在の我国に、そのまま文字通りに適用されがたいのは言を俟たない。

しかしながら、一九〇五年××の結果として、刊行物が文筆的活動が、「合法的」であっても、十分の九までは、××党のものたり得る事情の到来を洞察していったレーニンのこの言葉は、疑いもなくまたプロレタリア芸術運動の覆すことのできない原則として理解されなければならない。

重ねていう、かかる原則に反し、或はこうした原則を無視し、忘れて、プロレタリア芸術運動はなく、またあり得ないということを。イカモノ芸術団体を警戒せよ！

次に「あらゆる芸術家、技術家を組織し、動員して、積極的に運動に参加せしめること。」である。このことはプロレタリア芸術運動の力の拡大強化にとって、あまりにも当然な条件の一つであることは、自明であろう。

プロレタリア芸術運動は、その性質として、個々の芸術家の無政府的な、偶発的な、行き当りバッタリの仕事であることを許さない。プロレタリア芸術運動は、あくまで前述の如き目的意識性によって貫かれたところの、組織的、統一的なそれとして遂行されなければならないのである。ここにおいてか、芸術団体なるものの存在意義が自ら浮び上って来ざるを得ない。

プロレタリア芸術家は、その運動の必要から、芸術団体

を結成する。プロレタリア芸術団体は、その運動の拡大強化のために、常にあらゆる階級的な芸術家を組織し、動員する。プロレタリア芸術運動は、かくして不断にその力を加え、発展して行くことができるのである。

我国にプロレタリア芸術運動（それは自然発生的な、そして先ず単一的な文学運動としてではあったが）が勃興し始めたのは、一九二三年の中葉頃からであった。我国に於ける欧州大戦当時の労働攻勢の結果が生んだ、当時のいわゆる労働者文学、反抗文学を、一群の社会主義者（「社会主義同盟」に参加せるもの等）が取り上げ、これを一個の運動として組織づけ、体系づけようと試みるに至ったのが即ちそれで、具体的にいえば、「種蒔く人」の運動これである。

其後、我国のプロレタリア芸術運動は、「種蒔く人」の後身「文芸戦線」を中心として展開され、更に「文芸戦線」の外廓的組織としての日本プロレタリア文芸連盟を迎え、次で一九二七年の戦線分裂の時代を経て、今日に到ったのであるが、もしも我国のプロレタリア芸術運動が、こうした組織的なそれとして行われなかったなら、それは果して、今日見るが如き状態にまで発展し、成長し得たかは大なる疑問としなければならない。

それは自ら階級的な芸術家を以て任じ、標榜しながら、積極的に組織的な運動に参加せず、また参加することを欲しなかった多くの芸術家が、運動の進展の途上においてふるい落され、現に、殆ど没落し去っている事実が、何より雄弁にこのことを物語っている。

即ち我々は知ることが出来る。プロレタリア芸術運動は、個々の芸術家の無政府的な、偶発的な活動を以てしては、決して発達し、進展するものではないということを。プロレタリア芸術運動、それはあくまで、組織的、統一的に遂行し、展開されなければならないのである。

この意味において、次に抜萃する全日本無産者芸術団体協議会発会宣言の指摘は、まことに正しい一点を突いたものとして注目されなければならない。

「全日本のプロレタリア芸術家は、真にプロレタリア的に戦おうとする限り、それぞれの全国的団体に即時加盟闘争せよ！

斯くして芸術各部門の活動を更に更に活溌にし全芸術の力を吾がプロレタリアートの輝しき勝利の日に供えよ！」（一九二八年一二月）

プロレタリア芸術運動の絶間なき拡大強化にとって、あらゆる階級的な芸術家、技術家のより大なる、そしてより強力なる組織と動員が、いかに重要な条件の一つであるかについては、我々はもはや充分これを知ることができた。ここでのこされた問題は、それならいかなる芸術家、技術家を階級的なそれとして認識するかということである。

だが、このことは必ずしも面倒な問題ではない。何となれば、個々の芸術家、技術家の実践そのものが、彼自身に

ついて語るし、また語らざるを得ないからである。要は絶間なき闘争と、かしゃくなき相互批判によって、不断に我我自身をきたえ高めて行くことにあらねばならない。

三、運動の根本規準（2）

最後に箇条の（3）である。「不断に階級的な芸術を生産し、これを真に広汎な労働者、農民、被圧迫民衆のものたらしむべく努めること。」とは具体的にはどんなことか。我々はこれを、芸術の「生産」と、「持込み」の両面に分けて考えて見なければならない。

不断に階級的な芸術を生産すること。それはどうすれば可能であり、またどうして行わなければならないか。それは基本的な条件の第一は、個々の芸術家、技術家が、真に階級的戦士としての自覚と信念を把握し、その生活の基礎を、労働者、農民の間にガッシリと根をおろすことにある。

私はここで、曽て我々の間において叫ばれた、一つの言葉を思い起さないではいられない。曰く「芸術家である前に、社会主義者でなければならぬ。」プロレタリア芸術家にとって、この言葉は全く片時も忘れてはならない「座右の銘」でなければならぬ。

ここに一人の作家がある。彼はプロレタリア作家であることを志している。しかし乍ら彼はただかく志すだけで、実際にはプロレタリアートの運動の何たるかを知らない。仮にまた理論的にはこれを知っているとしても、身を以てその流れの中へ行こうとはしない。即ち、実際の闘争には躊躇し、或は全く背を向けて去ってしまう。こうした臆病者から、いきいきと魂と血の通っている階級的な作品を期待することの不可能であることは、勿論「太鼓判」ものである。

このことは、他のあらゆる芸術家、技術家についても同様に適用することができる。それは一見、このこととはさほどに関係なきかの如くに思われる演劇における、ささやかなエキストラの一人についても、例外をゆるさない。日本プロレタリア劇場同盟の運動方針は、その「任務遂行のための基準」の項においても、正しくも次の如くに規定している。

「根本条件は、何よりも先ず吾々の生活を労働者農民の生活の中に、其闘争の中に置くことでなければならない。吾々の全活動の源泉は、吾々の生活のかかる再組織の中に見出されるであろう。」（一九二九年二月）

次に重要なことは、技術の問題である。いうまでもなく、イデオロギーだけで芸術は生産されるものではない。イデオロギーのみの芸術なるものはあり得ない。プロレタリア芸術が、その課せられた目的、使命をより効果的に果して行くためには、技術に対する、撓みなき研究と練磨が不可避的に必要であることは、これまた言を俟つまでもないであろう。

日本プロレタリア作家同盟の「一般的な活動方針」の中には、「作品活動の大衆化」そのための「題材の多様性」と「技術の練磨の必要」が強調されている。（一九二九年二月）また日本プロレタリア劇場同盟の運動方針の中には、演劇活動が、「常に労働者農民を眼前に置きつつ」行わなければならないこと（一九二九年二月）を力説している。

レーニンはプロレタリア芸術はどんなものでなければならないか、という問題を提起し、それにたいして、次の如き極めて簡単明白な断定を与えている。

「芸術は民衆に属しているのだ。それはその最も深い根を、広汎な勤労大衆の真中に下さなければならない。

それはこれ等の大衆によって理解され、愛されなければならない。

それはこれ等大衆の感情と思想と意志を結合し、それを高めなければならない。」（「レーニンの思い出」――クララ・ツエトキン）

右の内その第三については、我々はここであらためて問題の復習を要しないであろう。プロレタリア芸術家、技術家が「不断に階級的な芸術を生産し、これを真に広汎な労働者、農民、被圧迫民衆のものたらしむる」ためには、彼の階級的戦士としての生活態度と、而して、その怠ることなき技術の彫琢、練磨を、無条件的に必要としなければならないのである。

次に「持込み」の方面である。「持込み」の機関、方法は芸術団体それ自体のものにのみ頼るべきではなく、また頼ることは明に正しくない。それはあらゆる可能な手段方法――殊に労働者、農民により接近し、また接近し得るそれ――を利用し、活用しなければならぬ。

タトえば、文学についていうなら、文学は従来、主として芸術団体自体の発表機関を通じて、持込まれて来た。そのことは勿論誤りではなく、こうした機関はそれはそれとして多々益々発展、成長せしめて行かなければならないことは勿論である。「戦旗」の読者が、三万より五万、十万と労働者農民の間に増大して行くことは望ましきかぎりであり、是非増大せしめて行かなければならぬ。それと同時に、プロレタリア文学が、即ち我々の詩や小説や民謡や童話やが、「無産者新聞」や「労働農民新聞」を始め、その他あらゆる労働者、農民のための、また労働者農民の言論機関（労働組合、農民組合、その他の大衆団体の機関誌、工場、農村の新聞等々）を通じて彼等の間に持ち込まれて行くことを、絶対に必要とするのである。

而してこのことは、単に文筆的刊行物の場合にのみ限らないのは言を俟たない。否寧ろ、文筆的刊行物以外の場面において、我々は、一層そのことの重要性を切実、明白に見出さないではいられないのである。

タトえば、労働者、農民、無産大衆の種々なる集り、争議団、寄宿舎、工場、農村における詩や、民謡や、脚本の

朗読、簡単な劇の上演、美術の展覧、装飾、音楽的な活動、映画の映写等々の如き、常に精力的に行われなければならないのである。

プロレタリア芸術運動の力が、全体的にいって、まだ甚だ弱かった時代には、こうした仕事は、僅かに部分的には行われ得ても、一般的には、困難な理想に近かった。しかし乍ら、今日の状態はよほど進んでいる。芸術と大衆との結合の道、それはかくすることによって、一層促進されるであろうしまた促進しなければならない。

それはまた正しくもレーニンが指摘したように、「彼等(大衆)の中における芸術家を呼び醒まし、それを発展せしめ」ることによって、プロレタリア芸術運動に、より力強い、よりたくましい活力を与えることにもなるのである。プロレタリア芸術にあっては、「持込み」機関の重要性は、その生産におけるそれと、不可分に結びついていることを知らねばならぬ。

四、当面の任務

プロレタリア芸術運動とはいかなるものであり、またいかなるものでなければならないか。プロレタリア芸術運動はいかにして遂行され、またされねばならないか。これ等の問題にたいする一般的な概念は、以上において、大体把握されたであろう。我々は更にこのことの理解を、現在の状勢のもとにおいて、叩き込んで置かねばならぬ。

プロレタリア芸術運動が、プロレタリアートの組織事業と結びついて、その課せられた目的、使命を果して行くためには、現在においては、どうすることが正しく、またどうしなければならないか。それには他のあらゆるプロレタリア運動がそうであるように、現在、我々の当面する、政治的情勢のうちから、いきいきと導き出さなければならない。

それなら、現在、我々の前に展開されつつあるそれはどうか。我々はこれを概略、次の如くに要約することができるであろう。

その一は、世界××の危機である。(以下原本三行削除)

その二は、プロレタリアートと帝国主義との正面衝突の急迫である。

その二は、××以後、十一年間にわたってその偉大なる社会主義的基礎を固めつつあるソヴェート・ロシアのプロレタリアートを先頭とする世界プロレタリアートの握手は益々強大化し、今や断然として、諸帝国主義と対抗しつつある。かくて諸帝国主義は、彼等にとって巨大なる癌であるソヴェート同盟並に支那の革命を圧×すべく、その国際的なブロックを形成してあくなき毒牙を磨きつつあるの状態にある。

その三は、我国における状勢である。我国においては、支那を(以下原本一〇一字削除)一方、三・一五事件に火蓋を切ったブルジョア反動の全国的襲撃は、三団体の解散、治維法改悪、新党準備会に対する再解散、×色テロルの跳

梁等において見るが如く、加速度にその××の度を加え、今やその本来の姿を現わしつつある社会民主主義をその協力者として、労働者農民の上に、極度の×圧を下しつつある。だがこの熱病的な反動にもかかわらず、労働者農民はひるまずその大衆的、英雄的行動によって資本家地主××のブロックに肉迫し×抗し、（以下原本二行削除）

プロレタリア芸術運動当面の活動方針、それは、かかる状勢を無視し、或は忘れては、断じて正しい解決の鍵を見出すことはできないのは、いうまでもないことである。

一体芸術の機能は何か、（以下原本二行削除）

それならプロレタリア芸術運動は、今日、この芸術の機能を、いかなる目標に向って集中し、発揚して行かなければならないか。前記の政治的状勢が我々に教えるところのものは、実に次の如くであり、またあらねばならないであろう。（以下原本三行削削）

更に言葉をかえていうと、今やプロレタリア芸術運動は、その特殊な能力を極度に発揮して、労働（以下原本三行削除）

それでは、これ等のことは、実際的にはどうして果してゆき、また果して行かなければならないか。それは、プロレタリア芸術運動の一般的規準のうちに、既に大体明かにしたところであり、更に具体的には後に掲げるであろう、全日本無産者芸術団体協議会加盟各芸術団体の活動方針が、これに答えてくれるであろう。

我々はここで、雑誌「文芸戦線」一派——労農芸術家連盟について一言触れておかねばならぬ。彼等もプロレタリア芸術運動を標榜し、プロレタリア芸術団体の看板を掲げてはいる。しかし乍ら、彼等は、プロレタリアートの×と結びつくことを欲せず、反対に裏切者社会民主主義の手足となり出店となって、プロレタリアートの必死的な闘争を妨害することによって、客観的には支配階級の協力者としての役目をつとめている。従って、真に階級的なプロレタリア芸術運動にとって、今や彼等は、徹底的に粉砕されねばならない、「最悪の毒素」と化しつつあるのである。

五、「ナップ」の組織概要

旧全日本無産者芸術連盟（「ナップ」）は最近再組織した。（一九二八年一二月）その結果新に次の如き専門五団体が創立され、これ等の専門各団体は、更に全日本無産者芸術団体協議会（「ナップ」）を結成した。

専門五団体とは

（1）日本プロレタリア作家同盟（文学）
（2）日本プロレタリア劇場同盟（演劇）
（3）日本プロレタリア美術家同盟（美術）
（4）日本プロレタリア音楽家同盟（音楽）
（5）日本プロレタリア映画同盟（映画）

が即ちそれである。

「ナップ」再組織の意義はどこにあるか。全日本無産者芸術団体協議会発会宣言はこのことについて、次の如くにいっている。

「旧日本無産者芸術連盟が其の創立以来九カ月、我国唯一の社会主義的芸術団体として支配階級並びに其の手先社会民主主義者と戦って来たことは総べての人の知る処である。其の苦痛多き闘争を通じて吾が国の無産者芸術運動は真に全国的となり更に芸術の各々の部門の独立的活動は頓に促進され、斯くの如きものとして今や全日本の無産者芸術運動は主として旧連盟の旗の下に戦われるに到った。

然るに旧連盟の従来採って来た地域的組織は最早や此の強力化した各芸術部門の全国的独立的活動に適せず、各芸術部門はそれぞれ充分に全国的に戦い得る力を蓄積した。茲に旧全日本無産者芸術連盟第二回大会はその組織を革め、其の各々の芸術部門を全国的独立団体となし、ここにその統一連絡を司るべき全日本無産者芸術団体協議会(略称ナップ)の発会を見るに到った。

今や吾が国の社会主義芸術運動の実体は此の芸術各部門の全国的独立的団体である。

全日本のプロレタリア芸術家は真にプロレタリア的に戦おうとする限り、それぞれの全国的団体に即時加盟闘争せよ!

斯くして芸術各部門の活動を更に更に活潑にし、全芸術の力を吾がプロレタリアートの輝しき勝利の日に供えよ!」(一九二八年一二月二五日)

この宣言は簡単である。だが我々はこの中から何を見出すことができるか。それは次の如き事実でなければならないであろう。

即ち「ナップ」のこの再組織は、旧日本プロレタリア芸術連盟、旧前衛芸術家同盟の合同によるその創立以来、「吾が国唯一の社会主義芸術団体として支配階級並びにその手先社会民主主義者と戦って来た」「ナップ」が、「其の苦痛多き闘争を通じて」「芸術の各々の部門の独立的活動は頓に促進され」「それぞれ充分に全国的独立的に戦い得る力を蓄積した」結果としての栄えある専門分化的な進出に他ならないのである。

而して、このことは取りも直さず、我国プロレタリアートの成長と、それの強大化の疑もなき一つの反映であり、同時に、我国のプロレタリア芸術運動が、プロレタリアートの要望に添い、更に積極的にそれを満たし得るあらゆる条件を、漸く具備し始めるに至ったことを証明する以外のものではないのである。

我国のプロレタリア芸術運動は、始め単一的な文学運動として、自然発生的に勃興し、次いで、次第に、綜合的なそれとして発展するに至ったことは人の知るところの如くである。今や、旧全日本無産者芸術団体の精力的な闘争は、ついに見るが如く、芸術各部門の専門分化とそれぞれの全国的な独自の独立的活動を可能ならしむるに至ったのである。

それでは、かく専門部門別に分化し、独立するに至った、前記各団体の夫々の当面の活動方針はどうか、而して、それらの団体によって構成されている、全日本無産者芸術団体協議会の任務はどういう点にあるか。我々は更に、これ等のことを明にすることを忘れてはならない。

六、「ナップ」各団体の活動方針

次に列記するのは、各々その機関を通じて可決された、各芸術団体の綱領及び当面の活動方針の要約である。我々はここから、おのずから前記の懸題を、把握し、理解しなければならぬ。

（1）日本プロレタリア作家同盟

綱領

一、我等はプロレタリアートの解放のための階級文学の確立を期す。

一、我等は我等の運動に加わる一切の政治的抑圧撤廃のために闘う。

活動方針

イ、我々の作品活動は全般的に云って、もっと大衆化されねばならない。それには作家の階級的生活と撓みなき技術の練磨が絶体に必要である。

ロ、作品の題材はあらゆる方面からとらえなくてはならぬ。最近我々の作品に、闘争しつつある労働者農民の姿が具体的に描かれて来たことは注目に価する。……我々は更に前衛によって指導され、或は影響され、方向づけられているところのあらゆる場面の闘争、あらゆる社会的、日常的な事実並びに種々なる歴史的な事件のうちにいきいきとした題材を把握し、これを正しき階級的見地から描き出すことを忘れてはならない。

ハ、評論は常に運動を正しき方向に導き、その発展のために積極的な役割を演じて行かなければならない。そのためには常に新たな問題の提起と解決、具体的な作品批評等を旺ならしむると共に、一方過去の芸術の批判、芸術理論の樹立等、より学問的な仕事をも怠ってはならぬ。

ニ、益々反動化し来れるブルジョア芸術並びに社会民主主義の影響下にある小ブルジョア芸術例えば（「文戦」一派等）にたいする闘争は、一層徹底的に行う必要がある。

ホ、国際的経験の摂取、交換を活溌にし、我々の運動をして強固な国際的結合へと発展せしめなければならぬ。

ヘ、階級関係の激化につれてその動揺を激しくしつつある小ブルジョア作家のプロレタリアの側への転化は……重大な意義がある。我々は彼等の我が陣営への獲得にたいする努力を、決して怠ってはならない。

ト、労働者、農民の間から彼等自らの表現力を持つところの新たなる作家の発見、誘導を、一層精力的に行わねばならぬ。プロレタリア文学のより新たなる要素と形式の発展は、かかる努力のうちにより正しく、より強力に促進さ

れるであろう。

チ、我々はその機関誌以外に、随時単行本、リーフレット、パンフレットその他の刊行物を編輯し発行してゆくと共に、講演会、その他の文学的催し、工場、農村における作品の朗読会、座談会等々を、他の無産者団体との有機的な連関のもとに精力的に行わねばならぬ。

リ、ナップ加盟各団体と常に緊密に結びつき、相互の運動の発展促進と、芸術運動全般の統一的展開を期せねばならぬ。（創立大会―一九二九年二月―可決議案「一般的活動方針」から）

（2）日本プロレタリア劇場同盟

綱領

吾同盟は一切のブルジョア演劇を実践的に克服しつつプロレタリア演劇の組織的生産並びに統一的発表を期す。

一、吾同盟は斯かる一切の演劇的活動を通じて無産階級解放の為に闘うことを期す。

一、吾同盟は演劇に加えられる一切の政治的抑圧撤廃の為に闘うことを期す。

活動方針

1 任務遂行のための基準

イ、根本条件は何よりも先ず吾々の生活を労働者農民の生活の中に、其の闘争の中に置くことでなければならない。

ロ、斯くて吾々は「常に労働者農民を眼前に置きつつ」大公演、移動劇場、朗読等々のあらゆる形態において吾々の演劇を広く大衆の中に持ち込むべきである。

ハ、闘争の激化に伴い、益々その活動を要求されるであろう移動劇場の拡充強化を計らねばならない。

ニ、前項の活動基準は一九二九年度が吾々に課するであろう題目のうち、就中次の三つの上に立脚して行わるべきである。

A帝国主義××絶対反対

B労働者農民の国ソヴェート同盟の擁護

C右に対する社会民主主義、社会愛国主義等の裏切行為の曝露

2 具体的活動

イ、演劇運動の全国的統一

A全国的機関誌その端初としてのニュースの発行

B技術的オルガナイザーの交換

C労農劇壇の全国的調査及びそれへの援助

ロ、公演によるプロレタリア演劇の集中的発表

A現下の政治的経済的諸条件は大劇場、大会堂における公演の可能を益々狭めつつある。劇場設備なき会場（例公会堂、講堂、或は寄席等）を積極的に利用しなければならぬ。而してこの種の活動は（1）集中的大公演（2）巡回的小公演に分たれる。

Bこの仕事は各々の技術的発展と共に芸術大衆化の問題と不可分に結びついている。……この仕事の解決

の鍵は「その持込み——経営基礎を労農階級の闘争の組織の上に築くこと」である。

ハ、移動劇場の拡充強化

争議団、組合、寄宿舎、工場、労農階級の諸種の集合等その活動場面は豊富であり、その政治的要求は益々昂まりつつある。……移動劇場の拡充強化は緊急の任務である。

ニ、五月、十一月芸術祭への積極的参加

ホ、演劇研究所の設置

ヘ、観客の組織

ト、演劇戦線の統一

チ、プロレタリア演劇理論の確立

リ、国際的提携

ヌ、上演の自由獲得のための闘争

ル、反動的演劇政策との闘争（創立大会——一九二九年二月——可決議案「当面の任務」から）

（3）日本プロレタリア美術家同盟

綱　領

一、わが同盟は美術を武器として無産階級解放のために闘う。

一、わが同盟は一切の反動的美術の批判克服のために闘う。

一、わが同盟は美術に加わる一切の政治的抑圧撤廃のために闘う。

活動方針

（1）我々の美術をして益々プロレタリアートの闘争に於る武器たらしめねばならない。其為には闘争の中において我々の美術を組織的に生産し且つそれを全国的、統一的に持込まねばならない。

イ、あらゆる労働者農民の闘争組織と日常的に結合し、且つその同盟員をして積極的にそれ等の組織に参加せしめ、かくしてその闘争において要求されるところの技術的活動を遂行しなければならぬ。

ロ、わが同盟は「移動プロレタリア美術展」を全国的に編成し、これを労農組合、未組織大衆、無産市民等の中に、それらの各々の特殊性に応じつつ持込まねばならぬ。

ハ、春秋二回のプロレタリア芸術祭において、一定の政治的目標の下に作品を生産、集約統一し、広汎な労農無産大衆の支持の下に大展覧会を挙行しなければならない。

ニ、闘争の必要に応じ、各種パンフレット画集、画入雑誌等を随時的、もしくは定期的に発行すべく努めねばならない。

ホ、「ナップ」機関誌「戦旗」にたいする活動を更に活潑にしなければならない。

（2）以上の諸活動の実践の中における日常的研究を通じて、プロレタリア美術に関する指導理論を確立し、全運動を更に強力化し発展せしめなければならぬ。

（3）以上の活動の遂行と共にわが同盟は一切の反動的美術を徹底的に批判克服しなければならない。

（4） 同時に美術界における支配的反動的秩序の打破、即ち帝国美術院と結びつく封建主義とブルジョア的専制機構の民主化、二科、春陽会その他の小ブルジョア反動的美術団体の克服のために闘わねばならない。

（5） 美術に加わる一切の政治的抑圧に対する広汎な反抗運動を激発し、指導し、労農大衆の政治的自由獲得闘争及び特殊的には検閲同盟と結びついて抑圧撤廃のために戦わねばならない。

（6） わが同盟は諸他無産者美術団体との共同闘争において広汎な反資本主義的美術家を動員させた左翼的戦闘的立場において無産者美術戦線の統一を戦いとらねばならない。（創立大会―一九二九年二月―可決議案「同盟当面の任務」から）

（4） 日本プロレタリア映画同盟

綱　領

日本プロレタリア映画同盟はプロレタリア映画生産発表のために闘う。

一切の反動的映画の批判克服のために闘う。

映画に加わる政治的抑圧撤廃のために闘う。

活動方針

A 一般活動方針

我々は映画をしてプロレタリアートの武器たらしめるためにあらゆる闘争を果さねばならぬ。

イ、そのために我々の有する製作能力を組織的にプロレタリアートの闘争の中に活動せしめて、プロレタリア映画を製作し、映写せねばならぬ。

ロ、我々の全活動の道行と共に一切の反動的映画――映画文献と闘争しこれを徹底的に批判克服せねばならぬ。

ハ、プロレタリアートの指導の下に「映画」に加わる一切の政治的抑圧に対して労農大衆の政治的自由獲得の闘争及び検閲同盟と結びついて、その反抗運動を広く激発指導組織せねばならぬ。

ニ、それ等のことを果すために我々は、フィルムの製作映写の仕事を活潑にし、又文筆的活動を充分にしなければならぬ。それと共に我々の組織をもっと拡大せねばならぬ。

ホ、あらゆる労働者農民の闘争組織との「日常的結合」……は我運動の持込み方面において重大な役割をもっていることに注意せねばならぬ。従って又それはプロレタリア映画の大衆の為に重大な役目を果すであろう。我同盟員は闘争の中に身を置き、闘わねばならぬ。

ヘ、かかる具体的闘争の中より、又ソヴェート同盟の映画運動の成果より、映画運動の実践的な理論を確立することも亦重大なる当面の任務である。

B 具体的な活動

イ、製作において、九ミリ映画の製作をなし得る我同盟は、その最もよき活動場面である実写映画を現実の闘争の中にて撮影し来るべきである。十六ミリフィルムの獲得は

当面の急務である。又我々は実写映画のみでなく演技映画も撮影されるようプログラムを作る必要がある。尚我々は映画製作の為の、現象のためのスタッフを組織する為に充分闘争せねばならぬ。

ロ、映画部門、映写機と映写技術との獲得はこの部門における最大の急務である。現下の状勢においてはこの活動は移動的になされる故移動映写隊の組織問題は特に重大である。映写隊は他芸術団体の移動芸術隊（移動劇場等）と緊密に結びつかねばならず、特に労働者農民の闘争組織と結びつかねばならぬ。

ハ、文筆的活動、この部門における活動にては利用し得る発表機関を全部効果的に利用せねばならぬ。（創立大会―一九二九年二月―可決議案「当面の任務」から）

(5) 日本プロレタリア音楽同盟

音楽家同盟はまだ創立大会をもっていない。故に決定された綱領はまだない。次に掲ぐる活動方針も「戦旗」二月号所載、同盟責任者執筆の「一九二九年に展開されるべき音楽団体の簡単なる方針」から抜萃したものであることを断って置かねばならぬ。

活動方針

(1) 所謂きく耳を持つものがきくの独占感によって独占された音楽。並びに金持、貴婦人の末期的、頽廃的趣味、加うるに、彼等の地位の維持から、本来民衆の感情を示した、民謡、俗謡、ジャズ等々を利用し、反動に民衆を眠り込ませることに対し、仮しゃくなき闘いを起し、我々の手にとり戻しプロレタリア要素をもって復活、ひろめること。

(2) すぐれた古典音楽をプロレタリアの観点に立って批判、整理し、我々の音楽に役立たせ、同時に我々自身の力によって新らしい形式を生み出して行くこと。

(3) 現行する反動的、芸術至上的音楽理論に対して戦い、同時に我々の音楽理論の確立を期すること。

(4) これ等と並び合せて、広く音楽形式に依る労農大衆のアジ、プロの為、従来の闘争歌曲、移動合唱、合奏団の全国的規模における一層の活動と、それによって労農大衆になくてはならぬ要素の一つとして喰い込ませること。

(5) これ等一切の活動を真に立派に果し得るための、たゆまざる各人の技術的練磨。

以上によって、輪廓的ながら、各専門芸術団体当面の任務とその活動方針を知ることができたであろう。各団体はその実践において、果してこれに答えているか。私は答えて居りまた答えようとしつつあることをここに断言することができる。これ等の詳細なる実際は、何れ夫々の専門団体の担当者が、夫々の機会において語るであろう。

最後に全日本無産者芸術団体協議会の任務である。これは前記の発会宣言によって知ることができるように、各団体の「統一連絡」の必要のために設立された機関である。

各団体はここにおいて、各団体に共通する種々なる諸問題の正当なる解決を期すると共に、全般としての芸術運動のより強力なる統一的展開を期し、かねて各団体相互の発展成長を補助し促進することができるのである。

我国にプロレタリア芸術運動が起きてから約十年、その間幾多の誤謬と、そして脱落者共の裏切にも拘らず、よく支配階級の迫害とブルジョア芸術の反動化に抗して、今日の発展を見るに至ったことは、真に注目に価することでなければならぬ。これは芸術運動が、我国プロレタリアートの成長の線に添いつつ、不断に撓みなき闘争を頑強に続けて来た結果以外の何ものでもないことは、勿論あらためて、蛇足を加えるまでもないことであろう。

（一九二九年七月世界社刊「プロレタリア芸術教程」I所収）

プロレタリア芸術運動理論

―労農芸術家連盟の立場から―

小堀甚二

I　支配階級が、彼等の支配的地位を確立し、固定化するためには、単に被支配階級の行動を抑圧によって規整するだけでは足りない。彼等は被支配階級の頭脳――精神生活をも自己に有利に規整しなければならない。各時代の支配階級は、いつでも各時代特有の自己の文化を創造し、それによって広汎な被圧迫大衆を精神的にも支配して来た。現代資本主義社会に於いて支配的地位を占めている道徳、宗教、哲学、芸術等も、資本家階級によって創造され、資本家階級の支配的地位の維持、拡大のために奉仕しているところのものである。

II　資本主義社会に於いては、芸術の中でも特に文学が、最も有力な観念的支配の武器として資本家階級に奉仕している。言葉という、大衆の日常生活と最も緊密に結び付いた意志疏通の機関を表現の手段とし、個人或いは集団の生活を、その変動するがままに、その多様性のままに表現し得るという、文学それ自身の持つ特質の外に、印刷機械の発達と、それに促された大衆の文学知識の発達とが文学を通じて最も広汎な大衆を資本家階級の精神的影響の下に置き得るようにしたのである。文学を通じて伝播された唯我主義的感情、自然主義的生活認識、享楽主義的趣味性等が、いかに有力に、プロレタリアートの階級意識の成長を妨げたかは説明するまでもないであろう。

III　それにも係わらず、資本主義それ自身の持つ生産力と市場との不均衡、恐慌、戦争等の諸矛盾は、プロレタリアートをして、ブルジョアジーに対する決定的な敵対階級として成長せしむる。プロレタリアート独自の階級心理が発展し、拡大する。そしてこのプロレタリアート独自の階級心理は、必然的に、文学にまで蒸溜し、結晶せざるを得ない。

初期に於ける自然発生的なプロレタリア文学は、斯くして発生した。この自然発生的なプロレタリア文学に発展の方向と組織とを与え、ブルジョア文学と意識的、有目的的な闘争を行わんとするのがプロレタリア文学運動である。

IV　プロレタリア文学運動の究極的な目標が、プロレタリアートの権力の確立、次いで無搾取、無階級の社会の実現にあることは言うまでもない。従って其の点に於いては、プロレタリア文学運動と政治運動、組合運動等との間に何の区別もない。しかしそのことからして、プロレタリア文学運動と政治運動や組合運動との区別を混沌とさせてもよいという理窟は成り立たない。無産階級運動全体内に於ける分業の発生は、それ自身プロレタリアの階級的成熟の証拠である。政党は主要努力の方向を政治運動に置き、労働組合は自己の力を経済戦線に結集し、プロレタリア文学運動は文学の分野に於ける階級闘争を専任に担当しなければならない。この分業が成功的に遂行される度合に応じて、プロレタリアートは全面的にブルジョアジーを圧迫して行くことが出来るのである。

しかし、そのことからして、プロレタリア文学運動は、政治運動や組合運動等に対して無関心であってよいという理由は成り立たない。プロレタリア文学運動も亦、政治運動や組合運動と同様に、ブルジョアジーの決定的な排除、プロレタリアートの徹底的な解放を究極目標とするという基本的原理は、プロレタリア文学運動が、自己と同一目標の下に戦っている、他の分野の運動に対して無関心であることを絶対に許さない。他の分野の運動に対する連繋と関心の放棄は、即ち全階級的な観点と意慾との放棄であり、従ってそれはプロレタリア文学運動の階級性の放棄である。

V　プロレタリア文学運動が最も有効に遂行されるためには、プロレタリアートの中の最も芸術的天分ある者及び、複雑なる文学的諸潮流の社会的階級的内容を正確に認識し、以てプロレタリア文学運動の羅針盤たり得る批評家の集団が形成せられねばならぬ。この集団は、官憲の圧迫に堪え、ブルジョア文学の洪水と対抗して、自己の製作物を最も広汎な大衆の中に流布し得ると共に、他面集団内各個人の芸術的教養、創作上の経験等を相互に交換するに適した組織でなければならぬ。

Ⅵ　プロレタリア文学運動に於いては、インテリゲンチャの役割が過大評価されてはならない。或る者は言う。プロレタリア独特の科学たるマルクス主義は、すべてマルクス・エンゲルス等のブルジョア・インテリゲンチャによって創始され、発展せしめられた。科学の領域に於いて、しかし重大な役割を果し得たインテリゲンチャが、芸術の領域に於いてのみ、なぜに無能でなければならないか、と。しかし科学の領域に於けるインテリゲンチャの役割からの此の類推は、それ自身誤まれる考え方であるし、又経験にも矛盾する。インテリゲンチャは、プロレタリア的に思考することは出来るが、感ずることは出来ない。感情は思惟よりもより一層直接的な環境からの派生物であり、従ってプロレタリアの感覚、感情は、殆んど全くプロレタリア独特の環境に依拠するものであるからである。そこから科学の領域に於けると芸術の領域に於けるとの、インテリゲンチャの役割の相違が発生する。そのことは、我が国に於けるプロレタリア文学運動の歴史に徴しても明白である。多少とも記念すべきプロレタリア文学作品の創造者は、殆んどプロレタリア出身の作家であったと言ってよい。もとよりプロレタリアートとインテリゲンチャとの間は、万里の長城を以て劃然と区別されている訳ではない。例外的には、極く少数のインテリゲンチャが、思考に於いても感情に於いてもプロレタリアートに接近し得るであろう。しかしそれだからと云って、新らしいプロレタリア作家を汲み取るための貯水池を、一分たりともプロレタリア階級の外に求めてはならない。我々の内部に於ける労働者作家のパーセンテージの増加に正比例して、我々の文学は実質的に一歩々々発展して行くであろう。

Ⅶ　プロレタリア文学は厳密に内容主義（形式主義に対立して、こういう言葉が許されるならば）でなければならぬ。内容の軽視は、存在の歴史的意義を失った階級の、観念的無力の文学に於ける現われである。あらゆる社会現象の形象の言葉による価値批判、混沌として動揺しながらもしかも、次第に闘争への隊伍を整えて行く労働大衆の日常生活及び闘争場面の芸術の白熱光による活写、質朴剛健な革命家的タイプの創造と、集団の喜び、威力の叙事詩的展開、そしてそれ等を通じてなされる労働大衆に対する闘争への呼び掛け、これ等に対する飽くなき追求こそがプロレタリア文学の内容でなければならぬ。プロレタリア文学の内容の重味は、それ自身労働階級の政治的、経済的、社会的重味である。近来プロレタリア文学内に現われた小器用、小才のモダニズム（それは新らしき階級たるプロレタリアートの心理の表現なるが故にモダーンなのではなく、プロレタリア文学運動内の一偏流として現われた、新らしいブルジョア・イデオロギーなるが故にモダーンなのである）は、本能的にプロレタリア文学の内容の重味に堪え得られなくなった小ブルジョアの、文学の手品、言葉の綾、

間に合わせの形式の小完成等への逃避である。

VIII 「形式とは、形式化された内容である」されば形式と内容とを対立的な二つの物として考え、内容を軽視し、形式それ自身の完成のみに没頭することによって優れた形式を産み出し得るとする考えほど誤れるものはない。優れた形式は、優れた内容からのみ産み出され得るのである。

しかし其の事からして、プロレタリア文学者は形式に対して無関心であってよいということにはならない。よき形式のみが、よき内容を読者の前に顕現し得る。過去の歴史の遺産たるすべての文学作品の表現形式の研究と、その表現形式のプロレタリア文学の立場からの取捨、綜合による、新らしき形式の自由な試みが為されねばならぬ。内容に適応し、内容に対して必然性ある形式の自由なる試みの中から、プロレタリア文学は徐々に、プロレタリア文学独特の形式を形成し得るであろう。新らしき内容は、新らしき形式の母胎であるからである。

IX プロレタリア文学作品に対して、芸術的価値の立場からと政治的価値の立場からとの、二つの価値批判の立場を取ろうとする者がある。この二元的価値論者（其の筆頭に平林初之輔氏がいる）は実はかう言い度かったのだ。プロレタリア文学には政治的価値はある。しかし芸術的価値はブルジョア文学のものだ、と。或いは、なるほどブルジョア文学には政治的価値はない。しかし芸術的価値はある、と。（最近の平林初之輔氏の文芸時評等を参照せよ）

「二つの魂」は、二つの価値批判の尺度なしには生きていられない。

一体、芸術作品の政治的価値とはどういう意味であるか？　或は芸術作品の政治運動に与える影響の性質による価値の有無という意味であるか？　若しそうであるならば、二元的価値論者は芸術的価値と政治的価値の他に、もう一つ経済的価値という価値批判の基準をも追加すればよかった。なぜならプロレタリア文学作品には労農階級の経済闘争の刺戟となった作品もあるから。否、まだある。二元的価値論者の立場からすれば、其の他にまだ社会的価値というものの附加も可能である。なぜなら、文学作品には家族制度、男女関係等の変革に役立った作品もあるから。こう言うと、平林初之輔等の二元的価値論者は反駁するかも知れない。政権獲得前のプロレタリアートに取っては、あらゆるものが政治的価値の尺度から眺められねばならない。従って、経済的価値、社会的価値等も、政治的価値に還元され、評価されねばならない、と。よろしい！　然らば何故に独り芸術的価値のみが、政治的価値と並列的なものに考えられ得るのであるか？

芸術的価値を、政治的価値から遊離したものと考える一切の傾向が排斥されねばならぬ。プロレタリア文学作品に取っては、或る作品が階級闘争の激化に役立ち、従って政

治的価値を持っているならば、其の政治的価値こそが芸術的価値なのである。なぜなら、優れた内容を持っていると同時に、優れた形式を持っている作品でない限り、階級闘争の激化に役立ち、従って政治的価値を持ち得ないからである。文学作品に対して、芸術的価値と政治的価値の二つの価値批判の基準を要求することは、一方にプロレタリア文学運動内の芸術至上主義的傾向の発展を助長し、他方に安価低廉なる直接的アジテーションを目的とする、所謂「宣伝文学」の自慰的傾向を助長せしめるものである。事実、最近になって生れた此の二元的価値論は、プロレタリア文学運動内に於ける此の二つの偏流に対する妥協として現われたものである。プロレタリア文学運動の真の発展は、この二つの偏流に対する妥協によってではなく、徹底的な批判によってのみ可能であろう。

X　姿こそ違え、同じ二元的立場を取る者に、所謂「プロレタリア文学の大衆化」論者がある。この論者（林房雄君がこの論者中のスターである）によれば、プロレタリア文学には「前衛のための文学」と「大衆のための文学」とが必要であり、可能である。この場合、前衛とは教養ある少数の労働者を意味し、大衆とは教養なき大部分の労働大衆を意味していることは自明である。

この「プロレタリア文学の大衆化論」の前提となっているものが、日本に於けるブルジョア文学の所謂純文学と大衆文学とへの分裂の事実であることは否めないであろう。然しプロレタリア文学者は知っていなければならない。我々は或る文学作品が大衆に愛せられたからと言って、その文学作品を「大衆文学」などという別範疇の中に入れはしない。トルストイの「復活」が、いかに多数の読者によって愛読せられたと言っても、「復活」を純文学或いは芸術小説と対立する意味に於ける大衆文学乃至は通俗小説の範疇に入れる者はいない。純文学或いは芸術小説と呼ばれるものと、大衆文学或いは通俗小説と呼ばれるものとの差異は、或る文学作品が少数の読者しか得なかったか、或いは多数の愛読者を得たかということによって生ずるのではなくて、両者の間には本質的な差異――其の作品の内包する社会的階級的内容の差が存在するのである。この相違を日本に於けるブルジョア文学の前記の二つの文学的傾向への分裂の過程によって検討してみよう。この分裂の社会的根拠の探求は、所謂「プロレタリア文学の大衆化論」の二元論的立場の当、不当を、我々の前に闡明して呉れる筈であるからである。

日本に於けるブルジョア文学が、芸術小説又は純文学と呼ばれるものと、通俗小説又は大衆文学と呼ばれるものとに分裂したのは、明治四十年代のことであった。この時代の一般的特徴はなんであったか？　日露戦争の勝利による日本資本主義の急激な発展であった。この時期に於いて、日本資本主義は初めて世界の先進資本主義国家と競争し得

るに至った。国民大衆は、労働者階級までが資本主義の謳歌に心酔し、ブルジョア的秩序、ブルジョア道徳、ブルジョア的趣味に忠実に順応した時代であった。但し此の一般大衆のブルジョア的心理状態の中に、根強い封建的イデオロギーが混淆していたことを忘れてはならない。それは国民の大半が農民であり、都市に於いても封建的小企業及び封建的徒弟制度が濃厚に存在していたという階級構成状態の特殊性にも依るし、他方日本資本主義の発展過程の特殊性にもよるのである。

一方日本資本主義の急激な成長は、必然に近代的都市小ブルジョア層の成長を促した。この社会層は、其の生活環境に決定されて当時に於ける最も知識的進歩的な部分であり、当時に於ける唯一のブルジョア的習性に対する反逆者であった。一般大衆の心理状態と此の知識的社会層の心理状態との間には、融和することの出来ない溝渠が横わっていた。この二つの心理状態の相違は、又文学に対する好尚にも現われざるを得なかったのである。

日本に於けるブルジョア文学が、明治四十年代に至って純文学と通俗小説とに分裂したという事実は、簡単ながら我々に以上の考察を与えるのである。純文学と通俗小説又は大衆文学の社会的階級的内容の相違は、この二つの範疇に属する文学作品それ自身の相違の中にも勿論現われている。副次的な問題は除いて、本質的な相違を挙げてみよう。先ず通俗小説又は大衆文学は筋の変転に富む。小説に於ける筋の変転を望む心は、圧迫されて居り、環境の変化を望んで居り、従って未来に夢を持つ階級の心理状態である。通俗小説又は大衆文学が労働大衆にブルジョア・イデオロギーを注ぎ込むためには、少くとも此の点だけは交換条件として大衆の階級的要求に応ぜざるを得ないのである。他方純文学は如何？　なるほど其処にはブルジョア的凡俗心理と対比さるべき繊細な心理状態や洗練された趣味性等はある。しかし他面其処には変化を恐れるおずおずした保守的心理も特徴的に現われている。稀に現在の制度や支配者に対する強烈な反抗意識を叩き付けているものがあっても、すべて唯我主義的感情の満足のために過ぎない。これは確かに都市小ブルジョア層の階級心理の文学に於ける現われである。通俗小説又は大衆文学と純文学との相違は、単に読者の多数か少数かによって決定された相違ではなく、両者の間には本質なものの相違——其の社会的階級的内容の相違が存在するのである。そうであればこそ、我我は両者を二つの別範疇に属する文学として区別するのである。

プロレタリア文学の問題に帰る。我々の文学の何処に「前衛のための文学」と「大衆のための文学」の二つの別範疇の発生する必然性があり、我々の運動の何が以上の二範疇の存在を必要とするのか？　なるほどプロレタリアートの中にも、教養ある少数即ち「前衛化論者」の意味に於ける「前衛」と、教養無き多数即ち一般労働大衆との区別

はある。しかし此の両者の間の区別は、果して別範疇に属する二つの文学を発生せしむるような本質的な差異であるか？　例を挙げる。大衆の革命的気分を高揚せしめ得る優れたプロレタリア作品が誰かによって制作されたとする。然るに大衆の革命的気分を高揚せしめ得る此の作品は、反対に「大衆化論者」の意味に於ける「前衛」に取っては不愉快なものであり得るだろうか？　若しそうだとすれば、其の「前衛」は「大衆化論者」に取っては前衛であっても労働大衆に取っては前衛でもなんでもない。但し何処か其処等のインテリゲンチャではあり得るかも知れない。前衛と大衆とを対立させることによって発生した最近の「プロレタリア文学の大衆化論」は、無産階級運動一般に対する徹底的な無智を表明すると同時に、他面プロレタリア文学運動内に発生したブルジョア大衆文学の影響を現わすものである。この提唱の誤りは、此の派のスターである林房雄君の作品によっても証明され得る。プロレタリア大衆小説作家を以て自任するようになってからの同君の作品より も、それ以前の「林檎」「鑑」等の諸作の方がより以上大衆的即ち労働者農民的であると同時に、より以上芸術的でもある事実を同君はどう考えているのであろうか？

プロレタリア文学は、「前衛のための文学」と「大衆のための文学」とに分裂することによって発展し得るのではない。それは二つの傾向のどちらもをプロレタリア文学の軌道から離脱させる試みである。プロレタリア文学は全潮流が一致して、内容的にも形式的にも益々大衆的たる可く努力しなければならぬ。大衆化の過程は、同時にプロレタリア文学の芸術的完成の過程でもある。但しプロレタリア文学はブルジョア文学と異って、敵対階級をまで説得しようとする貪慾心は持たない。プロレタリア文学運動が科学的社会主義の立場を取る限りそれは当然である。従って我我の使う大衆という言葉の中に、ブルジョア大衆をも含ませてはならないことは自明の理である。若しそういうプロレタリア作家があったならば、彼の作品の大衆化の過程は、同時にブルジョアジーの陣営への移動の過程であるであろう。

XI　若きプロレタリア文学は、深い根柢を持つブルジョア文学と同居している。プロレタリア文学に対するブルジョア文学の悪しき影響は、不断に我々の運動内に再生産されて行くであろう。「芸術的価値と政治的価値論」にしろ、誤まれる「プロレタリア文学の大衆化論」にしろ、共に此の影響のよき例である。我々のプロレタリア文学運動は如何にして此の影響から免疫され得るであろうか？　読者の対象を明確に労働階級に置くこと、新らしき作家的才能を汲み取る主たる場所を労働階級に置くこと、以上の二つこそが、プロレタリア文学運動の階級性を擁護し、他面我々の運動を実質的に一歩一歩発展せしめ得る根本の方針である。それはプロレタリア文学運動のアルファでありオ

メガであらねばならぬ根本法則である。

（附記）　労農芸術家連盟の立場からのプロレタリア文学運動理論との編集者の要求であったが、労農芸術家連盟は細微な点まで記述した正式の綱領は持っていないので、以上は自由な私の私見である。但し出来るだけ連盟全体の意見を代表し得るよう努めた積りである。尚紙数の制限が許さないので、プロレタリア文学運動の農民文学に対する方策其の他の重要な問題を切り捨てた。編集者及び読者諸氏の御寛恕を乞う。

（一九二九年七月世界社刊「プロレタリア芸術教程」I所収）

農民小説論

立野信之

一、農民文学は何処に根を張るか？

プロレタリア文学とは何か？　ごく大ざっぱに云うならば、それは労働者、農民の文学に外ならない。もう少し詳しく云うならば、それは労働者、農民こそが次の時代を建設する主人公であるということを知らせ、その厖大な階級の流れと共にあらゆる層あらゆる階級の人々を、労働者、農民の唯一最高の表現であるプロレタリア×に参加せしめるような文学である。それ以外の何物でもない。

従って、作品の領域に於けるプロレタリア文学には、労働者（工場）や農民（農村）を主題としたものが、他の、例えば小市民や知識階級を描いたものよりは、遥かに多きを占めている。その理由は社会的要求の増大によって説明される。即ち、直接的に具体的に、困難な道を歩みつつある階級的英雄——労働者、農民の姿を描いたものが、最も多く社会から要求されるからである。そしてそれ等のものの方が、多くの場合、強く読者に訴えかけることが出来るからである。また、それは別な意味からも説明される。帝国主義社会に於ける階級的矛盾の増大——即ち、労働者、農民階級の急速なる生長と、それに伴う闘争の激化が、プロレタリア作家をして、何処に題材を求むべきかを決定させるのだ。

此処からして、プロレタリア文学の取材の範囲は、特色的には二つの広汎な世界に分れる。

一、労働者（工場）を描いたもの。

二、農民（農村或は地方）を描いたもの。

後者は前者に対して、われわれは通常「農民小説」或は

もっと広く「農民文学」と呼び馴らわしている。が、それはあくまで特殊的な分類にすぎなく、本質的な範疇はプロレタリア文学に属するし、また属しなければならない。

何故そうであるか？　農民解放は「土地××」によって解決される。農民は永い間「土地」の問題で苦しんでいる。日本の人口の約四割八分を占めている厖大な農村人口は、搾取なき「土地」を望んでいるのである。が、農民に「土地」を保証するものは誰であるか？　レーニンは言う――「ただプロレタリアートのみが、ただプロレタリアートを統一するところの（前衛）たるボルシェヴィキ党のみが、……貧農が欲するものを、そして何処に、如何にして捜すべきかを知らずして捜しているものを与えねばならないし、与えるであろう！」

そこから、われわれは同じレーニンの有名な次の言葉の意味を充分吸み取ることが出来る。

「都市プロレタリアの解放は、農民の支持なしには不可能である。同時に、農民の解放は都市プロレタリアとの緊密な結合なしには到達され得ない。」

この確固たる思想的立場以外に、農民文学の立場は有り得ない。ここに根を張らないで農民文学の芸術的生長は無意義である。

二、農民文学の特殊性

だが、以上のことが飲み込めただけでは農民小説の生れないことは勿論である。そこには自ら農民の生活条件と、観念と、行動の特殊的な事情が存在する。そこから、農民文学は特殊な相貌を以て現われる。

農民文学の特殊な相貌は、農民から直接的に引き出される。

先ず農民が都市プロレタリアと異なる生活条件とは如何なるものか？

都市プロレタリアは集団的、協同労働に依拠しているに反して、農民は分散的、個人的経済（過小農経営）の上に立脚している。従って心理的意識的方面もまた自ら特殊な相貌を以て現われる。即ち都市プロレタリアが集団主義的、協働主義的であるに反して、農民は個人主義的である。そして前者が進歩的であるに反して、後者は保守的である。等々……。

以上の特性（その他無数にある）は、何処から生れるのか？　それは経済的、政治的原因による以外の何者でもない！

農民小説は、勿論そうした農民の特殊性を無視することは出来ない。否、それらの特殊性を無視して、農民小説はあり得ないであろう。

しかしながら、プロレタリア作家にとっては、その特殊性の正確な描写のみが必要ではない、問題は、そうした特殊性を如何に再現し、如何に労働者、農民の×へと方向づ

けるかにあるのだ！

農民は保守的である。単にそれだけしか表現出来ないならば、ブルジョアのお嬢さんの作文にもある。その特殊性をもってはそうした特殊性の累積ではなく、我々にとってする農民のプロレタリアートの側への独持な歩き方の再現が必要である。云いかえれば、古い伝統的な特殊性ではなく、その上に急速に発展しつつある農民の新らしい特殊性の発見とその組織（表現）にあるのだ。

例えば、農民の保守的特性について、演説会に於ける農民の態度を例に取る。

演説会などは、農民は労働者のそれとは全く異なった態度をとる。演説者が非常にうまく、文字を知らない――従って新聞なども生れてから何十年の間手にしたこともない百姓爺にも納得出来るような文句を吐いたとする。演壇では、恐らく農民の割れるような拍手を予期して弁士は見得を切っているが、百姓たちは拍手どころか咳払い一つしないで相も変らず遅頓な髯面をならべ、ある者はポカンと口を開けたまま弁士の顔に見入っている。それは全く反響がないかに見える。が、事実は全然反している。農民達はうまい文句、真実の文句に打たれないのではない。実に息詰るほど打たれているのである。が、保守的な彼等は、自己の感情の動きをそう簡単には、例えば労働者のように、絶叫と喧騒を以て表白出来ないのである。（此処にも、生活が彼等をしてそうさせているのをわれわれは見る！）

悲惨さに直面しても、またそれとは反対の場合に置かれても、農民は簡単に心の動きを態度に現わそうとはしないが、一度動いたら何処まで動くか、その涯を知らないのも農民である。一九一八年に於ける日本で米騒動やその他の農民一揆や××が何よりも雄弁に農民心理の爆発性を物語っている。

プロレタリア作家は、ただ「農民は仲々動かない」だけを知っていることが重要ではなくて、動かない内側には動くものがあるということ、そしてそれは機を得れば目的に向って爆発するということを発見することが必要なのである。

かかる農民の特殊性は、また文学の特殊性として再現される。概念として、一般から規範されているところの「農民小説」の特色は、次の如くであろう。

一、表現の陰惨性
二、描写の遅鈍性
三、筋の著しき無変化

全体としての特色は、地味で暗い、という印象に尽きるであろう。

何故に、農民小説が暗いか？　若しも明るい農民小説があるとすれば、それは田園讃美的な或は牧歌的なものしか生じないという理由は何処に求められるか？

前者はレアリズムの作家をもって代表され、後者はイデアリズムの作家に多く見られる傾向である。前者は農民の

生活を客観的態度で眺め、後者は理想的な態度で現実の「土」の生活ではなく（それは余りに暗く悲惨だから）何処か別なところに平和な田園を見出そうとする空想的態度である。が、ここでは多く前者を問題としよう。空想の中にどんな社会を作り得たとしても、現実に即しないかぎり無用であるから。

現実の農民の姿は悲惨さをもって表現される。その根拠は農民の生活にある。米を作りながら、絶えず飢えと鼻んな棒を突き合せているのが農民の生活である。この経済的、政治的原因による生活の暗さは、直ちに文学作品の上に反映する。

が、若しも作家が、古いレアリズムの態度（自然主義）でなく、新しいレアリズムの態度で農民の生活に臨む時、彼はその悲惨さ、或は暗さをそのまま文学作品に再現するだろうか？

事実は多数の悲惨さの中にある。作家がそれを取上げる。そして書くだろう、俺はこんな百姓も知っている。あんな百姓も知っている！と誇りを以てわれわれの前に示すであろう。そして、生活が暗いんだ。だから作品は暗い、そいつは当り前なことだ！と。

それらのレアリズムと呼ばれる作品がわれわれの所に幾つも示されている。そして、それらの作品は多く人を惹きつけるだろう。何の故に？ただ、そのセンチメンタリズムのゆえに！それ以外の何が読者を惹き付け得るだろう。問題は、その作品が如何なる意味に於て、人を惹きつけるかにあるのではなくて、如何に人を現実と結びつけているかにあるのだ。

生活の暗さは、作品の上にあるのではなく、事実は到る所に、それこそ「小説」以上のものが無数に転がっているのだ。作家が一々、それを取上げる。積重ねる。また積重ねる。さて、何が其処に出来上る？恐らく、暗さや悲惨さの展覧会が現出するだろう。ただ、それだけである。

自己解放の闘争は、暗い生活の中にあるのではない、その上に打ち建てられる希望の上にこそ、闘争の意義があるのだ。

新しいレアリズムとは、プロレタリア・レアリズムの道を謂うのである。それは、農民の生活の暗さをでなく、何がプロレタリアートとの結合――それはプロレタリア×にまで高められる――に必要であるか、そして必然であるかを取上げる。

農民はその保守的特性のゆえに、遅々としてではあるがプロレタリア×へと歩みつつある。それは単に、小作争議にのみ現われるのではない。それは単に、農民の急速な貧窮化にのみ現われるのではない。ましてや、地主階級の困惑の上に現われるのでは断じてない。それは澎湃たる小作争議の上に支配階級が血眼になって幾多の「農村振興策」を掲げているにも拘らず、何等の具体策も立てられずどうにもこうにも手のつけられない、全体としての農業そのも

の危機が、農民をプロレタリア×に結びつけつつある、ということ、そしてそれは形式化された闘争にではなく、様々な所に、そして様々な時に現われている。

それは日常の困難な闘争――組織の上に現われるであろう。それは田の中を這い廻りながら自覚した農民Aが自覚しない農民Bに、根強く話しかけている。そのことの上にも現われるであろう。それはまた、女房の、そしてブルジョア小学校に行っている子供らの意識にも、反映し現われるであろう。

形式化された闘争のみが、プロレタリア的であるのではない。無形式の生活の、一見何もない所にプロレタリア・レアリズムの農民作家が発見し拾い上げなければならない重要な要素の動きがあるのだ。あらゆる農民の固定的な特殊性をではなく、その新らしい動きつつある特殊性を捕えて再現すること、そのことがプロレタリア作家としての農民作家に課せられた新しい重要な任務である。

三、二三の「農民作家」について

我が国に於けるプロレタリア文学には、比較的「工場」を描いたものがより拗く、農村を描いたものがより多く現われている。このことは、我が国には真実の意味で「工場」の中から生れた作家が未だ出て居ない、そして多かれ少なかれ農村の影響の下に生長した作家が比較的多いのだ、ということを裏付けている。そしてそれはまた、真実の意味での「プロレタリア文学」が未だ生れていないのだということを裏書きしているものに外ならない。同時にまた、プロレタリア文学としての「農民小説」も未だ現われていない、ということを報告せざるを得ない。

だが「農民」を描いた短い作品は、無統制にわれわれの前に転がっている。それらの作品は全く文字通り無統制に生産されつつある。そしてそれらの作品はどれもこれも一言で云えば「農民的」であり得る。

それらの「農民的」な作品は、だが、次第にプロレタリア文学としての相貌に変りつつある。それはすでに名を成している所の作家の側に於てか、或は厖大な貧農（半プロレタリアート）の中からか、何れにしてもそれは生れなければならないし、また生れるであろう。

後者については何にも云い得ない、それはまだ生れていないのだから。然し、前者のすでに「作家」たる名をなしている人々については云うことが出来る。私は特定の二三の「農民作家」を捕え、その作品を通じて作家の思想的立場を検討すると共に、「農民文学」の具体的な問題に突入して行こう。

私は、先ず黒島伝治の有名な短篇小説「農夫の鞭」を取り上げる。この作家には別な思想的動向――反戦争主義的な幾つかの作品がある。が、大体に於て彼は「農民作家」として我々の前にその「農民的」面貌を現わしたのである。

「農夫の鞭」は彼の写実的な特色を語るに相応しい作品である。そこには典型的な小作人の暗い生活と、搾取者への退っ引ならない反抗とがある。全体としての印象は、生活の暗さである。それは悲惨さにまで暗い。

何故に小作人の一家が、かかる悲惨な境界に追いつめられているか？ 作者の用意ははじめから極っている。それは地主の搾取が齎す！ で、筋書通り作品の上に置かれた作家の思想的なポイントは悲惨さの中からの退っ引ならぬ反抗である。しかもその悲惨さは、小作人の生活を描く場合の前提条件として、初めから作者の概念となっている所のものである。多かれ少なかれ、前提的、条件的概念としての悲惨さは、作者のセンチメンタリズムの再現に外ならない。

作家が、そんな形象（悲惨さの）を捕えるのは、実は題材そのものの全き姿であるからではなくして、読者の心理的、意識的要求が作用して、作家をしてその「形象」を捕えしめるのである。手っ取り早く云うならば、作家の心理的イデオロギーと、全体としての読者の心理的イデオロギーの交互作用が、作品の上に於いて一致する。それが芸術の形象を決定するというにある。

作家が意識すると否とに拘らず、芸術は一定の層を目安に置く。その一定の層と作者の交互作用が全体として作品の思想的立場を決定的ならしめる。黒島伝治の作品は、だからその遅れた思想的立場のゆえに、自覚した労働者、農民には向かない、がそれにも拘らず遅れた層には役立ち得るであろう。繰返して云うならば、そのセンチメンタリズムのゆえに！

が、黒島伝治には他の一面がある。それは彼が写実的な手法を以て、農民の特殊性を巧みに捉え得る、そういった手腕は多くの読者を喜ばせることが出来る。が、それらのことが直ちにプロレタリア文学にとって重要であるのではない。その特殊性の上に、センチメンタリズムをではなく、一貫した革命精神の貫いた作品を築き上げなければならない、そのことが重要なのである。

黒島伝治と略同様なことがあてはまる作家として、平林たい子がある。短篇「夜風」がその特色的な作品であるが、この作品に展開された作家の思想は、黒島伝治よりもはるかに遅れた——或は全く混乱そのものである。この作家のもつ反抗精神は悲惨さのための反抗精神であるかに見える。それはプロレタリア精神ではなくして、無政府主義的反抗意識の無統制な露出である。

平林たい子よりは無統制ではなく、だが、プロレタリア的であるには未だしい農民作家として詩人上野壮夫及び本庄陸男がある。前者は革命的ロマンチシズムの詩人として多くの優れた詩作を示しているにも拘らず、散文作家としての彼は全く思想的、叙情的低徊の中にある。後者は自然主義的作風から抜け出ていない、という点で他の農民作家よりはずっと低く評価される。

これらの作者よりも、ややプロレタリアートの側に移行しつつある作家に山本勝治がいる。短篇「十姉妹」がその作品の一つである。彼は「十姉妹」に於て、農民運動に参加している青年の古き家庭に於ける因襲との闘争を示している。それは農村に於ける新しい主題ではある。が家庭に於ける因襲との闘争は、個人主義的色彩をもって現われる。多くの貧農階級にとって、かかる没落した小地主の個人主義的なセンチメンタリズムは、問題とはなり得ない。そして、それは個人主義的センチメンタリズムの故に、発展を持たない主題である。（この作家は自殺したと聞く。何故に自殺したか分らないが惜しい気がする。）

最後に、特色的な農民作家ではないが、プロレタリア文学としての「農民小説」を示した作家として、中野重治を挙げることが出来る。それは僅かに長篇の最初の部分として現われた「鉄の話」（その一）によって示された。「鉄の話」（その一）に展開された作家の思想的立場は、以上に挙げた誰よりも高く評価される。しかも、その高い思想的立場にも拘らず、作家の努力は大衆性の方向へと突入している。それは非常に簡単な、直截な表現で小説を纏め上げているという点にある。この作品は、次に現われるべきプロレタリア文学としての「農民小説」のある意味での一つの指標となるであろう。

中野重治の「鉄の話」（その一）については、それが長篇の一部であるがゆえに多くのことは云い得ない。

四、結　論

結論として何が云い得るか？　我が国に於ける農民作家の多くは遅れた思想的立場に居るがゆえに未だプロレタリア文学としての「農民小説」が現われていないということである。多くの作家は、センチメンタリズムの上に、自己の「革命文学」を打ち建てようとしている。だが、われわれにとって必要なのは、センチメンタリズムではなく、それとは反対の農民の特殊性の中の新しい動き――プロレタリアートの動きを捉えること、そのことが必要なのである。

従って「農民小説」は多く農民に読まれなければならない。しかも動きつつある農民は自己の生活のジメジメした再現をではなく、革命的なヒロイズムの文学を望んでいる。

何故に多くの作家が、農民のヒロイズムへの動向に添わないで、センチメンタリズムや或は革命的ロマンチシズムの古いモメント（それは現実の農民の生活に多く共通した世界ではあろう。が、それらのものはプロレタリアートへの農民の道にとって不必要だという点で、すでに古いといわなければならない）にのみ終始しているのであるか？

それは、作家が闘争から隔離された自己の生活からのみ

作品を生み出そうとしている、という不可能であるべき理由によって説明される。現実の農民の歩みから隔絶しつつ、どうして現実のプロレタリアートへの結合に必要な、そして可能なモメントを発見することが出来よう。

我が国の農民作家は、もっと現実の農民の生活に絶えず触れて行く必要がある。

（一九二九年十一月世界社刊「プロレタリア芸術教程」Ⅱ所収）

文芸批評の座標について

―文学的戦術論の一部として―

大宅壮一

一

「一切の芸術は宣伝である。全般に亘って遁れるすべもなく宣伝である。或時は無意識にかも知れぬが、多くの場合は故意に宣伝である。」――アプトン・シンクレーア

「宣伝」という言葉はさまざまな夾雑物を含んでいるが、この場合の、否、正しい意味での「宣伝」とは何を意味するか？

シンクレーアは、それをスタンダード辞書に求めて「見解乃至行為の進路を支持するために組織的に捧げた努力」と解している。「宣伝」という言葉をこういう意味に解すれば、すべての文学は宣伝であるといったところで、ブルジョア美学者、例えば谷川徹三氏が主張するように、それは決して「シンクレーア的浅薄でなければ誣妄」でもない。

文学的活動の目的は、作者の内面生活を出来るだけ具体的に表現することによって、最もエフェクティブに読者にはたらきかけることにある。読者にはたらきかけること、読者に訴えることが、文学という技巧的な形式を通じて組織的に行われるならば、もちろんそれは完全なる宣伝である。

従って、文芸作品を評価する場合には、その作品に於いて、何が、如何に宣伝されているかを検討しなければならないことは、いうまでもない。芸術は宣伝でないという主張それ自体が、ブルジョア的欺瞞を目的とする一つの宣伝である。

二

カント以後のブルジョア美学に於いては、芸術の功利性

が極力排撃せられた。だが、功利性の排撃それ自体が、支配階級の意識的若しくは無意識的功利性から生まれたのであって、プロレタリア美学はこの功利性を率直に承認するばかりでなく、更に進んで、もっとも有効にそれを行使することから出発しなければならない。

文芸作品の価値は、その作品がそれを享有するコンミュニティに及ぼす効果によって決定される。これは価値決定の原則である。もっとも正当な、もっとも健康な価値規定である。このことは文芸作品のみならず、価値を決定するすべての場合にあてはまる。

然るに、往々にしてこの原則が歪められて、価値決定の規準がアブノーマルな方面に向って発展することがある。

例えば、椅子卓子の家具類の価値は、原則としては、われわれの日常生活に於けるそれらの有用性によって決定される。この場合に於ける価値決定の主権者は、その価値の生産者ではなくて、その使用者である。だが、生産者と使用者の間にしばしば取引が繰返されているうちに、生産者も、使用者の価値決定の基準を習得する。そしてなるべくその基準に適合するような価値を生産することにつとめる。その結果、価値の生産者は、この場合でいえば家具製作者は、その製作品を市場へ出す前に、前以って自らその製作品の使用者の立場に立ち、後に使用者が下すであろうところの価格を予想する。かくて幾度も繰返された経験は、製作者の予想額と、使用者の決定額との間の開きを極度に縮小する。その結果、両者の取引に於いて、価格に関する面倒な交渉が省かれ、製作者の予想額がそのまま使用者の決定額と完全に一致する、つまり、「正札附、厘毛引きなし」でもって、商品が売れて行く。

この場合、一見、価値の決定の主権は、価値の使用者からその生産者の方へ移動してしまったかの如き幻想が生じる。わけてもその価値生産者が、この幻想に捕われ易いものである。そこで、彼等はこの幻想に導かれて、価値決定の原則をば、自分達に有利なように歪曲し、ときには全くアブノーマルな価格を自分達だけで勝手に設定して、それを使用者に向って強制しようと努力する。

かくて正当ならぬ不合理な価格が発生する。そしてそれは、彼等のギルド制が市場を独占し得るほど強固であったり、他に有力な競争者が現れなかったりした場合には、人為的にある程度まで維持されて行くものである。だが、それには限度がある。ついにこの不当な価格を維持することの出来ないときが来る。価値決定に関するこの幻想的主権が、その本来の所有者たる一般使用者即ちコンミュニティの手に還って行く。

それは丁度普通選挙によって選ばれた代議士のようなものである。彼等を選んだものは選挙人であるが、彼等は、普通のブルジョア代議士は、選ばれた瞬間から、選挙人の意志に反して、勝手な行動をする。

従来の文壇的文芸批評は、丁度それと同じであった。従

来の文芸批評家は、コンミュニティの意志を代表しているのではなくて、文壇のギルド的利益を代表し、コンミュニティの意志から独立して、彼等が勝手に決定した価格をコンミュニティに強制していたのである。

最近に於ける文芸批評界の混乱は、私が別な機会にしばしばのべたように、文芸作品の文壇的価格の解体、文壇的正札の破棄に基づいているのである。

では、それに代る文芸作品の新しい価格は如何にして決定されるか？　新しい正札は如何にして作られるか？

三

文芸批評の基準に関しては、さまざまな異説があり、従って又それをさまざまな標準に基づいて分類することが出来る。

第一に、批評的基準の階級性を認めるものと認めないものとに分けることが出来る。しかしながら、認めない方、即ち芸術的価値の評価はあらゆる階級を通じて不変であるという説は、それ自体階級性を帯びたものであって、それを支持するものは、ブルジョア美学者だけである。

第二に、批評的基準の時代性を認めるものと認めないものに分けることが出来る。だが、この場合も、永遠不変の批評的基準があり得るなどというような妄想に捕われているのは、ブルジョア批評家以外にない筈である。

けれども又、それとは別な意味に於いて、文芸批評に一種の超時代性を認めている文学者が、プロレタリア文学者の間にも存在するのである。

林　僕は政治的情勢とか社会的情勢の刻々の変化によって左右されない所の一つの根本的の批評原則があると思う。芸術的価値というものは社会的価値の一種だ。だから社会的価値の一種としての芸術的価値に対してマルクス主義者には相当に長い期間に通用する一定の文学価値観があると思う。それに依って凡ゆる吾々の作品が批評されるのであって、現在のようなビラなどが非常に必要視される時に此作品はビラ的要素を備えないから詰らないという風な部分的の批評は可能だけれども、それは芸術批評ではない。社会的批判の基準があると思う。

大宅　例えば、ブルジョアジーの上昇期の文学と末期の文学と××の近づいた時の文学という風に分類して、その上での批評の基準が出て来るというのかね。

林　そうじゃない。

大宅　ではあらゆる時代を通じての批評の基準というものを定めるのか。

林　例えば、ゲーテに対してブルジョア批評家も一定の批判を加えプロレタリア批評家も批評を加える。そしてブルジョアのゲーテ観とプロレタリアのゲーテ観は、社会的情勢の刻々の変化に依ってくるくる変りはしない

と思う。

大宅　しかし、社会的観点から見れば、或作品の社会的価値は、それが必要視される度合に応じて変って来るのではないか。

林　それは社会的価値の中の一種である政治的価値とか経済的価値とかその種の部分価値によって芸術を批評する場合だ。政治的に見てこの文学は非常に詰らない。現在のスローガンの実現にはそういうものは役に立たない。そういう風な批判は行われ得る。併しながらそれは政治的価値……（一九二九年五月「新潮」合評会）

以上の引用文が明らかに示しているように、林君の説は一種の文学的価値の恒久論である。マルクス主義の観点からみたすべての芸術品（マルクス主義的作品であると否とを問わず）の価値は、あらゆる時代を通じて、少くともマルクス主義が地球上に存在する全期間を通じて、恒久不変なのである。

私といえども、もちろん、マルクス主義的価値論の原則を否定し、社会的情勢の刻々の変化に伴うて、天気模様のように絶えず移動し変化して行くものであると考えているのではない。

私が前記の合評会に於いて問題にしようとしたのは、マルクス主義的価値論の抽象的原則の不変性若しくは可能性ではなくて、その原則に基づいて個々の価値を決定する場合に、一作品の価値は、マルクス主義的見地から見れば、あらゆる時代を通じて不変であるか、それともそれは社会的情勢（政治的並に経済的条件）の移動に伴うて変化して行くものであるかということである。

マルクス主義的文学論の原則としては、社会及び人生の唯物弁証法的把握とか、集団主義的イデオロギーの浸透とか、私有財産的精神の××とか、「目的意識」的でなければならぬとか、又形式に関しては、プロレタリア・リアリズムの厳守とか、その他さまざまな原理を挙げることが出来るであろう。

これらの原理は刻々の社会情勢の変化によって何等の影響をも受けないものであることは、いうまでもない。だが、問題は、これらの原理を掲げて個々の作品に臨んだ場合に起って来るのである。

文芸批評は、少くともマルクス主義的文芸批評は、物理学的諸原理に基づいて、遊星の重量を測定するようなものではない。前にも述べたように、文芸作品の価値は、すべての価値がそうであるが、文芸作品のそれ自体の内部に静止的に包含されているのではなくて、その作品がそれを生んだコンミュニティに与える効果の質と量とによって決定されるのである。そうだとすれば、その作品が働きかける外的条件、即ち社会的情勢の変化は、当然その作品の評価に、本質的な影響を与えずにはおかないであろう。

然るに林君の考え方は、あまり静止的である。抽象的原則が不変であるからといって、それが実際的に適用された

場合の価値関係も不変であると考えるのは、マルクス主義的思惟の本質に反するものである。

例えば、林君の選んだ例に従っていえば、ゲーテとマルクスとの関係は、地球と太陽との関係のように、一定不変のものになってしまう。もちろん、過去の作品であるゲーテの諸作と、マルクス主義文芸論の抽象的原則とを併列すれば、その間にはほぼ一定の、すべてのマルクス主義批評家に共通な、「マルクス主義者のゲーテ観」が成立するであろう。

しかしながら、ゲーテは百年前に死んだが、彼の作品は今なお生きている。そして今日の社会の或層に向って積極的に働きかけている。ゲーテは、墓場で眠っているが、彼の作品は動いている。元気に世界中を飛び廻っている。もっとも、昔は全ドイツの殆ど全社会層にアッピールしたが今は全世界の有識階級の一部に重宝がられているにすぎない。そして彼の作品のアッピールの内容と強度とは、刻々に変りつつある。

従って同じゲーテの作品でも、それがアッピールする内容と強度とが変って来れば、作品そのものが変ったのと殆ど同じ結果になりはしないだろうか？

こういう考え方からすれば、ゲーテの価値は決して不変ではない。私が問題にしているのは「マルクス主義者のゲーテ観」ではなくて、「現代社会に於けるゲーテの価値」を、マルクス主義的立場から実測しようとするのである。

林君の主張するように、「マルクス主義者のゲーテ観」で満足するならば、もしも社会的発展の或段階に於いて、一人の偉大なるマルクス主義的文芸批評家が出現するか、或いは又数人のマルクス主義的批評家の協力によって、「マルクス主義者のゲーテ観」が完璧の域にまで達したとすれば、それから後は如何なるマルクス主義的批評といえども、ゲーテに関しては、何等研究し、批判し、検討し、再吟味し、再評価する必要がなくなってしまうであろう。既に確立したゲーテ観が絶対の権威をもち、後代の批評家はただ、わずかに前代の批評家の瑕瑾（もしそんなものがあるとすれば）の補正に終始するだけであって、新しい時代に適合する新しいゲーテ観を樹立する必要が全然なくなってしまうであろう。

しかしながら、マルクス主義的文芸批評の任務は、過去若しくは現代の作家とマルクス主義との関係を、静止的に、超時代的に決定することだけにあるのではない。もちろん、それも重要な意義のある仕事の一つではあるが、それだけでは、もっと重要な、もっと効果的な仕事の分野がとり残されてしまうのではあるまいか。

更に進んで、われわれは、過去若しくは現代の作家及び作品を絶えず監視し、再吟味し、それが現在のわれわれの生活に働きかける内容や強度を検討することによって、それらを再評価する必要がある。

然るに、林君のような批評的態度を墨守すれば、一種の新しい内在批評を樹立することになりはしないか。それがどんなに新しくとも、どんなにマルクス主義的であっても、内在批評である点に於いて変りがない。しかしながら、マルクス主義文学批評は、かかる内在批評を克服し、その上に出ることから出発したのである。

嘗てレーニンはトルストイを批評したことがある。若しこのレーニンのトルストイ評がマルクス主義的にみて完全無欠なものであり、あらゆる時代、あらゆる社会を通じて、もっとも優秀な、もっとも効果的な（これが大事である。何となれば、批評行動それ自体も創作行動と同様に、最大の効果を、シンクレーア流にいえば、「宣伝」を目的とするものであるからだ。）批評であるとするならば、各国各時代のマルクス主義文芸批評家は、トルストイに関しては今後ただレーニンの批評を紹介、普及、解説すれば足ることになるであろう。

だが、厳密に云えば、レーニンの批評は決して、純粋マルキシズムの立場から、抽象的に、即ち超時代的にトルストイを批評したのではない。彼の批評には、かかるマルクス主義文芸批評の公式以外に、当時のロシアの政治的経済的情勢のもとにおけるトルストイの価値を論じた筈である。

トルストイに対する評価は、プロレタリア××直前若しくは直後のロシアにおける場合と、反動の嵐に包まれている現在の日本に於ける場合と、決して同一不変であり得ないことは明らかである。

日本のみに就ていっても、白樺勃興時代と今日とを比較してトルストイが日本の読書界に同一の影響を与えているとは考えられない。一作品の影響の内容及び強度が変れば、その作品の時代的価値も、当然変化する筈である。ひいては又、その作品に対する批評家の態度も変らなければならぬ。

このことは、文芸以外の分野、例えばマルクス主義と封建的遺制との関係について考えれば一層明瞭である。マルクス主義と封建的遺制との間の原則的関係は、各国各時代を通じて概略的には規定し得る。しかしながら、日本の「現段階」に於ける両者の関係、及び後者に対する前者の戦術を規定することは、前の原則論の場合の如く容易ではない。多くの異説と論争の生じ得る余地が、現に存在しているように、存在し得るのである。

重ねていうが、私が問題にしているのは、かかる抽象的原則論ではない。いわば、マルクス主義文芸の戦術論である。こうした戦術論が、厳密な意味に於いて文学論でないと主張するものがあるとすれば、彼は芸術至上主義者か、然らずんば平林初之輔流の形式主義的二元論者である。

四

更に進んで、前記の「新潮合評会」に於ける林君の主張は、彼の論敵が私から金子洋文氏の方へ移動して行ったときの速記録を見れば一層明瞭に、一層具体的に現れている。

大宅　そうすれば、或作品の価値を決定する場合に、その永久的価値と時代的価値と、二重に採点しなければならぬことになる。

林　そうじゃない、芸術的価値にも、それに対する基準がある訳だ。政治的価値に依って批判すればそれは別な批判になって文芸批評じゃなくなる。

大宅　僕は一つだと思う。

金子　僕の「地獄」——此処で自作の例を引くのは気がさすが、あの作品の良否はさておきあの当時ではあの観点とあの程度の争議で済ませることが出来た。併し今だったらプロレタリアの芸術として僕は自らその価値を認めることが出来ない。第一に観点がいけない。ことにあの作品は運動の尖端を示そうとしているのだから運動が今日のように変化し発展している場合ああ云う作品が現れたところでプロレタリア文学に何物も加えることは出来ないし、効果もないと思う。

林　僕はそれは違うと思う。何故ならばあなたは秋田のああいう情勢に於いてあの当時あの作品が若し農民から読まれたとすれば、一定のいい社会的影響を及ぼし得たというのでしょう。処があれは秋田の農民にはまだ殆ど読まれていない。しかも僕はあの作品の価値を認める。何故なら、それは是から生長する農民に現在及び将来政治的××後に於いてもどんどん読まれることだろう。そして一定の効果を与え得る。

大宅　「地獄」の価値を決定するものは「地獄」それ自体ではなくて、外的条件即ち社会情勢だと思う。

林　それは違うな。

以上の引用文によって、私が今ここで問題にしようとするのは、金子洋文氏作の「地獄」が今日なお価値をもっているかどうかということではなくて、この作品が、発表されたときと今日と比較して、その価値に移動があるかないかということである。

林君の主張は、マルクス主義文学論には、各国各時代を通じて普遍妥当的な、何等外的条件に動かされることのない、自主独立的な価値基準があるのであって、「政治的価値によって批判すればそれは別な批判になって文学批評じゃなくなる」というのだ。

だが、林君のこの立場は、既に左翼文芸陣に於いて清算し尽されているかの如き観を呈している例の平林初之輔氏の形式主義的二元論と相通ずる一面をもっている。彼は「社会的価値の中の一種である政治的価値とか経済的価値とかその種の部分価値によって芸術を批判する」ことを斥けているのは正しいが、私は決してそういうことを主張しているのではない。

私が殊更に、「現段階」という流行の政治的テクニックを避けて、わざわざ「社会情勢」といったような、微温的な言葉を用いたのは、林君のいわゆる「部分価値」たる狭義の政治的価値や経済的価値のみによって文学を批評せんがためではなく、もっと広い見地、「社会的価値」を構成するさまざまな要素を考慮に入れているからである。（このことについては、拙稿「多元的文壇相」中に詳述しておいたから参照されたい。）

もっとも、「社会的価値」を規定する多くの要素中で、政治的経済的要素が比較的変化を受け易く、その他の要素は、かなり長期に亘って、恒常的に見えるが、それらといえども決して全然変らないのではない。

今「社会的価値」を規定する要素、ＡＢＣＤＥ……のすべてが可変的であるとするならば、それらの総和としての「社会的価値」の基準も亦、変らざるを得ないことは、明らかである。

然るに、林君にすれば、これらの部分的価値の変化は、その総和たる「社会的価値」に何等の影響をも及ぼさないというのである。

又林君は、これらの諸要素の中から「政治的価値とか経済的価値とかの如き部分価値によって芸術を批判する」のは、文芸批判じゃないといっているが、「社会的価値」を規定する諸要素の中でもっとも可変的な、もっとも指導的な要素が表面に現れて、あたかもそれのみによって規定されているかの如き外観を呈するのは、やむをえないことである。

カルヴァトンなどもいっているように、同一の力で同一の方向に発射された弾丸でも、発射点よりの距離や、これが落ちる地点の性質によって、著しくその効果を異にするものである。従って築城法に於ける新技術の発見は、当然大砲の鋳造法にも根本的に影響せざるを得ないのである。

それ故に大砲の価値は、大砲の構造にあるのではなくて、その威力にあり、その威力はその破壊の対象物によって規定されるのである。この両者の間には、密接な相互関係があるのであって、一方に於ける変化は必ず他方に何等かの影響を与えずにはおかないものである。

このことは文芸作品の価値を決定する場合にも、文学的技術の優劣を論ずる場合にも、そのままあてはまるのである。

私の主張は、作家が創作する場合には、その出来上った作品が発表されるその時代の、そのコンミュニティの情勢、わけても政治的経済的条件を考慮に入れて、もっとも価値ある内容をもっとも有効に表現すべきであるというのである。

同様に、批評家が作品を批判する場合にも、その作品が、発表されるその時代の、そのコンミュニティにとって、もっとも価値ある文学を第一に推すべきであるというのである。

五

前にも述べたように、私の主張は文学的戦術論である。従ってそれは、実際問題にぶっつかると一層明白になる。

例えば、聖書は、それが出来た当時――イエスが真に貧しきものの味方であったときと、それが封建的勢力に利用されたときと、更にブルジョアの護符となったときと、その価値に著しい相異のあることは、いうまでもなく明らかである。

もちろん、原則論としてのマルクス主義的聖書観というものは、各国各時代を通じて、比較的不変なものであろう。

だが、一人のマルクス主義的文明批評家の聖書に対する態度は、彼の聖書評が発表されるその時代の、そのコンミュニティの社会的情勢によって、著しく異るものであり、又異らなければならないものである。

聖書を今なお、私の言葉でいえば、直接価値と信じ、その信仰によって資本主義的社会組織を直接間接に支持しているものが多く残存している社会若しくは時代のマルクス主義的聖書評と、プロレタリア××が完成し、唯物弁証法的世界観乃至人生観が、コンミュニティのほとんど全成員に普及し、聖書に書かれたる事実は完全なるお伽話となり、しかもなおそれが人類にとって貴重な過去の文献となって残っているときの聖書評との間には、かなり大きな開きがあるであろう。

もちろん、この二つの聖書評の差異は、全体としてのマルクス主義的聖書観の中の何れの一面を強調するかということに基づいているのであるが、その力点の置処によって、同じことをいっても、その効果が著しく異るものであり、ときには本質的に相反するものとなる場合が多いのである。

現に、林君は先月の「中央公論」に於いて、「歌舞伎とプロレタリアート」と題する論文を発表し、それを次ぎのような言葉で結んでいる。

「プロレタリアートは商人文化としての歌舞伎には何の未練も持たぬ。しかし、その三百年の伝統、劇場人の粒々たる苦心の結晶としての演劇的長所を正しく評価することに決してやぶさかでない。否、真に歌舞伎の長所を理解し発展せしめ得るものは階級としてのプロレタリアートのみである。」

しかしながら、歌舞伎が今日のブルジョア社会に於いて、如何なる勢力を有し、その勢力が如何なる方向に向って利用されているかは、聡明なる林君に今更説く必要がないであろう。

問題は、林君が如何なる効果を目的としてこの論文を書いたかということである。

「近代ブルジョア階級の手中にある限り、歌舞伎はこれ以

上の発展を望めない。退化する一方である。ブルジョアジーは、歌舞伎を発展し洗練する代りに、ますますそれを俗化し、終にはそれが有する『世界的価値』をさえ無に帰せしめかねないのだ。だから歌舞伎自らを生かし新しき速度の中にその演劇性を生かして貴い自己脱化を行うためには、それはブルジョアジー以外の階級に支持者と担当者とを求めなければならない。新しき担当者として、其の候補者として、近代的インテリゲンチャとプロレタリアートとが登場する。」

之によって見れば、プロレタリアこそ歌舞伎の真の味方であり、支持者であるという事になる。林君は、自分の頭の中で理想化した歌舞伎を、「ブルジョアジーによって俗化され、低化された」現実のそれと対立させることによって歌舞伎一般を排撃する代りに、その熱心な讃美者となっている。

だが、実際的には、現実の歌舞伎以外に、純粋の歌舞伎などというようなものはありえない。ブルジョアジー勃興前の歌舞伎がそれだとしても、それは要するにただその時代の歴史的産物にすぎないのであって、いくらプロレタリアの世界が来たって、そんなものが再び甦って来る筈はないし、仮りにそれに似たものが出来たとしても、そうした歴史的、社会的条件がそれに伴わない限り、同じように迎えられ、同じような効果を与えうるものではない。

われわれの間で問題になるのは、今日あるがままの歌舞伎あるのみである。そしてそれをわれわれが如何にみるかということだけである。

然るに、林君は、「歌舞伎のもっている世界的意義——その純粋演劇性、それがもっている芸それ自体、形式それ自体の独立性」(傍点林君)を強調することによって、実際的には、今日の歌舞伎の当事者、及び林君の軽蔑している今日の歌舞伎の観衆に、歌舞伎一般若しくは純粋歌舞伎の名をかりて、今日の歌舞伎の偉大性を強調するのと、同一若しくはそれに類似した効果を与えている。

しかしながら、今日及び将来の世界に於いて歌舞伎がなお何等かの価値があるとすれば、二百年の間に鍛え上げられた技術的価値、林君の言葉に従えば、「その純粋演劇性、それがもっている芸それ自体、形式それ自体」(同じ内容を表現しても、用語によってその与える効果に著しく相異がある)あるのみで、それはただ間接価値の一種にすぎないのである。

だが、われわれは、歌舞伎の技術的価値をあまりに過大に評価してはならない。日本人を自分達より遥かに低い文化的水準にいる民族だと考えている外国人が、たまたま歌舞伎劇に、予想外に洗練された技術を発見して、お世辞の雨を降らすのを、そのまま真に受けて、歌舞伎が今日及び今後の社会にも偉大な「世界的意義」をもった芸術だなどと考えてはならない。

仮りに又、歌舞伎の技術的価値が、事実世界演劇史上稀

にみる高い地位を与えられているとしても、その技術は、従来の歌舞伎的な内容を表現する場合にこそ、百パーセントに発揮されるのであるが、それが将来のプロレタリア演劇中に有効に摂取されうる部分は、林君が考えているほど大きなものでないと想像される。（それについては、拙稿「文学の技術的法則の時代性及び階級性」を参照されたい。）

たとい歌舞伎が、プロレタリアの祖国であるロシアに於いて如何に歓迎されようとも、如何に意義づけられようとも、日本のマルクス主義的文芸批評家たる林君が、現段階に於いて、ロシアに於ける批評をそのまま踏襲することは、その効果の点からいって、決してマルクス主義的でないばかりでなく、むしろ反対の、反動的な役割を演じないとも限らない。同じマルクス主義的歌舞伎評でも、プロレタリア××後のロシアに於けると、資本主義的並に封建的勢力が今なお根強くはびこっている日本に於けるとは、決して同一ではなく、又決して同一であってはならないのである。

このことは、歌舞伎のみならず、すべての文芸作品を批評する場合に、完全にあてはまるのである。マルクス主義的若しくは反マルクス主義的作品の場合はもちろんのこと、非マルクス主義的作品にも、そのまま適用されるのである。

例えば、目下わが国で全盛を極めている探偵小説に対する批評の如きがその適例である。

探偵小説一般は決してマルクス主義と相反するものではない。中には、その科学性の点からいって推奨さるべきものもあり、又マルクス主義的な探偵小説も全然ないことはない。

だが、今日の日本で、多くの全集の中でもてはやされている探偵小説は、マルクス主義的批評家として、断然排撃すべき性質のものである。

又多くの探偵小説の構成要素となっている怪奇趣味や科学的興味は、それ自体必ずしも無下に排斥さるべきものではない。プロレタリアの世界が完成された暁には、歓迎さえされるであろう。科学的興味はもちろんのこと、怪奇趣味でさえ、平和な社会でその日の労働を了えた人々にとっては、手品その他の智的トリックと同じく、気ばらしの一つとして、喜ばれるであろう。

だが、問題は、今日の社会情勢のもとにおいて、それが如何なる役割を演ずるかということである。それについては、たといマルクス主義者でなくとも、事実の真相を洞察するだけの見識と良心とがあるならば、今日の社会に於いて探偵小説が演ずる役割は、阿片のそれと何等異らないことを承認せざるを得ないであろう。

六

これを要するに、マルクス主義的文芸批評の原則の一つ、しかももっとも重要な原則の一つは、与えられた作品が、与えられた時代に、与えられたコンミュニティに於いて、如何なる役割を演ずるかということを、作品評価の基礎条件とすることである。「時」と「所」を文芸批評の座標として承認することである。「現実」の「日本」をy x とし、その上に作品をおいてそれを評価することである。

（一九二九年七月「近代生活」）

敗北の文学

――芥川龍之介氏の文学について――

宮本顕治

一

「文人」という古典的な文学の相応わしいとされていた芥川氏の住んだ世界は、永い間、私にとってかなり縁遠いものに思えていた。この作家の「透徹した理智の世界」に、私は漠然、繊細な神経と人生に対する冷眼を感じるだけであった。成程それ等の色調は私の歩んで来た過去の世界――小ブルジョア的な故郷に閃めいているものであったけれども、その神経的な苦悶すら、根本的に私を揺り動かすものでなく、遠い世界に咲いた造花に近いものに思えていた。私は「余りにも人工的な、文人的な」という漠然とした印象より外のものを多く持っていなかった。

それは、一つは、氏の文学に対する私の味到力が足らなかったことに因ると同時に、氏が常用していた都会人的なチョッキが、氏の全貌を幾重にも包んでいたためでもあったろう。

所が、一九二七年度に著しかったこの「文人」の切迫した羽搏きと、その結論としての自殺は、氏をみる私の態度に強い変化をひき起さずにはいなかった。意外にも、私は、我々に近く立っている氏を発見したのである。私はこの時、氏の自殺が私を感傷的にしたのではないかと一応考えてみた。そこで、私は、新しく、厳粛に氏を見直さずには居られなかった。……だが、感傷のためではない。氏は、一生脱ぐことの出来なかった重い鎧を力一杯支えながら、不安に閉された必死の闘いを見せているのであった。その数種の遺稿と共に、最後に、我々に肉薄して来ているのである。疲労し切った自己の上に投げられた過渡時代の影を痛々しく語りつつ、氏を襲って来る必然的な結論に慟哭し

ているのである。そして、そのことは氏にとって、一つの異常な転身と言うより、氏の文学的出発点において、既に内在的に規定された結論への必然的な到着であったことも、再批判の後には知ることが出来るのである。

ここで、序論的に、氏の生活の型を新らしく振りかえってみることは、不必要でないであろう。

氏の生活圏が小ブルジョアのそれを出なかったことは明らかである。私は今、氏に似通った社会的範疇の人として、有島武郎氏を、連関的に想起することが出来る。過渡期の苦悶を生活した点において、二人は、最も典型的なインテリゲンチャの型を代表していると云えるだろう。しかも、私は、芥川氏の中に、より我々に近いものを感ずるのである。該博なブルジョア的教養と態度のために、有島氏は、今日尚、全集の刊行や評伝によって「大陸的風貌」「階級的苦悶」等をたたえられている。けれども、有島氏の持った苦悶は、未だ苦悶の中にも殉教者的な稚気を帯びている。故片上伸氏が批判しているように、啓蒙主義者——自得的なイゴイストにある——「理づめで自分の気持を片づけている点が氏の言うところを浅くし、平たくし、乾いたものにし、尤ものようでいて、真に心から受け入れさせる力のないものとしている」のである。のみならず、智識階級の役割に関するその理論付けすら、認識の小ブルジョア性に起因する誤謬に立って居ることも、今日においては明らかにされていることだ。痛み多い苦闘をみせた末年のニヒリズムの萌芽にもかかわらず、とにかく、有島氏の歩みには最後まで「愛」と「人道」について確信らしいものが匂っていた。遺書にある「私達は自由に歓喜して死を迎える」という言葉は偶然に書かれたものではない。

しかし、芥川氏の場合、我々の受け取るものは、より切迫した陰鬱な空気である。後に於て評論するけれども、そこにあるのは、困憊した神経の触手を通して、次第に意識されて行く「人生に対する敗北」の痛みである。恰然、氏は自分の辿っている路が「敗惨」に通じていることを自覚せずには居られなかったのである。

やがて「実践的自己否定」に到達せずには居られない後悔に満ちた自己批判が、末期の氏の中に磅礴している。その批判の中にもインテリゲンチャに課せられた重荷である懐疑や、自尊心から脱することが出来なく、それを決裂に至るまで神経の先に凍らしている。氏こそ、ブルジョア文芸史に類稀な内面的苦悶の紅血を滲ませた悲劇的な高峰であると言えるだろう。それこそ、市民的社会の開化期から凋落期に及ぶ文化的環境に育まれた記念碑的な存在の一つであろう。こうした芥川氏の文学を批判の対象とすることは、単に私の個人的なインテレストのみでなく客観的にも無意義でないことを信じている。

二

『プロレタリアートの眼からは、本質的に相敵対する所のイデオローグと、文学者の世界を正しい光明を以て照らすこそ、緊急事である」――フリイチェのこの言葉が、今私の前にある。

日本のプロレタリア文学も、ようやく「内容の革命」から「形式の革命」にまで自己をかためて来た。それは新しい困難な建設のために、可能な限りの文学的遺産を整理する必要のある段階に達している。ブルジョア文学は、未だ決定的には崩壊し去ってはいない。政治的、経済的の諸条件と共に、文壇は未だ支配的イデオロギーとしてのブルジョア的思惟と感覚の末期的繁栄を物語っている。この歴史的な転向期にあたって、「さまよえる」過渡期のインテリゲンチャが、凡そ如何なる文学に自己の表現を見出すかと云うことは容易に考え得ることである。傷き易い神経を持った彼等は、芥川氏の住んだ「孤独地獄」に「求められぬ平和」を求めて、自己の呻きを聞いているのではあるまいか。だが芥川氏に対する関心は、必ずしも、小ブルジョアジーの層にのみあるものではないであろう。プロレタリアートは時代の先端を壮烈な情熱をもって進んでいる。しかも、我々の前には、過渡時代の影が尙巨体を横えている。長い過去を通じて我々に情緒上の感化を与えて来た「昨日」の文学も、「わがコムソモールの机の上には『共産主義のＡＢＣ』の下にエセーニンの小さい詩の本が横わっている」。暗示するところのものを多く持っているこのブハーリンの言葉は、単にソヴェート同盟においてのみ考えられることであろうか。プロレタリアートの戦列に伍して、プロレタリアートの路を歩もうとしているインテリゲンチャの書棚に、党の新聞と共に、芥川氏の「侏儒の言葉」が置かれていないと誰が断言し得よう。曽つて私は、自己の持場で闘っているインテリゲンチャ出の一人の闘士が、一夜腹立たしそうに語ったことをおぼえている。「駄目だ！芥川の『遺書』が、――『西方の人』が、妙に今晩は、美しく、懐しく感じられるのだ。」

彼のみではない。青野季吉氏も「芥川氏の生涯とその死とは、私の心をとらえて離さないものがある。……私達は芥川氏を批判することは出来る。だが、芥川氏を捨てて顧みないことは出来ない。自分の中にも芥川氏があり、芥川氏の死があるからである」と云っている。そして又、林房雄氏が芥川氏の死によって、虚無的な気持ちを掻き立てられ、中野重治氏が芥川氏を「大層可哀そう」に思うのは、氏の中に感じる我々自身の残骸のためであろう。瞬間的な弱い残像にしろ、それが氏を近くに運んで来るのである。それ等がインテリゲンチャの肩におかれた致し方のない十字架であるにしろ、我々は、芥川氏との間におかれた距離を明かにしなければならない。この作家の中をかけめぐった末期の嵐の中に、自分の古傷の呻きを聞く故に、それ故にこそ一層、氏を再批判する必要があるだろう。いつの間にか、日本のパルナッスの山頂で、世紀末的な偶像に化し

つつある氏の文学に向って、ツルバシを打ちおろさなければならない。

三

一九一五年――芥川龍之介氏の文学的生涯の初まった時、氏の文学的傾向は、理智派、新技巧派等の名を以て呼ばれていた。

「芥川君の作品の基調をなすものは、澄み切った理智と洗練されたユーモアである。そして作者はいつも生活の外側に立って、静かに渦巻きを眺めている」と、当時の文芸批評家江口渙氏は、「芥川龍之介論」において述べている。思うに「理智的」「諧謔的」という評語は、十年に及ぶ氏の作家生活を通じて絶える事なく冠せられた非難であり、また讃辞であった。だが、これを以て氏の本質を示し得たとするならば、それは批評的不具であろう。理智的であり、諧謔的であることも、確かに氏の半面をなしている。だが、氏の全貌を語る上に、それは、一つのモメントを提供するに過ぎない。いや、或る場合には、それは氏の用いた都会人的な仮面でさえあったのである。我々はそうした「定冠詞」に対する芥川氏自身の抗議をすら見出す。

人物記「佐藤春夫氏」で、芥川氏は「僕のテンペラメントは厳粛である。全精神を振い起さなければ滅多に冗談も云うことは出来ない」と云って、「喜劇ならば君にはすぐ書けるだろう」との佐藤氏の言葉を誤解だとしている。また「侏儒の言葉」の中で次のように云っている。「偉大なる厭世主義者は必ずしも渋面ばかり作ってはいない。不治の病を負ったレオパルディさえ、時には蒼ざめた薔薇の花に寂しい頬笑みを浮べている……」ユーモラスな趣きを持った「鼻」「芋粥」「往生絵巻」等の作品を読んだのち、作者の微笑の底に憂鬱な渋面を我々はさぐりあてるであろう。「阿弥陀仏よや、おおい、おおい」五位の入道は、どのような破戒の罪人でも「阿弥陀仏に知遇し奉れば」浄土へ行かれると聞いて、こう呼ばわりながら、西の方を目指して進んで行く。そして道行く人から気狂い扱いにされながら、遂に餓え死んでしまう。だが、屍骸の口からは、いつかまっ白な蓮華が咲いていた。この「往生絵巻」はユーモラスな形式の下に、笑い切れない求道者の姿を書いている。正宗白鳥氏は、この作品の結末のまっ白な蓮華の咲く非現実的な描写を捉えて、芥川氏がリアルに徹することの出来なかった人だということの例証としている。勿論、我々は、別の意味で氏が現実を深く認識しなかったことを批判する。けれども、こうした偏狭な自然主義的批判は、永久に、作品の本質を理解し得るものではない。作者は「五位の入道」を愛している。憐愍を越えて、まじめに愛しているのだ。蓮華の花を咲かす事は氏の「あそび」ではない。枯木の梢に死んだ求道者に、心から詩的な頌辞を最後に手向けているのである。

ユーモラスな一面は多くの場合、氏の厳粛な精神の悲しい戯れであったのであろう。そうしたヴェールをかかげ見る時、我々は、氏がその文学的出発点において、既に「いたましき人」であり、理智と情熱の相剋に苛まれた人であることを知るのである。「頭には喜劇、心には悲劇」を持ったチェスタートンの賢人は或は氏自身ではなかったのか。氏の雙眼のいろは、既に、晴々しいものに遥に遠いものであった。

君看雙眼色
不語似無愁

処女作「羅生門」の扉に写されたこの文字は鬱悶を切歯して身構えた氏の、微かに洩した憂愁の声であろう。

「人生は二十九歳の彼には、もう少しも明くはなかった……」これは末期の氏が描いた初期の自画像である。

このように、氏の文学的生涯の初めに、既に、氏の人生は薄暗く煙っていた。氏は人工的に微笑もし、反語をも投げたけれども、それは本質的に氏を救うものではなかった。氏を捉えたこの不幸な手は、一体何物であろうか。二つの「大導寺信輔の半生」は可成り、瞭然と、氏の辿った半生を尽してこの疑問に答えている。「或阿呆の一生」と並んで珍らしく告白的な情熱にとんだこの作品には、「ある精神的風景画」と云う傍題がそえられてある。単に自伝的な要素を多く含んでいるのみでなく、これ等の作品は凛々とした気魄をたたんでいる点において、私の好むものである。この作品も無論、幾分かの「詩」を現実の中に溶かしているだろう、と同時に「侏儒の言葉」の逆説的表現をかりるならば、謔を通してでなければ語られない真実もあるであろう。

彼はごみごみした往来に駄菓子を食って育った少年であった。彼の家庭は貧しかった。彼等の貧困は体裁を繕うためにより苦痛を受けねばならぬ中流下層階級の貧困だった。彼はこの貧困を憎んだ。同時に豪奢をも憎まずにはいられなかった。彼は何よりも先に、退職官吏の息子だった。下層階級の貧困よりも虚偽に甘んじなければならぬ中流下層階級の人間だった。

学校も彼には薄暗い記憶のみ残すものだった。まことに学校は彼にとって貧困を脱出する救命袋に過ぎなかった。

彼は本を愛した。智的貪欲を知らない青年は、彼には路傍の人であった。実際、彼の友情はいつも幾分かの愛の中に憎悪を孕んだ情熱だった。けれども友情の標準は智的才能のみではなかった。上層階級に育った青年と握手する時、いつも針のように彼を刺す階級的差別を感じていた。

学生時代の彼は「ファウストの中の学生」のように、何でも精神的にえらいものになろうとした。しかし彼の発見したのは畢竟彼の大望の全部は夢に了るより外はないことだった。こう云う道程を経たのち、彼は自身の如何に無力かを発見した。こう云う空虚を感ずることは彼には恐ろしかっ

た。彼は或る春の晩、息もつまるほどの空虚を感じて自殺を考えた。こうした間にも貧困と不健康は彼を襲っていた。彼は時々目に見るように彼に英語や数学を教えた教師達の一生を髣髴した。彼等の一生は見渡す限り佗しい塵労や、病苦の影に沈んでいた。彼の一生もことによれば、彼等の一生よりも見すぼらしいものかも知れない。だが、彼はどう云う目にあっても、兎に角生きて行かねばならない。何の為に？ 何の為に？ この疑問はいつか信輔に厭世主義を教えていた。

芥川氏の辿った半生の陰影の多い道程は、断片的にではあるが、以上の引用的説明の中に窺うことが出来るであろう。

こうして、俊英な理智と、脆く、強靱な自我を持った一人のインテリゲントは、成長するにつれて次第に後の日の悲劇を孕みつつ、小ブルジョアジイの烙印を彼の世界観に焼きつけた。氏は「総てのものを本から学んだ」と書いている。しかも、皮肉にも「彼は厭世主義の哲学を一頁も読まぬ前に既に厭世主義者だった」のだ。

その頃、氏が友人恒藤恭氏に宛てた手紙の中に次の一節がある。

「僕はエゴイズムを離れた愛のあることを疑う（僕自身にも）。僕は時々、やり切れないと思うことがある。何故こんなにして迄も生存をつづける必要があるのだろうと思うことがある。そして最後に神に対する復讐は、自己の生存を失うことだと思うことがある。僕はどうすればいいのか分らない……。」

この表現の中においても、我々は小ブルジョアジイの諸属性の中で、「自我に関する思索」こそが、基本的な一線であることを知るのである。芥川龍之介氏の文学的生長に関して、漱石、鷗外の影響を特筆することは、常識的な真実とされている。しかし、それが主として創作上の手法にあったことを忘れてはならない。複雑なこの芸術的インテリゲントの人生観に、根本的な色彩を塗ったものは、云うまでもなく、第一に「中流下層階級の陰影」であった。「大導寺信輔の半生」は、一面、この小ブルジョア的自我の発展史であった。

「彼」はこの社会において、何等、伝統的な生活手段を持っていない。従って、生存を保証されず、絶えざる生活的窮乏の日蔭を自分の周囲に見出さなければならない。「彼」は、どうしても自分一個の頭脳に頼らなくてはならない。こうして、「彼」の唯一の縋り得る生活手段は、智的才能だけである。智識に対する「彼」の貪慾とも云い得る強烈な慾望は、「彼」の個人的特性であると同時に、ここにその社会的母胎を持っている。智識は第一に「彼」の生活上の武器であった。精神的格闘は何よりも殺戮の歓喜のために行われたものに違いなかった。ウォロフスキイーの評論した「バザロフ」におけると同じく「彼」の場合に

も、智識は個人的に最高の享楽を付与したのだ。後に「彼」の夢みたように何冊かの本の著者となり、博学、俊髦の名を与えられた。だが、「彼」の「豊富な智識」が著しく小ブルジョア的狭隘性を含んで居ることを鋭く指摘しなければいけない。

こうして「彼」の、行為、思索は、常に自我を中心として廻転している。「彼」の問題にするのは、本質的には自己である。「彼」はそれに没頭し、現実はともすれば自我のみであるように思って来る。そして最後に、「彼」は自我を愛する。しかも、外界は激しい刺戟と動揺を「彼」に浴せかける機会にみちている。「彼」は自己を防衛しつつも、ともすれば、孤独感や、空虚感に苛まれるのである。「彼」は「哲学」に失敗した後、芸術の内に入って行った。だが、一匹の犬も満足に描けなかった。自己の頼り得る唯一のものが無力であり、傷き易いものであることを発見した時、「彼」の世界はもう明るいものではなかった。けれども、「彼」は未だ絶望はしなかった。「彼」は自分で参った時にも、容易に弱音を吐かなかった。矜誇は悪徳であると同時に、当時の彼を鞭うつ生活のスプリングであった。

文壇の声望を負うて処女作集を出した日の芥川龍之介氏に、何故に、また、如何なる精神的陰影がかげっていたかを、私は大体しらべて来た。若し、彼が何物かに安んじていたとするならば、それは落莫とした孤独であったであろう。

四

「人生は一行のボオドレエルにも若かない」

二十歳の芥川氏は、こう云って書店の二階からみすぼらしい人生を眺めていた。この言葉ほど、氏の人生に対する軽侮と芸術に対する信仰を表現しているものはない。薄暗く黄昏れた人生の芸術の灯だけが僅かに、一切の懐疑的精神の外にあって、氏を照らしていた。「凡てのものは信仰とならずんば駄目なり。独り、宗教、芸術に於てのみならず」(香簡集)。ともすれば、空虚を感じ易い自己の生活に、芥川氏は執拗にかけ声を投げた。だが、白日の下に曝された現実社会は、いつも氏を不調和の絶望に誘い勝ちだった。こうした中に、氏は芸術を一本の杖として愛したことは当然のことであろう。芸術は秀麗な孤峰のように彼を力づけ、彼を動かした。まことに「芸道に精進せむとする彼の気魄は、りんりんと鳴りを立てるかの如く思われた」と云う恒藤恭氏の言葉は、芥川氏の芸術に対する態度をよく伝えていると云えるだろう。

芸術家の生活に材を採った芥川氏の作品は、鬱屈とした熱情のために力強い表現を受けている。「戯作三昧」「地獄変」「沼地」——これらの作品の主人公達を、共通に貫

いている事実は、現世的に彼等が決して幸福ではないことだ。「戯作三昧」の境地に落ちついているように見える馬琴すら、安住の人ではない。彼を理解しない俗衆に対する侮蔑、芸術と道徳との二元的相尅、愚昧な検閲官に対する痛罵、我々は馬琴の中に作者の姿を汲みとることが出来る。だが、「戯作三昧」の氏には未だ深い絶望はなかった。人生は塵労と倦怠にみちているにしろ、時に、「あらゆる残滓を洗って、新しい鉱脈のように輝く時があった」から。民衆に対する孤高な態度は苦悩というよりも、寧ろ矜持をもった張りを与えるものだった。「沼地」は短かい作であるけれど、狂人になった芸術家の不幸な一生に対して、作者は痛々しい敬虔な面持で立っている。「地獄変」は芸術家の狂気に近い魂が切実に描かれている作として、最も壮烈な色彩にとんでいる。芸術への精進の前には、いかなる野蛮な精進をも扱け出すことを厭わない芸術家の勝利――不幸な勝利がある。だが、絵師良秀はいつ迄も、野蛮な芸術的法悦に恍惚となっていることが出来なかった。このことは重要な暗示を持っている。道徳的な芥川氏の一面は、やっぱり、良秀に縊れ死の結末を与えずには居られなかったのだ。その前には一切を蹂躙して悔いない芸術的気魄を示しながら、氏のヒューマンな半面は、その蹂躙を妨げるのだった。芸術は氏にとっては最上の城砦ではあっても氏の全部とは成り得なかったことを、いみじくもここに知らされるのである。氏は芸術上の至上主義者とは成り得なかった。畢竟、氏は、芸術的な――甚しく芸術的な気質に住んでいながら、それに安住することが出来なかった。

「僕達の書いている小説も何時か、此の野呂松人形のようになりはしないか。僕達は、時代と場所との制限をうけない美があると信じたがっている。……しかし、果してそうありたいばかりでなく、そうあることであろうか」「野呂松人形」の中のこの言葉と次の氏の言葉とを比較してみよう。

「僕は詩の前には未だ曽つて懐疑主義者たる能わざりしことを自白す。同時に又詩の前に常に懐疑主義者たらんとつとめしことを自白す」――(須称、小説作法十則)――

両者は明らかに食い違っている。それは同一の確信に立ったものではない。が、恐らくこれが氏の真実の心であろう。むしろ、この二つの言葉は、氏が芸術至上主義者たらんとしつつも、芸術至上主義者たり得なかった矛盾を現わしている。「野呂松人形」の中に於ては、この相尅的要素はまだ平静な懐疑に止っていたが、晩年に及ぶにつれて、次第にそれは激しいものとなって行った。社会学的な文学概論の闡明を俟つ迄もなく、聡明な氏は、凡庸な作家達に声を合わして、恬然と「玉は砕けず」と云うことは出来なかった。と云って、氏の中に深く根をおろした芸術家的な魂は、それに苦痛と不安を感じて、ひそかに、「だが、玉は再び生れてくる」と安心せずには居られなかった。芸術

と社会についての二元的な動揺を、統一的な均整におこうとした努力を――捨鉢的な努力を、我々は晩年のエッセイの処々に発見することが出来る。

「文芸の作品はいつか滅びるに違いない。ボオドレエルの詩の響きも自ら明日は異るであろう。しかし、一行の詩の生命は僕等の生命よりも永いのである」――（文芸的な余りに文芸的な）――

「シェクスピイアも、ゲエテも、李太白も、近松門左衛門も亡びるであろう。しかし、芸術は民衆の中に必ず種子を残している」――（侏儒の言葉）――

我々は、ここに二十歳の芥川氏にみられなかった「芸術」に対する動揺をみるではないか。「いつかは滅びるであろう」。いつか、酷薄な社会的現実は、氏の芸術観に、悲壮な認識を与えずにはおかなかった。しかも、芥川氏は、「落莫たる百代の後」、氏の作品を愛する誰かに美しい夢を見せることを信じようとしている。氏の軽蔑していた民衆こそ、偉大なる創造力をもって、ゲエテを――そして、氏をも乗り越して突進するものであることを認めた時、芥川氏は、小ブルジョアジイのイデオローグに過ぎない氏の文学も、いつかは没落しなければならないという告知を、新興する階級の中に聴いたであろう。

「芸術は民衆の中に残っている」。そうだ。民衆が新しい明日の芸術を創造する。これは、事実上氏自身が自らに向けた否定の刃ではないか。あらゆる天才も時代を越えることは出来ないとは、氏の度々繰り返したヒステリックな凱歌であった。こうした絶望そのものが、「自我」を社会に対立さす小ブルジョア的な魂の苦悶でなければならない。

五

資本主義社会の凡俗性と醜悪な雰囲気は、芸術家芥川氏に嫌悪と退屈を呼び起すものだった。「僕は醜いものを愛する。僕はありのまま強くなりたい、大きくなりたい」――（書簡集）――、こう云いつつも、氏は安住し易い東洋的な咏嘆に休息した。現実に求めることの出来ないロマンチシズムの焔を、氏は歴史的な素材や、エキゾチックな世界、神秘的な奇蹟に求めた。だが、これが芥川氏の一面に過ぎないことを、我々は注意しなければならない。これを拡大することによって、いかに芥川氏が「渺茫の文人」として誤り解せられていることか。

「六の宮の姫君」は「運命」と名づけられたものの中にある蒼ざめた古典詩である。鷗外の歴史ものにみられるような巧緻な形式的完成を透して、それはいかにも美しい。鹿鳴館の「舞踏会」の中でも、作者はピエル・ロティと共に「我々の生のような花火」をみつめている。

「南京の基督」も、氏のロマンチシズムに溢れている。私窩子の抱いているクリストの夢に――儚ない夢に、氏は憐

慇と愛撫をそそいでいる。
が、私は「奉教人の死」の情熱を愛する。「なべて人の世の尊さは、何ものにも換えがたい刹那の感動に極わまるものじゃ」ここには、氏の前期の作品に多いシニシズムの鎧がない。たとい、南蛮的な情調に彩られていても、殉教の火を芥川氏は愛している。その他、「妖婆」「妙な話」等は現実に背を向けようとする氏のミステリアスな物語である。

現実は、だが、いつまでも氏にこうした情緒的な安住を許さない。そしてまた、人生観上のリアリズムは絶えず厳しく氏の神秘的な一面と衝突せずにはいない。同じく古典的な素材の中にも芥川氏は容赦なく人間の生ままの姿を描き出そうとする。封建的な権威から、人間的な悪と愚とを摘出して、それに冷笑を浴びせている。「袈裟と盛遠」「或日の大石内蔵之助」「将軍」「俊寛」「報恩記」「枯野抄」——これらの中に我々は、芥川氏によって近代的に、正当に云うならば小ブルジョアの心理的形態に飜訳された一系列を見るのである。

「袈裟と盛遠」は坊間に伝えられている「烈婦袈裟」を恋の恨みに生死する一介の一妻に描きなおしている。氏の作品の中では、大石内蔵之助も忠臣らしくなく、夕霧や浮橋の艶かしい姿を思い出したり、どこから来るともない憂鬱に佇んだりしている。

「枯野抄」もまた単に渺茫の趣きを覘っている作ではない。この作品に充分な渺茫や枯寂が現わされていないと云う室生犀星氏は、結局氏自身の好みを語っているに過ぎないであろう。一般的に云って、氏の作品にいつもそうしたものを発見したがるのは、芥川氏を余りに東洋的な文人としようとする鑑賞家的悪癖である。「悲嘆かぎりなき」門弟たちは、必ずしも嘆きの中の悦び——芭蕉の人格的圧力の桎梏からの解放の悦びを持たぬわけではなかった。彼等は「枯野に窮死した先達を嘆かずに、薄暮に先達を失った自分達自身を嘆いている」我々はここに、近代的個性の痛々しい自己省察を見せられるのである。

「将軍」は？　この将軍は、惨めにも手痛く嘲笑され諷刺されている。この「長者らしい」将軍の軍服を剝ぎ取りながら、作者は無智で、残忍で、打算的な将軍の裸体に冷笑的な嫌悪を示している。軍神の封建的な非人間性に罌罌している。それはいかにも巧みな抉出的な手法に終始している。そして私は、作者のこの手際に喝采を与えようとしたが、やっぱり次の瞬間、それを思い止まらねばならなかった。何故か、私はこの作品の全体的な構図に根本的な欠陥を発見させられたからだ。将軍と対蹠的に描かれた軍参謀に、スタンダールの箴言やユーゴーの歌を想起さしているうちに、作者は彼もまた軍人であることを忘れている。そして、それはモティーフに小ブルジョア的な限界性を持っているからだ。氏の嘲笑が封建的なものに向けられている

場合にすら、氏は小ブルジョア的な節度を脱することが出来ないのである。氏は結局爆弾を手にした実践的な嘲笑者とは遥かに遠いものであった。

これら――「袈裟と盛遠」から「将軍」にいたる諸作品を通じて、私は芥川氏の認識の対象が人間に置かれた場合、生理学的な自我を中心として把握されていることを知るのである。これは自然主義に基調を持つ心理曝露の型である。芥川氏はそうした歴史的人物画を描きながら、多くの場合つとめて作者の愛情と憎悪を静観的な理智の中に包んでいる。憂鬱な工人のように、憐愍とアイロニイを織りまぜて「致し方のない人間性の真実」を寒々と彫りつづけているのである。

人間性に対するアイロニイ、冷笑的剔抉の一面と共に、芥川氏は「人間らしさ」に対する愛情を不用意に洩している。「僕はどんな良心も持っていない。……僕にあるのは神経だけだ」――(侏儒の言葉)――「我々の愛するものはこの豪勇の持ち主である。常に善悪の観念を足下に蹂躙する豪傑の士である」「我々はこう云う旺盛なる『我』に我々の生命を暖める焔を感ずる。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感ずる」。――(岩見重太郎)――

芥川龍之介氏も亦あらゆる孤独な小ブルジョア・インテリゲントのように「善悪の彼岸」に立つことを愛していた。「矛盾せる二つのものが自分にとりて、同じ誘惑力を有する也。善を愛せばこそ悪も愛し得るような気がする」「自分は醜いものを祝福する」――(書簡集)――善悪を同一的範疇にみようとする心理的根拠を、我々は、現在社会に対する小ブルジョアジイの絶望的な不調和の中に見る。超人たることは、小ブルジョアジイにとって果して可能であろうか。我々はプレハーノフと共に次のように答える。

「善悪の彼岸に立つとは何を意味するのであろうか。これは一定の社会秩序の地盤の上に発生した善悪に関する一定の観念の領域において判断することが出来ないような偉大なる歴史的事業を遂行することを意味するのである」

かくて、氏の善悪を越えようとする努力が如何に不可抗的な矛盾に立っていたものであるかが理解出来るであろう。氏は芸術の前には、冷然と、道徳をも蹂み躙ろうとした。人間として失敗すると共に、芸術家として成功した泥棒詩人フランソア・ヴィヨンを、氏はいかに懐しんでいたことか。けれど氏の教養と禀性は、容易には氏に超道徳的な勇気を与えなかった。多くの人々の氏に関する追憶は、ことごとく氏が一面古風な人情家であったことを伝えている。

「蜜柑」「おぎん」「偸盗」等の作品において、私は作者が不可解で下等な退屈な人生を忘れて朗らかに涙ぐんでいるのを見る。「猿」の中で「猿は懲罰は許されても人間は許されませんから……」という反語の奥に、ヒューマンな作者をみよ。「杜子春」「蜘蛛の糸」「白」等の童話は、

いかに氏が一時代の一階級の道徳律を越えることの出来なかったモラリストであったかの証左となるであろう。

六

これまでに明かにして来た芥川龍之介氏の多元的な傾向は、どう云う相関関係をもって、後期の氏の文学を形成して行ったであろうか。

「僕は」と云う小品の中で氏は次のように書いている。「僕はいつも僕一人ではない。息子、亭主、牡、人生観上の現実主義者、気質上のロマン主義者、哲学上の懐疑主義者等々……その何人かの僕自身が、喧嘩をするには苦しんでいる」また、別のところで、氏はこれに政治上の共産主義者という一因子を加えている。更に「澄江堂雑記」の中で「一かどの英霊をもった人の中には二人の自己が住むことがある。一つは常に活動的な情熱のある自己であり、他の一つは冷酷な観察的な自己である」と云い、氏自身も冷酷な自己を感じているが、どうすることも出来ぬと嘆いている。

前期の芥川氏はこうした自分の姿に積極的な肯定を与えようとした。同じ「澄江堂雑記」の中で氏は「我等が内にある一切のものはいやが上にも伸さねばならぬ。それが我等に与えられた唯一成仏の路である」とした。そしてこの言葉の精進の信条として、芸術の道を切り拓いて進んだ。それは可なり苦しい努力ではあったろうが、こうした内部闘争もまだ致命的な痛手ではなかった。氏は多才なスペクタタルを交錯させながら、憂鬱な微笑の中に煙草を吹かしていた。薄曇った人生の風景に顔を曇らせながら、何気ない諧謔を弄することを忘れなかった。反撥的諸因子は氏の深い節度と矜持の中で爆発を制せられていた。そして氏はそうした矛盾そのものを愛していることとすらあった。こうした氏が、取り上げて生活の栖としたのは「理智的なもの」であった。氏は兎もすれば破れ易い均衡の支点を「理智」においた。「或阿呆の一生」の一節「人工の翼」にあるように「彼」は情熱に駆られ易い一面を恐れて、冷ややかな理智にとんだ一面に近いヴォルテールに近づいて行った。そこで「彼」はヴォルテールから「人工の翼」を借りた。

「彼はその人工の翼をひろげ、やすやすと空へ舞い上った。同時にまた理智の光を浴びた人生の歓びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行った。彼は見すぼらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまっ直に太陽へ登って行った。丁度こう云う人工の翼を太陽の光に焼かれた為にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたように。……」

けれども我々は、歯と歯を血に滲ませている自身の中の両棲類をいつまでも同居させておくことは出来ない。矛盾はより高次的な統一によって救われない限りいつ迄も解決され得るものではない。気質上のロマンチストは人生観上

のリアリストと嚙み合った。哲学上のスケプチストは、むろん、政治上のコムニストと狂った歯車のように永遠に反逆し合った。それのみではない。このそれぞれを単位とした組合せは、理智の支柱によって人工的に保たれていた氏の姿勢に、不安と苦痛を与えずにはおかなかった。

氏の矛盾の進化をより客観的に考察する為に、我々は更に社会的条件をも考えてみる必要があろう。一九二五年——氏の文学的生涯の終り頃——は日本プロレタリアートの全線的展開の時代である。

「資本と労働の生み出す一般的混沌」は、寄生的な小ブルジョアジイの中に強い動揺を与える。それ自身の階級的地盤を持たないインテリゲンチャの自己解体が、断然史的な現象として著しくなって来る。

これらの現実から芥川氏が具体的に何を反映したか、我々は云うを要しない。我々は必要以上に現象の社会的原因を追窮することの徒労であると同時に、滑稽であることを知っているから。だが、こうした荒々しい現実の中で、氏が所謂「人工の翼」で飛揚することの如何に困難であるかを、痛切に感じたであろうことは考えてもいいだろう。冷静な理智に住家を求めて来たことの後悔が、氏の中で激しくなって行った。曽つての冷笑的な風流的な生活態度に対する自己批判が、かくして起って来た。

「理性の私に教えたものは畢竟理性の無力であった」ここに先ず一切の理智的外貌を脱ぎ捨てて立ち直ろうとする芥川氏の決意を我々は聞く。「若し理性に終始するとすれば、我々は当然我々自身の存在を否定しなければならぬ」——(河童)—— かくて一切の小さい都会人的な修飾を捨てて語ろうとした「信輔の半生」が珍しく積極的な告白を展開しているのは、理性的な一面に対する氏自身の反逆に外ならぬ。これは氏にとって重要な変化でなければならない。「僕は物見高い諸君に僕の暮らしの奥底をお目にかけるのは不快である。ストリンドベリイも金さえあれば『痴人の告白』は出さなかったのである。」「誰が恥じ入りたいことを小説などに作るものか」、この傲岸な前期の氏を想起する時、我々は氏の新しい情熱的な気配に眼をそそがずには居られない。氏は堪えがたい迄に分裂し疲労した自己を勇敢に整理しようと思った。氏はその為にも野蛮な情熱を求めずには居られなかったのだ。いわんや、理性は氏に余りにも無力な結論を与えたではないか。

「今昔物語について」「続芭蕉雑記」等はこの野蛮さを求めようとした氏の所産に外ならない。氏は云っている。「僕はやっと今昔物語の本来の面目を発見した。それは brutality(野性)の美しさである。或は優美とかに最も遠い美しさである」この芥川氏は夢を遠い昔に求めた曽つての自己を嘲笑している。

あの芭蕉ですら、氏の眼にはもう到底、世捨人芭蕉ではなかった。奥の細道に立った芭蕉の姿は、破れかぶれの勇

にとんだ「したたか者」だった。新しく見直された芭蕉は、不退転の一本道を歩んだ。感傷的なものから遠い日本の生んだ三百年昔の「大山師」だった、この俳人の不敵な面魂こそ、芥川氏が決死によじ登ろうとした城壁であった。そして私は知る。この時の芥川氏も亦「当代に滅多に理解されなかった、恐ろしくやけくそ」になった——或はなろうとした詩人であったことを。室生犀星氏の伝えるところによると鵠沼へ行く頃から、芥川氏は余り書画骨董に興味を持たなかったとのことである。氏はそんなものを振り向く気はしなかったに違いない。実際、又その頃出席した新潮合評会で、「藪の中」を賞めて後期の作を好まない或人の言葉に、芥川氏は昂然と答えている。「ああ云う作品は近頃の僕は書きたくないのだ」氏は全力を尽して現実的なものの中に肉薄して行こうとした。しかも、氏を堅く包んだ古い衣は容易には氏に突進の自由を与えなかった。「我々は自由に突進したい欲望を、その欲望を持つところに自ら自由を失っている」現実社会が続けさまに投げかける刺戟を戦い抜き得ない自分を振りかえった時、氏はこう呟かずには居られなかった。

「蜃気楼」「点鬼簿」「河童」「彼」等の諸作は、末期に向う暮れ方を歩いている氏の様々な呼吸である。

「蜃気楼」「点鬼簿」の「僕」は死んだ人の話ばかりしている。それは水底にある死骸の香いに満ちている。作品「彼」の主人公達はみんな恐ろしく憂鬱である。作者に註釈を加えさすならば「第一の『彼』は何をしても寂しい。第二の『彼』は何処へ行っても寂しい。」更に「玄鶴山房」においても、作者は息をひそめて「娑婆苦」に満ちた暗い家庭を見つめている。馬車の中でリープクネヒトを読みつづける大学生も、作者の意図したように作品に新時代の光を投げると云うより、寧ろ一層玄鶴山房の中の暗さを対照的に浮き上らせていると云い得るくらいだ。

「河童」においても、作者の苦悩は依然暗いものだった。作者の言葉によると「河童はあらゆるものに対する——就中僕自身に対するデグウから生まれました」しかし、我々は嫌悪によって、混乱した自己を完全に整理し得る筈がない。「最も賢い生活は、一時代の習慣を軽蔑しながら、しかも又その習慣を少しも破らないように暮すことである」この言葉が如何に中途半端な自己の生活に対する自己嫌悪を示しているか。変革の意志を欠いた社会批判は——結局、疲労ののち、最初の出発点にかえるより外はないのである。所詮、「河童」は氏の「ライネッケ狐」にすぎないだろう。

七

遺稿「或阿呆の一生」は「西方の人」と並んで、芥川氏の文学的一生の焦点であり、結論である。それは過渡的インテリゲンチャ文学の歴史的な高塔となるだろう。

「或阿呆の一生」は「言わば刃のこぼれて了った細い剣を杖にしながら」辿った必死の記録である。病苦と塵労に疲れ果てながらも、最後に自己をえぐり出して、刃向って来る運命に叩きつけようとした記録である。「歯車」も暗澹とした作である点において、これに劣らないかも知れない。事実、私は「歯車」に書かれた、狂気の一歩手前にくすぶっている神経の息苦しさに暗然とせずには居られない。何人もこうした人生が「地獄よりも地獄的」であることを疑わないだろう。

「西方の人」の芥川氏にとっては、十字架にかかったクリストの祈りは、もう単に三千余年前に生きた聖霊の子の慟哭ではなかった。「わが神、わが神、どうして私をお棄てなさる」氏はクリストと共に氏を襲って来る「敗惨」と格闘しつつ、ゴルゴダの祈りを祈っている。氏は「人間的」なクリストの中に悲劇的な情熱を燃え上らしている。それはアプトン・シンクレェアの書いた「人類の生んだ最初の革命家の姿」ではない。芥川氏を動かしているクリストの一生は「天上から地上へ登るために、無残にもおれた梯子である」

「或阿呆の一生」はこれにもまして、痛ましい歴史に違いない。これは形式においても、芥川氏の他の作にみられない激しさを持っている。詩人的なハイパーポリとともに、作者は傷いた主観を、むしろ狂暴にちりばめている。

作者はこの中で狂人であった母を書いている。軀を想わす家族制度の下で、道化人形のように生きた苦しみを書いている。「彼」は狂人の娘と憎悪に近い恋をした。一本の高い唐黍に傷き易い「彼」の自画像をみて「もうおそい、しかし、いざとなった時には……」と思うのだった。「彼は人生を見渡しても、何も特に欲いものはなかった。が、雨に濡れた架空線から発する凄しい空中の火花だけは、命を取り換えてもつかまえたかった。ヴォルテエルの家——理性の家から「彼」は英雄レニンを見た。彼は才力の上でも格闘出来る女に遭遇した。そして処世術にたけた「彼」は、抒情詩を作ってこの危機を脱出した。「彼」は窓格子に帯をかけて縊死しようとした。もう敗北は脱れることの出来ないものだった。「彼は不眠症に襲われ出した。のみならず体力も衰えはじめた。何人かの医者は彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。——胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神経衰弱、慢性結膜炎、脳疲労、……

しかし彼は彼自身の病源を承知していた。それは彼自身を恥じると共に彼等を恐れる心もちだった。彼等を——彼の軽蔑していた社会を！」

芥川氏の病苦の中に、「この社会に対する恐れ」が、強く影を落していた告白を、我々はここに聴くのだ。氏の「或旧友に送る手記」の中に書かれた「漠然とした不安」の意義について雑多の人が夫々の解釈を下している。或る詩人は「芥川氏は人生に敗れて死んだのではない。それはむしろ勝利の死だ」と叫んだ。そしてまた、或る作家は氏

が「西方の人」を書いたことを例証として末年の氏が宗教的色彩を持っていたと云った。彼等はあくまでも氏の自裁に社会的条件を除こうと努力している。私はそれを一々反駁することをしまい。只、彼等はそのことで彼等の「白い手」を見せているだけだ。「痛く憂えて死ぬ許りだった」芥川氏は彼等に「橄欖の下に眠って居たクリストの弟子」に似たものを感じては居なかっただろうか。

この「社会」に対する恐れは、具体的に二つのものに分析出来るのである。一つは、いやおうなしに氏を「清朗の人」に祭り上げて、氏に鎖をかけた古い道徳的雰囲気であり、一つは、資本主義の悪をみとめてその中に安住する自身を恥じる心であろう。(「問答」の章参照)これ等は氏の小じんまりした生活型から生れた必然的な破綻である。「芥川龍之介氏！　芥川龍之介！　お前の根をしっかりおろせ、お前は風に吹かれている葦だ。……これからお前はやり直すのだ」――(闇中問答)――しかも、こうして「生活」を新しく建て直すことは、肉体的にももはや不可能であった。後悔が自嘲がそして絶望が、余りにもひしひしと氏をとりまいていた。氏は「しみじみと生活的宦官に生れた彼自身を軽蔑せずには居られなかった」。最後の力を尽して、自叙伝を書いて見ようとして、それが自尊心や懐疑主義や利害の打算のために容易に出来ないことを知った時も、「彼は彼自身を軽蔑せずにはいられなかった」こう云う自己破綻からどうして明るい再起を期待することが出来ようか。

「あらゆる機関車は彼等の軌道にどこかに突進しなければならぬ。もっと速く……それより外に彼等のすることはない」――(機関車をみながら)――。芥川氏の軌道がどこに向けられているかはもはや明らかである。

「敗るる者をして敗れしめよ……」(文芸的な余りに文芸的な)絞罪を待っている泥棒詩人ヴィヨンの姿に、氏はこうした「敗戦主義」的な歓呼を与えてやった。そして社会的な慣習に背いた罪は、当然に背負わなければならないと言っている。だが、彼等が敗北するのは習慣にそむいたためではない。徹底的に習慣にそむき得なかったからだ。――かくて、世紀末的な苦悲にひしがれた芥川氏の自画像は「或阿呆の一生」の次の一節である。

「彼は彼の一生を思い、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだった。彼は日の暮の往来をたった一人歩きながら徐に彼を滅しに来る運命を待つことに決心した」

私は出来るだけ忠実な引証を試みて、「或阿呆の一生」の内容を約説して来た。それは徐々に、隠然と結成されて行った痛ましい人の歴史であった。この作品は単に芥川氏の全文学の総決算的表現であるばかりでなく、明日の日を望みつつも、傷き易い自我と社会的な重圧に堪えずして、苦しまなければならないあらゆる小ブルジョア・インテリゲンチャの痛哭をそこに漲らせている。それは氏の辿った

「敗北」の道程と「敗北」の苦悶を残酷に綴った作品である。それは冷然とした情熱の中に、自己の「敗北」を意識して進んだ意味において、文学における「敗北主義」だと云えるであろう。

八

私はもう結論してもいいだろう。

芥川龍之介氏の文学の「最後の言葉」は、社会生活における人間の幸福への絶望感であった。あらゆる厭世主義者のように、氏は「人間に負わされた永遠の世界苦」に結論を発見せずには居られなかった。それは決して新しい思想ではない。新しい感情ではない。それは「自己」への絶望をもって、社会全般への絶望におきかえる小ブルジョアジーの致命的論理に発している。かくて芥川氏は氏の生理的、階級的規定から生れる苦悩を人類永遠の苦悩におきかえる。

娑婆苦を娑婆苦だけにしたいものは
コムミュニストの棍棒をふりまわせ
娑婆苦をすっかり失いたいものは
ピストルで頭を打ち抜いて了え
——信条——

この詩は明らかに次のことを意味する。史的な必然として到来する新社会が、今日の社会より幸福ではあるが、そこにもまだ不幸が残っている。

こう云う世界観が到達する一定点こそ、芥川氏自身が身をもって示した悲劇であった。氏の「娑婆苦」は現代社会におけるあらゆる闘いの抛棄に氏をおもむかしめるものであった。氏の文学はこの自己否定の漸次的上昇を具体的に表現しているものだ。虚無的精神も階級社会の発展期においては、ある程度の進歩的意義を持つものであるが、今の我々はそうした役割を氏の文学に尋ねることは出来ない。そう云う意味で、我々は氏の文学に捺された階級的烙印を明確に認識しなければならぬ。

なるほど我々は最後の凄まじい情熱をたたえた氏の遺稿等に無関心になり得ない。だが、それは芥川氏の文学が、我々を内容的には退嬰的なニヒルへ誘い、形式的には瑰麗な肌ざわりを持っていると云うことより、次の事実によるものでなくてはならぬ。ブルジョア芸術家の多くが無為で怠惰な一切のものへの無関心主義の泥沼に沈んでいる時、とまれ芥川氏は自己の苦悶をギリギリに噛みしめた。また他の遁世的な作家達に、風流的安住が無力であるのみならず、究局において自己を滅ぼすものであることを、氏自身の必死的な羽搏きによって警告した。また氏は多大の小ブルジョア的狭隘性を内包しつつも、尚他のブルジョア・イデオローグに比して、広汎な社会的関心を持っていた——凡そ、これ等の事実においてでなくてはならぬ。「後世の士は我々の謬りを咎めるよりも、むしろ我々の情熱を諒と

してくれるであろう」こう云う言葉に息苦しい闘の楯を求めた芥川氏の姿は、なにか惻々として我々を打つではないか。

だが、我々はいかなる時も、芥川氏の文学を批判し切る野蛮な情熱を持たねばならない。我々は我々を逞しくする為に、氏の文学の「敗北」的行程を究明して来たのではなかったか。

「敗北」の文学を――そしてその階級的土壌を我々は踏み越えて往かなければならない。（一九二九年八月「改造」）

プロレタリア文学の大衆化とプロレタリア・レアリズムに就いて

小林多喜二

プロレタリア文学は「大衆化」されなければならない。

我々はこのことを執ように問題にして来たし、又問題にして行く。然し、我々はただ漠然と、そう叫んできたのではなかった。例えば「文戦」の一派のように！　そんなことを繰りかえして何度も云うことでは、「おうむ」の方が偉いし、根気強い。そしてそれは結果的には（ただ叫んでいたというだけでは）大衆化問題に対する最悪の放棄をなしていたことになる。――口でだけ何回も繰りかえしていれば、行動もしている事になるのだ、と思いこんでしまう「幻影ニスト」である。

で、我々は「大衆化」について、具体的に問題をたてた。

A、大衆性ある作品の製作。

B、その作品を直接に労働者と農民層に持ち込むための組織活動。

二つの関係及びそのそれぞれの内容は、過去一ヵ年の実際の闘争によって具体的に、且つ豊富にされてきた。

今、プロレタリア・レアリズムを問題にする場合、嘗ってのあらゆる批評家が問題にしたように、これはこれだけで問題にさるべきでなく、プロレタリア・レアリズムが現実に働いている労働者と農民との関係では、どのように考えられるから、それが問題にされなければならないのだ、という風に――その所謂「大衆化」との関連なしには論ぜられないのである。――プロレタリア芸術を論ずる場合、如何なる場合でも、この立場・関連は忘れてならない。これがプロレタリア芸術の特殊性である。

（註。特殊性とは何々プラスXではない。それは質的に飛

躍したもの、その意味では全然前の何々とは別個のものである。政治的価値と芸術的価値もこの間の認識の誤りから出ている。自身が（a）プロレタリアでなくて、（b）しかも在来の芸術に相当親しんで来たものには、新らしい芸術、プロレタリア芸術をみると、何か特別な他の要素が附加されて出来上ったものと見えてしまうのである。ここに二元論の救い難い社会的階級的立場がある。

特殊性とは、だから本質にプラスされた何かでなくて、本質そのものである。だからそれには全然別個な、それに適応する規範が行われなければならないのである。――然しこの原理は他人の家を垣からいくら覗き見ししていたって分りっこのないことである。）

プロレタリア文学の「大衆化」の基本的な諸問題については、既に論じられている。この問題が如何にして登場してきたか、三・一五事件以後の党の大衆化問題の反映として、その正しい線に沿って発展したことも理解されている。

然し、ここで何よりハッキリ云って置かなければならないことは、「最近の政治的情勢」に於て、――資本の最尖鋭なる弾圧、直接には官憲の、間接には左右社会民主主義者の密告、妥協（大山、河上の裏切りを見よ）によって、プロレタリア芸術が益々非合法のラチ内に入り込んできたということ。

芸術活動が非合法のラチ内に入りこませられて来たとき、それと「大衆化」はどのように考えられなければならないか。

我々は今迄「支持者」「愛好者」「理解者」「インテリ」「左翼ファン」の層をかなり大きくもっていたと云っていい。――だが、この最近の情勢はそういう一人一人を、野糞のように振り落して行くということを惹き起す。（表面には大衆の振り落しと見える。）

「左翼ファン」位の気持で、この方の仕事が出来る時代は過ぎている。おそかれ早かれ、来ることである、――そして又一方、我々は前早大教授とか前京都大学教授、法学博士等の「名士」を清算する時代が来た。

こうして、我々の大衆化の方向は、ますます地下的に、そして確実に「工場」へ向けられてきた。――汽槌のような弾圧をうけてヒルムことなく、非合法に堪え得る我等のたった一つの「城塞」は工場のみである。我々は大衆とは工場労働者（と貧農、小作人）であると解する。

で、こうなる――プロレタリア文学に於ける大衆化とは、

一、工場労働者ということであり、

一、それは、そして益々非合法のラチ内に於て行われるに至るであろうということ。

我々は大衆化をこのように把握し、その正しい見透しのもとに、具体的に闘って行かなければならない。――これは未だ誰れによっても具体的に、意識的に把握されていな

い、今後の日本に於ける新らしい大衆化問題の方向転換でないかと、思っている。

（註。自分はこの芸術に於ける原理的な小論に於て、こと更に一九二九年の下半期に於ける日本の政治情勢に触れる理由をもっている。何故なら、大山・河上一派の裏切的行為はその形態に於て、その必然性に於て、一つの国際的に共通な規模のものであり、（資本主義が最後の段階に入ると、決定的な社会民主主義の裏切のあることを、レーニンは教えてくれる。）——又その困難な過程を闘うことによってのみ党が強大になることを知っているからである。かかる時こそ、この運動の進展と共にただ抽象的に大衆化を叫ぶのみでは足りないのだ、大衆化問題は具体的に、一つの方向転換を行わなければならないからである。）

この過程が芸術の上に、そんならばどのような形態で現われるか——表われつつあるか。それは人的な関係では、非合法のラチ内に入りこめば入り込む程、左翼芸術ファン、インテリ、偽プロ作家の清算、従って、健康な、鉄の如き労働者芸術家の登場となり、——生産される芸術作品はインテリ的形式だけのプロレタリア芸術を清算して、労働階級のみが持ち得る厳密なマルクス主義的なイデオロギーが「単純な、素朴な、明快な、力学的な」形式によって具現された芸術がその場所をとって代る。——ここで始めて、それはそれにふさわしい一つの適応として、真実の意味に於ける「プロレタリア・レアリズム」の立場が問題にされるのである。（後で述べるが、プロレタリア・レアリズムは誰でもが、ただ人真似で出来るものではないのである。）

問題をこのように——このような関連で見なければならない。

プロレタリア芸術が、ブルジョア芸術の一つのバチルスとして強力たり得るのは、プロレタリア・レアリズムの立場に立ち得るからである。

自然主義的・自然発生的・労働体験文学が単純に、直ちにプロレタリア芸術として考えられた初期、——目的意識論の注入によって、他方には福本主義の観念論的飛躍の潮流に乗った第二期・ロマンティック・プロレタリア文学が、現実を事実に於ては遊離し、現実の諸問題を容易に、主観的に解決せんとした概念の幽霊、「目的意識の骸骨」の時代を経て——始めて、その過去の誤った、だが次の段階への飛躍に踏み台となるべき豊富な経験を質的に揚棄することによって、日本のプロレタリア文学が正しい方向——プロレタリア・レアリズムの方向へ歩み出してきたのである。

日本のブルジョア文学は「あわただしく」変遷して来たかも知れない、だがその発展の過程がハッキリ弁証法的に踏みしめられて来たことを知ることが出来る。——で、我々はプロレタリア・レアリズムもその「展望」の関係のうちに、又その国際的な規模に於て（例えば革命後のソヴェ

ートロシアの文学の方向に於て——この言葉の真実な意味に於ける先進国の方向は、後れて進む我々の発展の距離をちぢめる。)——考えなければならない理由があるわけである。

プロレタリア・レアリズムについては、藏原惟人氏の正しい——全く正しい論述がある。

端的に云えば、——プロレタリア・レアリズムとは「マルキシズムによって貫かれた労働者の芸術態度」である、自分はそう考えている。——プロレタリア・レアリズムを完全に把握出来るものは純粋に云って「労働階級」である。又、それしかない。

何故か？

一、厳密に客観的な・現実主義的な・唯物的な態度を持って居るものであり、又持ち得る。

二、常に（無意識的にさえ）ものを社会的に、階級的に見る態度。

三、常に又（無意識的にさえ）ものをすべてプロレタリアの勝利の立場から見る態度。

この根本的な態度こそ、労働階級が持つものであり、同時にこれこそが、「プロレタリア・レアリズム」の基本的な構成要素だからである。

A、我々はプロレタリア・レアリズムが何より芸術に於ける現実主義的態度であると云う。——然し唯物弁証法は、この社会が如何なる方向へ、決定的に進んで行くものであるか、即ちこの社会を一定の「動き」の中に具体的に把握することを教えている。——この動きを、客観的に、形象の言葉をもって描き出す態度、この動的な現実主義的態度を我々は問題にしていることを知らなければならない。この意味でも、（イ）在来の静的なブルジョア・レアリズムとは質的にも、（ロ）又この現実主義的態度を「手法上」の（例えば志賀直哉あたりの）客観描写などと同じ意味にとることが、如何に誤っているか分ることと思う。

当然に、この現実主義的態度は其他の態度、例えばロマンティック（その頽廃的、新興的を問わず）シンボリック、シュール・レアリズムとも鋭く対立する。労働階級は最も健康であり、最もダイナミックであり、革命階級であるが故に極めて批判的であり、そのためにも亦最も客観的、現実主義的である——この反映がレアリズムとして表われることは論のないことである。

B、自然主義的なレアリズムは等しく唯物論的態度を持っていたにも不拘、「個人」をその本来体として取扱った。資本主義のイデオロギー・個人主義的態度から自由であり得なかったワケである。——然しプロレタリアはその生産組織の結び付きの特殊性によって「集団的」である。又唯物論の立場は個人の性格や、思想や、意思の解釈を、

それを取り巻いている社会――具体的に云えば階級的観点からそれをする。この観点は、プロレタリアが社会の最下部たる基礎をなす生産に直接に依拠し、あくまでもその生産組織の必然の中に行動し、集団化される唯一の階級だからである。

常に社会的に、階級的にのみ（そしてそれのみが正しい）ものを見る、この労働者の「実質」がプロレタリア・レアリズムに直接的に反映しているのである。

C、ブルジョア階級はその個人的立場から、その無統制な立場から、――更に又没落期の現象としての混乱せる主観性から、あらゆる社会現象を「全体的な関係」で把握出来ない。彼等には目先きの一部分一部分しか見えないのだ――だが、プロレタリア階級はまさにその反対である。あらゆる事物を、その全体性に於て見得るものはプロレタリア階級のみである、レーニンはこの全体性に於ける把握を「木と森」の例をもって説明していることは誰れでもが知っていることである。――プロレタリア・レアリズムはその意味からでも、単に一つ一つのエピソードだけを切り離された関係に於て取扱うことを許されない。前の段階と後の段階との関係を無視して、ある一定の段階を描くことを許さない。a、b、c……の複雑性を併有している人間をヴィタミンAの丸薬のように概念化し、抽象化して描くことを許さない。――あるがままの複雑性と全体性に於て描かれなければならない。

ただ、この場合、複雑性に於てということを「何んでもかんでも」「どんな下らないもの」でもという意味ではないこと――我々はかかる雑多な現象のうち、何が本質的であり、何が偶然的なものかを労働階級の決定的な進展の方向から認識別することを知っている。

D、最後に、マルクス的な、厳密に科学的な解剖は、我々に「プロレタリアの終局的な勝利」を確信させる。――プロレタリア・レアリズムはこの「プロレタリアの勝利」という科学的にして、炎の如き情熱をもって裏打ちされていなければならない。

このことはレアリズム、即ち動的なレアリズム、ブルジョア・レアリズムから質的に飛躍したプロレタリア・レアリズムと、いささかも矛盾するものではないのである。

プロレタリア・レアリズムの面貌は、おそらく原理的にはこのように見らるべきであると思われる。――この全内容が形象の言葉によって、感覚的には労働者的な「単純に、明快に、素朴に、ダイナミックに、ヒロイスティック」に表現される時、それは厳密な意味で正しい、真実の「プロレタリア芸術」を形成するのである。百パアセントの！

そして我々はかかる意味のプロレタリア芸術とその大衆化とは決して矛盾するものではないことを、ますます知っている。何故か。さきにも云った通りプロレタリア作品の

仮面をかぶり、サッカリンを入れたようなプロレタリア大衆小説、形式の新奇が実はインテリのもの好きでしかなかったり、新らしい内容を安易に古い嚢にもったり……かかる一系列のプロレタリア芸術は、ますます迫り来る弾圧と雑要素の落伍から当然「野糞」のように一つ一つ振り落されて行くべき必然にあり、ただ「厳密に労働者的な芸術」のみが鉄の如き底力をもって、大衆の中に喰い込んで行くべきであるからである。――そしてそれは今迄見て来たところに依っても、唯一つ「プロレタリア・レアリズム」によって打ち貫かれている作品のみが、よくそれに堪え得ることを知ったのである。

我々は、我々の立って、もって進むべき唯一の道は「プロレタリア・レアリズム」の道であり、それこそ健全に、力強く大衆の中に入り込んで行くものであることを、今後の益々困難な情勢のもとで知ることが出来ると思っているものである。(一九二九・九・二八)

(一九二九年十一月世界社刊「プロレタリア芸術教程」II所収)

ナップ芸術家の新しい任務
―共産主義芸術の確立へ―

蔵原惟人

文学(芸術)は党のものとならなければならない。
――レーニン――

三・一五の直後(一九二八年四月)日本プロレタリア芸術連盟と前衛芸術家同盟との合同によって「ナップ」が結成されてからまる二年が過ぎた。「ナップ」の結成はわが国プロレタリア芸術運動の中心の確立であった。その時以後日本のプロレタリア芸術運動は急速に発展し、昨年度あたりからは、労働者農民を基礎とする一つの大きな文化的革命的運動として動かせぬ地位を獲得した。このことは、雑誌『戦旗』が労働者・農民の間に数万の読者を有し、左翼劇場の観衆が常に場外に溢れていることをもって見ることが出来る。

だが我々はこの成功にアンカンとして安心していることは出来ない。言うまでもなくこの成功は、「ナップ」のこれまでの方針が基本的に絶対に正しかったことを証明する。けれども若しも我々がこれに安心してしまい、進んで新しい時代への飛躍の準備を怠るならば、我々は遂に時代から、すなわちわが労働者・農民の革命的大衆闘争の急速な成長から取り残されてしまうだろう。

新時代への飛躍――それを準備するものは常にプロレタリアートの前に課せられた新しい任務の観点からする芸術

運動内部の自己批判でなければならない。

× × ×

我々の自己批判は先ず我々の作品そのものに向けられる

「ナップ」はその出発の当初において、その作家・芸術家に向って「大衆に近づけ」「労働者・農民の生活を描け」というスローガンを掲げ、リアリズムを問題とし、芸術の大衆化を論じた。それは、当時ややもすれば無産者大衆の生活から、一般に現実の生活から、遊離しようとする傾向のあったわが国のプロレタリア芸術にとって、最も時宜を得た正しい呼びかけであった。

その後このスローガンは、着々とわがプロレタリア芸術家達によってその作品の中に具体化されて来た。昨年の初め頃から今年の初めにかけてのおよそ一カ年間に、「ナップ」の芸術家達によって残された大きな足跡――文学に於ける小林多喜二の「蟹工船」「不在地主」、徳永直の「太陽のない街」、藤森成吉の「土堤の大会」「蜂起」、片岡鉄兵の「綾里村快挙録」、村山知義の「暴力団記」、中野重治の「鉄の話その一」、立野信之、橋本英吉、鹿地亘の諸篇等――演劇に於ける左翼劇場の「全線」「太陽のない街」――絵画に於ける岡本唐貴の「工場の襲撃」、大月源二の「告別」、竹本賢三の「石川島」、喜入厳の「ストライキ」等および、柳瀬、鈴木、松山、目黒、須山等の政治的漫画等は、みな最近一年間のプロレタリア芸術の優れた作品を代表するものであり、それらはいずれもわが国の労働者・農民の生活から題材を取って居り、その殆んどすべてはプロレタリアートの大衆的闘争を描いている。ここにわが国のプロレタリア芸術は、本当に、巨人的な第一歩を踏みだしたということが出来るのだ。

しかしそれはとも角も第一歩に過ぎなかった。そこにはまだ我々が、本当に革命的なプロレタリア芸術を生産するためにどうしても乗り越えなければならない欠点がある。それは何か？　それは社会民主主義的観点からハッキリ区別さるべき明確な共産主義的観点の欠如ということである。なるほど我々はこれまでも「前衛の眼をもって」とか「党の思想的政治的影響の確保・拡大」とかいうことをプロレタリア芸術家の任務として掲げて来た。そうして事実この任務は部分的には実行されて来た。『戦旗』と『文芸戦線』とにあらわれる論文や通信やニュース等について見れば、そこには明らかに共産主義的立場と社会民主主義的立場との相違が見られ、この相違は次第にハッキリしたものとなりつつある。しかしこれらのスローガンが果してわが芸術作品の中に具体化されたであろうか？

もっと適確にいえば『戦旗』の作品と例えば『文芸戦線』の作品との間には果して本質的な相違があったであろうか？　以上に掲げた諸作品は、果して『文芸戦線』の作家等がどうしても取り得ない題材を、彼等がどうしても取り扱い得ない風に、描いているであろうか？　遺憾ながら我々

自身「否」と答えざるを得ない。勿論、そこには程度の差はある。そして概して『戦旗』の作家の方が『文戦』の作家よりも、わが国の運動に常により密接に結びついて来たということは何らの躊躇なしに断言することが出来る。しかしそれはまだ程度の差であって、社会民主主義的芸術と共産主義的芸術との差別がここにあると分らせるような質的な相違までには到っていなかったのだ。

何故か？ それはわが「ナップ」の理論家や芸術家達が、政治的・思想的には左翼の立場に立っていながら、まだ如何にしてその要求を作品の中に具体化するかという実践的問題を十分に解決し得なかったからである。そうして今こそ我々がこの問題を、我々自身の手で見事に解決すべき時である。

では、如何にしてその解決が可能であるか？ それはまず第一に、我々の芸術家が、わが国のプロレタリアートとその党とが現在に於いて当面している課題を、自らの芸術的活動の課題とすることによって可能である。ちょうどソヴェートのプロレタリアートとその党とが、産業と生活との社会主義的改造をその課題としている現在に於いて、かの国のプロレタリア芸術家の全注意がやはりそれに向けられているように、戦闘的プロレタリアートが大衆闘争の先頭に立ってする党の拡大・強化を中心課題としている現代の日本に於いては、プロレタリア作家・芸術家の全関心も亦この線に沿うて進んで行かなければならない。こうして初めて我々は、漠然とした「プロレタリア芸術家」としてではなく、真実のボリシェヴィキー的共産主義的芸術家となることが出来るのだ。こうして初めて、我々は「文学（芸術）の仕事は一般プロレタリア的仕事の一部とならなければならない。労働者階級のすべての意識的な前衛によって運転されるところの、単一な、偉大な、社会民主主義的（現在の言葉でいえば共産主義的）機構の『車輪とネジ』とにならなければならない」――と云ったレーニンの言葉を現代の日本に実現することが出来るのだ。

× × ×

こういったからといって我々は決して我々の政治的スローガンをそのままその作品の中に表現することを芸術家に要求するものではない。反って我々は、前に述べたように、「労働者農民に対する党の政治的・思想的影響の確保・拡大」ということを階級的芸術の役目であるといって置きながら、それと芸術との特殊的な結びつきを明らかにして置かなかったということに、これまでの我々の問題の提出方法の欠陥を見ている。我々はかかる誤りを繰り返すことは出来ない。我々は政治的スローガンをそのまま芸術的スローガンとして取り入れるのではなくて、そのスローガンの「精神」を、云い換えればこのスローガンの中に要約的に表現されている階級的必要を芸術の言葉に翻訳して芸術家に課すべきであったということをはっきりと知っている。

では、「党の政治的・思想的影響を確保・拡大」するためには芸術家は何をすればいいか？　そのためには、その作品の中でこの言葉を何十遍繰り返しても駄目である。そのためにはわが国の前衛が如何に闘いつつあるかを現実的に描き出すことが必要である。彼等が共産党の下にあって、工場に農村に如何に活動しつつあるか、如何にして労働者や農民を組織し、如何にしてその闘争の先頭に立っているか、と云うことを大衆に知らしめることによって、われわれの芸術家は論文や通信に於いてよりももっと生々と、もっと効果的に、党の政策を宣伝し、それに対する大衆の信頼を確保することが出来るのである。この、芸術家として最も効果的になし得る、また前衛芸術家としてなさなければならない任務を、これまでのわがプロレタリア芸術家達は怠っていた。通信や論文の中に党の政策が宣伝煽動せられている時に、芸術のみが、(少数の例外を除いて)このことについて沈黙して来た。まるでそこを除けて通っていたようなものだ。それには勿論検閲を考慮していたということもあろう。しかしブルジョア新聞にすら伝えられているこの事実を描くのに何の考慮がいろう。それに我々は検閲を考慮してばかりいては芸術に於いてすら何事もなし得ない時代に来ているのだということを忘れてはならない。

しかし此処で注意しなければならないのは、我々が前衛を描く場合にも決してそれを何等か超人的な「英雄」若しくは「忍術使い」にしてしまってはならないということである。此の如きは唯現実の闘争から離れて、前衛というものを観念化し神秘化しているもののみがなし得るところである。が、このことについては後に芸術の大衆化を論ずる場合に改めて問題としたい。

次に、しかしながら我々は、我々の芸術の題材を前衛活動に限定することを要求するものでは決してない。芸術家はいうまでもなく、彼の欲する、また彼の描き得るすべての題材を描くことが出来る。寧ろ一般的に云って題材は広汎なだけ望ましいのである。しかし若しも彼が共産主義者であるならば、第一に彼はプロレタリアートとその党の必要から全然かけ離れた題材を取扱うことは出来ないであろうし、第二に彼はあらゆる問題をその時代におけるプロレタリアートの革命的課題と結びつけるところの「前衛の観点」をもってその題材に向うであろう。

例えば我々があるストライキを描くにしても、我々に必要なのは、ストライキの外面的な事件の単なる報告ではない。それ等の外面的事件の描写の中に、そのストライキが何ものによって如何に指導されたか、その指導部と大衆との関係はどうであったか、それの成功或いは失敗は何によって喚び起されたか、このストライキはその国の革命運動に於いて如何なる地位を占めているか、と云うことを客観的に、しかも具象的(芸術的)に描き出すことが必要なのである。それが例えば、小説に於いても演劇に於いても

「太陽のない街」などに欠けていた所である。絵画についても同じだ。我々は単なるストライキの場面とか、労働者の生活とかを描くだけでいつまでも満足していることは出来ない。我々は我々の生活におけるもっと革命的な、もっと政治的なモメントを捉えなければならない。しかもその画家を待っているこう云ったモメントは現実の生活の中に、若しも画家に見る眼さえあるならば、いくらでも見出すことが出来るのである。そのことはプロレタリア美術展に出た絵よりも、例えば『戦旗』に出ている写真の方にもっと革命的なものがあるのによっても知ることが出来る。

こうして、我々の芸術は現実の生活から、そしてまたわがプロレタリアートの当面の課題からやや立ち遅れた気味がある。この間隔を出来るだけ埋めることが「ナップ」芸術家当面の緊急な任務でなければならない。事実またこの任務は、わが「ナップ」の芸術家以外の社会民主主義的芸術家等によって解決されないものなのである。

勿論この任務の遂行は決して容易なものではない。それは恐らく芸術運動がこれまでに課せられた任務の中の最初の最も困難な任務であるであろう。それが為には、一般に芸術家にとって必要な、現実を見る鋭い眼と、それを表現する技術との外に、この国に於ける革命運動への絶え間ない関心と、それを理解するための相当高い共産主義的教養とが必要である。しかし若しも今我々がこの困難な課題を遂行することを怠るならば、我々の芸術は畢竟社会民主主義的芸術と何等本質的に異らないものとなってしまうだろう。

× × ×

『文芸戦線』の前田河広一郎は『改造』三月号に載せた「同志レスルッスを案内する」という文芸時評の中で、アメリカの同志マイケル・ゴールドがシンクレーアについて書いたところを引用して、党が潰滅して共産主義運動のなくなった日本に共産主義的(彼等の言葉でいえば宗派主義的)芸術のあろうはずがないという結論に到達している。今この破廉恥な裏切的な態度には触れないとしても、彼は明かに二つの根本的な誤謬を冒している。

第一に、日本の党は決して潰滅していない、唯それは闘争目標を工場と農村とに置いているので前田河等の眼には幸いにしてうつらないのである。それに現在一千人に近い共産主義者が牢獄に禁錮されている日本に、共産主義運動がなく、共産主義的芸術の基礎がないとどうして断言が出来るか!

第二に、前田河にはゴールドの言葉が全然分っていない。ゴールドが「すべての作家に対する決定的批判は、その作物によって成されねばならない。その個人的道義観や、政党への加盟によってであってはならない」といったのは、すべての芸術に対する批評家の根本態度を述べたのであって、ここからして共産主義的芸術の必要を否定する

結論はどんなことがあっても出て来やしない。
共産主義者はすべての芸術作品の中にそれぞれに相応した客観的価値を見出している。それはトルストイとかシンクレーアとかいうような偉大な作家の作品についてのみではない。例えば「ナップ」の批評家達は「文戦」の人々の作品の中にも常にそれぞれに相応した価値を見出して来ている。しかしそれだからと云って、我々自身の芸術、共産主義的芸術が必要でないと云うことにはならない。共産主義者は社会民主主義者の芸術に――勿論例えばシンクレーアの場合のようにそれが反動的でなく、それが何かの意味で社会的意義を持っている時には――それに相当する価値を認めながらも、決してそれに満足し、それをもって自己の芸術に代えるようなことはしない。彼は常に自分自身の芸術を作り出すべく努力する。この努力をしないものは少くともこの領域に於いては共産主義者であることをやめるものだ。芸術政策に於けるこの原則は、例えばペルシャやメキシコのような「遅れた国」に於いても変らない。況んや日本のような一流の帝国主義国家に於いてもおやだ。
レーニンが一九〇五年に、「各人は勝手なことは何でも、少しの制限もなく、書いたり喋ったりする自由をもっている。しかしすべての団体(その中には党をも含めて)も亦、反党的見解の宣伝の為に党の名を利用するような党員を放逐する自由をもっている。」と云い、「文学は党のものとならなければならない」と主張したのもこの意味に他ならない。マイケル・ゴールドですら、「政治家としてではなく、作家としてのシンクレーアを批評する唯一の方法は、コンミュニズム運動が、彼のような技術、社会的熱情、難事業に対する貪慾、一般的非妥協性などを有つ作家を、幾人なりと自ら作り出すことである。」と云って、共産主義的芸術の必要を強調しているではないか。
自ら非共産主義的な立場に立っている前田河が、この共産主義者ゴールドの言葉を正当に理解し得なかったのには少しも不思議はないが、その奥には自分の社会民主主義的な芸術を正統的プロレタリア芸術として弁護しようとする前田河とその一団との反動的企図があることを見逃してはならない。

× × ×

いずれにしても我々は、彼等の言葉に耳を藉すことなく、自己の道を進んで行かなければならない。我々は彼等に云おう、
「君等がどんな作品を書こうとそれは君達の勝手である。我々はもしそれが何等かの意味で少しでも取柄があるものであれば、それに相当した評価を惜まないだろう。だが我々は君達と分れて、我々の共産主義的芸術の確立に向って行くだろう。」と。
しかも我々は決して何もない所にそれを築き上げようとしているのではないのだ。この論文の初めに掲げた諸作品には、既に明かにその萌芽が見られるし、また最近に現れ

た作品、例えば小林多喜二の「暴風雨警戒報」の中には、たとえそれが芸術的には全然失敗しているとしても、かくの如き芸術への意識的な努力が見られる。しかしもっと重要なことは、各種の政治的漫画やカットや、移動劇場の演劇や、殊に各地から集って来る労農通信の中に、まだ極めて萌芽的にではあるが、この芸術を築き上ぐべき大衆的基礎が置かれているということである。

我々は全き自信をもってこの困難な仕事に向って行くことが出来る。――一九三〇・三・五――

（一九三〇年四月「戦旗」）

プロレタリア文学理論の展開

青野季吉

一

ブルジョアジーの文学は理論の推進力を完全に失って仕舞った。こう断言しても、今日では何人も不服を唱える者はないであろう。高山樗牛の理想主義的文学理論、田山花袋・島村抱月・長谷川天溪等の自然主義的文学理論、夏目漱石・阿部次郎・小宮豊隆等の唯美主義的、文化主義的文学理論の昔を想起すると、そこにはそれらの力強い文学理論の推進力が、創作行動の背後に働いていた。理論は創作を生み創作は理論に反映して、常に理論が創作をリードしていたと言ってもよい。だが、今日のブルジョアジーの創作行動の背後には、そうした意味の理論と言うものが、完全に消滅してしまった。今日のブルジョアジーの創作行動は、そういう意味の理論の拍車をうけて推し進められているのではなく、それ自身の惰性的な力によって動いているのだと言っても過言ではないだろう。事実、今日ブルジョアジーの文壇の何処に、文学理論らしい理論があるであろうか？　ただそれだけを想いうかべても、人は私のいまのような断言に不服を唱えはしないであろう。

人は言うであろう。最近のブルジョアジー文壇の例えば形式主義文学理論の如き、立派に創作行動をリードしているものではないかと。私は敢えて答える。形式主義文学理論の出現には、ブルジョアジーの文壇の理論的蘇生を思わせるものがあったのは事実である。だが、形式主義文学理論なるものを立入って検べてみると、それは理論らしい構成をもっているものでなく、いかなる意味においても前期の指導文学理論と比され得るものではない。ブルジョアジーの文壇の最後の理論的努力が形式主義文学理論を生んだとすればそれは決してその理論的蘇生を物語るものではなくて、反ってその理論的死滅の過程を実証するものであ

る。

ブルジョアジーの文学において失われた理論的推進力は、プロレタリアートの文学において力強く再生した。理論の権威は今や完全にプロレタリア文学の陣営に移り、およそ文壇においてみられる生々した、努力的な、体系化へと前進しつつある理論は、悉くこれプロレタリア文学の理論だと言ってよい。

批評と理論とは、闘争と建設の前衛的武器である。ブルジョアジーの文壇が何等かの意味において闘争と建設の段階にあった時には、批評と理論とが創作活動をリードしていた。だが一度ブルジョアジーの文壇がその段階を通過して、完成と爛熟とに達し、没落の過程に一歩を踏み入れると、最早や批評と理論とは、そこで何等積極的な力と意義とを持ち得なくなった。そうしてこの闘争と建設の前衛的武器は、新らたにその歴史をつくり始めたプロレタリアートの文壇に移ってしまったのである。

日本のプロレタリア文学の運動は、過去約十年の歴史を持っている。この年月は、ブルジョアジーの文壇内の文学流派の運動として見れば、決して短かい年月ではない。それだけの時の経過のうちには、その流派の文学理論が一応完成され、それに基く創作が一応完成される。だが、プロレタリア文学運動にとってはその年月は、決して長い年月ではない。と言う訳は、プロレタリア文学の運動は、ブルジョアジーの文壇内の文学流派の運動と根本的に異って、一個の階級的の文学運動であり、その文学を理論的にも作品的にも完成させるところのプロレタリア文化環境の生成と相まって、初めて実質的に前進し得る文学運動だからである。従ってここで、若しその文学理論が一応手っ取り早く完成され、それに基いた文学的創造が一応手取り早く完成されたら、それこそ奇蹟に近いのである。

私はいま過去約十年の日本のプロレタリア文学運動内の、理論的努力の所産を概観しようとする。この仕事はいかなる意味においても、それを総決算して、そこに何等か『一応完成されたもの』をみようがためではない。いま日本のプロレタリアートの文学理論的努力は、新しい展開と建設とへ生々と踏み出している。批評的・理論的・関心の波は、過去に曽つてみたことのないほど隆起している。この機会に、過去の理論的努力の所産を人々の記憶に新らたにし、その展開の姿を多少とも具体的に輪廓づけて見たいからに外ならない。

二

日本のプロレタリア文学理論の展開は、これを大正十五年の『目的意識論の提唱』以前と以後とに分けて取扱うのが便利でもあり、妥当でもある。と言うのは、この提唱を境界として、その展開のテンポにおいても、実質においても、甚しい相違があるからである。これを言いかえれば、

それ以前に、漸次的に生成しつつあったプロレタリア文学理論が、それを境として一つの弁証法的飛躍を遂げたのだと言ってもいいであろう。

そこで先ず順序として『目的意識論』以前から観て行くことにする。

この時期の文学理論の内的、外的に特性的な点は、一、ブルジョアジーの文壇との闘争の過程において、漸次にそれが展開されて行ったことである。プロレタリア文学はそれが文学運動である以上、当然文壇的ブルジョアジーとまず闘争せざるを得ない。しかもその闘争は後者の社会上・文学上のイデオロギーにたいする攻撃をおいて他にないのは言うをまたない。而してその攻撃は必然に、プロレタリアートの社会上・文学上のイデオロギーの積極的な展開でもあり、またあったのである。二、その文学理論が、断片的、素朴的、非組織的だったことであり、当然それは謂わゆる『混階級的』だったことである。これはいかにも当然なことであって、そうであったなかにも、プロレタリアートの文学運動が不可避的に取上ぐ可き問題、後の時期において力強く展開された問題を既に一応取上げていたことは、大いに注目されていいと思う。三、一般に外国特にロシヤにおけるプロレタリア文学理論の示唆・影響が全然なかったことである。日本のプロレタリア文学運動は、外国のそれが『質的に飛躍した』(コーガン教授) 一九一七年の革命に刺戟されて起ったのであったが、彼地の文学的実践は、久しい間日本のプロレタリア文学運動に何等寄与する機会を持たなかった。従って日本のプロレタリア文学理論は、マルクス主義的方法を唯一の指針として、全く孤立的と言ってもいい状態において、素朴的、断片的に漸次に展開されたのである。

そういう状態であったが故に種々な問題が取上げられ、この時期に相応した程度において展開されたが、その中歴史的、発展的意義に最も富んだもの若干を指摘しておこう。

第一にはプロレタリア文化及び文学の可能論である。ロシアでは一九二六年に至っても『まだ我が大家の間においてさえ、プロレタリア文化乃至文学が存在し得るということに就いては、確乎たる定見がない』(コーガン教授)のであったが、日本ではそれが無雑作に――或いはロシアに比して無批判的にと言ってもよいだろう――取扱われてしまって、直ちにプロレタリア文化及び文学の可能が信ぜられ、提唱された。これは必らずしも日本のプロレタリア理論家が単純であったためばかりでなく、ブルジョアジーの文壇との闘争という必要が生んだ現象でもあったと解してよいであろう。イデオロギーの分離では、プレハーノフが指摘しているように、往々かかる現象が生ずるのである。

二、ブルジョアジーの文学打倒論である。これは別に説明するまでもないが、ただ注意を促しておきたいのは、ブルジョア・イデオロギーに由って成る文学の打倒の必要は

説かれたが、かつてプロレタリア理論家の何人によって も、在来の文学的達成から何等摂取すべきものはないなど 説かれたことが無かったこと、これである。然るにブルジ ョアジーの側の攻撃者は、プロレタリアの文学運動は、一 切の文化的・文学的遺産を放棄し、泥濘の中に叩きこむも のであるかのように言った。これは誣妄である。当時は自 然の理由から、まだ、文学上のいかなる遺産を継承すべき かが問題にならなかったばかりである。

三、文学運動の組織論。プロレタリア文学運動は、組織 ある集団の運動として初めて発達することが出来、その組 織は、他のプロレタリア運動主体と有機的に結合して初め て、階級的意義を発揮することが出来る、という理論が、 多くの反対者――無政府主義者、一部のマルクス主義者す らの――を斥けて、最初から確立され、展開された。ただ その集団の行動の規定等に関しては、勿論、明確な理論的 展開を見なかった。

四、読者及び大衆性の問題。これはプロレタリア文学の 謂わゆる第一期の進出期に起った問題である。当時のプロ レタリア文学が、事実において、インテリゲンチャ及び少 数の前衛的労働者にしか読まれないのをみて、一部の人々 は、その大衆化の要を唱え、その方法として、既成の娯楽 的要素を多分に取入れた通俗芸術を提唱し、それを実践に 移しすらした。これにたいしてプロレタリア文学の主流 は、同じく大衆化の要を認めながら、右の機械的な方法を

斥け、運動全体の中によって漸次的にプロレタリア文学を 大衆化すべきであり、また大衆化し得ると主張した。その 後の事実を見ると、右の機械的方法による大衆化は全然失 敗し、当時インテリゲンチャと少数の前衛的労働者にしか 読まれなかったプロレタリア芸術が今日、万をもって数え られる労働者及び農民の心臓へ『喰入って』来ているので ある。

五、リアリズムの固持及び『調べた芸術』論。それは勿 論、部分的な、多分に自然主義的なリアリズムではあった が、とにかく日本のプロレタリア文学は、その出発の当初 から、リアリズムを固執して来た。そして表現主義、未来 主義等々の偏向と闘って来た。しかもこのリアリズムの歩 みが、主として労働者出身の作者によって、半ば無意識的 に採用・固執され、右の偏向が主としてプロレタリア化し たインテリゲンチャによって、これも半ば無意識的に為さ れたという事実は注目に価する事実である。『調べた芸術』 の提唱は、恰かもその部分的、体験的リアリズムが行詰っ た時期に、文字となって現われたものである。(ここで一 寸付言しておくが、プロレタリア文学において『行詰り』 と云う場合は、その大衆化への漸次的な歩みが頓坐した場 合で、ブルジョア文学の場合のように、主として作家の主 観的条件に関連したことではない。)その提唱は『調べた』 という標語でも示されているように、部分的でなく全体 的、個人体験的でなく階級経験的のリアリズムへの進出を

要求したものであった。これは正に、謂ゆる綜合的リアリズムへの素朴な要求の現われと言って差支えないであろう。

この時期には、これらの理論的展開があったに拘らず、根底的にそれを裏付け、やがてそれを組織し、統一すべきイデオロギーの意識的高揚も、把握もなかったと言ってよい。そこで『目的意識論』の提唱が、この時期の自然発生的状態に終結を与え、意識的プロレタリア文学運動の扉を開いたのである。

三

『目的意識論』の概要は、『プロレタリアの文学は、自然に発生し、生長する。それは何ものをもっても抑えることが出来ない。また自然生長があればこそ、運動が成り立ち、それが必然となるのである。しかし自然生長は、飽くまでも自然生長であって、それが目的意識にまで質的に変化するためには、その自然生長を導き、引上げる力がなければならぬ。……プロレタリア文学運動は飽くまでも、目的を自覚したプロレタリア芸術家が……自然生長的なプロレタリアの芸術家を、目的意識にまで……引上げる集団的活動である。そこに運動の意義がありそこに運動の必然がある。……』(青野季吉)と云うにあって、それは要するに、プロレタリア文学及び文学運動に、プロレタリア・イデオロギーの徹底的浸透を求めたものに外ならなかった。

この提唱は一方では文学運動の組織の上に、他方では文学理論そのものの上に、劃期的な展開を与えた。即ちその組織の上では、プロレタリア・イデオロギーのヘゲモニーを執らない例えば無政府主義的要素は、これをモメントとして清算された。文学理論の上ではプロレタリア・イデオロギーの高調・体験的部分的リアリズムの止揚が、力強く前面に押し出された。

だが、それにも拘らず、その理論的努力が甚だしく機械的な偏向を執ったのは、事実である。たとえば組織論の上で、プロレタリア文学団体をもって、前衛的組織と誤認した偏向や、文学理論の上で一部の人々によって謂ゆる『進軍ラッパ主義』が唱導された如きは、その顕著なものである。この責任の一部は確かに、提唱者の提唱の仕方が、かなり簡結であり、約束的であったことに起る。だが、その責任の他の部分は、文学及び文学運動をそれとして取扱わないで、当時マルクス主義政治理論界を支配していた謂ゆる福本主義の機械的・公式的理論を、そのまま文学及び文学運動に、無批判に当てはめたことに存する。

それにつづいて現在までのプロレタリア文学の理論的発展の過程はこれを要するに、『目的意識論』によって示唆された方向の徹底、それから生じた諸偏向の清算の過程であったと言ってよい。例えば極く最近『政治的価値と芸術的価値』の問題を提出した平林初之輔氏は、その提唱をも

って『目的意識の昇華』だと註釈している。

『目的意識論』は言わばそれまでの自然発生的な、組織論、作品論、批評論にたいして、基礎的な、根本的な出発を促したもので、プロレタリア文学理論は、当然、これをモメントとして、統一化、組織化への方向を執り、特殊化、具体化へと進出しなければならぬ約束をもっていた。またその約束は、徐々にそれぞれの集団の理論的努力によって果されて来た。

この提唱は、やはり前期的特性をもって、一般に外国特にロシアの文学理論的努力とは、直接何らの関係なく、日本のプロレタリア文学運動それ自身のうちから、弁証法的に展開されたものであったが、恰かもこの前年にロシアのプロレタリア文学運動は、『ロシア共産党の文芸政策』に現われている理論的努力をなしていた。そしてその努力のうちに、党（プロレタリアートの前衛的組織）と文学運動との関係、プロレタリア文学運動と同伴者との関係、文芸批評の基準の問題等の根本的な問題が、決定的に取扱われていた。これを我々のところにおける『目的意識論』にくらべると、その準備と、その規模と、その具体性において決して同日の談ではないが、そしてまたそれはロシアのプロレタリア運動の進行と、日本のそれとが同日の談でないと同じに、当然のことであるが、それにも拘らず恰かも時を同うして、同じ基礎的な性質の理論的努力が、この世界の二つの部分にあったと言うことは深い意義のあることでなければならない。だが、これは決して偶然事ではない。と言うのは、プロレタリア文学理論は世界的共働によって建設されなければならぬほどの未墾地であり、しかも各国のプロレタリア運動は、国際的プロレタリア運動に、多かれ少かれ合流して進行しているからである。

四

『目的意識論』以後のプロレタリア文学理論の特性的な点は、何人にも明らかなように、第一には、それが組織的、統一的方向をとって進んで来たことである。前期のように素朴的、抽象的、孤立的な形において問題が把握され、展開されるようなことがなくて、ともかく文学理論に体系的構成への努力の方向を執って進んで来ている。第二、それは、前期において、ブルジョアジーの文壇との闘争の過程において、徐々に展開されたものであったが、この期に及んでは、プロレタリア文学運動自体の内部的闘争の過程において、可成急速なテンポをもって展開されて来たことである。それと言うのはブルジョア理論に闘争力が極度に弱化し、乃至消滅すると共に、プロレタリア文学運動の陣営内に、問題が具体化し、特殊化されるにつれて理論的対立が当然な理由で、発展したからである。第三、それは前期においては、プロレタリア政治理論と、多かれ少かれ関連して展開されたとは言え、まだその関連の度合の程度は、

稀薄であったと言える。だがこの期に及んではその度合、程度が比較にならぬほど緊密になり、層一層緊密な関係に這入り込みつつ展開されたことである。たとえばプロレタリア政治理論の方面で、前衛と大衆の機械分離理論が前景を占めて来ると、プロレタリア文学運動の組織の方面において、それと符節を合した理論的方向が執られ、前衛と大衆との有機的、組織的結合の必要と、その組織理論が政治方面の前景に掲げられると、それと同じ必要を槓杆とした理論が、文学上に理論的努力の日程に上ると言った類いである。第四、この時期には一般に外国特にロシアにおいて達成されたマルクス主義文学理論が、非常な熱心をもって、我々のところへ紹介され、それが我々のところの文学理論の展開に力強い拍車となったことである。この事実に大いに留意しておく必要がある。この期におけるプロレタリア文学理論が、急速なテンポをもって展開し、ここに一種の批判時代を現出したについては、他の諸条件と共に、この条件が大いに貢献している。ブルジョアジーの前代の諸文学流派の理論が、ヨーロッパにおける達成を摂取して、乃至は直輸入して、急速に一応完成されたに反して、プロレタリア文学理論にその理論上の本源がなかった。が、この期に及んで初めて、その本源と我々のところとの流通の路がひらけたのであった。かくて、これまでは単独の努力によって展開された文学理論が、国際的共同努力によって展開される事情となったのである。たとえば問題の『ルナチャルスキーのテーゼ』のごとき、いかに我々のところの文学理論の展開に、有力な槓杆として作用したことであろう。またかの綜合的リアリズムの提唱の如き、我々のところの実践的方向がよし自然発生的にそこに向って進んでいたと言え、その理論的基礎づけが、いかにマーツアの『欧州プロレタリア文学の道』に負うところがあったかは、説明するまでもないであろう。

我々は次に、然らば、我々のところの文学理論が、いかに具体的に展開されたか、その、最も重要なものの若干の観察に移るであろう。

五

この時期に入って日本のプロレタリアートの理論的努力は、先ず文学運動の組織論の方面に、ついでプロレタリア文学の全内容の方面に輝かしい進出を見せた。だが、それと共にプロレタリア文学運動の陣営に二個の意見の対立、二つの傾向の対立が明白となった。それは今日誰でも知っているように、『文芸戦線』を機関とする団体のそれと『戦旗』を機関とする団体のそれとである。(この二個の団体の対立はヨリ多くの政治的理由によるものであるが、それぞれの政治的意見は、何等かの形態において、文学上の理論で反映せざるを得ず、事実またそれは最初は明白の形をとっていなかったが、問題が具体化されるに従って、漸次

に明白となって来たのである。）だが、その対立は、一切の取上げられた問題において見られる訳でなし、問題によっては二つの団体の見解が、かなり接近している場合、乃至一致している場合すらある。これは寧ろ自然なことと言ってよかろう。

文学運動の組織理論はこの時に決定的に明白になったと言ってよい。プロレタリア――マルクス主義――文学団体は、原則としてマルクス主義に付属し、その一つの機関として初めて、十分な意味においてその名に値するものたることが出来る。これは最早や確立された意見であった。だが実際的に言って、それならば現在実質的にマルクス主義党として認められ、その下にプロレタリア文学団体が付属すべき党は、果して何処に求められるか？　という問題になると、そこに二つの意見が対立しているのである。更にその文学団体の内部と構成に関する理論になると、一層その対立が鮮明になって来ている。

文学団体の主体は芸術技術家をもって構成すべきであり、その主体の外側に、文学芸術的の大衆を結合すべきである、というのがだいたい一方の意見であり、文学団体の組織をもって、事実上、ほぼ政治団体の組織と同一的に取扱うのが、他方の態度である。そして前者が、その組織および運動において、純粋型を主張しているに反して、後者が実に混合型をとっているのは、その主張からの当然の所産と言ってよいであろう。

この時期において、プロレタリア文学の内容及び形式の問題が、それについで最も熱心に追求されたが、その結果は謂ゆる綜合的リアリズムの理論である。

さきにも一寸述べておいたが、日本のプロレタリア文学は、既に前期の終る頃から、ここで理論的に意識化され、一層それが進んでいたのが、事実的に、この方向を執って前方に押しやられたのに過ぎない。ここでも事実が理論に先行したのである。この理論の構成者は蔵原惟人君等であった。私はいま、これが説明を便宜上マーツアの『欧州のプロレタリア文学の道』からかりて来よう。

『若しも芸術家が、プロレタリアの現実のエピソード的な、隔離された偶然な場面及び現象の限界によって満足しないならば、若しも彼がすべてのエピソード、すべての偶然の中に全体としての現実との連繫、過去及び未来への歴史的道程との連繫を見るならば――その時彼は必然に啻に卑俗なる自然主義をのみでなし、またそれが個人的な（広義に於ける）現象の隔離されたる選択をのみ許すという限りにおいて、分析的リアリズムをも棄てて、綜合的リアリズムの道に進んで行かなければならない。……綜合的リアリズムがその形式的プランに於いて、分析的ブルジョア的リアリズムと異る所は、先ず第一に、現象と思想とは広汎な、弁証法的理解によって決定されるコンポジションの性質を強調しなければならない。』

日本で展開された綜合的リアリズムの理論は、主として

この引用文中に連繋を高調したもので、それはまた与えられた日本プロレタリアートの現実から当然なことでもあったのである。日本のプロレタリア文学の作品と批評とは、その出発の当初から常にリアリズムを固執し諸種の小ブルジョア的惑乱に発した傾向と戦って来たが、綜合リアリズムの理論と共に、そのリアリズムはプロレタリア化に一応徹底したものとなったと言っても差支えないであろう。

それについでプロレタリア文学の理論的努力が、最も多く消費されたのは、謂ゆる大衆化理論であろう。この問題は、これを一応解決のついた問題としている人々があるようだが、正しくはまだ解決のついていない問題である。現にこの月の『新潮』にも、勝本清一郎君はこの問題について注目すべき意見を述べている。

大衆化の問題では、蔵原惟人、林房雄、中野重治、青木壮一郎等の諸君が最も熱心に討究したが、いまその概要を見ると、プロレタリア大衆の間に実在する層の相違、文化水準の相違、年令の相違等を基礎として、プロレタリア文学の分化――たとえば高級文学・通俗文学・少年文学等々へ――の必要を説く者と、その機械的な取扱い方を批難するものとが存在するようである。特にそれは『芸術性』に関する論点と関連して、一層問題を生んでいる。

この点で最近注目すべき理論を展開したのは、前記の勝本清一郎君の論文である。勝本君は『プロレタリア芸術の確立運動は、大衆化運動と結びつかなければならぬ。プロレタリア階級にこそ、将来における新しい建設的な生活内容の萌芽があり、次代の新しい「芸術性」のための諸条件の準備がある筈だからである。その中へと拡大して行かなければ、それらを獲得することが出来ぬ。即ちプロレタリア芸術は、大衆化して行くことによって、次第に芸術性を喪失してゆくどころか、かえって益々新しい内容と、形式と、それを裏づけるべき新「芸術性」の諸条件とを、みずからの肉とも血とも骨格ともなして行くのである云々』と言っている。

プロレタリア芸術の確立運動と、大衆化運動とが結びつかなければならぬことは、ここで勝本君によって新しく強調されているが、さきにも述べたように、日本プロレタリア文学の理論的努力において、曽つて素朴的に展開されたものであった。プロレタリア文学は、元来プロレタリア大衆の文学であり、プロレタリア大衆の文学であって初めてその新しい芸術性を獲得して来るもので、いかなる意味においても、そこに謂ゆる高級の純芸術と低級の通俗芸術とを区別さるべきではない。プロレタリア芸術の大衆化は、そう言う機械的方法によってでなく、プロレタリア文学運動全体の大衆的進出と相俟って、次第に新しい芸術性をくみとっていって大衆化されてゆくものであり、またゆかねばならぬものである。而も、現に、プロレタリア大衆の中には、層の相違、文化水準の相違等が存する以上、大衆化

の実践には飽くまでそれを忘却してはならないが、しかしそれらの認容は、決して直ちに高級文学と通俗文学との区別を必要とするものではない。問題はモット根本的な点に在るのである。

それはとにかくとして、この時期に展開された理論のうちで、最も多産的な、最も重要なものは、大衆化を中心とした理論であって、この問題は、単に現在プロレタリア文学が大衆の心臓に入っていないから、これを早速どうかしなければならぬと言った見地からでなく、もっと本質的な見地から、これからもますます論議され、展開されるべきものであり、また爾かあるであろうと考えられる。

六

極く最近プロレタリア文学理論の展開に、一つの貢献を与えたものに平林初之輔君の謂わゆるマルクス主義文学の再検討――『政治的価値と芸術的価値』との考察がある。尤も、この考察はそれ自身がプロレタリア文学理論に貢献したと見るべきでなく、それによって先進理論分子の間に重要な問題の再認識が惹起されたと言う、消極的な性質のものである。

平林君の主張は、余りに知れ渡っているから、ここに説明するまでもないが、要するにプロレタリア文学をもって、政治的価値がヘゲモニーをにぎり、芸術的価値がその下に隷属する文学、政治的文学であるとし、それをプロレタリア文学の文学としての特性であるとしたものである。これにたいして先進理論分子は、ほとんど挙げて批評し、論難したと言ってよい。その批評や論難は勿論一様ではないが、政治的価値と芸術的価値とを機械的に切離すことの誤謬、プロレタリア文学の価値をかく二元的に取扱うことの誤謬を指摘する点では、ほぼ一致していたかのように思う。

この『再検討』は、プロレタリア文学存在の根本問題に触れたものであって、この時期にかかる根本的な疑問が、しかも平林君のような先進理論分子によって掲げられるのは、一見不可思議のようであるが、しかし平林君が、よしその論旨は間違っているにしても、かかる根本的な疑問を掲げて来たについては個人的な理由をおいて他にも相当に理由のあることだと考えられる。

日本のプロレタリア文学理論は、この時期に入って、前に述べたように意識的となり、具体的となったが、それが意識的となり具体的となるにつれて、殆んど常に問題を根本にかえして、これまで多かれ少かれ曖昧にされ、十分に意識的に把握されていなかった点が、再検討されなければならないのは当然である。例えばいまの大衆化の問題の場合でも、諸先進分子の理論のうちに、常に根本的な問題の再検討が見られたのである。平林君の場合は、ただそれがプロレタリア文学の文学としての存在さえも疑うような帰

結に到達しているので一つの強いショックとなったに過ぎない。
我々は、ここに日本のプロレタリア文学理論の展開の跡を輪廓づけて来たが、この足跡に明らかに観てとれることは常にそこには、内につつまれているものが、次第に外に意識的に取り出され、抽象的な認識が具体的把握にと進み、諸々の偏向が勇敢に清算され、共同的な努力によって建設がなされるということである。
文学理論は、いまや完全に、プロレタリアートのものである。

（一九三一年十月改造社刊「文戦1931年集」所収）

III

詩・短歌・俳句

解団式

白須孝輔

——この歌曲を東京交通労働組合の同志に捧ぐ——

泣いて別れた争議団
涙にぬれた旗まいて
おおよ
争議は惨敗だ
おおよ
争議は惨敗だ

昨日わたしの車庫の炬火
左翼の誇るかのひとも
おおよ
奴等に奪われて
おおよ
奴等に奪われて

追われに追われ流泊（さすらい）の
旅に誓いしゼネストも
おおよ
右翼のダラ幹め！
おおよ
右翼のダラ幹め！

一度は敗れ二度もまた
涙のうちに復讐（ふくしゅう）を
おおよ
いつの日、勝つまでは
おおよ
いつの日、勝つまでは

（第二節の「わたし」を「おいら」と唄われても差支えない）

再び立上る日の為に

下川儀太郎

——東京市電の兄弟へ——

負ける争議（ストライキ）じゃなかったんだ

そいつが負けたんだ
そいつが負けたんだ
兄弟、そいつが負けたんだぞ！

誰れが
あいつらに妥協を頼んだ
誰れが
争議を打ち切れとぬかしたんだ

ゼネストだ！
全線におっぴろがった……
横浜へ京都へ大阪へ神戸へ
火がついた
そいつを真先にもみ消したなあど奴だ！

死ぬまで闘う！　と
突き上げた拳の下で
怒りに燃え立ったお前達じゃねえか
そいつが六日間！
そいつがたった六日間だ
たった六日間にど奴がしたんだ!?

ダラ幹だ！

社会民主主義者！
裏切者だ！
当り前よ
だが、ダラ幹にまかしたなあ誰れだ？
裏切者をそのままにしたなあ誰だ？

一度しくじった道を
二度と踏むな
おいらは
おいらの腕を信じろ
おいらの闘いは
勝利か×だ!!

ダラ幹を叩き出せ！
社会民主主義者をのしちまえ！
裏切者を踏みつぶせ！
おいらの勝利は
そっからだ!!

兄弟！
争議に負けても腕を離すな？
次の闘いに備えるんだ
密集しろ！
××××の××××……

おいらの勝利は
そっからだ……

窓

窪川鶴次郎

いつものようにおれはぽっかりと眼が覚めた
おれの眼には
筋むかいの監房の高い窓が見えた
すり硝子が真赤だ
もう朝日が昇っているのだ
天井のすすけた電燈
廊下のすみに無力な姿をさらす看守
朝だ
今日は十一月の七日だ！

遠く我が視線をたどれ
今し広場にむらがる労働者農民の群を見よ
黒い頭はうごめきつつ広場を埋めてゆく
労働者農民の勝利の地！
朝日の光芒かがやく遥か青空の一端に

おれは潮のごとく湧きあがる歓呼の声を聞こうとする
この広場の光景にむかって
地球のあらゆる方向より一様に頭を起す人々がいるのだ
彼等沈黙の頭はみな暗い檻の中に浮ぶ。

おれは独房を歩みながら腹の中でゆっくりと歌っていた
「朝焼けの空あおげ
勝利ちかづけり……」
おれたちがビラを貼り、撒くところ
ここに未だ勝利を知らぬ深い眠りがある
ひそかな、若芽のごとく鋭い眼ざめがある。

この日をおれは半日責められ通した
××がとぶ
髪の×××××れる
音を立てて金網の蝿たたきが振り廻される
怒号が飛沫を上げて荒れ狂うのだ
昨夜おれから巻きあげた貼り残りの伝単
読めと言うなら読もう！
労働者農民××××××同盟×××！

労働者農民×××万歳！
おれの顔はヒリヒリと感覚が無くなった
ようやく戻る監房の

虎が傷を負うて深山へ引き上げる慘しさ
おお、地球の頂きにひるがえる勝利の旗を思え。

友達のこと

神谷　暢

ながい間の熱や痛みに外へ出ることがなかった友達に
きょうは富士山がよく見えると言ったら
「山が見たい」と言ってきかないのだ
「つれて往ってくれ」と涙ながしているのだ
まだ、きのう歩くけいこをはじめたばかりだのに
手をつないで家の内を二三度ぐるぐる廻ってみただけだ
のに
もう、きょうは外へ出てゆけるというのであろうか
出てゆけばあとできっと苦しむにきまっている
だからといって、涙をうかべ、手を合せてこんなに熱烈
にたのんでいる友達の願いを俺に踏みにじることがで
きるというのか
たとえ、どんな痛みや苦しみがやってこようと
それに負けている君ではない
自分でしようと思い
自分で仕た事柄が
どんな大きさをもって自分にはねかえり
自分をぶちのめそうと
断じて「愚痴」などは言わない
君はただ倍の力をもって立ち上り
それらに向って戦いつづけるだけだ
俺はそれをよっく知っている
だのに、この俺のためらいは俺の意気地なさからであろ
うか
そして俺の頭をもんもんとめぐってから
俺は友達を連れて外へ出た
友達は人の足みたいだという足を一心に踏みしめながら
久しぶりで外へ出ることのできたよろこびと物珍らしさ
にわくわくしながら
富士山が見えるすぐ前の土手まで出た
秋晴れの眺望は明るく澄みわたっていた
友達は俺のたもとを引いては
「山が見える」「山が見える」といってよろこんでいた
足がよければ草道を川岸の土手まで走っても行きたいだ
ろう
遠足へゆく子供のように元気よく歩いてもみたいだろう
友達はせわしくあたりを見廻していた
涙をためた眼を大きく見開いて一つのこらず見落すまい
と辺りを見廻していた

そして、身体をふるわせて「うれしい」と言った
「きっとよくなる」と言った
俺は心から願った
七ッの疾患をもって戦いつづけてきたこの友達の一日も
　早く元気に、歩くことができるように
そして、俺達仲間の間に君の晴々しい顔が見られるよう
　に俺は全身をかけて願う

今日義兄が監獄からもどってくる

坂本遼

こないだ送ってやった
おらのめいせんの着物と羽織をきて
今日九時二十分に相野駅へつく
さびしい長い間のおらの辛抱
こうしてじっと考えておると
喜びや悲しみで涙がでる
あの霰のふきわたる寒い日に
ここを出てから
四年目の今日ここへもどってくる
長い間労役で年をとった顔に
ふかい悔いと苦しみの宿っていることをねがう
もどってはくるけれども
もうこの家にはおかんはいない
つぶれかかったこの家は
雨がふる度ごとにもってきて
居るところをかえねばならぬ
涙なしにどうしてこの家の閾がまたげられようか
監獄に居ったあいだ麻緒をなっていた義兄は
その厚くなったてのひらをもって
死んだおかんの仏壇に合掌するやろで
おらもそれをねがう
ああ今日の日がきたことを思うと
胸の底から喜びがでてくる
心からうれしい
夕陽が赤くなって
うすら寒いこの台所から
かしわのぬくい匂が流れてでる

保護職工

森竹夫

働いているこの機械は家庭用シンガーミシン台ではない
旧式な製本の安機械
彼女は磨き歯車に油を注す
埃をうかべた日光が漸くさぐりあてるくらがりで
だまりやさん
だまりやさん
だけどわたしはお前がじっと何をこらえているのか知ってるの

十六歳未満だから保護職工
何てかがやかしい名だ美しい名だ
残業はたっぷり四時間
活動小屋のはねる頃になって
半分眠ったこの保護職工は細のようなからだで露地から電車道にたどりつく

ガスのたまった神田の工場街では雀もあそばない
十一月に入って冷たい雨がふり出した
通りがかりに見ると彼女は今日も見えぬ
じっと光をこらした機械の上におどろくべき鮮明さで保護職工の指紋がついていた

山村食料記録

森　佐　一

岩手県九戸郡山根村
家族、十五歳以上四人以下五人
八月二十四日から
同じく三十日までの食料記録

廿四日　ひえ一合、麦五合、めの子（こんぶの粉）二合
　△朝、きうりづけ、ささげ汁　△昼、朝と同じ　△夕、麦かゆ、生みそ（ペロペロなめる）
廿五日　ひえ一升、大豆五合　△朝、きうりづけ、ささげ汁　△昼、芋の鍋ふかし、生みそ　△夕、ひえのかけ、きうりづけ
廿六日　ひえ七合、麦五合、ならの木の実一升　△朝、ならの木の実、ひえのかけ、きうりづけ　△昼、朝と同じ　△夕、麦かゆ、とうもろこしの鍋ふかし、菜っぱづけ
廿七日　ひえ五合、麦五合、ならの木の実一升　△朝、ならの木の実、ひえのかけ、菜づけ　△昼、芋の鍋ふかし、菜づけ　△夕、ならの木の実、菜っぱ汁
廿八日　ひえ五合、ならの木の実一升　△朝、ならの木

の実、ひえかゆ、菜づけ　△昼、芋の鍋ふかし、菜づけ　△夕、ならの木の実、茶っぱ汁
廿九日　ひえ一升、ふすま二合、麦五合　△朝、小麦じる、はっとう、きうりづけ　△昼、同じ　△夕、麦かゆ、みそ焼き
卅日　ひえ一升、麦一升、ささげ二合　△朝、芋の鍋ふかし、菜っぱ汁　△昼、同じ　△夕、麦とささげのかけ、みそ焼き

編集長のみだし
　一号　昭和の御代とは
　　初号　思えぬ生活
　　　四号　九戸郡山根村の
　　　　二号　同情すべき食物
ここでは明治も大正も昭和も、げんろくも足利もないであろう、バカにしてやがる。
海のものは、こんぶ二合だけ食べています。

六十日続く旱天に
今年はひえ作三合です
食うものがなくなったら
土でもかじるであろうか

松の根がランプの代りをするので
みんなくしゃくしゃ目のふちがくされている

戦争

金井新作

——何故戦争に行きたくないというのか。
——殺さずにいられない気持ちが動いてもいないのに、殺し合わなければならないからです。
——みんな喜んで召集に応じて来るではないか。
——嘘です。
——群衆は、あんなに熱狂しているではないか。国中は沸き立っているではないか。
——瞞されているんです。
——瞞された位で、あんなに心底から熱狂出来ると思うのか。
——心底から？
——心底からだ。
——若しそうなら、たとえ瞞されているとしても、私は沈黙します。だが一人でも、無理やり引きずり出されて、仕方なく群衆に和しているものがあったならあな

た方を憎悪します
――憎悪したところで、どうにもなりはしないではないか。
――憎悪する者が無数に生れてもですか。
――黙れ！　戦争はもう始っている。お前も召集されているではないか。いやでもおうでも、行かなければならないではないか。
――行きたくありません
――銃殺するぞ。
――行きたくありません。

飢渇地帯

小森盛

泥海は漫々、総ゆる露路を浸している
屍体のように浮かんでいる板きれ・襤褸
水準下にはうすべりが、赤畳が、朽ちた床が
崩れた荒壁が、傾いた柱が……
夕陽がどんよりした空に燻り
泥水の中にも重く暈が沈んでいる
本所・深川の湿潤地帯　泥海地方――
ここに立っておれは悲天を汚水に瞰る。

……連日降雨の七日間
飢餓との長い戦いの
飢餓ゆえの総ゆる不和の
じりじりした無為の刻々
ふやけた土は水を噴いた……。

放心した男は空樽にどっかと坐り
天井の鼠の交尾をきいては
台所に泛ぶアルミの鍋に
もの憂い瞳を抛げている。
夕ぐれが泥海に翳る頃――
その男は生きていたという証拠に
渇いた唾液を汚水に吐いた。

戦争

北川冬彦

義眼の中にダイヤモンドを入れて貰ったとて、何になろう。苔の生えた肋骨に勲章を懸けたとて、それが何に

なろう。

腸詰をぶら下げた巨大な頭を粉砕しなければならぬ。腸詰をぶら下げた巨大な頭は粉砕しなければならぬ。

その骨灰を掌の上でタンポポのように吹き飛ばすのは、いつの日であろう。

大軍叱咤

将軍の股は延びた、軍刀のように。

毛むくじゃらの脚首には、花のような支那の売淫婦がぶら下っている。

黄塵に汚れた機密費。

しゃっぽをかぶらない農夫等

滝沢二一

俺等は去年の秋までは
陽にやけて赤ちゃけた
しゃっぽをかむって耕していた
どんどん土を掘りあぜを作って
行くうちに汗びっしょりになるので
時々俺等はしゃっぽをぬいで
汗を拭いていたもんだ
しゃっぽをぬいだ時の清々しさったらない
遠くの上り勾配できばっている汽関車の
ポッポッポッポッポという音も
綺麗な秋空の中に木魂を作っていた
俺は畑から飲み水を汲みに川へ行く時は
何時も駈け足で行って来た

春になった
子供等はタンポポやつくづくしをつみに
堤の方へ唱歌をうたって行く

俺はもう去年のしゃっぽは破れてかむれないのでまる坊主だ
どんどん耕して行く中に汗びっしょりになる
そこで俺は黒くなった手拭で顔をふく
だがあの去年の様な清々した気にはならない
上り坂できばっている汽関車の音も聞えない

村端の電気製板の音がひどいので聞えないのだろう
あんなに毎日木をひいていてはやがてみんな禿げ山になる
作次のところはまた水が出て稲を流されるかも知れないぞ
俺は案山子のようにつったたって時々汗を拭き乍らそう思うのだがどうもならん

金蔵と俺は何かある度組合を作ろうと云うと皆一応は承知するのだがいざとなれば逃げ出す
町の巡査と田畑を取上げられるのが恐ろしいのだ
村で本当にやれるのは金蔵だけだと思うと情けなくなってしまう
でも本当にどうもならなくなれば
皆一団りになることは出来る
だがそれは本当に食えなくなった時のことだ
俺等はその中よいしっかりした組合を作らなければならない
堀越村のはただ酒飲む組合だ
あんなのは駄目だ、てんで問題にならんわい
それにしても何時になったら俺等の組合が来るかそれが心配だ
食えなくなったらどんなことでもやる

と皆は言う
俺等は食うことは食っているがもうこの辺から食えないのも同じじゃないかと言ったら皆変な顔をして笑っていた
よく考えて見たらしゃっぽを持たないのは俺と金蔵だけだった
食っているのがやっとのことだ
月遅れの雑誌を買うと煙草を喫わないでまる二日いなければならないありさまだ　しゃっぽなんぞ二の次だ
（金蔵の親爺は貧乏がいやでしようがないので息子に金蔵と名を付けたのだそうだがいつまでたってもやっぱり貧乏）
地主の息子の謙三は嬶のあるくせに
毎晩オートバイで町へ夜遊びに行きやがる
俺等は何時になったら嬶を持つことが出来るんだろう
そんなことは二の次だ
俺等は組合を作らなければならない
隣村の秀次が俺等の仲間になった
あれはしっかりものだから大丈夫だ
俺等と組合を組織することに力を合わせることを約束した

俺等は力強い組合を作らなければならない
春になった
子供等はタンポポやつくづくしをつみに
堤の方へ唱歌をうたって行く
俺はときどき案山子の様につったって
ひたえの汗を拭き　しゃっぽのないのに気づく
そして組合のことを毎日考えるのだ
（戦旗一九二九・七月号）

ビー丸のK

俺達だ

船をわが家に海で働く俺達だ
毎航数百の移民をのっけてブラジルにとどける運輸交通の俺達だ
神戸出帆、門司でつむ二千トンのコールバンカ　その石炭を焚く俺達だ
日本を離れて四昼夜　ホンコンに着くまで汗と涙を搾られる水火夫の俺達だ

ブル船客が暑い暑いとデッキで涼む時
百二十度の汽罐室で火を焚く俺達だ
船はシンガポールを出帆した
熱いぞ
その時マストにのぼり　シャボンふき　ペンキ塗りをする俺達だ
熱い熱いインド洋
赤道通過
そしてアフリカのモンパシサ
長い長い十四昼夜
船はまたもや出帆だ
ポルトガル領デラゴアだ
またもや出帆だ
そしてとうとうダーバンだ
おーい
日本の兄弟よ
門司で積んだ二千トンの石炭はここまでで焚いてしまったぞ
そして又もや二千トンの積み込みだ
又もやそれを焚く俺達だ
お次はポートエリザベス
そのまだお次はケープタウン
神戸を立って一カ月あまり
雨あらしと一しょに船に積まれて来た移民達は

最後に悲しむ前の港ケープタウンで
ひどい海上生活の慰安のために上陸した
それなのになお仕事に追われる俺達だ
そこで最後の出帆だ
この灘こせば千年も夏のブラジルだ
東半球……アフリカの南端ケープタウンから……大西洋
の横断だ
スコップや
鉄棒や
ペントや
スパイキや
油や
舵を相手の俺達だ
兄弟よ　兄弟よ
神戸からサントスまで一万と二千哩
その間スクリュを廻して来た俺達だ
そしていよいよ入港すると
移民会社の奴が来て
俺達の兄弟を汽車に積み込んで連れて帰る
ピイピイ汽笛は鳴った
搾取者めが待っている
ブラジル・サンパウロ州の高地コーヒー園に投げ込まれ
る移民の兄弟よ
同宵する

涙が出る
血がかよってる俺達だ
遠い万里異境の地にもブルが根を下してる
やろうぜ一しょに
移民達も労働者も農民もブルのために痩せる
友だ
友よ　同志よ
植民地の解放のために握手をしよう
ピイピイ汽笛は鳴った
そのひまに握手をしよう
団結を誓おう

（戦旗一九二九・八月号）

燕

伊藤信吉

牢獄の小さい窓から、
囀る燕に話かけたと手紙をくれた仲間よ
燕はまた五月の空をやって来た
おれたちの湧きあがるメーデーの行列の波をいく度かひ
るがえりつつ

この小さい鳥は掠めては飛んだ
広場から町に溢れ渦巻いた凄ましい行列のなかから
咽喉をひき裂くはげしい歌が並んだ店のガラス戸にひび
いた
卑劣なあいつらの頭上に
悪辣なあいつらの胸にひしひし炸裂するダイナモ
おれたちの歌
おれたちの鉄腕の垣
おれたちの頑強な鉄の波
おれたちのメーデーは戦いの日のバリケードだ

築きゆく屍とともに
メーデーの波と歌はしだいに世界の到るところに拡がり
燃え立つ
世界のおれたち仲間がかかげる戦の旗
世界に靡びくおれたちの旗のはためく風音
一九二九年のメーデーには
ドイツの仲間たちはバリケードを築きあいつらのテラー
と激烈に戦った
戦った六日間を機関銃に狙撃されつづけ
血塗られた屍を残して蹴散らされた
だがそれが敗北か
見ろ！　一九三〇年！　さらに熾烈なメーデーの旗がむ
らがり靡く
聴け！　さらに熱した戦いの歌がとどろき渡る
世界のプロレタリアの血を湧きたたし駆りたてる五月一
日を
獄窓の仲間よ
じっとその胸に燃やす
あらゆる苦痛に耐えた胸に生々とよみがえらす
おれたちの歌
おれたちの鉄腕の垣
おれたちの頑強な鉄の波
それはかならずおれたちの世界を戦いとる
それはかならず牢獄のあらゆる仲間を×いかえす

ふたたび牢獄から燕の手紙をくれるであろう仲間よ
渦巻くメーデーの波を掠めつつ飛んだ燕の去る夕暮とな
っても
おれたちは勝利への五月一日をまだまだいつまでも戦っ
ているぞ！

（戦旗一九三〇・五月号）

百万の中の母と子

仙庭　康

子供よ、ごらん
この真黒い人の塊りを――
なんという沢山の人の波、人の潮、人の渦、
このうねうねと続いた人達は
お前の住むみじめな長屋の果から
遥か向うの賑やかな街路を越えて
そしてもっと遠くにまで素晴らしい防塞を築いている
ああこの真黒い群衆！
この盛れ上った肉瘤、鉄のような肩や腕や肢、
ねえ子供よ、ごらん、どの人達も
みんな嬉しそうにしてるじゃないか
みんな躍り上がってるじゃないか
これは一体何だろう？
このとてつもない肉と脂の防塞――その行手には一体何
　があるのだろう？
何を目指してこの大勢の人達は集っているのだろう？
何がこんなにこの人達を有頂天にさせているのだろう？
それからあの天の向うにまで響き渡る歌は何の歌だろう
？
ああ子供よ、妾の可愛いい命――それはお前にも解ると
　いうのかい？
解る！　解る！　解る！　解らなくてさ！
なぜって、お前の父も亦この百万の中の一人なのだもの
――
お前の兄も、姉もいや……いやこの人達は一人残らずお
　前の父と母、お前の兄と姉、お前の、お前の……
おお親しい同志！　仲間！　友達！
百万の幸福のために百万の人が
千億の飢えと寒さのために千億の人が
子供よ、此処に勢ぞろいしたのだ、一つの流れにほとば
　しるのだ、あの暴虐の城を倒すのだ！
妾やお前は弱いけれど
それがお互に手を握り合った時に
その時こそどんな事が持ち上がるか
それをあいつらに見せてやるのだ
そうだ、あいつら――無数の生活を×った敵！
限りない幸福を泥まみれにした金持ども！
なお数多くの同志を牢屋に×ち×み
僅か一杯の水と十日分の食糧
×る、×る、×つ
あらゆる惨虐の限りを尽して
さて、冷然と辨えたギロチンに送ったあいつら！

そのあいつらへの沸る憎悪、湧き返る憤激
何がどうあろうと晴らさねばおかぬ××を一丸として
この都会に嵐を捲き起すのだ
虐げられた世界の仲間と呼応し
地上、至る所に張り廻らされた搾取の網を蹴破るのだ
おおその今日！　五月の一日！
子供よ、この百万の中に妾達も加わるのだ
ああ過ぎた日の思いは×で一杯だ──妾の子供よ
よしお前の脳髄は一握り程もなく
お前の心臓は一枚の枯葉のようであっても
お前もまた数多くの中の一人ではあるのだ！
お前は見たのだ。
戦いの日日が激しい憤怒と憎悪を叫んで
空腹と疲労が全身を打ちのめしている時、
お前の兄弟、お前の同志が
あいつら！　無慈悲な狼の手にかかって
屠所へ行く羊のように引かれて行ったのを──否更にお
　前は見たのだ
その怒りに血走った同志の眼を──
鉄の腕の、大きく空を切って振り廻されたのを──
叫ぼうとして叫ばれない心の焦りを──
「仲間よ、続いて来る多くの仲間よ、
勝利の日迄はこの道を行かねばならない」
──おお何ものにも代え難い巨大な夢！

かくて次々と彼等は引かれて行ったのだ
次々と、子は父を、妻は夫を、又年老いた母は息子を
聳え立つあの頑丈な建物の中へ
鉄格子と金網の暗い冷たい牢屋へ奪われたのだ
ああその痛ましくも胸に刻まれた三月十五日！
四月十六日！
子供よ──はっきりとそれが
今、お前の眼にも浮んで来はしないか！
おお更に妾の命──小さい同志よ
お前は覚えてはいないか？
あいつらの勝手気儘な議会が開かれている時、その議会
　に席を持った一人の同志が
この都会の真中で刺し殺されたのを──
一市井の無頼の徒、あいつらの尻に噛りついた寄生虫、
それが、子供よ、その同志の刺手だったのだ
そしてそいつはどうなったか──おお今頃は一人の同志
　を殺したことが、
どんな大きな意味を持っているかも考えないで
何処かあいつらの別荘にでもくすぶっていることだろう
　──けれども、同志よ、
赤旗に包まれた同志の×よ
永遠に言葉を奪われた絶叫者よ
いつかはあなたの怨みの晴らされる日が来るだろう！

ああ過ぎた日の思いは×で一杯だ
この道を何人の先駆者が
喘ぎつつも尚希望に向って突進したことだろう！
夢を捨てるよりは生命を投げ出すのを喜んだ同志達！
胸いたに穴を開けられ生きの身を火に投げ込まるるとも
尚最後の節を売らなかった同志達！
おおその同志達によって聖められたこの荊棘な道！
おおこの道こそは牢屋と勝利への道だ！
暗い夜の後に輝かしい朝のあることを知らしてくれる道
　だ！

そして今日
百万の同志に依って築かれた防塞、
その圧力、その弾力、抑えても抑えきれない起ち上ろう
　とする力、
その世界の同志に呼びかける叫だ、
あいつらへ打ちつける自由の弾丸、
その集団の踏み進むのも亦この道だ！
おお子供よ、もっと背伸びをして
お前の胸が張り裂けるまでに歌を歌おう
妾は昨日死のうとも
この道に斃れた多くの同志達の血潮で聖められた
お前という――又無数のお前達のあることを知らしてく
　れ！
一人が倒れれば五人が起つのだ
二人が倒れれば十人が起つのだ
そして七人が、十一人が
否否、そうだ無数の同志が倒れれば
更に更に無数の同志が起つだけだ
日は近い！　この飢えと寒さを振り捨てて、巨大な夢を
　持ち来らす日は――
それはこの集団、――防塞の彼方にある！
行け！
進め！
突喊せよ！
百万の中の一人――同志
百万の中の二人――子供
おお百万の中の十万！
百万の中の百万！

（戦旗一九三〇・五月号）

掘ろう！

河野健二

俺達は井戸掘り
俺等は溝掘り

おおよ！　俺等はきっと天下掘り返す
（戦旗一九二九・九月号）

起ち上がる

森山　啓

――富山第一ラミー紡績会社の兄弟に贈る――

男工。こらえて来た
　俺達あ何十年もの間こらえて来た
　おさえつけられ
　みくびられ
　いいいい
　してやられ
女工。幾人も
　幾十人も
　機械に捲きこまれ引き裂かれ
男工。幾十人も
　幾百人も
　餓え、病みつき、追ん出され
女工。娘ざかりをふんだくられ
　煤けた女囚人のように閉じこめられ
男工。俺達、内地に生れた者や朝鮮に生れた者、海を越
　えて来たものや山地から来たもの、
女工。わたし達、あそこの村、ここの村から、甘い口先
　で釣られて来た者
男工。俺達一千二百の仲間は今こそ鎖を断って起ち上が
　る
女工。奪われた者を取り戻す為に
男工。餓えた胃の腑は求めるんだ、
　食物よりももっと偉大で切実な奴を
女工。闘争、私たちの自由の為の闘争を！
男工。長い間、胸の奥に隠して、眺め、あこがれていた
　組合を、
　今おれたちのものとする！
　長い間雪にとざされていた町に
　もう労働者の冬眠なんてもなあ無いんだ
女工。冬の真ん中に、年のはじめに
　私達は冬眠から醒めたんだ
男工。面喰ってる、富山は！
　先にゃ嵐みたいな騒動に
　漁民の
　×は流され
　×で鎮圧し
　と思うと総選挙だ
　息が切れてたまらねえ××の
　その出鼻は又ひっぱたかれる

女工。俺たちのストライキで
ひっぱたかれろ、小っぴどく
わたし達あ恨んでる
敵だ、あいつらは
漁民騒動の時も何をしたか
私らの闘士をくび切る時サーベルで会社を守った
のも
あいつらではないか
男工。今こそ俺達あ心臓でつかむ
俺達自身の外にゃ誰も味方はねえってことを
女工。たった一人の犠牲も見殺しにゃ出来ない
兄弟だ、わたし達はみな
内地の者も朝鮮の者も
男工。眠ってる仲間は揺りさませ！
傷ついた仲間は背負わねばならぬ
女工。その傷をこの手で洗い
その犠牲をこの手で救わねばならぬ
男工。あわてて要求条件を認めた彼奴等、代りにサーベ
ルの力で闘士をくび切った彼奴ら、
あわてて社員と請願巡査に傷害保険をつけた彼奴
ら
女工。もうどんな彼奴らのペテンにも乗らない
男工。千二百人が一人の――
たった一人の強者のように闘うんだ

女工。肺の悪い、蒼ざめた娘さえ頬をほてらして考える
――
どうしてまたあの、女囚人のような暮しに帰れる
か？
男工。俺達がもし、鍛えられる鉄の巨い塊なら
俺達あ砲弾となり
刃となり
鉄条とも、タンクとも、戦車ともなる
今日は昨日よりも鍛えられ
明日は今日よりも鍛えられ
喋ったことのねえ仲間が、今はサイレン見たいに
哮えて見せ
能無しに見えた者が
智恵を
胆っ玉を
すばしこさを
訓練を
びっくりする程見せて行くんだ
女工。長い間こらえて来た
何十年もの間こらえて来た
みんな長いトンネルをくぐり抜けて来たんだ
男工。さあ行こう
俺達あ我が手に仕合せをつかみに行く
女工。××の下に

男工。奪還に進むんだ
女工。奪われた仲間や、ふんだくられた一切の自由を
男工
女工 }。もう職場は奴隷の仕事場じゃない
　もう職場は奴隷の仕事場じゃない
　うたう、そこでは××がうたう！
　闘う時
　嵐あ重い雲を蹴散らし
　立山の峰つづきが白くそびえる
　晴れてる山室村の南の空に。

（戦旗一九三〇・七月号）

横顔

上田進

1

壊滅した――と言う
そうかも知れないと思う
健在だ――と言う
そうかも知れないと思う
地下に追込められたものは
益々深く地中に潜り込んだのだ
俺達にはてんで見当がつかなかったのだ

2

気笛の白い蒸気が
灰色の空にちぎれ飛んだ
午前六時の川風が
雪交りの雨を赤煉瓦に叩きつけ
脂染みた硝子窓をゆすぶった
肩をすぼめた俺達の行列が
鉄門の外にまだ長くつづいていた

3

泥んこの通路がやけに癪に触る
癪に触るから大股で歩いて行く
口の開いた護謨長の鼻先に
ビラが落ちて来た
顔を上げると頭の上に
赤や黄のビラが舞っていた
風が一吹き強く吹いて
霙の中にビラが一段と激しく散った
むこうを見た
厚いコンクリの塀が立ってるだけだった

4

何処から舞って来たのか?
どんな人が撒いたのか?
俺達は知らなかった
(俺達の中にいる人かも知れぬ)
——だが、たしかに、今此の手に
俺達はビラを握っている
××××××を!
これは夢じゃない
そら、ひっぱたかれたら痛かろうが?
本当だ!

5

衣兜じゃ駄目だ
肌へつけときな
よし……いやもう一度見て
左の下の隅の五つの文字……
見つめていると
レーニンの顔になって
笑い出して
躍り出して
ぼやけた……
いけねえ、涙で鼻がつまって

6

ピチャピチャ……急に足音が高くなり
行列が騒がしくなった
俺達は胸を張って工場に入ってった
俺達はプロレタリヤだぜ!

7

眼の底に染みついた
頭の心に焼きついた
この五つの文字——それが
胸の中を引掻きむしる

8

お出でなすったな、監督さん
ポリ公連れてさ。
出すもんかい、
これあ俺等の御守だ。
…………
へん、ざまァ見やがれだ!

9

俺達は見た
俺達は知った

俺達の××××だ！
俺達はやけに嬉しいんだ
（おお、その胸に抱かれているのは
地下に××××がチラリと見せた
小さい、四角な、赤い横顔！）

（戦旗一九三〇・七月号）

刺された心臓

飯田兼次郎

三月五日、友山本宣治刺さる。われ同夜東京より帰り深夜の工場に号外をつくる。

心臓をぐざぐざと刺されて息絶えし激痛をわが胸に感じいる

号外の初号活字の刺殺の文字尖りするどくわが心刺す

君が顔刹那に浮ばずまっ赤な血を噴いている心臓が一つ

（雑誌「詩歌」昭四・四月号）

メーデー擁護

美木行雄

女ら出でてメーデー行進の人々に水与えている——涙ぐましさよ

女工らの口を衝いて出る労働歌に、はっと胸を衝かれ自ら掌を握る

涙ぐましい光景ではないか。群衆の上に、旗赤く振られ湧きあがる歌

（同上昭四・六月号）

なびく旗

来る、来る、見たまえ組合旗をなびけ来る、行列の一所より高く労働歌あがる。

街角に続々とあらわれる旗、旗、旗、よごれた組合旗が押し進んで来るよ、こちらへ

みなぎるこの意気を見よ。高らかに、労働歌はあがる堵列の上に

（同上昭和四・七月号）

メーデーの列

石村夏川

メーデーの列にまじれる少女らのセル着あざやかに五月の光

街頭にメーデーの列眺めおり額にあつき五月の日かげ

メーデーの列にまじれる桃割れの少女の丈長(たけなが)紅きを見たり

（同上）

五月祭縦隊行進

南正胤

永代の鉄のアーチに雨しぶき空にわきたつメーデーの歌

男工と腕組んだ女工の今日の快活はかのブルジョアの娘にはない

赤旗に交ってアナ系組合の黒旗を捧げる旗手の憂欝な顔

（同上）

嵐・嵐・嵐

三・一五、四・一六と嵐は来たが党はあるのだ、党は亡びない

見ろ、党は触手をのばすアミーバのように工場へ農村へ
――君の心へ

いい気持で糞をしながらふと見ると「日本共産党を守れ」と書かれてあった

（同上八月号）

汽笛

広田楽

被搾取階級のあらゆる感情がきこえるのだ夕空いっぱい

に湧き上る汽笛

絶叫と悲鳴と呪咀ともつれあい呼び交すような日暮れの汽笛

あらゆる不平を唯ひと息に吐くようだ夕方の街にわきあがる汽笛

自分のからだからほとばしるようにも感じられる夕方の汽笛のなかのひとつが

都会を包んで鳴る夕方の汽笛をきけそこにこめられた感情をきけ

坂根彌吉

働きて餓えんとする労働者吾等のめぐりは騒がしくなれり

吾も今は鉄けずりつつ淋しさに黙っておるべき時にはあらずや

淋しさのいつか叫びとなりてゆく吾等が叫びさけばざらめや

(雑誌「創作」昭四・八月号)

貧しさに詠める

手の爪のいたく伸びたるつくづくとながめて吾のせわしさ思えり

わずかなる午の休みを工場の食堂に寝て風邪ひきにけり

もうもうと空をおおえる製鉄所の煤煙の底に秋の日の見ゆ

(同上十二月号)

山宣への報告書

林田茂雄

山宣よ君の血がまだ濡れついている赤旗を、今引裂こうとする奴がある

押し立てる俺らの旗から滴るものは山宣の血だ渡政の血だ、乾かない血だ

嵐よ募れ、募るほど赤旗の血潮は吹かれ飛沫いて俺たちのデモを真赤に染める

考える

内藤雅之助

金の有無で医者も左右に動くのだ命も金でどうにでもなる

俺達の賃金のかすりで生きている親方の油ぎった体を見ろ

模範小作人表彰会

佐々木妙二

否応なし血汗の小作米ふんだくっておいて、何が模範完納者なんだ

おめおめ搾取されてる意久地なしは模範小作人だとまつられておれ

娘の賃銀が一家を助けている美談だらけだ、俺らの村は

道路工事

高橋福次郎

炎天に焼かれてえっさえっさ俺たちの汗がかためたこの道路を見ろ

広濶な路を作ろう組織されて何時でも起てる俺達の路を

（以上雑誌「短歌前衛」昭四・十月号）

バットより安い勲章

橘　哲夫

勲五等、勲六等、何がクンクンだ。そんなものは俺達の
バットより安いんだ

エンジンを止めろ！　ストップだ。バラバラになった
腕、歯を食いしばった顔

大勝利解決だ、万才だ。見ろ、飲まず食わずの声が青空
を押し上げている

大内　隆雄

ソヴエート領事館にひるがえる赤旗に激する心を正しく
育てろ

精一ぱい働かされたあとに吸う安煙草だせめて息深く吸
え

成田　相子

反抗がわたしの胸にうずまいて燃えさかって火になって
ゆけ

奴等が束縛したってなんになるこの反抗がますだけなの
だ

（以上同誌昭四・十二月号）

河津　癸

（小沢武二）

やがて検束される叫びを叫びつづけている
巡査の顔が折り重なってきて旗をかくすところがない
地獄ですと若い女工が演壇で泣いている
煙突が黒い血を吹きどうしだ

（「戦旗」昭和四年十二月号）

みすみす不正工事の寒い舗道を塗らしやがる

（「戦旗」五年一月号）

みつめていると亀裂だらけの資本宣伝映画だ
もう検束されるものもない無茶な静けさはどうだ
罷業に破れた赤襟さんだ威勢よく切符を切ってくれた
巡査で縁をとったメーデーのこんな行列が日本より他に
　あるか

栗林一石路

（青木　宏）

暗い上り框にまた「税金」がきてやがる

（「戦旗」四年十二月）

年貢にとられる米となって籾臼からこぼれる
冬空のビルジングの資本の攻勢を見ろ
海へ動き出せ煙吐いて俺たちの工場になれ
こんな藁家まで税金をとる間竿で測に来やがる

（「戦旗」五年一月号）

彼奴らの舗道をぶちこわす俺たちのこの鶴嘴だ
女工となって炬燵に年とりにきている
仕事のない冬空が晴れてばかりけつかる
失業している俺に落葉おちやがるおちやがれ
ぼろぼろ馘首されてゆく一と冬の椅子や卓や

君のだまってた不平が手の盃の酒がこぼれる
ばらばらじゃだめだという顔が酔ってばかりはいない

橋本夢道
(名東　淳、白野道子とも)

煙突の林立静かに煙あげて戦争の起りそうな朝です
泣けるだけ泣いてしまってから彼を葬るに兵営の規則
死亡室の白布の下の死顔もう一度見たい母が叱られる
(弟の死二句)
明日は仕事が出来るんだ蒸気を吐いて船がはいった
殺された職工の遺族が葬式のお礼をいわされている
ゲートルの紛失がなぜ自殺しなければならない新兵なのか
人間が人間にペコペコして組織のねえ俺達が搾取されれど
うしだ
戦争ごっこの鎮台様がおらが諸畑をメチャメチャにして呉れやがった

横山林二
(横山賀茂水、小山林二とも)

繭売ったわずかな銭を算盤にしている
地主奴の屋根に今日も鎌みたいな月が出よった
五月一日の村をおめえもおめえも革命歌どなり歩いた
小作人の子供は子供どうしで蜻蛉追っているのです
木の葉のような解雇通知を一枚くれただけだ

新井夜雨
(黒木　哲とも)

ののしりたりない女工で演壇で泣いてしまう
いまこそ真赤なカタマリとなった俺たちのデモだ
これですと女工が演壇でつきだした手に指がない
搾取するだけして煙突を休ませている旗日
もう搾取されることはないしずかに死んでいる顔だ
ボロボロの旗で今年も君の腕にある

（メーデー）

もう騙されねえぞ忠魂碑がくずれかかってらあ
遺族の食えなくなったことも戦勝塔にきざみつけろ
草刈り稲刈るこの鎌で×××も刈りとっちまえ

上野冬生

もう裏切る奴はいない暗い夜が凍ってきた

このひからびた町の大売出しの旗のあせようはどうだ

横山梨青郎

まっくろい空から就業汽笛を鳴らしやがるんだ
搾取するだけの地主の顔で村会に出ている
メーデーが来ると書くようになった君の手紙だ

流鋭

真赤に空へ靡いてメーデーをたたかう旗だ
アジビラもってひけ時の工場の門に立った
腕のバリケードだもりもりもりあがれ
電車争議のスカップの運転台のこいつ

黒土子

遠く夕焼けてくる行軍の口を結んでいるのだ
土をもたないものの力がこんなに実った秋の地平だ
築港の春だというだけで仕事がない

浜口彌十郎

何の漁もない沖できょうもぞろぞろ軍艦が通る
むつきにくらくされて夜業の昼はおる
米一升買いにきた風呂敷をひろげた
足首のない足を見せておる師走の街はあった
咲いた花へうたうのもストの歌であった

選挙のビラが折ってやれば鶴になる
此の壁の隣から夜業へ出ろの時計が鳴った
とうから搾られにゆく隣からも菜っぱをきざむ音がして
いら

千原眛旦

もう痩せようがないという煤けた手を洗っている
ポケットの寒さを握りしめている手だ
黄ろい水を吐いている工場の石垣で芽ぶいた
氷った水甕にも煤烟のふりたまっている生活
それは仕事を失うているとしよりのうしろすがただ

黒沢 衛

キカイにやられたんじゃないと息を引とるまでいっていたが
クビキル会議をはじめやがったドアだ
落日がまっ赤で今日の俺の仕事は伝単貼りだ
ハチ切れそうな元気で拍手の中に突っ立った君だ
笑ってビラを袂にいれてくれた女工さんだ
ドアから聞えてガナッている声は俺達の代表だ

賢木 栄

戻って固くなった夜業の手がぬくもらない
死んでたったこれだけの銭をもっていたのか
梅咲く今年も同じ賃金でつとめている

中野風葉

それぞれの生活を置いてきた兵卒の顔だ

井上省一

くずれまいとする争議団が雑草のようにもんでゆくのだ

西山啓二

中止解散で会場を出たら月が更けていた

家木礼介

風船売の年よりを見ろ義足だ

腹がへってるのが俺だけでない町が寒い

黒木光子

こんなきれいな月の晩を機械からはなれられないでいる

和泉田文麿

蚊やりがけむい賃縫の手のやせている妻

神山癸卯

吸えるだけおれの血を吸って逃げた蚊だ、あいつだ

長江螢光

旗押したてて秋晴のデモだ

藤川硬兵

ふれふれ赤旗を青空へちぎれるほどふれ
ハンマアもツルハシも投げて秋空の息を吸え

難波綾彦
(西八十八)

山林統一だといって柴刈さえも制限しやがる
地主を追っ払いでもするようにホイホイ雀を追っていた

藤田秋泉

クビときまったのを知らないでごみを捨てに出ていって
いる

反逆のビラがまかれた暗いなかの非常線だ

同志を裏切って車をすべらしてくるあのつらを見てやれ
（市電争議）

藤木杜子

職にありついた昼飯である作業場に日照雨が降っている

就職切符がとれて太陽がはっきり見えた

逢阪薊

月の中にも貧乏人はいるかという子です

工場長さんが見送って下さって息子は片腕しかない

綿くず肺臓に今日も一杯入れて星空へ出た

首にしやがった工場の上へ月見の月が出ている

北村春畦

此の節くれ立った指へ賃金をまけろとこきやがる

金魚が涼しいってなんだ俺たちは炎天に働いているのだ

失名

此蟻を見ていりゃ誰だって差別のねえ国にしたくなら

解説

蔵原惟人

一

この巻には前巻についで一九二九年（昭和四年）六月ごろから翌三〇年の八月までに発表された作品が収録されている。

これは日本帝国主義がかつてなかったような経済的、政治的危機に直面し、日本が戦争か革命かの重大なわかれ道にたった時期のはじまりであった。一九二七年の金融恐慌以来つみかさなって来た日本資本主義の内部矛盾は、一九二九年になってますます顕著になり、同年秋のアメリカの株式恐慌に端を発した世界恐慌が日本にも波及するにおよんで、その頂点にたった。金融資本は操業短縮、工場閉鎖、首切り、賃下げ、労働強化などによるいわゆる産業の合理化を強行し、それを通じて独占を強化することによって、この恐慌のいっさいの犠牲を勤労人民大衆の肩に転化しようとした。失業者は街にあふれ、一般市民、俸給生活者、知識人の生活条件は極度に悪化し、中小企業家、商人の倒産が相ついでおこった。

このような情勢のうちで労働者をはじめとする勤労大衆の闘争が激化していったのは当然である。統計によればこの時期における争議とストライキの件数は、一九二八年にそれぞれ一、〇二一件、三九七件

であったものが、二九年には一、四二〇件、五七六件、三〇年には二、二九〇件、九〇七件に増加し、その参加人員も一九二八年にそれぞれ一〇四、八九三人、四六、二五二人であったものが、二九年には一七二、一四四人、七七、四四四人、三〇年には一九一、八三八人、八一、八六二人に激増している。同じ時期に農村の小作争議も、一九二八年の一、八六六件が、二九年には二、四三四件、三〇年には二、一〇九件という数字を示している。このような闘争の激化は、一般人民の生活の悪化と相まって、労働者、農民、小市民、インテリゲンチャの急速な左翼化をもたらした。この時期におけるプロレタリア文化、文学運動の高揚もこうした社会的基盤の上に立っていたのである。

この大衆の左翼化と労働争議、小作争議などは、三・一五以来急速に再建された日本共産党や、左翼労働組合としての日本労働組合全国協議会（全協）の活動と影響によっていっそう促進され、激化していったことは争われない事実である。この事態を見てとった政府は党と全協をあくまで弾圧し、それを壊滅させる方策を取り、一九二九年の四月十六日を期して、共産党員や全協指導者にたいする第二次の全国一斉検挙をおこない、全国で六百名が逮捕され、そのうち二九〇名が起訴された。検挙はその後も引きつづいて絶え間なく行われ、三・一五以来全国にわたって検挙されたものの総数は六万五千人にたっするといわれている。

このようなうちつづく検挙と運動にたいする暴圧も闘争のもりあがりを阻止することが出来なかったことは、前にかかげた数字を見ても明らかである。党と全協も破壊される度にその組織を再建していった。しかしそのような相つぐ破壊が革命的組織の力を次第に弱めていったことも争われない。党と全協の指導者はますます深く地下にもぐり、その活動は困難をきわめ、大衆との結びつきが切断されるという事態が生じた。それに累次の検挙によって党や組合の指導者が奪われる結果、運動に経験の浅い活動家や、敵にたいして強固でない、中には敵と通謀しているようなものまでその重要な地位についたりし

て、そこに指導におけるきわめて危険な偏向が生れてきた。

とくに一九二九年の四・一六事件の後、その年の七月初旬に再建された党指導部は、党の組織や活動を再整備し、工場を中心とする組織方針をたて、党機関紙「赤旗」(発行部数約一千)や「第二無産者新聞」(発行部数約一万)を再刊じたが、しかしその指導部に小ブルジョア的な冒険主義者が優位を占めるにいたった結果として、党とその影響下にあった全協は、その方針においてしだいに極左的な偏向を強めるようになった。党はその当時きわめて少数であった党員(一九二九年末に二百名内外であったといわれる)に全員武装を命じ、「第二無産者新聞」や全協の機関紙では、「ゼネスト」「工場破壊」「武装ストライキ」「武装蜂起」「武装デモ」などの言葉が乱用され、それが時には実行に移されて、一九三〇年の五月一日には竹槍その他で武装した小数の革命的労働者がメーデー会場に突入するといったような事件が、川崎その他におこった。

革命運動の指導におけるこのような偏向は大衆の生活の極度の悪化と自然発生的な闘争の激化においつこうとする小ブルジョア的指導者の焦燥のあらわれであったが、それが党や組合の組織を内部から破壊し、運動を弱めたことはいうまでもない。そのために正しい方針がほうむられ、それを支持する活動家が排除され、革命的な気分をもった大衆の或る部分は党や全協から離れて、党の方針に反対して再建された合法主義的な新労農党の旗の下に集まるというような結果になった。しかしやがてこうした極左冒険主義的な傾向にたいする批判が、一九三〇年のメーデー直後に党内の自己批判としておこった。すなわち六月一一日の「第二無産者新聞」は神田徹夫署名の「ボリシェビキ党の再建と極左的傾向に対する闘争の急務」という論文をかかげてその克服にふみ出した。しかしその闘争がまだ十分な成果をおさめないうちに、党と全協に潜入していた官憲のスパイによって、党中央部は七月に、全協中央部は八月にふたたび破壊されてしまった。

以上に述べたような革命運動の客観的、主観的状態はそのプラスとマイナスの面において、直接間接にこの期間におけるプロレタリア文化、文学運動とその作品に反映せざるをえなかった。

しかしここで言っておかなければならないが、当時はまだ文化組織のうちに共産党員のグループは存在していなかった。私が入党したのは一九二九年九月だが、その頃の党にはまだ文化政策も、文化対策の機関もなく、私はそれ以前からしていた文化関係者からの党資金カンパの仕事を続けたただけであった。この関係で翌年五月にいわゆる党シンパ事件がおこり、学者では平野義太郎、山田盛太郎、小林良正、三木清、井汲卓一、大河内信威、作家では中野重治、片岡鉄兵、村山知義、山田清三郎、立野信之、小林多喜二など三十名が検挙され、そのうちの十二名が起訴された。これらの人々は非合法の共産党を支持し、党に毎月十円、五十円、百円の資金を提供していたという罪をも問われたのであるが、それも非党員として間もなく釈放された。私はこの頃すでに半非合法的生活をしていたために検挙をまぬがれ、その年の七月に党中央部の命令でモスクワに去った。文化関係の党グループが結成されて活動しはじめたのはこの年の秋以後、とくにその翌三一年の春以後であった。

こういうわけでこの頃のナップは、その雑誌「戦旗」が毎号発売禁止され、その成員が個々に検挙されるというような事情はあったが、党や全協のようにその組織の壊滅的な破壊をこうむることがなかった。そのため古くからの作家や批評家がいぜんとその指導的地位に立っていた。また専門家の団体であったために、スパイの潜入する余地がすくなく、後にプロレタリア作家同盟に党フラクション（党員グループ）が出来て、多くの作家が検挙された時にも、そのフラクションの全貌は戦後まで暴露されなかった。

それはともかく、こういった事情で、この期間のプロレタリア文学運動の中心的組織であった日本プロレタリア作家同盟は、当時の社会民主主義者に反対して非合法の共産党と革命的労働組合としての全

協を支持し、その極左的な運動方針の影響をうけながらも、運動と組織とを破壊するような非常識な活動はそこでは抑制されながら発展していった。そのために作家同盟の運動と作品とは革命的労働者や進歩的インテリゲンチャの広はんな支持をうけ、大衆啓蒙雑誌となった「戦旗」は一九三〇年には毎号の発禁にもかかわらず、その発行部数は最高二万六千に達した。これは当時の商業的大綜合雑誌の発行部数を上廻るものであった。

これにたいして労農派の政治的立場を支持し、非合法的な日本共産党の方針に反対していた労農芸術家連盟の機関誌「文芸戦線」は、この期間にもずっと発行が継続され、その作品活動にも見るべきものがあったが、この時期の終りごろになると内部の対立が表面化して、平林たい子、今村恒夫、長谷川進などがそこから脱退した。労芸はその後一年ばかりの間に、第二次、第三次の分裂にあい、黒島伝治、今野大力、伊藤貞助、山内謙吾、細田源吉、間宮茂輔などもそこから去ってナップに加わり、組織としては次第に弱まっていった。

二

前年の十二月にナップが再組織されて全日本無産者芸術団体協議会となり、それに加盟する独立の団体として再出発した日本プロレタリア作家同盟は、一九二九年二月十日にその創立大会をもって、その方針や役員を決定した。この大会では各種文学ジャンル——小説（片岡鉄兵）、戯曲（藤森成吉）、詩（中野重治）、童話（猪野省三）、批評（蔵原惟人）、「戦旗」（山田清三郎）についての報告がなされた後に、議案として綱領、規約、一般的な活動方針、戦争反対に関する件、文学大衆化の問題が審議された。綱領には「一、我らはプロレタリアート解放のための階級文学の確立を期す。二、我らは我らの運

動に加わる一切の政治的抑圧撤廃のために闘う。」という二条がかかげられ、一般活動方針としては、とくに作品の大衆化と多様化、ブルジョア芸術、社会民主主義芸術との闘争、動揺する小ブルジョア作家への働きかけの必要、労働者、農民の中からの新しい作家の発見、大衆のあいだでの諸種の文学的催しの必要、独自の出版活動、国際的交流、などの原則が強調されたが、これらの原則は作家同盟を中心とするその後のプロレタリア文学運動に一貫するものであった。

しかしプロレタリア作家同盟のこうした出発と方針にたいして、「文芸戦線」の作家や批評家はつねに批判的であった。しかしその対立は文学理論上、創作方法上の対立というよりも、より多く政治的立場の上での対立であり、また感情上の対立であった。そのことは本巻に収めた「プロレタリア芸術理論」についての山田清三郎の「ナップの側に立ちて」*と小堀甚二の「労農芸術家連盟の立場から」*を読みくらべて見るとわかる。山田はここで「雑誌『文芸戦線』一派」について、彼らはプロレタリア芸術運動を標榜しているが、実は「プロレタリアートの党と結びつくことを欲せず、反対に裏切者社会民主主義の手足となり出店となって、プロレタリアートの必死な闘争を妨害することによって、客観的には支配階級の協力者としての役目をつとめている」から「彼等は徹底的に粉砕されなければならない」と言っている。これに対して小堀は彼がインテリゲンチャ的であると認めているナップを頭に置いて「インテリゲンチャは、プロレタリア的に思考することは出来るが、感ずることは出来ない。感情は思惟よりもより一層直接的な環境からの派生物であり、従ってプロレタリアの感覚、感情は、殆んど全くプロレタリア独特の環境に依拠するものであるからである。……そのことは、我が国に於けるプロレタリア文学運動の歴史に徴しても明白である。多少とも記念すべきプロレタリア文学作品の創造者は、殆んどプロレタリア出身の作家であったと言ってよい」と書いている。これらの言葉は当時のこの対立する二つの組織の見解と気分とを代表するものであった。

この二つの論文は一九二九年七月に発行された「プロレタリア芸術教程」に出た。この「教程」はプロレタリア芸術運動の発展と読者の拡大を見た商業出版社が企画したもので、ナップと労芸その他のプロレタリア的な芸術家や批評家を動員したものとして特色をもち、かなり広く読まれて、一九三〇年七月までに四集が出版された。その頃ナップと労芸の作家たちがいっしょに仕事をすることはほとんどなかったので、この「教程」の発行は、プロレタリア芸術の普及に役立っただけでなく、プロレタリア作家や批評家に自分たちの仕事をふりかえってみる機会を与えたが、しかしここでも両派の共通の場は見出せなかった。

この「教程」の第一集には青野季吉が「プロレタリア芸術概論」を、中野重治が「政治と芸術」を、黒島伝治が「反戦文学論*」を、金子洋文が「プロレタリア大衆文学論」を、それぞれ書いており、またその年の十一月に発行された第二集には小林多喜二が「プロレタリア文学の大衆化とプロレタリア・レアリズム*」を、立野信之が「農民文学論*」を、三木清が「芸術的価値と政治的価値との哲学的考察」を書いた。そのうち黒島伝治は前巻に解説したように、そのころすでに「文芸戦線」のすぐれた農民作家、反戦作家としてその才能を認められていたが、その「反戦文学論」は実作者の最初のまとまったこの種の論文として注目される。立野信之はこれもまた「前衛」以来の反軍小説、農民小説の作家であり、同様の意味でその「農民文学論」をここに収録した。

宮本顕治の「敗北の文学*」は一九二九年八月の「改造」に発表された。これはこの雑誌の文芸評論懸賞募集に応じたものである。その第一位が宮本のこの論文、第二位は小林秀雄の「様々の意匠」で、二人はこれによって論壇に出た。この論文のうちで宮本は自殺した芥川龍之介の文学を自分自身の問題として取り扱っている。ついで彼は「過渡時代の道標」で片上伸を、「同伴者作家」で広津和郎を論じた。これらの論文は文学遺産をいかに評価し摂取するかという問題にふれたものとして重要である。

芸術大衆化の問題をめぐるいわゆる中野・蔵原論争は、前巻の解説でふれたような形でいちおう終り、プロレタリア作家同盟の創立大会は「作品の大衆化」のスローガンをかかげた。しかし作品をいかに大衆化するかという具体的な問題は理論的にも実践的にも解決されていなかった。そのためにこの問題はこの時期にもちこされ、一九二九年の終りごろからふたたびそれが取りあげられて、論争になった。小林多喜二の「プロレタリア文学の大衆化とプロレタリア・レアリズムに就いて」はこういう論争のうちで書かれたものである。この時期における文学大衆化の論争の特色は、この問題が創作方法の問題として論じられるようになったところにあるが、小林のこの論文もそれをプロレタリア・レアリズムの問題として取りあつかっている。これはだいたいにおいて当時の作家同盟指導部多数の意見を代表するものと見てよい。ところがこの小林の論文が掲載された「プロレタリア芸術教程」の第二集に、作家同盟員である貴司山治が「プロレタリア大衆文学作法」を書いて、小林などとは違った意見を述べ、そこでプロレタリア文学の大衆文学化を主張している。

この問題には歴史があって、それは私が一九二八年九月号の「戦旗」にルナチャルスキーの「マルクス主義文芸批評の任務に関するテーゼ」を訳載したときにはじまっている。この論文のうちでルナチャルスキーはプロレタリア文学に「プロレタリアートの上層部分、まったく意識的な党員、すでにかなりの文化的水準を獲得した読者に向けられているような作品」と「比較的単純な内容によってでもいいから、幾百万の大衆を感動せしめうる」作品とに分けている。ルナチャルスキーはこの二つを程度の問題として提起したのだが、これに関連して林房雄は翌月の「戦旗」に「プロレタリア大衆文学の問題」を書き、そのうちでプロレタリア大衆文学という特殊なジャンルが可能であり、必要であることを主張した。この林の意見に反対する反論は「戦旗」にはすぐ出ず、かえって労芸の小堀甚二の前記の論文や金子洋文の「プロレタリア大衆文学論」（ともに「プロレタリア芸術教程」第一集）のうちでなされた。

貴司の主張は林のこの見解をさらにおしすすめたもので、彼はそこで私の「再びプロレタリア・レアリズムについて」(一九二九年八月)という文章を全文引用し、原則的にはそれに賛成しながら、ソヴェートの「壊滅」や「セメント」などの小説における「かなり煩瑣なリアリズムの手法」はそのままわが国のプロレタリア文学に受けいれるべきではないとし、そういう「いわゆる本格的(原則的だ)リアリズムに秋波を送るところのインテリ的低迷を一蹴し」、菊池寛や大仏次郎だけでなく、それよりもっと大衆的な中村武羅夫や吉川英治に学んで、「断じて、簡素な、短頸な、明刻な、ダイナミックな、之れ以上わからぬということのないわかりやすさを以て書ける十二分に幼稚な非芸術的な、戦闘的プロレタリア・リアリズムを確立しなければならぬ」と結んだ。貴司のこの主張にたいして作家同盟の内部で討論がかわされたが、同盟指導部の大多数はこうした大衆化の行き方に反対し、小林多喜二の「一九二八年三月十五日」「蟹工船」、中野重治の「鉄の話」、徳永直の「太陽ない街*」などに示されたプロレタリア・レアリズムの徹底による大衆化の方向を支持した。この立場から私は三〇年六月の「中央公論」に「芸術大衆化の問題」を書き、それと前後して作家同盟中央委員会の「芸術大衆化に関する決議」が発表された。

これよりすこし前の三〇年四月号にその頃すでに非合法的生活をしていた私は佐藤耕一のペンネームで「ナップ芸術家の新しい任務*」を発表したが、その月にもたれた作家同盟第二回大会では、文学運動のボリシェヴィキー化、プロレタリア・レアリズムの徹底、ブルジョア文学、日和見主義文学との闘争、統制、規律、組織の強化などの方針が決定された。

私の論文は「共産主義芸術の確立へ」という副題をもっているように、作家が「社会民主主義的観点とはっきり区別さるべき明確な共産主義的観点」に立ち、「わが国のプロレタリアートとその党とが現在に於いて当面している課題を、自らの芸術的活動の課題」とするような共産主義芸術の発展を要望し

たものであった。これは今の言葉で言えば芸術における党派性の問題であり、小林、中野、徳永、村山、藤森などの作品がすでに志向しつつあった方向をさらに意識的に発展させることを期待したものであって、それはそれで当時としては積極的な意義と歴史的な必然性とをもっていた。しかしそれは同時に危険をともなっていた。というのは私のこの論文はナップにおける共産主義的芸術家にアッピールしたものだが、それはナップの全員に要望したものととられても仕方がないような書き方をしていたために、ナップを意識的な共産主義的芸術家の組織として固定化してゆく傾向を強める結果となった。

私はこの論文のうちでレーニンの言葉を引用してわれわれの芸術家が「真実のボリシェヴィキー的共産主義的芸術家」とならなければならないと書いたが、これの発表された頃に書かれた「一九三〇年度に於けるナップの方針書」ではわれわれの運動は「ボルシェヴィキー的運動にまで高ま」らなければならないとなり、同じ月に行われたプロレタリア作家同盟第二回大会では、「文芸運動のボルシェヴィキー化」が決定された。個々の芸術家がボリシェヴィキー的芸術家となることと運動全体をボルシェヴィキー化することとは別個のことだが、当時の運動の状態ではそれにたいするはっきりとした批判はあらわれなかった。ここにも前衛党と大衆団体との役割を混同し、全協その他の大衆団体に前衛党の仕事の一部を負わせていた当時の革命運動全体の弱さの反映が見られた。これから一年後にソヴェート同盟から帰って来た私は「プロレタリア芸術運動の組織問題」という論文のうちで、ボルシェヴィキー化されなければならないのは、芸術運動の指導であって、運動そのもの、組織そのものは大衆化されなければならないと書いたが、それはこの誤りに気づいたからである。しかしこの時期には運動はひたすら「ボルシェヴィキー化」の方向をたどっていったし、その次の時期にもその方向は根本的には修正されなかった。そしてそこから芸術運動におけるさまざまな困難が生れて来た。

三

この時期のはじめの一九二九年五月号と六月号の「戦旗」に小林多喜二の「蟹工船」が掲載され、その後半の出た六月号からは徳永直の「太陽のない街」が連載されはじめ、七月号には村山知義の戯曲「暴力団記*」が載った。「戦旗」はその年の四月をもってナップ機関誌としての文学・芸術雑誌から大衆啓蒙雑誌に発展したが、ナップ所属の作家の主要な作品や評論はいぜんとしてこの雑誌に掲載されていた。その後ナップが独自の機関誌をもったのは雑誌「ナップ」が翌三〇年九月に創刊されてからである。この頃「戦旗」はほとんど毎号発売禁止になっていたが、あらかじめ出来ていた直接の配布網や、固定購売者をもっていた小売店の協力などによって、その大部分が迅速に読者の手に渡り、急速にその発行部数と影響力を増大していった。

「蟹工船」は「一九二八年三月十五日」についで発売された小林多喜二の第二作で、カムチャッカ近海に出漁する日本の蟹工船内における野蛮な非人間的搾取とそれにたいする出稼ぎ漁民の自然成長的な抵抗を描き、この「国家的」産業の帝国主義的性格を明らかにしたもので、現在では映画にもなってよく知られているが、この作品は発表当時から前作以上に世間の注目をひいた。平林初之輔、勝本清一郎などの批評家はそれを絶讃し、その年の八月の読売新聞紙上ではこの作が一九二九年度上半期の最大傑作として多くの文芸家から推され、戦旗社から単行本として発行されたものはその発行部数が当時としては異数の三万五千部にたっした。ついで小林はこの期間に北海道農村の小作争議をあつかった「不在地主」(一九二九年九月)、工場の争議をあつかった「工場細胞」(一九三〇年三月)と次々に力作を発表していった。これらの作品はそれぞれ欠点をもっていたが、小林がつねに積極的なテーマに取りくんで

新しい分野を開拓していったものとして注目され、彼はこれらの作品を通じてプロレタリア文学の中心的作家となった。（「蟹工船」はプロレタリア文学の代表作として当然この大系に収録されるべきものだが、文庫などで一般にひろく流布しているのと、紙面の都合とで割愛した。）

徳永直は一八九九年に熊本市外の貧農の家に生れ、幼時から勤労しながら学校に通っていたが、六年のときに中退して、印刷工場の徒弟、米屋の小僧、職工などをして二三歳まで九州で生活し、その間に社会主義の影響を受けて上京、博文館印刷所（のちの共同印刷）で働き、一九二六年の共同印刷の大争議には出版従業員組合の中心的人物として参加し、争議に敗れて馘首された。徳永は共同印刷にいる時から「馬」「あまり者」などの好短篇を書いていたが、馘首後長篇「太陽のない街」を発表して、一躍プロレタリア文学の代表的作家として認められるようになった。「太陽のない街」は、共同印刷の争議の経験をもとにして書かれたもので、筋の運びが通俗的で人物もやや類型的になっているというような欠点はあるにしても、この頃の大工場の労働者の生活と闘争とを大きな時代的なスケールではじめて具象的に描き出すことに成功したということ、しかもそれが無名の労働者作家によって、広い大衆に読まれるような形式で書かれたということで、それは小林の「蟹工船」とともにこの時代のプロレタリア文学の劃期的な出来事であった。

村山知義は一九〇一年に東京に生れ、一高、東大と進んだが、中退してヨーロッパにゆき、帰国してから「マヴォ」「三科」などの前衛主義的美術団体をおこした。その後一九二七年に「文芸戦線」の同人となり、前芸をへてナップに参加した。その頃から彼は美術のほかに文学、演劇の分野でも活動しはじめ、多くの戯曲、小説を書き、プロレタリア演劇運動を指導した。「暴力団記」はこの時期の彼の代表的作品のひとつで、一九二三年の中国鄭州における京漢鉄道の争議を背景として、軍閥とその手先である暴力団にたいする労働者の決死の闘争を描いたもの。今日から見れば図式的なきらいはあるが、当

時の革命的演劇の代表的な作品として、左翼劇場で上演されて日本の大衆に多大な感銘と激励とをあたえたものである。この頃、中国の反帝闘争にたいする一般の感心が高まったが、同じく中国を舞台にした戯曲として、江馬修の「阿片戦争」(「戦旗」二九年九月号)がある。

武田麟太郎と藤沢恒夫とは大阪今宮中学の同窓で、中学卒業後高校時代に「辻馬車」という同人雑誌をいっしょにやっていた。武田は東大在学中マルクス主義の運動に参加し、その頃から小説を書きはじめ、ナップに加った。藤沢もつづいてナップにはいった。二人とも「辻馬車」時代に新感覚派の影響をうけ、その手法をプロレタリア的題材のうちに生かそうとして、本巻に収録した「反逆の呂律」*「傷だらけの歌」*に見られるような、特殊な作風を示した。

「文芸戦線」の古くからの作家では前田河広一郎が、この時期に暴露的な戯曲「ムッソリーニ」「蔣介石」など、カムチャッカの日本人漁場をあつかった中篇「セムガ(鮭)」*、中国革命に取材した長篇「支那」などによってその多作ぶりを示した。これより前に彼は中篇「太陽の黒点」で自然主義的ではあるが貧民街の生活を丹念に描いた作品を発表して注目されたが、この時期のものは概して筆が荒っぽくなっている。このうちで「セムガ」は見るべきものである。

「文芸戦線」の中堅をなすもっと若い作家のうちでは、黒島伝治を除くと、平林たい子がこの前年から「夜風」「荷車」「耕地」「労働」「敷設列車」*などのすぐれた作品を書いている。一九二八年三月の「文芸戦線」に発表された「夜風」は製糸工場の拡張による地主の土地取上げと、自分自身のうちにも残っている封建的なものにおしひしがれている貧農の出口のない生活と矛盾にみちた闘争を写実的に描いたもので、この作家のそれまでの身辺的でやや無政府主義的な作風から一歩前進したものであった。この巻に収録されて「敷設列車」では、蒙古の洮昂鉄道敷設工事における中国人労働者の日本帝国主義者たちの搾取への反抗という積極的な主題が、簡潔で印象的な手堅い手法で扱われている。これらの作

品は平林の全作品を通じて芸術的にもっとも高い水準を示すものと言えよう。
黒島伝治のこの期間の注目すべき作品としては「土鼠と落盤」(「文芸戦線」二九年十一月)と「浮動する地価」*(「経済往来」三〇年五月)とがある。前者はこの作家にはめずらしく鉱山に取材したもの、後者は農民ものだが、彼の以前の農民もの、たとえば「農夫の鞭」などの重苦しい自然主義的な手法から脱却して、描写が簡潔で明るくなっているのが目立つ。
貴司山治がプロレタリア大衆小説を主張したことは前に書いたが、彼はその主張の上に立って「忍術武勇伝」*「敵の娘」「ゴー・ストップ」(以上いずれも一九三〇年)などの小説を次々と書いていった。貴司は一八九九年徳島に生れ、大阪で新聞記者をしていたが、新聞の懸賞小説に当選して作家生活にはいり、一九二九年の春プロレタリア作家同盟に加った。彼のこれらの作品はその通俗小説的な筋の組立てや誤った英雄主義のゆえに作家同盟の内部では批判の対象になったが、大衆的な読者にはよろこばれて広く読まれた。
細田民樹の「真理の春」*もこの年に東京朝日に連載された大衆的な傾向小説である。細田は一八九二年に生れ、早大文科卒業後小説を書き、自然主義から人道主義、それからプロレタリア文学運動に近づいて「文芸戦線」に加わった作家である。この「真理の春」は「東モス」の破綻と争議にからんで政界、財界の腐敗を暴露したモデル小説で、貴司の「ゴー・ストップ」、下村千秋の「天国の記録」などとともに中央公論社から単行本で出版され、広い読者を獲得した。
細田源吉は一八九一年東京に生れ、商家の小僧や外人のボーイなどをやって、早大文科を卒業、細田民樹と同じような文学的経歴をへて「文芸戦線」に加わった。「巷路過程」*はたがいに競争する二人の商人がいずれも大資本に圧迫されて没落してゆく過程を描いたもので、人物がやや類型的だが、事件はよく書けている。

鹿地亘は一九〇三年に大分県に生れ、東大文科在学中から新人会、プロレタリア芸術連盟に加わり、尖鋭な作家および評論家として活躍した。早くから「プロレタリア芸術」に小説や戯曲を発表していたが、一九二九—三〇年には「戦旗」誌上に労働者の争議をあつかった長篇「動員線」を連載した。「労働日記と靴*」は細田源吉の「巷路過程」と同じ一九三〇年四月の「中央公論」に掲載されたもので、鹿地の他の作品と同様描写の荒っぽいものだが、当時のプロレタリア小説のひとつの型をなすものであった。

橋本英吉は一八九八年に福岡県に生れ、小学卒業後八年間、炭坑生活をした。後上京博文館印刷所に入り、一九二六年の共同印刷の争議にも関係した。一九二六年から小説を書きはじめ、新感覚派のグループに近づいていたが、二八年一月の「前衛」に「棺と赤旗」を書いてからプロレタリア作家としてその才能を認められた。ついで「少年工の希い」「金融資本の一断面」「市街戦」「労働市場」などを書いた。「ガス！*」は炭坑に取材した彼の一連の小説の一つで、一九三〇年八月号の「戦旗」に発表され、そのあとがきには「今月号に執筆する筈の小林、立野が拘留されたので僕が至急に書いた。書き初めたら長くなってしまった。来月号に続を書きたいと思う」と記されているが、その続きは書かれなかった。

中野重治はこの時期に「停車場」「新しい女」「わかもの」「花見と新聞配達夫」「砂糖の話」「病気なおる」「波のあいま*」などの短篇をつづけて発表していった。そのうち「わかもの」はこの作家にはすくない工場労働者の生活を描いたものとして、また「砂糖の話」は養老院の異様な生活を書いたものとして、ともに注目された。「波のあいま」は左翼に関係した仕事をしている画かきとその姉との生活のうちにはいってきた非合法生活者の検挙を描いて、当時の革命運動周辺の雰囲気を伝えている。

この期のプロレタリア文学の作品は、一九二九年後半の高揚の後に、一九三〇年にはいってからやや

低調になったが、それでも以上のような諸作品を通じて、日本文学のうちに確固とした地位をきずいていった。当時のいわゆるブルジョア文学は好むと好まないとにかかわらず、それとの対決をせまられ、その影響も受けざるをえなかった。

（一九五四・一一・二三）

文中＊印のある作品は、すべて本巻に収録されたものを示す。

日本プロレタリア文学年表IV

日本近代文学研究所

一九二九年七月—一二月

作品（『　』内は発表誌・紙、刊は単行本）

『プロレタリア芸術教程』第一輯、世界社刊7（以下三〇年七月までに第四輯まで刊行して中絶）
第一輯主要目次、プロレタリア芸術概論（青野季吉）・政治と芸術（中野重治）・プロレタリア芸術運動理論（山田澄三郎・小堀甚二）・反戦文学論（黒島伝治）・プロレタリア詩の内容（三好十郎）・日本マルクス主義芸術理論に関する文献（池田寿夫）等

暴力団記（**左翼劇場第十二回公演台本**）（**村山知義**）『**戦旗**』**7**

ある村の素描（里村欣三）『文芸戦線』7

貧農組合（パンフィロフ作、長野兼一郎訳）〃7—8

プロレタリア文学の「大衆性」と「大衆化」について（小林多喜二）『中央公論』7

詩・俺達だ（**B丸のK**）『**戦旗**』**8**

敗北の文学（**宮本顕治**）『**改造**』**8**

乳を売る（松田解子）『女人芸術』8

文学運動および関係事件

文芸家協会、検閲問題に関して当局に抗議7

プロレタリア歌人同盟結成（無産者歌人連盟・「尖端」・「黎明」・「風車」の合同による）。同盟員六〇。7
同機関誌『短歌前衛』創刊、部数二千五百。9

日本プロレタリア映画同盟（プロキノ）機関誌『新興映画』創刊9

様々なる意匠（小林秀雄）『改造』9に発表（宮本顕治『敗北の文学』と同じく『改造』懸賞の当選作）

勝本清一郎ドイツに行く（以後ベルリンその他で種々の連絡に当る）9・20

いわゆる「新労農党樹立の提案」について（ナップ声明書）『戦旗』9に発表さる

『西部戦線異状なし』（レマルク）秦

政治的および社会的事件

反帝国主義同盟第二回世界大会パリに開かる7

浜口内閣成立7

女子労働者深夜業禁止されるも労働強化と賃金の切下げにより労働条件は悪化7

ソ連中国国境封鎖さる7・14

私鉄疑獄事件8

日本共産党中央ビューロー確立され『赤旗』復刊さる7

大山郁夫・細迫兼光・上村進ら「合法的左翼無産政党樹立の提案」を発表す。政獲同盟はこれを敗北主義的裏切りとして除名。8・8

汎太平洋労働組合会議ウラジオストックに開かる8

『無産者新聞』二三八号を以て終刊し、『第二無新』創刊8・25

詩集『移住民』(猪狩満直) 銅鑼社刊8
再びプロレタリア・レアリズムについて(蔵原惟人)『朝日新聞』8
マルクス主義文芸批評の旗の下に(〃)『近代生活』8
賃銀奴隷宣言 (岩藤雪夫)『文芸戦線』9—12
プロレタリア文学の材料の問題 (青野季吉)〃9
『芸術に関する走り書的覚え書』(中野重治) 改造社刊9
『芸術と無産階級』(蔵原惟人) 〃
『文芸理論の諸問題』(平林初之輔) 千倉書房 9
歌集『プロレタリア意識の下に』(館山一子) 自家出版9
『蟹工船』(小林多喜二) 戦旗社刊9 発禁
『五月祭前後』(山田清三郎) 戦旗社刊9
わかもの(中野重治)『戦旗』9
阿片戦争 (江馬修) 〃
案山子万歳 (榎本楠郎) 〃
勧進帳(余興用寸劇)(佐々木孝丸)〃
レストラン洛陽 (**窪川いね子**=**佐多稲子**)『**文芸春秋**』9
日本浪漫派思想興亡の跡 (**平林初之輔**)『**中央公論**』10

豊吉訳で中央公論社から刊行、ベストセラーとなる10
国際文化研究所改組され(9・30解散)、**プロレタリア科学研究所となる。**10・13 所長・秋田雨雀、所員・三木清、鈴木安蔵、井汲卓一、永田広志、川内唯彦、深谷進、小川信一、松本正雄、風早八十二、服部之総、蔵原惟人、新島繁、等々。『国際文化』(二巻一〇号まで全二〇冊) に代って**機関誌『プロレタリア科学』創刊さる**11
川端康成・横光利一らの雑誌『文学』創刊さる10
アメリカにジョン・リード・クラブ結成10
ラップ第二回総会10
このころ私小説・心境小説ほとんどあとを断つ
『文芸戦線』ロシア革命記念一一月七日臨時号発行。長谷川進・青野季吉・田口運蔵・前田河広一郎執筆プロレタリア美術同盟(P・P)機関誌『プロレタリア美術』創刊11
プロレタリア歌人同盟第一回大会(作家同盟から仁木二郎、白須孝輔ら加盟す)11・3
国際労働者演劇同盟(I・A・

大阪の総同盟、左翼分裂す9・9
ニューヨーク株式大暴落となりアメリカ大恐慌始まる10・24
日本共産党福本・村山・河合・是枝・佐野(文雄)・稲村らを解党派として除名10
新労農党結成11
反帝国主義同盟日本支部創立11・7
学生社会科学連合会・新人会解体し共産青年同盟へ再組織さる11
反帝同盟日本支部結成11・7
高知県漁民五千、警官隊と衝突11・17
『救援新聞』創刊さる12
東京市電ゼネ・スト12・6
全インド国民大会、ガンジーの独立決議案可決12・31

能率委員会（徳永直）〃
詩集『戦争』（北川冬彦）厚生閣刊10
動員線（鹿地亘）『戦旗』10—翌3
時事問題コント集（里村欣三・山内謙吾・長谷川進・鶴田知也）『文芸戦線』10
芸術に政治的価値なんてものはない（中野重治）『新潮』10
金融資本の一断面（橋本英吉）『戦旗』11
文壇へゲモニーの検討（大宅壮一）『中央公論』11
不在地主（小林多喜二）〃
『太陽のない街』（徳永直）戦旗社刊11
恐慌（伊藤永之介）『文芸戦線』12
敷設列車（平林たい子）『改造』12
プロレタリア文芸批評界の展望（蔵原惟人）『中央公論』12
黒の死刑女囚（細田民樹）〃
海の第十一工場（黒島伝治）〃
『マルクス主義文学闘争』（青野季吉）神谷書店刊12

B）結成さる。ソヴェト・独・チェコ等。12・1
第二回プロレタリア美術大展覧会開かる12
『浅草紅団』（川端康成）『東京朝日新聞』に連載　12—

一九三〇年一月—七月

情報（立野信之）『戦旗』1
アジ太プロ吉世界漫遊・アメリカ篇（林房雄）〃1—2
女人哀詞（山本有三）『婦女界』1
兵乱（里村欣三）『文芸戦線』1—4
真理の春（細田民樹）『朝日新聞』1
転戦十日間（小島勗）『中央公論』1
闘争する二十三人（金子洋文）〃
脈打つ血行（武田麟太郎）〃
『阿片戦争』（江馬修）戦旗社刊1
『前衛の文学』（勝本清一郎）新潮社刊1
救援ニュース No.18 附録（小林多喜二）『戦旗』2
忍術武勇伝（貴司山治）〃
失業群（山内謙吾）『文芸戦線』2
牡牛と故郷（鶴田知也）〃
失業都市東京（徳永直）『中央公論』2
砂糖の話（中野重治）『改造』2
『日本プロレタリア文芸運動史』（山田清三郎）叢文閣刊2
『文学的戦術論』（大宅壮一）中央公論社刊2

『戦旗』一月号発行部数二万となる。
プロレタリア詩戦線統一協議会結成1
新興短歌連盟創立（八月にプロレタリア歌人同盟と合併）1・12
『戦旗』二月臨時増刊「選挙闘争」号発行2
小林多喜二上京3
プロレタリア美術同盟第二回大会3・9
『プロレタリア詩人』・『新興詩学の旗の下に』合併して『前衛詩人』創刊3
蔵原惟人この秋の入ソ（プロフィンテルン第五回大会に紺野与次郎の通訳として）の準備のため春から合法面を去る
蔵原惟人の『ナップ芸術家の新しき任務』（『戦旗』4）により「共産主義芸術の確立へ」の方向が押し出され、以後ナップの進路となる。
芸術派宣言（雅川滉＝成瀬正勝）『新潮』4に発表さる

金解禁実施1
朝鮮光州・京城の中学生数百名反日暴動を起す1・15
和歌山県下に共産党拡大中央委員会開かれ、党中央の再建成る1
武装ビラ撒き行動隊の活動活潑になる2
第二回普選行わる2・20
共産党第三次大検挙行わる2・26
東京市電ストライキを行う。惨敗のまま争議打切り、官憲催涙ピストルを使用4
ロンドン軍縮条約調印4
国家総動員計画実施についての初会議4
武装メーデー川崎市で行わる5・1
ガンジー逮捕さる5・5
プロフィンテルン第五回大会代表派遣闘争開始さる5
共産党極左的偏向に対する克服を決定
三菱長崎造船所ではアイドル・システム（順次週休制）を実施す5
日本共産党解党派の活動はじまる6

三・一五のための詩特集（上野壮夫・田木繁その他）『戦旗』3
市街戦（橋本英吉）〃（なお戦旗社から刊3）
小資本家（徳永直）〃
山ケン万歳（久板栄二郎）『戦旗』三月臨時増刊「三・一五及四・一六記念号」
オイル（シンクレア作・前田河広一郎訳）『文芸戦線』3
松明（ネクラーソフ作・岡沢秀虎訳）3—4
皇帝（戯曲。今東光）『中央公論』3
工場労働者（岩藤雪夫）〃
『芸術とマルクス主義』（プロレタリア科学研究所編）鉄塔書院刊
芸術価値論争をめぐる主要論文（平林初之輔・勝本清一郎・蔵原惟人らの）を集めたもの
ナップ芸術家の新しき任務（佐藤耕一＝蔵原惟人）『戦旗』4
アジ太プロ吉世界漫遊記・イギリス篇（片岡鉄兵）〃4—5
実践されたプロレタリア・リアリズムの検討（齋野季吉）『文芸戦線』4
氾濫は堤を切る（戯曲・伊藤貞助）〃4—5
労働日記と靴（鹿地亘）『中央公論』

プロレタリア劇場同盟（プロット）第二回大会4・4
プロレタリア映画同盟第二回大会4・5
作家同盟第二回大会東京本郷の仏教青年会館に開かる。4・6 新役員委員長・江口渙、中央委員・中野重治、鹿地亘、川口浩、片岡鉄兵、山田清三郎ら。書記長は立野信之。蔵原の右の論文の方向に従い、「文芸運動のボルシェヴィキ化」・「プロレタリア・リアリズムの再確認・徹底」・「ブルジョア文学・日和見主義文学との闘争」等を決定。同盟員一〇〇〇。『戦旗』部数二万二千。この年の最高部数は二万六千。一月号以外全部発禁となる。
ナップ第一回拡大中央協議会（理論機関誌『ナップ』創刊の決定、方針討議等）4・6
新興芸術派倶楽部結成4
日本共産党に資金を提供したことがわかり、小林多喜二、中野重治、林房雄・立野信之・壺井繁治、橋本英吉・片岡鉄兵・村山知義・佐野碩・永田一脩・岡本唐貴ら検挙さる5
半年から一年にわたつて未決監に収

全協刷新同盟、公然たる分派闘争を始める6
プロレタリア科学研究所編『マルクス主義の旗の下に』創刊6
全国大衆党結成さる7
プロフィンテルン創立一〇周年

4
巷路過程（細田源吉）〃
昭和初年のインテリ作家（広津和郎）
『改造』4
ブルジョア（芹沢光治良）〃
工場細胞（小林多喜二）〃4—6
『プロレタリア児童文学の諸問題』
（槇本楠郎）世界社刊4
『芸術社会学』（フリーチェ著昇曙夢
訳）新潮社刊4
メーデー詩特集（今野大力・今村桓
夫その他）『文芸戦線』5
吾々の方向についての覚え書（青野
季吉）〃
メーデー詩特集（伊藤信吉・森山啓
その他）『戦旗』5
日清戦後（戯曲。村山知義）『中央
公論』5
メキシコ共和国の滅亡（橋本英吉）〃
ドレフュス事件（大仏次郎）『改造』
5—
訓令工事（岩藤雪夫）〃5
貧農組合（細野孝二郎）『戦旗』6
—7および『ナップ』11・12
鶴見闘争史（西沢隆二）『戦旗』6
金なし猶太人（マイケル・ゴールド
作石垣綾子訳）『文芸戦線』6

容さる
**白楊社発行『プロレタリア文学』創
刊5　十月終刊**（文戦系・ナップ系
・その他執筆。ナップ系が多かった）
ナップ第二回拡大中央協議会（『一
九三〇年度に於けるナップの方針
書』＝『ナップ』三〇年九月号発表の
ものの承認等）5・7
作家同盟中央委員会『ブルジョア出
版に対する我々の態度はこうでなけ
ればならぬ』（『戦旗』6）を発表5
プロレタリア劇場同盟機関誌『プロ
レタリア演劇』創刊6
蔵原惟人らソヴェトに出発6・30
『詩・現実』創刊6
**労農芸術家連盟分裂し、平林たい子
・長谷川進・今村恒夫脱退す6**
労農芸術家連盟臨時総会を開いて右
につき声明を発す7・2（『文芸戦
線』8に発表）
プロレタリア作家同盟は『労芸分裂
に関する声明』を発表（『戦旗』8に
発表）
プロレタリア・エスペランチスト同
盟（略称ポ・エ・ウ）結成

無銭飲食者同盟（葉山嘉樹）〃
『プロレタリア短歌集』無産者歌人連盟刊5
プロレタリア文学大衆化の問題（特集）『中央公論』6
蔵原惟人『芸術大衆化の問題』
貴司山治『プロレタリア文学の陣営から』
屍の海（**岩藤雪夫**）〃
芸術社会学の方法論（蔵原惟人）『思想』6
『プロレタリア芸術と形式』（蔵原惟人）天人社刊6
『鉄の話』（中野重治）戦旗社刊6
芸術大衆化に関する決議（**日本プロレタリア作家同盟中央委員会**）『**戦旗**』7
詩・窓（窪川鶴次郎）〃
文戦劇場基本テーゼ（文戦劇場）『文芸戦線』7
マルクス主義美学の問題（ウィットフォーゲルの飜訳）〃7―
能率工場法（井上健次）〃
天国の記録（**下村千秋**）『**中央公論**』**7**
アスファルトの仲間（立野信之）〃
『研究会挿話』（窪川いね子＝佐多稲子）改造社刊7

日本プロレタリア文学大系　4　定価一二〇〇円

一九五五年一月三十一日　第一版発行
一九六九年四月十五日　第三刷発行

編者代表　野間　宏
発行者　竹村　一
発行所　株式会社　三一書房
東京都千代田区神田駿河台二の九
電話東京（二九一）三一三一～五
振替東京八四一一六〇番
郵便番号　一〇一
印刷　文栄印刷株式会社
製本　有限会社佐伯製本所

全9巻　第5回配本

★若い生命による日本現代史の証言

青春の記録　全8巻

四六判・各480円

人間の直面する種々の問題を、最も集中的に、情熱的に一身に背負うのが青春だとすれば、青春の充実を摸索した先蹤たちの日記・手紙・記録のなかに〈日本の青春〉を追体験することは、大きな今日的意義があると信ずる。現代の青春はどうあるべきか——を学ぶために。

1 あしたの墓碑銘　戦争と人間

編集・解説＝安田　武

きけわだつみのこえ／雲ながるる果てに／あゝ同期の桜・十四期会編／地のさざめごと・旧制静高遺稿集／村の戦中日記・渡辺清／わがいのち月明に燃ゆ・林尹夫／くちなしの花・宅島徳光／陣中手記・遺稿・大田慶一／戦艦大和の最期・吉田満／愛弟通信・国木田独歩／第二軍従征日記・田山花袋／軍隊日記・黒島伝治／主婦の戦争体験記／他／

2 孤独なる渇望　模索と彷徨

編集・解説＝福田善之

三日幻境・北村透谷／死刑囚の思い出・古田大次郎／何が私をこうさせたか・金子ふみ子／演劇自叙伝・千田是也／二十歳のエチュード・原口統三／十七歳の鎮魂曲・長沢延子／詩と反逆と死・大宅歩／血のメーデーの頃・崎野一馬／残さるべき死・茅野寛志／意志表示・岸上大作／青春の墓標／奥治平

3 自由の狩人たち　反逆と革命

編集・解説＝秋山　清

私は天才であり超人である・山崎晃嗣／罪と死と愛と・李珍宇／6・15安保裁判冒頭陳述書・常木守／千円札事件・赤瀬川原平／天皇に対する公開状・岩佐作太郎／死出の道草・管野須賀子／溶鉱炉の火は消えたり・浅原健三／難波大助の手紙／生の拡充・大杉栄／悲痛の感激、悲痛の快感・和田久太郎／闇があるから光がある・小林多喜二／他／

日本プロレタリア文学大系　全九巻　各巻定価一、二〇〇円 7巻のみ一、五〇〇円

序巻　母胎と生誕　明治三十年から大正五年まで
1巻　運動擡頭の時代　社会主義文学から「種蒔く人」廃刊まで
2巻　運動成立の時代　「文芸戦線」創刊からナップ成立まで
3巻　運動開花の時代(上)　「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
4巻　運動開花の時代(中)　「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
5巻　運動開花の時代(下)　「戦旗」創刊から文化連盟結成まで
6巻　弾圧と解体の時代(上)　文化連盟の結成から中日戦争の開始
7巻　弾圧と解体の時代(下)　文化連盟の結成から中日戦争の開始
8巻　転向と抵抗の時代　中日戦争から敗戦まで

日本
プロレタリア
文學大系
4
三一書房